改訂･石川県の絶滅のおそれのある野生生物

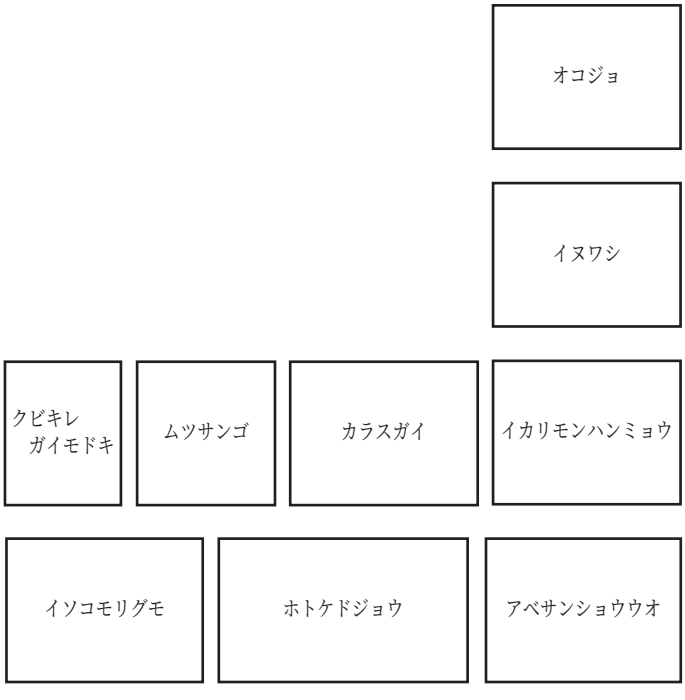
いしかわレッドデータブック

〈動物編〉2009

2009

石　川　県

表紙写真


オコジョ
イヌワシ
クビキレ
ガイモドキ
ムツサンゴ
カラスガイ
イカリモンハンミョウ
イソコモリグモ
ホトケドジョウ
アベサンショウウオ

発行にあたって

石川県は、本州中央部の日本海側に位置し、北部には日本海に突き出た能登半島の長く複雑な海岸線、南東部には高山帯を持つ白山を擁するなど、その自然と四季は変化に富んでいます。

この豊かな自然の中で、日本の生物相の縮図と言えるほどの多種多様な野生生物が生息しており、私たちもこの自然から多大な恩恵を受けて生きています。

しかしながら、近年、県鳥のイヌワシをはじめ希少な生物のみならず、これまで身近にあった草花や小動物が、開発等による生息環境の悪化や、里山の手入れ不足などによる荒廃により、絶滅の危険性があることが明らかとなっています。

このような背景のもと、県では、平成16年3月に「ふるさと石川の環境を守り育てる条例」を制定するとともに、この条例に基づき平成17年3月に「石川県環境総合計画」を策定し、県民、事業者、行政等が協働して、「自然と人とが共生するいしかわ」の実現に向けて取り組んでいるところです。

また、本年度からは、生物多様性の確保に向けた取り組みを推進するための拠り所となる「生物多様性戦略ビジョン」の策定に着手したところです。

このような中、「いしかわレッドデータブック〈動物編〉2000」の発行から9年が経過したため、「いしかわレッドデータブック〈動物編〉2009」を発行することといたしました。改訂版では、新たに発見された種など新しい情報を盛り込み、また、分類に「陸産貝類」及び「淡水産貝類」を追加するなど、内容の充実を図っています。

本書を、野生生物の保全をはじめ生物多様性の確保に向けた取り組みを進めるため、また、郷土の自然に対する認識を深めていただくための資料として、広くご活用いただければ幸いに存じます。

最後に、本書の編集・執筆にあたられました「石川県野生動物保護対策調査会」の皆様をはじめ、ご協力をいただいた関係各位に対し心から感謝の意を表します。

平成21年3月

石川県知事　谷本　正憲

目　次

発行にあたって

Ⅰ　総論

１．いしかわレッドデータブック〈動物編〉2009 作成の趣旨……1
２．改訂の概要……3
３．レッドデータブックの記載内容と項目……7
４．選定結果……9

Ⅱ　各論

１．哺乳類……15
２．鳥類……40
３．両生爬虫類……114
４．淡水魚類……125
５．昆虫類……138
６．浅海域の生物……321
７．陸産貝類……366
８．淡水産貝類……406
９．その他の動物……428

引用文献・参考文献……437
索引……440
あとがき……445
「石川県野生動物保護対策調査会」名簿……446

Ⅰ　総　論

１．いしかわレッドデータブック〈動物編〉2009作成の趣旨

今回、「いしかわレッドデータブック〈動物編〉2000」が改訂された。

国のレッドデータブックに続いて1990年代の後半から、全国の各自治体のレッドデータブックが次々に作られ、それらが現在、第二回、第三回の改訂時期を迎えている。今回の石川県の改訂もその流れのひとつであるが、なぜ今、このような改訂が必要になったかについて、その要点をまとめておく。

レッドデータブックというのは「絶滅のおそれのある野生動植物」を選定してまとめたレッドリストの解説版である。

これが全国の多くの自治体で編纂されるようになったのは、各地で行われている開発工事の際のひとつの基準を作るための基礎資料の意味からであった。とくに全国版では、各地に特有の事情を含めて、個々の地域における具体的な保全対策には直ちに対応できないという限界があった。それらに対応するためにこの地方版が作られたのである。それ以来、ここに載せられている種類が開発の対象となっている地域に生息しているかどうかによって、工事の内容に変更を必要とするか否かが決められるようになった。それは開発が引き起こす自然への悪影響を制御するうえで一定の役割を果たしてきた。

しかし自然環境も社会環境も時間とともに変化してゆく。ある時点で決められた基準がいつまでも有効であるとは言えない。先に作られたレッドデータブックについても、幾つかの点で不十分なところが出来てきた。それが今回の改訂を必要とする主な理由となっている。

それを列挙すると以下の諸点である。

(1) 野生動物に関する知識の増大

野生動物と野生植物の大きな違いは、野生動物の種類が植物にくらべて非常に多く、さらに小型の種が多いだけでなく、活動時期や時間が多様であるためにその実態調査が困難でまだ判っていない点が少なくないことである。現在、石川県に生息していると考えられる野生動物は5万種を越えると推定されるが、種名が確認されているのはその半数にも達していない。

しかし県内で活動されている多くの専門家あるいはアマチュアの研究者によって、この10年近くの間に多くの種の生息が新たに確認され、またその分布状況も明らかになってきた。それによって全国的に希少であって保全しなくてはならない種が見いだされてきた。これらをレッドデータブックに追加する必要ができてきた。

もちろんこれで完全なものではなく、さらに希少な種の探索、追加の努力は今後も続けられなくてはならない。

(2) 里山・里海で人と共存している野生動物の重要性の確認

ここ20年の間に日本の自然環境を考える視野が大きく開けてきた。それは「里山」という言葉に表される、歴史的に人間生活とともに出来上がってきた野生生物相の重要性が認識されたことである。かつては全く人間の手が入らない原生の自然が最も貴重なものであり、人の手が入った二次的な自然は、原生の自然が劣化したものであるという見方が浸透していた。それに対して、後氷期以来の人間の生活・産業活動が作り上げてきた自然環境が、原生の自然に劣らず重要であるとの認識が生まれてきた。人間の自然環境の利用から始まった生活・産業活動が、野生動植物の種類や生息状況を大きく変えた。これは人間の一方的な働きかけだけではなく、野生動植物の反応をも含めた自然環境の再編成である。日本のように温度と水に恵まれたところでは、現在の自然環境はほとんどが古代からの人間生活の影響を受けている。それは現在でも自然と人間活動の微妙なバランスによって維持されている。保全を必要とし

ている多くの動植物種は、人手の入らない原生の自然の中よりも、このような場所で存続し維持されていることが判ってきた。石川県の特徴的な動物であるハッタジュズイミミズは、深い湿田という人間が作った環境で生存してきた。

里山・里海のような環境で生息している野生動植物は、従来と同じ人間の管理が続けられていることが、種の存続にとって大切である。

(3) 外来の動植物によって大きな影響を受ける種の保全

原生の自然も、「里山・里海」のように人間活動とのバランスによって維持されている自然も、それぞれに長い年月を経て成立した生態系のなかで種を存続させている。この長い年月の調整を経て生存している動植物の種にとっては、新しく侵入した天敵や競合種は大きな脅威となる。もちろん長い進化の過程ではこのような外来種による生態系の攪乱と再調整は、繰り返して行われてきた。しかし最近数十年の人間活動によって、これまでになかったような大規模かつ急激な外来種の侵入が起こってきた。これは日本の自然生態系の維持そのものの問題であるが、とくに打撃を受けやすい種について判定して、速やかな対応をとらねばならない。絶滅を危惧される種を判定する基準には、この視点からの検討が重要になってきた。

(4) 現在も続いている開発

これまでの野生動物の保護は、種そのものの採取・利用の制限と同時に、生息環境の破壊による減少、絶滅にどう対処するかが重要であった。現在、人間活動と自然の複雑な関係が次第に明らかになってくるとともに、上述の(1)～(3)に述べてきたような問題が新たに取り上げられた。しかし環境に対する配慮が不十分なままに行われる開発による直接・間接の自然破壊はいまも継続している。さらに環境産業という新たな分野からの自然の改変が問題となってきた。それらの技術は一面では環境改善に役立つが、規模が大きくなると野生動植物とその生息条件に大きな影響を与える。世界的に大きな問題となっている地球の温暖化や不安定化はその最大のものであるが、地方のレベルでも都市開発、道路や河川の改修、大規模な農地改良など昔ながらの開発による野生動物の生息環境の破壊、乱獲などの問題は続いている。これらについては従来以上に注意しなくてはならない。

「いしかわレッドデータブック〈動物編〉2009」では、石川県の絶滅を危惧される希少な動物のリストであるとともに、哺乳類、鳥類、以下それぞれの動物群について県内の現状に詳しい担当者の総括的な解説が述べられている。これを通読すれば石川県の野生動物についての最新の知識を得ることができる。なお、このデータブックの特徴として、浅海域に生息する藻類を含む動植物がまとめて取り上げられている。対馬海流の影響を大きく受けている能登半島を持つ石川県の生物の特徴がここによくあらわれている。

今回の改訂の主要な点は次の３点である。

1) 2000年の作成にあたって取り上げられなかったが、その後の調査研究の進展によって新たに見いだされた希少種の追加
2) 前回はまだ絶滅が危惧されなかったが、県内の自然環境の変化によって生息数の減少あるいは生息環境の悪化が目立っており、放置しておけば絶滅の恐れが大きくなったものの追加
3) 前回はまだ調査が不十分であったために取り上げることが出来なかった陸産貝類および淡水産貝類などの動物群を追加

（大串　龍一）

２．改訂の概要

(1) 調査体制と経過

いしかわレッドデータブック〈動物編〉2009 の策定にあたっては、平成 16 年度から各動物群の専門家から構成された「いしかわレッドデータブックフォローアップ調査委員会動物部会」において、カテゴリー区分、掲載分類群、記載項目等改訂版の作成方針について検討を行った。

また、改訂作業にあたっては、同調査委員会のメンバーをはじめ、動物研究者、自然愛好家等から構成された「石川県野生動物保護対策調査委員会」において、平成 16 年度から 20 年度までの約 5 年間をかけて、現地調査、掲載種の選定、評価等を行った。

(2) 分類群とカテゴリー

・対象分類群

いしかわレッドデータブック〈動物編〉2000 の分類群に加え、新たに陸産貝類及び淡水産貝類を追加し、以下のとおりとした。

1. 哺乳類
2. 鳥類
3. 両生爬虫類
4. 淡水魚類
5. 昆虫類
6. 浅海域の生物
7. 陸産貝類
8. 淡水産貝類
9. その他の動物

・カテゴリーの定義と区分

いしかわレッドデータブック〈動物編〉2009 におけるカテゴリーの定義と区分は、いしかわレッドデータブック〈動物編〉2000 と同様のものとしている。

カテゴリーは、環境省のカテゴリー定義（別表）を準用しているが、絶滅危惧Ⅰ類は、ⅠA 類とⅠB 類とに分けてはいない。

いしかわレッドデータブック〈動物編〉2009 のカテゴリーとその定義

区分及び基本概念
●「絶滅（EX）」 石川県ではすでに絶滅したと考えられる種。
●「野生絶滅（EW）」 飼育・栽培下でのみ存続している種。
「絶滅危惧」＝絶滅のおそれのある種 ●「絶滅危惧Ⅰ類（CR+EN）」 絶滅の危機に瀕している種。 ●「絶滅危惧Ⅱ類（VU）」 絶滅の危機が増大している種。
●「準絶滅危惧（NT）」 現時点では絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」に移行する危険性のある種。
●「情報不足（DD）」 評価するだけの情報が不足している種。
●付属資料「地域個体群（LP）」 地域的に孤立しており、地域レベルでの絶滅のおそれが高い個体群。

別表　環境省のカテゴリー定義

<table>
<tr><th colspan="2">区分及び基本概念</th><th colspan="2">定性的要件</th><th>定量的要件</th></tr>
<tr><td colspan="2">絶滅
Extinct（EX）
我が国ではすでに絶滅したと考えられる種（注1）</td><td colspan="2">過去に我が国に生息したことが確認されており、飼育・栽培下を含め、我が国ではすでに絶滅したと考えられる種</td><td></td></tr>
<tr><td colspan="2">野生絶滅
Extinct in the Wild（EW）
飼育・栽培下でのみ存続している種</td><td colspan="2">過去に我が国に生息したことが確認されており、飼育・栽培下では存続しているが、我が国において野生ではすでに絶滅したと考えられる種
【確実な情報があるもの】
①信頼できる調査や記録により、すでに野生で絶滅したことが確認されている。
②信頼できる複数の調査によっても、生息が確認できなかった。
【情報量が少ないもの】
③過去50年間前後の間に、信頼できる生息の情報が得られていない。</td><td></td></tr>
<tr><td rowspan="2">絶滅危惧
THREATENED</td><td rowspan="2">絶滅危惧Ⅰ類
（CR+EN）
絶滅の危機に瀕している種

現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、野生での存続が困難なもの。</td><td rowspan="2">次のいずれかに該当する種

【確実な情報があるもの】
①既知のすべての個体群で、危機的水準にまで減少している。

②既知のすべての生息地で、生息条件が著しく悪化している。

③既知のすべての個体群がその再生産能力を上回る捕獲・採取圧にさらされている。

④ほとんどの分布域に交雑のおそれのある別種が侵入している。

【情報量が少ないもの】
⑤それほど遠くない過去(30～50年)の生息記録以後確認情報がなく、その後信頼すべき調査が行われていないため、絶滅したかどうかの判断が困難なもの。</td><td>絶滅危惧ⅠA類
Critically Endangered（CR）
ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの。</td><td>絶滅危惧ⅠA類（CR）

A. 次のいずれかの形で個体群の減少が見られる場合。
1. 最近10年間もしくは3世代のどちらか長い期間（注2）を通じて、80%以上の減少があったと推定される。
2. 今後10年間もしくは3世代のどちらか長い期間を通じて、80%以上の減少があると予測される。

B. 出現範囲が100km²未満もしくは生息地面積が10km²未満であると推定されるほか、次のうち2つ以上の兆候が見られる場合。
1. 生息地が過度に分断されているか、ただ1カ所の地点に限定されている。
2. 出現範囲、生息地面積、成熟個体数等に継続的な減少が予測される。
3. 出現範囲、生息地面積、成熟個体数等に極度の減少が見られる。

C. 個体群の成熟個体数が250未満であると推定され、さらに次のいずれかの条件が加わる場合。
1. 3年間もしくは1世代のどちらか長い期間に25%以上の継続的な減少が推定される。
2. 成熟個体数の継続的な減少が観察、もしくは推定・予測され、かつ個体群が構造的に過度の分断を受けるか全ての個体が1つの亜個体群に含まれる状況にある。

D. 成熟個体数が50未満であると推定される個体群である場合。

E. 数量解析により、10年間、もしくは3世代のどちらか長い期間における絶滅の可能性が50%以上と予測される場合。</td></tr>
</table>

（注1）種：動物では種及び亜種、植物では種、亜種及び変種を示す。
（注2）最近10年間もしくは3世代：１世代が短く3世代に要する期間が10年未満のものは年数を、1世代が長く3世代に要する期間が10年を越えるものは世代数を採用する。

区分及び基本概念		定性的要件		定量的要件
絶滅危惧 THREATENED			**絶滅危惧ⅠB類** Endangered(EN) ⅠA類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの	**絶滅危惧ⅠB類（EN）** A. 次のいずれかの形で個体群の減少が見られる場合。 1. 最近10年間もしくは3世代のどちらか長い期間を通じて、50%以上の減少があったと推定される。 2. 今後10年間もしくは3世代のどちらか長い期間を通じて、50%以上の減少があると予測される。 B. 出現範囲が5,000㎢未満もしくは生息地面積が500㎢未満であると推定されるほか、次のうち2つ以上の兆候が見られる場合。 1. 生息地が過度に分断されているか、5以下の地点に限定されている。 2. 出現範囲、生息地面積、成熟個体数等に継続的な減少が予測される。 3. 出現範囲、生息地面積、成熟個体数等に極度の減少が見られる。 C. 個体群の成熟個体数が2,500未満であると推定され、さらに次のいずれかの条件が加わる場合。 1. 5年間もしくは2世代のどちらか長い期間に20%以上の継続的な減少が推定される。 2. 成熟個体数の継続的な減少が観察、もしくは推定・予測され、かつ個体群が構造的に過度の分断を受けるか全ての個体が１つの亜個体群に含まれる状況にある。 D. 成熟個体数が250未満であると推定される個体群である場合。 E. 数量解析により、20年間、もしくは5世代のどちらか長い期間における絶滅の可能性が20%以上と予測される場合。
	絶滅危惧Ⅱ類 Vulnerable（VU） 絶滅の危険が増大している種 現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、近い将来「絶滅危惧Ⅰ類」のランクに移行することが確実と考えられるもの。	次のいずれかに該当する種 【確実な情報があるもの】 ①大部分の個体群で個体数が大幅に減少している。 ②大部分の生息地で生息条件が明らかに悪化しつつある。 ③大部分の個体群がその再生産能力を上回る捕獲・採取圧にさらされている。 ④分布域の相当部分に交雑可能な別種が侵入している。		A. 次のいずれかの形で個体群の減少が見られる場合。 1. 最近10年間もしくは3世代のどちらか長い期間を通じて、20%以上の減少があったと推定される。 2. 今後10年間もしくは3世代のどちらか長い期間を通じて、20%以上の減少があると予測される。 B. 出現範囲が20,000㎢未満もしくは生息地面積が2,000 ㎢未満であると推定され、また次のうち2つ以上の兆候が見られる場合。 1. 生息地が過度に分断されているか、10以下の地点に限定されている。 2. 出現範囲、生息地面積、成熟個体数等について、継続的な減少が予測される。 3. 出現範囲、生息地面積、成熟個体数等に極度の減少が見られる。

区分及び基本概念	定性的要件	定量的要件
絶滅危惧 THREATENED		C. 個体群の成熟個体数が10,000未満であると推定され、さらに次のいずれかの条件が加わる場合。 1. 10年間もしくは3世代のどちらか長い期間内に10%以上の継続的な減少が推定される。 2. 成熟個体数の継続的な減少が観察、もしくは推定・予測され、かつ個体群が構造的に過度の分断を受けるか全ての個体が1つの亜個体群に含まれる状況にある。 D. 個体群が極めて小さく、成熟個体数が1,000未満と推定されるか、生息地面積あるいは分布地点が極めて限定されている場合。 E. 数量解析により、100年間における絶滅の可能性が10%以上と予測される場合。
準絶滅危惧 Near Threatened (NT) 存続基盤が脆弱な種 現時点での絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」として上位ランクに移行する要素を有するもの。	次に該当する種 生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。具体的には、分布域の一部において、次のいずれかの傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。 a)個体数が減少している。 b)生息条件が悪化している。 c)過度の捕獲・採取圧による圧迫を受けている。 d)交雑可能な別種が侵入している。	
情報不足 Data Deficient (DD) 評価するだけの情報が不足している種	環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧のカテゴリーに移行し得る属性（具体的には、次のいずれかの要素）を有しているが、生息状況をはじめとして、ランクを判定するに足る情報が得られていない種 a)どの生息地においても生息密度が低く希少である。 b)生息地が局限されている。 c)生物地理上、孤立した分布特性を有する（分布域がごく限られた固有種等）。 d)生活史の一部または全部で特殊な環境条件を必要としている。	

●付属資料

区分及び基本概念	定性的要件	定量的要件
絶滅のおそれのある地域個体群 Threatened Local Population (LP) 地域的に孤立している個体群で、絶滅のおそれが高いもの。	次のいずれかに該当する地域個体群 ①生息状況、学術的価値等の観点から、レッドデータブック掲載種に準じて扱うべきと判断される種の地域個体群で、生息域が孤立しており、地域レベルで見た場合絶滅に瀕しているかその危険が増大していると判断されるもの。 ②地方型としての特徴を有し、生物地理学的観点から見て重要と判断される地域個体群で、絶滅に瀕しているか、その危険が増大していると判断されるもの。	

３．レッドデータブックの記載内容と項目

●種名（亜種名）
和名と学名を記載した。
学名については、命名者も含む。

●動物群名
目名と科名を記載した。

●カテゴリー
石川県カテゴリー　　いしかわレッドデータブック〈動物編〉2009 のカテゴリー区分を記載した。
国カテゴリー　　環境省レッドリスト(2006～2007)のカテゴリー区分を記載した。

●選定理由
選定評価の理由を記載した。

●形態
形態について記載した。

●国内分布
国内の分布状況について記載した。

●県内分布
県内の分布状況について記載した。

●生態
生態について記載した。

●生息地の条件
生息環境について記載した。

●生存の危機
生存に対する脅威等について記載した。
また、掲載種における生存危機の要因を分類化するため、原則として別表 1 及び 2 を用いて A～D に分類し、末尾に付記した。

●特記事項
学術的意義、希少種指定、天然記念物等について記載した。

●参考文献
特に重要な文献等について記載した。

●写真
生態写真または標本写真を掲載し、写真提供者の氏名を記載した。

●分布図
生息地を 2 次メッシュ（10㎞ 四方）または 2 次メッシュの 1/4（5㎞ 四方）により表示した。
なお、一部の種については以下のいずれかの理由から表示をしていない。
①生息地の公表により、悪影響が懸念されるため。
②生息地に関する十分な情報がないため。

情報不足種については、上記項目の一部についてのみ記載した。

危機要因の分類について
環境省発行の「第 3 次生物多様性国家戦略（2008 年 3 月）」第 2 章に挙げられた生物多様性の危機の構造として、その原因及び結果を分析した 3 つの危機とその他の要因を A～D に分類する。

別表 1

コード	危機の定義	タイプ区分（別表 2）
A	第 1 の危機（人間活動や開発による危機） 人間活動ないし開発が直接にもたらす種の減少、絶滅、あるいは生態系の破壊、分断、劣化を通じた生息･生育空間の縮小、消失	11,12,13,14,15,16,17 21,22,23,24,25 31,32,41,42,43,51
B	第 2 の危機（人間活動の縮小による危機） 生活様式･産業構造の変化、人口減少など社会経済の変化に伴い、自然に対する人間の働きかけが減少撤退することによる里地里山などの環境の質の変化、種の減少ないし生息・生育環境の変化	53,54
C	第 3 の危機（人間により持ち込まれたものによる危機） 外来種など人為的に持ち込まれたものによる生態系の攪乱	52,56,57
D	上記 3 つの危機に分類できない危機要因による場合	55,61,62,71,99

別表 2　存続を脅かしている原因のタイプ区分

原因	コード	原因	コード	原因	コード
森林伐採	11	道路工事	24	遷移進行･植生変化	54
湖沼開発	12	ダム工事	25	火山噴火	55
河川開発	13	水質汚濁	31	帰化競合	56
海岸開発	14	農薬汚染	32	異種混雑･放流	57
湿地開発	15	園芸採取・観賞用捕獲･狩猟	41	産地極限	61
草地開発	16	薬草採取	42	近交化進行	62
石炭採掘	17	その他の不法採取など	43	その他	71
ゴルフ場	21	踏みつけ	51	不明	99
スキー場	22	捕獲者進入	52		
土地造成	23	管理放棄	53		

（環境省レッドデータブックより）

4．選定結果

(1) 選定種数

選定の結果、いしかわレッドデータブック〈動物編〉2009 の選定種数は、下記の表のとおりである。

今回、地域個体群を含めて 378 種が選定され、前回のいしかわレッドデータブック〈動物編〉2000 と比較すると、152 種ふえ、大幅な増加となった。

内訳をみるとふえたのは、最大が昆虫類で 80 種の増加となっている。これは、ここ 10 年間で、調査が進展し、減少した種がふえたことや新たな希少種が見つかったことが要因である。

また、新たな分類群として陸産貝類及び淡水産貝類が加わり、前者が 37 種、後者が 18 種、合計 55 種の貝類が追加されたことも大きな要因である。これまで、県内の貝類の研究は、他県と比較して遅れていたが、今回の改訂にあたり、貝類の生息情報の収集が進み、分類群に追加された。

分類群	絶滅	絶滅危惧			準絶滅危惧	情報不足	合計	地域個体群
		絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧Ⅱ類	小計				
哺乳類	2	4	8	(12)	8		22	
鳥類	2	16	17	(33)	25	5	65	3
両生爬虫類		2	1	(3)	3		6	1
淡水魚類		2	3	(5)	4		9	1
昆虫類	2	40	35	(75)	66	24	167	5
浅海域の生物			2	(2)	7	14	23	16
陸産貝類		1	7	(8)	24	5	37	
淡水産貝類		5	2	(7)	7	4	18	
その他の動物		1	1	(2)	3		5	
合計	6	71	76	(147)	147	52	352	26

【参考】いしかわレッドデータブック〈動物編〉2000（2000 年 3 月発行）の選定種数

分類群	絶滅	絶滅危惧			準絶滅危惧	情報不足	合計	地域個体群
		絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧Ⅱ類	小計				
哺乳類	2		5	(5)	8	2	17	
鳥類	2	13	18	(31)	23	2	58	3
両生爬虫類		1	1	(2)	2	1	5	
淡水魚類		2	2	(4)	4		8	2
昆虫類		28	14	(42)	49		91	1
浅海域の生物			2	(2)	15	12	29	8
その他の動物			1	(1)	3		4	
合計	4	44	43	(87)	104	17	212	14

(2) 選定結果

＜凡例＞

※1 環境省ランク

環境省発表のレッドリスト（2006～2007）に基づいて記載

※2 法指定等

国内希 ：国内希少野生動植物種（絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律）
国特天 ：国指定特別天然記念物（文化財保護法）
国天 ：国指定天然記念物（文化財保護法）
県希 ：県指定希少野生動植物種（ふるさと石川の環境を守り育てる条例）
県天 ：県指定天然記念物（石川県文化財保護条例）
市町天 ：市町指定天然記念物（市町文化財保護条例）

1．絶滅　　6種

分類群	和　名	学　名	環境省ランク※1	法指定等※2		危機要因		
哺乳類	オオカミ	*Canis lupus*(Linnaeus)	絶滅					
	カワウソ	*Lutra lutra*(Linnaeus)	絶滅					
鳥類	トキ	*Nipponia nippon*(Temminck)	野生絶滅	国内希	国特天	A		
	ライチョウ	*Lagopus mutus*(Montin)	絶滅危惧Ⅱ類	国内希	国特天	A		C
昆虫	タガメ	*Lethocerus deyrolli*(Vuillefroy)	絶滅危惧Ⅱ類			A		
	ミヤマシジミ	*Lycaeides argyrognomon praeterinsularis*(Verity)	絶滅危惧Ⅱ類					

2．絶滅危惧Ⅰ類　　71種

分類群	和　名	学　名	環境省ランク※1	法指定等※2		危機要因			
哺乳類	ノレンコウモリ	*Myotis nattereri*	絶滅危惧Ⅱ類			A			
	クロホオヒゲコウモリ	*Myotis pruinosus* Yoshiyuki	絶滅危惧ⅠB類			A			
	モリアブラコウモリ	*Pipistrellus endoi* Imaizumi	絶滅危惧ⅠB類			A			
	クビワコウモリ	*Eptesicus japonensis* Imaizumi	絶滅危惧ⅠB類			A			
鳥類	ヒメクロウミツバメ	*Oceanodroma monorhis*(Swinhoe)	絶滅危惧Ⅱ類					C	
	サンカノゴイ	*Botaurus stellaris*(Linnaeus)	絶滅危惧ⅠB類			A			
	ヨシゴイ	*Ixobrychus sinensis*(Gmelin)	準絶滅危惧			A			D
	ミゾゴイ	*Gorsachius goisagi* (Temminck)	絶滅危惧ⅠB類			A	B		
	クロツラヘラサギ	*Platalea minor* Temminck & Schlegel	絶滅危惧ⅠA類			A			
	コクガン	*Branta bernicla* (Linnaeus)	絶滅危惧Ⅱ類		国天	A			
	クマタカ	*Spizaetus nipalensis*(Hodgson)	絶滅危惧ⅠB類	国内希		A			
	イヌワシ	*Aquila chrysaetos* (Linnaeus)	絶滅危惧ⅠB類	国内希	国天	A			
	チュウヒ	*Circus spilonotus* Kaup	絶滅危惧ⅠB類	県希		A			
	ヒクイナ	*Porzana fusca* (Linnaeus)	絶滅危惧Ⅱ類			A	B		
	ヘラシギ	*Eurynorhynchus pygmeus* (Linnaeus)	絶滅危惧ⅠA類			A			D
	コアジサシ	*Sterna albifrons* Pallas	絶滅危惧Ⅱ類	県希		A		C	
	カンムリウミスズメ	*Synthliboramphus wumizusume* (Temminck)	絶滅危惧Ⅱ類		国天	A		C	
	イワヒバリ	*Prunella collaris* (Scopoli)				A		C	
	チゴモズ	*Lanius tigrinus* Drapiez	絶滅危惧ⅠA類			A			D
	アカモズ	*Lanius cristatus* Linnaeus	絶滅危惧ⅠB類			A			D
両生爬虫類	アベサンショウウオ	*Hynobius abei* Sato	絶滅危惧ⅠA類	国内希		A			
	ホクリクサンショウウオ	*Hynobius takedai* Matsui et Miyazaki	絶滅危惧ⅠB類		羽咋市天	A	B		
淡水魚類	トミヨ	*Pungitius sinensis* (Guichenot)		県希		A			
	シラウオ	*Salangichthys microdon* Bleeker				A			
昆虫	ホソミイトトンボ	*Aciagrion migratum* (Selys)				A	B		
	ルリイトトンボ	*Enallagma boreale cirulatum* Selys				A		C	D
	コバネアオイトトンボ	*Lestes japonicus* Selys	絶滅危惧Ⅰ類			A	B	C	
	ホンサナエ	*Gomphus postocularis* Selys				A			
	オナガサナエ	*Onychogomphus viridicosta* Oguma				A			
	ヒメサナエ	*Sinogomphus flavolimbatus* Oguma				A			
	オグマサナエ	*Trigomphus ogumai* Asahina	絶滅危惧Ⅱ類			A		C	
	カトリヤンマ	*Gynacantha japonica* Bartenef				A	B		
	ハネビロエゾトンボ	*Somatochlora clavata* Oguma	絶滅危惧Ⅱ類			A			
	カワラバッタ	*Eusphingonotus japonicus* (Saussure)				A	B		
	エサキアメンボ	*Limnoporus esakii* (Miyamoto)	準絶滅危惧			A			
	ホッケミズムシ	*Hesperocorixa distanti hokkensis* (Matsumura)	準絶滅危惧			A	B	C	
	ヒメマルミズムシ	*Paraplea indistinguenda* (Matsumura)				A	B		
	カワラゴミムシ	*Omophron aequalis* Morawitz				A			
	イカリモンハンミョウ	*Cicindela anchoralis* Chevrolat	絶滅危惧Ⅰ類	県希	県天、内灘町天	A			
	ホソハンミョウ	*Cicindela gracilis* Pallas	準絶滅危惧			A			
	カワラハンミョウ	*Cicindela laetescripta* Motschulsky	絶滅危惧Ⅱ類			A			
	ハラビロハンミョウ	*Cicindela sumatrensis niponensis* Bates	絶滅危惧Ⅱ類			A			
	ヒゲナガホラヒラタゴミムシ	*Jujiroa imunada* Uéno				A			D
	マルケシゲンゴロウ	*Hydrovatus subtilis* Sharp				A	B		
	ナガケシゲンゴロウ	*Hydroporus uenoi* Nakane				A	B		
	ゲンゴロウ	*Cybister japonicus* Sharp	準絶滅危惧			A	B	C	
	マルコガタノゲンゴロウ	*Cybister lewisianus* Sharp	絶滅危惧Ⅰ類	県希		A	B	C	
	シャープゲンゴロウモドキ	*Dytiscus sharpi* Wehncke	絶滅危惧Ⅰ類	県希		A	B	C	
	マルガタゲンゴロウ	*Graphoderus adamsii* (Clark)	準絶滅危惧			A	B	C	
	シマゲンゴロウ	*Hydaticus bowringi* Clark				A	B		
	チュウブホソガムシ	*Hydrochus chubu* Balfour-Browne et M. Satô	準絶滅危惧			A	B	C	
	コガムシ	*Hydrochara affinis* (Sharp)				A	B		
	オオクワガタ	*Dorcus hopei binodulosus* Waterhouse	絶滅危惧Ⅱ類			A			
	ベーツヒラタカミキリ	*Eurypoda batesi* Gahan				A			
	キイロミヤマカミキリ	*Margites fulvidus* (Pascoe)				A			
	コトラカミキリ	*Plagionotus pulcher* (Blessig)	準絶滅危惧			A			
	トガシオオナギナタハバチ	*Megaxyela togashii* Shinohara	情報不足			A			
	シロズヒラタハバチ	*Pamphilius leucocephalus* Takeuchi	情報不足			A			
	イソメマトイ	*Hydrotaea glabricula* (Fallen)	絶滅危惧Ⅰ類			A			
	カエルキンバエ	*Lucilia (Bufolucilia) chini* Fan	情報不足			A			
	ゼニゴギンガクニクバエ	*Metopia stackeibergi* Rohdendorf				A			
	ゴヘイニクバエ	*Sarcophila japonica* Rohdendorf	絶滅危惧Ⅱ類			A			
	クロシジミ	*Niphanda fusca* (Bremer et Grey)	絶滅危惧Ⅰ類			A	B		
	アオモンギンセダカモクメ	*Cucullia argentea* Hufnagel				A			
陸産貝類	クビキレガイモドキ	*Cecina manchurica* A. Adams	絶滅危惧Ⅰ類			A			
淡水産貝類	ナタネミズツボ	*Fukuia minima* (Bartsch)	絶滅危惧Ⅱ類			A			D
	カワネジガイ	*Camptoceras terebra hirasei* Walker	絶滅危惧Ⅰ類			A			
	ヒダリマキモノアラガイ	*Culmenella rezvoji* (Lindholm)	絶滅危惧Ⅰ類			A			
	カワシンジュガイ	*Margaritifera laevis* (Haas)	絶滅危惧Ⅱ類			A	B		
	カタハガイ	*Pseudodon omiensis* (Heimburg)	絶滅危惧Ⅱ類			A		C	
その他の動物	ハッタジュズイミミズ	*Drawida hattamimizu* Hatai	準絶滅危惧			A			

３．絶滅危惧Ⅱ類　　76種

分類群	和　名	学　名	環境省ランク※1	法指定等※2		危機要因		
哺乳類	アズミトガリネズミ	*Sorex hosonoi* Imaizumi	準絶滅危惧			A		
	ヒメホオヒゲコウモリ	*Myotis ikonnikovi* Ognev				A		
	カグヤコウモリ	*Myotis frater* Allen				A		
	ヤマコウモリ	*Nyctalus aviator* Thomas	準絶滅危惧			A		
	ヒナコウモリ	*Vespertilio superans* Thomas				A		
	ウサギコウモリ	*Plecotus auritus* (Linnaeus)				A		
	テングコウモリ	*Murina leucogaster* Milne-Edwards	絶滅危惧Ⅱ類			A		
	コテングコウモリ	*Murina ussuriensis* Ognev				A		
鳥類	マガン	*Anser albifrons* (Scopoli)	準絶滅危惧		国天	A		
	カリガネ	*Anser erythropus* (Linnaeus)	準絶滅危惧			A		
	ヒシクイ	*Anser fabalis* (Latham)	絶滅危惧Ⅱ類 準絶滅危惧		国天	A		
	トモエガモ	*Anas formosa* Georgi	絶滅危惧Ⅱ類			A		
	オジロワシ	*Haliaeetus albicilla* (Linnaeus)	絶滅危惧ⅠB類	国内希	国天	A		
	サシバ	*Butastur indicus* (Gmelin)	絶滅危惧Ⅱ類			A	B	
	オオタカ	*Accipiter gentilis* (Linnaeus)	準絶滅危惧	国内希		A	B	
	ハヤブサ	*Falco peregrinus* Tunstall	絶滅危惧Ⅱ類	国内希		A		
	イカルチドリ	*Charadrius placidus* J.E. & G.R.Grey				A		
	シロチドリ	*Charadrius alexandrinus* Linnaeus				A		
	タマシギ	*Rostratula benghalensis* (Linnaeus)				A	B	
	ホウロクシギ	*Numenius madagascariensis* (Linnaeus)	絶滅危惧Ⅱ類			A		
	アオバズク	*Ninox scutulata* (Raffles)				A		D
	ヨタカ	*Caprimulgus indicus* Latham	絶滅危惧Ⅱ類			A		D
	アカショウビン	*Halcyon coromanda* (Latham)				A		
	ブッポウソウ	*Eurystomus orientalis* (Linnaeus)	絶滅危惧ⅠB類			A		
	コジュリン	*Emberiza yessoensis*	絶滅危惧Ⅱ類			A	B	
両生爬虫類	アカウミガメ	*Caretta caretta* (Linnaeus)	絶滅危惧ⅠB類			A		
淡水魚類	ホトケドジョウ	*Lefua echigonia* Jordan et Richardson	絶滅危惧ⅠB類	県希		A		C
	イトヨ（降海型）	*Gasterosteus aculeatus* (Linnaeus)	地域個体群			A		
	アカザ	*Liobagrus reini* Hilgendorf	絶滅危惧Ⅱ類			A		
昆虫	キイロサナエ	*Asiagomphus pryeri* (Selys)				A		
	アオサナエ	*Nihonogomphus viridis* (Oguma)				A		
	マダラヤンマ	*Aeschna mixta* Latreille				A	B	
	マダラナニワトンボ	*Sympetrum maculatum* Oguma	絶滅危惧Ⅰ類			A	B	
	オオゴキブリ	*Panesthia angustipennis* (Shiraki)				A		
	ヒナカマキリ	*Amantis nawai* Shiraki				A		
	エゾエンマコオロギ	*Teleogryllus infernalis* (Saussre)				A		
	コオイムシ	*Appasus japonicus* (Vuillefroy)	準絶滅危惧			A	B	C
	オオヒョウタンゴミムシ	*Scarites sulcatus* Olivier	準絶滅危惧			A		
	ウエダオオズナガゴミムシ	*Pterostichus uedaorum* Morita et Hirasawa				A		
	ヒメケシゲンゴロウ	*Hyphydrus laeviventris* Sharp				A	B	C
	テラニシセスジゲンゴロウ	*Copelatus teranishii* Kamiya				A	B	
	コミズスマシ	*Gyrinus curtus* Motschulsky				A	B	
	ヒメミズスマシ	*Gyrinus gestroi* Régimbart				A	B	
	ヤマトホソガムシ	*Hydrochus japonicus* Sharp				A		
	ネブトクワガタ	*Aegus laevicollis subnitidus* Waterhouse				A		
	ヒメオオクワガタ	*Nipponodorucus montivagus montivagus* (Lewis)				A		
	アカマダラハナムグリ	*Anthracophora rusicola* Burmeister	情報不足			A		
	クロマダラタマムシ	*Nipponobuprestis querceti* (E. Saunders)				A		
	カラマツカミキリ	*Tetropium castaneum* (Linnaeus)				A		
	ヒゲブトハナカミキリ	*Pachypidonia bodemeyeri* (Pic)				A		
	ベーツヤサカミキリ	*Leptoxenus ibidiiformis* Bates				A		
	ヨツボシカミキリ	*Stenygrium quadrinotatum* Bates	絶滅危惧Ⅱ類			A		
	クロツヤヒゲナガコバネカミキリ	*Glaphyra hattorii* (Ohbayashi)				A		
	オニホソコバネカミキリ	*Necydalis gigantea gigantea* Kano				A		
	トホシカミキリ	*Saperda alberti* Plavistchikov				A		
	オオルリハムシ	*Chrysolina virgata* (Motschulsky)				A	B	
	タカチホヒラタマバチ	*Ibalia jakowlewi* Yasumatsu				A		
	ハイイロクモバチ	*Pompilus cinereus* (Fabricius)				A		
	アサマシジミ	*Lycaeides subsolanus yarigadakeanus* (Matsumura)	絶滅危惧Ⅱ類			A		
	ゴマシジミ	*Maculinea teleius hakusanensis* Fujioka	絶滅危惧Ⅱ類			A		
	ヒメシジミ	*Plebejus argus micrargus* (Butler)	準絶滅危惧			A		
	ハマゴウノメイガ	*Herpetogramma albipennis* Inoue				A		
	ハマヤガ	*Agrotis ripae albovenosa* Tschetverikow				A		
	カギモンキリガ	*Orthosia nigrormaculata* (Hone)				A	B	
浅海域の生物	ヒジキ	*Hizikia fusiformis* (Harvey) Okamura						D
	マルバアサクサノリ	*Porphyra kuniedae* Kurogi	絶滅危惧Ⅰ類			A		
陸産貝類	ヤマトクビキレガイ	*Truncatella pfeifferi* Martens				A		
	オオウスイロヘソカドガイ	*Paludinella tanegashimae* (Pilsbry)				A		
	トノサマギセル	*Mundiphaedusa ducalis* (Kobelt)	準絶滅危惧			A		
	ココロマイマイ	*Satsuma cardiostoma* (Kobelt)	絶滅危惧Ⅱ類			A		
	オオミケマイマイ	*Aegista omiensis* (Pilsbry)	絶滅危惧Ⅱ類			A		
	ハクサンマイマイ	*Euhadra latispira latispira* (Pilsbry et Hirase)	絶滅危惧Ⅱ類			A		
	ミヤマヒダリマキマイマイ	*Euhadra scaevola scaevola* (Martens)	絶滅危惧Ⅱ類			A		
淡水産貝類	カラスガイ	*Cristaria plicata* (Leach)	準絶滅危惧			A		C
	ヨコハマシジラガイ	*Inversiunio jokohamensis* (Ihering)	準絶滅危惧			A		C
その他の動物	イソコモリグモ	*Lycosa ishikariana* (S. Saito)	絶滅危惧Ⅱ類	県希		A		

４．準絶滅危惧種　　147種

分類群	和　名	学　名	環境省ランク※1	法指定等※2	危機要因			
哺乳類	ミズラモグラ	*Euroscaptor mizura* (Gunther)	準絶滅危惧		A			
	オコジョ	*Mustera erminea* Linnaeus	準絶滅危惧					
	ヤマネ	*Glirulus japonicus* (Schinz)	準絶滅危惧	国天	A			
	ホンドモモンガ	*Pteromys momonga* Temminck			A			
	カヤネズミ	*Micromys minutus* (Pallas)			A			
	カワネズミ	*Chimarrogale Platycephala*			A			
	シントウトガリネズミ	*Sorex shintou*			A			
	ヒメヒミズ	*Dymecodon pilirostris*			A			
鳥類	カンムリカイツブリ	*Podeiceps cristatus*(Linnaeus)			A			
	ササゴイ	*Butorides striatus* (Linnaeus)			A			
	チュウサギ	*Egretta intermedia* (Wagler)	準絶滅危惧		A			
	クロサギ	*Egretta sacra* (Gmelin)			A			
	オシドリ	*Aix galericulata* (Linnaeus)	情報不足		A			
	ヨシガモ	*Anas falcata* Georgi			A			
	シノリガモ	*Histrionicus histrionicus* (Linnaeus)			A			
	ホオジロガモ	*Bucephala clangula* (Linnaeus)			A			
	ビロードキンクロ	*Melanitta fusca* (Linnaeus)			A			D
	ウミアイサ	*Mergus serrator* Linnaeus			A			
	カワアイサ	*Mergus merganser* Linnaeus			A			
	ミサゴ	*Pandion haliaetus* (Linnaeus)	準絶滅危惧		A			
	ハチクマ	*Pernis apivorus* (Linnaeus)	準絶滅危惧		A			
	ハイタカ	*Accipiter nisus* (Linnaeus)	準絶滅危惧		A			
	ノスリ	*Buteo buteo* (Linnaeus)						
	ヤマドリ	*Symaticus soemmerringil* (Temminck)	準絶滅危惧		A	B	C	
	イソシギ	*Actitis hypoleucos* (Linnaeus)			A			
	ヤマシギ	*Scolopax rusticola* Linnaeus			A			
	ウミスズメ	*Synthliboramphus antiquus* (Gmelin)	絶滅危惧ⅠA類		A			
	コノハズク	*Otus scops* Temminck & Schlegel			A			D
	サンショウクイ	*Pericrocotus divaricatus* (Raffles)	絶滅危惧Ⅱ類		A			
	サンコウチョウ	*Terpsiphone atrocaudata* (Eyton)			A			
	コシアカツバメ	*Hirundo daurica* Linnaeus			A			D
	セッカ	*Cisticola juncidis* (Rafinesque)			A		C	
	ノジコ	*Emberiza sulphurata* Temminck & Schlegel	準絶滅危惧		A			
両生爬虫類	ナガレタゴガエル	*Rana sakuraii* Matsui et Matsui			A			
	タカチホヘビ	*Achalinus spinalis* Peters			A			
	シロマダラ	*Dinodon orientale* (Hilgendorf)			A			
淡水魚類	ミナミアカヒレタビラ	*Acheilognathus tabira jordani* Arai, Fujikawa and Nagata	絶滅危惧ⅠB類		A			
	アジメドジョウ	*Niwaella delicata* (Niwa)	絶滅危惧Ⅱ類		A			
	シンジコハゼ	*Gymnogobius taranetzi*(Pinchuk)	絶滅危惧Ⅱ類		A			
	ジュズカケハゼ	*Gymnogobius castaneus* (O'Shaughnessy)			A		C	
昆虫	モートンイトトンボ	*Mortonagrion selenion* (Ris)	準絶滅危惧		A	B	C	
	オツネントンボ	*Sympecma paedisca paedisca* (Eversmann)			A	B		
	ヒラサナエ	*Davidius moiwanus taruii* Asahina et Inoue			A			
	ネアカヨシヤンマ	*Aeschnophlebia anisoptera* (Selys)	準絶滅危惧		A	B		
	カラカネトンボ	*Cordulia aenea amurensis* Selys				B		D
	カオジロトンボ	*Leucorrinia dubia orientalis* Ris						D
	キトンボ	*Sympetrum croceolum* Selys			A	B		
	ミネトワダカワゲラ	*Scopura montana* Maruyama			A			
	ウスバカマキリ	*Mantis religiosa* (Linnaeus)			A	B		
	ハマスズ	*Dianemobius csikii* (Bolivar)			A			
	ヤマトマダラバッタ	*Epacromius japonicus* (Shiraki)			A			
	ハウチワウンカ	*Trypetimorpha japonica* Ishihara	準絶滅危惧		A			
	ハネナシアメンボ	*Gerris (Gerris) nepalensis* Distant			A	B	C	
	ヒメミズカマキリ	*Ranatra unicolor* Scott			A	B	C	
	ミヤケミズムシ	*Xenocorixa vittipennis* (Horváth)			A	B	C	
	ミゾナシミズムシ	*Cymatia apparens* (Distant)	準絶滅危惧		A	B	C	
	マツムラクサカゲロウ	*Semachrysa matsumurae* (Okamoto)			A			
	オオウスバカゲロウ	*Heoclisis japonica* (Hagen)			A			
	ナガヒラタムシ	*Tenomerga mucida* (Chevrolat)			A			
	セアカオサムシ	*Hemicarabus tuberculosus* (Dejean et Boisduval)			A			
	ハクサンクロナガオサムシ	*Leptocarabus arboreus hakusanus* (Nakane)			A			
	タカバクロヒラタゴミムシ	*Platynus takabai* (Habu)			A			
	クビボソコガシラミズムシ	*Haliplus (Haliplinus) japonicus* Sharp			A	B		
	ヒメコガシラミズムシ	*Haliplus (Liaphlus) ovalis* Sharp			A	B	C	
	ルイスツブゲンゴロウ	*Laccophilus lewisius* Sharp			A	B	C	
	クロゲンゴロウ	*Cybister brevis* Aubé			A	B	C	
	ミズスマシ	*Gyrinus japonicus* Sharp			A	B		
	ガムシ	*Hydrophilus acuminatus* Motschulsky			A	B	C	
	ツヤハマベエンマムシ	*Eopachylopus ripae* (Lewis)			A			
	ヒメハマベエンマムシ	*Hypocacculus (Nessus) asticus* (Lewis)			A			
	ミヤマツヤハダクワガタ	*Ceruchus lignarius monticola* Lewis			A			
	コブナシコブスジコガネ	*Trox nohirai* Nakane						
	オオセンチコガネ	*Ceotrupes auratus auratus* Motschulsky			A			
	オオチャイロハナムグリ	*Osmoderma opicum* Lewis	準絶滅危惧		A			
	アオマダラタマムシ	*Nipponobuprestis amabilis* (Snellen van Vollenhoven)			A			
	エサキキンヘリタマムシ	*Scintillatrix kamibochiana* (Obenberger)			A			
	ヒメボタル	*Hotaria parvula* Kiesenwetter			A			
	ババジョウカイ	*Athemus babai* (Ishida)			A	B		
	ヤマトヒメメダカカッコウムシ	*Neohydnus hozumii* Nakane			A			
	クロズハマベゴミムシダマシ	*Epiphaleria atriceps* Lewis			A			
	フタスジカタビロハナカミキリ	*Brachyta bifasciata japonica* (Matsushita)			A			
	トラフカミキリ	*Xylotrechus chinensis* (Chevrolat)			A	B		
	ニセリンゴカミキリ	*Oberea mixta* Bates			A			
	ヌタッカゾウムシ	*Trichalophus nutakkanus* (Kono)			A			
	ウマノオバチ	*Euurobracon yokahamae* (Dalla Torre)	準絶滅危惧		A			
	キアシクロハラボソコマユバチ	*Meteorus flavicoxa* Maeto						
	クロモンアメバチ	*Dicamptus nigropictus* (Matsumura)			A			
	エサキムカシハナバチ	*Colletes esakii* Hirashima			A			
	カニギンモンアミカ	*Neohapalothrix kanii* Kitakami			A			
	ニホンアミカモドキ	*Deuterophlebia nipponica* Kitakami	絶滅危惧Ⅱ類		A			
	タシマツルギアブ	*Acrosathe tashimai* Nagatomi et Lyneborg			A			
	ギフチョウ	*Luehdorfia japonica* Leech	絶滅危惧Ⅱ類		A	B		
	ホシチャバネセセリ	*Aeromachus inachus inachus* (Menetries)	絶滅危惧Ⅰ類		A	B		
	オオチャバネセセリ	*Polytremis pellucida pellucida* (Murray)			A	B		
	ヘリグロチャバネセセリ	*Thymelicus sylvaticus sylvaticus* (Bremer)			A			
	ウラギンスジヒョウモン	*Argyronome laodice japonica* (Menetries)	準絶滅危惧		A	B		
	オオミスジ	*Neptis alwina* (Bremer et Grey)			A	B		
	オオムラサキ	*Sasakia charonda charonda* (Hewitson)	準絶滅危惧		A	B		
	クモマベニヒカゲ	*Erebia ligea takanonis* Matsumura	準絶滅危惧		A			
	モンクロキイロナミシャク	*Stamnodes danilovi sugitanii* Prout			A			
	オオシモフリスズメ	*Langia zenzerides nawai* Rothchild & Jordan			A	B		
	ハネナガモクメキリガ	*Xylena nihonica* (Hone)			A			
	ガマヨトウ	*Archanara aerata* (Butler)			A			

	オオチャバネヨトウ	*Nonagria puengeleri* (Schawerda)			A			
	チャバネキボシアツバ	*Paragabara ochreipennis* Sugi			A			
	ヤクシマコブヒゲアツバ	*Zanclognatha yakushimalis* Sugi			A			
浅海域の生物	ホソエガサ	*Acetabularia caliculus* Lamouroux	絶滅危惧Ⅰ類					
	イシゲ	*Ishige okamurae* Yendo						
	シダモク	*Sargassum filicinum* Harvey						
	ホソナガベニハノリ	*Hypoglossum nipponicum* Yamada						
	ノトイトグサ	*Polysiphonia notoensis* Segi						
	キクメイシモドキ	*Oulastrea crispata* (Lamarck)			A			
	ムツサンゴ	*Rhizopsammia minuta mutuennsis* Yabe et Eguchi			A			
陸産貝類	ヘグラマイマイ	*Euhadra quaesita heguraensis* Kuroda et Tan	準絶滅危惧		A			D
	イツマデガイ	*Blanfordia japonica japonica* (A. Adams)	準絶滅危惧		A			
	ナガオカモノアラガイ	*Oxyloma hirasei* (Pilsbry)	準絶滅危惧		A			
	オオタキコギセル	*Euphaedusa digonoptyx* (Boettger)			A			
	ナミコギセル	*Euphaedusa tau* (Boettger)			A			
	コンボウギセル	*Mesophaedusa hickonis hickonis* (Boettger)			A			
	オクガタギセル	*Mundiphaedusa dorcas* (Pilsbry)	準絶滅危惧		A			
	ハゲギセル	*Pinguiphaedusa attrita attrita* (Boettger)			A			
	オオコウラナメクジ	*Nipponolimax carinatus* Yamaguchi & Habe	準絶滅危惧		A			
	ヤマコウラナメクジ	*Nipponolimax monticola* Yamaguchi et Habe	準絶滅危惧		A			
	ヒラベッコウガイ	*Bekkochlamys micrograpta* (Pilsbry)	情報不足		A			
	クリイロベッコウ	*Japanochlamys cerasina* (Pilsbry)	情報不足		A			
	カズマキベッコウ	*Japanochlamys decens* (Pilsbry et Hirase)	情報不足		A			
	キヌツヤベッコウ	*Nipponochlamys semisericata* (Pilsbry)	情報不足		A			
	ヒメハリマキビ	*Parakaliella pagoduloides* (Gude)	準絶滅危惧		A			
	スジキビ	*Parakaliella ruida* (Pilsbry)	準絶滅危惧		A			
	オオウエキビ	*Trochochlamys fraterna* (Pilsbry)	情報不足		A			
	ヒメカサキビ	*Trochochlamys subcrenulata subcrenulata* (Pilsbry)	準絶滅危惧		A			
	エチゼンビロウドマイマイ	*Nipponochloritis echizenensis* (Pilsbry et Hirase)	情報不足		A			
	ケハダビロウドマイマイ	*Nipponochloritis fragilis* (Gude)	準絶滅危惧		A			
	コシタカコベソマイマイ	*Satsuma fusca* (Gude)	準絶滅危惧		A			
	コベソマイマイ	*Satsuma myomphala myomphala* (Martens)			A			D
	ヤマタカマイマイ	*Satsuma papilliformis* (Kobelt)	準絶滅危惧		A			
	タワラガイ	*Sinoennea iwakawa* (Pilsbry)			A			
淡水産貝類	イシマキガイ	*Clithon retropictus* (Martens)			A			
	ニクイロシブキツボ	*Fukuia kurodai kurodai* Abbott et Hunter	準絶滅危惧		A			
	カワザンショウガイ	*Assiminea lutea japonica* Martens			A			
	ウミニナ	*Batillaria multiformis* (Lischke)			A			
	マツカサガイ	*Inversidens japanensis* (Lea)	準絶滅危惧		A	B	C	
	イシガイ	*Unio douglasiae* Martens			A		C	
	マシジミ	*Corbicula leana* Prime	準絶滅危惧		A		C	
その他の動物	キシノウエトタテグモ	*Latouchia swinhoei* (Kishida)	準絶滅危惧		A			
	キノボリトタテグモ	*Ummidia fragaria* (Doenitz)	準絶滅危惧		A			
	ワスレナグモ	*Calommata signata* (Karsch)	準絶滅危惧		A			

５．情報不足　　52種

分類群	和　名	学　名	環境省ランク※1	法指定等※2	危機要因			
鳥類	オオジシギ	*Gallinago hardwickii* (Grey)	絶滅危惧Ⅱ類		A	B		
	マダラウミスズメ	*Brachyramphus marmoratus* (Pallas)	情報不足		A			
	オオコノハズク	*Otus lempiji* (Horsfield)			A			D
	ハリオアマツバメ	*Hirundapus caudacutus* (Latham)						D
	キバシリ	*Certhia familiaris* Linnaeus			A			D
昆虫	ムスジイトトンボ	*Cercion sexlineatum* (Selys)						
	クマコオロギ	*Mitius minor* (Shiraki)						
	ハマベツチカメムシ	*Byrsinus varians* (Fabricius)	準絶滅危惧					
	エゾコセアカアメンボ	*Gerris (Macrogerris) yezoensis* (Miyamoto)						
	オオクロツヤミズギワカメムシ	*Macrosaldula koreana* (Kiritshenko)						
	コオナガミズスマシ	*Orectochilus punctipennis* Sharp						
	クロアリヅカエンマムシ	*Hetaerius optatus* Lewis						
	チビクワガタ	*Figulus binodulus* Waterhouse						
	セスジカクマグソコガネ	*Rhyparus azumai azumai* Nakane						
	イソジョウカイモドキ	*Laius asahinai* Nakane	情報不足					
	ガガブタネクイハムシ	*Donacia lenzi* Schönfeldt						
	ツヤネクイハムシ	*Donacia nitidior* (Nakane)						
	イネネクイハムシ	*Donacia provostii* Fairmaire						
	ハクサンハバチ	*Neocolochelyna hakusana* Togashi						
	コマユバチの一種	*Yelicones nipponicus* Togashi						
	アオスジクモバチ	*Paracyphononyx alienus* (Smith)						
	ハクサンホシシリアゲ	*Panorpa kagamontana* Miyamoto						
	タケウチケブカミバエ	*Paratephritis takeuchii* Ito						
	キイロミヤマイエバエ	*Thricops diaphanus* (Wiedemann)						
	キバネクロバエ	*Mesembrina resplendens cillimaculata* Fan & Zhang						
	ギンイチモンジセセリ	*Leptalina unicolor* (Bremer et Grey)	準絶滅危惧					
	ルリイロスカシクロバ	*Illiberis consimilis* Leech						
	ネズミホソバ	*Pelosia angusta* (Staudinger)						
	ヒメシロシタバ	*Catocala nagioides* Wileman						
浅海域の生物	ウスバノコギリモク	*Sargassum serratifolium* (C.Agardh) C.Agardh						
	タマハハキモク	*Sargassum muticum* (Yendo) Fensholt						
	ススカケベニ	*Halarachnion latissimum* Okamura						
	タマカイメン	*Tethya japonica* Sollas						
	ウミサボテン	*Cavernularia obesa* Milne-Edwards et Haime						
	ホソウミエラ	*Scytalium martensii* Kölliker						
	フトウミエラ	*Leioptilus fimbriatus* (Herklots)						
	チャイロキヌタ	*Palmadusta artuffeli* (Jousseaume)						
	ハボウキガイ	*Pinna bicolor* Gmelin						
	コシダカウニ	*Mespilia globulus* (Linnaeus)						
	オトヒメゴカイ	*Hesione reticulata* Marenzeller						
	カタユウレイボヤ	*Ciona intestinalis* (Linnaeus)						
	ナメクジウオ	*Branchiostoma belcheri* Gray						
	アカハゼ	*Amblychaeturichthys hexanema* (Bleeker)						
陸産貝類	サツマクリイロカワザンショウ類の一種	*Angustassiminea sp.*			A			D
	ナガナタネガイ	*Columella edentula* (Draparnaud)	地域個体群					
	ミドリベッコウ	*Bekkochlamys kagaensis* (Pilsbry et Hirase)	情報不足		A			
	ハクサンベッコウ	*Nipponochlamys hakusanus* (Pilsbry et Hirase)	情報不足		A			
	ハクサンケマイマイ	*Aegista hakusanensis* M.Azuma et Y.Azuma			A			
淡水産貝類	ヒラマキガイモドキ	*Polypylis hemisphaerula* (Benson)	準絶滅危惧		A	B		
	ホソウミニナ	*Batillaria cumingii* (Crosse)			A			
	オバエボシガイ	*Inversidens brandti* (Kobelt)	絶滅危惧Ⅱ類		A		C	
	ヤマトシジミ	*Corbicula japonica* Prime	準絶滅危惧		A			

６．地域個体群　　26種

分類群	和　名	学　名	環境省ランク※1	法指定等※2	危機要因	
鳥類	七ツ島のオオミズナギドリ繁殖個体群	*Calonectris leucomelas* (Temminck)			A	C
	七ツ島のウミウ繁殖個体群	*Phalacrocorax capillatus* (Temminck & Schlegel)			A	
	ミユビシギ越冬群	*Crocethia alba* (Pallas)			A	D
両生爬虫類	邑地潟地溝帯以北のヒダサンショウウオ	*Hynobius kimurae* Dunn	準絶滅危惧		A	
淡水魚類	イワナ（無斑タイプ）	*Salvelinus leucomaenis* subsp.		白山市天	A	C
昆虫	ヤマトオサムシ	*Carabus yanato* (Nakane)				
	ヘグラシモフリコメツキ	*Actenicerus suzukii hegrensis* (Kishii)				
	ヘグラカバイロコメツキ	*Agriotes subvittatus hegurensis* Kishii				
	コムラサキ（黒色型）	*Apatura metis substituta* Butler				
	アルプスヤガ	*Xestia speciosa* (Hubner)				
浅海域の生物	フジノハズタ	*Caulerpa fergusonii* Murray				
	ウスイロモク	*Sargassum pallidum* (Turner) C.Agardh				
	ツクシアマノリ	*Porphyra yamadae* Yoshida				
	ツクモジュズサンゴ	*Culicia japonica tenuisepes* Ogawa, Takahashi and Sakai			A	
	シオガマサンゴ	*Oulangia stokesiana miltoni* Yabe et Eguchi			A	
	アンズイソギンチャク	*Aulactinia coccinea* (Verrill) sensu Uchida and Soyama			A	
	グビジンイソギンチャク	*Stichodactyla tapetum* (Ehrenberg)			A	
	アマガイ	*Nerita (Heminerita) japonica* Dunker			A	
	メダカラ	*Purpuradusta (Cupinota) gracillis* (Gaskoin)				
	マクラガイ	*Oliva mustelina* Lamarck				
	マシコヒゲムシ	*Oligobrachia mashikoi* Imajima			A	
	サクラオフェリア	*Euzonus arcticus* Grube			A	
	エゾオフェリア	*Euzonus ezoensis* (Okuda)			A	
	ミサキギボシムシ	*Balanoglossus misakiensis* Kuwano			A	
	ワダツミギボシムシ	*Balanoglossus carnosus* (Willey)			A	
	イチモンジハゼ	*Tremma garmmistes* (Tomiyama)			A	

II　各　論

1．哺　乳　類

1　石川県の哺乳類相（陸棲）

日本国内の哺乳類の生息確認は帰化種を含めると 26 科 70 属 122 種で、土着の哺乳類だけでも 23 科 57 属 110 種と非常に多くの種が生息している。また 110 種のうち 44 種が固有種、6 属が固有属であることも大きな特徴である。日本の国土は面積が狭いうえ、南北に 3,000㎞ と細長く、気候帯の上でも亜熱帯から亜寒帯まで含み、地形が急峻で高山も見られることから植物地理学上も多様性に富んだ自然環境が見られる。また、アジア大陸の東端に位置する列島であることから、地殻の変動や氷河期の海水面の上下により大陸からの侵入や孤立を繰り返し、大陸から強い影響を受けている反面、孤立により独自の進化を遂げた部分などがある（阿部ら 1997，2007）。

県内では 1999 年までに 18 科 53 種の哺乳類が確認されているが、その後の調査でコウモリ 2 種の生息が確認され、現時点では 18 科 55 種が確認されている。これを日本の哺乳類相と比較すると種数で半分と少ないが、これは、沖縄県や北海道などの生物地理学的に完全に異なる区域を含んでいるためで、同じ生物地理学的区域に属する本州、四国、九州の種数と比較すると、種段階ではほぼすべての種が確認されている。本県は南北に細長く、しかも海岸から高山までを含み、急峻で入り組んだ地形が多く、多量の積雪があることからも、多様で特徴のある哺乳類相が残ってきた。アズミトガリネズミ、ヒメヒミズ、ミズラモグラなど、高山の山岳地にだけ分布する種や原生的な森林にしかいないコウモリ類が分布することなど、哺乳類相の豊かな県といえる。また、コウモリ類の一部には繁殖が確認されていないものもあるが、ほとんどの種で繁殖が確認されており、県内には哺乳類の生息に適した環境が残されているといえる。

哺乳類相から県内を加賀地方と能登地方に大きく二分することもできる。加賀地方にはヌートリアとアナウサギの 2 種の移入種を除く、県内の全ての哺乳類の生息が確認されているのに対し、能登地方は、加賀地方の約半数にあたる 11 科 26 種しか生息が確認されておらず、大型哺乳類や高山性の小哺乳類を欠いている。加賀地方の種の多様さを際だたせているのは、能登地方にはない白山を中心とした広い山岳地域の存在である。この地域において冬期間の多量の積雪が人間活動を制限し、良好な自然環境が残されてきた結果といえる。

県内で最も多くの種がいる分類群はコウモリ類で、キクガシラコウモリ科とヒナコウモリ科の 16 種が確認されている。次いで多いのはネズミ科とモグラ類（トガリネズミ科とモグラ科）で、どちらも 9 種が確認されている。空中と、地上あるいは地下とそれぞれの生活の場は異なるがいずれも、体の小さな哺乳類で、これらを合計すると 34 種にもなり、石川県で確認されている種の 6 割近くになる。これらの種については県全体の概要が明らかになってはいるが、研究者も限られているため、詳細については今後も調査を継続しデータの空白を埋めていく必要があると考えられる。

2　種の選定基準

種の現状を客観的に評価するには、過去から現在までの個体数、分布域などの変化を継続的に捉えていく必要がある。しかし、現状は分布データも不完全であり、個体数についてはごく一部の種しか分かっていないことを認めざるを得ない。そのため、今回の選定に際しては次の基準で種を選んだ。

(1) 環境庁のレッドリスト「哺乳類」（1998）のうち、石川県に生息する種及び県内で繁殖する可能性のある種

絶滅危惧Ⅰ類　ノレンコウモリ、モリアブラコウモリ、クビワコウモリ、クロホオヒゲコウモリ

絶滅危惧Ⅱ類　アズミトガリネズミ、ヒメホオヒゲコウモリ、カグヤコウモリ、ヤマコウモリ、ヒナコウモリ、ウサギコウモリ、テングコウモリ、コテングコウモリ

準絶滅危惧　ミズラモグラ、オコジョ、ヤマネ

(2) 県内の個体数が少なく、しかも生息条件が悪化しているため生存が脅かされている種。
準絶滅危惧　　ホンドモモンガ、カヤネズミ、カワネズミ、シントウトガリネズミ、ヒメヒミズ

(3) 上記の(2)に該当すると思われるが、現在のところ評価するには知見が不足している種。
情報不足　　該当なし

(4) かつては生息し、現在は全く生息しない種。
絶滅　　オオカミ、カワウソ

3　哺乳類選定種一覧

区　分	哺　乳　類	種類数等
絶滅	オオカミ、カワウソ	2
絶滅危惧Ⅰ類	ノレンコウモリ、クロホオヒゲコウモリ、モリアブラコウモリ、クビワコウモリ	4
絶滅危惧Ⅱ類	アズミトガリネズミ、ヒメホオヒゲコウモリ、カグヤコウモリ、ヤマコウモリ、ヒナコウモリ、ウサギコウモリ、テングコウモリ、コテングコウモリ	8
準絶滅危惧	ミズラモグラ、オコジョ、ヤマネ、ホンドモモンガ、カヤネズミ、カワネズミ、シントウトガリネズミ、ヒメヒミズ	8
情報不足	-	-
地域個体群	-	-
計		22

（野﨑　英吉）

新旧対応表

		前回						17
		絶滅 2	絶滅危惧Ⅰ類 0	絶滅危惧Ⅱ類 5	準絶滅危惧 8	情報不足 2	地域個体群 0	カテゴリー外 5
今回	絶滅 2	オオカミ カワウソ						
	絶滅危惧Ⅰ類 4			クロホオヒゲコウモリ		クビワコウモリ		ノレンコウモリ モリアブラコウモリ
	絶滅危惧Ⅱ類 8			アズミトガリネズミ ヒメホオヒゲコウモリ カグヤコウモリ ヤマコウモリ	ヒナコウモリ ウサギコウモリ テングコウモリ コテングコウモリ			
	準絶滅危惧 8				ミズラモグラ オコジョ ヤマネ ホンドモモンガ	カヤネズミ		カワネズミ シントウトガリネズミ ヒメヒミズ
	情報不足 0							
22	地域個体群 0							
	カテゴリー外 0							

オオカミ

Canis lupus (Linnaeus)

ネコ目イヌ科

石川県カテゴリー	絶滅
国カテゴリー	絶滅

選定理由

近年まで生存していたものの、現在では絶滅したとされている。

形　態

全体に灰褐色から黒褐色の色をしている。尾が太く房状をしていること、歯は切歯、犬歯、小臼歯（裂肉歯）、大臼歯が明瞭に分かれ、イヌ科の他の動物と似ているが裂肉歯が大きいことで区別できる。頭胴長95～114cm、尾長30cmが記録されている。

国内分布

かって、北海道にはエゾオオカミ、本州、四国、九州にはニホンオオカミが生息した。エゾオオカミは1800年代に絶滅したと推定されており、ニホンオオカミは1905年に奈良県鷲家口での捕獲が最後で、現在生息の確認はない。

県内分布

150年前までは金沢周辺から、能登半島、白山麓にかけて生息していたとの話がのこされており、県内に広く分布していたものと思われる。また、県立七尾高等学校にニホンオオカミの毛皮の標本が残されている。

生　態

他のイヌ科動物と同様、繁殖期には雄雌1対の家族集団を作り、子供を育てる。通常は、群れをなし、シカ、イノシシなどの草食動物を襲う。

参考文献

阿部　永・石井信夫・金子之史・前田喜四雄・三浦慎悟・米田政明 1997. 日本の哺乳類. 東海大学出版会. pp195.
千葉徳爾 1993. 金沢に出没!!ニホンオオカミ. はくさん87. 石川県白山自然保護センター. p2-7.

写真（図）はありません。

分布図はありません。

県内の分布

カワウソ

Lutra lutra (Linnaeus)

ネコ目イタチ科

石川県カテゴリー	絶滅
国カテゴリー	絶滅

選定理由
近年まで生存していたものの、現在では絶滅したとされている。

形　態
背面はややくすんだ褐色で、胸から腹側は白っぽい毛色をしている。四肢の指の間には水掻きがあること、尾が太く円錐形をしていること、歯は大きく鈍臼歯状であることからほかのイタチ科の動物と区別できる。頭胴長70cm、尾長46cm、体重8kgが記録されている。

国内分布
かつて、北海道から九州まで、対馬などの離島を含めた河川の下流部に生息したが、現在では高知県南西部で生息が確認されているにすぎない。

県内分布
かって犀川、浅野川、手取川などにカワウソにだまされたという民話がのこされており、県内に広く分布していたものと思われる。白山市の旧尾口村、旧吉野谷村地区では大正期に目撃した例が残されており、また、七尾市の熊淵川で昭和初期まで生息していたという。

生　態
河川の中下流部から沿岸部に生息し、水中で魚類、甲殻類、陸上で野ネズミ、鳥類などを補食する。川岸に巣穴を掘り､家族単位で生活する。

生息地の条件
種の存続が可能な個体数が生存できるだけの豊富な魚類などの餌が四季を通じて得られ、渓畔林や草地など人為的攪乱の少ない広大な生息環境が必要。

絶滅の原因
良質な毛皮のため乱獲されるとともに、全国的な河川改修やそれに付随する渓畔林や草地が破壊され、さらに河川環境の悪化に伴う餌となる魚の量の不足などが重なり、日本では絶滅の道をたどった。

写真（図）はありません。

分布図はありません。

県内の分布

ノレンコウモリ

Myotis nattereri

コウモリ目ヒナコウモリ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類
国カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類

選定理由
全国的にも分布している県が少なく、本県においても生息の確認場所が少ない。

国内分布
北海道、本州、四国、九州から確認されているが、生息が確認されている県は15県ほどである。

県内分布
白山市尾添の冬季用隧道でのみで確認されている。

生　態
昼間のねぐらは、洞窟などが知られている。冬眠場所および出産・哺育場所も洞窟を利用することが知られている。

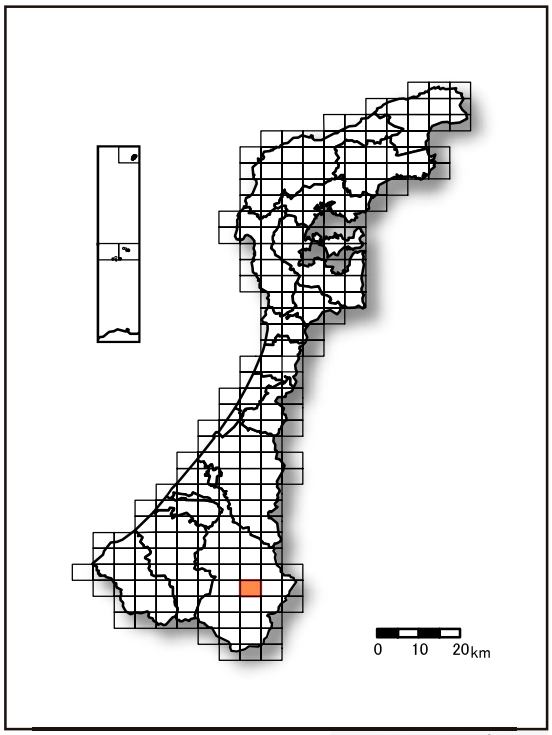
生息地の条件
自然林内に生息する。

生存の危機
生息する可能性のある自然林が限られた地域にしか存在しない。（A）

特記事項
原生林が残された地域にのみ生息するため、県内においてもその生息地はきわめて限られている。

参考文献

コウモリの会 2005. コウモリ識別ハンドブック. コウモリの会編. 69pp. 文一総合出版.
前田喜四雄 2008. コウモリ. （阿部永, 監修：日本の哺乳類[改訂2版]）pp. 25–64. 159–169. 東海大学出版会. 秦野.
佐藤顕義・勝田節子・山本輝正 2008. 大井川水系および天竜川水系で確認したノレンコウモリ *Myotis nattereri* の出産哺育と周年活動. コウモリ通信 16：2–9.
山本輝正・野崎英吉 2002. 白山地域におけるコウモリ目相. 石川県白山自然保護センター研究報告. 29：73–76.
山本輝正・上馬康生・野崎英吉 2005. 石川県白山地域のコウモリ相調査－1998年～2005年の調査結果より－. 石川県白山自然保護センター研究報告. 32：25–30



県内の分布

クロホオヒゲコウモリ

Myotis pruinosus Yoshiyuki

コウモリ目ヒナコウモリ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類
国カテゴリー	絶滅危惧IB類

選定理由

ブナ林帯より下部の森林帯や照葉樹林帯の林に生息していたと想像されているが、現在ではその林の分布が分断され、わずかな個体群が点々と残存しているだけと考えられる。

国内分布

本州、四国、九州から知られている。

県内分布

県内では、白山市白峰地区の市ノ瀬と六万山周辺と同市中宮の2箇所で生息が確認されている。

生　態

森林内で飛翔している中型・小型の昆虫（ガやガガンボ等）を餌としている。他の森林棲のコウモリと同様の生態をしているものと考えられるが、詳しくは不明である。6月頃に出産を行い、10月頃に子供は独立するようである。

生息地の条件

本州では、ブナ林帯より下部の森林帯や照葉樹林帯に分布する林に広く生息していた。

生存の危機

低山の照葉樹林等はほとんどが残されていないため、生息地が分断され、わずかな個体群が点々と残存しているのみと予想され、きわめて危機的な状況といえる。（A）

特記事項

生息の確認された2地点ともに当歳獣が確認されており、白山市白峰地区の市ノ瀬の六万山周辺及び同市中宮の森林は、クロホオヒゲコウモリの繁殖地として特に重要であり、両地区周辺の森林の保全が望まれる。

参考文献

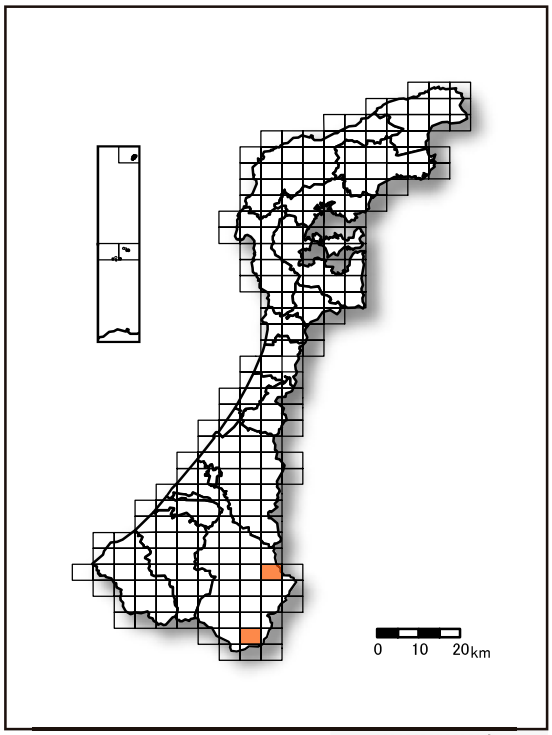
山本輝正 1990. 石川県のコウモリ. 石川の生物, 石川の生物編集会（編）, 137-142. 石川県高等学校研究会生物部会.

山本輝正 1994. 白山石川県側のコウモリ１. 岐阜ふるさとと動物通信, 60, p967.

山本輝正 1995. 白山石川県側のコウモリ2. 岐阜ふるさとと動物通信, 62, p996.

山本輝正・野崎英吉 2002. 白山地域におけるコウモリ目相. 石川県白山自然保護センター研究報告. 29：73―76.

山本輝正・上馬康生・野崎英吉 2005. 石川県白山地域のコウモリ相調査ー1998年～2005年の調査結果よりー. 石川県白山自然保護センター研究報告. 32：25-30.



県内の分布

モリアブラコウモリ

Pipistrellus endoi Imaizumi

コウモリ目ヒナコウモリ科

石川県カテゴリー　絶滅危惧Ⅰ類

国カテゴリー　絶滅危惧IB類

選定理由　全国的にも分布している県が少なく、本県においても生息の確認場所が少ない。

国内分布　日本固有種で、本州と四国から確認されている。

県内分布　白山市（旧吉野谷村）中宮のみで確認されている。

生　　態　昼間のねぐらは樹洞であるが、詳しい生態は不明である。

生息地の条件　自然林内に生息する。

生存の危機　生息する可能性のある自然林が限られた地域にしか存在しない。（A）

特記事項　原生林が残された地域にのみ生息するため、県内においてもその生息地はきわめて限られている。白山市中宮では、授乳中のメスが捕獲され、出産・哺育が確認されている。白山市中宮の森林は、モリアブラコウモリの生息にとって特に重要であると言える。周辺の森林の完全なる保存が望まれる。

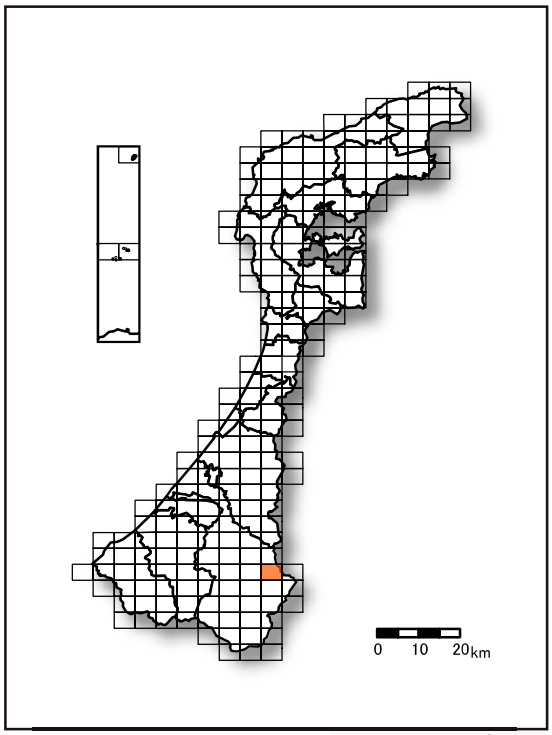
参考文献

コウモリの会 2005. コウモリ識別ハンドブック. コウモリの会編. 69pp. 文一総合出版.

前田喜四雄 2008. コウモリ. （阿部永, 監修：日本の哺乳類[改訂2版]）pp. 25–64. 159–169. 東海大学出版会. 秦野.

山本輝正・野崎英吉 2002. 白山地域におけるコウモリ目相、石川県白山自然保護センター研究報告. 29：73–76.

山本輝正・上馬康生・野崎英吉 2005. 石川県白山地域のコウモリ相調査－1998年～2005年の調査結果より－. 石川県白山自然保護センター研究報告. 32：25–30.



県内の分布

クビワコウモリ

Eptesicus japonensis Imaizumi

コウモリ目ヒナコウモリ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類
国カテゴリー	絶滅危惧IB類

選定理由
全国的にも分布している県が少なく、本県においても生息の確認場所が少ない。

国内分布
日本固有種で、これまでに福島県、栃木県、埼玉県、富山県、石川県、山梨県、長野県、岐阜県、静岡県において確認されている。

県内分布
舳倉島と白山市（旧吉野谷村）中宮の2箇所で確認されている。

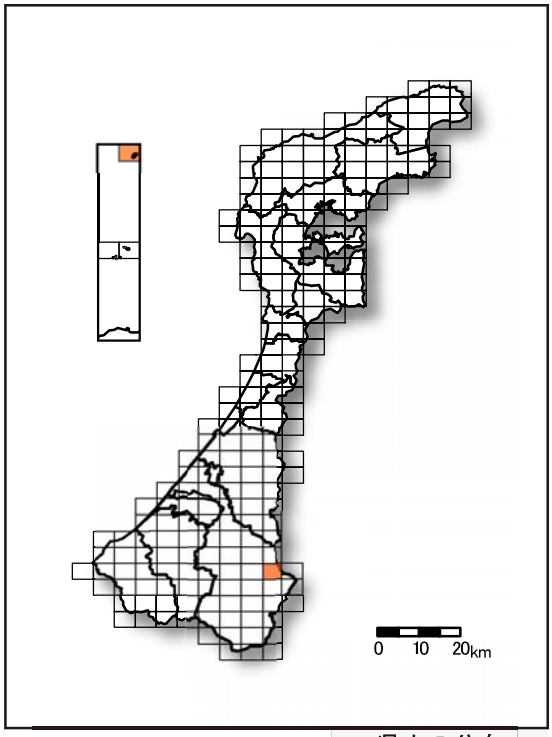
生　態
昼間のねぐらは樹洞であるが、樹洞が少なくなっているため、現在では家屋の壁板の下や天井裏で出産・哺育する例も知られている。後者の場合は100頭を越える大きな群を作る。

生息地の条件
自然林内に生息する。

生存の危機
現在までに、福島県、栃木県、埼玉県、富山県、石川県、山梨県、長野県、岐阜県、静岡県において生息が確認されているが、出産・哺育が確認されているのは、長野県、石川県、岐阜県のみである。(A)

特記事項
原生林が残された地域にのみ生息するため、県内においてもその生息地はきわめて限られている。白山市中宮では、授乳中のメスが複数捕獲され、出産・哺育が確認されている（山本ら　2005）。白山市中宮の森林は、クビワコウモリの生息にとって特に重要であると言える。周辺の森林の完全なる保存が望まれる。舳倉島で確認されたクビワコウモリが、どこから移動してきた個体なのか不明である。

参考文献
前田喜四雄・原田正史・竹田伸一・野崎英吉 1992. 舳倉島でとれたクビワコウモリ. 石川県白山自然保護センター研究報告. 19:87-89.
山本輝正・上馬康生・野崎英吉 2005. 石川県白山地域のコウモリ相調査－1998年～2005年の調査結果より－. 石川県白山自然保護センター研究報告. 32 : 25-30.



県内の分布

アズミトガリネズミ

Sorex hosonoi Imaizumi

モグラ目トガリネズミ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類
国カテゴリー	準絶滅危惧

選定理由

県内では、白山地域の山地帯から高山帯を中心とする限られた地域に分布する。日本固有種。

形　態

トガリネズミ類では中型で、尾が長い。背面が暗褐色、腹面はより淡色。トガリネズミ類ではシントウトガリネズミよりやや小型で尾が長く、体重約4.5g前後、頭胴長46～66mm、尾長47～52mm、後足長10.6～12.2mm。頭骨全長は通常16.5mm以下でシントウトガリネズミより著しく小さい(阿部ほか2005)。シントウトガリネズミの後足長は通常12mm以上あるが（子安1995、子安･林1997）、白山地域で採集されたアズミトガリネズミの10頭の計測結果では後足長は10頭平均11.4mmであった(林1999)。また、手掌（前足）の長さは6.2～6.9mm、幅は1.5～1.9mm(子安,1998)。

国内分布

本州中部の北・中央・南アルプス、奥秩父、志賀山などに分布する。

県内分布

本県では1990年10月3日、白山釈迦新道(標高約950m)で採集され、白山地域(石川県)が日本における新たな分布地となった(子安ほか、1993)。その後、白山高山帯の調査によって11個体が採集され(子安･林,1997)、さらに白山自然保護センターの収蔵標本から3個体確認された。これら15個体の標本のうち14個体は白山の亜高山帯から高山帯のものであった。県内における分布は2メッシュであった。

生　態

亜高山帯から高山帯にかけての針葉樹林帯、草原帯に生息する。生態については明かではない。白山高山帯の繁殖期は、7～9月で、胎仔数6(1例)が知られている(子安･林,1997)。

生息地の条件

主に白山地域の亜高山帯～高山帯。

生存の危機

白山地域の山地帯、亜高山帯、高山帯の保全が継続的に必要。　(A)

特記事項

白山の地域個体群の亜種記載の検討が望まれる。

参考文献

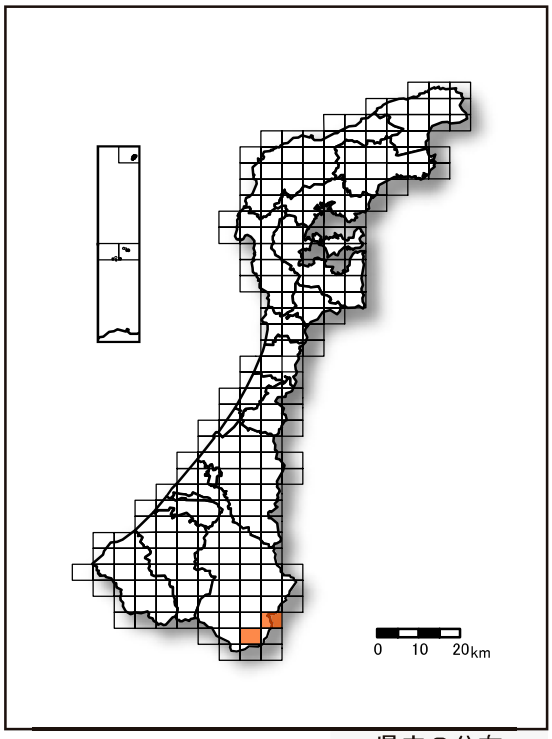
子安和弘 1995. 白山のトガリネズミ類. はくさん22.2-5. 石川県白山自然保護センター.

子安和弘 1998. 日本産トガリネズミ亜科の自然史（阿部永・横畑泰志　食虫類の自然史),201-267. 比婆科学教育振興会（広島県庄原市）

子安和弘･原田正史･野崎英吉 1993. 石川県白山麓におけるトガリネズミの捕獲記録. 石川県白山自然保護センター研究報告.20,33-34.

子安和弘･林哲 1997. 白山高山帯における野生小哺乳類.　石川県白山自然保護センター研究報告. 24,23-32.

写真提供者：石川県白山自然保護センター



県内の分布

ヒメホオヒゲコウモリ

Myotis ikonnikovi Ognev

コウモリ目ヒナコウモリ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類
国カテゴリー	なし

選定理由
ブナ林帯より上部の原生林が残された地域にのみ生息するため、県内においてもその生息地はきわめて限られている。

国内分布
日本では北海道、および中国地方を除く本州から知られる。

県内分布
白山市白峰の市ノ瀬六万山周辺と同市中宮の3箇所で各1頭がそれぞれ捕獲されているのみである。

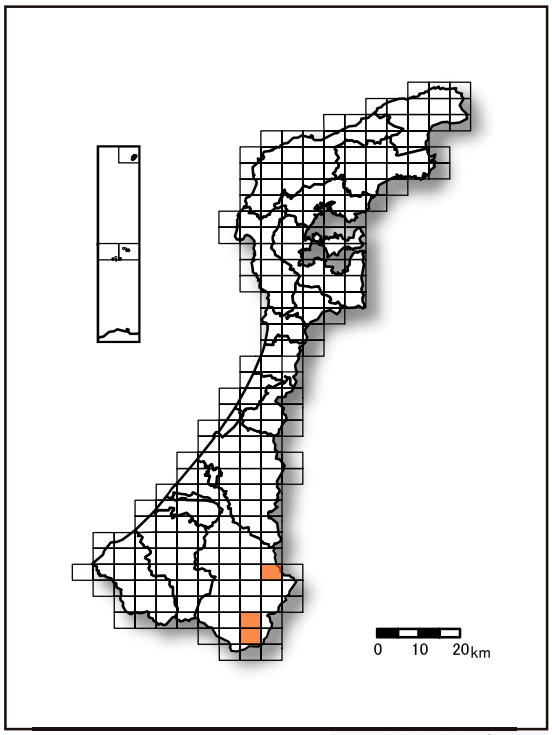
生　態
昼間のねぐらは樹洞と思われるが、本州の一部では家屋でも繁殖をしている。初夏に1仔を出産する。

生息地の条件
原生林が残された地域にのみ生息するため、県内においてもその生息地はきわめて限られている。

生存の危機
白山周辺で行われてきた天然林の伐採により、徐々にその生息地及び生息数が減少しているものと考えられる。 (A)

参考文献

佐野明・上馬康生 1981. 白山地域に生息する翼手類について. 石川県白山自然保護センター研究報告. 7:23-29.
山本輝正 1990. 石川県のコウモリ. 石川の生物, 石川の生物編集会 (編). 137-142. 石川県高等学校研究会生物部会.
山本輝正 1998a. 3-1-2 哺乳類 コウモリ目, 環境庁委託 平成9年度 生態系多様性地域調査(白山)報告書. 142-147.
山本輝正 1998b. 3-2-2 白山地域のコウモリ類, 環境庁委託 平成9年度 生態系多様性地域調査(白山)報告書. 227-235.
山本輝正・上馬康生・野崎英吉 2005. 石川県白山地域のコウモリ相調査ー1998年～2005年の調査結果よりー. 石川県白山自然保護センター研究報告. 32 : 25-30.



県内の分布

カグヤコウモリ

Myotis frater Allen

コウモリ目ヒナコウモリ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類
国カテゴリー	なし

選定理由
全国的にも分布している県が少なく、本県においても生息の確認場所が少ない。

国内分布
本州の岐阜・石川両県以北、北海道から知られるが、分布が確認された都道府県は10に満たない。

県内分布
白山地域を中心とした山地帯で見られる。

生　態
1年を通じて樹洞を昼間のねぐらとするものと思われるが、少数が洞穴にいた例も知られるほか、ときどき家屋内で100頭を越える大きな繁殖集団を作ることが知られている。初夏に1仔を出産。出生後は約30日で親と同じくらいの大きさになり飛翔を始める。雌は1年3～4ヶ月で交尾し、満2才で出産する。夜に飛翔する昆虫類を捕食する。

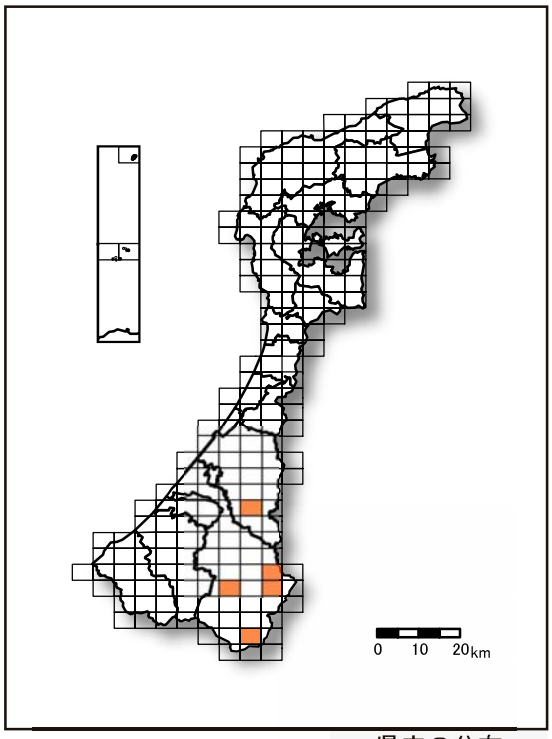
生息地の条件
本州中部地方より北の自然林に生息する。

生存の危機
生息可能な森林が急速に減少しており、森林の保護が望まれる。（A）

特記事項
白山地域での生息個体数は、かなり多いものと予想される。広範囲にカグヤコウモリの生息可能な樹洞かそれに類した構造物が存在しているものと考えられる。以上より白山地域の森林（特に樹洞を持つような巨木のある森）の保護が望まれる。

参考文献

佐野明･上馬康生 1981. 白山地域に生息する翼手類について, 石川県白山自然保護センター研究報告. 7. 23-29.
山本輝正 1998. 3-1-2 哺乳類 コウモリ目, 環境庁委託 平成9年度 生態系多様性地域調査(白山)報告書. 142-147.
山本輝正・野崎英吉 2002. 白山地域におけるコウモリ目相、石川県白山自然保護センター研究報告, 29 : 73ー76.
山本輝正・上馬康生・野崎英吉 2005. 石川県白山地域のコウモリ相調査ー1998年～2005年の調査結果よりー. 石川県白山自然保護センター研究報告. 32 : 25-30.



県内の分布

ヤマコウモリ

Nyctalus aviator Thomas

コウモリ目ヒナコウモリ科

石川県カテゴリー　絶滅危惧Ⅱ類
国カテゴリー　準絶滅危惧

選定理由
樹洞にのみ生息し、季節や性により使う樹洞が変化するため、比較的多くの樹洞が存在する森や林がないと生存が難しい。

国内分布
北海道、本州中部以北、対馬、壱岐、福江島、沖縄島だけである。

県内分布
ねぐらは、金沢市内の1箇所である。これまでの生息記録は、白山周辺1箇所と金沢市内の3箇所である。

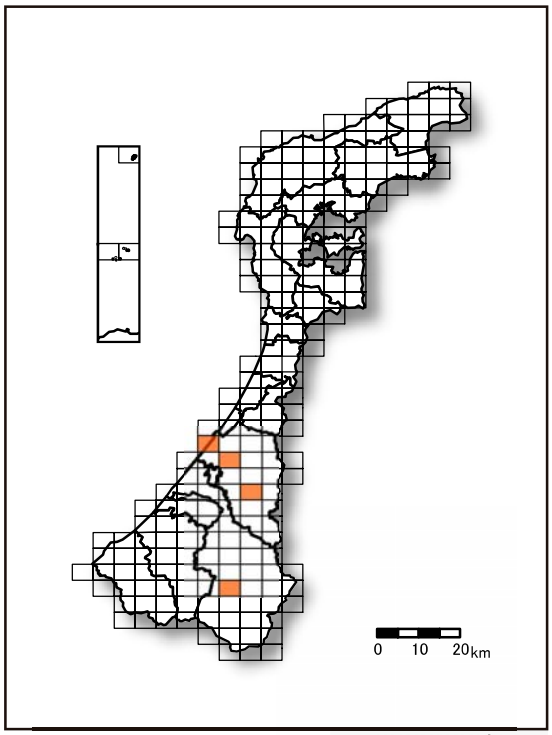
生　態
昼間の生息場所は樹洞。出産・哺育は雌だけの20～50頭以上の大きな集団で行われる。その間、雄は1～十数頭に分散して小樹洞、小鳥用の巣箱などを利用する。それ以外の季節は雌雄一緒になり、50～100頭を越えるより大きな集団で大樹洞を利用する。

生息地の条件
樹洞を持つ木の多く存在する森や林。

生存の危機
樹洞を持つ木の多く存在する森や林が徐々に減少しているため、全国的に生息数は減少している。(A)

特記事項
採餌している個体が捕獲されたことから白山山系のどこかにねぐらがあるものと考えられる。石川県に生息する本種は、きわめて数が少ないものと考えられる。

参考文献
上馬康生・南他喜男 1984. 金沢市内で発見されたヤマコウモリの冬眠例. 石川県白山自然保護センター研究報告. 11. 85–86.
山本輝正 1990. 石川県のコウモリ. 石川の生物, 石川の生物編集会（編）. 137–142. 石川県高等学校研究会生物部会.
山本輝正 1998. 3–1–2 哺乳類コウモリ目, 環境庁委託 平成9年度 生態系多様性地域調査(白山)報告書. 142–147.



県内の分布

ヒナコウモリ

Vespertilio superans Thomas

コウモリ目ヒナコウモリ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類
国カテゴリー	なし

選定理由

全国的にも分布している県が少なく、本県においても生息の確認場所が少ない。

国内分布

日本では北海道、本州（中国地方を除く）、四国、九州からの採集記録があるが、出産・哺育地として確認されているところは現在たいへん少ない。

県内分布

白山市白峰の別当出合の休憩舎の案内板で休んでいる雄雌各1頭と同市中宮で授乳中の雌1頭が確認されている。

生　　態

大木の多い地域では1年中集団で樹洞を昼間の隠れ家にしているが、家屋や海蝕洞なども繁殖の場所として利用する。冬眠場所については知られていない。初夏に1～3仔、多くは2仔を雌親ばかり100頭を越える出産・哺育集団で出産する。授乳期間は約35日であり、出生仔は生後5～6週間でほぼ親と同じ大きさになる。雌雄ともに生まれた年の秋に交尾に参加するため、雌は満1歳で出産する。

生息地の条件

東北地方には多く観察されるが、他の地域では原生林などで数例確認されるのみである。

生存の危機

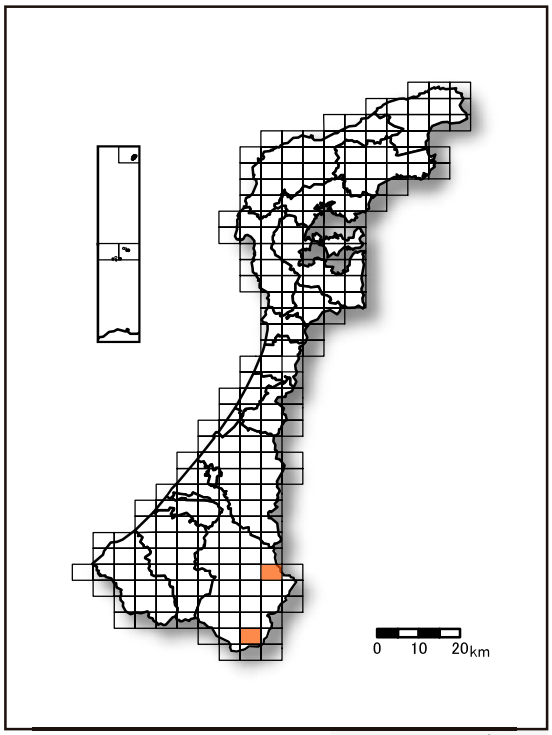
本来の生息場所は樹洞と考えられるが、家屋での生息が東北では多く確認されている。本来の生息場所の減少と考えられる。（A）

特記事項

県内で授乳中の個体が捕獲されたことより、白山地域で出産哺育を行っているものと考えられる。

参考文献

上馬康生・三原ゆかり 1995. 石川県内白山地域で捕獲されたヒナコウモリ，石川県白山自然保護センター研究報告. 22:17–18.
山本輝正・上馬康生・野崎英吉 2005. 石川県白山地域のコウモリ相調査ー1998年～2005年の調査結果よりー. 石川県白山自然保護センター研究報告. 32 : 25–30.



県内の分布

ウサギコウモリ

Plecotus auritus (Linnaeus)

コウモリ目ヒナコウモリ科

石川県カテゴリー　絶滅危惧Ⅱ類

国カテゴリー　なし

選定理由

全国的にも分布している県が少なく、本県においても生息の確認場所が少ない。

国内分布

日本では北海道、本州（中国地方を除く）、四国から知られているが、この25年には北海道、東北地方を除くと、尾瀬、富士山、北・南アルプス山麓、白山、紀伊半島、剣山、石鎚山で知られている。

県内分布

白山地域の周辺部などで、人工的な建築物を昼間と夜間のねぐらとして利用している個体が確認されており、白山地域では広範囲に生息していたものと考えられる。

生　　態

大木の多い地域では昼間の隠れ家として樹洞を集団で利用するが、洞穴や家屋もよく使う。初夏に1仔を出産する。

生息地の条件

自然がよく残っている森林を生息場所としている。

生存の危機

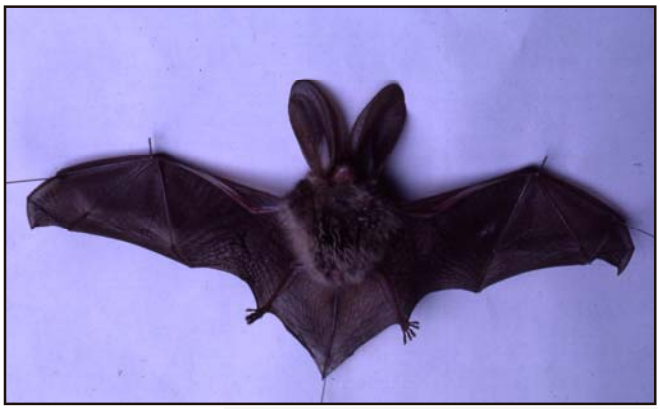
もともと大きなコロニーが確認されたことが無く、生息場所の減少が、減少に拍車をかけている。(A)

特記事項

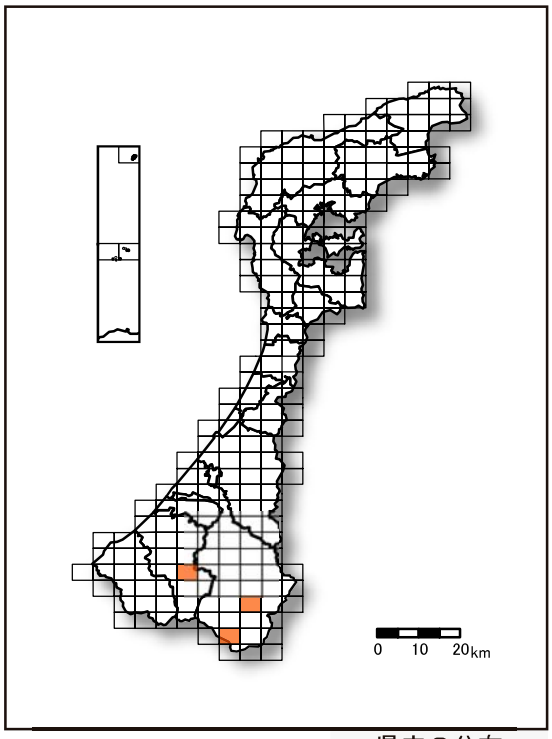
1990年以降石川県においては、生息の確認できた場所はない。

参考文献

佐野明・上馬康生 1981. 白山地域に生息する翼手類について. 石川県白山自然保護センター研究報告 . 7. 23-29.
山本輝正 1990. 石川県のコウモリ. 石川の生物, 石川の生物編集会（編）. 137-142. 石川県高等学校研究会生物部会.
山本輝正 1998. 3-1-2 哺乳類　コウモリ目. 環境庁委託　平成9年度　生態系多様性地域調査（白山）報告書.



写真提供者：石川県白山自然保護センター



県内の分布

テングコウモリ

Murina leucogaster Milne-Edwards

コウモリ目ヒナコウモリ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類
国カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類

選定理由　全国的にも分布している県が少なく、本県においても生息の確認場所が少ない。

国内分布　北海道、本州、四国、九州から知られる。

県内分布　白山周辺など4箇所で確認されている。

生　　態　大木の多い地域では樹洞を昼間の隠れ家にするが、洞穴内でもよく見つかる。しかし、単独でいることが多く、10頭を越える群れはほとんど見つかっていない。夜には隠れ家から出て、飛翔する昆虫類を捕食する。一般に森林内の下層で捕食するらしい。出産は初夏に行われる。

生息地の条件　自然林内に生息。

生存の危機　その分布などがよく分からないうちに、生息環境が開発されてしまっている。（A）

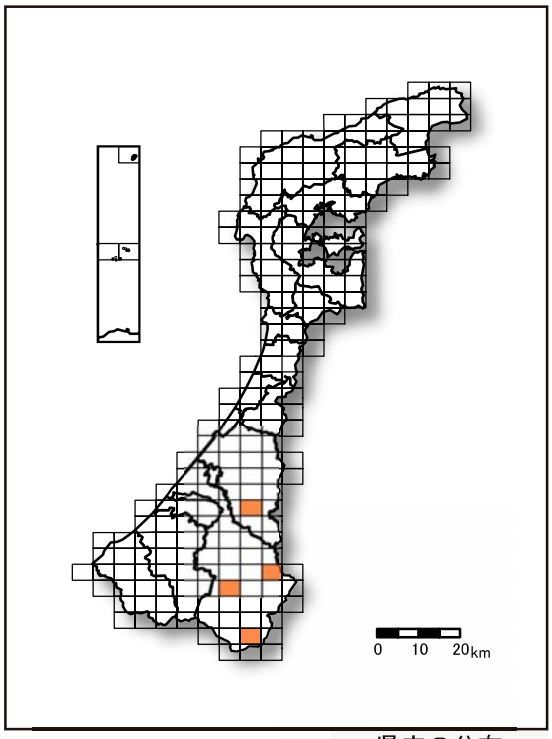
参考文献

佐野明・上馬康生 1981. 白山地域に生息する翼手類について. 石川県白山自然保護センター研究報告 . 7. 23-29.

山本輝正 1990. 石川県のコウモリ. 石川の生物, 石川の生物編集会（編）. 137-142. 石川県高等学校研究会生物部会.

山本輝正・野崎英吉 2002. 白山地域におけるコウモリ目相. 石川県白山自然保護センター研究報告, 29 : 73ー76.

山本輝正・上馬康生・野崎英吉 2005. 石川県白山地域のコウモリ相調査ー1998年～2005年の調査結果よりー. 石川県白山自然保護センター研究報告. 32 : 25-30.



県内の分布

コテングコウモリ

Murina ussuriensis Ognev

コウモリ目ヒナコウモリ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類
国カテゴリー	なし

選定理由

全国的にも分布している県が少なく、本県においても生息の確認場所が少ない。

国内分布

北海道、本州、四国、九州、対馬、壱岐から知られるが、生息確認は20道県からに満たない。

県内分布

白山周辺で2例確認されている。

生　　態

昼間の隠れ家は基本的には樹洞のようであるが、木の茂み、樹皮の間隙、落ち葉の下、洞穴内、家屋内でも見つかっている。夜間に樹間、葉間を飛翔する昆虫類を捕食するが、葉上に静止する昆虫類も捕食するらしい。1～2仔を初夏に出産する。

生息地の条件

原生林内に生息する。

生存の危機

分布などがよく分からないうちに、生息環境が開発されてしまっている。（A）

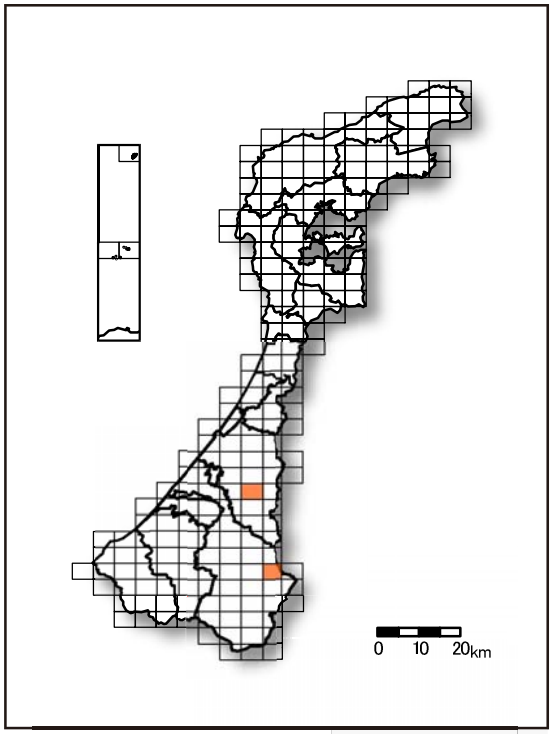
参考文献

佐野明・上馬康生 1981. 白山地域に生息する翼手類について. 石川県白山自然保護センター研究報告 . 7. 23-29.

山本輝正 1990. 石川県のコウモリ. 石川の生物, 石川の生物編集会（編）. 137-142. 石川県高等学校研究会生物部会.

山本輝正・野崎英吉 2002. 白山地域におけるコウモリ目相. 石川県白山自然保護センター研究報告. 29 : 73－76.

山本輝正・上馬康生・野崎英吉 2005. 石川県白山地域のコウモリ相調査－1998年～2005年の調査結果より－. 石川県白山自然保護センター研究報告. 32 : 25-30



県内の分布

ミズラモグラ

Euroscaptor mizura (Gunther)

モグラ目モグラ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	準絶滅危惧

選定理由

県内では、白山地域の山地帯から高山帯の限られた地域に分布する。日本固有種。

形　態

モグラ属（アズマモグラやコウベモグラ）とミズラモグラ属とでは口吻上面の裸出部が異なる。歯数はミズラモグラ属の44本に対してモグラ属は42本である（下顎切歯ミズラモグラ属3本、モグラ属2本）。体重26～35.5g、頭胴長80～106.5mm、尾長20～26mm、後足長13.5～15.4mmであるが（阿部ほか,1994）、白山の1個体の計測値は、体重26.8g、頭胴長86.6mm、尾長15.3mm、後足長14.1mmであった(白山万才谷♂1996.10.6採集、子安和弘氏計測)。

国内分布

国内では広島から東北まで分布しているが、孤立分布を示し、中部地方の山岳地帯に多い傾向がうかがえる（阿部ほか,1994）。

県内分布

本県ではこれまでは12件（旧白峰村で9件、旧吉野谷村で3件）の資料があり、4メッシュの分布を示していた(林・子安1998、林,1999)。このうち、3件2メッシュは旧吉野谷村中宮地区、9件2メッシュは亜高山帯から高山帯の資料であった。その後、白山清浄ヶ原（2005年9月21日標高約2,300m）で採集され、1メッシュの分布地が増え、県内では5メッシュの分布となった。

生　態

ミズラモグラは、モグラ亜科の中では「最初に大陸から日本へ入ってきた」原始的な種類と言われている(今泉,1987)。昆虫類、ミミズ類、ジムカデ類、ヒル類などを食べる。

生息地の条件

亜高山帯、高山帯等では土壌のみられる場所で生息する。

生存の危機

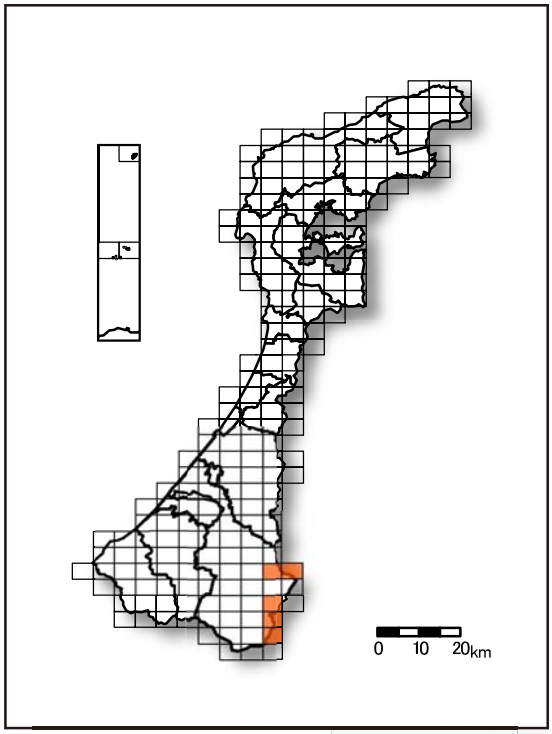
白山地域では、礫地や岩場が多く、地域個体群としては脆弱性が高いと思われる。（A）

特記事項

日本哺乳類学会(1997)では山岳地に分布すること、生息密度が低いことから希少種にしている。
環境省では本種を3亜種として準絶滅危惧種に指定している。

参考文献

林哲 1999. ミズラモグラ　石川県の哺乳類. 石川県.
林哲・子安和弘 1998. 白山地域のミズラモグラの分布. 石川県白山自然保護センター研究報告 25. 25-28.
今泉吉晴 1987. 空中モグラあらわる. 岩波新書.
日本哺乳類学会 1997. レッドデータ　日本の哺乳類. 文一総合出版.
阿部永・石井信夫・金子之史・前田喜四雄・三浦慎悟・米田政明 1994. 日本の哺乳類. 東海大学出版会.



県内の分布

オコジョ

Mustera erminea Linnaeus

ネコ目イタチ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	準絶滅危惧

選定理由

本州の高山帯・亜高山帯に生息し、生息環境の改変により個体数が少ない。

形　態

夏期には背面は褐色で腹面は白色。冬期には尾の先端部が黒いほか全身白色。成体では頭胴長140～198㎜、尾長48～67㎜、体重100ｇ。

国内分布

本州の石川県以東の高山帯・亜高山帯に分布する。

県内分布

夏期には白山の亜高山帯以上の地域、冬期には白山市尾添、白峰の山地帯（標高600m付近）の雪上で白化した個体が観察されている。

生　態

高山帯の岩れき地に生息する。ネズミ類、鳥類の卵雛などを捕食するほか、果実を食べる。地上に現れることは少なく、地下の空間を利用して移動している。

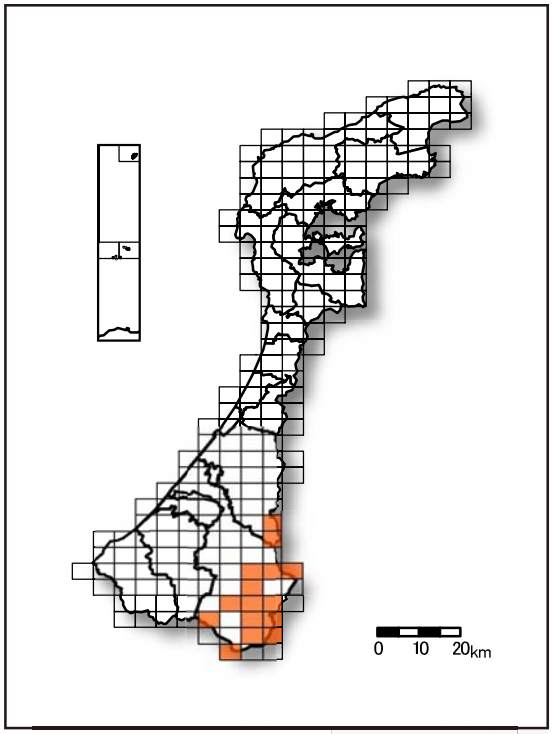
生息地の条件

夏には、亜高山帯から高山帯が主な生息地であるが、積雪期には山地帯まで移動していると考えられる。

参考文献

水野昭憲・八神徳彦 1985. 白山亜高山帯・高山帯の動物, 哺乳類. 白山高山帯自然誌調査報告書 107–111. 石川県白山自然保護センター.
水野昭憲 1994. 白山山系のオコジョの分布. 石川県白山自然保護センター研究報告第21集. 21–26.
野柴木　洋・上馬康生 1998. 2–2–3 哺乳類　白山におけるホンドオコジョの繁殖及び分布状況について　環境庁委託業務報告書平成9年度生態系多様性調査（白山）報告書. 79–89.

写真提供者：谷野喜代子



県内の分布

ヤマネ

Glirulus japonicus (Schinz)

ネズミ目ヤマネ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	準絶滅危惧

選定理由

本県における分布情報が少なく、加賀地域山間部に分布が限られる。日本固有種。

形　態

ネズミに似るが、背中には黒色の一本の線があるのが特徴。頭胴長68～84mm、尾長44～54mm、後足長16～17mm、体重14～20gぐらいだが、冬眠前に体重は増えると言われている。

国内分布

地中海沿岸からヨーロッパ、小アジアに分布するが、日本のヤマネ*Glirulus japonicus*は独立種。本州、四国、九州、隠岐島後に分布し、日本固有で一属一種。

県内分布

石川県の哺乳類(林 1999)では金沢市以北の白山地域で6メッシュの分布が認められていたが、その後、三原・野崎（2003）により5メッシュ増加した。また、1993年10月　白山市河内町旧奥池地域で目撃されていたことが判明し、合計12メッシュの分布地となった。白山市市原の標高230mで確認された場所以外はいずれも山地帯の600～1200mでの情報であった。

生　態

山地帯から亜高山帯の主に落葉広葉樹林にすむ。夜行性で主に樹上で生活し、樹洞や時に巣箱を利用して樹皮やコケを利用した丸い巣をつくる。果実や種子を主に採食するが、昆虫類もよく食べる。晩秋の10月から11月に気温が10℃以下になると樹洞のなかや山小屋、旅館のフトンのなかで冬眠することがある。主に春に繁殖し、産仔数は3～5頭である。

生息地の条件

落葉広葉樹の多い森林を選好しているようである。

生存の危機

特にないが、落葉広葉樹林の保護・保全が必要。（A）

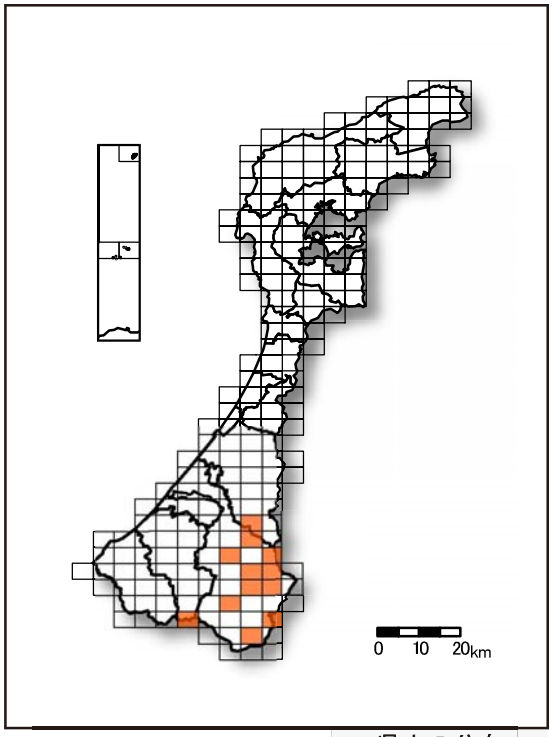
特記事項

文化財保護法による天然記念物。鳥獣保護法では非狩猟獣。哺乳類学会(1997)では危急種に指定。

参考文献

林哲 1999. ヤマネ　石川県の哺乳類. 石川県.
三原ゆかり・野崎英吉 2003. 石川県内におけるヤマネの生息状況. 石川県白山自然保護センター研究報告30. 31-35.

写真提供者：石川県白山自然保護センター



県内の分布

ホンドモモンガ

Pteromys momonga Temminck

ネズミ目リス科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由
加賀地域や白山地域の限られた地域に分布。日本固有種。

形　態
ムササビによく似るが、ずっと小さい。尾はやや短く、目が大きく皮膜は小さい。背面は灰褐色から茶褐色。頭胴長15～20cm、尾長9～14cm、体重約200g。乳頭が5対(乳頭式2＋2＋1=10)で、タイリクモモンガ（エゾモモンガ）の4対とは異なる。

国内分布
本州、四国、九州に分布。

県内分布
これまで旧6市町村で10件の情報が得られ7メッシュの分布が知られていたが（林.1999）、その後、2005年10月2日に白山市瀬波（キャンプ場、標高約340m）、2007年4月24日白山市中宮(集落近く、標高約400m)で確認された。その結果、8メッシュの分布となった。

生　態
本種は北方系で寒冷な地方に多く、温暖な地方にはすくない。山地の森林に棲む。ムササビのように滑空する。夜行性で堅果、果実、木の芽、昆虫などを食べる。スギ、ヒノキなどの樹洞に巣を作る。ときどき枝に樹皮や葉を集めて球形の巣を作ることもある。

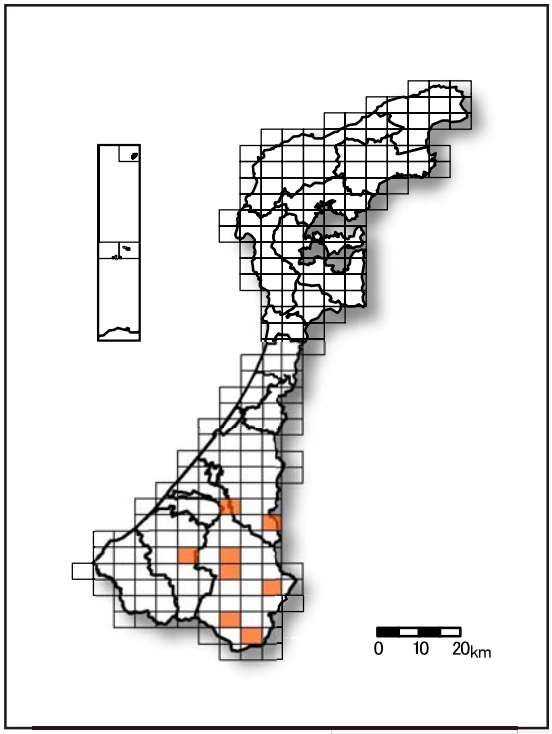
生息地の条件
低山帯から山地帯を主な生息地にしている。

生存の危機
情報量が少ないため、生息調査が必要である。（A）

特記事項
本種の生態に関する情報量が少なく、不明の点が多い。
日本哺乳類学会(1997)では、普通種。九州地域は保護すべき地域個体群に指定。

参考文献
林哲 1999. ホンドモモンガ　石川県の哺乳類.石川県.
日本哺乳類学会 1997. レッドデータ　日本の哺乳類.文一総合出版.

写真提供者:林哲



県内の分布

カヤネズミ

Micromys minutus (Pallas)

齧歯目ネズミ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由
河川、湖沼、水田周辺の不安定な草地にのみ生息し、生息環境の改変により個体数が少ない。

形　態
背面は暗褐色で覆面は白色。成体では頭胴長50～80㎜、尾長61～83㎜、後足長14～17㎜、体重7～14g。乳頭式2+0+2=8。

国内分布
本州の太平洋側では宮城県以南、日本海側では山形県以南、四国、九州、隠岐諸島、淡路島、豊島、因島、対馬、天草下島などに分布する。

県内分布
能美市（旧辰口町）、白山市（旧鶴来町）の手取川河川敷や、加賀市の鴨池、大聖寺川下流部、上野、金沢市の金腐川、大宮川、角間、小松市滝ヶ原、能美市徳山で採集されたり巣が確認されている。能登地方では宝達志水町、七尾市、輪島市、中能登町、珠洲市で聞き込みにより営巣の情報が得られたが本種のものと確認されていない。

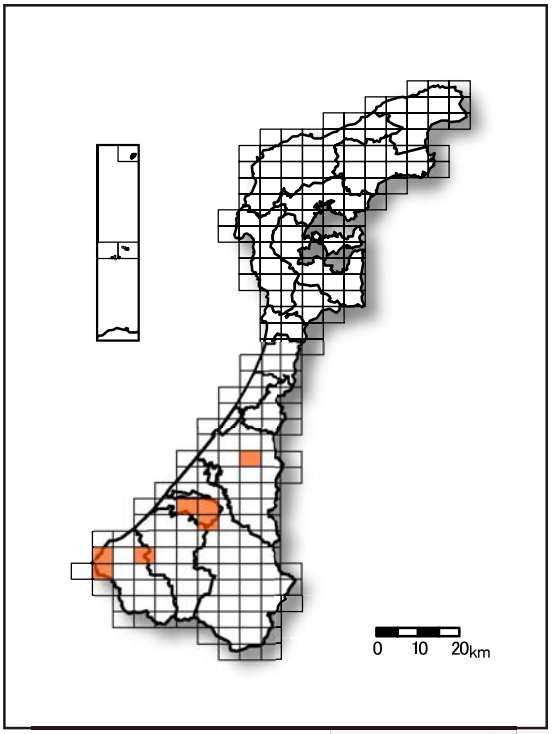
生　態
低地の河川敷、草地、水田、沼沢地などイネ科・カヤツリグサ科植物が密生する場所に生息する。アシ、ススキ、チガヤなどを用いて、地上70～110cmに球型の巣を作る。冬期には畦道の地表堆積物や地下の孔道にも生息する。

生息地の条件
イネ科・カヤツリグサ植物が密生する環境が維持され、春から秋にかけては刈り払いが行われず、営巣の妨げにならないことが必要。この時期の刈り払いでは、部分的な刈り残しがカヤネズミの避難場所となり有効である。冬期は、地上および地下で生活するため冠水しない場所が必要だが、春から秋にかけては他のネズミとの競合を避けるため一時的な冠水があったほうが良い。冬期の刈り払い火入れは、草地の維持のため実施した方が良いと思われる。

生存の危機
河川改修による自然草地の消滅や、河川管理による広い面積の草地の夏期一斉刈り払いは営巣地を破壊する可能性がある。生息地では部分的な刈り残しが望まれる。（A）

参考文献
澤邊久美子、畠佐知子、夏原由博 2005. 堤防植生の刈り取りがカヤネズミ*Micromys minutus*の営巣に与える影響. ランドスケープ研究vol68.5
阿部　永ほか 2005. 日本の哺乳類. 東海大学出版会. 神奈川.

写真（図）はありません。



県内の分布

カワネズミ

Chimarrogale Platycephala

モグラ目トガリネズミ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由

県内では、主に加賀地域や白山地域の河川源流域に分布する。日本固有種。

形　態

トガリネズミの仲間で、水辺に適した手足を持つ。指の剛毛と尾に生えた長い毛がある。門歯はカギ状に曲がっている。体重約25～63g、頭胴長111～141mm、尾長82～117mm、後足長23～29.4mm(阿部ほか.2005)。

国内分布

本州、九州に分布する。

県内分布

県内にはこれまで旧白峰村市ノ瀬、小松市上大杉の2件の標本と聞き取り調査を併せた分布は11メッシュであったが（林,1999)、その後、能美市（辰口）蟹淵（1998.11.12）、白山市（旧白峰村）大道谷（1999.7.10）、白山市（旧鳥越村）渡津　(2000.10.）の3件が確認され、2メッシュ加わり、県内分布は13メッシュとなった。

生　態

山間の渓流にすみ、水生昆虫や魚類を食べる。河畔の土中や石の下に巣をつくる。春と秋に2回繁殖し、1～6頭の仔を生む

生息地の条件

主に加賀地域の河川流域。加賀地域の河川源流域や支流域ではもっと生息している可能性がある。

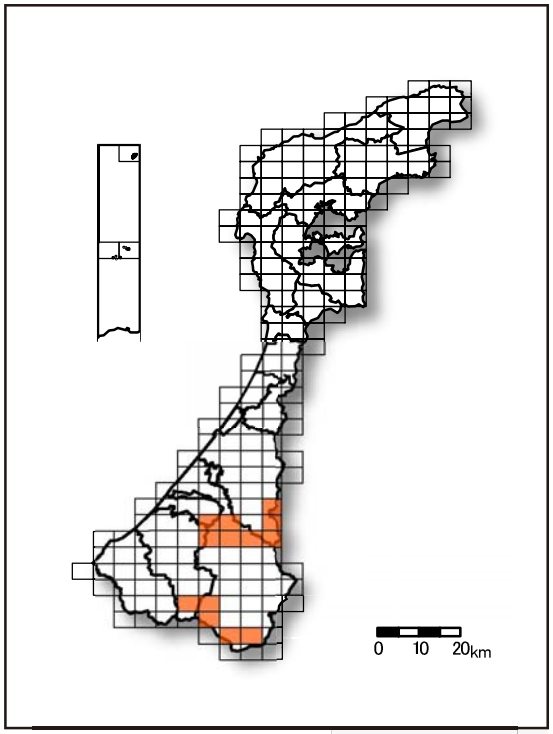
生存の危機

堰堤やダムの造成によって本種の生息環境は劣悪になっているので、特に河川上流域の開発行為には留意を要する。 (A)

参考文献

阿部永・石井信夫・金子之史・前田喜四雄・三浦慎悟・米田政明 2005. 日本の哺乳類. 東海大学.
林哲 1999. カワネズミ　石川県の哺乳類. 石川県出版会.

写真提供者:林哲



県内の分布

シントウトガリネズミ

Sorex shintou

モグラ目トガリネズミ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由

県内では、白山地域の山地帯から高山帯を中心とする限られた地域に分布する。日本固有種。

形　態

トガリネズミ類では中型で尾が長い。夏毛の背面は赤褐色、腹面は薄茶色。体重3.9～13.5g、頭胴長52～78mm、尾長40～55mm、後足長11.4～13.5mm(阿部ほか 1994)。アズミトガリネズミよりやや大きいが外形は酷似。後足長は白山地域では12mm以上の個体が多かった（採集された10頭平均で12.3mm。子安 1995、子安･林 1997)。頭骨全長ではアズミトガリネズミより顕著に小さい（16.5mm以下）（阿部ほか 2005）。

国内分布

佐渡島および本州の紀伊半島、京都府以北および四国の山地に分布する。

県内分布

県内では山地帯から高山帯にまで分布する（花井 1978、子安･林 1997、水野･八神 1985、信太 1983）。このうち、白山市一里野(尾添)で採集された個体が本種の低標高地域（標高約540m）の分布地である。これまでの資料から県内では5メッシュの分布を示している（林 1999）。

生　態

森林や低木林などの落葉層や腐食層にすみ、昆虫やクモ類、ジムカデ類を食べる。春に2～6頭の仔を産む(阿部ほか 2005)。

生息地の条件

主に白山地域の山地帯～高山帯。

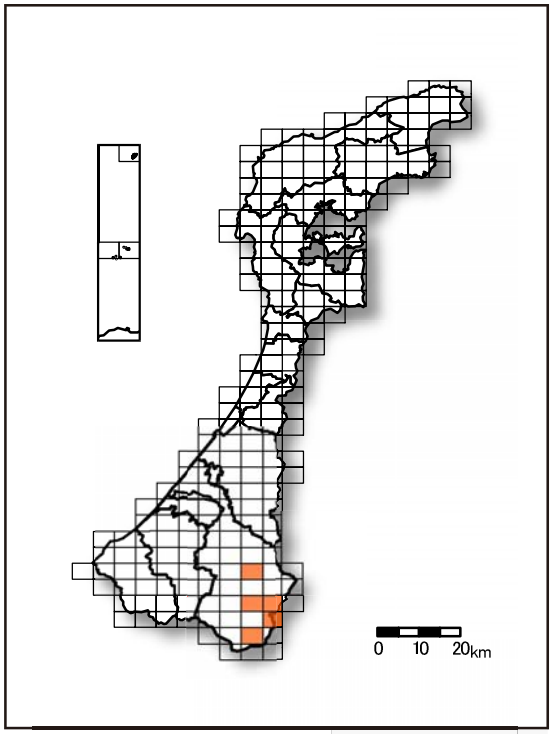
生存の危機

白山地域の山地帯～高山帯の保全が継続的に必要。 (A)

参考文献

子安和弘 1995. 白山のトガリネズミ類. はくさん22. 2-5. 石川県白山自然保護センター
子安和弘･林哲 1997. 白山高山帯における野生小哺乳類. 石川県白山自然保護センター研究報告 24. 23-32.
花井正光 1978. 白山高山帯の哺乳類相. 石川県白山自然保護センター研究報告. 4:83-92.
信太照夫 1983. 白山北稜の小哺乳類. 石川県白山自然保護センター研究報告. 9:57-65.
水野昭憲･八神徳彦 1985. ほ乳類（白山高山帯自然史調査報告書, 107-111）. 石川県白山自然保護センター.

写真提供者：林哲



県内の分布

ヒメヒミズ

Dymecodon pilirostris

モグラ目モグラ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由

県内では、白山地域の山地帯から高山帯を中心とする限られた地域に分布する。日本固有種。

形　態

外形はモグラとトガリネズミの中間ぐらいの小型のモグラ類。吻は非常に細長く、耳介を欠く。手の巾が長さより小さく、爪は扁平で真直ぐ。上顎の門歯は大きく、先端がへら状。下顎歯数は片側9本（うち前臼歯4本）（ヒミズは下顎歯数8本でうち前臼歯3本）。背面が黒色または黒褐色、腹面は淡色。体重約8～14.5g、頭胴長70～84mm、尾長32～44mm、後足長12.8～15.2mm(阿部ほか　1994)。

国内分布

本州、四国、九州に分布する。

県内分布

県内では金沢市、白山市（旧吉野谷村、尾口村、白峰村）で49件78頭の資料が得られ、13メッシュに分布している（林・子安､2000）。白山地域の高標高地では白山四塚山(2450m)やトンビ岩周辺(2400m)など、低標高地では金沢市二又地域（標高400m）や白山市（旧尾口村）釜谷（標高500m）が知られている。富士山、磐梯山、丹沢山など国内のヒメヒミズの分布の下限域はおおむね標高約1,000mと言われているので（今泉､1973、木村､1984、小林･山口1971）、白山地域の低標高地の分布は全国的には希少と思われる。

生　態

比較的標高の高い地域の草地、低木林、高木林の落葉層や腐食層にすみ、主に昆虫類やミミズ類を食べている。近接地にヒミズが生息している場合、本種は土壌の浅い場所や岩礫地に住んでいることが多い（阿部ほか､1994）。

生息地の条件

主に白山地域の山地帯～高山帯。

生存の危機

白山地域の山地帯、亜高山帯、高山帯の保全が継続的に必要。（A）

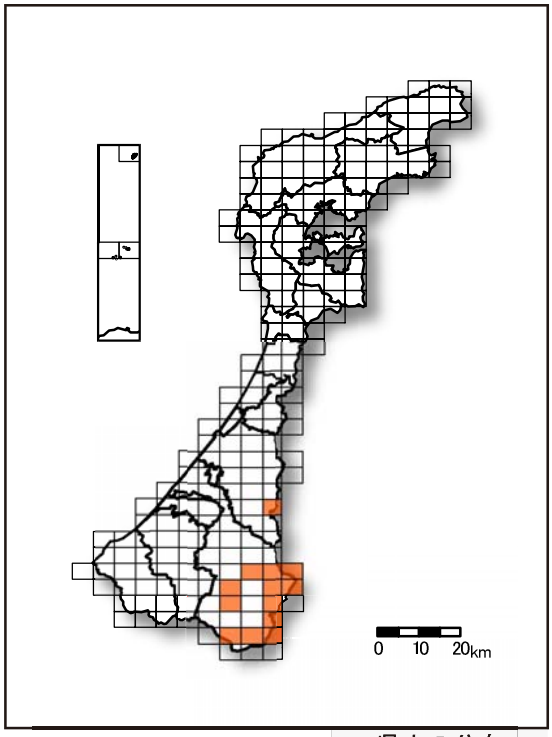
特記事項

日本哺乳類学会(1997)では普通種として記載。四国、九州、紀伊半島は保護すべき地域個体群としている。

参考文献

林哲･子安和弘 2000. 石川県におけるヒミズ類の分布. 石川県白山自然保護センター研究報告. 27:29-36.
今泉吉晴 1973. 富士山麓・青木ヶ原の地下生活者 アニマ9.4-20.平凡社.
木村吉幸 1984. 磐梯山地域における食虫類とネズミ類の群集密度について.哺乳動物学雑誌. 10(2).87-97.
小林峯生・山口佳久 1971. 丹沢山塊におけるヒメヒミズの分布と小哺乳類相について.神奈川県立博物館調査研究旧報告.自然科学.4.1-23.

写真提供者：子安和弘



県内の分布

2．鳥　　類

1　石川県の鳥類相

石川県は日本のほぼ中央に位置し、日本海に突き出した能登半島と長い海岸線、白山の高山帯、平野部の河川湖沼など多様な環境を有している。そのため、県内ではそれら環境に生息する様々な鳥類が観察、記録されている。また能登半島沖に位置する舳倉島は大陸間を移動する渡り鳥の中継地となっており、国内では稀にしか観察されない大陸系の種が数多く記録されている。1987年から2007年までの20年の間、毎年約300種以上が記録され、これまで本県で記録された鳥種は430種（絶滅種2種と日本鳥類目録未掲載種18種を含む）にのぼり、年間記録種数、確認総種数共に全国でも有数の県の１つとなっている。

県内で記録された種（絶滅種を除く）を生活史によって分類すると、その構成は留鳥66種（15%）、夏鳥56種（13%）、冬鳥95種（23%）、旅鳥94種（22%）、迷鳥93種（27%）となる。外洋に面して長い海岸線がある県では、概して渡り鳥や海洋性の種などの記録が多くなるが、本県の記録もこの傾向と一致している。また冬鳥の比率が高いのは大陸から越冬のために飛来する種が多いこと、旅鳥、迷鳥の比率が高いのは前述の舳倉島などで記録される渡り鳥の種が多いことに起因している。

このように、冬鳥や旅鳥、迷鳥を含む渡り鳥に該当する種（特に大陸系の種を含む小鳥類）が記録種の多くを占めていることが、石川県の鳥類相を最も特徴づける点であると考えられる。

2　種の選定基準

(1) 第一次選定について

本県での記録種430種のうち、原則として過去10年間で5回以上観察記録のある種を中心に第一次選定を行い、県版RDB選定の対象として307種を選出した。これらは、県内で定期的に繁殖、越冬、通過する種であり、不定期に渡来するいわゆる迷鳥（県内での位置付け）は国のRDB指定種であっても選定対象から除外した。ただし、国のRDB指定種で4回以上の記録のある種は、その重要性を考慮し選定対象とした。また観察の機会の少ない海洋性や夜行性の種、また著しく隠蔽性が高く観察が困難な種でも、定期的な生息が予測される種については2回以下の記録でも選定対象とした。なお、野外の観察では亜種の同定は困難である場合が多いため、選定は種のレベルにとどめた。

(2) 第二次選定について

選定対象とした307種について、下記の基準で第二次選定を行ない、66種に絞り込むとともに、過去に生息していた記録があるが、現在、生息が確認されていない2種を加え、RDB選定種を68種とした。前回の「いしかわレッドデータブック〈動物編〉2000」の選定種61種より7種増えたことになる。ちなみに新たに選定された種は9種、除外された種は2種だった。

（選定基準）

a.国のRDB指定種であるもの。

b.過去20年間（情報不足のものは10年間）で生息数または、観察例が著しく減少しているもの、及びその記録の傾向から今後減少が予測されるもの。

c.過去20年間（情報不足のものは10年間）で生息地が著しく減少したもの、及びその記録の傾向から今後減少が予測されるもの。

d.生物地理学的にみて重要な個体群、及び県内で局地的な分布をする個体群及びその生息地。

e.生物地理学的にみて希少種と予測されるが観察例等が少なく判定するだけの情報がないもの。

3　鳥類選定種とその概要

選定された68種を、それぞれのカテゴリーに評価分類した。評価分類にあたっては種の繁殖（域）、越冬（域）、休息中継（域）の状況を評価の基本とし、国レベル、世界レベルの生息状況も考慮して検討した。その結果、「絶滅」2種、「絶滅危惧Ⅰ類」16種、「絶滅危惧Ⅱ類」17種、「準絶滅危惧」25種、「情報不足」5種、「地域個体群」3種となった（表1）。

表1　鳥類選定種一覧

絶滅　　2種 トキ、ライチョウ
絶滅危惧Ⅰ類　　16種 ヒメクロウミツバメ、サンカノゴイ、ヨシゴイ、ミゾゴイ、クロツラヘラサギ、コクガン、クマタカ、イヌワシ、チュウヒ、ヒクイナ、ヘラシギ、コアジサシ、カンムリウミスズメ、イワヒバリ、チゴモズ、アカモズ
絶滅危惧Ⅱ類　　17種 マガン、カリガネ、ヒシクイ、トモエガモ、オジロワシ、サシバ、オオタカ、ハヤブサ、イカルチドリ、シロチドリ、タマシギ、ホウロクシギ、アオバズク、ヨタカ、アカショウビン、ブッポウソウ、コジュリン
準絶滅危惧種　　25種 カンムリカイツブリ、ササゴイ、チュウサギ、クロサギ、オシドリ、ヨシガモ、シノリガモ、ホオジロガモ、ビロードキンクロ、ウミアイサ、カワアイサ、ミサゴ、ハチクマ、ハイタカ、ノスリ、ヤマドリ、イソシギ、ヤマシギ、ウミスズメ、コノハズク、サンショウクイ、サンコウチョウ、コシアカツバメ、セッカ、ノジコ
情報不足　　5種 オオジシギ、マダラウミスズメ、オオコノハズク、ハリオアマツバメ、キバシリ
地域個体群　　3種 七ツ島のオオミズナギドリ繁殖個体群、七ツ島のウミウ繁殖個体群、ミユビシギ越冬群

「絶滅」は前回と変わらずトキ、ライチョウの2種だった。

「絶滅危惧Ⅰ類」は16種、前回より3種増加した。このうちヒメクロウミツバメは前回の選定以降も新たな生息情報はなく、ほぼ絶滅状態であると考えられる。ただし調査漏れも考えられるため、前回に引き続き「絶滅」に判定しなかった。今回新たに選定されたのはミゾゴイ、クロツラヘラサギとヘラシギ、アカモズの4種である。クロツラヘラサギとヘラシギは国際的な希少鳥類であり、県内の渡来数もごく少ない。今回はこれらを考慮してランク付けを行った。またアカモズは最近の減少が著しいことから、前回の準絶滅危惧種からランクアップした。

「絶滅危惧Ⅱ類」は17種、前回より1種減少し入れ替わりがあった。新たに選定されたカリガネは、近年、加賀市の片野鴨池で定期的な渡来するようになり、全国的にも渡来数の少ない国RDB種でもあることから選定された。同じくコジュリンは国RDB種であり、新たに河北潟干拓地で繁殖が確認されたため選定された。

「準絶滅危惧」は25種、前回より2種増加した他、いくつか入れ替わりがあった。新たに選定されたのは県内何箇所かで繁殖が確認されたカンムリカイツブリ、ノスリ。近年、観察例が少なく減少が予想されるビロードキンクロ、コシアカツバメ、ヤマドリなどである。また、ウミアイサ、サンショウクイ、サンコウチョウ、セッカなど、前回「絶滅危惧Ⅱ類」にランクされていたいくつかの種類のランクを下げた。これらは新しく得られた生息情報に加えて、国レベルの生息分布域を考慮してより客観的に判断した結果である。

「情報不足」は3種増えて5種。客観的に判断しうる情報の少ないものをこれにあてた。このうちオオジシギ、ハリオアマツバメは新たな繁殖の可能性に関しての選定となった。マダラウミスズメについては、もともと観察例がごく少なく、温暖化による越冬域の北上なのか、生息を脅かす要因があったのか、判断しうる情報がなかったためである。

「地域個体群」としては3種。前回と同じく、オオミズナギドリ及びウミウは七ツ島の繁殖個体群を、ミユビシギはかほく市から能美市海岸にかけての越冬個体群を選定している。

この他、オオハクチョウとコチドリの2種を石川県RDBリストから除外した。オオハクチョウは県内では少ないものの、東日本では個体数も多く普通種であること、コチドリはその後の情報収集で県内では生息地、個体数とも安定しており、絶滅の恐れはないと判断されたものである（以上表2参照）。

なお種の解説については、種の配列及び学名、和名は「日本鳥類目録第6版」（日本鳥学会 2000）に従い、原則的に亜種名は省略したが、亜種表示が必要な場合は種小名の後につけ、和名表示もつけた。

表2　「いしかわレッドデータブック〈動物編〉2000」からランクが変更された種

種　　名	旧ランク→新ランク	種　　名	旧ランク→新ランク
ミゾゴイ	Ⅱ類 → Ⅰ類	ノスリ	不足 → 準
クロツラヘラサギ	Ⅱ類 → Ⅰ類	ヤマドリ	なし → 準
ヘラシギ	なし → Ⅰ類	コシアカツバメ	なし → 準
アカモズ	準 → Ⅰ類	セッカ	Ⅱ類 → 準
カリガネ	なし → Ⅱ類		
トモエガモ	準 → Ⅱ類	マダラウミスズメ	なし → 不足
オオタカ	Ⅰ類 → Ⅱ類	オオコノハズク	準 → 不足
シロチドリ	準 → Ⅱ類	ハリオアマツバメ	なし → 不足
コジュリン	なし → Ⅱ類	キバシリ	Ⅱ類 → 不足
カンムリカイツブリ	なし → 準		
ビロードキンクロ	なし → 準	オオハクチョウ	準 → 除外
ウミアイサ	Ⅱ類 → 準	コチドリ	Ⅱ類 → 除外

4　いしかわレッドデータブックに選定されなかった環境庁のレッドリスト選定種

国のRDB指定種であって県のRDB種に選定されなかったものが下記のとおり38種ある（表3）。これはコアホウドリやシロハラミズナギドリなどの迷鳥で（備考欄に迷鳥と表示）県内への渡来が不定期なため選定対象種から除外したもの。ヒメウやアカアシシギなどのように国の指定が「繁殖（域）」を基準に指定しているもので、県内での繁殖がないため（備考欄に繁殖無と表示）選定しなかったもの。ある程度の渡来は見られるものの定期的な渡来は見られず、時期、期間等が不安定なため（備考欄に迷鳥的と表示）選定しなかったものがある。例えばカラシラサギは、1986年に旧田鶴浜町（現七尾市）のサギコロニーで営巣が見られたが、繁殖は成功しなかった。その後も輪島市舳倉島ではよく見られ、今後、繁殖の可能性も期待されるが、今回は定期的な繁殖、通過ではないと判断した。

これらの種類は現時点では選定基準に当てはまらず選定されなかったが、前回この表にあげられていたヘラシギやコジュリンが今回のRDBに選定されたように、鳥類の生息状況は変化していくものなので、今後も動向に注意を払うべき種類である。

表3　いしかわレッドデータブックに選定されなかった環境省のレッドリスト選定種

種　　名	学　　名	国の区分	備　　考
コアホウドリ	*Diomedea immutabilis*	EN	迷鳥
シロハラミズナギドリ	*Pterodroma hypoleuca*	DD	迷鳥
クロコシジロウミツバメ	*Oceanodroma castro*	CR	迷鳥
クロウミツバメ	*Oceanodroma matsudairae*	EN	迷鳥
ヒメウ	*Phalacrocorax pelagicus*	EN	繁殖無
チシマウガラス	*Phalacrocorax urile*	CR	迷鳥
オオヨシゴイ	*Ixobrychus eurhythmus*	EN	迷鳥的
カラシラサギ	*Egretta eulophotes*	NT	迷鳥的
コウノトリ	*Ciconia boyciana*	CR	迷鳥
ヘラサギ	*Platalea leucorodia*	DD	迷鳥
クロトキ	*hreskiornis melanoce phalus*	DD	迷鳥
シジュウカラガン	*Branta canadensis*	CR	迷鳥
ハクガン	*Anser caerulescens*	DD	迷鳥的
サカツラガン	*Anser cygnoides*	DD	迷鳥
アカツクシガモ	*Tadorna ferruginea*	DD	迷鳥的
ツクシガモ	*Tadorna tadorna*	EN	迷鳥的
アカハジロ	*Aythya baeri*	DD	迷鳥
コウライアイサ	*Mergus squamatus*	DD	迷鳥
オオワシ	*Haliaeetus pelagicus*	VU	迷鳥的
ウズラ	*Coturnix japonica*	NT	野生種は迷鳥的
クロヅル	*Grus grus*	DD	迷鳥
タンチョウ	*Grus japonensis*	VU	迷鳥
ナベヅル	*Grus monacha*	VU	迷鳥
マナヅル	*Grus vipio*	VU	迷鳥
チシマシギ	*Calidris ptilocnemis*	DD	迷鳥
アカアシシギ	*Tringa totanus*	VU	繁殖無
カラフトアオアシシギ	*Tringa guttifer*	CR	迷鳥
コシャクシギ	*Numenius minutus*	EN	迷鳥
セイタカシギ	*Himantopus himantopus*	VU	繁殖無
ツバメチドリ	*Himantopus himantopus*	VU	迷鳥的
ズグロカモメ	*Larus saundersi*	VU	迷鳥
オオアジサシ	*Thalasseus bergii*	VU	迷鳥
ウミガラス	*Uria aalge*	CR	迷鳥
ケイマフリ	*Cepphus carbo*	VU	迷鳥
エトピリカ	*Lunda cirrhata*	CR	迷鳥
カラスバト	*Columba janthina*	NT	迷鳥的
ヤイロチョウ	*Pitta brachyura*	EN	迷鳥
シマアオジ	*Emberiza aureola*	CR	繁殖無

謝辞

本章をまとめるにあたって、文章や写真提供、情報提供、選定のための意見交換などについて、多くの方々のご協力をいただいたことに対し、感謝を申し上げます。

（竹田　伸一）

新旧対応表

		前回						
		絶滅 2	絶滅危惧Ⅰ類 13	絶滅危惧Ⅱ類 18	準絶滅危惧 23	情報不足 2	地域個体群 3	カテゴリー外 9
今回	絶滅 2	トキ ライチョウ						
	絶滅危惧Ⅰ類 16		ヒメクロウミツバメ サンカノゴイ ヨシゴイ コクガン クマタカ イヌワシ チュウヒ ヒクイナ コアジサシ カンムリウミスズメ イワヒバリ チゴモズ	ミゾゴイ クロツラヘラサギ	アカモズ			ヘラシギ
	絶滅危惧Ⅱ類 17		オオタカ	マガン ヒシクイ オジロワシ サシバ ハヤブサ イカルチドリ タマシギ ホウロクシギ アオバズク ヨタカ アカショウビン ブッポウソウ	トモエガモ シロチドリ			カリガネ コジュリン
	準絶滅危惧 25			ウミアイサ セッカ	ササゴイ チュウサギ クロサギ オシドリ ヨシガモ シノリガモ ホオジロガモ カワアイサ ミサゴ ハチクマ ハイタカ イソシギ ヤマシギ ウミスズメ コノハズク サンショウクイ サンコウチョウ ノジコ	ノスリ		カンムリカイツブリ ビロードキンクロ ヤマドリ コシアカツバメ
	情報不足 5			キバシリ	オオコノハズク	オオジシギ		マダラウミスズメ ハリオアマツバメ
68	地域個体群 3						オオミズナギドリ ウミウ ミユビシギ	
	カテゴリー外 2			コチドリ	オオハクチョウ			

トキ

Nipponia nippon (Temminck)

コウノトリ目トキ科

石川県カテゴリー	絶滅
国カテゴリー	野生絶滅

選定理由　1970年1月8日、穴水町で最後の1羽が人工増殖のため捕獲され、県内では絶滅となった。

形　　態　全長約77cm。大型の水鳥で、雌雄同色。全身は白っぽいが翼や尾羽は淡いピンク色。顔と足は赤い。嘴は湾曲し、黒く長い。後頭部は冠羽状となる。

国内分布　明治以前は全国に留鳥として普通だったが、明治期に激減し、1981年佐渡に残った最後の5羽が人工繁殖のため捕獲され、野生絶滅となった。

県内分布　1950年代まで輪島市洲衛や穴水町七海付近の山林でごく少数が繁殖していたが、徐々に数を減らし、1961年が最後の繁殖成功となった。季節的な移動が見られ、初夏から夏には眉丈山付近に移動し、秋から春にかけては輪島市、穴水町へもどる群が見られた。また積雪の多い時には餌場を求めて穴水湾沿岸に姿をあらわしていたようである。

生　　態　泥や水の中の小動物を食べたが、草地や田畑でわら束をひっくり返して昆虫類を食べることもあった。大木の樹上を塒にしていた。樹上に枝を組んで営巣。繁殖期以外は群を作ることが多かった。

生息地の条件　周囲に餌場となる湿地を持つ丘陵地。

生存の危機　銃猟による捕獲、生息地の開発、餌の農薬汚染。（A）

特記事項　国際保護鳥、国内希少野生動植物種、国指定特別天然記念物。

写真提供者：石川県立歴史博物館

分布図はありません。

県内の分布

ライチョウ

Lagopus mutus (Montin)

キジ目ライチョウ科

石川県カテゴリー	絶滅
国カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類

選定理由
1936年以降の確実な記録はなく、1938年以降信頼できる目撃例もない。1940年代を境に絶滅したと考えられている。

形　態
全長約37㎝。雄は夏羽では頭から首、背にかけて黒褐色で他は白色、目の上には赤い肉冠ができる。雌では黒褐色に黄色の斑が細かく混じる。冬羽では雌雄共に全身ほぼ白色となる。

国内分布
主な生息地は北アルプス、中央アルプス、南アルプス、妙高山塊など。駒ヶ岳、八ヶ岳、蓼科山などでは絶滅したと考えられている。

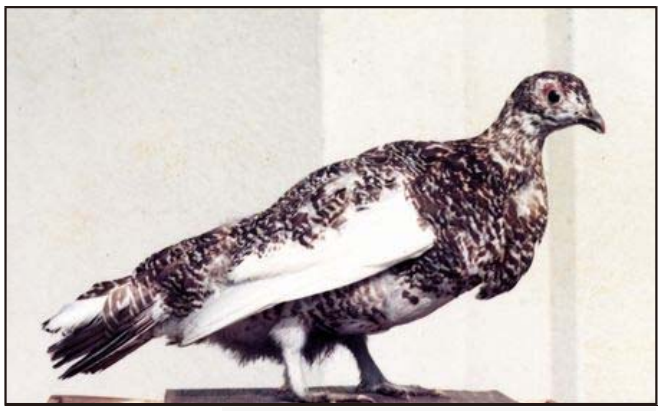
県内分布
白山の高山帯に分布していたが絶滅。

生　態
高山のハイマツ群落に繁殖する。ハイマツの根元などに営巣し、1腹5～6卵を生む。繁殖期は5月中旬から7月上旬。主に植物質を食べ、若芽、果実、若根、種子などの他、昆虫類も食べる。

生息地の条件
おおむね標高2400m以上の高山帯で、ハイマツ群落があること。

生存の危機
登山者、観光客の増加によって起こる高山帯の環境汚染（ゴミ、糞尿）の結果、病気、寄生虫、天敵などの増加、また登山道の開発によるハイマツ群落の分断、生息地の減少。（A, C）

特記事項
国内希少野生動植物種、国指定特別天然記念物。



写真提供者：石川県立自然史資料館

分布図はありません。

県内の分布

ヒメクロウミツバメ

Oceanodroma monorhis (Swinhoe)

ミズナギドリ目ウミツバメ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類
国カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類

選定理由
県内でただ1箇所、輪島市の七ツ島大島で繁殖していたが、1979年7月以来確実な記録はなく、目撃例も1982年5月を最後に途絶えている。以後1983年、1991年、1998年、2008年の上陸調査でも生息は確認できず、絶滅が心配されている。

形　態
全長約17～20cm。翼開長35～40cm。全身くすんだ黒褐色。

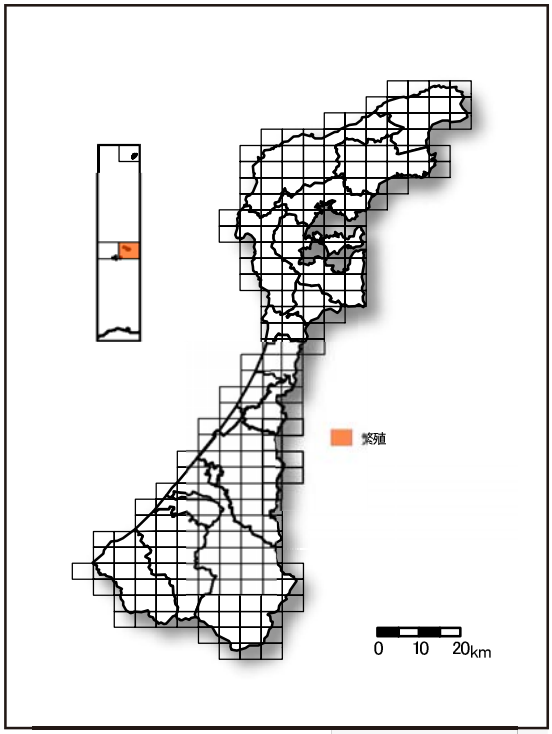
国内分布
日本近海の離島で繁殖。冬は南シナ海からインド洋に渡り越冬する。主な繁殖地は青森県尻屋岬、岩手県陸中海岸、京都府沓島、島根県隠岐、福岡県沖ノ島、伊豆諸島八丈小島など。

県内分布
石川県では夏鳥。輪島市沖の七ツ島大島で繁殖し周辺海域に生息していた。

生　態
沖合にすむ海鳥。繁殖期は5～9月、地面に巣穴を掘り1卵を生む。集団繁殖し、数十から数千羽のコロニーが知られている。雌雄交代で抱卵し、つがいの一方は日中、海上ですごし夜間巣にもどる。

生息地の条件
捕食者となるヘビ、ネズミなどのいない離島。

生存の危機
繁殖地へのネズミなどの侵入が考えられるが、詳細はよくわかっていない。（C）



県内の分布

サンカノゴイ

Botaurus stellaris (Linnaeus)

コウノトリ目サギ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類
国カテゴリー	絶滅危惧ⅠB類

選定理由　個体数が少なく、越冬地である広いヨシ原が減少している。

形　態　全長約70㎝。雌雄同色。全身淡黄褐色と暗褐色のまだら模様。上面は黄褐色の地に暗褐色の縦斑とこまかい虫食い状斑があり、下面は黄褐色に暗褐色の縦斑がある。頭頂および顎線が暗褐色。嘴は黄緑色で嘴峰は暗褐色。足は淡緑色。虹彩は黄色または橙黄色。

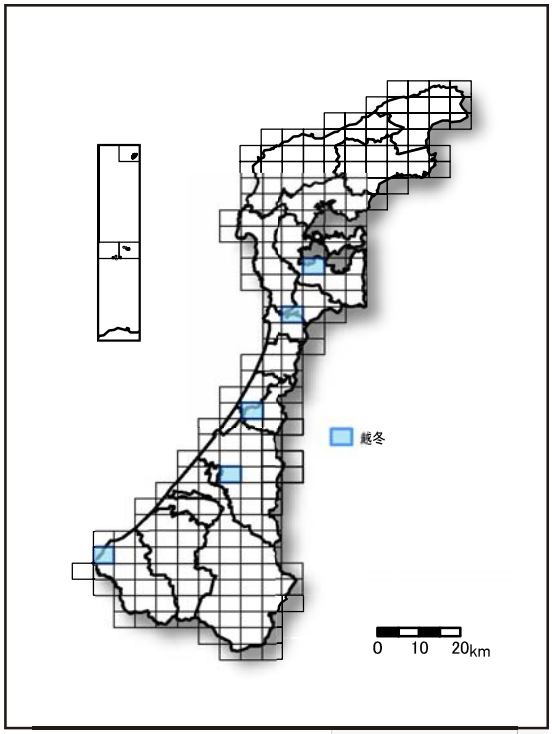
国内分布　北海道では夏鳥または留鳥。本州以南では留鳥または冬鳥。

県内分布　冬鳥として大きなヨシ原に渡来する。河北潟では毎年のように記録があるが、数羽である。他には片野鴨池、邑知潟などで記録がある。

生　態　低地の水辺のヨシ原など、広大な湿性草原にすむ。淡黄色に黒と暗褐色の細かい模様が全身にあり、その色彩は枯れたヨシによく溶け込む。密な植生に隠れ、基本的に単独で生活しているので観察が難しい。魚類、両生類、昆虫を主に食べ、小鳥、小動物、甲殻類なども食べる。

生息地の条件　外敵が近づけないような広いヨシ原を必要とする。

生存の危機　越冬地であるヨシ原の開発、減少。釣り人の影響も大きい。（A）



県内の分布

ヨシゴイ

Ixobrychus sinensis (Gmelin)

コウノトリ目サギ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類
国カテゴリー	準絶滅危惧

選定理由

生息地であるヨシ原が減少し、個体数の減少が著しい。

形　態

全長約37cm。全身淡褐色の小型のサギ。雄成鳥では頭頂がスレート色で、前頸には淡黄褐色の縦斑があるが不明瞭。翼上面には淡褐色の雨覆と黒色の風切のコントラストが著しい。雌成鳥は頭頂のスレート色の範囲が雄に比べて狭く、背の羽縁が淡色の縦斑をなし、前頸に明瞭な褐色の縦斑が5本程度ある。雌雄とも虹彩は黄色。眼先の裸出部から嘴は黄色。足は黄色。

国内分布

夏鳥として全国に渡来する。北海道では少ない。西南日本では越冬例がある。

県内分布

夏鳥として渡来し、河北潟などのヨシ原で繁殖している。

生　態

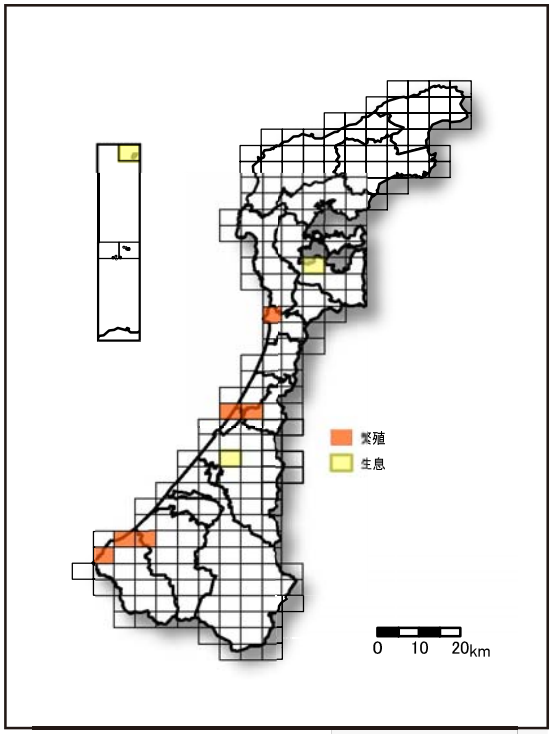
ヨシ原、水田などに身を潜め、魚、カエル、エビ、ザリガニ、昆虫、クモなどを捕食する。敵が近づくとこれに正対し、嘴を天にむけ、頸を上に伸ばして静止する動作を見せる。5～6月頃、ヨシ原やメダケなどの藪に営巣する。

生息地の条件

外敵が近づけないようなある程度広いヨシ原を必要とする。

生存の危機

生息地であるヨシ原の減少。また、釣り人などの影響も大きい。しかしそれほど環境が悪化していない場所でも減少しており、国外の越冬地での環境悪化、乱獲などが懸念されている。（A, D）



県内の分布

ミゾゴイ

Gorsachius goisagi (Temminck)

コウノトリ目サギ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類
国カテゴリー	絶滅危惧ⅠB類

選定理由
近年、全国的に個体数の減少と生息環境の破壊が叫ばれている。

形　態
全長約49cm。雌雄同色。全体が栗色で、頭頂は濃い栗色。背中は暗栗褐色。体の下面はバフ色で中央部に栗色の縦縞があり、喉にも細く黒い縦線がある。

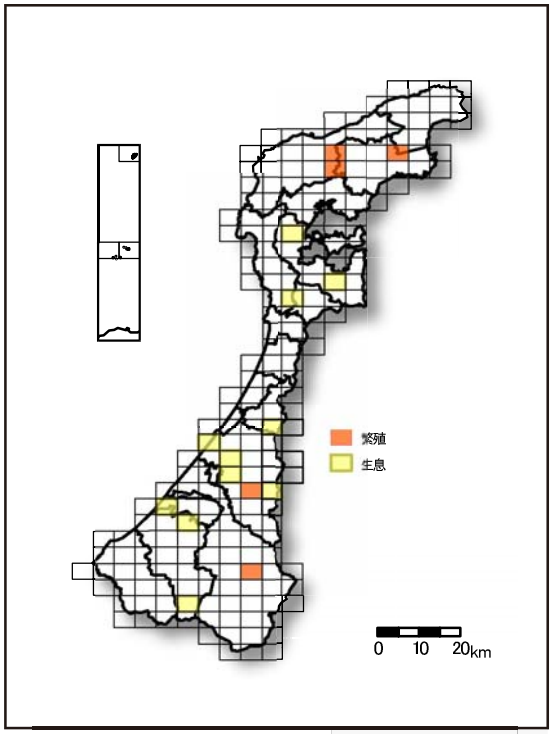
国内分布
本州、四国、九州、伊豆諸島の森林で繁殖。越冬地はフィリピンであるが、西南日本、薩南諸島などでも少数が残る。

県内分布
夏鳥として低山帯の森林に渡来する。夜行性のため元々繁殖の情報は少なかった。近年の調査で情報は少しずつ集まりつつある。

生　態
平地から低山帯の暗い林に好んで生息し、繁殖する。谷や沢筋、湖畔などでサワガニやミミズなどを捕食する。繁殖期は5～7月で、地上から数mにある横枝の又になった部分に、枯れ枝でキジバトの巣に似た皿形の巣を作り、3～4個の汚白色無斑の卵を産む。抱卵期間20～27日で雛がかえり、その後約35日親に育てられて巣立ちをする。

生息地の条件
里山の暗い林で、餌となるサワガニやミミズなどが豊富な中山間地の水田。

生存の危機
里山の開発と、中山間地の水田の耕作放棄による採食環境の減少。（A, B）



県内の分布

クロツラヘラサギ

Platalea minor Temminck & Schlegel

コウノトリ目トキ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類
国カテゴリー	絶滅危惧ⅠA類

選定理由　世界的に個体数が少なく、極東のみに生息する。警戒心が強く、生息環境もヒトの活動域と重複している。

形　態　全長雄81cm、雌73cm。体色は白。ヘラサギによく似るが、嘴から目先まで黒色。嘴はヘラサギに比べて少し短い。繁殖期には頭部に羽冠が現れ、胸部は橙色に色づき美しくなる。

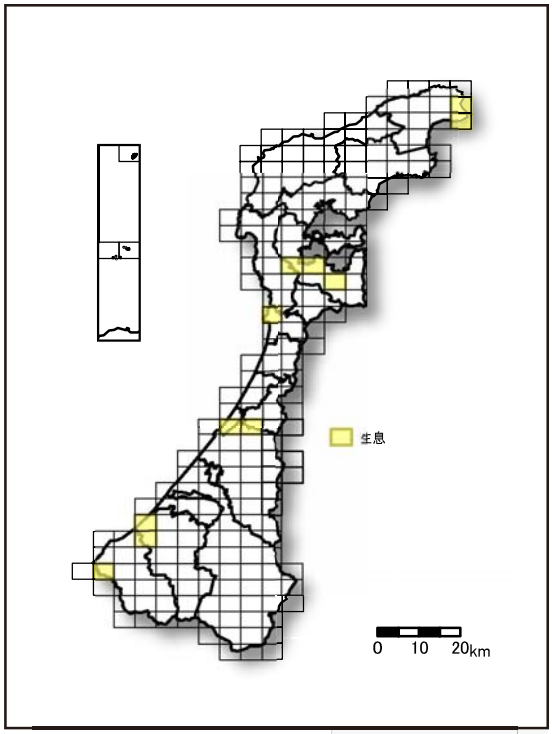
国内分布　数の少ない冬鳥として少数が越冬する。

県内分布　七尾西湾、河北潟、柴山潟などにしばしば飛来する。長期間滞在することも多く、その場合は春に渡来し夏まで滞在することが多い。七尾西湾では1994年、1995年に繁殖行動が見られた。

生　態　湖沼、湿地、水田などに生息。嘴を半開きにして水の中に入れ、頭を横に振りながら小走りに前進し、魚、甲殻類、軟体動物などを食べる。警戒心が強く、なかなか人を寄せつけない。

生息地の条件　人が近づけないような広い湿地があり、魚などの餌が豊富なこと。

生存の危機　生息できる干潟の開発。水田の乾田化や排水路の整備による餌の減少。（A）



県内の分布

コクガン

Branta bernicla (Linnaeus)

カモ目カモ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類
国カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類

選定理由
個体数が少なく、越冬地である内湾、浅海域も限られている。

形　態
全長56～61cm。雌雄同色。全体的に黒い。黒色の頸に黒色の混じった白色の三日月斑があり、背と腹は黒褐色。脇腹は黒褐色と白色の横縞がある。下腹と下尾筒は白い。嘴と足は黒色。

国内分布
冬鳥として主に東北、北海道に渡来する。アマモ場のある浅海、内湾に生息する。

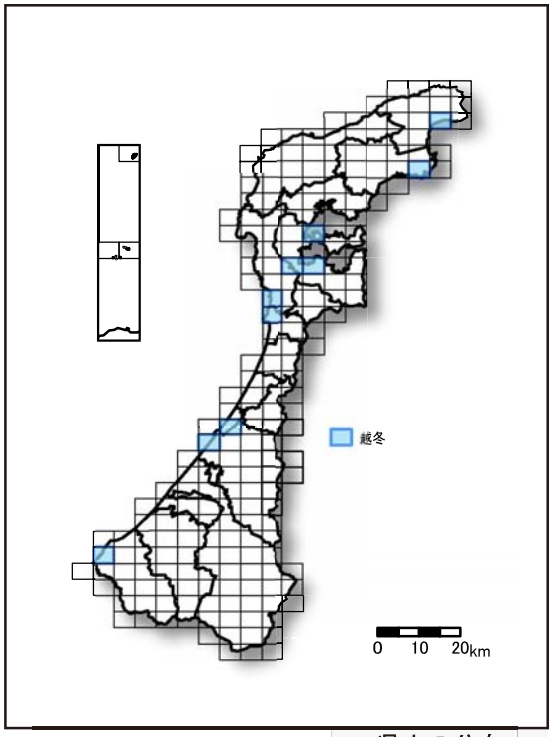
県内分布
過去、七尾西湾で毎年のように越冬していたが、最近は渡来が減っている。現在は金沢市から志賀町にかけての海岸に少数が渡来しており、他に片野鴨池、犀川下流、珠洲市などでも記録がある。

生　態
日中は岸から遠く離れた海上などで休息していることが多く、干潮時や夜間に岸近くで採餌する。主に植物を食べ、岩礁に付着する海藻類を好んで食べる。特にアマモを好む。冬期は群で生活することが多い。

生息地の条件
波静かな内湾で、岩礁地帯があり、海藻類を落ち着いて採ることができるような場所を必要とする。特にアマモの藻場が残されていることが重要である。

生存の危機
越冬地の内湾、海岸における漁業など人間活動。非常に警戒心が強く、ハンターによる影響も大きい。(A)

特記事項
国指定天然記念物。



県内の分布

クマタカ

Spizaetus nipalensis (Hodgson)

タカ目タカ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類
国カテゴリー	絶滅危惧ⅠB類

選定理由
小型から中型の森林性の鳥獣の捕食者として、丘陵帯から亜高山帯までの森林生態系の頂点に位置する大型のタカで、近年繁殖率の低下が心配されている。

形　態
全長約75cm。翼開長約1.5m。雄よりも雌が大きい。トビよりも大きいタカで、幅広く短い翼をもつ。全体に暗褐色で下面は淡く、胸には縦斑、腹には横斑がある。頭部は黒色で、後頭部の羽毛は冠羽状になる。尾には幅広い黒帯が数本ある。飛んでいるときに下から見ると、翼と尾の鷹斑がよく目立つ。幼鳥は全体に白っぽい。

国内分布
北海道、本州、四国、九州の山地で繁殖し、周年同一地域に生息する。佐渡、隠岐、対馬でも記録がある。

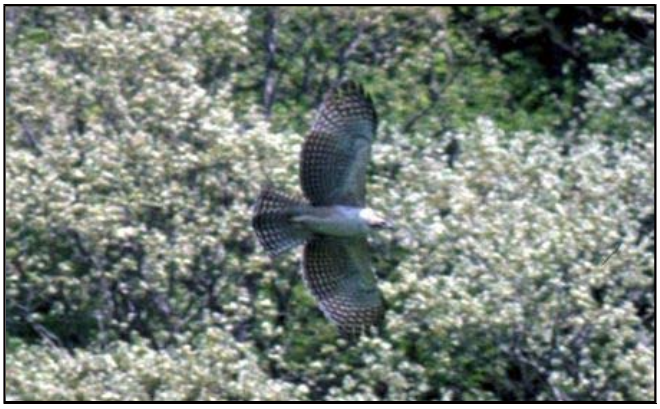
県内分布
医王山以南の山地に広く生息しているが、数は多くない。また能登半島でも目撃例がある。

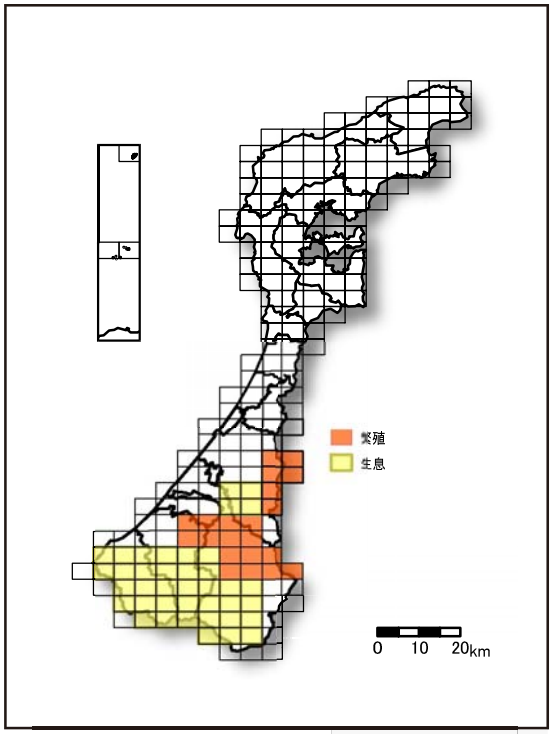
生　態
丘陵帯から亜高山帯の森林に生息し、アカマツに営巣する例が多い。繁殖活動に入るのは早く、1月中旬には巣作りを開始し、多くは3月に産卵する。一腹卵数はふつう1個で、抱卵日数は約45日、孵化から約70日後の7～8月に巣立ちする。キジ、ヤマドリなどの鳥類やノウサギを主食にする。

生息地の条件
低山から亜高山帯の広葉樹と針葉樹の混交林や針葉樹林に営巣する。1ペアのクマタカが生息するためには4km四方の土地が必要といわれる。山間の伐採地、まばらな林間、開けた谷、林道などで狩りをするので、そのような餌場の存在も条件となる。山間部での人間活動による悪影響も受けやすい。

生存の危機
山間部での開発行為の影響を受けやすく、森林伐採、林道工事、砂防工事などの影響が心配される。(A)

特記事項
国内希少野生動植物種。





県内の分布

イヌワシ

Aquila chrysaetos (Linnaeus)

タカ目タカ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類
国カテゴリー	絶滅危惧ⅠB類

選定理由
中型の鳥獣の捕食者として、山地帯から亜高山帯までの山地生態系の頂点に位置する大型の肉食鳥で、もともと個体数が少ないうえに、人間活動により生息地が狭められつつある。

形　態
全長約85cm。翼開長約2m。雄よりも雌が大きい。全体に暗褐色で後頭部は金褐色をおびている。幼鳥は成鳥よりも黒っぽく、翼と尾羽の基部に明瞭な白斑がある。嘴は黒色で基部は黄色い。足指は黄色である。

国内分布
北海道、本州、四国、九州の低山から高山までに周年生息する。本州で繁殖が確認されているほか、徳島県、大分県、熊本県でも生息ないし営巣（繁殖不成功）が確認されている。佐渡、隠岐、対馬でも記録がある。国内に約300羽が生息すると推定されている。

県内分布
白山自然保護センター（1985）によれば、医王山以南の白山周辺、大日山系などに約20つがい、40～50羽の生息を推定している。

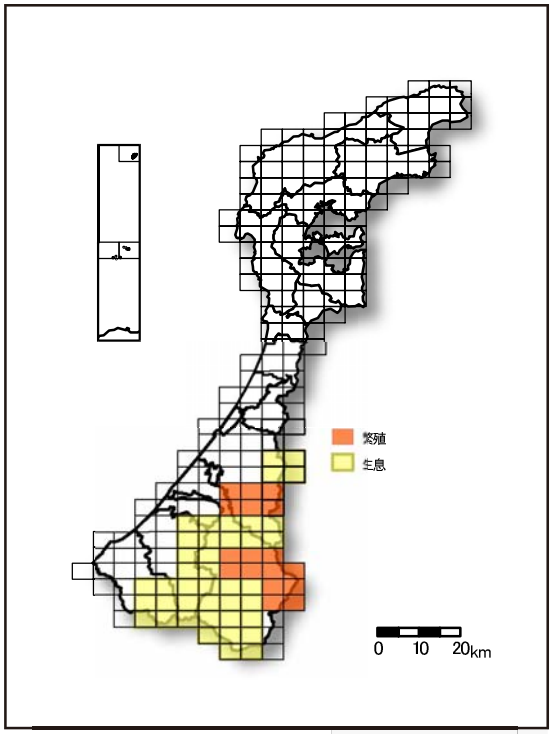
生　態
深い谷にある切り立った岸壁の岩棚に営巣するのが普通である。繁殖活動に入るのは早く、12月には巣作りが始まり、1月には交尾がみられ、1～2月に産卵する。一腹卵数は普通2個で、抱卵日数は約45日で3～4月に孵化し、孵化から70～80日後の5～6月に巣立ちする。行動圏は20～60k㎡といわれる。ヤマドリ、ノウサギ、ヘビ類を主食にする。

生息地の条件
豊富な餌のある自然環境で、狩りのしやすい開けた場所があること。外敵の近づけない急峻な場所で巣を造れる適当な岩場や大木があること。上昇気流が起こるなど飛行に適する風が吹く場所があること。山間部での人間活動による悪影響も受けやすく、人為的影響が少ないこと。

生存の危機
個体数が非常に少ないので、森林伐採、砂防工事など、営巣地の近くで人為的行為が行われると、営巣放棄につながりやすい。また、密猟の危機に常にさらされている。（A）

特記事項
国内希少野生動植物種、国指定天然記念物、石川県鳥。

参考文献
石川県白山自然保護センター 1985. 県鳥イヌワシ保護調査報告書
石川県白山自然保護センター 1983. イヌワシの生態



県内の分布

チュウヒ

Circus spilonotus Kaup

タカ目タカ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類
国カテゴリー	絶滅危惧ⅠB類

選定理由

海岸、河川、湖沼などの周辺にあるヨシ原を中心とした湿原生態系の頂点に位置するタカで、湿原の埋め立てや乾燥により、生息、営巣環境が悪化しており、繁殖個体数が減少している。

形　態

全長約55cm。翼開長約1.3m。雄よりも雌が大きい。トビよりもやや小さく細身のタカで、翼と尾と足が長い。色彩パターンには変化が多い。雄は頭部が灰色で淡褐色の縦斑があるものと、黒色縦斑が密にあり一見黒く見えるものがある。雌は全体に褐色をしている。

国内分布

北海道、東北地方（青森県、秋田県）、中部地方（石川県、富山県、愛知県、三重県）、近畿地方（滋賀県）の湖沼や海岸の干拓地のヨシ原で繁殖しており、関東地方（茨城県、栃木県、千葉県）でも繁殖の可能性がある。冬期は大陸から冬鳥として渡来する個体が多数あり、全国のヨシ原で観察される。

県内分布

柴山潟、河北潟、邑知潟、七尾西湾などで少数が繁殖している。越冬期には他地域から冬鳥として渡来するものがあり個体数が増え、県内各地の海岸や湖沼のヨシ原でも姿が見られる。

生　態

巣は水に近い比較的乾燥したヨシ原や草原の地上にヨシの枯れ茎を積み上げてつくる。産卵は4月下旬頃で、一腹卵数は普通5～6個、抱卵日数は35日前後、孵化後約35日で巣立ちする。広いヨシ原の上をゆっくりとした羽ばたきと滑空を交互にして低く飛び、獲物を見つけるとすばやく下りて捕らえる。餌はネズミ類やカエルなどである。

生息地の条件

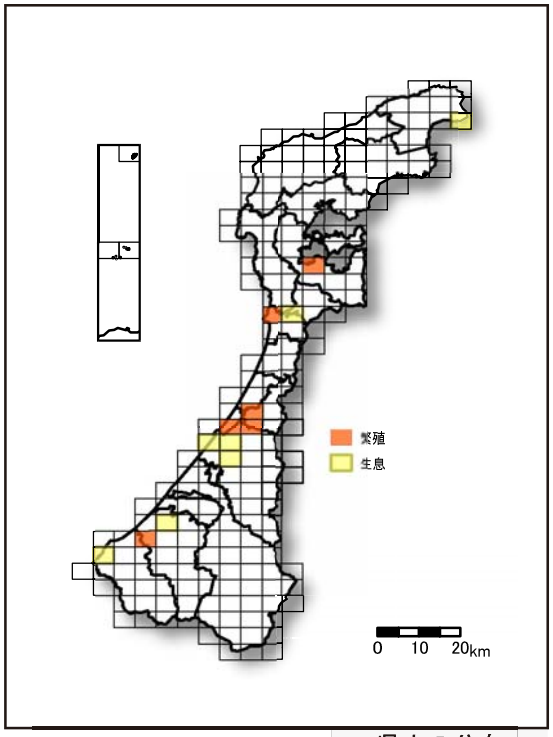
繁殖するためには、営巣場所および餌場として広いヨシ原が必要である。また、巣を地上につくるので外敵に襲われやすく、人間活動にも影響を受けやすい。

生存の危機

特に河北潟での遊休農地の整理や乾燥化によるヨシ原の減少で、繁殖できる環境が年々減少している。(A)

特記事項

石川県希少野生動植物種（2006年）。



県内の分布

ヒクイナ

Porzana fusca (Linnaeus)

ツル目クイナ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類
国カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類

選定理由
湿地や水田に夏鳥として渡来して繁殖する鳥であるが、近年の湿地の減少や後背地の自然性の減少などにより、生息個体数が著しく減少している。

形　態
中型のクイナで、全長22cm、翼長11cm、体重60～100g。首の後から体上面は暗緑褐色ででて頭部、首、胸、上腹は赤茶色、脇から下尾筒暗褐色で白い横縞がある。嘴は緑褐色で足は赤色。虹彩は赤色。幼鳥は成鳥より赤みが淡い。

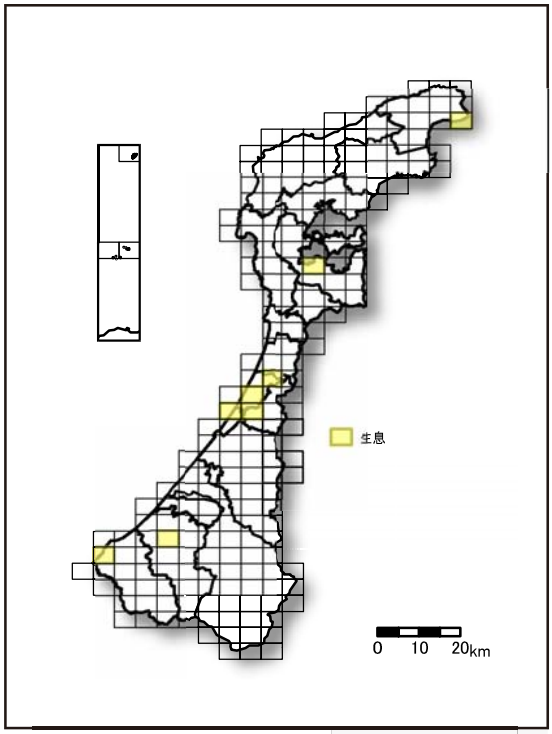
国内分布
北海道から九州で夏鳥として繁殖し、九州などでは越冬するものもいる。

県内分布
夏鳥として渡来し、大聖寺川下流、片野鴨池、柴山潟、手取川、犀川下流、河北潟、邑知潟、七尾西湾などで繁殖例や観察例がある。渡りの時期には舳倉島でも観察されている。奥能登でも生息すると推測されるが、詳細は不明である。

生　態
平地や低山の水田や湿地に生息し、イネや草の中に巣をつくる。一腹卵数4～9個で、約20日で孵化する。餌は水生昆虫、貝、小魚、草の種子などである。夜間に「コッコッコッ」と次第にテンポのはやくなる連続した声で鳴き、「クイナのたたく声」とよばれている。

生息地の条件
水生昆虫や小魚などの餌が豊富にある湿地や水田に生息する。

生存の危機
近年の水田環境の変化で生息、繁殖に適した環境が減少している。環境適応性が極めて低く、排水溝のコンクリート化などによる水田の乾田化の影響が指摘されている。（A, B）



県内の分布

ヘラシギ

Eurynorhynchus pygmeus (Linnaeus)

チドリ目シギ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類
国カテゴリー	絶滅危惧ⅠA類

選定理由　世界的にも数が少ない上、県内でも秋の渡りの時期に散発的に渡来するのみ、数も1,2羽とごく少ない。

形　　態　全長14.5cm、雌雄同色。トウネンとほぼ同じ大きさ。冬羽では上面は灰色、下面は白。夏羽では東部から胸までが赤褐色になる。クチバシの先がヘラ状になっているのが特徴。

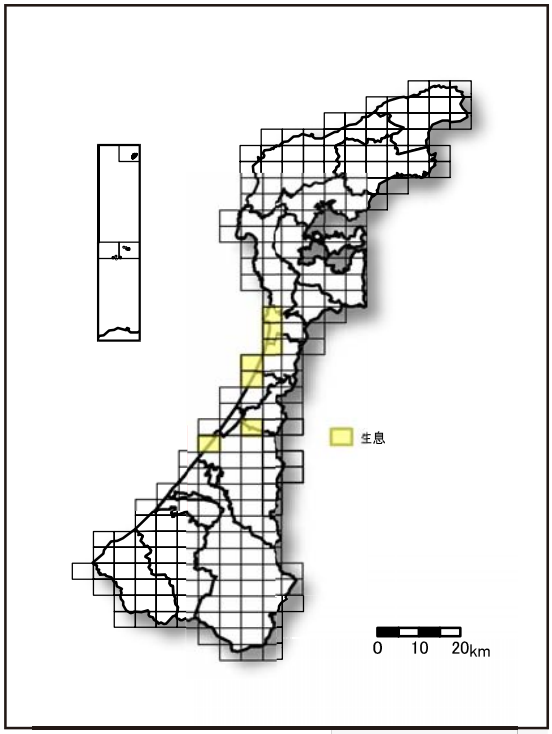
国内分布　日本では数のすくない旅鳥。主に秋に砂浜海岸や干潟に渡来する。

県内分布　金沢から羽咋市までの砂浜海岸で秋、散発的に記録がある。トウネンの群れの中で発見されることが多く、毎年ごく少数が渡来しているものの、群れの中で識別が困難なことから記録され難いものと思われる。

生　　態　主に秋、砂浜海岸に渡来し、波打ち際で頭を左右に振りながら採食する。トウネンの群れに混じり、ともに行動することが多い。

生息地の条件　広い砂浜海岸や砂質の干潟。

生存の危機　侵食による砂浜海岸の消滅、漂着ゴミに集まるカラスなどの害敵。（A, D）



県内の分布

コアジサシ

Sterna albifrons Pallas

チドリ目カモメ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類
国カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類

選定理由
県内の安定した繁殖地は1箇所のみ。

形　態
全長約28㎝。翼開長50～55㎝。夏羽では頭部、過眼線が黒く、背，翼上面は青灰色。尾と下面は白色。嘴は黄色。足はオレンジ色。

国内分布
本州以南の海岸、河川、湖沼に夏鳥として渡来、集団でコロニーを作って繁殖する。

県内分布
かつては金沢港、大野川周辺、河北潟にも繁殖地があったが消滅。現在は手取川のみとなっている。渡り途中のものは県内の河川、湖沼、内湾などで観察できる。

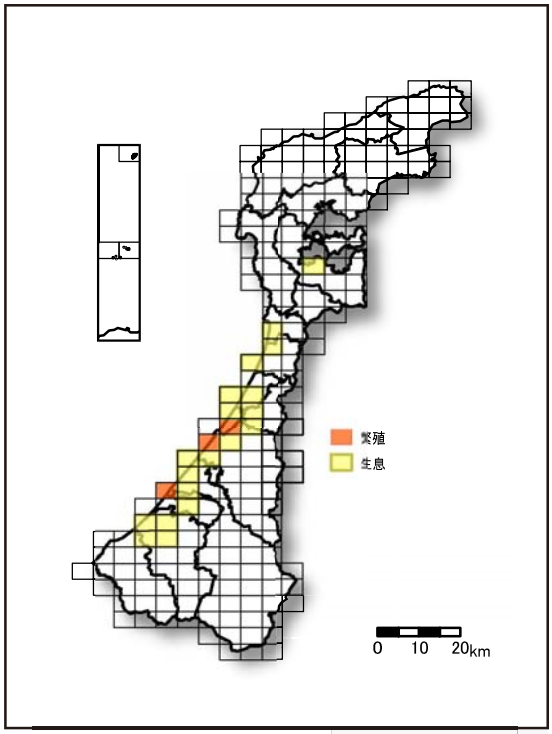
生　態
4月中旬頃、日本に渡来する夏鳥。沿岸や河川、湖沼で小魚を捕る。県内での繁殖期は5～7月、河川の中州や埋立地などに集団で繁殖し、地上に浅いくぼみを掘って2～3卵を産む。抱卵期間、育雛期間はともに約3週間。

生息地の条件
砂浜海岸、河川の中州、河原、埋立地などの広い砂れき地。

生存の危機
四輪駆動車やオートバイなどによる繁殖地の攪乱、釣り人等による巣卵の破壊、カラス、チョウゲンボウなどによる捕食。（A，C）

特記事項
石川県希少野生動植物種（2007年）。

参考文献
林宏、岡田徹 1992. わが国におけるコアジサシSterna albifronsの繁殖状況. Strix11.



県内の分布

カンムリウミスズメ

チドリ目ウミスズメ科

Synthliboramphus wumizusume (Temminck)

石川県カテゴリー　絶滅危惧Ⅰ類

国カテゴリー　絶滅危惧Ⅱ類

選定理由　県内での繁殖地は七ツ島に限られている。同所は本種の我が国での繁殖北限でもある。

形　態　全長約24cm。ウズラ大の小型の海鳥で、頭部には短い冠羽がある。頭部と体上面は黒色、首，胸，下面は白色。

国内分布　九州沿岸、四国太平洋岸、紀伊半島南部、伊豆諸島などに分布、繁殖が確認されている。

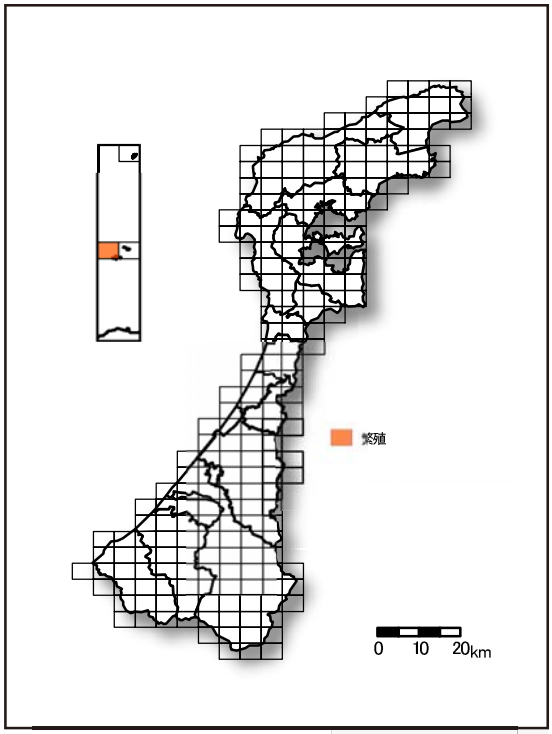
県内分布　輪島市七ツ島の大島、御厨島、荒三子島で繁殖が確認されているが、非繁殖期の生息状況は不明。近年、大島と御厨島では繁殖の形跡がなく、繁殖地は荒三子島のみと推測されている。

生　態　潜水して小魚、甲殻類などを捕る。3月下旬から4月上旬、岩の割れ目やくぼみに1～2卵を産み、雌雄交代で約１月抱卵する。孵化したヒナは1～2日後親鳥に連れられて巣を離れ、海に出る。

生息地の条件　捕食者となるヘビ、哺乳類のいない岩礁、無人島。

生存の危機　ドブネズミの侵入による被補食、刺し網等による混獲。（A，C）

特記事項　国指定天然記念物。日本での推定個体数は5000～6000羽。県内では荒三子島に数十羽と推測されるが、最近捕食者（おそらくドブネズミ）による被害が深刻である。早急な対策が望まれる。



県内の分布

イワヒバリ

Prunella collaris (Scopoli)

スズメ目イワヒバリ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類
国カテゴリー	なし

選定理由
県内では白山高山帯のみに生息し、日本での分布西限に当たる。生息数も20～30羽と少ない。

形　態
全長約18cm。雌雄同色。頭部から胸は灰色、体は褐色。上面は黒い縦斑があり、黒っぽく見える。翼、尾は黒褐色。

国内分布
本州の標高2400m以上の高山帯に繁殖し、冬期は山地帯の谷にくだる。

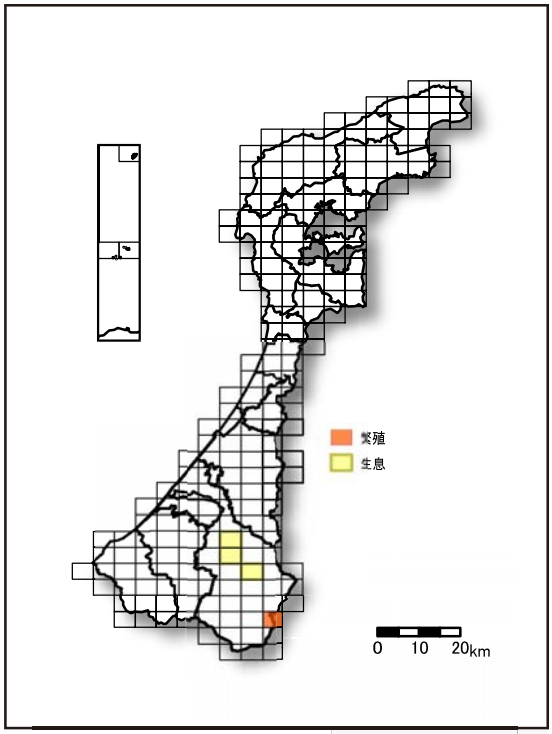
県内分布
白山の高山帯に分布し、繁殖終了後は山ろくの谷に移動する。推定個体数は約70羽。

生　態
小さな群単位で生活し、婚姻形態は多夫多妻、いわゆる乱婚。繁殖期は6～9月で、2回行うものもいる。岩のすき間などに営巣し、卵数は2～3個。抱卵期間は12日、育雛期間は約14日。

生息地の条件
標高2400m以上の高山帯。

生存の危機
高山帯の開発行為、環境汚染、ゴミの増加による病原菌、天敵の増加のおそれ。(A, C)

参考文献
上馬康生. イワヒバリの生態 1997. 白山の自然誌17. 自然保護センター.



県内の分布

チゴモズ

Lanius tigrinus Drapiez

スズメ目モズ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類
国カテゴリー	絶滅危惧ⅠA類

選定理由
近年全国的に減少が著しい。県内での生息地は1箇所のみで、生息数もごく少ない。また石川県は日本での繁殖分布のおそらく西限にあたる。

形　態
全長約19cm。頭部は青灰色、背、翼など上面は赤褐色。黒い過眼線があり、下面は白色。

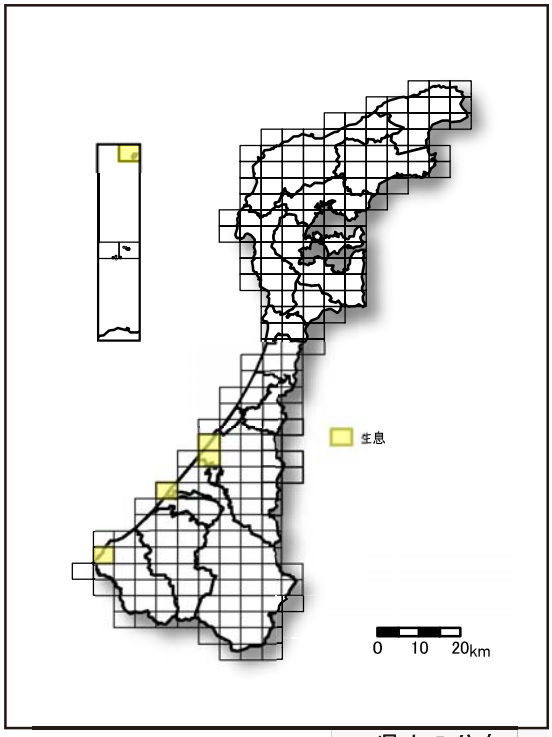
国内分布
夏鳥として渡来し、本州の中部以北に局地的に分布する。平地から山地帯にかけての広葉樹林、アカマツ林、クロマツ林、雑木林、果樹園などに繁殖する。

県内分布
金沢市、内灘町の海岸クロマツ林で少数が繁殖していたが、現在確実な繁殖の情報はない。

生　態
主食は昆虫。繁殖期は6～7月。抱卵期間、育雛期間ともに14～15日。

生息地の条件
餌の豊富なまばらな広葉樹林、マツ林。アカモズよりは密生した林を好む。

生存の危機
健民海浜公園では低木の伐採などがあげられるが、詳細はよくわかっていない。越冬地での環境悪化、乱獲などが懸念されている。（A, D）



県内の分布

アカモズ

Lanius cristatus Linnaeus

スズメ目モズ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類
国カテゴリー	絶滅危惧ⅠB類

選定理由 近年全国的に減少している。県内でも生息は局地的で、減少が著しい。

形　態 全長20cm。頭部から背、翼、尾などは赤褐色。下面は白。黒い過眼線と白い眉斑を持つ。

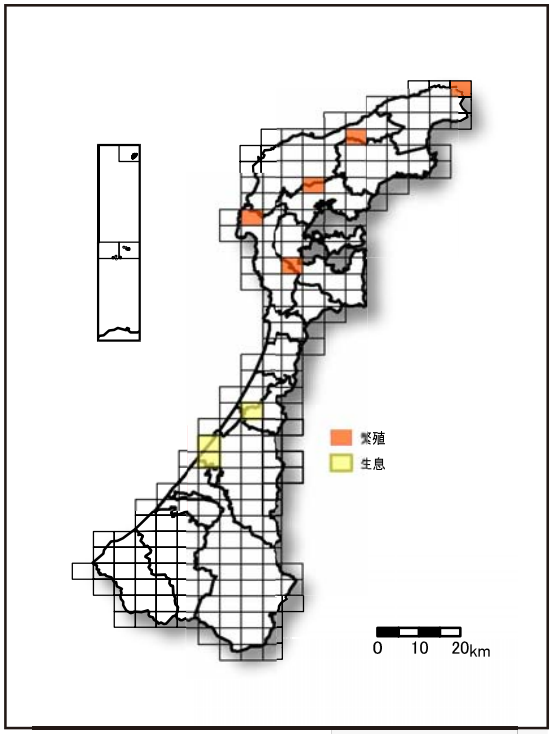
国内分布 夏鳥として九州中部以北の平地から低山の林、灌木のある草原に渡来する。本州では高原、北海道では低地の草原に多い。

県内分布 加賀地方ではクロマツなどの海岸砂防林、能登地方では低山の疎林に分布していたが、近年急激に数が減少した。現在、加賀地方で確実な繁殖地の情報はない。

生　態 主食は昆虫。繁殖期は5～7月で、抱卵期間，育雛期間はともに14～15日。

生息地の条件 加賀では海岸近くのクロマツ、ニセアカシア林と隣接する灌木のある草原。能登では低山の疎らな林や潅木のある草原。

生存の危機 海岸林の伐採など。しかしそれほど環境が悪化していない場所でも減少しており、越冬地での環境悪化、乱獲などが懸念されている。(A, D)



県内の分布

マガン

Anser albifrons (Scopoli)

カモ目カモ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類
国カテゴリー	準絶滅危惧

選定理由
全国的にも越冬地は限られており、その中でも石川県は有数の越冬地であること。また水田の減少および乾田化で、生息環境が悪化している。

形　態
全長65～78㎝。雌雄同色。全体的に灰褐色。成鳥は嘴がオレンジ色またはピンク。額が白、腹に不規則な黒斑がある。秋季の幼鳥は嘴が濁黄色で、先端などが黒く、額の白と腹の黒斑を欠く。下尾筒は白い。足はオレンジ色。

国内分布
冬鳥として日本に渡来し、北日本に局地的に越冬する。3万羽が越冬しているといわれているが、その約8割が宮城県の伊豆沼である。ここ10年間で日本への渡来数は3～4倍に増加しているが、アジア全体では10分の1に減少していると言われる。

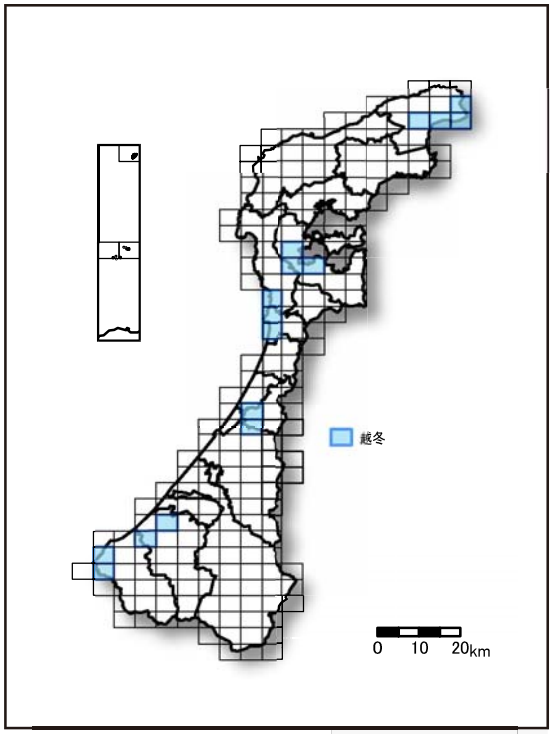
県内分布
片野鴨池に約2,000羽が越冬しており、福井県坂井平野と行き来をしている。その他に珠洲市、邑知潟、志賀町、河北潟などに越冬群が見られる。

生　態
淡水湖沼または干潟とその後背地に採食地となる水田などの広い耕地を持つ地域に生息する。イネの籾や二番穂、イネ科の水田雑草などを食べる。警戒心が非常に強い。

生息地の条件
人がほとんど入らないような広い田圃や畑があり、落ち着いて寝られる塒（池や潟）があること。

生存の危機
水田の減少および乾田化により、生息地と餌が不足。ハンターによる間接的な影響も大きい。（A）

特記事項
国指定天然記念物。



県内の分布

カリガネ

Anser erythropus（Linnaeus）

カモ目カモ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類
国カテゴリー	準絶滅危惧

選定理由　全国的にも越冬地は限られており、その中でも石川県は有数の越冬地であること。また水田の減少および乾田化で、生息環境が悪化している。

形　　態　全長58cm。日本のガン類では最も小さい。雌雄同色。全体的に灰褐色。嘴はオレンジ色またはピンク。額が白、腹には不規則な黒斑がある。マガンに酷似するが嘴が短く、目の周囲はリング状に黄色い。下尾筒は白い。足はオレンジ色。

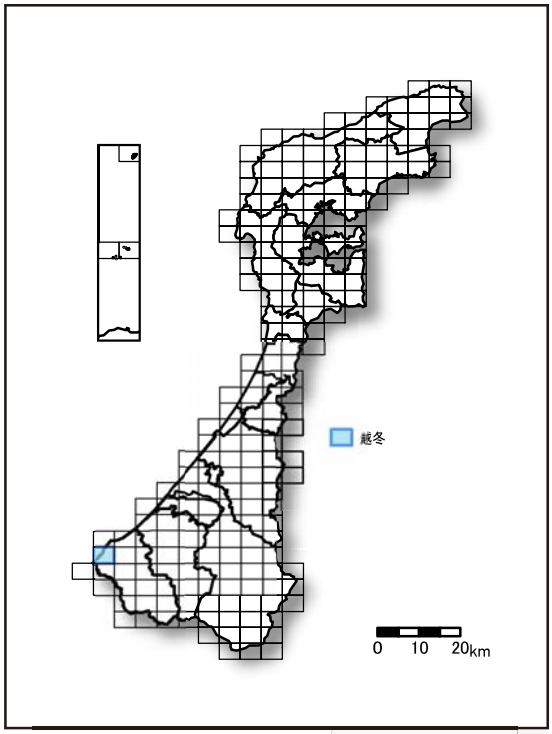
国内分布　数の少ない冬鳥として、宮城県伊豆沼などマガンの越冬地でごく少数が観察されている。

県内分布　冬鳥として、片野鴨池に渡来するマガンの群れに混じって毎年2、3羽が観察されている。冬期は福井平野と行き来をしている。

生　　態　淡水湖沼または干潟とその後背地に採食地となる水田などの広い耕地を持つ地域に生息する。二番穂やイネ科の水田雑草などを食べる。警戒心が非常に強い。

生息地の条件　人がほとんど入らないような広い田圃や畑があり、落ち着いて寝られる塒（池や潟）があること。

生存の危機　水田の減少および乾田化により、生息地と餌が不足。ハンターによる間接的な影響も大きい。（A）



県内の分布

ヒシクイ

Anser fabalis (Latham)

カモ目カモ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類
国カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類、準絶滅危惧

選定理由
非常に警戒心が強く、人との接触をいやがる。水田の減少および乾田化で、生息地と餌が減少している。

形　態
亜種ヒシクイ全長78～89cm。亜種オオヒシクイ全長90～100cm。雌雄同色。きわめて大型のガン。嘴は黒色で、先端付近にオレンジ色の部分がある。マガンと異なり額は白くなく、頭と嘴が体に比べて大きい。

国内分布
冬鳥として2亜種が渡来する。亜種ヒシクイは北海道を経て宮城県北部まで、亜種オオヒシクイは北海道を経由して日本海沿いに琵琶湖まで南下する。両亜種とも約6,000羽が飛来。

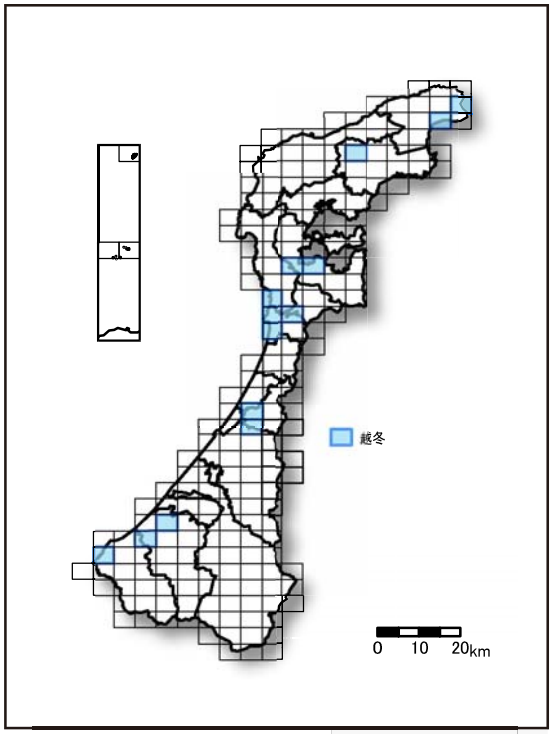
県内分布
冬鳥として片野鴨池に毎年300～600羽が渡来する。ほとんどは亜種オオヒシクイである。その他に珠洲では約200羽、河北潟、邑知潟に少数が渡来する。

生　態
亜種により生息地の環境は著しく異なる。亜種ヒシクイは開けた環境で生活するのに適しており、広い水田に終日とどまり、夜も塒の湖沼に帰らずそこで過ごすことも珍しくない。一方、亜種オオヒシクイは湿地での生活に適応した体型をしており、マコモやヒシなどの水生植物が繁茂した沼を好み、これらの根茎や種子を長い首と嘴を使い沼の中で採食することを好む。警戒心が非常に強い。

生息地の条件
人がほとんど入らないような広い水田（湿田）や湿地があり、落ち着いて寝られる塒（池や潟）があること。

生存の危機
水田の減少および乾田化により、生息地と餌が不足。ハンターによる間接的な影響も大きい。（A）

特記事項
国指定天然記念物。
国カテゴリーで、亜種ヒシクイA. f. *middendorffii* 絶滅危惧Ⅱ類、亜種オオヒシクイA. f. *serrirostris* 準絶滅危惧。



県内の分布

トモエガモ

Anas formosa Georgi

カモ目カモ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類
国カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類

選定理由　極東にのみ生息し、世界的に数が少ない希少鳥である。石川県は日本でも有数の渡来地であること。

形　　態　全長40㎝。雄の冬羽は頭部が淡黄色と緑色の巴模様をしている。胸は黄褐色に黒斑があり、肩羽の数枚が蓑羽状になっている。雌は全体が褐色で、下嘴の付け根部に淡い円形の白斑がある。雄のエクリプス羽は雌に似る。

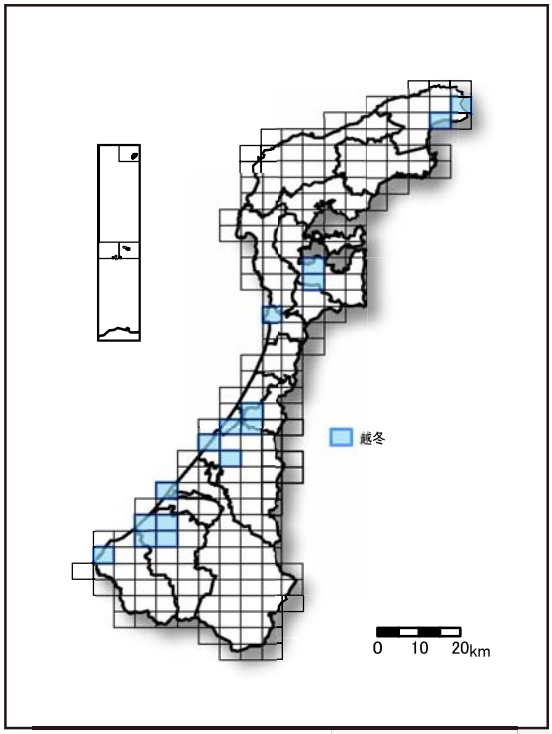
国内分布　冬鳥として渡来するが、局地的で数は少ない。主に関東以西で越冬する。太平洋側より日本海側に多く見られる。以前は大群が飛来したというが近年はほとんどない。

県内分布　冬鳥として渡来するが、年によって個体数の変動が激しい。片野鴨池には定期的に数十羽が渡来し、河北潟には時に2000羽を越す群が飛来することもある。その他には七尾西湾に少数が渡来する程度である。

生　　態　大きな群は少ないが、年によっては千羽を超える群が見られることもある。群で行動することが多い。湖沼、池、河川などで過ごす。主に植物食でイネの落穂や、草の種子を好み、水生小動物も食べる。臆病な性質で人を近づけさせない。

生息地の条件　臆病な性質なので、人が近づけない広い開水面をもつ湖沼など。

生存の危機　神経質なため釣り人ややマリンスポーツなどの影響を受けやすい。また、ハンターによる間接的な影響も大きい。狩猟鳥ではないが、雌はコガモとの区別が難しく、誤って狩猟される可能性もある。(A)



県内の分布

オジロワシ

Haliaeetus albicilla (Linnaeus)

タカ目タカ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類
国カテゴリー	絶滅危惧ⅠB類

選定理由
沿岸、河川、湖沼などの水界生態系の頂点に位置する大型のワシで、県内には冬鳥として数羽が越冬するのみである。

形　態
全長約90cm。翼開長約2.2m。雄よりも雌が大きい。大型のワシで、翼は広大で尾は短く、ややくさび形である。成鳥の体は茶褐色で、頭から胸部にかけてクリーム褐色、尾羽は白い。幼鳥と若鳥は全身褐色で、尾羽は齢ごとに白色部が増す。くちばしと足は黄色。

国内分布
本州中部以北の河口や湖沼に冬鳥として渡来するが、九州や琉球列島まで南下することもある。北海道東部、北部で少数が繁殖している。

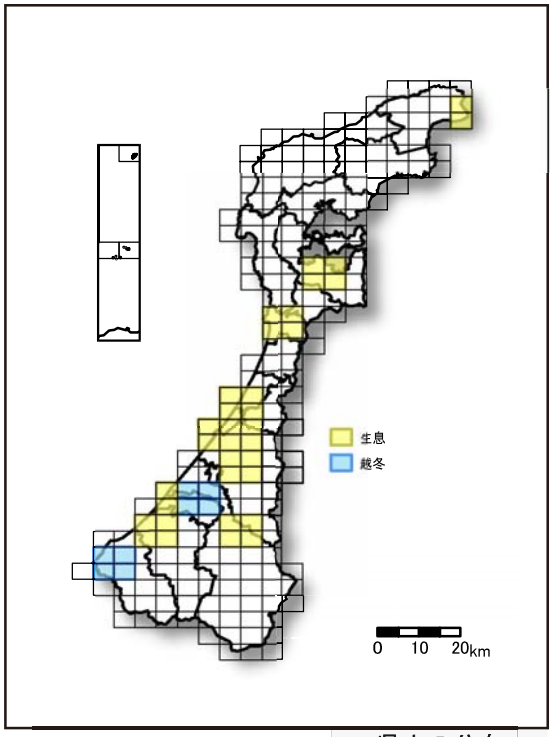
県内分布
県内の定期的な渡来地は、加賀市片野鴨池、手取川で毎年数羽が越冬する。そのほか、七尾西湾、河北潟、邑知潟、木場潟、柴山潟などの海岸や湖沼でも姿が見られることがある。また、大きな河川上流の山間部で見られることもある。

生　態
北海道東部、北部の繁殖地では、広い原生林の続く湖沼畔や海岸にすみ、高木の枝上や海岸の断崖で営巣する。越冬地では海岸、河口、湖沼などにすみ、主に魚類を捕食する。片野鴨池で越冬する個体は、死んだり弱ったりしたガンカモ類を主な餌にしている。

生息地の条件
餌となる魚類や鳥類が豊富に生息し、汚染されていない水辺が餌場として存在すること。さらに、餌場から遠くない所に、外敵が近づかない安全なねぐらが存在すること。

生存の危機
水界生態系の頂点に位置するため、農薬などよる生物濃縮の悪影響を受けやすい。県内の定期的越冬地は2箇所しかなく、個体数も少ない。 (A)

特記事項
国内希少野生動植物種、国指定天然記念物。



県内の分布

サシバ

Butastur indicus (Gmelin)

タカ目タカ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類
国カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類

選定理由

夏鳥として丘陵帯に渡来するタカで、近年個体数が著しく減少している。人間の生活圏に近い所に生息するため、生息地が開発されやすく生存がおびやかされる。

形　態

全長約50cm。翼開長約110cm。雄よりも雌が少し大きい。ハシボソガラスぐらいの大きさのタカで、翼は細長く尾は中ぐらいの長さである。頭部は褐色で白い眉斑をもつものが多い。体と翼上面は赤みのある褐色で、胸は褐色、腹はクリーム白色で暗褐色の横斑が密にある。尾は灰褐色で3本の黒帯がある。喉は白く中央に1本の縦筋がある。

国内分布

夏鳥として渡来し、本州（秋田県、岩手県以南）、伊豆諸島、四国、九州で繁殖する。南西諸島では、渡りの際に通過し、少数は越冬している。

県内分布

夏鳥として平地から山地帯に生息、繁殖する比較的ふつうのタカであったが、全県下で個体数の減少が著しい。秋期の9月下旬から10月上旬にかけて、能美市観音山や加賀市刈安山などで南に渡る個体が多い日には400羽近く確認できる。

生　態

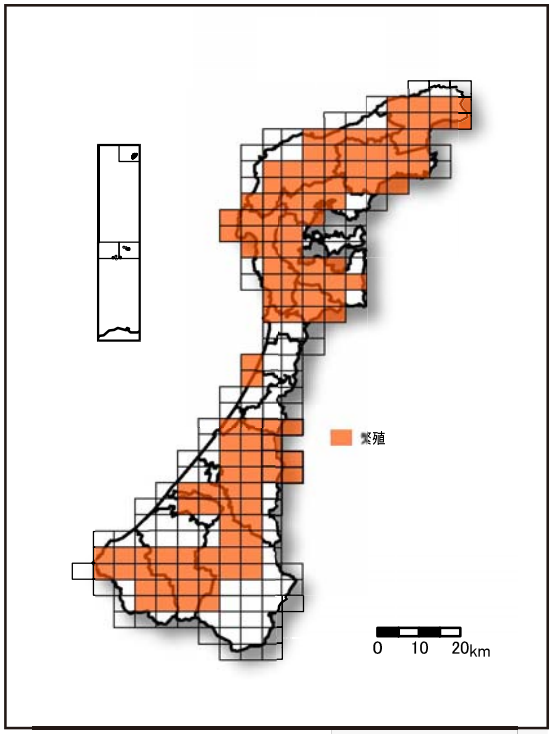
4月初旬に渡来し、産卵期は5月頃で、一腹卵数は2～4個、抱卵日数は30日前後、孵化後約35日で巣立ちする。ヘビ、トカゲ、カエル、ネズミ、バッタなどを餌にする。

生息地の条件

平地から標高800mくらいまでの、主にアカマツからなる雑木林などで繁殖する。狩り場は水田、畑、湿地などの開けた土地であり、谷に田が入り込んだ地域などが好まれる。人家に近い里山に生息するため、人間活動による悪影響を受けやすく、人為的影響が少ないことが条件となる。

生存の危機

人家に近い里山に住むため、開発など人為的影響を受けやすい。また近年は、里山の水田放棄によって餌場が減少し、大きな影響を受けている。（A, B）



県内の分布

オオタカ

Accipiter gentilis (Linnaeus)

タカ目タカ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類
国カテゴリー	準絶滅危惧

選定理由

小型から中型の鳥獣の捕食者として、丘陵帯を中心とした生態系の頂点に位置するタカで、個体数は多くない。

形　態

全長約55cm。翼開長約1.2m。雄よりも雌が大きい。トビよりも小さいタカで、幅広く短い翼と長い尾をもつ。成鳥では、上面は暗青灰色で尾には3～4本の黒色横帯があり、眉斑は白く過眼線と頬は黒い。下面は白く、黒色の細かい横斑が一面にある。雌は全体にやや褐色みが強い。幼鳥は上面が褐色で下面は縦斑である。

国内分布

国内のほとんどの地域で留鳥として生息するが、繁殖が確認されているのは北海道、本州、四国である。冬期は全国で観察される。近年、個体数の増加が指摘されているが、これは観察精度の向上と平野部の人家周辺での観察例が増えているためで、必ずしも個体数の増加を示すものではないとされる。

県内分布

1990年に能登で、1991年には加賀で初めて繁殖が確認され、1994年には海岸林でも繁殖が確認された。その後相次いで繁殖地が確認され、県内に広く分布していることが明らかになった。秋冬期には県内各地の平地から山地で観察される。近年、加賀地方では平野部での営巣が見られるなど観察例が増加しているが、逆に能登地方では営巣数が減少しており、引き続き、分布や繁殖状況などその動向を注意深く見守る必要がある。

生　態

加賀や能登の丘陵帯で繁殖するが、繁殖ペアは多くない。アカマツに営巣する例が多いが、近年の松枯れの影響か、スギ、モミなどでの営巣もみられる。産卵期は4月から5月で、一腹卵数はふつう2～3個、抱卵日数は約35日、孵化後約40日で巣立ちする。秋期には南に渡る個体が観察される。ハト類など中型の鳥を主食にしている。

生息地の条件

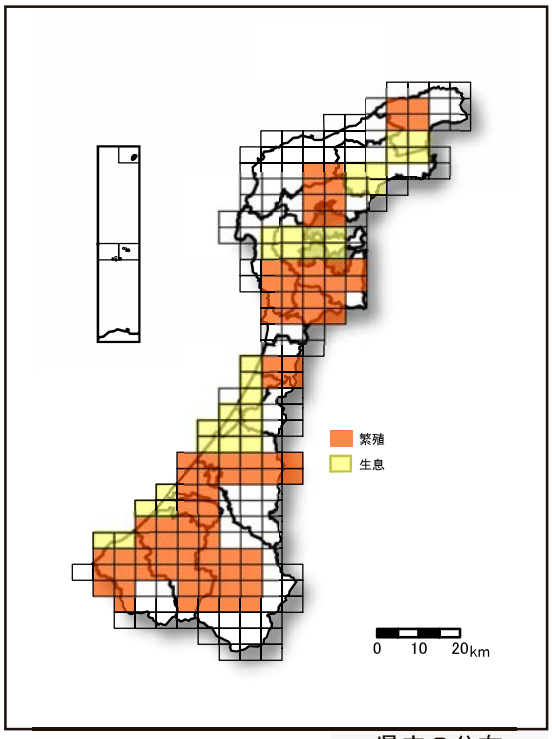
標高500m以下の、アカマツ、スギ、モミなどで営巣することが多い。海岸のクロマツ林での営巣例もある。人間活動による悪影響を受けやすく、人為的影響が少ないことが生息地の条件となる。

生存の危機

丘陵地、いわゆる里山に住むため、開発などの影響を受けやすく、また密猟の危機に常にさらされている。（A, B）

特記事項

国内希少野生動植物種。



県内の分布

ハヤブサ

Falco peregrinus Tunstall

タカ目ハヤブサ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類
国カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類

選定理由
鳥類の捕食者として海岸部の生態系の頂点に位置する鳥で、繁殖は局地的であり、繁殖個体数は多くない。

形　態
全長雄は約40cm、雌は約50cm。翼開長1m前後。雄よりも雌がかなり大きい。ハシボソガラスよりもやや小さいタカで、体、翼、尾の上面は暗青灰色、顔にはひげ状の黒斑がある。下面は白く腹と脇の羽毛に黒い横斑がある。幼鳥の上面は暗褐色で、下面は淡い茶色で暗褐色の太い縦斑がある。

国内分布
北海道から九州までの海岸や小島の断崖などで繁殖する。冬期には大陸から越冬のために渡ってくる個体群があり、海岸、湖沼、原野などで観察される。

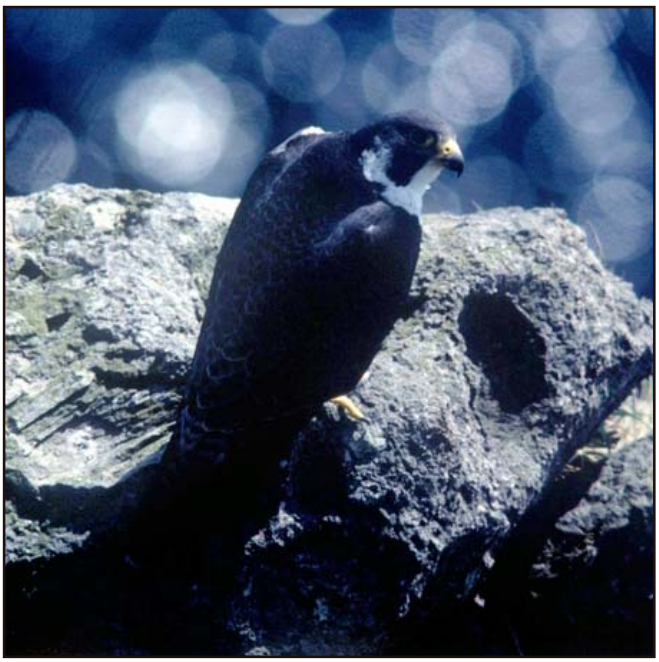
県内分布
能登半島と加賀地方の海岸で繁殖が確認されている。また近年は金沢市内のビルで繁殖するものも複数見られており、繁殖個体数はかつてに比べて増加している。越冬期には冬鳥として渡来するものがあり、各地で姿が見られる。

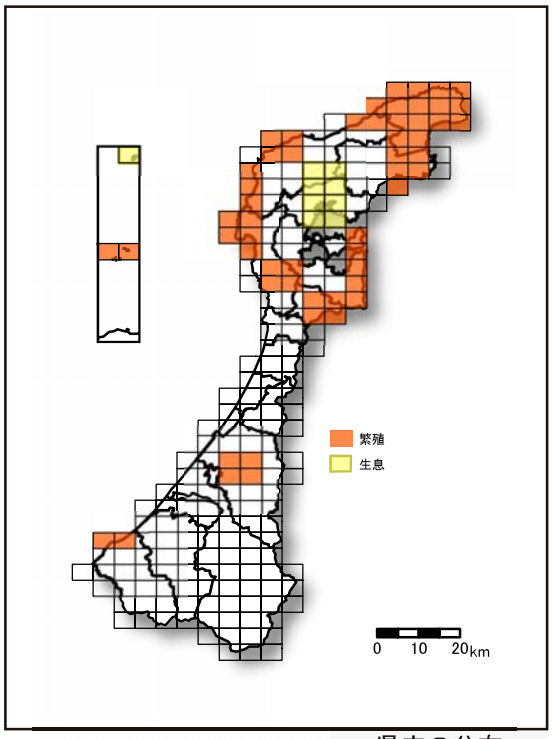
生　態
岩山や海岸の断崖に営巣する。産卵期は3～4月で、一腹卵数は3～4個、抱卵日数は30日前後、孵化後40日前後で巣立ちする。断崖の棚や木の枝などの見張り場に止まって鳥を待ち、獲物を定めると上空から急降下して足でつかみとる。餌は小型・中型の鳥類である。

生息地の条件
繁殖には、営巣地としての外敵が近づきにくい海岸の断崖や岩山と、餌となる鳥類の豊富な狩り場が必要である。

生存の危機
確認されている繁殖個体数は多くない。また、釣り人の侵入などにより、繁殖環境が脅かされつつある。また、密猟の危機に常にさらされている。（A）

特記事項
国内希少野生動植物種。





県内の分布

イカルチドリ

Charadrius placidus J.E. & G.R.Grey

チドリ目チドリ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類
国カテゴリー	なし

選定理由

県内では梯川、手取川、犀川などの河川氾濫原に依存して繁殖し、生息数も少ない。

形　態

全長21cm。翼長15cm。体重70g。頭頂と上面は砂褐色で下面は白い。前頭部と目先から耳羽にかける部分は褐色味のある黒色である。胸に細い黒色の帯があり、淡色の翼帯がある。目のまわりの裸出部は黄色であるがあまり目立たず、冬羽ではかすかになる。嘴はやや長く黒色で、脚は淡黄色である。

国内分布

北海道から南西諸島までみられるが、繁殖しているのは本州、四国、九州である。北日本では繁殖後暖地へ移動する。越冬北限は、太平洋側は青森県、日本海側は新潟県といわれている。

県内分布

河川の中流域の中州や河原で繁殖する。渡りの時期には県内各地で観察されることがあるが、数は少ない。冬期は大聖寺川下流、梯川中流、手取第3ダム、手取川中流から下流、七尾西湾などで越冬している。

生　態

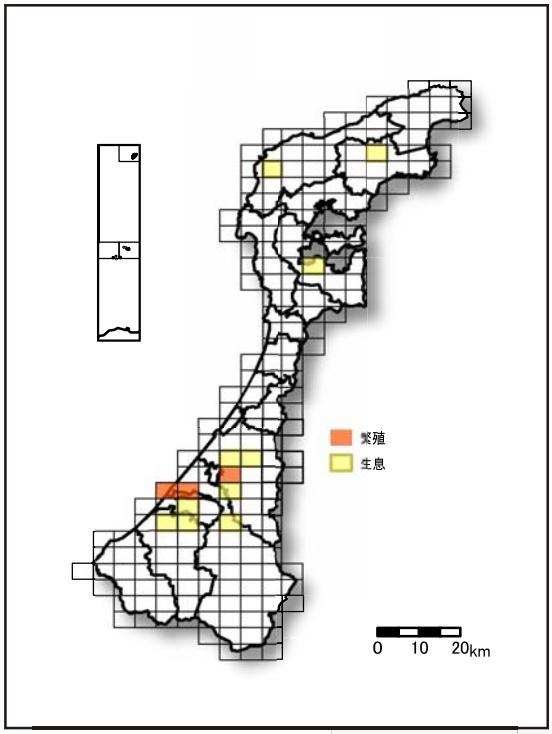
河川の中州や河原で4～7月に繁殖し、砂利、小石、小枝などを産座に集めた簡単な巣を地上につくる。一腹卵数は2～4個で、約27日で孵化する。孵化したヒナにはすでに綿毛がはえていて、独力で採食する。採食場所は主に川筋や湿地で、餌は水生昆虫などの小動物である。

生息地の条件

営巣場所は植物が繁茂しない安定した河原であるが、人間活動による影響を受けやすく、人為的影響が少ないことが条件となる。

生存の危機

繁殖環境が河川の氾濫原に特定される上、侵入してくる4輪駆動車、オートバイ、釣り人など、人間活動の影響によって繁殖がかく乱されやすい。 (A)



県内の分布

シロチドリ

Charadrius alexandrinus Linnaeus

チドリ目チドリ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類
国カテゴリー	なし

選定理由

繁殖個体数は少ないうえ、近年の海岸浸食など、生息環境の悪化により激減するおそれがある。

形　態

全長17cm。翼長11cm。体重45g。雄夏羽では頭頂が茶褐色で、上面、雨覆は灰褐色、前頭部に黒帯がある。額から続く眉斑は白色で、過眼線と胸側は黒色で、喉から体下面は白色である。雌は頭頂、前頭、過眼線、胸側が砂褐色である。翼帯があり、嘴と足は黒色、雄の冬羽は雌に似る。幼鳥は背から雨覆にかけ羽縁に淡い褐色の縁どりがある。

国内分布

北海道から南西諸島までみられるが、繁殖するのは九州以北である。北日本では繁殖後暖地へ移動する。

県内分布

加賀海岸から能登半島外浦の海浜、砂浜で繁殖している。繁殖ペアは30～40、80羽未満と推測される。繁殖期が終わると群をつくり一部南下するが、越冬するものもある。

生　態

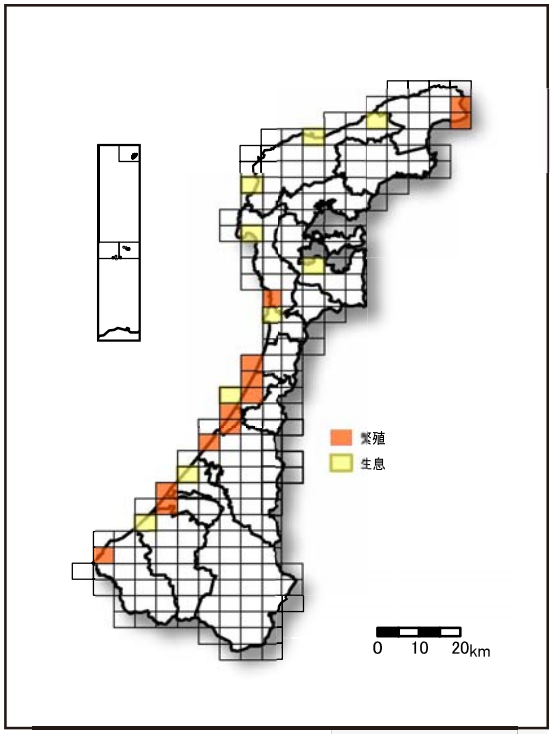
砂浜海岸などで繁殖する。繁殖期は4～7月で、小石などを産座に集めただけの簡単な巣を地上につくる。一腹卵数はふつう3個で、約3週間で孵化する。孵化したヒナにはすでに綿毛がはえていて、独力で採食する。採食場所は主に海岸や干潟などで、餌は甲殻類、ゴカイなどの小動物である。

生息地の条件

県内での繁殖地はほとんど砂浜海岸である。人間活動による影響を受けやすく、人為的影響が少ないことが生息地の条件となる。

生存の危機

海岸浸食による繁殖地の消滅や、侵入してくる4輪駆動車、オートバイ、釣り人、イヌの散歩、集団海岸清掃などにより繁殖がかく乱されやすい。 (A)



県内の分布

タマシギ

Rostratula benghalensis (Linnaeus)

チドリ目タマシギ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類
国カテゴリー	なし

選定理由
水田、休耕田、湿地などに夏鳥として渡来して繁殖する鳥であるが、近年の湿地の減少や水田の乾田化などにより、生息個体数が減少している。

形　態
全長24cm。翼長12～14cm。体重140～180g。雌の方が雄よりも色彩が派手で、体も大きい。雄は頭から背にかけて全体に褐色で、肩から背には黄褐色の線があり、肩から胸には太い白線がある。側面には褐色を帯びた黄色の斑点があり、腹は白い。目の周囲と頭央線は黄褐色。雌は目の周囲が白色で顔から胸が赤褐色、背から側面は緑がかったブロンズ色。幼鳥は雄に似る。

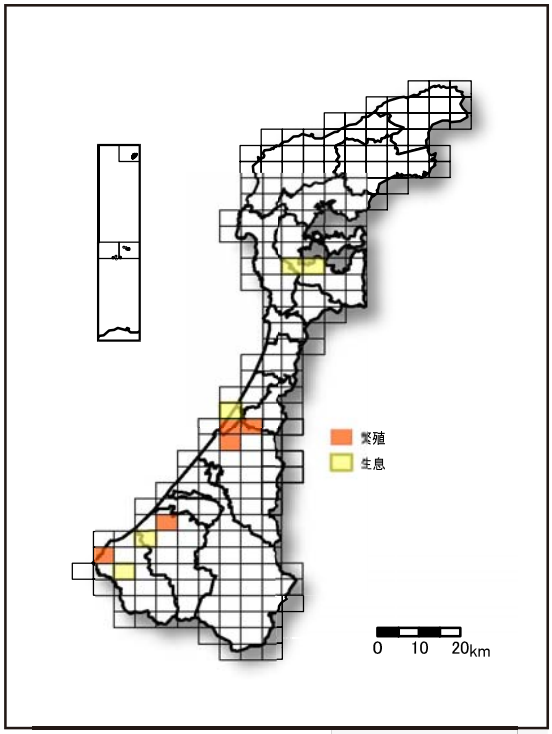
国内分布
関東地方、北陸地方以南で局地的に繁殖し、大部分のところでは留鳥。北海道、山形県、宮城県でも記録がある。

県内分布
夏鳥として渡来し、大聖寺川下流、柴山潟、河北潟、七尾西湾などで繁殖例や観察例がある。渡りの時期には他の地域でも観察されている。奥能登の生息状況は不明である。河北潟では越冬例もある。

生　態
水田、休耕田、湿地などに生息し、イネの株と株の間や地上の草陰などに巣をつくる。一腹卵数はふつう4個で、約19日で孵化する。餌は昆虫、ミミズ、草の種子などである。繁殖期の夜間に雌が「コー、コー、コー」とよくとおる声で鳴く。繁殖期に一妻多夫のつがいをつくる。

生息地の条件
水生昆虫や小動物などの餌が豊富にある湿地や水田に生息、繁殖する。

生存の危機
近年の平地や里山の開発や水田の乾田化により、生息に適した湿地や水田が減少している。 (A, B)



県内の分布

ホウロクシギ

Numenius madagascariensis (Linnaeus)

チドリ目シギ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類
国カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類

選定理由

春秋の渡りの時期に毎年記録されているが、単独での渡来がほとんどで、個体数は非常に少ない。

形　態

全長62cm。翼長28～33cm。体重558～1040g。長くて下方に湾曲した嘴をもち、あし、首の長い大型のシギである。嘴は黒色で下嘴の基部は肉色を呈し、その長さは頭の長さの3倍余になる。上下面とも淡褐色の地に黒褐色の縦斑がある。眉斑と喉は白い。脚は青灰色である。

国内分布

春秋の渡りの時期に日本全土を通過する。

県内分布

春秋の渡りの時期に七尾西湾の川尻川河口干潟、河北潟周辺などで毎年記録されるが、ほとんどが単独での渡来で数は少ない。

生　態

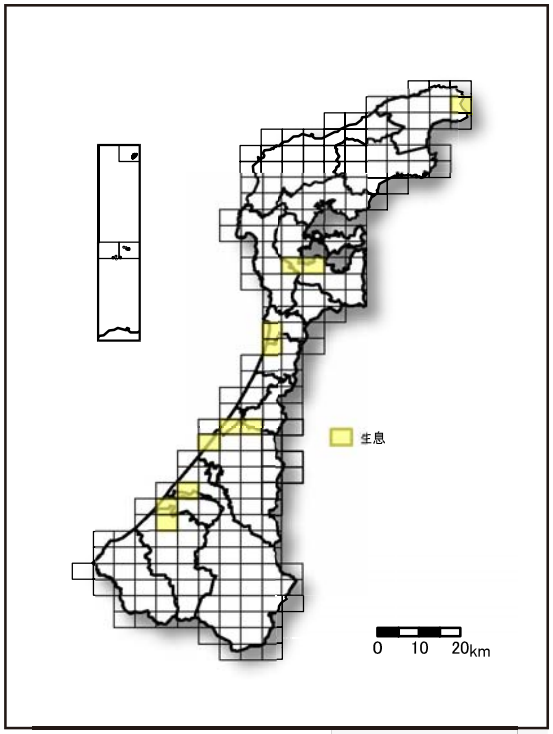
ウスリー地方とカムチャッカ地方で繁殖し、フィリピン、インドネシア、オーストラリアなどで越冬する。繁殖地では湖沼畔の湿地に2～3つがいの小さなコロニーをつくって営巣する。一腹卵数は4個。渡りの時には海岸や湖岸の干潟に生息し、海岸近くの水田や埋め立て地の水たまりなどにも入る。長い嘴を泥に差し込んで、環形動物，軟体動物，甲殻類などの小型水生無脊椎動物を食べる。

生息地の条件

本来干潟を好む種だが、県内でまとまった面積の干潟は七尾西湾の川尻川河口干潟ぐらいしかなく、本種の生息に適した環境はごく少ない。

生存の危機

今のところ毎年記録されているが、唯一といってよい定期渡来地の七尾西湾の川尻川河口干潟の環境悪化などにより、将来渡来しなくなることが懸念される。（A）



県内の分布

アオバズク

Ninox scutulata (Raffles)

フクロウ目フクロウ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類
国カテゴリー	なし

選定理由
平地から低山帯にかけて生息する小型猛禽類で、近年減少が著しい。

形　態
全長約29cm。雌雄同色。頭部から上面は黒褐色、下面は白く黒褐色の大きな縦斑がある。眼の虹彩は黄色。羽角はない。

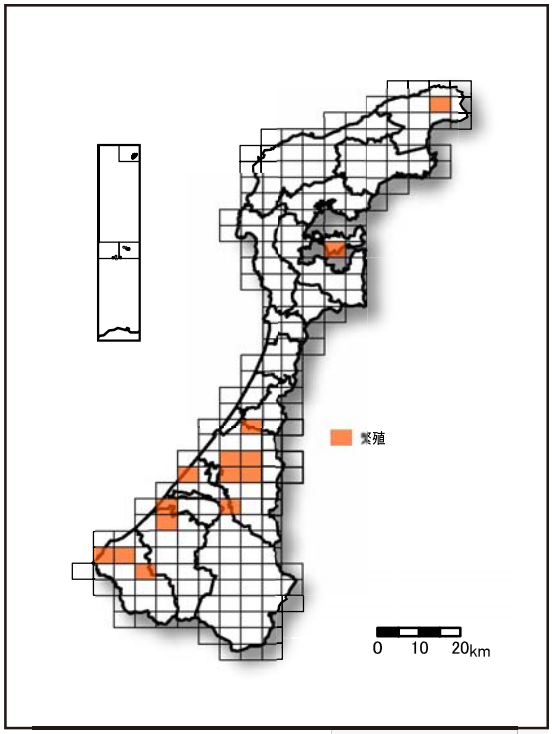
国内分布
夏鳥として全国の平地から低山の森林、寺社林に渡来する。

県内分布
夏鳥として平地から低山の森林、寺社林に渡来する。かつては人家付近でも普通のフクロウ類であったが、近年減少が著しい。

生　態
夜行性で主に大型昆虫を捕り、ハ虫類や小鳥を捕ることもある。繁殖期は6～8月。主に大木の樹洞に繁殖するが、時には建造物の穴に営巣することもある。抱卵期間は約25日、育雛期間は約28日。

生息地の条件
営巣木となる樹洞のある大木の存在。

生存の危機
平地林、寺社林の伐採による営巣地の減少、餌となる大型昆虫の減少などがあげられる。しかしさほど繁殖環境が悪化していない場所でも減少が著しく、原因はよくわかっていない。（A, D）



県内の分布

ヨタカ

Caprimulgus indicus Latham

ヨタカ目ヨタカ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類
国カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類

選定理由　生態系高位の昆虫食種で、近年減少が著しい。

形　態　全長約29㎝。全身褐色で赤褐色や黒褐色の斑が多数ある。雄は翼，尾に大きく白斑があるが、雌の斑は小さく、尾にはない。嘴は小さいが口は大きく開き、空中で昆虫を捕らえるのに適応している。足は非常に短く、あまり歩行しない。

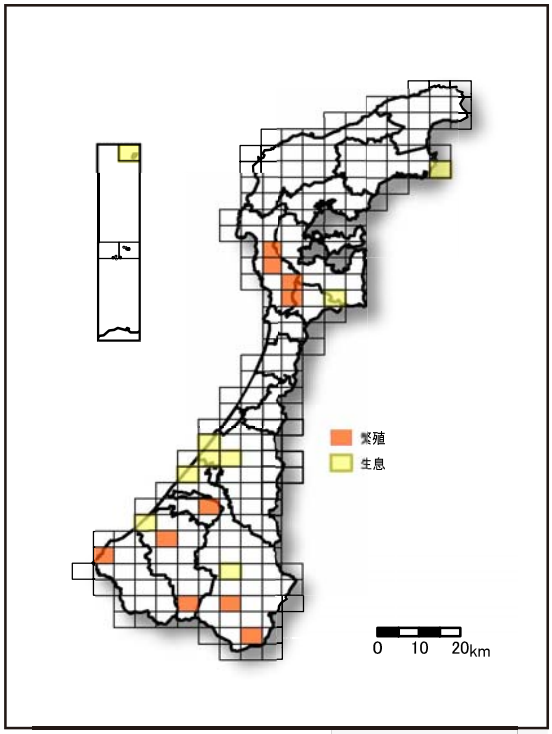
国内分布　夏鳥として九州から北海道までの低山の明るい林に渡来する。北日本では平地にも分布する。

県内分布　夏鳥として平地から山地にかけての明るい林に渡来する。県内では海岸の防風林にも少数が生息するが、近年平野部、海岸林の減少が著しい。

生　態　夜行性で、飛びながら大きな口を開けてガなどの昆虫を捕る。まばらな林の中で営巣し、地面に直接産卵して抱卵・育雛を行う。繁殖期は6～7月、抱卵期間は約18日。

生息地の条件　昆虫の豊富な明るい林。

生存の危機　生息地の開発などが考えられるが、詳しい原因はよくわかっていない。（A, D）



県内の分布

アカショウビン

Halcyon coromanda (Latham)

ブッポウソウ目カワセミ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類
国カテゴリー	なし

選定理由　山地のよく発達した森林を代表する種類。個体数も少ない。

形　態　全長約27㎝。雌雄同色で全身赤みを帯びた褐色。下面はやや淡く、黄色みを帯びている。嘴は赤く、大きくて長い。

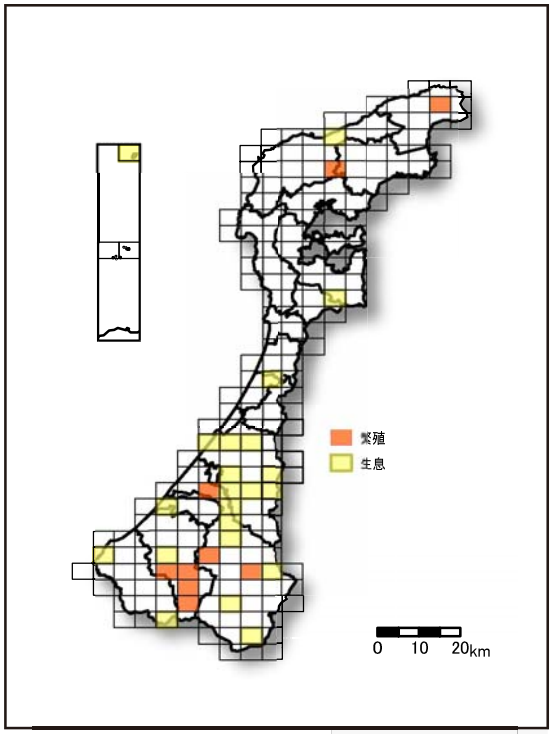
国内分布　夏鳥として渡来し、全国のよく発達した森林や渓流に生息する。北日本では平地林にも生息する。

県内分布　夏鳥として渡来し、県下全域の山地帯のほか、能登ではよくその声を耳にする。

生　態　森林内の湿地や沢、渓流などでカニ、カエル、小魚、大型昆虫などを捕る。県内では5月中旬頃渡来、6～8月が繁殖期。主に朽ち木に穴をうがって営巣するが、スズメバチの古巣を利用して繁殖した例もある。

生息地の条件　よく発達した森林、餌動物の豊富な渓流。

生存の危機　森林の伐採。特に奥能登での森林伐採の影響が心配される。 (A)



県内の分布

ブッポウソウ

Eurystomus orientalis (Linnaeus)

ブッポウソウ目ブッポウソウ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類
国カテゴリー	絶滅危惧ⅠB類

選定理由
ブナ林など発達した森林に生息する種であり、個体数が少ない。近年減少している。

形　態
全長約30㎝。全身青みがかった緑色、頭部は黒色味が強い。足、嘴は赤。風切羽には白斑があり、飛翔時に目立つ。

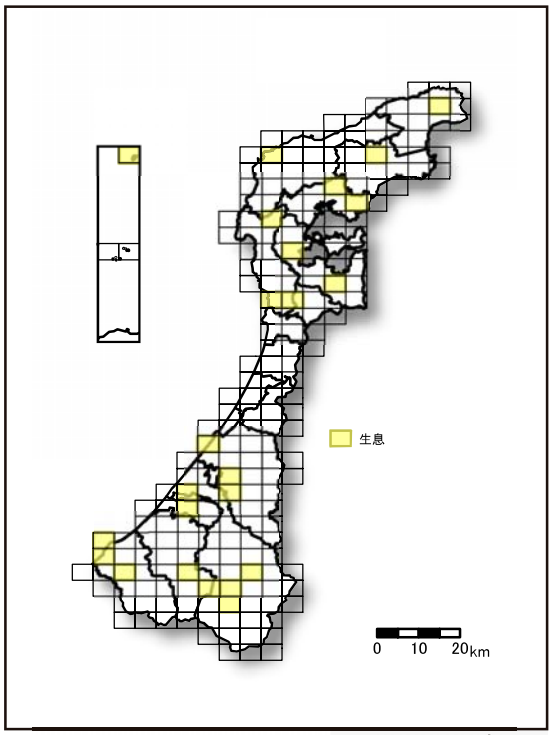
国内分布
夏鳥として本州、四国、九州の発達した森林に渡来するが、分布は極めて局地的である。

県内分布
夏鳥として山地帯の発達した森林に渡来する。渡りの季節には県内各地の山地で、時折目撃されることがある。

生　態
大型昆虫を主食とし、高木にとまってフライキャッチを行う。5～7月が繁殖期で、大木の樹洞などで営巣し3～4個の卵を産む。抱卵期間は22～23日、育雛期間は約4週間。近年の研究ではキツツキ類やムササビの古巣を多用することがわかっている。巣箱も利用することが知られる。

生息地の条件
営巣木となる大木と、巣穴の提供者となるムササビ、キツツキ類の存在。

生存の危機
営巣木の伐採と巣穴提供者の減少。餌となる大型昆虫の減少。(A)



県内の分布

コジュリン

Emberiza yessoensis（Swinhoe）

スズメ目ホオジロ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類
国カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類

選定理由　全国的に数のすくない種類である上、県内での繁殖地は河北潟干拓地のみである。

形　　態　全長15cm、全身褐色で胸から腹部は淡褐色。オスの夏羽では頭巾を被ったように頭部が黒い。

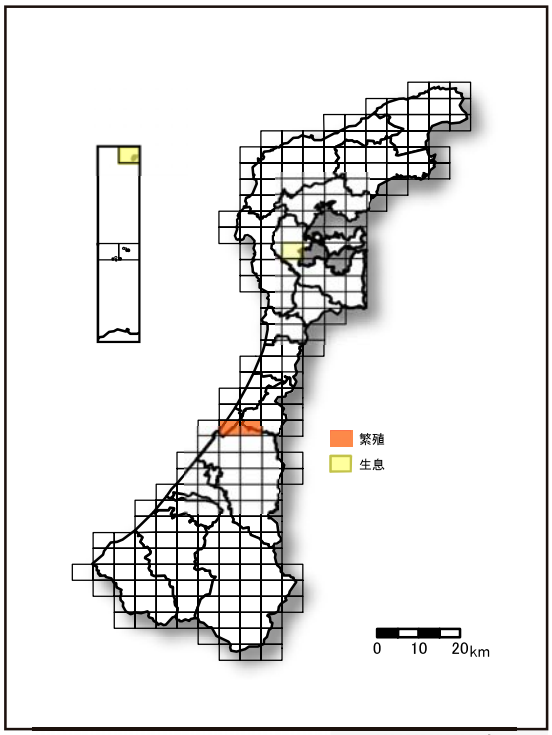
国内分布　青森県、千葉県、茨城県などに夏鳥として渡来し、局地的に繁殖している。冬は本州中部以南のヨシ原や草原で越冬する。

県内分布　春から夏、河北潟干拓地の牧草地、麦畑で少数が見られ、繁殖していると考えられる。ただし干拓地の農業に依存している部分が大きく、将来の作物転換によっては消失する可能性がある。秋から冬にかけては県内のヨシ原で越冬すると思われるが、観察記録はほとんどなく、実態はよく分かっていない。

生　　態　春から夏にかけて、ヨシや背の高い草に止まってさえずる。5月から7月にかけてイネ科の草の根元に営巣する。約2週間でふ化し、11～12日で巣立ちする。

生息地の条件　ヨシ原、牧草地、麦畑など広い草原。

生存の危機　牧草地や麦畑の作物転換、放棄などによる生息地の草原の消失。（A, B）



県内の分布

カンムリカイツブリ

Podiceps cristatus (Linnaeus)

カイツブリ目カイツブリ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由
この種の、世界の繁殖分布の東北端にあたり、生物地理学上も注目すべき存在であるため。

形　態
全長50～56cm。大型のカイツブリで首が長い。雌雄同色で、夏羽では黒い冠羽と、頬に赤褐色と黒の飾り羽があり、よく目立つ。体は黒褐色で、腹など下面は白い。冬羽では飾り羽がなくなり、顔は白くなる。

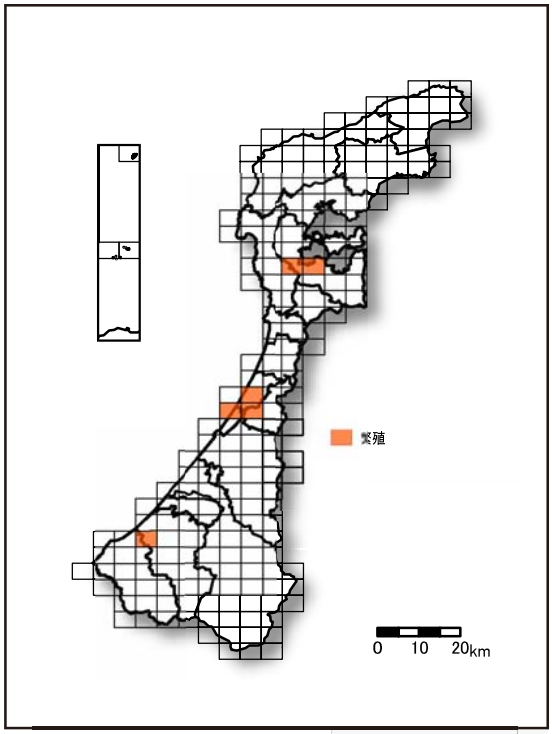
国内分布
冬鳥として九州以北の湖沼、河口、内湾に渡来するが、青森県や滋賀県では少数が繁殖している。青森県の小川原湖沼群に繁殖する個体群は国RDBで絶滅のおそれのある地域個体群に指定されている。

県内分布
主に冬鳥として県内の河川、湖沼、海岸に渡来するが、最近になって柴山潟、河北潟、七尾西湾で少数が繁殖するようになった。

生　態
地上を歩く事がほとんどない潜水性の水鳥で、水に潜って魚、甲殻類、昆虫などを捕食する。4月頃、ヨシやマコモの近くに水草を集めて浮き巣を作り産卵し、約4週間でふ化する。ふ化したヒナはすぐ泳げるが、8月頃まで親鳥から給餌を受けながら一緒に行動する。

生息地の条件
広い水域を持つ大きな湖沼と、餌となる魚など水生生物が豊富なこと。

生存の危機
繁殖域となる湖沼のヨシ原の開発や、釣り人などの影響。（A）



県内の分布

ササゴイ

Butorides striatus (Linnaeus)

コウノトリ目サギ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由
個体数が少なく、繁殖できる環境の減少により個体数が減少している。

形　態
全長約52㎝。雌雄同色。羽色は頭上が黒色で、後頭部から黒い冠羽が伸びる。背と雨覆光沢のある濃い灰色。下面は明るい灰色で、足と眼は黄色い。若鳥は頭から背にかけて濃い茶色。

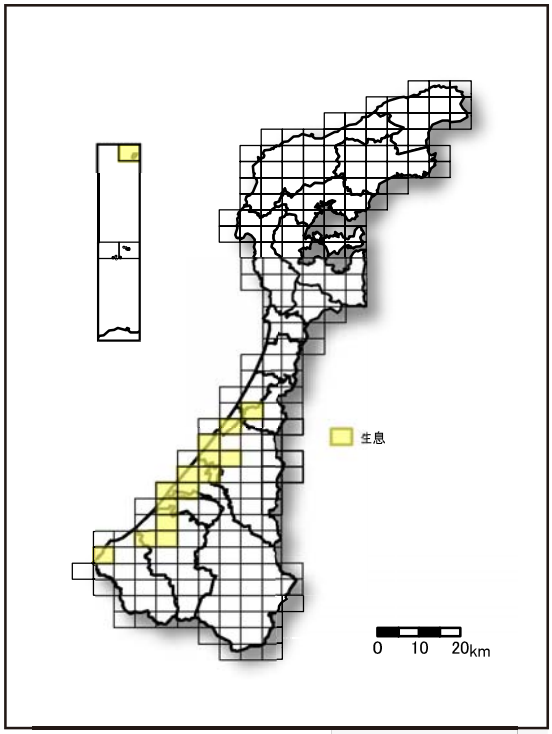
国内分布
本州から九州の各地で繁殖。九州南部では冬にもとどまるものがある。薩南諸島以南から東南アジアにかけては冬鳥として10月頃渡来し、3月頃まで越冬する。

県内分布
水辺近くの林や藪で繁殖するが局所的である。

生　態
水辺に生息し、魚、カエル、ザリガニなどを食べる。日中だけでなく夜間にもさかんに採食する。飛びながらキューまたはピューという鋭い声で鳴く。小さなコロニーをつくり繁殖する。マツ、スギなどの横枝に小枝を集めて粗雑な巣を作る。

生息地の条件
近くに川や池などの餌が豊富な場所があり、繁殖地としてヒトが近づかない林や藪を必要とし、近くに川や池などの餌が豊富な場所を必要とする。

生存の危機
繁殖地となる水辺近くの林や藪が減少。河川改修等で餌となる魚などが減少した。 (A)



県内の分布

チュウサギ

Egretta intermedia (Wagler)

コウノトリ目サギ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	準絶滅危惧

選定理由
県内での個体数は少なくないが、国のRDB種であることを考慮して選定。

形　態
全長63～72cm。雌雄同色。全身白色で、他のシラサギ類に比べてずんぐりした嘴や頭をしていて、首も短め。足の色は黒色。目先は黄色で、嘴の色も黄色であるが、繁殖期になると黒色に変化する。虹彩の色も黄色から赤に短い期間だが変化し、肩や胸に長い飾り羽が生じる。

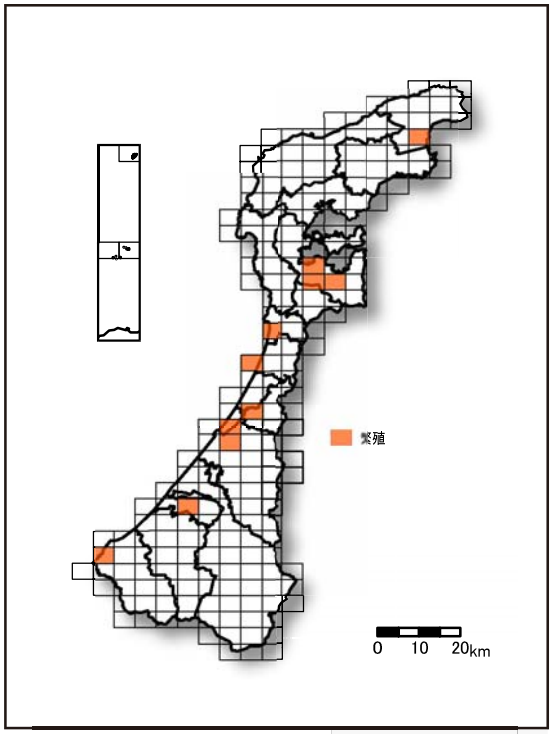
国内分布
主に夏鳥として本州以南に渡来。一部は国内で越冬する。東北や北陸地方に少なく、全国的に減少傾向にある。

県内分布
水田、潟などに生息するが、個体数は少ない。繁殖は海岸の防風林などで行う。

生　態
水田、湿地などで魚類、甲殻類、昆虫、クモ類などを捕って生活するが、ダイサギ、コサギのように海の干潟には出ない。林や竹藪で他のサギ類との混合コロニーで繁殖する。

生息地の条件
餌が豊富な水田や潟。繁殖できるような人が近づかない広い林。

生存の危機
防風林の減少や公園化、フン害などによる追い出しで繁殖可能な場所が減少。また水田の乾田化などで採食環境が悪化している。（A）



県内の分布

クロサギ

Egretta sacra (Gmelin)

コウノトリ目サギ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由

個体数が少ないうえ、繁殖地が限られており、脆弱である。

形　態

全長58～66cm。雌雄同色。全身がすすけた濃い灰色で、喉は黒いものと小さな白い部分あるものとがいる。嘴は黄褐色だが黒っぽい個体もいる。夏羽では目立たない短い冠羽がある。足は黄緑色で指の裏は特に黄色い。亜熱帯から熱帯のサンゴ礁の海岸には全体が白い白色型がいる。

国内分布

本州以南に分布。太平洋側では房総半島以西、日本海側では男鹿半島以南で局地的に繁殖している。

県内分布

繁殖期以外は能登から加賀の海岸に広く分布するが個体数は少ない。確実な繁殖記録は能登だけである。

生　態

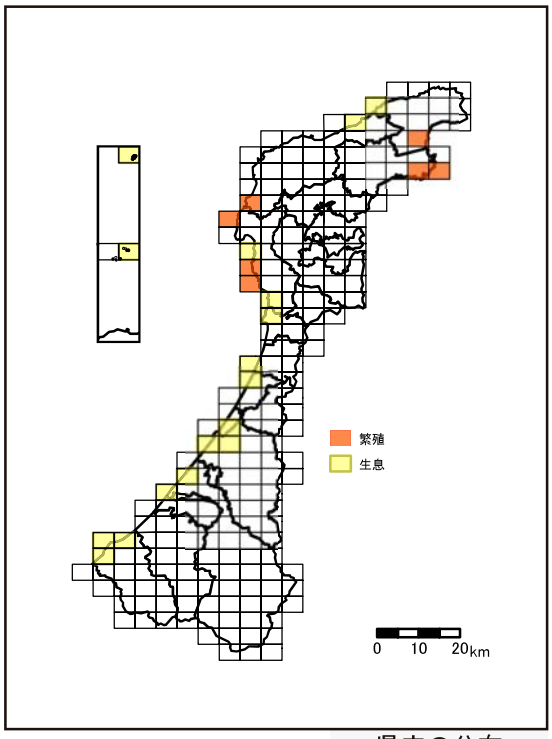
岩礁海岸に生息。磯の波打ち際で魚を待ち伏せする。繁殖期は5～6月で、断崖の岩の隙間に小枝を運び込んで巣を作る。時には低木の枝の上に営巣することもある。非繁殖期には岩礁を離れて干潟や河口で観察されることもある。

生息地の条件

餌が豊富な岩礁海岸で、人の影響が少ない場所。

生存の危機

営巣地周辺での人間活動。特に釣り人の影響は大きい。(A)



県内の分布

オシドリ

Aix galericulata (Linnaeus)

カモ目カモ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	情報不足

選定理由
繁殖できる森が減少し、繁殖個体数が減少している。越冬する個体数も少ない。

形　態
全長41～47cm。雄の生殖羽は銀杏羽とよばれるオレンジ色の扇形の羽を翼に持つ。雌は全体が褐色味を帯びた暗灰色で、地味な羽色である。雄のエクリプスは雌に似る。雌雄とも翼鏡は濃緑色、足はオレンジ色。

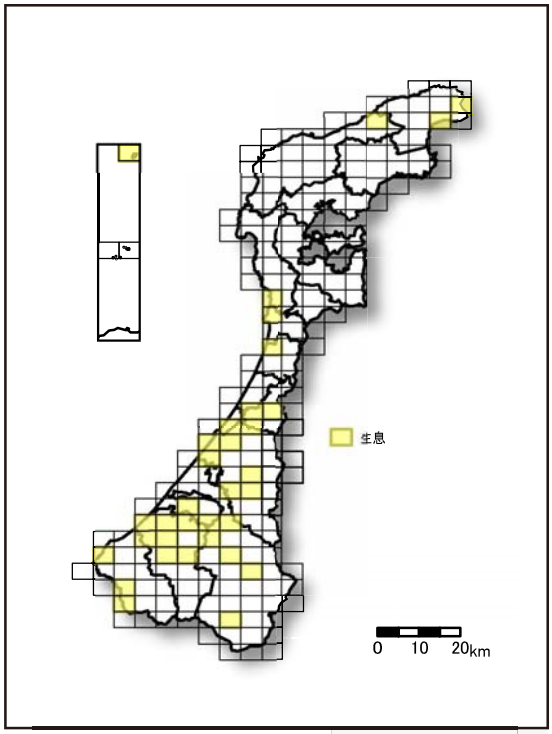
国内分布
主に中部地方以北で繁殖し、冬期は西日本で越冬するものが多い。北海道では夏鳥。

県内分布
低山帯の所々で繁殖をしているようだが、その繁殖形態から直接的な観察例は少ない。繁殖期以外は大きな河川の上流の渓谷やダム湖などに少数が生息する。

生　態
繁殖期は低地から低山帯の水辺の林の樹洞で営巣する。主に植物食でドングリを好む。穀類、水生植物を食べるほか、カタツムリ、魚などの小動物も採食する。

生息地の条件
広葉樹が覆い被さるような薄暗い水辺を好むため、山地の林に囲まれた湖沼や渓谷。営巣のために樹洞があるような大きな木がある森を必要とする。

生存の危機
樹洞ができる大きな木が減少している。また餌となるドングリがなる森林が減少している。 (A)



県内の分布

ヨシガモ

Anas falcata Georgi

カモ目カモ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由　個体数が少ない上に、狩猟鳥として撃たれている。

形　　態　全長46～53cm。雄の冬羽は頭部が暗緑色で、後頭に房状の冠羽がある。喉が白色で、首に黒帯があり、三列風切が尾を隠すほど長い飾り羽となっている。胸は灰色で三日月形の黒斑がある。雌は全体が黄褐色の斑のある黒褐色。雄のエクリプス羽は雌に似る。

国内分布　冬鳥として渡来するが、個体数は多くない。北海道では少数が繁殖する。

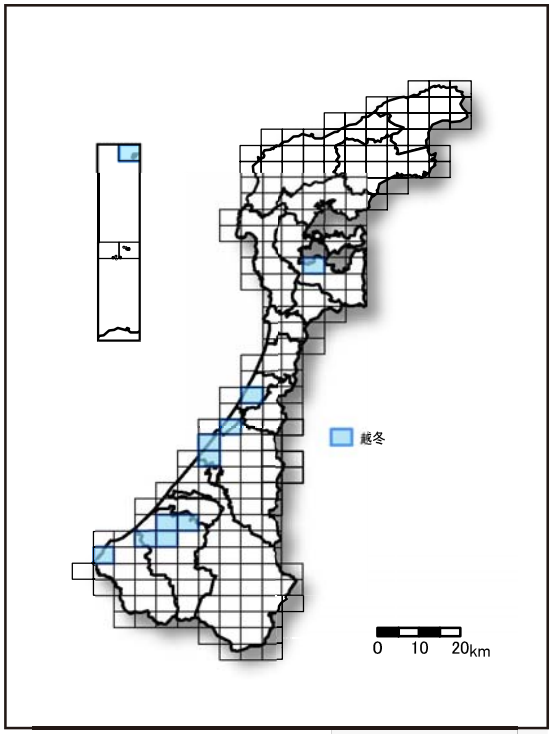
県内分布　冬鳥として渡来するが個体数は少ない。河北潟、七尾西湾、片野鴨池などに小群が渡来するが、他の場所では数羽程度である。

生　　態　遠浅の波静かな湾内を好み、湖沼、池などでも過ごす。群でいることが多い。河口で海藻を食べる大きな群が見られることもある。主に植物食で、穀類、草の種子、水生植物、水藻などを食べるが、水生小動物も食べる。

生息地の条件　人が近づかない波静かな内湾や潟、池などで、餌が豊富な場所。

生存の危機　ハンターによる狩猟圧。（A）

特記事項　狩猟鳥。



県内の分布

シノリガモ

Histrionicus histrionicus (Linnaeus)

カモ目カモ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由

個体数が少なく、落ち着いて生息できる環境が狭められている。

形　態

全長38～51cm。雄の模様が美しいカモで、冬羽は頭から上胸と背が青灰色で、眼より前面が白色、耳部に大きい白円斑、その後方にも白い縦長斑がある。胸側と肩羽にも白い帯斑がある。後頭部が赤栗色で、脇は栗褐色、翼は暗褐色で白色の斑や線がある。尾は黒く、側方に小さな白斑がある。雌は眼の下と耳部の大きな白斑があって、全体が褐色。雄のエクリプス羽は雌に似るが、上面がより暗褐色である。

国内分布

冬鳥として渡来し、主に北日本で越冬する。少数が本州北部で繁殖する。

県内分布

能登外浦の海岸に多く、羽咋市柴垣や滝港などに数十羽が越冬する。砂浜が多い加賀海岸ではテトラポットがある場所で観察されることもあるが、個体数は少ない。

生　態

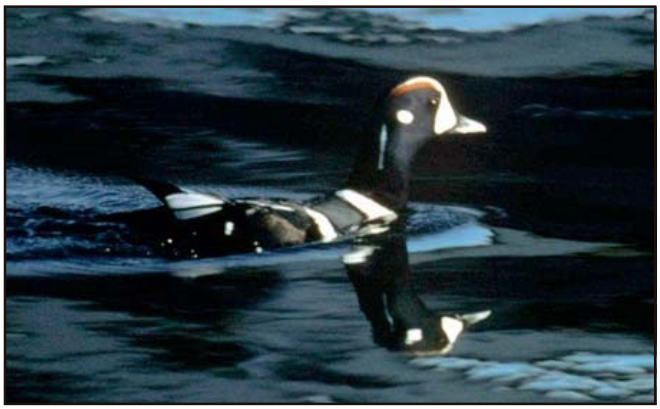
冬期は波の荒い岩礁海岸で、小群で見られる。翼を半開きにして跳ねるようにして水中に潜り採食する。繁殖期には内陸の森林内の渓流に移動し、渓流沿いの草むらや岩陰などに営巣する。動物食で、繁殖期には主にトビケラやその幼虫、冬期には貝類や甲殻類などを食べる。

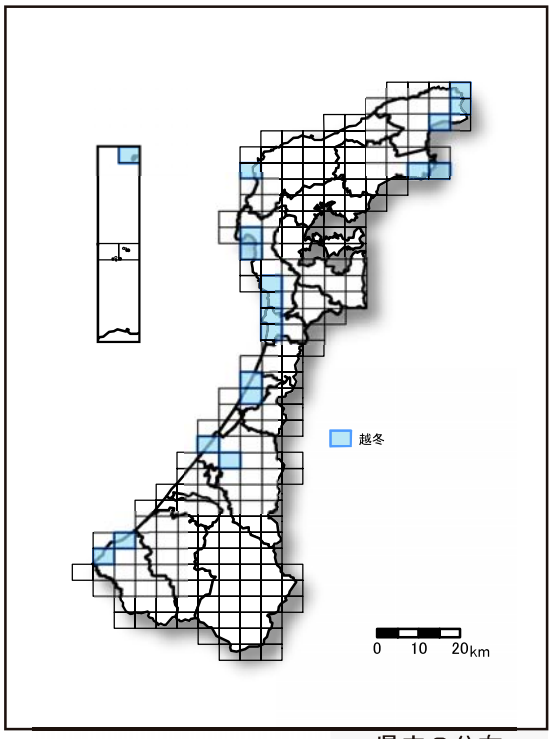
生息地の条件

人が近づかない波の荒い岩礁で、貝類や甲殻類が多く生息する場所。

生存の危機

越冬地での人間活動。岩礁地帯は岩ノリ採り、砂浜はサーファー等の影響で、落ち着いて採食できる環境が減少している。（A）





県内の分布

ホオジロガモ

Bucephala clangula (Linnaeus)

カモ目カモ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由　近年、減少傾向であり、落ち着いて生息できる環境が減少している。

形　　態　全長40～51cm。雄の冬羽は、頭部が緑光沢のある黒色。眼の下前方に大きな円形の白斑がある。首下の下面は白色で、背中央から尾は黒色。虹彩は黄色。雌は全体が濃褐色から褐色。嘴の先端に黄褐色の帯がある。雄のエクリプス羽は雌に似るが、頭部がより暗色。

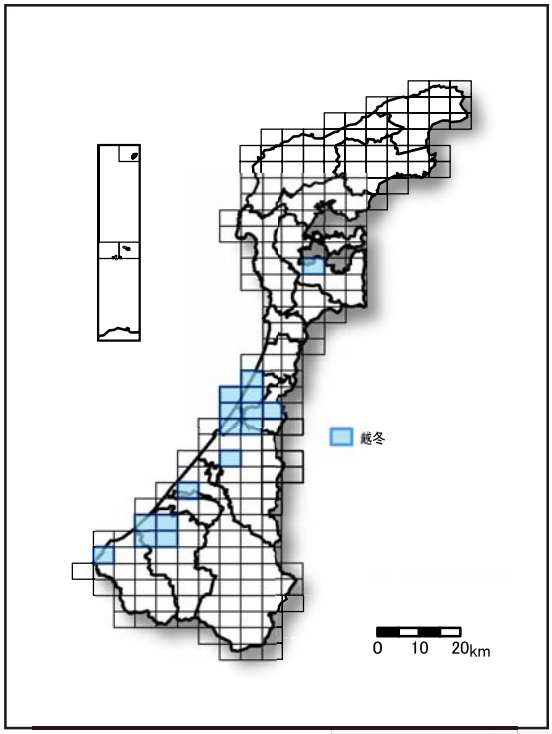
国内分布　冬鳥として全国的に渡来するが、北日本に多い。

県内分布　冬鳥として七尾西湾に毎年約50羽あまりが渡来する。河北潟など加賀の海岸、湖沼でも観察されるが、稀である。

生　　態　主に入り江、内湾、干潟などの海岸部で過ごす。潜って採食するのがよく見られる。動物食で、昆虫類、甲殻類、軟体動物などを食べ、時には水生植物も食べる。

生息地の条件　人が近づかず、甲殻類などの餌が豊富で波静かな内湾。

生存の危機　ハンターによる間接的な狩猟圧。 (A)



県内の分布

ビロードキンクロ

Melanitta fusca（Linnaeus）

カモ目カモ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由　県内では渡来地が減少し、近年の個体数が減少している。

形　　態　全長55cm、オスは全身黒色で目の下に白い三日月斑がある。クチバシと足は朱色でよく目立つ。メスは全身黒褐色で目先とホオに白斑がある。

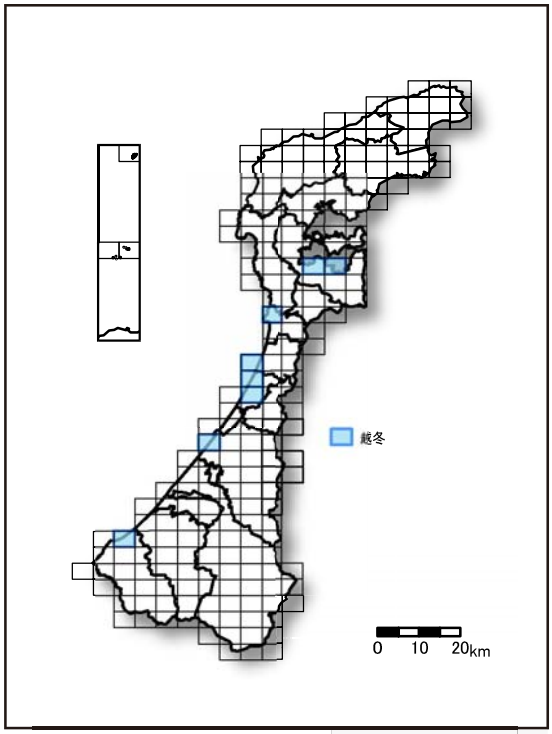
国内分布　冬鳥として北海道から東北、北陸にかけての沿岸、海上に渡来する。

県内分布　冬鳥として県内の沿岸に渡来するが、能登外浦での観察例は少ない。

生　　態　沿岸や海上に生息し、潜水して貝類などを採る。

生息地の条件　貝類など豊富な底生生物のすむ海。

生存の危機　重油流出などの海洋汚染や定置網などの混獲が予想されるが、実態はよくわかっていない。（A, D）



県内の分布

ウミアイサ

Mergus serrator Linnaeus

カモ目カモ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由　個体数が少なく、落ち着いて生息できる環境が少なくなっている。

形　態　全長48～66cm。雄の冬羽は光沢のある緑黒色。首に太い白帯があって、次に黒斑の混じった褐色帯がある。それ以下の下面は白色で、脇は細かい白黒の波斑。背は黒色で、翼は大部分が白色。嘴、足、虹彩が赤色。雌の頭部は褐色で、他は灰褐色。雄のエクリプス羽は雌に似るが、虹彩の赤みが強い。

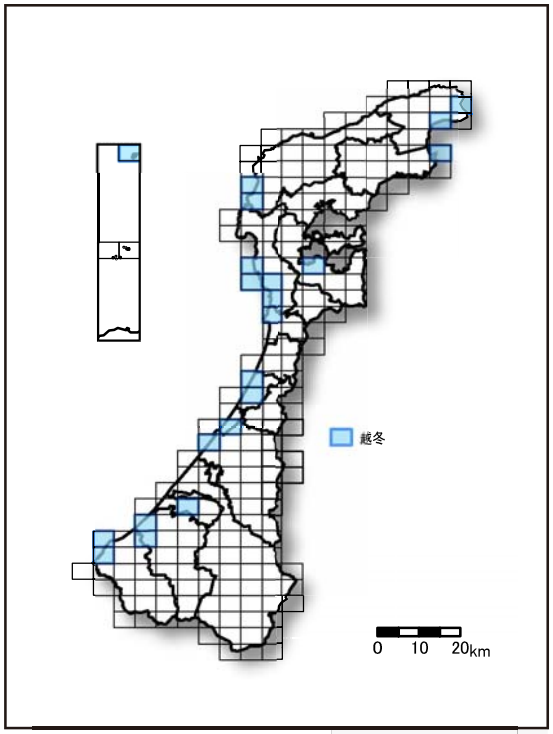
国内分布　冬鳥として全国的に渡来するが、個体数は少ない。

県内分布　羽咋市、志賀町、輪島市などの海岸に少数が渡来する。他の地域では観察例も少ない。

生　態　越冬中は沿岸や入り江で見られるが、沿岸の湖や池に飛来することもある。単独から小群でいることが多いが、大きな群で過ごすこともある。昼間によく潜って採食する。きわめて魚食性の強いカモである。

生息地の条件　人が近づかない沿岸や湾の入り口などで、魚など餌が豊富な場所。

生存の危機　比較的警戒心が強いので、人の影響、特にハンターによる間接的な影響が大きい。（A）



県内の分布

カワアイサ

Mergus merganser Linnaeus

カモ目カモ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由　近年、個体数が減少しており、落ち着いて生息できる環境が減少している。

形　　態　全長51～68cm。大型のカモで、雄の冬羽は頭が緑光沢の黒色。上頸以下はピンクがかった白色で、背は黒色。嘴と足は赤色。雌はウミアイサの雌に似る。雄のエクリプス羽は雌に似る。

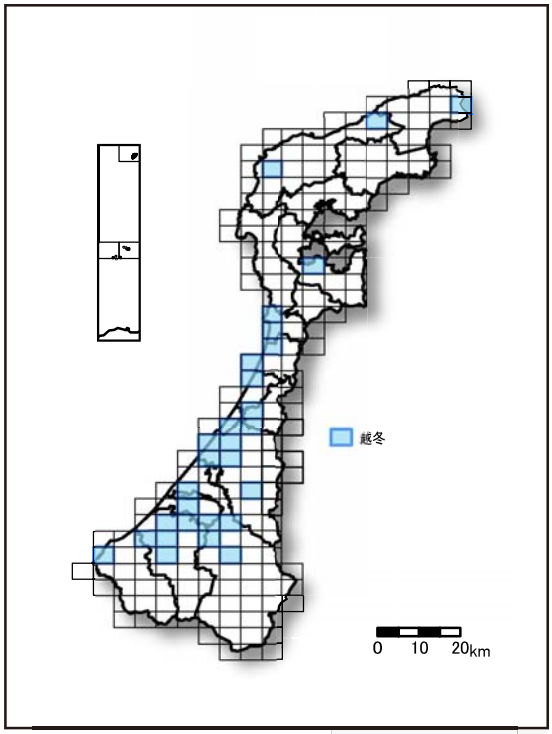
国内分布　冬鳥として渡来し、北日本に多い。少数が北海道で繁殖する。

県内分布　冬鳥として渡来し、主に河北潟などで見られるが、犀川や手取川の中流域などでも少数が越冬する。近年渡来数が減少し、1980年代に比べ、渡来数は半分以下となっている。

生　　態　越冬中は内陸の大きな湖沼や内湾などで過ごす。数羽から100羽位の様々な群となる。活動的で、頭だけを水中に入れて魚を探しながら泳ぎ、潜って採食する。繁殖期は森林内の湖沼、河川、池などにすみ、樹洞を使って繁殖する。主食は魚類で、甲殻類や水生昆虫も食べる。

生息地の条件　大きな魚が豊富に生息し、あまり人が近づかないような河川、湖沼の存在。

生存の危機　環境の悪化などにより餌となる河川の魚が減少。（A）



県内の分布

ミサゴ

Pandion haliaetus (Linnaeus)

タカ目タカ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	準絶滅危惧

選定理由

沿岸、河川、湖沼などの水界生態系の頂点に位置するタカで、水質汚染などによる影響を受けやすい。

形　態

全長約60cm。翼開長約1.6m。雄よりも雌が大きい。トビよりも少し大きいタカで、翼は細長く尾は短い。体の上面は褐色で頭から下面は白く、めだつ黒い過眼線と胸には褐色の斑がある。

国内分布

北海道から沖縄まで広く全国に分布し、北九州以北で繁殖している。北日本のものは秋期に南に移動し、暖地で越冬する。

県内分布

柴山潟、木場潟、河北潟、邑知潟、七尾西湾などの海岸や湖沼で周年姿が見られ、県下全域の山地で繁殖が確認されている。冬期には冬鳥として渡来するものがあるらしく、個体数が増え、県内の水辺で普通に観察される。

生　態

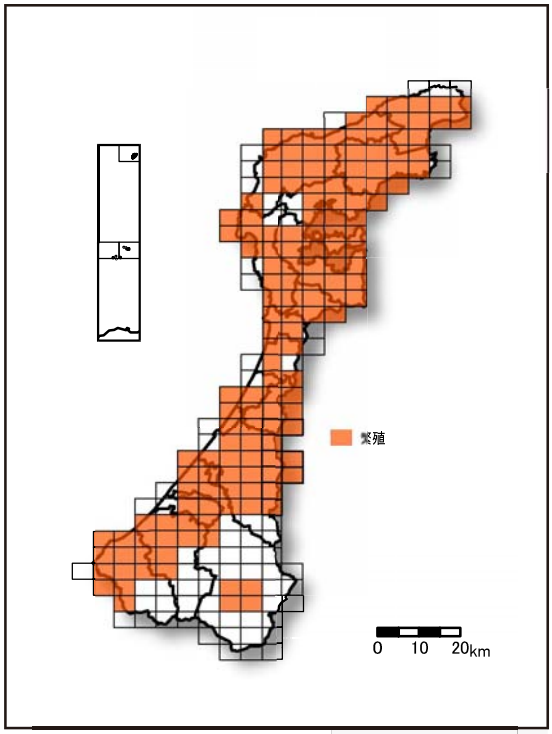
海岸の断崖や海岸に近い尾根上の大木などで営巣するが、県内で確認されているのは主に後者である。産卵は5月頃で、一腹卵数は普通3個、抱卵日数は約35日、孵化後約50日で巣立ちする。空中に停空飛翔してから急降下して水につっこみ、足指の爪で魚を捕らえて餌にする。

生息地の条件

餌となる魚類が豊富に生息し、汚染されていない水辺が餌場として存在すること。さらに、餌場から遠くない山地の尾根上に、外敵（特に人間）が近づけない営巣に適した大木があること。

生存の危機

かつては農薬の影響を強く受けていたと思われるが、現在は山地の森林伐採や、海岸営巣地への釣り人の侵入などの影響が考えられる。（A）



県内の分布

ハチクマ

Pernis apivorus (Linnaeus)

タカ目タカ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	準絶滅危惧

選定理由

個体数が少なく、人間の生活圏に近い所に生息するため、開発等により生存がおびやかされやすい。

形　態

全長約60cm。翼開長約1.3m。雄よりも雌が大きい。トビよりもやや小さいタカで、色彩は個体変異が大きい。頭上から後頭、背、腰、尾は褐色で、尾には数本の黒帯がある。顔は青灰色、淡褐色、褐色などいろいろで、胸から腹は淡褐色などの地に黒い縦斑があり、胸と喉の境に黒く太い斑紋がある個体が多い。翼の上面は褐色で下面は淡色の地に黒い横斑がある。

国内分布

夏鳥として渡来し、北海道、本州、佐渡で繁殖する。四国、九州、沖縄では渡りの際に通過するが、繁殖はしていない。

県内分布

1991年に加賀と能登で初めて繁殖が確認されている。春期の5月中旬頃と秋期の9月から10月上旬にかけて、渡り途中の個体が県内各地で観察される。特に秋期は能美市観音山や加賀市刈安山などで南に渡る個体が多い日には数十羽確認できる。

生　態

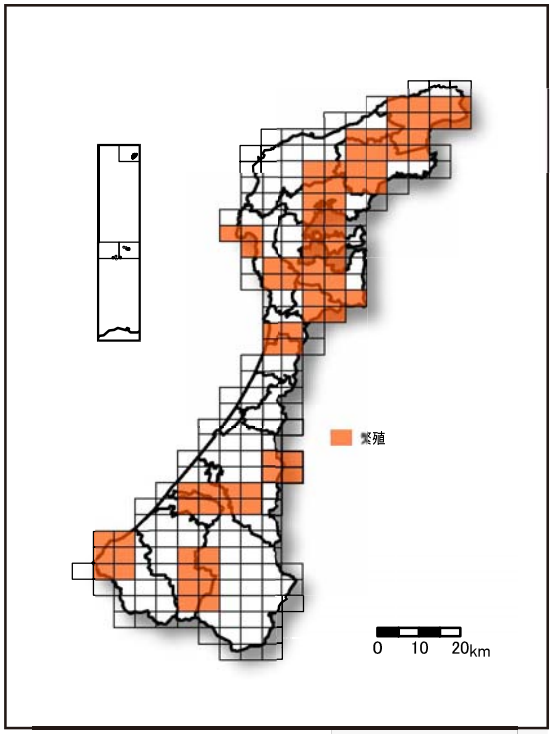
加賀や能登の山地のスギ、アカマツ、モミなどの針葉樹やコナラなどの落葉広葉樹に営巣し、同じ巣を連続して使うことが多い。産卵期は5月下旬から6月下旬で、一腹卵数は1～3個、抱卵日数は35日前後、孵化後約40日で巣立ちする。両生類、爬虫類のほかハチ類の幼虫や蛹を好んで餌にする。

生息地の条件

餌となる両生爬虫類やハチ類が豊富に生息し、営巣に適した大木がある山地に生息する。人間活動による悪影響を受けやすく、人為的影響が少ないことが生息地の条件となる。

生存の危機

里山に住むため、開発など人為的影響を受けやすい。（A）



県内の分布

ハイタカ

Accipiter nisus (Linnaeus)

タカ目タカ科

石川県カテゴリー	情報不足
国カテゴリー	準絶滅危惧

選定理由

小型鳥類の捕食者として森林生態系の頂点に位置するタカで、県内では山地帯の森林に少数が繁殖するのみであるため。

形　態

全長約35cm。翼開長約70cm。雄よりも雌が大きい。ハトぐらいの大きさのタカで、短い翼と長い尾をもつ。成鳥雄は、上面は暗青灰色で尾には数本の黒色横帯があり、下面は白地に赤褐色の細い横斑がある。成鳥雌は、上面と下面の横斑が雄より褐色味がある。雌雄とも白い眉斑をもつ。幼鳥は全体的に褐色味が強い。

国内分布

北海道と本州で繁殖し、冬期は南日本でも見られる。

県内分布

山地帯の森林に少数が繁殖する。秋期の渡りの時期には、刈安山、観音山、医王山などの上空を、サシバやハチクマに混じって南に渡る個体が相当数確認されている。また冬期には低山、平野部でも観察される。

生　態

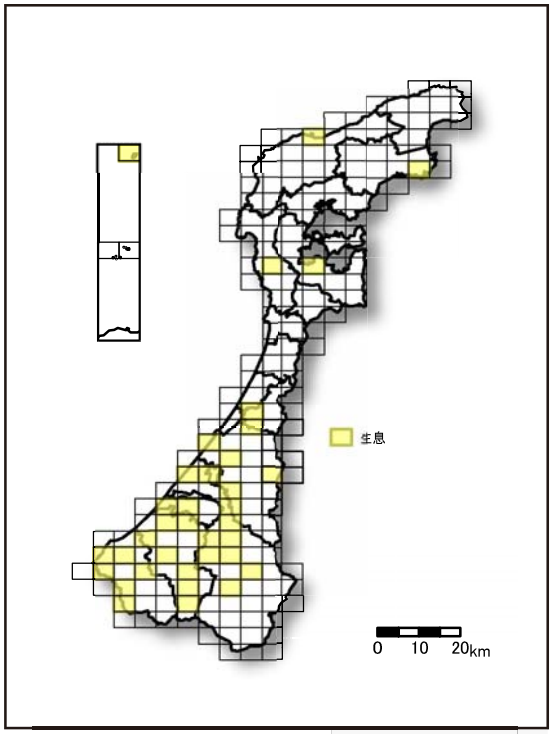
県内でも丘陵帯から山地帯にかけて局地的に繁殖している可能性がある。産卵期は本州では5月で、一腹卵数はふつう4～5個、抱卵日数は約33日、孵化後約30日で巣立ちする。秋期には南に渡る個体が観察される。小鳥類、リス、ネズミなどを主食にしている。

生息地の条件

本州中部では標高500mから1500mぐらいの山地が繁殖地である。県内での繁殖は確認されていないが局地的に繁殖している可能性がある。繁殖地の条件については不明である。

生存の危機

生息地が限定される上、繁殖数もごく少ないと思われる。（A）



県内の分布

ノスリ

Buteo buteo (Linnaeus)

タカ目タカ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由

かねてから繁殖の可能性が指摘されていたが、能登、加賀でそれぞれ繁殖が確認された。県内での繁殖個体は少なく、生息地も限定されるため。

形　態

全長約55cm。翼開長約130cm。雌は雄よりも少し大きい。翼は長くて幅が広く、尾は短めで、全体にずんぐりしており、トビよりも少し小さいタカである。頭部は淡褐色で暗褐色の過眼線と顎線が目立つ。体の上面は暗褐色で、胸から腹はクリーム白色で腹から脇にかけて暗褐色の斑が帯状になっている。尾は淡褐色で不明瞭な数本の暗色帯がある。

国内分布

北海道、本州、佐渡、四国などで繁殖し、九州、対馬でも繁殖期に観察されている。冬期は全国で見られ、琉球列島でも記録がある。

県内分布

2000年に能登町で繁殖が初めて確認され、その後も能登半島では10巣以上の繁殖が、また最近は加賀でも確認されている。冬鳥として平地から山地帯の開けた場所にふつうに渡来する。特に河北潟などで個体数が多い。

生　態

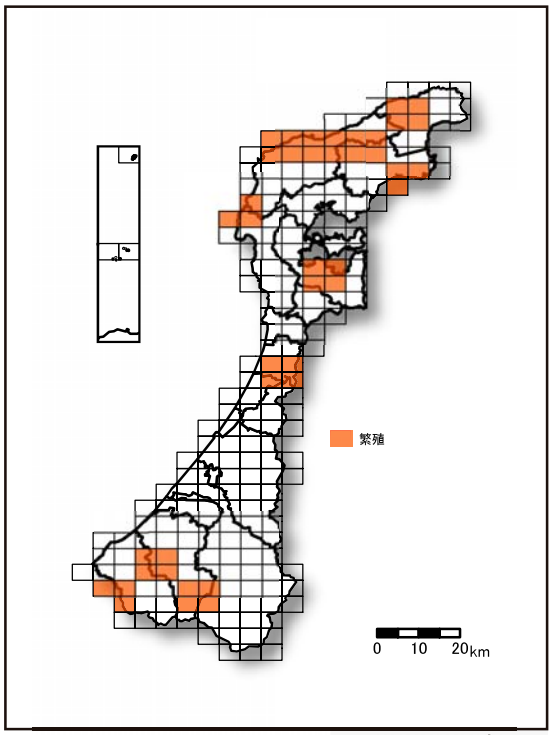
本州では、低山帯から亜高山帯の落葉広葉樹林や雑木林などで繁殖する。産卵期は多くの場合4月で、一腹卵数はふつう2～3個、抱卵日数は約30日、孵化後約40日で巣立ちする。日本では成鳥の留鳥性が強く、冬期も繁殖地周辺につがいで留まることが多いという。秋期には南に渡る個体も観察される。ネズミなどの小型哺乳類を主食にしている。

生息地の条件

本州での繁殖期における生息環境は、低山帯から亜高山帯の落葉広葉樹林、雑木林、アカマツ林、混交林などで、遠くないところに狩り場となる農耕地や草地のある林を好む。

生存の危機

越冬個体数は多いが、繁殖期の観察例は少ない。



県内の分布

ヤマドリ

Symaticus soemmerringil（Temminck）

キジ目キジ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	準絶滅危惧

選定理由　県内に広く分布するが、近年減少しており、生息環境も悪化している。

形　態　雄は全長125cm、雌で55cm。雄は尾羽が非常に長く、全身赤褐色で、頭、背など上面の色は濃い。顔は赤い皮膚が露出している。雌は全身褐色で尾羽は短い。

国内分布　本州、四国、九州の低山から山地の森林に留鳥として生息する。

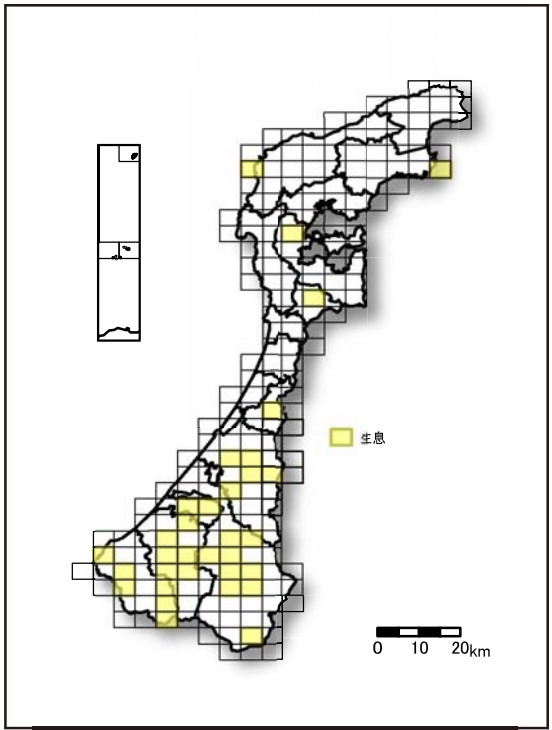
県内分布　県内の低山から山地の森林に留鳥として生息する。なお本県に分布するのは亜種キタヤマドリ*S.s.scintillans*である。

生　態　森林にすみ、地上で草の芽や葉、種子や木の実、昆虫などを食べるが、近縁のキジよりは植物食性が強い。繁殖期の雄は翼でドラミングと呼ばれる大きな羽音を立て存在を誇示する。

生息地の条件　餌となる多様な植物が繁茂する森林。

生存の危機　雄に対する狩猟圧、森林伐採や植林による広葉樹林の減少、無秩序な放鳥による亜種交雑の危機などが挙げられる。（A, B, C）

特記事項　日本固有種。国カテゴリーは、亜種アカヤマドリ*S.s.soemmerrinil*　準絶滅危惧、亜種コシジロヤマドリ*S.s.ijimae*　準絶滅危惧。



県内の分布

イソシギ

Actitis hypoleucos (Linnaeus)

チドリ目シギ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由
河川敷や湖沼畔の草地で繁殖し、冬期もその周辺や海岸部でみられるが、近年個体数が減少している。

形　態
全長20cm。翼長10～12cm。体重34～76g。頭頂から体の上面は灰黒褐色で顔から胸は白地に灰褐色の縦斑がある。腹部は白く、肩部にも白色部がくいこむ。飛翔時には白い翼帯が顕著に出る。嘴は黒褐色で基部は淡くまっすぐ、脚は黄褐色である。

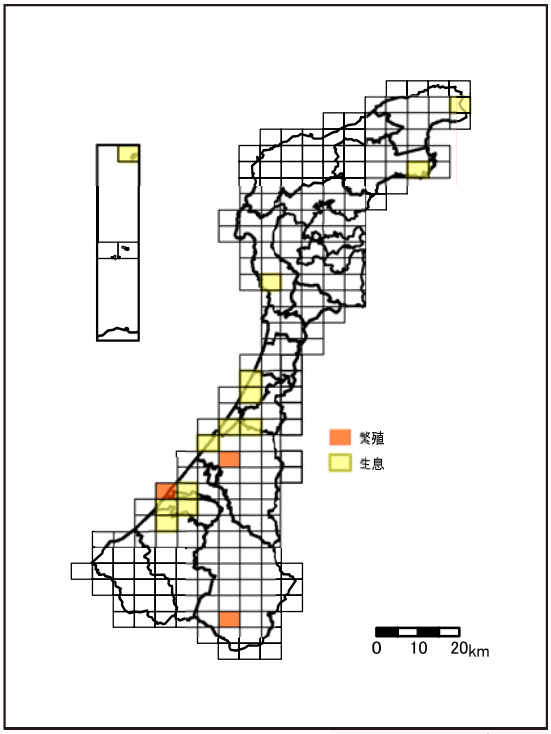
国内分布
北海道から南西諸島までみられるが、繁殖しているのは九州以北である。北日本では繁殖後暖地へ移動する。

県内分布
県内では留鳥。河川の中州や河川敷、湖沼畔の草地で繁殖している。渡りの時期や越冬期には、磯浜海岸、防波堤、砂浜海岸などにも出現する。

生　態
河川の中州や河川敷で4～7月に繁殖する。砂地を浅く掘って枯れ草などを集めた簡単な巣をつくり、3～4個の卵を産む。繁殖期初期には営巣地上空を鳴きながら飛び回る。抱卵期間は約23日で、孵化したヒナにはすでに綿毛がはえていて、親の保護のもと独力で採食し、25日ぐらいで独立する。餌は水生昆虫、カニ、ゴカイなどの小動物である。

生息地の条件
営巣場所は河川敷や湖沼畔の草地であるが、人間の活動圏に近い地上であるため、人間活動による悪影響を受けやすく、人為的影響が少ないことが生息地の条件となる。

生存の危機
河川敷や中州に侵入してくる4輪駆動車、オートバイ、釣り人などにより繁殖がかく乱されやすい。(A)



県内の分布

ヤマシギ

Scolopax rusticola Linnaeus

チドリ目シギ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由

県内の山地に生息するが個体数は少なく、繁殖している可能性もあるが確認された例はない。冬期の観察例も少ないにもかかわらず狩猟鳥であり、個体数の減少が危惧される。

形　態

全長35cm。翼長18～22cm。体重200～446g。まっすぐで長い嘴をもった太った大きなシギ。背面はオリーブ色味のある褐色で、翼には大きな暗色斑が多数あり、背中には太い縦縞がある。腹側は白っぽく褐色の細い横縞が多数あり、胸にV字型の黒斑がある。頭頂はややとがり、黒い横縞がある。眼がかなり後方についていて両眼でいつも全方位が見える。

国内分布

北海道から本州中部にかけてと伊豆諸島などで繁殖記録があり、東北地方南部から四国、九州、沖縄にかけての各地で越冬する。

県内分布

舳倉島で巣と卵が見つかった例があるが、それ以外には繁殖の確認例はなく、ほとんどが冬期の記録である。大聖寺川下流、野田山、医王山などで記録がある。渡りの時期には海岸林や舳倉島でも観察される。

生　態

繁殖期には広葉樹などの林にすみ、「キチッ、キチッ、ブーブー」と飛びながら鳴く。地上にくぼみをつくって4卵を産む。抱卵期間は約21日で、15～20日ぐらいで巣立つ。餌はミミズ、クモ類、昆虫類などの地上性の小動物で、たまに植物の茎や種子を食べる。

生息地の条件

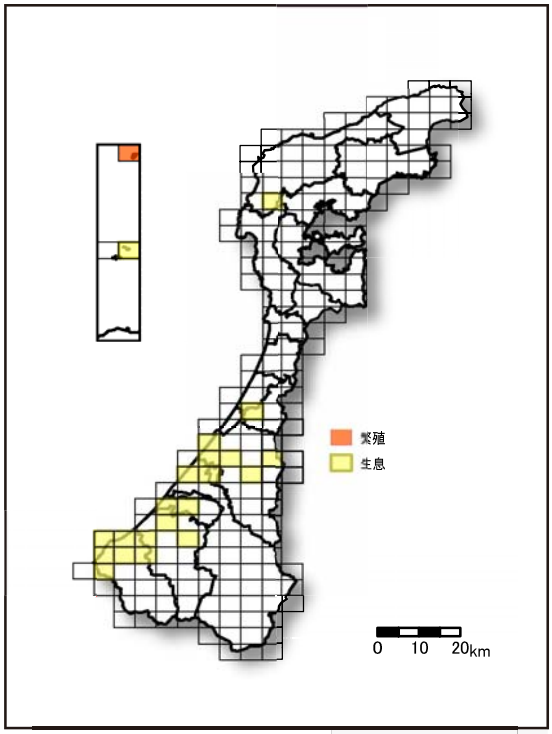
餌となる地上性小動物が豊富であること。営巣場所が地上であるため外敵の侵入が少ないこと。特に人間の活動圏に近い森林に繁殖するため、人間の踏み込みが少ない森林であること。

生存の危機

本県ではもともと生息数が少ない上に狩猟鳥に指定されている。（A）

特記事項

狩猟鳥。



県内の分布

ウミスズメ

Synthliboramphus antiquus (Gmelin)

チドリ目ウミスズメ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	絶滅危惧ⅠA類

選定理由　かつては冬期沿岸海上に多数見られたが、近年減少が著しい。

形　　態　全長約25㎝。小型の海鳥で、雌雄同色。頭部、上面は黒く、首、胸、下面は白。

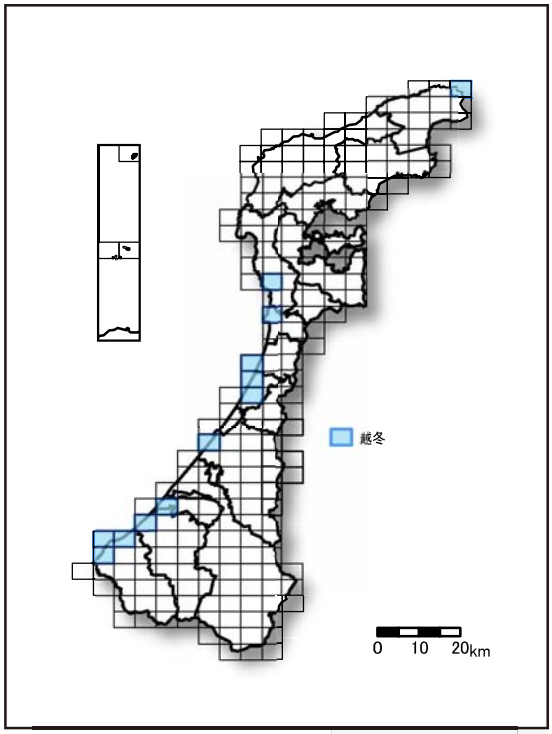
国内分布　北海道、東北地方の島嶼で少数の繁殖が知られる。冬期は北太平洋から渡来するものが多く、北海道、本州、九州北部沿岸で多数が越冬する。

県内分布　冬期、県内海上に広く分布する。ナホトカ号重油流出事故では加賀市から羽咋市までの海岸で回収されたものが多く、能登半島では少なかった。

生　　態　繁殖生態はカンムリウミスズメとほぼ同じ。冬期は海上で数羽から数十羽の群れで生活し、潜水して小魚などを追う。

生息地の条件　沿岸海上に越冬するが、内湾ではほとんど見られない。

生存の危機　定置網、刺し網など漁業による混獲。重油流出などによる海洋汚染。(A)



県内の分布

コノハズク

Otus scops Temminck & Schlegel

フクロウ目フクロウ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由
ブナ林など発達した森林を代表する小型猛禽類であり、近年減少している。

形　態
全長約20㎝。全身が褐色で濃い斑が散在している。眼の虹彩は黄色。頭部には小さな羽角がある。体色には灰色と赤褐色の2型がある。

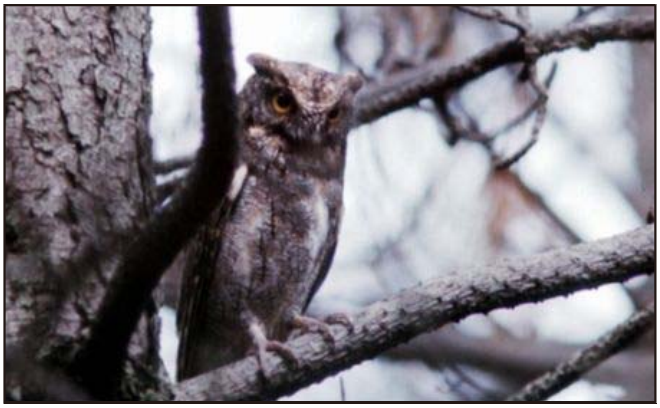
国内分布
九州以北に夏鳥として渡来し、本州では山地の森林、北海道では平地林にも繁殖する。

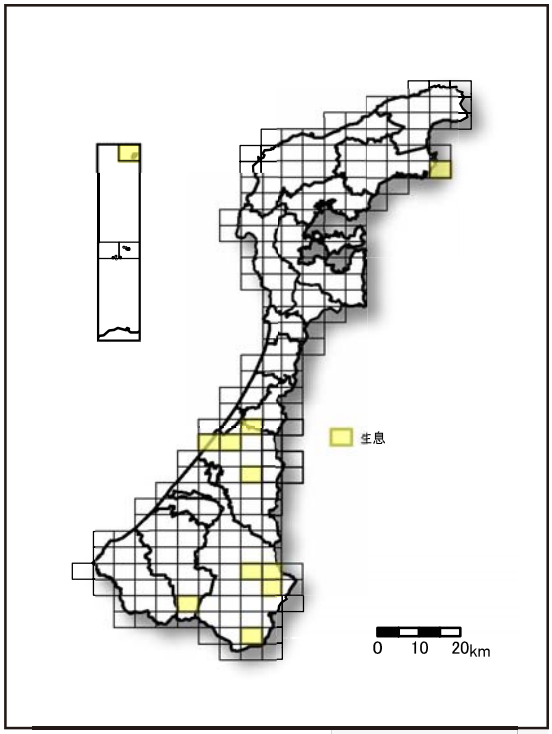
県内分布
夏鳥として、白山山系など山地帯のブナ林などに渡来し、繁殖する。春秋の渡りの時期には平地や市街地でも観察されることがある。

生　態
夜行性で昆虫を主食とする。山地の大木の樹洞で繁殖し、5～6月頃に産卵する。抱卵期間は約25日、育雛期間は約21日。

生息地の条件
山地の発達した森林、営巣木となる樹洞のある大木の存在。

生存の危機
山地の森林伐採が心配されるが、詳しい原因はよく分からない。（A, D）





県内の分布

サンショウクイ

Pericrocotus divaricatus (Raffles)

スズメ目サンショウクイ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類

選定理由
県内での生息数は少なくないが、国のRDBであることを考慮して選定。

形　態
全長約20㎝。雌雄ほぼ同色。雄では後頭部から首にかけて黒、額は白く、黒い過眼線がある。背中は青灰色。翼、尾は黒く下面は白い。雌では後頭部が灰色。

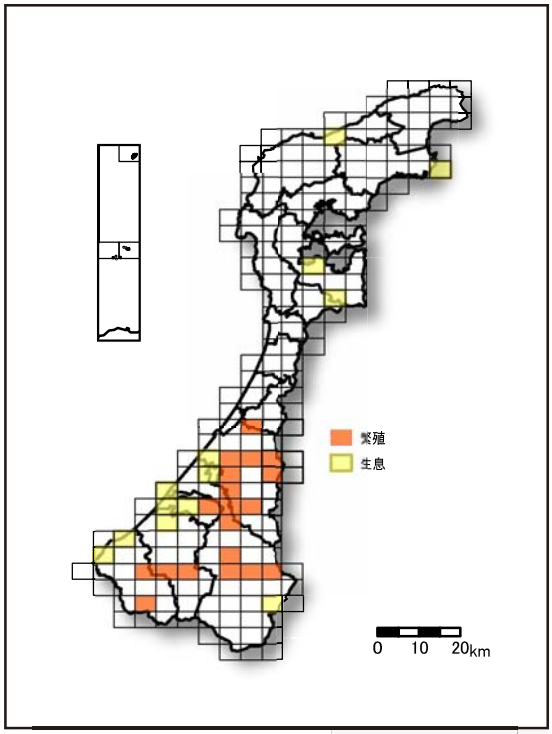
国内分布
夏鳥として本州以南の平地から低山帯の広葉樹に渡来する。関東周辺ではかって平地林に普通であったが、しだいに山地に後退し、近年は山地からも姿を消しつつある。

県内分布
夏鳥として低山から山地の広葉樹に渡来する。県内での生息数は少なくなく、全国的にいわれるほどの減少は見られない。

生　態
樹上性で、主食は昆虫。繁殖期は5～7月で、抱卵期間は17～18日。秋の渡りの時には数十羽の群をつくることもある。

生息地の条件
まとまった落葉広葉樹林の存在。

生存の危機
生息する落葉広葉樹林の伐採、針葉樹への転換など。また越冬地での環境悪化、乱獲などが懸念されている。（A）



県内の分布

サンコウチョウ

Terpsiphone atrocaudata (Eyton)

スズメ目カササギヒタキ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由
県内での生息数は少なくないが、近年全国的に減少している。

形　態
全長雄45cm、雌18cm。雄の尾羽は著しく長い。頭部から胸にかけては紫光沢のある黒色。背、翼、尾は褐色。下面は白い。雄の嘴と目の周囲はコバルトブルー、雌では淡い青。

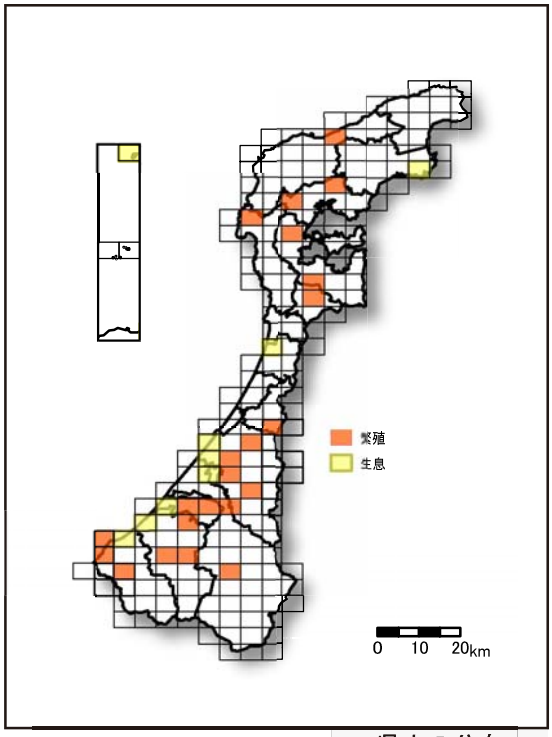
国内分布
夏鳥として本州以南に渡来する。平地から低山帯の広葉樹林やスギ、ヒノキの植林地を好む。近年全国的に減少しているが、県内では少なくない。

県内分布
県内の低山から山地帯の森林に生息する。20年ほど前までは各地のスギ、ヒノキの植林地に多数見られたが、現在は減少している。

生　態
主食は昆虫。繁殖期は6～7月。地上1.5～5mの樹上にコップ状の巣を作り、3～5卵を産む。抱卵期間は約2週間。

生息地の条件
県内では暗いスギ、ヒノキの植林地に生息しているが、詳細はよくわかっていない。

生存の危機
越冬地である東南アジア諸国の森林伐採を指摘する研究もあるが、詳細はよくわかっていない。 (A)



県内の分布

コシアカツバメ

Hirundo daurica Linnaeus

スズメ目ツバメ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由
能登地方を中心に生息しているが、近年の個体数の減少が著しい。

形　態
全長19㎝、雌雄同色で、ツバメより大きい。頭、背など上面は黒色で赤褐色の腰が特徴。胸、腹など下面は淡褐色で、細かい従斑がある。

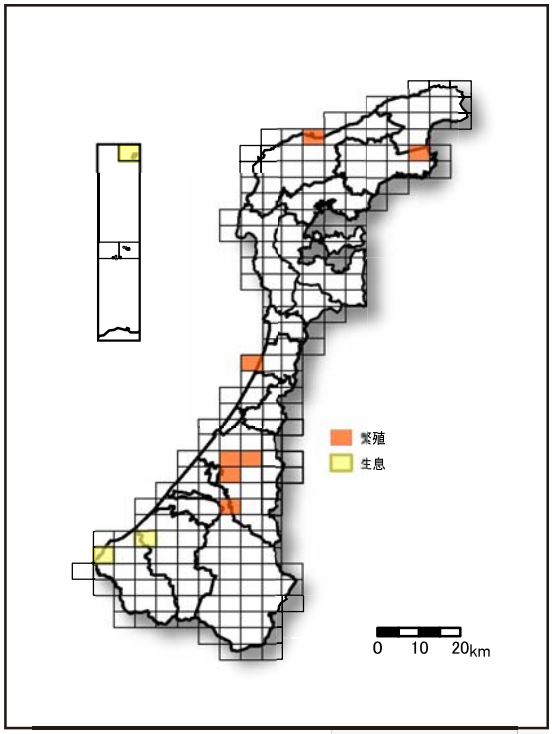
国内分布
夏鳥として九州以北に渡来するが、ツバメより数は少ない。かつては西日本中心の分布だったが、近年分布域は北上し、東北、北海道でも繁殖を始めた。

県内分布
海岸よりの住宅地や山間のビルなどに繁殖し、能登地方を中心に局地的に分布する。

生　態
ツバメの生態に似るが、ツバメほど群れる事はなく大きな群れは作らない。とっくり型の特徴的な形の巣を作り、一般家屋よりもビルや橋などコンクリート製建造物を好む。

生息地の条件
海岸よりの市街地で見ることが多いが、必ずしもそれが条件ではなく、詳しくはよくわかっていない。

生存の危機
近年減少が著しいが、減少の原因はよくわかっていない。（A, D）



県内の分布

セッカ

Cisticola juncidis (Rafinesque)

スズメ目ウグイス科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由　県内では分布が局地的であり、繁殖個体数も少ない。

形　　態　全長約12cm。全身茶褐色で胸、腹など下面は淡い。

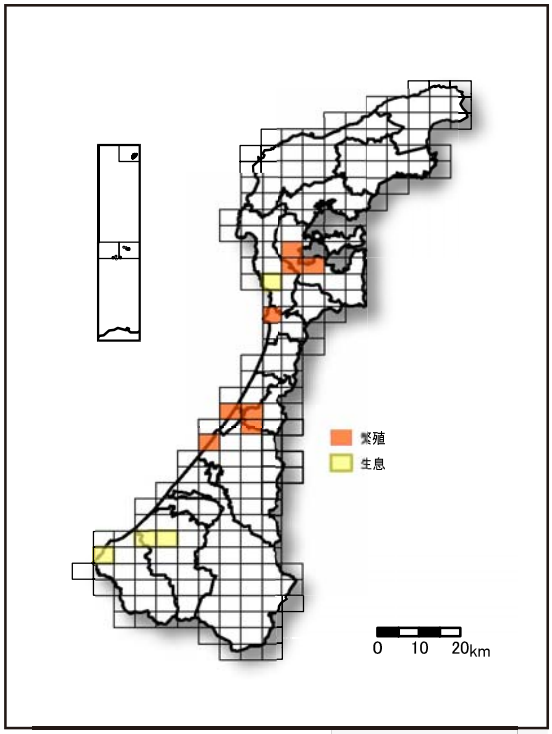
国内分布　夏鳥として本州以南の草原に渡来するが、特に西日本では多数生息する。沖縄では留鳥。

県内分布　夏鳥として渡来し、柴山潟、河北潟、羽咋市などの湿地、休耕田で少数が生息する。かつては多数の生息が知られていたが、徐々に減少した。

生　　態　繁殖期は4～9月、抱卵期間、育雛期間とも約2週間。一夫多妻で知られる。

生息地の条件　イネ科植物の多生する草原。

生存の危機　水田周辺の草地や休耕田に依存しており、耕作環境の変化に大きな影響を受ける。（A, C）



県内の分布

ノジコ

Emberiza sulphurata Temminck & Schlegel

スズメ目ホオジロ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	準絶滅危惧

選定理由
繁殖分布は日本に限られ、国内でも分布は局地的で個体数が少ない。

形　態
全長約14cm。全身黄色っぽい緑色。胸、腹など下面は淡い。雄の頭部は黒っぽく、目の回りに白い輪がある。

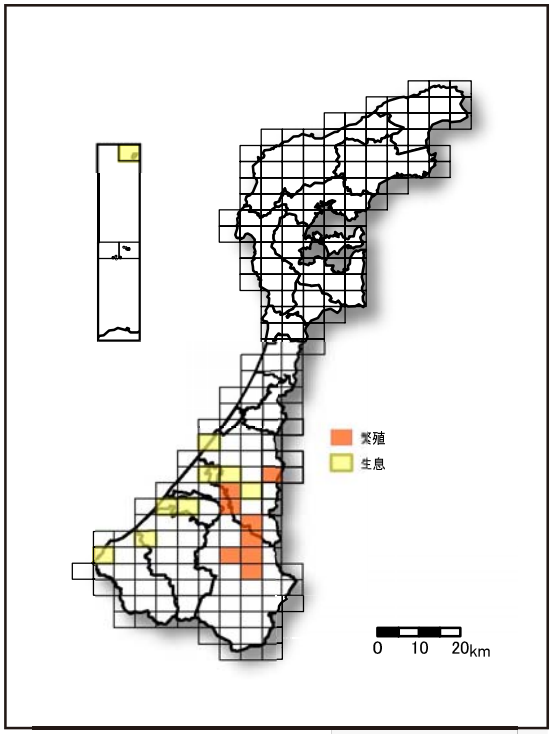
国内分布
夏鳥として渡来し、本州中部から青森県にかけて分布する。低山から山地の明るい広葉樹林や灌木のある草原に繁殖する。

県内分布
医王山、白山山系、大日山系の落葉広葉樹林や渓流沿いの疎林に見られるが、分布は局地的である。

生　態
繁殖期は5～7月、低木の茂みや地上に営巣し3～5卵を産む。抱卵期間は約2週間、育雛期間は7、8日。主食は草の種子などだが、昆虫も捕る。

生息地の条件
湿地を含む落葉広葉樹や渓流沿いのハンノキ、クルミなどの疎林に生息するが、詳細はよくわかっていない。

生存の危機
森林の伐採、渓流の砂防工事。越冬地での密猟（飼育用、食用）など。（A）



県内の分布

オオジシギ

Gallinago hardwickii (Grey)

チドリ目シギ科

石川県カテゴリー	情報不足
国カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類

選定理由

過去には小松空港や金沢市大浜埋め立て地で繁殖したとされている。近年穴水町や内浦町の牧草地帯でディスプレイフライトが観察されており、繁殖の可能性がある。情報収集が必要である。

形　態

全長30cm。翼長14～17cm。体重110～230g。嘴はまっすぐで長く、黄褐色で先端は黒い。頭央線、眉斑、顔、喉はクリーム色で、頭側線，過眼線，目の下の線は黒い。背と肩羽は黒褐色と赤褐色の斑で、外縁のクリーム色が連なり、縦線となる。頸、胸は淡黄褐色で黒褐色の縦斑があり、胸から脇には黒褐色の横斑がある。腹は白い。尾は黒褐色で先端近くに橙黄色の帯がある。

国内分布

本州中部の高原や東北、北海道の草原で繁殖し、渡りの時期には全国でみられる。広島など中国山地での繁殖例もある。サハリン南部でも繁殖するが、ほぼ日本特産種といえる。

県内分布

旅鳥として渡りの時期には県内各地の水田や湿地でみられる。過去には小松空港や金沢市大浜埋立地で繁殖したとされているが、その後環境の変化で消滅してしまった。近年能登の穴水町、能登町などの牧草地でディスプレイが観察されており、繁殖の可能性がある。

生　態

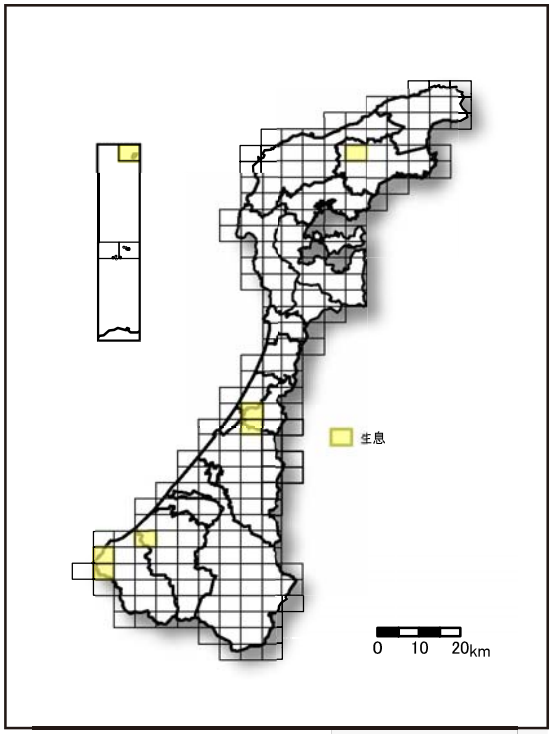
繁殖地では草原の地上に皿形の巣をつくり、ふつう4卵を産む。産卵期は5月上旬から6月上旬で、雌のみが抱卵する。雄は繁殖地上空を「ズビーヤク」と鳴きながら飛び回り急降下するときに「ザザザザ」と大きな音を尾から発するディスプレイフライトを夜明けと日没前後を中心に行う。餌はミミズ、昆虫類などの小動物で、植物の種子も食べる。

生息地の条件

人のあまり入らない湿原や低木のまじった草原、牧場、農耕地などの開けた環境で繁殖する。本州では高原や山地など標高の高い地域に生息するといわれてきたが、近年標高の低いところでの繁殖も確認され、必ずしも標高とは関係せず、むしろ植生などの環境に左右されることがわかってきている。

生存の危機

渡りの時期にみられるが個体数は少なく、全国的にも減少傾向である。中国山地の例のように本県でも繁殖の可能性があり、早急な調査をし、繁殖地が確認されればその地域を保護していく必要がある。(A, B)



県内の分布

マダラウミスズメ

Brachyramphus marmoratus (Pallas)

チドリ目ウミスズメ科

石川県カテゴリー	情報不足
国カテゴリー	情報不足

選定理由　かつては冬期沿岸海上に見られたが、近年減少が著しい。

形　態　全長24cm、雌雄同色。東部、背など体の上面は黒色、ノド、胸、腹は白色。クチバシは他のウミスズメ類より細く長めである。

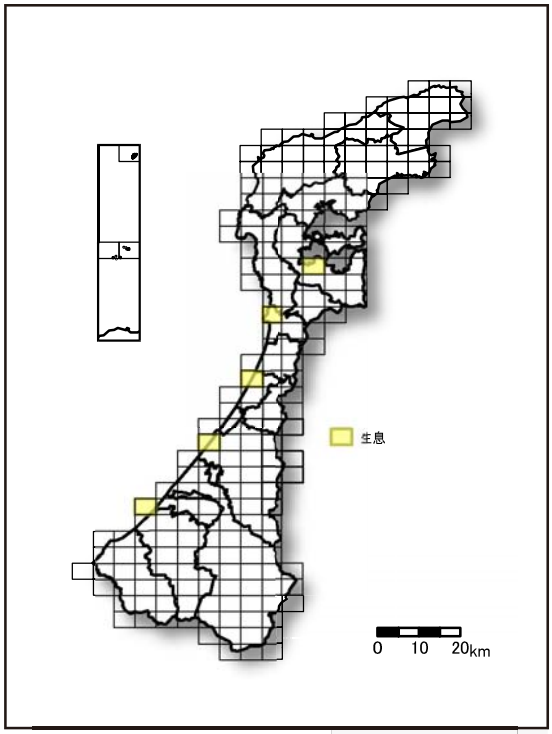
国内分布　冬鳥として北海道、東北、北陸の沿岸、沖合に渡来する。北海道東部やオホーツク海沿岸では夏期に幼鳥が観察されており、繁殖が予想されている。

県内分布　冬鳥として加賀地方の海岸を中心に小数が渡来するが、能登での観察例は少ない。

生　態　沿岸、海上に生息し、潜水して小魚などを捕る。

生息地の条件　沿岸海上に越冬するが、内湾ではほとんど見られない。

生存の危機　刺し網など漁業による混獲。重油流出などによる海洋汚染が考えられるが、観察例の少ない海上の鳥であり、実態はよく分っていない。（A）



県内の分布

オオコノハズク

Otus lempiji (Horsfield)

フクロウ目フクロウ科

石川県カテゴリー	情報不足
国カテゴリー	なし

選定理由
山地帯、低山帯に棲む小型猛禽類で、小鳥などを捕食し生態系上位をしめる。県内では過去繁殖報告があるが実態はよく分かっていない。

形　態
全長約20～25cm。全身ほぼ褐色で、黒い縦斑と横斑がある。頭部には大きな羽角がある。眼の虹彩はオレンジ色。

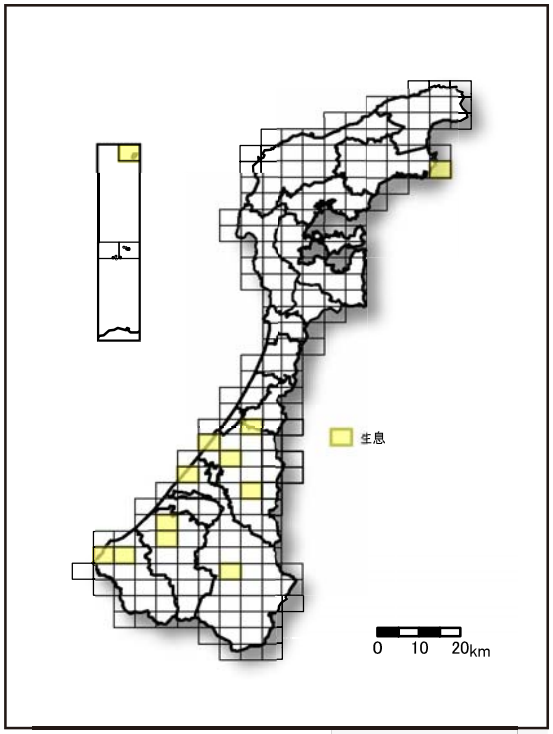
国内分布
留鳥として九州以北の山地帯から低山帯の森林、時には平地林にも生息するが、北海道、東北のものは冬期南下する。

県内分布
白山ろくで繁殖の記録があるが、県内の生息状況はよくわかっていない。現在は夏鳥とされているが、留鳥の可能性も残されている。春秋の渡りの時期には平地や市街地でも見られることがある。

生　態
夜行性で小鳥類、両生類、ハ虫類、小哺乳類などを捕る。5～6月に大木の樹洞に営巣し、4～5卵を産む。

生息地の条件
営巣木となる樹洞のある大木、餌動物の豊富な森林の存在。

生存の危機
森林開発による営巣木の減少が考えられるが、実態はよく分かっていない。（A, D）



県内の分布

ハリオアマツバメ

Hirundapus caudacutus (Latham)

アマツバメ目アマツバメ科

石川県カテゴリー	情報不足
国カテゴリー	なし

選定理由　繁殖期に白山ろくで観察され繁殖が予想されるが、詳細はわからず、情報収集が必要である。

形　　態　全長21㎝、雌雄同色。全身ほぼ黒褐色だが、額、喉、下尾筒が白い。

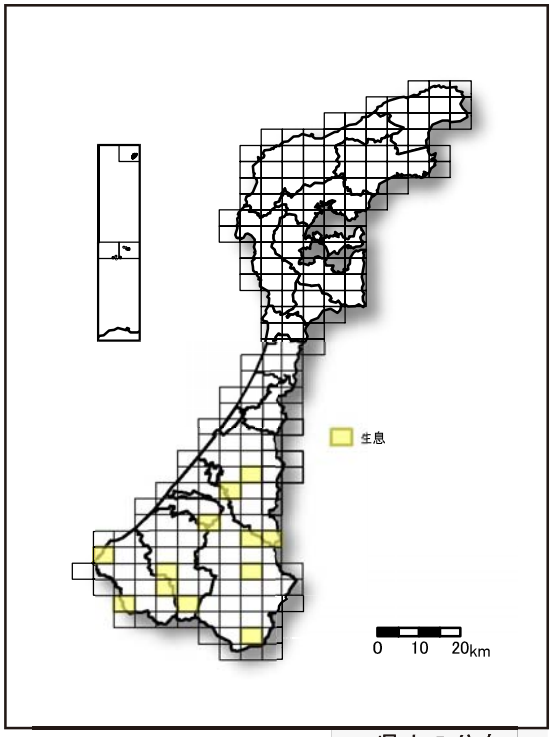
国内分布　夏鳥として本州中部以北に渡来し、本州では山地で、北海道では平地でも見られる。春夏の渡りの時期には本州以南の平地でも見ることができる。

県内分布　従来、春秋の渡りの時期にのみの記録だったため旅鳥とされていたが、近年白山ろくなどで繁殖期も観察されるようになり、繁殖の可能性が出てきた。

生　　態　繁殖期以外は常に空中生活を送り、地上はもちろん樹木に止まる事さえ、ほとんどないと言われている。繁殖期は大きな木の樹洞内で営巣する。

生息地の条件　営巣木となる大木の存在。

生存の危機　実態はよく分かっていない。 (D)



県内の分布

キバシリ

Certhia familiaris Linnaeus

スズメ目キバシリ科

石川県カテゴリー	情報不足
国カテゴリー	なし

選定理由　白山山系の森林のみに生息する種類で個体数も少ないと考えられるが、実態はよく分かっていない。

形　　態　全長約14cm。上面は褐色で白と黒の縦斑があり、下面は白。嘴は細長く、下に湾曲している。

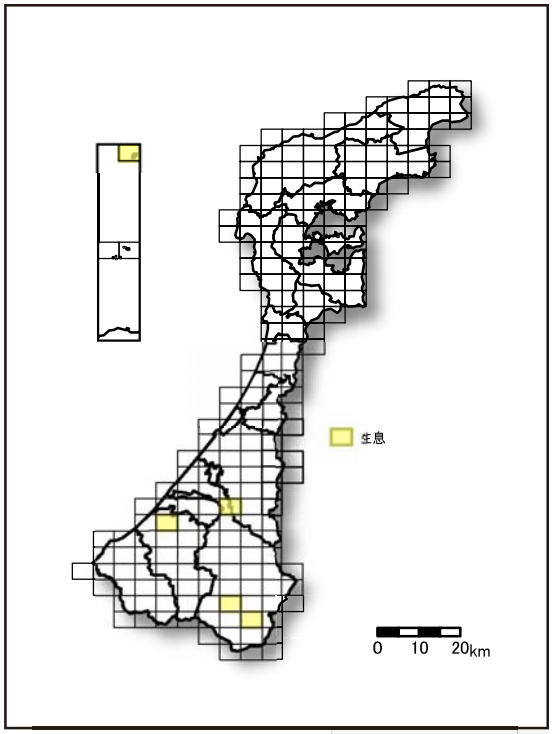
国内分布　留鳥として本州、四国では低山から亜高山までの森林に、北海道では平地でも見られる。

県内分布　白山山系のブナ林に生息している。この他、輪島市沖の舳倉島、七ツ島では渡り途中と思われる個体が観察されている。

生　　態　主食は昆虫やその卵。木をらせん状に上りながら採食し、地上に降りることはない。繁殖期は4～5月といわれ、抱卵期間，育雛期間ともに約2週間。

生息地の条件　発達した森林。ブナ林やコメツガ、オオシラビソなどの針葉樹林。

生存の危機　生息数がごく少ないと考えられるが、実態はよく分かっていない。（A，D）



県内の分布

オオミズナギドリ

Calonectris leucomelas (Temminck)

ミズナギドリ目ミズナギドリ科

石川県カテゴリー	地域個体群
国カテゴリー	なし

選定理由

石川県では唯一七ツ島でのみ繁殖しており、何らかの環境破壊が起これば繁殖個体群の絶滅の恐れがある。

形　態

全長48cm。翼開長約120cm。雌雄同色。頭部は白と黒褐色斑があり、背と翼上面、尾は黒褐色で、首から下尾筒と翼下面は白色。翼下面の翼角と中央部に黒い条斑がある。足は肉色で、嘴は淡青みがかる。

国内分布

日本近海の島々で繁殖する。日本での主な繁殖島は、岩手県三貫島、伊豆七島御蔵島、京都冠島、沓島、福岡県沖ノ島など。現在判明している南限繁殖地は西表島南西の仲御神島、北限繁殖地は北海道渡島とウラジオストク沖のカラムジン島。非繁殖期には南下し、マレーシア、ニューギニア沖からオーストラリア北部沖までの熱帯海域に生息する。

県内分布

夏鳥として渡来し、七ツ島の大島、荒三子島、御厨島で約4万羽が繁殖する。

生　態

海洋の表層で魚やイカなどを捕食し、離島で集団繁殖をする。一般に2～3月に帰島し5～6月産卵、10～11月に渡去する。コロニーでは地面に約1mの巣穴を掘りって、白色の1個の卵を産み、雌雄が交代で抱卵。交代や雛への給餌は日没後帰島しておこなう。

生息地の条件

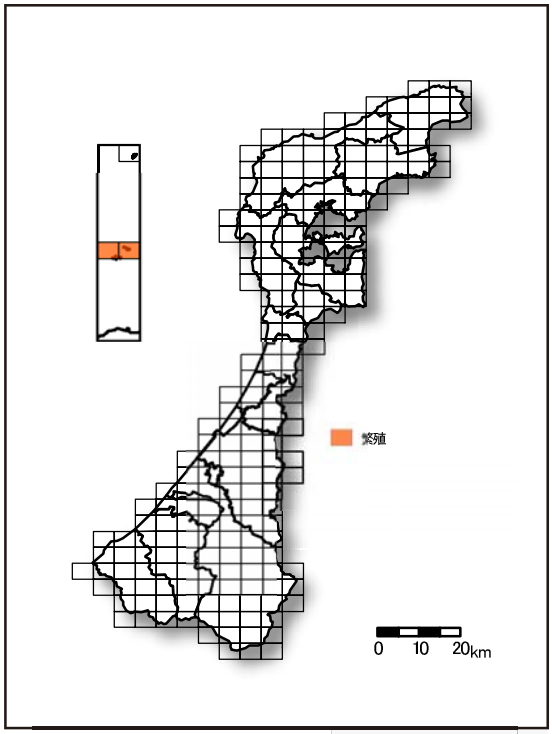
繁殖地として人が入らない島嶼。島の土は巣穴が掘れるように柔らかく、また土が流されないように植物が生えていることが必要。まわりの海域は餌が豊富なこと。

生存の危機

アナウサギによる植生破壊と土壌流出による生息地の破壊、ドブネズミによる食害が心配される。また、密かに上陸する釣り人の影響も心配される。(A, C)

参考文献

石川県環境部 1986. 舳倉島・七ツ島の自然



県内の分布

ウミウ

Phalacrocorax capillatus (Temminck & Schlegel)

ペリカン目ウ科

石川県カテゴリー	地域個体群
国カテゴリー	なし

選定理由

石川県では唯一七ツ島の大島、烏帽子島で繁殖し、繁殖個体数も少ない。

形　態

全長84cm。カワウによく似るが、体の大部分を占める光沢ある黒色は緑がかっている。繁殖期には雌雄ともに顔に白く細い羽毛を生じ、足の付け根に白色斑を生じる。幼鳥は褐色で下面は淡く、若鳥も褐色味が強く、下面も淡い傾向がある。長めの嘴の先端はかぎ状に曲がって鋭く、魚を捕らえるのに適している。

国内分布

北海道から本州中・北部の島や沿岸で繁殖する。日本海周辺部からオホーツク海、南シナ海まで分布する。国内の繁殖数は2,000～3,000つがい。

県内分布

繁殖は七ツ島の大島、烏帽子島のみであり、数十羽が繁殖していると思われる。冬期は県内各地の海岸に生息する。

生　態

荒海に面した岩石の多い海辺や、断崖の続く海岸などに好んで生息する。群れで生息することが多く、集団で塒をとり、また営巣する。断崖の岩棚などに枝や草で巣を作る。4～5月に産卵し、5月下旬から6月孵化し、巣立ちは7～8月である。

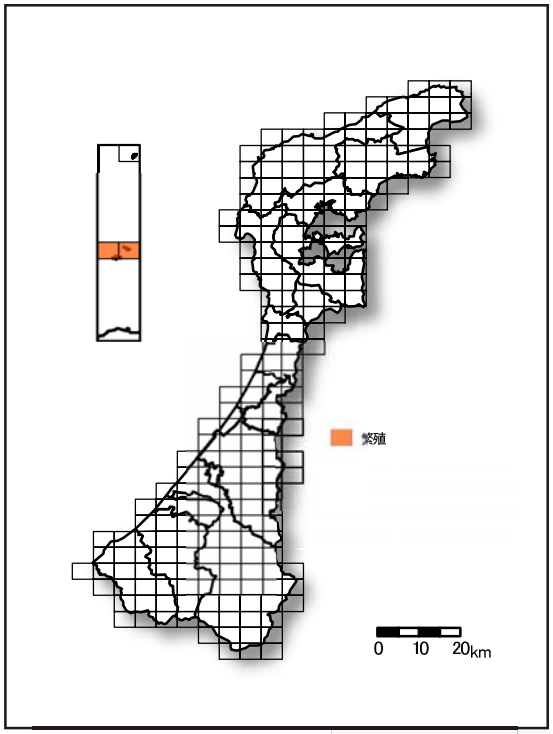
生息地の条件

繁殖地としてヒトが近づかない断崖の岩棚を必要とする。まわりの海域は餌が豊富なこと。

生存の危機

繁殖個体群は少なく、繁殖地も七ツ島のみである。何らかの環境破壊がおこれば繁殖個体群が消滅する恐れがある。 (A)

ウミウの繁殖地



県内の分布

ミユビシギ

Crocethia alba (Pallas)

チドリ目シギ科

石川県カテゴリー	地域個体群
国カテゴリー	なし

選定理由
砂浜海岸に渡来する小型のシギで、高松から根上海岸では毎年約400羽が越冬する。これは全国の越冬数の4分の一を占め、地域個体群として貴重であるため。

形　態
全長20cm。翼長12～13cm。体重36～84g。成鳥夏羽は頭から首、胸にかけて茶褐色で縞がある。腹は白く、背面は茶色で黒い斑がある。冬羽は茶色味がなくなり、上面は灰白色、下面は白色になる。飛翔時には白い翼帯が顕著に出る。嘴と足は黒色。

国内分布
北海道から南西諸島まで全国で渡りの時期にみられ、本州以南では越冬するものもいる。

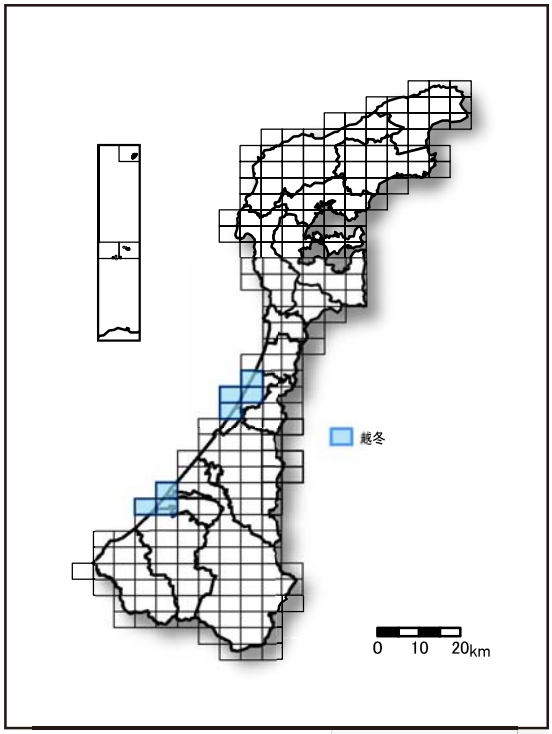
県内分布
春秋の渡りの時期には、七尾西湾や口能登から加賀にかけての海岸線の砂浜などでみられかほく市から能美市の海岸にかけては毎年400羽前後が越冬している。

生　態
北極圏のツンドラの地上で6月中旬～7月中旬に営巣して繁殖する。中継地や越冬地では、海岸の砂浜に好んで生息し、波打ち際で波にあわせて走り、小さな甲殻類を主に食べる。本県の越冬個体群の主食はイシカワナミノリソコエビである。

生息地の条件
餌となる小型甲殻類の多い砂浜海岸に生息する。小型甲殻類の少ない砂浜にはいない。侵入する外敵（主に人間）が少ないことも生息地の条件となる。

生存の危機
海岸浸食による砂浜海岸の減少、消失。また海岸に侵入してくる4輪駆動車、釣り人などの影響で、越冬環境が落ち着かない。(A, D)

参考文献
中川律子 1997. 河北海岸の鳥類相の研究



県内の分布

3．両生爬虫類

1　石川県の両生類相

石川県において記録された両生類は、有尾目 3 科 4 属 7 種、無尾目 4 科 5 属 13 種 1 亜種である（宮崎 1996，2008）。隣県と比較すれば、本県には富山県でみられるハクバサンショウウオ、福井県でみられるダルマガエルが生息していない。

県内の両生類相をみると有尾類では、加賀地方南部にアベサンショウウオ（宮崎 2008）、能登地方にホクリクサンショウウオ（宮崎・竹田 2000）が生息している。両種は里山のサンショウウオで、産卵場が民家に近い丘陵地や山麓部にあり、人間の生活する場と重複しているため都市化や開発によって消滅する危険性が高い。特にアベサンショウウオはホクリクサンショウウオに比べてはるかに個体数が少なく、産卵場の攪乱もあって危機的な状況にある。クロサンショウウオは能登から加賀まで広くみられ、垂直分布も海岸付近から白山山系に及んでいる。ヒダサンショウウオは加賀・能登地方の山地や丘陵地に生息している。しかし邑知潟地溝帯以北では分布域が限られており、個体数も少ない。ハコネサンショウウオも同じく山地帯でみられ、一般にヒダサンショウウオより高所に分布している。オオサンショウウオはこれまで山中町や小松市などで捕獲されているが自然分布ではなく、他県から移入されたものである。アカハライモリは水田や池などでみられる。

無尾類では、ヒキガエル類はアズマヒキガエルが能登および加賀地方に分布している。金沢城跡にいたニホンヒキガエルは、1988 年を最後にみられなくなった。また加賀地方の河川の上流域にはナガレヒキガエルが生息している。

ニホンアマガエルは低地では県下全域でごくふつうにみることができる。

ニホンアカガエル、タゴガエル、ヤマアカガエル、トノサマガエル、ツチガエルは能登から加賀まで分布している。ニホンアカガエル、トノサマガエル、ツチガエルは平地や丘陵地の水田、池などに多い。ヤマアカガエルは平地から山地帯まで生息分布が広い。タゴガエルは山地に広く生息し、高所では白山の標高 2,300m でみられている。加賀地方の山地渓流の上流部ではナガレタゴガエルが分布しているが、個体数は比較的少ない。北アメリカから移入されたウシガエル（本県には 1925 年に木場潟へ入ったのが最初である）は加賀から能登まで分布を拡げている。

モリアオガエルは県内に広く生息しており、海岸近くの水田から標高 2,000m 以上の高地でもみられる。シュレーゲルアオガエル、カジカガエルも県内全域に分布し、シュレーゲルアオガエルは平地や丘陵地に、カジカガエルは河川の上・中流域に多い。

2　石川県の爬虫類相

石川県では、カメ目 4 科 9 属 9 種、有鱗目 6 科 10 属 12 種が記録されている（松村 1996；松村・宮崎 1996；松村・山下 1996；徳本 1996）。本州産爬虫類のほとんどが石川県にも生息しており、分布していないのはミナミイシガメとタワヤモリの 2 種だけである。

県内の爬虫類相はウミガメ類では、アオウミガメは春から夏に回遊してくる傾向がみられ、タイマイは秋から冬に幼体の死後漂着が多い。石川県沿岸への回遊が最も多いのはアカウミガメで、現在までに 4 例の産卵記録（このうち孵化したのは 2 例）と 2 例の上陸記録がある。能登半島は日本海側における産卵孵化の北限地であるが、いまでは上陸して産卵できるような海岸がきわめて少なくなっている。ヒメウミガメは冬季に 3 例の死後漂着がある。オサガメは秋から冬に回遊がみられるが、冬は死後漂着が多い。

クサガメは潟や河川河口部を中心に生息している。ニホンイシガメは山間部の溜池や河川の上・中流域に多くみられる。溜池で越冬し、夏は周辺の水陸に住んでいる。移入種のミシシッピアカミミガメ（原産地は北アメリカ南部）は県内各所でみられる。今では個体数が在来種より多くなり、野外繁殖個体も多数

捕獲されている（野田 2004; 野田・鎌田 2003, 2004）。ニホンスッポンは潟や河口付近、一部は溜池に生息している。

ニホンヤモリは民家がおもな生息場所で加賀・能登に広くみられる。ニホントカゲ、ニホンカナヘビは平地から山地まで分布している。ニホントカゲは日当たりのよい場所に、ニホンカナヘビは草地に多い。

地中で活動し夜行性のタカチホヘビは、いまのところ奥能登からは発見されていない。シロマダラも夜行性で日中は石の間などに隠れており、県内の記録はあまり多くない。シマヘビ、ジムグリ、アオダイショウ、ヒバカリ、ヤマカガシは広く分布しており、ふつうにみられる。ジムグリとヤマカガシは白山の標高2,300m以上の高山帯でも記録されている。ニホンマムシは加賀から能登まで各地に生息し、セグロウミヘビは外洋性だが海流に乗ってときどき本県沿岸に現れる。

3　種の選定基準

絶滅のおそれのある種を選定するにあたっては、それぞれの種についてその現状と過去の状況をできるだけ定量的にとらえて、危険度を評価する必要がある。しかし石川県に生息する両生爬虫類では、個体数の変動を定量的に調べた報告はきわめて少ない。そのため選定にあたっては、下に記した(1)～(3)の基準によって6種および1地域個体群を選んだ（表1）。

表1　両生爬虫類選定種一覧

区　分	両　生　類	種数	爬　虫　類	種数
絶滅	―	―	―	―
絶滅危惧Ⅰ類	アベサンショウウオ ホクリクサンショウウオ	2	―	―
絶滅危惧Ⅱ類	―	―	アカウミガメ	1
準絶滅危惧	ナガレタゴガエル	1	タカチホヘビ、シロマダラ	2
情報不足	―	―	―	―
地域個体群	邑知潟地溝帯以北の ヒダサンショウウオ	1	―	―
計		4	計	3

今回の見直しにおいて前版（2000）と異なるのは、県内で生息が確認されたアベサンショウウオを絶滅危惧Ⅰ類に追加したこと、ナガレタゴガエルのカテゴリーを情報不足から準絶滅危惧に変更したこと、邑知潟地溝帯以北のヒダサンショウウオを絶滅のおそれのある地域個体群として新たに加えたことである。

(1) 環境省（2006）の両生類レッドリストと爬虫類レッドリストに掲載されている種のうち、石川県に生息する種ならびに県内で繁殖する可能性のある種。

絶滅危惧Ⅰ類　　アベサンショウウオ（環境省版レッドリストでは絶滅危惧ⅠA類）
絶滅危惧Ⅰ類　　ホクリクサンショウウオ（環境省版レッドリストでは絶滅危惧ⅠB類）
絶滅危惧Ⅱ類　　アカウミガメ（環境省版レッドリストでは絶滅危惧ⅠB類）

環境省版レッドリスト（2006）では、クロサンショウウオ、ヒダサンショウウオ、アカハライモリは準絶滅危惧、ニホンイシガメ、ニホンスッポンは情報不足になっている。しかしこれら5種は本県における生息状況からみて、石川県のカテゴリーでは準絶滅危惧や情報不足とはしなかった。ただし邑知潟以北のヒダサンショウウオについては、(3)の地域個体群として挙げた。

(2) 県内では個体数が少なく、しかも生息条件が悪化しているため生存が脅かされている種。

準絶滅危惧　　ナガレタゴガエル

準絶滅危惧　　タカチホヘビ
準絶滅危惧　　シロマダラ

(3) 地域的に孤立しているため、絶滅のおそれが高い個体群。
地域個体群　　邑知潟地溝帯以北のヒダサンショウウオ

卵と幼生の期間を水中で過ごす両生類は、環境の悪化に対して敏感に反応するので環境評価の指標として用いられている。また爬虫類は食物連鎖の上位の捕食者であり、爬虫類の生息状況はその地域における生物多様性を示す指標となっている。近年はこのような観点から、概して移動能力が低く生息環境の変化に弱い両生爬虫類を、生態系の健康状態を測るバロメーターとしてとらえることが多い。

（宮崎　光二）

新旧対応表

		前回						
		絶滅 0	絶滅危惧Ⅰ類 1	絶滅危惧Ⅱ類 1	準絶滅危惧 2	情報不足 1	地域個体群 0	カテゴリー外 3
今回	絶滅 0							
	絶滅危惧Ⅰ類 2		ホクリクサンショウウオ					アベサンショウウオ
	絶滅危惧Ⅱ類 1			アカウミガメ				
	準絶滅危惧 3				タカチホヘビ シロマダラ	ナガレタゴガエル		
	情報不足 0							
	地域個体群 2							邑知潟地溝帯以北のヒダサンショウウオ
8	カテゴリー外 0							

アベサンショウウオ

Hynobius abei Sato

有尾目サンショウウオ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類
国カテゴリー	絶滅危惧ⅠA類

選定理由
生息地が人間の生活する場と重なっているため、都市化や開発による生息環境の悪化が進んでおり、絶滅の危機に瀕している。

形　態
成体の全長86～127㎜。全般にオスはメスより大きく、特にオスの尾長・最大尾高はメスに比べて大きい。繁殖期のオスは尾がひれ状になる。

国内分布
兵庫県但馬地方、京都府丹後地方、福井県北部・越前市西部・嶺南東部地方、石川県南加賀地方。

県内分布
小松市・能美市の一部に生息。

生　態
産卵は12月中旬～1月上旬（成体は繁殖期以外には現れない）。卵嚢は透明なひも状で、外皮には縦の条線がある。幼生は2月中旬～下旬に孵化し、変態した幼体は7月下旬～8月上旬に上陸する。

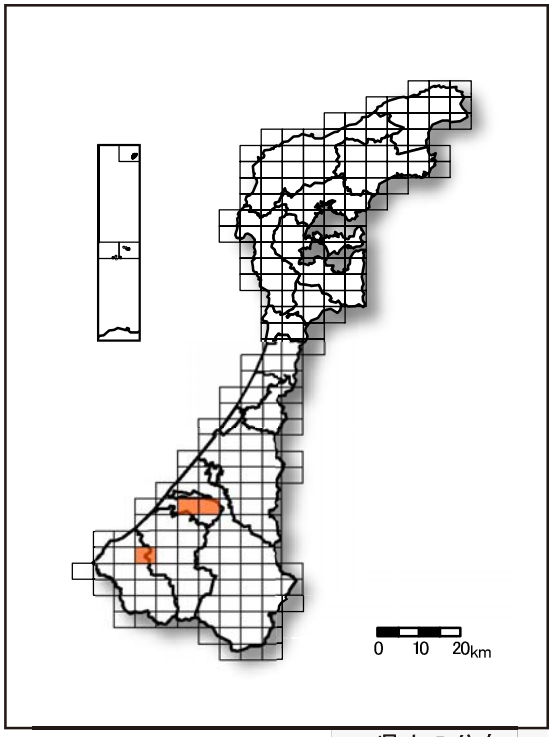
生息地の条件
産卵場（標高35～150m）は二次林に接した休耕田脇の水路、沢筋の湿地、湿地化した放棄田、伏流水の出口部などで、いずれも緩やかな流れがある。

生存の危機
2004年12月～2008年3月の調査では、能美市と小松市をあわせて毎年約40対の卵嚢を観察した。発見できなかった卵嚢を考慮しても、本県に生息する成体の総個体数は200以内と思われ、産卵場の現況からみてこのまま推移すれば絶滅するおそれが大きい。（A）

特記事項
国内希少野生動植物種。これまでに卵嚢・幼生・成体のいずれかを確認したのは、能美市の6地域、小松市の10地域である。

参考文献
川内一憲ほか 2005.　両生類誌(15)：22.
松井正文 2000.　改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物(爬虫類・両生類).　p.72-73.　自然環境研究センター.
宮崎光二 2008.　いしかわ自然史(43)：1.

写真提供者：宮崎光二



県内の分布

ホクリクサンショウウオ　有尾目サンショウウオ科

Hynobius takedai Matsui et Miyazaki

石川県カテゴリー　絶滅危惧Ⅰ類
国カテゴリー　絶滅危惧ⅠB類

選定理由
生息地が人間の生活する場と重なり合っているため、環境の影響を受けやすく都市化や開発のほか、過疎と高齢化による稲作の中止が産卵場の消滅に拍車をかけており、絶滅する危険性が高い。

形　態
成体の全長80～120㎜。オスはメスよりやや大きく、メスに比べて尾長が長く、後肢が太い。繁殖期のオスは尾がひれ状に伸長し、総排出腔の周辺部が膨大する。

国内分布
能登半島と富山県西部。

県内分布
かほく市以北の5市5町に生息。

生　態
成体はふつう地中に潜み、繁殖期(一般に2～3月上旬)に産卵場に現れる。卵嚢は透明なひも状で、らせん形に巻く。1卵嚢中の卵数は30～70(平均45)。孵化してから約3年で性成熟する。

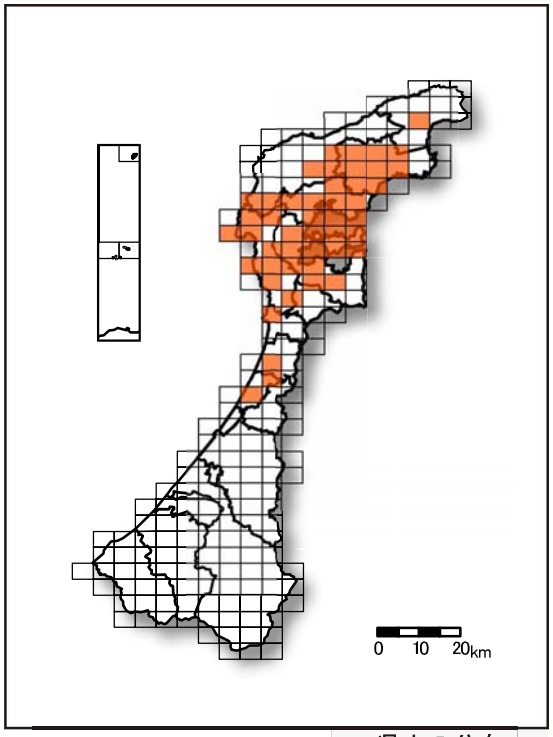
生息地の条件
産卵場(標高5～330m)は丘陵や山麓部にある二次林縁の小さな池、二次林縁に接した水田の溝、林道の側溝など湧水の溜まった日当たりのよい場所で、ごく緩やかな水流がある。

生存の危機
多くの産卵場で観察される卵嚢数は10対未満であり、このような小さな繁殖集団では最小存続可能個体数(Minimum Viable Population)を満たしていないと思われる。 (A , B)

特記事項
羽咋市指定天然記念物。保全のために卵や成体を移植する場合、距離の離れた場所へ安易に導入することは避けなければならない。また一度だけの移植では定着率はきわめて低いのがふつうであり、その後のモニタリングが必要である。

参考文献
松井正文 2000. 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物(爬虫類・両生類). p. 74–75. 自然環境研究センター.
Matsui, M. and K. Miyazaki 1984. Zool. Sci. 1:665–671.
宮崎光二・竹田俊雄 2000. 両生類誌(4) : 18–22.

写真提供者:宮崎光二



県内の分布

アカウミガメ

Caretta caretta (Linnaeus)

カメ目ウミガメ科

石川県カテゴリー　絶滅危惧Ⅱ類
国カテゴリー　絶滅危惧ⅠB類

選定理由
本州中部以南の砂浜海岸に上陸して産卵する唯一のウミガメであり、志賀町富来地区の増穂浦で産卵孵化したのが日本海側における北限記録となっている。

形　態
甲長70～100cm。体色は赤褐色。頭部の前額板は5枚(4枚のことがある)、背甲の肋甲板は5対(4対や左右で異なることがある)。前肢にはふつう2本のかぎ爪がある。子ガメは黒褐色で背甲も柔らかい。

国内分布
茨城県以南の太平洋岸および南西諸島に産卵場があり、その近海を中心に成体がみられる。

県内分布
これまでの採捕漂着記録では、春から夏に回遊してくる個体は甲長の大きい傾向があり、冬季は子ガメと幼体が多い。内灘、富来、門前、珠洲で産卵（孵化したのは内灘、富来)、片山津、門前で上陸が記録されている。

生　態
日本で孵化した子ガメは黒潮に乗って北太平洋に運ばれゆっくりと成長し、その後北アメリカ沿岸にたどり着いて成体になると考えられる。しかし成長したカメがどのような経路で、何年後に日本に戻ってくるかは不詳。性成熟した個体は日本の沿岸で繁殖をくりかえすが、回遊の範囲はかなり広い。

生息地の条件
海水温は25℃前後が適温。石川県では孵化に適する砂中温度の保たれる期間が短いため、5,6月に産卵が行われ、8,9月の気温が平年より高くないと孵化できないのではないかと推定される。

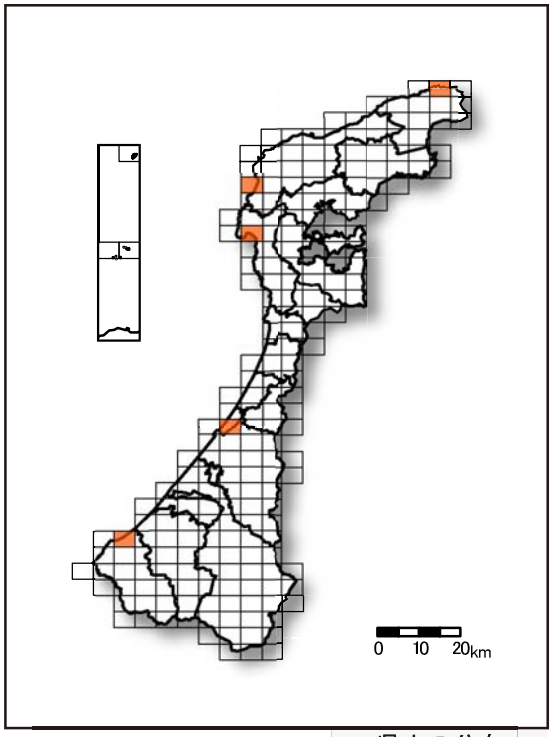
生存の危機
上陸して産卵できるような暗く静かな砂浜海岸がきわめて少ない。産卵場の環境保護のためには、海浜への自動車の乗り入れ禁止や人工照明の軽減が必要である。 (A)

特記事項
上陸産卵以外は人目にふれる機会が少ないため、海域での生態はまだ不明の部分が多い。

参考文献

内田至 1998. 日本の希少な野生水生生物に関するデータブック. p.236-237. 日本水産資源保護協会.
亀崎直樹 1996. 日本動物大百科 第5巻 両生類・爬虫類・軟骨魚類. p.56-58,62. 平凡社.
徳本洋 1984. 両生爬虫類研究会誌(30):1-9.
松村初男 1996. 石川県の両生・爬虫類. p.61-72. 石川県.
松村初男・山下郁 1996. のと海洋ふれあいセンター研究報告(2):29-38.

写真提供者:松村初男



県内の分布

ナガレタゴガエル

Rana sakuraii Matsui et Matsui

無尾目アカガエル科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由
県内では個体数が少なく、生息地である河川上流域の環境が悪化している。

形　態
タゴガエルに似ているが、後肢のみずかきがよく発達しているので区別できる。成体の体長50㎜前後。一般にメスはオスより大きい。繁殖期になると体側の皮膚がたるんでひだ状になり、特にオスでは著しい。

国内分布
本州中央部(近畿地方から関東地方まで断続的に分布)。

県内分布
大聖寺川上流部、動橋川上流部、大杉谷川、手取川水系の大日川、西俣谷川、尾添川、直海谷川、および犀川上流部で記録されている。

生　態
成体はふつう山地の森林帯に生息している。晩秋になると渓流に集まり、水中で越冬する。早春の繁殖期には比較的深い水中の岩石の下に卵を産みつける。

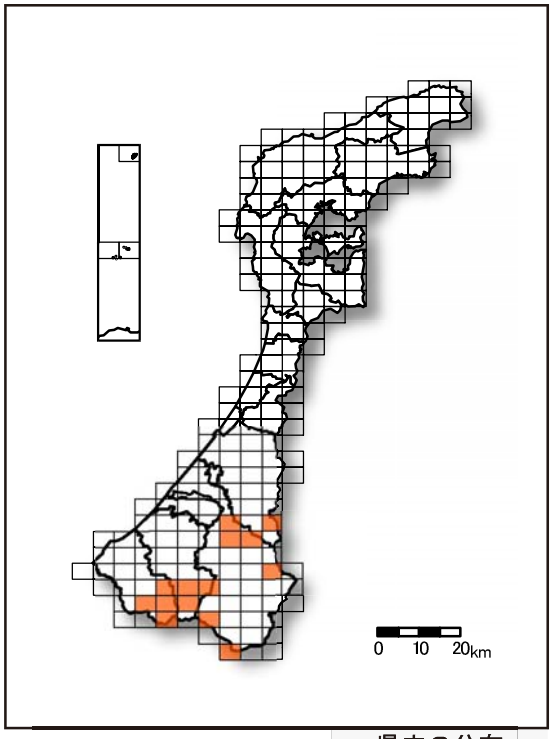
生息地の条件
本県の生息地は、金沢市以南の標高200m～1140mの山地渓流とその周辺である。

生存の危機
山地渓流では堰堤工事や斜面の崩落、周辺森林の荒廃などによって生息環境が悪化している。 (A)

特記事項
1978年に奥多摩で発見され、1990年に記載された種で、日本海側での産卵行動は調べられていない。2007年晩秋の調査では、河原や岸辺近くの水中にある石の下からオス成体が得られた。

参考文献
草野保・福山欣司 1996.　Field Biologist 6(2):27-32.
前田憲男・松井正文 1999.　改訂版 日本カエル図鑑. p.68-71.　文一総合出版.
Matsui, T. and M. Matsui 1990.　Herpetologica 46(1):78-85.

写真提供者:宮崎光二



県内の分布

タカチホヘビ

Achalinus spinalis Peters

有鱗目ナミヘビ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由

夜行性の小型種なので目につきにくく、本県内での記録は少ない。本種の生息にはその地域の生物多様性がかなり高いという指標的な意味があるが、開発による自然環境悪化によりその生息地が減少する危険性が高い。

形　態

大きくなっても全長50cmほどの小さいヘビ。体表が真珠光沢をもち、全長35cm以上の個体では基色が黄褐色で、背の中央にある細い黒条が目立つ。しかし幼蛇は黒色味が強く、背面の黒条も目立たない。本州産のヘビでは本種以外は尾下板（尾の腹側の鱗）が対になって並んでいるが、本種では対になっておらず、1枚の鱗が並ぶだけである。

国内分布

北海道にはいないが、これまでにほとんどの都府県から記録されている。また沿岸島からの報告はあるが、離島からの記録はない。日本固有種。

県内分布

加賀地方から能登半島基部まで分布記録が散在する。しかしまだ奥能登からの記録はない。白山では標高1000mあたりでの記録がある。

生　態

目につきにくい種であるが、珍しいヘビということで、かえって人の注意をひき、記録される機会が多い。切り通しや崖の多い地域での発見頻度が高い。本種の鱗は他のヘビのように瓦をならべたようになっておらず、タイルを貼ったようになっていて、隙間に皮膚が露出しているため乾燥に弱く、徘徊中に夜明けとなり、乾燥死する例がときどき見られる。

生息地の条件

落葉層、腐葉土層が発達して、餌になるミミズの多い林地が適しているように思われる。

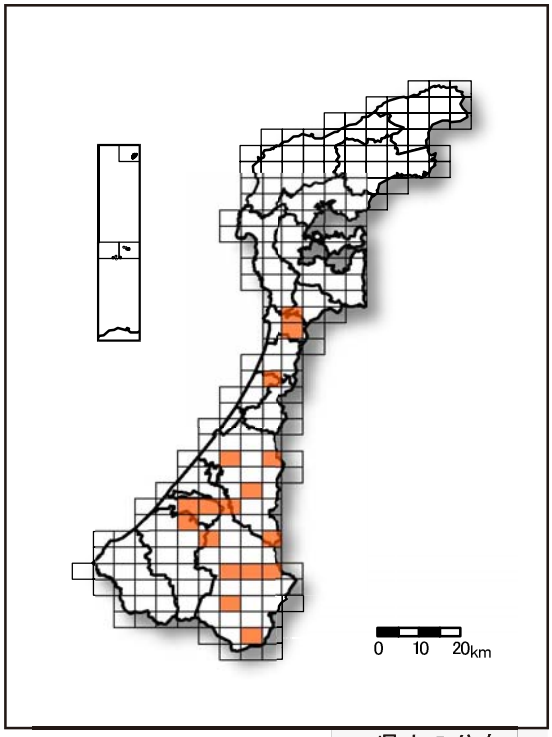
生存の危機

本種の生息密度が高かった金沢城址が公園化したために生息地としては消滅しようとしているように、開発による生息環境の悪化が各所で進んでいる。（A）

参考文献

千石正一(編) 1979.　原色/両生・爬虫類. p. 50.　家の光協会.
千石正一 1996.　日本動物大百科第5巻　両生類・爬虫類・軟骨魚類.　p. 94-95.　平凡社.
戸田光彦 1985.　石川県白山自然保護センター研究報告(12) : 67-69.

写真提供者：徳本洋



県内の分布

シロマダラ

Dinodon orientale (Hilgendorf)

有鱗目ナミヘビ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由

爬虫類食のヘビで生息個体数が本来少ない種だが、本種の存在はその地域の生物多様性がかなり高く保たれていることを示す指標性がある。本県内での分布記録が少なく、開発による自然環境悪化で生息可能地の減少が進んでいる。

形　態

成体でも全長30～70cmほどの小さなヘビ。背面は淡褐色で50～60個の黒褐色の横斑が目立つ。成長にともなう斑紋の変化はあまりないが、幼蛇は背面の色が淡く白っぽいので黒褐色斑とのコントラストが成蛇よりも大きい。ただアオダイショウの幼蛇を本種と誤認することがあるので注意が必要である。アオダイショウはひとみが円形だが、本種のひとみは縦楕円形であることが判別の一つのポイントになる。

国内分布

北海道、本州、四国、九州や一部の離島。日本列島の古い固有種と考えられている。

県内分布

加賀地方から奥能登まで散発的に記録がある。白山でも標高2300mあたりでの記録がある。

生　態

マダラヘビ類ではもっとも北に分布する種。物陰にひそむ性質が強く、夜行性である。普通はもっぱら爬虫類食でトカゲや小型のヘビを餌にしている。人に出会って逃げられなくなると威嚇姿勢をとり、かみつくことがあるが小さなヘビなのでたいしたことはない。

生息地の条件

不明であるが、餌になる爬虫類が生息できる自然環境のすぐれた場所が必要と思われる。

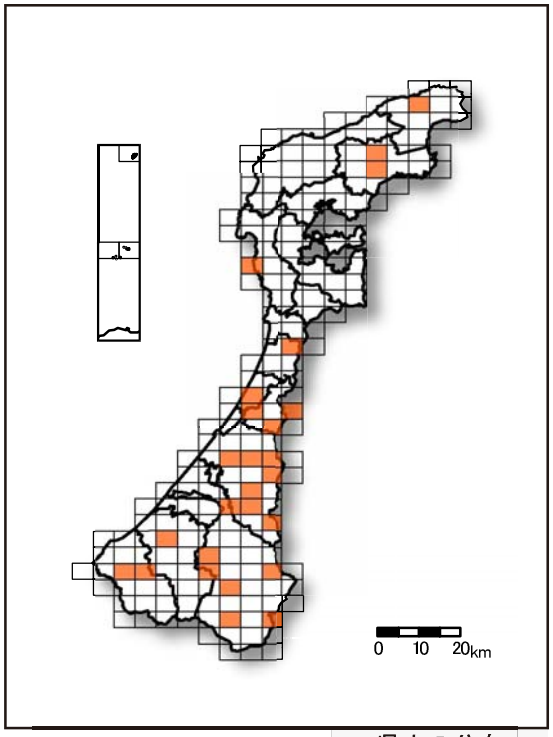
生存の危機

餌となる動物が開発によって減少する傾向が著しいので、生息域・生息数低下の進行が懸念される。(A)

参考文献

千石正一(編) 1979.　原色/両生・爬虫類. p. 68.　家の光協会.
戸田光彦 1992.　金沢大学理学部付属植物園年報(15): 17–23.
鳥羽通久 1996.　日本動物大百科第5巻　両生類・爬虫類・軟骨魚類. p. 91–92, 99.　平凡社.

写真提供者:徳本洋



県内の分布

ヒダサンショウウオ

Hynobius kimurae Dunn

有尾目サンショウウオ科

石川県カテゴリー	地域個体群
国カテゴリー	準絶滅危惧

選定理由
邑知潟地溝帯以北では生息地が限られており、個体数も少ない。

形　態
成体の全長10～15cm、紫色を帯びた褐色の地に小さな黄色の斑点をもつものが多い。卵嚢はバナナの実状で、虹色光沢のある外皮をもつ。

国内分布
山陰、近畿、中部、関東地方。日本海側では新潟県南西部が北限。

県内分布
加賀地方と能登地方南部(宝達山、石動山)には広く分布する。邑知地溝帯以北では眉丈山(中能登町)、赤蔵山(七尾市)、輪島市西南部、穴水町西部、能登町南部で記録がある。

生　態
産卵期は2月下旬～4月下旬で、渓流の石の下に卵嚢を産みつける。多くの幼生は9月末までに変態を終えて上陸する。成体は繁殖の時期以外は産卵場に隣接した林の林床で生活する。

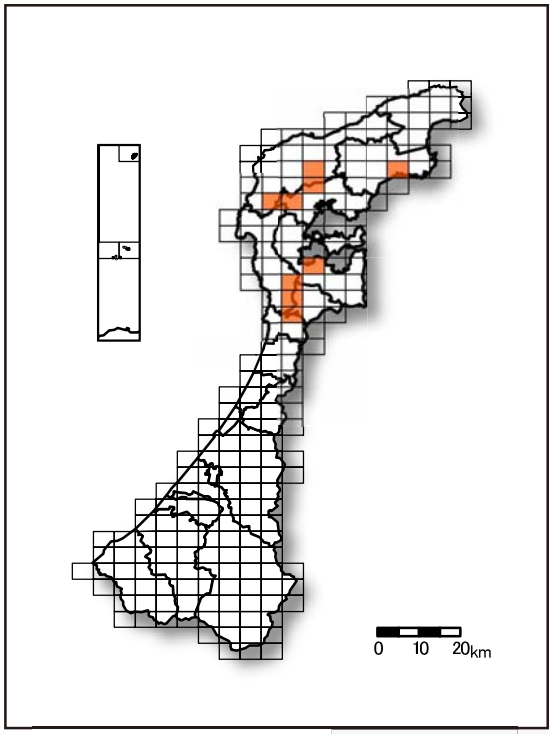
生息地の条件
産卵場になっている渓流だけではなく周辺にある森林の環境が良好な状態で維持されること。幼生の移動を妨げないように渓流の連続性が確保されること。

生存の危機
山地渓流の砂防堰堤工事、渓流周辺の山林の荒廃、森林伐採、林道整備などによって絶滅のおそれがある。 (A)

特記事項
奥能登の生息地は緯度では本種の北限と思われる。遺伝化学的研究によれば、本州のヒダサンショウウオの個体群は大きく東部・中部・西部の3グループに分けられ、本県の個体群は中部グループに属する。

参考文献
環境省 2001. 生物多様性調査　動物分布調査報告書(両生類・爬虫類). p.40. 環境省.
松井正文・見澤康充 1996. 日本動物大百科第5巻　両生類・爬虫類・軟骨魚類. p.18-19. 平凡社.
Matsui, M. et al 2000. Comp. Biochem. Physio. B 125:115-125.

写真提供者:宮崎光二



県内の分布

４．淡水魚類

１　石川県の淡水魚類相

石川県内に生息する淡水魚類は、「新版石川の動植物」（1999）において 82 種（亜種を含む）が記録されている。その後、「石川県の淡水魚類－補遺１」（2003）で新たに 8 種の淡水魚類が記載されたことから、現在およそ 90 種の魚類が県内の陸水域に生息していると考えられる。これらの内訳を見ると在来種が 72 種であり、残りの 18 種が移入されたものであると考えられる。ソウギョやニジマスのように、移入種で再生産をしていないものも見られる反面、オオクチバスなど一部の種については巧に生態系へと入り込んで在来種に影響を及ぼしている種もある。移入経路はさまざまだが、種苗放流に混入して広がったと思われる種が、漁業権の設定された水域やダム湖、溜池などから多数確認されている。またペットとして移入され散逸したアカミミガメのように、淡水魚類の世界においても同様な問題が発生しつつある。

ここ 30 年間を振り返ると、在来種と思われる淡水魚類の中で、県内から姿を消した種はいないが、かなり危機的な状況下にあるものも見られる。平野部に生息するトミヨにおいては、低水温を好むため湧水への依存度が高く、地下水位の低下が深刻な問題となっている。金沢市内におけるトミヨの生息場所は、地下水の湧き出しがなくなったことですでに消滅している。しかし一部の地域においては地域住民らによる保護活動が行われ、現在でも安定した生息環境の維持がなされているといった事例もある。さらに 2005 年 5 月にはトミヨが石川県指定希少野生動植物種に第 1 次指定されたこともあって、本種に対する関心は高まりつつあると言える。2006 年 5 月にはトミヨに次いでホトケドジョウが県指定希少野生動植物種に指定された。本種については 1995 年以後に溜池や湿地、小水路などの調査によって相次いで生息地が発見されている。しかしいずれの生息場所も極めて狭い場所に限定されていて、不安定な状況下に置かれていることに変わりはない。

２　種の選定基準

今回の改訂にあたっては、過去 20 年間の記録に基づいて見直しを行った。特にランクの上位にあるトミヨやシラウオについては、環境省のリストには見られない種であることからもわかるように、現在の石川県独自の陸水域環境を反映した結果となっている。

前回のリストと変更点は、イトヨ（降海型）を新たに絶滅危惧Ⅱ類に選定したことと、地域個体群からカワヨシノボリを除外したことである。イトヨ（降海型）については海域における生活史がほとんど解明されていないため、今回の選定にあたっては陸水域の状況のみから判断を行った。カワヨシノボリは現在 3 つの水系から確認されているが、その後も新たな生息地が発見され、各生息域が安定していることと、本種の生活史を併せて考えると、近い将来危機的な状況に至る危険性はないものと判断したためである。また準絶滅危惧に選定したミナミアカヒレタビラについては、種の取り扱い方の違いから環境省のリストとは種名の記載が異なっている。

以上、絶滅危惧Ⅰ類が 2 種、絶滅危惧Ⅱ類が 3 種、準絶滅危惧が 4 種、地域個体群が 1 種の合計 10 種を選定した。

表1　淡水魚類選定種一覧

区　分	淡　水　魚　類	種類数
絶滅	―	―
絶滅危惧Ⅰ類	トミヨ、シラウオ	2
絶滅危惧Ⅱ類	ホトケドジョウ、イトヨ（降海型）、アカザ	3
準絶滅危惧	ミナミアカヒレタビラ、アジメドジョウ、シンジコハゼ、ジュズカケハゼ	4
情報不足	―	―
地域個体群	イワナ（無斑タイプ）	1
計		10

表2　環境省ランクとの比較

種名	石川県ランク	環境省ランク
ミナミアカヒレタビラ	準絶滅危惧	絶滅危惧ⅠB類（アカヒレタビラ）
アジメドジョウ	準絶滅危惧	絶滅危惧Ⅱ類
ホトケドジョウ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧ⅠB類
アカザ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類
イワナ（無斑タイプ）	地域個体群	なし
シラウオ	絶滅危惧Ⅰ類	なし
イトヨ（降海型）	絶滅危惧Ⅱ類	地域個体群
トミヨ	絶滅危惧Ⅰ類	なし
シンジコハゼ	準絶滅危惧	絶滅危惧Ⅱ類
ジュズカケハゼ	準絶滅危惧	なし

（山本　邦彦）

新旧対応表

		前回						
		絶滅 0	絶滅危惧Ⅰ類 2	絶滅危惧Ⅱ類 2	準絶滅危惧 4	情報不足 0	地域個体群 2	ランク外等 1
今回	絶滅 0							
	絶滅危惧Ⅰ類 2		トミヨ シラウオ					
	絶滅危惧Ⅱ類 3			ホトケドジョウ アカザ				イトヨ（降海型）
	準絶滅危惧 4				ミナミアカヒレタビラ(※アカヒレタビラ) アジメドジョウ シンジコハゼ ジュズカケハゼ			
	情報不足 0							
	地域個体群 1						イワナ（無斑タイプ）	
	ランク外 1						カワヨシノボリ	

※(　)内 前回掲載種名

トミヨ

Pungitius sinensis (Guichenot)

トゲウオ目トゲウオ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類
国カテゴリー	なし

選定理由　地下水位の低下にともない、現在では限られた場所にのみ生息している。

形　　態　背部に8～10本のトゲをもち、体側には32～36枚の鱗板が並んでいる。

国内分布　北海道、青森県、秋田県、山形県、新潟県、富山県、石川県、福井県。

県内分布　志賀町、白山市、能美市。

生　　態　雄が水草などを使って球状の巣を作り、産みつけられた卵を保護する。

生息地の条件　湧水の影響が強く、年間を通じて水温の変化が少ない場所に生息する。巣を作るための素材となる水草や営巣場所が必要。

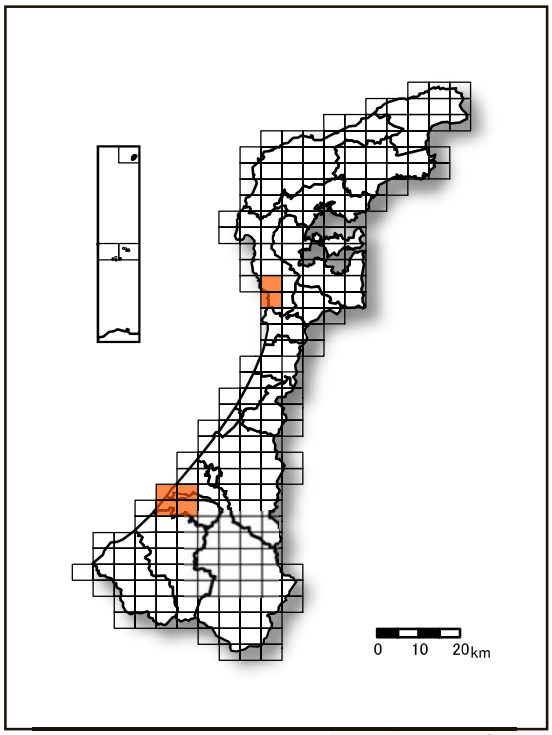
生存の危機　地下水位の低下。違法採集。（A）

特記事項　生息地の一部では保護活動が行われている。石川県指定希少動植物種（2005年）。

参考文献

平井賢一 1992. 手取川扇状地における淡水魚類の減少傾向. 金沢大学日本海域研究所報告 24：49–62.
平井賢一 1994. 手取川扇状地の淡水魚類相. 金沢大学教育学部研究紀要. 自然科学編. 23：133–143.

写真提供者：山本邦彦



県内の分布

シラウオ

Salangichthys microdon Bleeker

サケ目シラウオ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類
国カテゴリー	なし

選定理由 県内の潟が淡水化されたことで、生息適地が減少している。

形　　態 生時の体は無色透明。尻鰭基底の上部には16～18枚の鱗がある。

国内分布 北海道から岡山県、熊本県。

県内分布 加賀市、小松市。

生　　態 通常は汽水域で生活しているが、淡水域のみで生活するものも見られる。

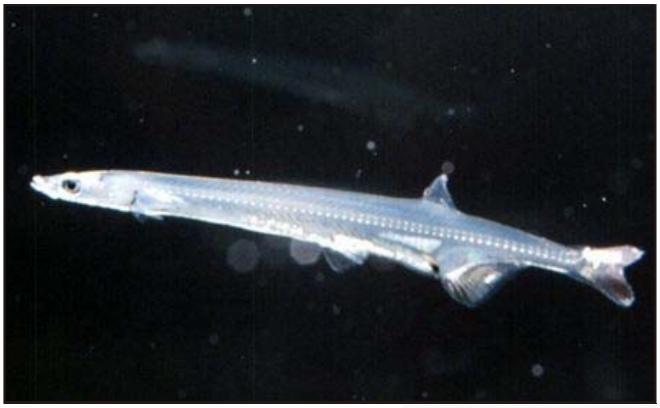
生息地の条件 安定した汽水域が形成されていること。

生存の危機 潟の淡水化 。 (A)

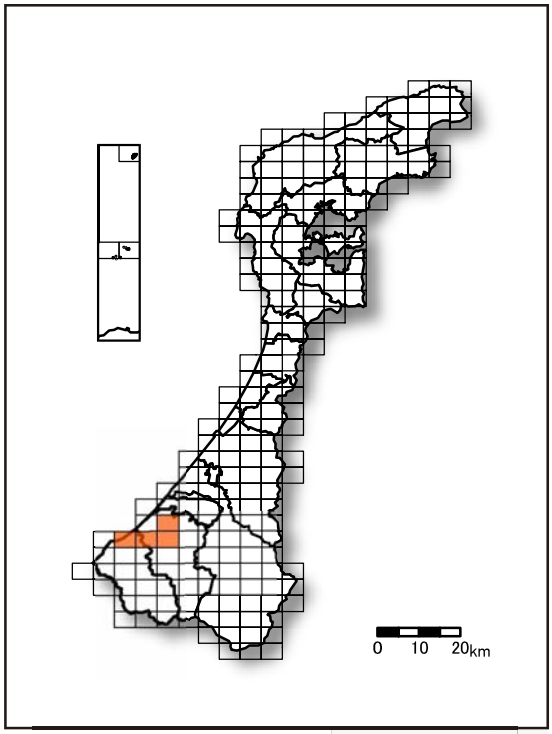
特記事項 木場潟に生息する個体群は淡水型の可能性が高い。

参考文献

石川県淡水魚類研究会編 1996. 石川の自然環境シリーズ, 石川県の淡水魚類. 石川県環境安全部自然保護課. 金沢.
山本・佐野・石原 2003. 石川県の淡水魚類－補遺1. のと海洋ふれあいセンター研究報告. 9:15-23.



写真提供者：山本邦彦



県内の分布

ホトケドジョウ

Lefua echigonia Jordan et Richardson

コイ目ドジョウ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類
国カテゴリー	絶滅危惧ⅠB類

選定理由
確認されている生息場所はいずれも狭く不安定な状況下にある。

形　態
ドジョウと比較すると体は太くて短く円筒形で、4対8本の口ヒゲがある。体色は茶褐色で、小さな黒点が散在するものもいるが地域変異も見られる。

国内分布
青森県と中国地方西部を除く本州と四国東部。

県内分布
宝達志水町、かほく市、能美市、小松市、加賀市。

生　態
流れの穏やかな小川や溜池の中層付近を遊泳している。粘着性のある卵を水草などに産みつける。

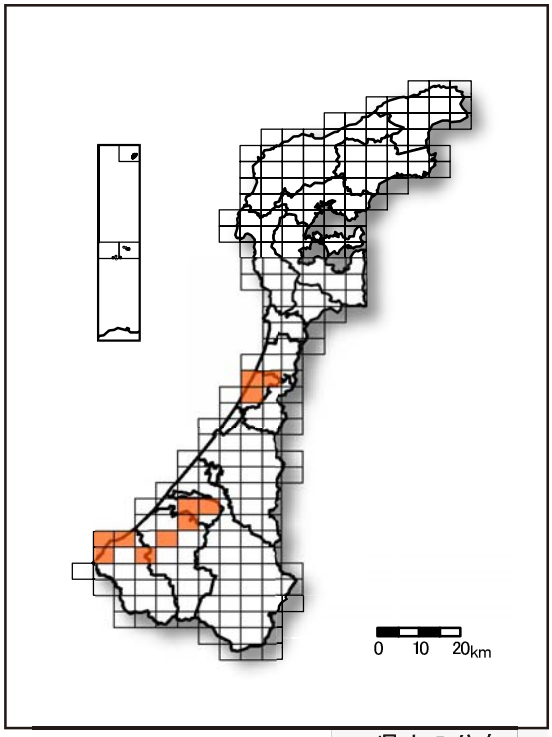
生息地の条件
流れが穏やかで、水草類が繁茂する水域。魚食性の強い魚類やザリガニが生息しない水域。

生存の危機
外来魚の放流による食害。水路のコンクリート化。（A, C）

特記事項
それぞれの生息地は孤立していて、外部形態などに地域変異が認められる。石川県指定希少動植物種（2006年）。

参考文献
石川県淡水魚類研究会編 1996. 石川の自然環境シリーズ. 石川県の淡水魚類. 石川県環境安全部自然保護課. 金沢.
山本・佐野・石原 2003. 石川県の淡水魚類ー補遺1. のと海洋ふれあいセンター研究報告. 9:15-23.

写真提供者：山本邦彦



県内の分布

イトヨ（降海型）

Gasterosteus aculeatus (Linnaeus)

トゲウオ目トゲウオ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類
国カテゴリー	地域個体群

選定理由　小水路のコンクリート化などにともなう産卵場所の消失。

形　　態　背部に3本のトゲをもち、体側には31～34枚の鱗板が並んでいる。

国内分布　北海道、島根県・千葉県以南の本州。

県内分布　七尾市、志賀町、内灘町、小松市、加賀市。

生　　態　3月頃河川へと遡上して、小水路などで産卵する。水底に水草などを集めてすり鉢状の巣をつくり、雄が卵の世話をする。

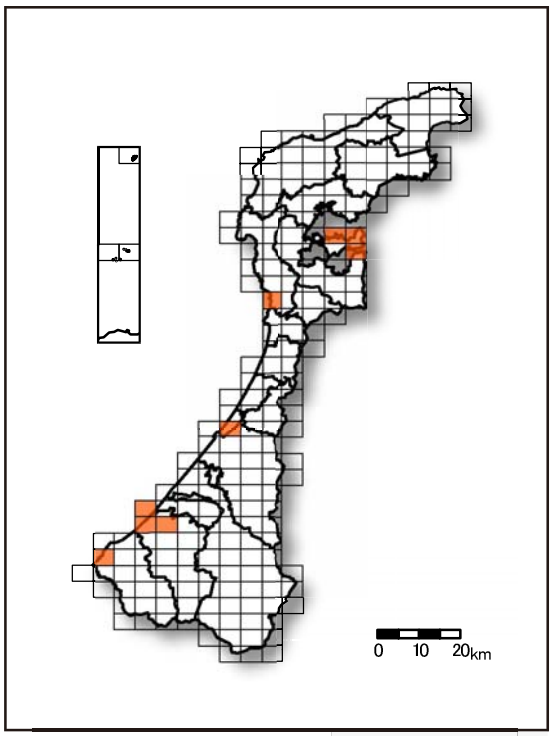
生息地の条件　河川へと遡上し産卵場所に移動するまでの間、障害物がないこと。産卵場所となる小水路に、巣を作るための素材となる水草や営巣場所が必要。

生存の危機　遡上河川と産卵場所とのアクセスの低下。 (A)

特記事項　海域における生態が解明されていない。

参考文献　石川県淡水魚類研究会編 1996. 石川の自然環境シリーズ, 石川県の淡水魚類. 石川県環境安全部自然保護課. 金沢.

写真提供者：山本邦彦



県内の分布

アカザ

Liobagrus reini Hilgendorf

ナマズ目アカザ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類
国カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類

選定理由
県内では2水系のみで確認されていて、生息範囲も限定されている。

形　態
8本のヒゲをもつ小型のナマズの仲間。オスの頭部は成熟するとこぶのように盛り上がる。背鰭と胸鰭のトゲは鋭くとがり、刺されると非常に痛む。

国内分布
宮城県・秋田県以南の本州、四国、九州。

県内分布
金沢市。

生　態
中流部から上流部にかけて見られる転石地帯に生息している。夜行性のため日中は石の下に隠れている。

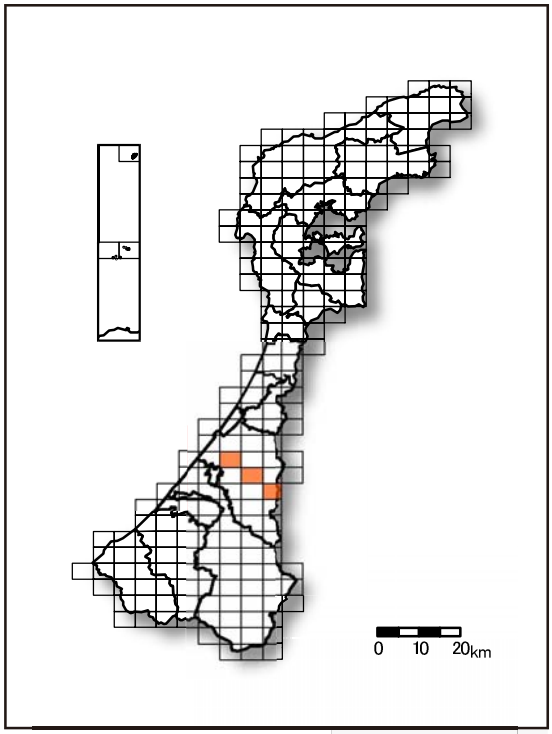
生息地の条件
隠れ家となる大型の転石や浮石が必要である。

生存の危機
落差工が移動の障害となっている。土砂の流入が隠れ家となる転石の隙間を埋めてしまっている。(A)

特記事項
不思議なことに犀川と浅野川以外では、同じような環境を持つ河川であっても生息していない。

参考文献
平井賢一 1982. 石川県の淡水魚類, 2犀川・浅野川. 金沢大学日本海域研究所報告14 : 15-26.
石川県淡水魚類研究会編 1996. 石川の自然環境シリーズ, 石川県の淡水魚類. 石川県環境安全部自然保護課. 金沢.

写真提供者：山本邦彦



県内の分布

ミナミアカヒレタビラ　コイ目タナゴ科

Acheliognathus tabira jordani Arai, Fujikawa and Nagata

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	絶滅危惧ⅠB類

選定理由　潟やそれに通じる水路で確認されているが、産卵床となる淡水二枚貝の生息場所が減少しているため、今後個体数の減少が懸念される。

形　態　幼魚の背鰭に出現する黒斑や、卵の形状、口髭の長さなどから他のタビラと区別できるとされている。

国内分布　富山県、石川県、鳥取県、島根県。

県内分布　輪島市、七尾市、志賀町、羽咋市、小松市、加賀市。

生　態　他のタナゴ類と同様に、淡水産二枚貝に産卵する。

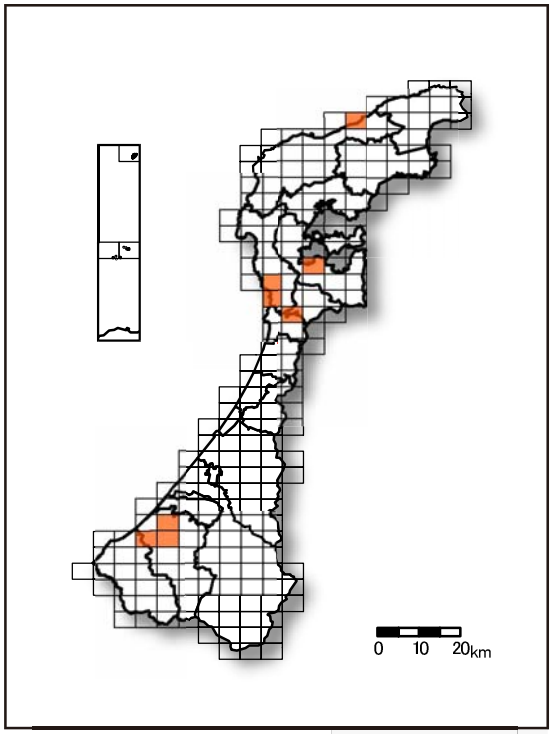
生息地の条件　産卵に利用するための淡水二枚貝類が生息していること。

生存の危機　水路がコンクリート化され、産卵に利用する二枚貝類の生息環境が消失している。（A）

特記事項　国カテゴリーでは、絶滅危惧ⅠB類。ただし、アカヒレタビラなどをAcheliognathus tabira subsp.として扱っている。新井他（2007）ではアカヒレタビラを5亜種としていることから、今回はその分類に従った。

参考文献
平井賢一 1975. 能登半島における淡水魚の分布. 金沢大学日本海域研究所報告7:1-18.
Arai,R.,H.Fujikawa,and Y.Nagata 2007. Four New Subspecies of Acheilognathus Bitterlings (Cyprinidae:Acheilognathinae) from Japan.Bull.Natl.Mus.Nat.Sci.,Ser.A,Suppl. 1. :1-28.

写真提供者：山本邦彦



県内の分布

アジメドジョウ

Niwaella delicata (Niwa)

コイ目ドジョウ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類

選定理由
県内では2水系のみで確認されていて、生息範囲も限定されている。

形　態
短いロヒゲが3対あり、唇は厚く半月型をしていて吸盤状となっている。

国内分布
富山県、石川県、福井県、長野県、岐阜県、滋賀県、京都府、三重県、大阪府。

県内分布
加賀市。

生　態
渓流にすむドジョウで、岩の表面に付着する藻類を食べる。冬から春にかけて地下水の伏流する場所に潜り込み、産卵する。

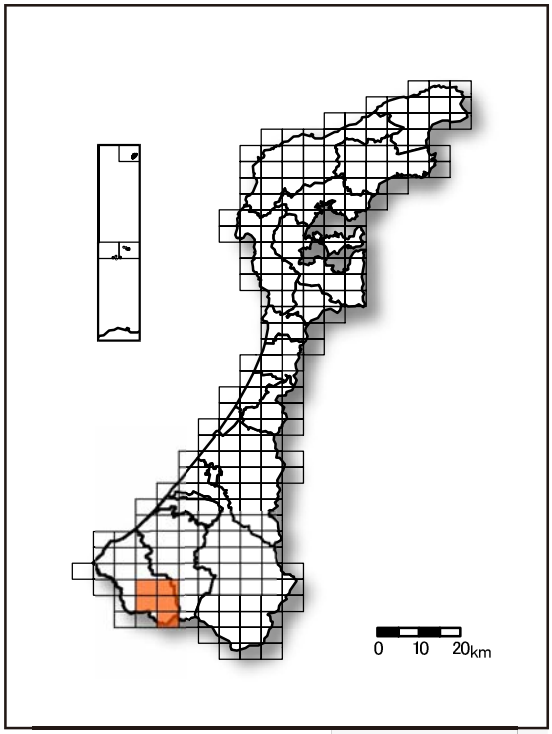
生息地の条件
隠れ家となる大型の転石や浮石が必要である。（A）

生存の危機
水の濁りが餌となる藻類の繁殖の妨げとなっている。落差工が移動の障害となっている。土砂の流入が隠れ家となる転石の隙間を埋めてしまっている。

特記事項
体の中央部から背側にかけてある模様には、個体によっても大きな変異が見られる。

参考文献
平井賢一 1980. 石川県の淡水魚類, 1. 大聖寺川・動橋川・梯川. 金沢大学日本海域研究所報告 12:19–31.
石川県淡水魚類研究会編 1996. 石川の自然環境シリーズ, 石川県の淡水魚類. 石川県環境安全部自然保護課. 金沢.

写真提供者：山本邦彦



県内の分布

シンジコハゼ

Gymnogobius taranetzi (Pinchuk)

スズキ目ハゼ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類

選定理由　県内の広い範囲から確認されているものの、一部の地域では生息場所は狭く孤立している。

形　　態　体型などはビリンゴやジュズカケハゼと区別がつき難いが、頭部にある感覚管や感覚管開孔の数で区別できる。

国内分布　富山県、石川県、福井県、島根県。

県内分布　能都町、穴水町、七尾市、羽咋市、内灘町、小松市、加賀市。

生　　態　塩分に対する適応力は比較的低いものと思われる。成魚は主に底生生活をしていて、季節的な移動も見られる。

生息地の条件　流れが穏やかで、砂泥底の水路に生息する。潟につながる水路では、かなり奥部にまで侵入してくる。

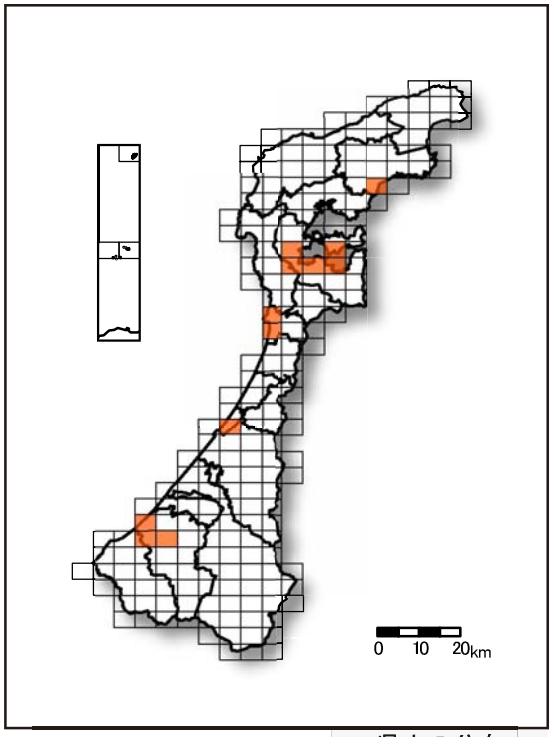
生存の危機　水路のコンクリート化や落差工の設置。（A）

特記事項　本種が最初に記載された宍道湖産のものと、それ以外の場所で確認されているものとでは、系統的に距離があることが調べられている。

参考文献

Stevenson,D.E. 2002. Systematics and distribution of the Asian goby genera Caenogobius and Gymnogobius (Osteichtys:Perciformes:Gobiidae),with the description of a new species.Species Diversity. 7:251–312.

写真提供者：山本邦彦



県内の分布

ジュズカケハゼ

スズキ目ハゼ科

Gymnogobius castaneus (O'Shaughnessy)

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由
一部の地域を除き、溜池やそれに通じる狭い範囲の水路など、これまでに確認されている生息場所が孤立した状況下にある。

形　態
体型などはシンジコハゼやビリンゴと区別がつき難いが、頭部に感覚管や感覚管開孔がまったく見られない。

国内分布
北海道から福井県、長野県、東京都。

県内分布
七尾市、中能登町、宝達志水町、かほく市、津幡町、金沢市、能美市、小松市、加賀市。

生　態
幼魚の時期は溜池の岸部で浮遊生活をしているが、成長とともに底生生活へと移行する。

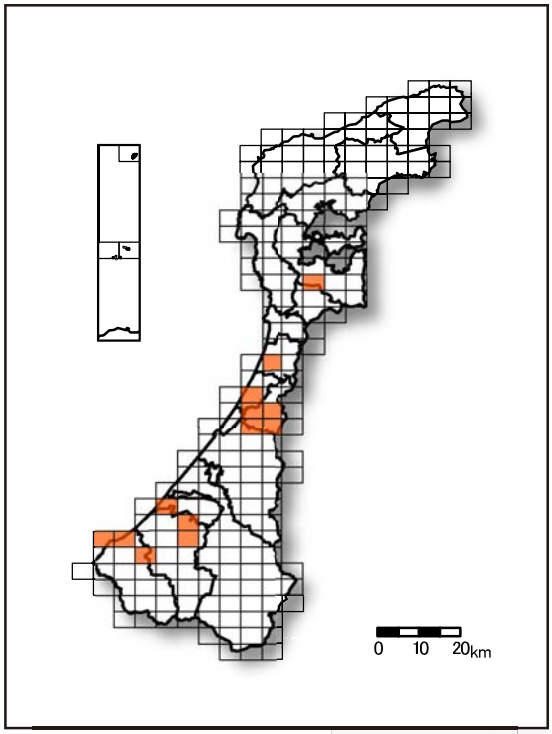
生息地の条件
溜池における生息地では、オオクチバスの放流が行われていない。

生存の危機
溜池の改修などによる、生息地の撹乱。（A, C）

特記事項
現在確認されている生息地の中には、連続性が見られない場所もあることから、一部のものは移入された可能性がある。

参考文献
Stevenson,D.E. 2002. Systematics and distribution of the Asian goby genera Caenogobius and Gymnogobius (Osteichtys:Perciformes:Gobiidae),with the description of a new species.Species Diversity.7:251–312.

写真提供者：山本邦彦



県内の分布

イワナ（無斑タイプ）

サケ目イワナ科

Salvelinus leucomaenis pluvius (Hilgendorf)

石川県カテゴリー	地域個体群
国カテゴリー	なし

選定理由　無斑イワナはイワナの一地方変異と考えられている。しかしこれまで県内のごく限られた水域でのみ確認されていることから、今後も遺伝子の撹乱に注意を払う必要がある。

形　態　体表上に白色や赤色の斑紋がまったく無いか、あってもわずかである。

国内分布　山形県、石川県。

県内分布　白山市。

生　態　手取川水系の最上流部、標高1100m付近の狭い範囲にのみ生息が確認されている。

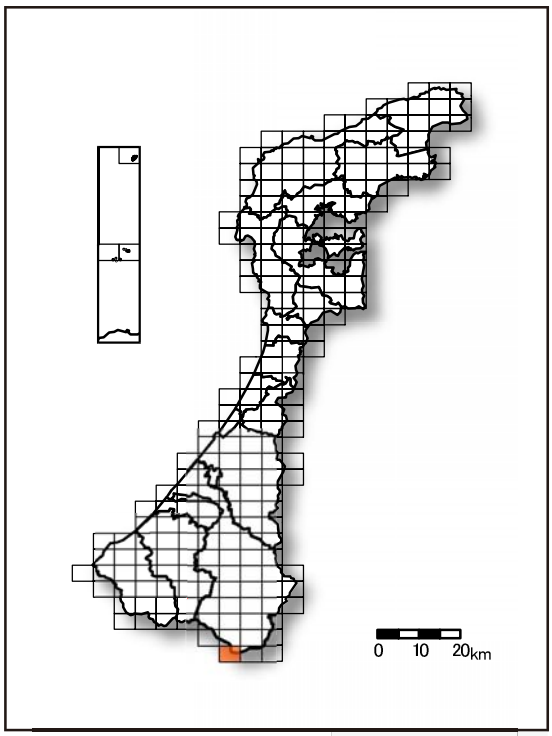
生息地の条件　夏季でも水温が低く、瀬と渕が連続する変化に富んだ緩流部が存在すること。

生存の危機　落差工による移動の妨げ。移植放流個体との交雑。密漁。（A, C）

特記事項　無斑イワナの生息場所は、通年にわたって禁漁区に設定されている。白山市指定の天然記念物。

参考文献
丸山隆・斉藤裕也 1987. 日本のイワナ手取川のイワナ. はくさん. 14:4-7.
吉安克彦 1996. 岩魚草紙. 朔風社. 東京.

写真提供者：山本邦彦



県内の分布

5．昆　虫　類

1　自然環境と昆虫

1998 年に作成された石川県の昆虫総目録である「石川県の昆虫」には、7,900 種余りの昆虫が記載されている。その後、コウチュウ目で約 250 種、チョウ目で約 150 種、その他の目で約 100 種が県内から新たに記録され、2008 年現在では、8,400 種余りが確認されていることになる。当然であるが、新たに約 500 種が増加したのは自然環境が改善されて増えたわけではなく、石川県未記録種がまだ多数生息していることを示すものであり、県内産昆虫は 15,000 種を下らないものと考えられる。その一方で、人間活動により生息地が失われている昆虫が数多く存在すること、絶滅しつつある昆虫がいるのも事実である。

以下、おもな自然環境別の希少種に着目しながら、環境の変化が生息する昆虫にどのような影響を及ぼしてきたか、また、必要な保全対策について述べる。

（1）海岸

石川県の海浜における代表的な希少種として、加賀海岸や口能登地区に生息するイカリモンハンミョウ、ハラビロハンミョウ、カワラハンミョウがあげられる。これら３種は、約 40 年前までは比較的、広範囲に生息していたが、護岸工事、車の乗り入れ、道路建設、海浜後背地の開発により、現在はいずれの種も危機的な状況にある。

ゼニゴギンガクニクバエやゴヘイニクバエ、イソメマトイは砂浜環境の悪化や海岸部の湧水箇所の消失により、長い間、記録が途絶えていたが、これらのうちゴヘイニクバエが 2005 年に白山市の倉部海岸で再発見された。また、オオヒョウタンゴミムシやハイイロクモバチは自然環境の良好な海浜では健在であるが、護岸工事の進んだ加賀地方の海浜では絶滅した所がある。さらに、小松市の一部の海岸では、ハマゴウノメイガやヤマトマダラバッタ、ハマスズが発見されたと同時に護岸工事が進行し、絶滅したのは残念なことである。一方、近年の調査で、イソジョウカイモドキ、ハマベツチカメムシ、ハマヤガなどの全国的に記録の少ない種が新たに発見されたことは注目に値する。

海浜性昆虫の生存に影響を与えているのは護岸工事、海浜後背地の開発、海浜への車の乗り入れである。護岸工事は現在、加賀地方で進行しているが、今後は海浜植物帯や後背地の保全に配慮した工法を採用すべきである。また、ＲＶ車やバイクの乗り入れが海浜植物帯に甚大な影響をおよぼしている地域もあるので、侵入防止柵等による乗り入れの規制が必要である。

なお、県内の海浜で良好な自然環境が残されているのは加賀市と志賀町の海岸だけであり、両海岸には上記の希少種の大部分が生息している。

（2）平地（照葉樹林・河川敷）

県内の照葉樹林は加賀南部に多いが、社叢林や城跡として点在しているに過ぎない。照葉樹林に固有な希少種として、キイロミヤマカミキリ、ベーツヤサカミキリ、ベーツヒラタカミキリ、ヤクシマコブヒゲアツバが加賀南部を中心に生息し、いずれの種も石川県が北限または北限に近い。これらは個体数が少なく隔離分布しているため、絶滅の危機に瀕している。他に、オオゴキブリやヒナカマキリ、ハネナガモクメキリガも生息するが、これらは二次林から発見されることもある。

平野部の原植生を残している社叢林や城跡の照葉樹林は、信仰の対象や史跡名勝として守られてきたものであり、今後も大きな環境改変はないものと思われる。しかし、近年、金沢城跡において、公園整備の際に高木が伐採されたことや、小さな社叢林において建造物の改築とともに林内が公園のように整備され、希少種の生息地が消滅した例もある。なお、上記の希少昆虫は、枯れ木、枯れ枝、落葉といった植物遺体に依存している種が多いので、これらを完全に除去する林内整備は生息地の破壊につながるとともに、原

植生の維持の観点からも問題があり、注意する必要がある。

次いで、県内最大の河川である手取川下流部に生息する種について述べる。手取川扇状地の扇頂部より下流域の手取川は、かつて氾濫を繰り返し、急流河川に特有な河原の自然植生が保たれ、そこには河原固有の昆虫が数多く生息していた。しかし、現在の河川敷は、手取川ダムの建設、河川敷内の土木工事や公園化などにより、上流からの河川流量や運搬砂礫の減少、河原に固有な植生の破壊、河道の安定化、草地化、林地化が進みつつある。かつてこの地域に生息していたミヤマシジミは、今回のレッドデータブックでは絶滅種となった。他にこの地域から絶滅した種としてカワラハンミョウがあげられる。また、カワラゴミムシもこの流域から姿を消しつつある種である。

また、アオモンギンセダカモクメは土木工事により県内唯一の生息地が消滅し再確認されていない。カワラバッタやクロツヤヒゲナガコバネカミキリも、過去 10 年間で生息場所が激減し、絶滅の危機が高まってきた。今後の河川敷内における土木工事は、緊急性のある治水目的の最小限の工事にとどめるべきである。手取川の良さは流路が変化することによって砂礫地が保たれていること、その周囲に河原固有の植生の存在することが、本来の姿であることを関係者は認識していただきたい。

（3）水辺

有史以来、自然環境の中で水辺ほど大きな人為的影響を受けた環境はない。河川の氾濫原、後背湿地、池沼は、古くは水田へと改変され、潟湖は干拓された。さらに戦後、全国規模で始まった水田のほ場整備は、水生小動物のみならず、湿地性や平地の陸生生物群集にも大きな影響を与え、平野部に生物の広大な分布空白域を作る結果となった。しかし、幸いにして本県は、シャープゲンゴロウモドキなどの大型ゲンゴロウ類やケシゲンゴロウ類、コオイムシ、チュウブホソガムシ、コバネアオイトトンボ、マダラナニワトンボなどの希少種が生息する水辺環境を丘陵部の水田周辺に有している。これら水生昆虫の大部分は能登地方のため池に生息しているが、なかには加賀南部にしか生息していない種も存在する。しかし、その最後の聖域となっているため池も、ため池改修事業による近代的な護岸化、大型開発、道路建設、管理放棄、枯渇、水質悪化により楽観できない状況が続いている。さらに、近年のブラックバスやアメリカザリガニなどの外来生物の侵入や集中的、継続的な採集圧は局所的にしか生息しない水生昆虫類に多大な影響を及ぼしている。

また、潟湖、河川の下流部には、ヤマトヒメメダカカッコウムシ、オオチャバネヨトウ、ガマヨトウといったヨシ、ガマ群落に依存する湿地性昆虫が生息するが、コンクリートの護岸化や埋め立てによって、生息環境が狭小化しているのは水生昆虫と同様である。

流水性のミネトワダカワゲラやニホンアミカモドキは発見例が少ないが、両種の生息域である河川上流部の渓流は人為的影響がおよんでいない所が大部分なので、生息環境が確保されていると考えられる。加賀南部の河川中流域において局地的に生息するアオサナエ、オナガサナエ、ヒメサナエは生息個体数がきわめて少ない。今後、河川改修や林道建設、生活排水の流入、河川流域の植生悪化により、容易に絶滅するものと思われる。一方、キイロサナエやヒラサナエは、近年になって新たな生息地が見つかった。これらサナエ類のような流水性の希少種は、これまでにあまり調査されなかった加賀南部や能登地方において新たな生息地が見つかる可能性がある。

今回のレッドデータブックで新たに追加したコオナガミズスマシ、手取川下流の緩流域で見つかったクビボソコガシラミズムシ、日本では手取川扇状地の扇頂付近の河原でしか見つかっていないオオクロツヤミズギワカメムシは生息の実態が不明な種である。

最近、農政レベルで生態系保全の考え方が取り入れられるようになり、水辺環境に配慮した工法やビオトープ造り、子供たちへの環境学習が推進されるようになってきた。これは水辺生態系の保全に寄与する可能性がある一方で、さまざまな問題も抱えている。たとえば、外来生物の存在、汚水の流入といった水生生物の生息を脅かす要因、現存する生物多様性の高いため池の保全対策を考慮せずに、新たに水辺環境を創造することは生態系保全にはつながらない。また、水草をビオトープに移植する際に他地域から導入

することも問題になってきている。こうした点について、関係する有識者や行政担当者は注意すべきである。

（4）低山地

低山地、すなわち里山における衰退種として、チョウ目ではホシチャバネセセリ、オオチャバネセセリ、オオムラサキ、ウラギンスジヒョウモン、オオミスジ、ギフチョウ、オオシモフリスズメなどがあげられる。これらの種の衰退は、里山の人為的な環境破壊によるものが大きいが、里山の管理放棄による植生や林内外の微気象の変化も大きな原因になっているものと考えられる。ウラギンスジヒョウモン、オオミスジ、オオシモフリスズメは加賀南部ではほぼ絶滅状態となってしまった。ギフチョウやホシチャバネセセリは林縁や林床のブッシュ化、植林地周辺の環境変化のため、生息地が消滅しつつある。オオミスジとオオシモフリスズメは、おもにウメ、スモモ等の栽培種に依存していることが共通しており、これらの樹木が里山地域から減少していることが衰退の大きな原因であろう。また、エノキの古木に依存するクロマダラタマムシも、その食樹の減少が生息地を孤立化させてしまったようである。クロシジミは古い記録があるのみで再発見されないのは、里山の管理放棄や道路整備と関連があるものと思われる。

オオセンチコガネは、県内では口能登の宝達丘陵周辺にのみ分布する種であるが、大きな環境改変がないにもかかわらず、近年減少傾向にあるのは、採集圧の可能性がある。犀川中流域の凝灰岩層に生息するヒゲナガホラヒラタゴミムシは、開発により生息地が狭小化する恐れがある。

いずれにせよ、低山地は開発等による環境破壊が大きい地域である反面、人手が加わらなくなったことによる環境変化により、衰退に向かっている種が増えているのが現状である。

一方、近年になって低山地からクマコオロギ、アカマダラハナムグリ、ニセリンゴカミキリ、セアカオサムシ、カギモンキリガなどが発見されている。これらの種は県内の確認記録が少なく生息の実態が不明であり、今後、注目する必要があろう。

（5）山地

環太平洋分布をするトガシオオナギナタハバチは、白山市（旧吉野谷村）で発見されて以来、新たな生息地が見つかっていない。また、ヒメボタルは、近年になって加賀南部の低山地から山地および白山山系の山地にかけて比較的広く分布することが判明してきた。山地帯の地下浅層に生息するウエダオオズナガゴミムシは調査方法の進展により、今後、生息の実態が明らかになるであろう。

白山山系の渓流沿いおよび山稜の露岩地周辺の草地には、アサマシジミ、ヒメシジミ、ゴマシジミ、ヘリグロチャバネセセリが局地的に生息しているが、個体数は少なく、特にヒメシジミは安定的な生息地が見つかっていない。これらの種は、かつて、林道建設や河川改修などの人為的影響による生息地の破壊が見られたが、現在は人が近づきやすい生息地において採集圧が大きくなっている。

白山山系の 1,000～1,500mのブナを主体とした落葉広葉樹林には、ミヤマツヤハダクワガタ、ヒメオオクワガタ、オニホソコバネカミキリが生息する。当地域では、近年、大きな環境改変はないが、ヒメオオクワガタの個体数減少が著しい。昆虫マニアや販売業者による採集圧がかかっているものと思われる。

県内の山地帯では林道建設を除けば、ここ 10 年間に大きな開発行為はなかったようである。しかし、先ほど述べた採集圧のほかに、昆虫の依存植物の採取による個体数の減少が懸念される種が存在する。たとえば、ヤマシャクヤクの採取によるフタスジカタビロハナカミキリの減少がそれにあたる。

（6）亜高山・高山

白山の亜高山帯にはハクサンホシシリアゲやモンクロキイロナミシャクが、高山帯にはヌタッカゾウムシやアルプスヤガが生息している。これらは北アルプスの高山性昆虫と共通していて、白山が分布の西限となっている。このうち、白山のアルプスヤガは赤褐色味が強く、飛騨山脈の個体群とは明らかに異なり、地理的に隔離された個体群といえる。クモマベニヒカゲやハクサンクロナガオサムシは亜高山帯から高山

帯まで広く分布している。しかし、これら高山性昆虫の知見は 20 年以上前の調査に基づくものがほとんどで、近年の知見がほとんど得られていない。今回、選定したカオジロトンボ、エゾコセアカアメンボ、ヌタッカゾウムシ、クモマベニヒカゲ、ゴマシジミなどは現在の生息実態が不明のままである。当地域は白山国立公園の特別保護地区に指定されており、厳しく採集規制されているが、温暖化の進行や登山者の増加が高山の昆虫相にどのような影響をもたらしているのか、本格的に調査する時期にきている。

2　種の選定基準

種の選定の基礎資料となるのは、「石川県の昆虫（1998）」である。この昆虫総目録には 7,912 種が記録されているが、その後、10 年が経過し、現在は 8,400 種余りに増加していることは先に述べたとおりである。これら 8,400 種余りの記録種の中から選定を行った。

昆虫の場合、全分類群を県全体において組織的に調査することは不可能なので、県のカテゴリー定義だけで種の選定を行うことは困難である。今回、種の選定にあたって判断基準としたのは、下記の２段階、８項目であり、「いしかわレッドデータブック〈動物編〉2000」とほぼ同様である。

(判断基準)

第１段階　環境と個体数

現在の生息環境や個体数が次の一つ以上に当てはまる種

ａ.人為的な影響を受けやすい地域（海岸、平野部、低山地）に生息している。

ｂ.海浜、照葉樹林、湿地、石灰岩地帯、高山など特殊環境に生息している。

ｃ.近年、個体数が著しく減少している。

ｄ.本来、個体数がきわめて少ないと考えられる。

第２段階　分布状況と確認記録

上記に該当する種の中から、現在の分布状況や確認記録が次の一つ以上に当てはまる種

ａ.県内の分布域が限定される。

ｂ.本県が国内における分布の限界になっている。

ｃ.全国的に確認記録がきわめて少ない。

ｄ.近年の確認記録がない。

これらの判断基準をもとに、各分類群の担当者が該当種を選定し、その後、県のカテゴリー定義の定性的要件に照らし合わせて、６つのカテゴリー（絶滅、絶滅危惧Ⅰ類、絶滅危惧Ⅱ類、準絶滅危惧、情報不足、地域個体群）に評価、分類した。

「情報不足」のカテゴリーは、「いしかわレッドデータブック〈動物編〉2000」においてはその判断基準が曖昧であり、乱用が懸念されたことから設けなかったが、今回は情報不足を「全国的な希少種で、県内の確認記録が１、２例のみであるが、調査が進めば他の地域でも見つかる可能性が高い種」と定義し、これに該当する種を選定した。

なお、白山の亜高山帯、高山帯のように特別保護地区が設定され、今後も人為的な影響が少なく、絶滅の恐れが少ないと思われる地域に生息している種は、選定を最小限にとどめた。このことは、「いしかわレッドデータブック〈動物編〉2000」作成時と同様である。

3　評価結果の概要

今回の選定種は表１のとおり、172 種で、石川県産昆虫の約２％に相当する。カテゴリーの「絶滅」は、今回初めてミヤマシジミとタガメが選定された。両種とも十分な調査が実施されたにもかかわらず、ミヤマシジミは 35 年間、タガメは 57 年間記録がなく、生息の可能性がきわめて低いと判断したものである。

今回の選定種のうち、旧版の「いしかわレッドデータブック〈動物編〉2000」より、ランクを上げた種が 23 種（表２参照）、ランクを下げた種が５種であった。新たに追加された種は情報不足を含め、80 種と大幅に増加した。このことは、昆虫類にとって生息環境がより厳しい状況に移行していることを反映している。一方、削除されたのは３種で、いずれも生息地、個体数とも多かったことが判明したためである。

ランクアップした 23 種のうち、海浜性、水生、湿地性、草地性、河原などの非森林性の昆虫は 18 種で 78%を占め、これらの生息環境が悪化していることを示唆している。また、森林性昆虫の中でもベーツヒラタカミキリ、ネブトクワガタ、クロマダラタマムシなどのように、平地の照葉樹林や里山に生息する種はランクアップしている。

表３は、生息環境別の種数を目別に示したものである。目別で見ると、当然ではあるが種数が多く比較的良く調べられているコウチュウ目、チョウ目で増加が目立った。また、生息環境のうち、旧版と比べ、選定種が最も増加したのは水辺で、水生、湿地性昆虫が危機的状況にあることがうかがえる。また、海浜性の昆虫もバッタ目、コウチュウ目、ガ類などで 11 種増加し、そのうち８種は近年発見されたものである。水辺や海浜という特殊環境において選定種が増加したのは、開発工事等により生息環境の悪化が進んだことはもちろん、海浜性の種のように、ここ 10 年で調査が進み、全国的な希少種が発見されたことも要因である。里山環境においてもウラギンスジヒョウモン、オオミスジ、オオチャバネセセリ、カギモンキリガなどチョウ目を中心に 19 種増加した。これらの種は、里山の開発と管理放棄が個体数の減少を招いたものであることは先に述べたとおりである。

自然環境に生息する昆虫は人為的影響が大きくなれば、ほとんどの種類は減少に向かうのが普通である。かつては普通種であったアカトンボ類や水生ホタル類も県内に広く生息したはずであるが、その生息地は面から線へ、線から点へと狭小化している。これらの種類もレッドデータブックに選定すべきとの意見もあるが、生息地数や生息個体数が希薄になっているだけで、分布域が限定され絶滅のおそれがある段階に達していないことから今回は選定を見送った。このような種類は低標高地には無数に存在するのが現状である。

表1　選定種一覧

絶滅　　2種（0種）

タガメ・ミヤマシジミ

絶滅危惧Ⅰ類　　40種（28種）

ホソミイトトンボ・ルリイトトンボ・コバネアオイトトンボ・ホンサナエ・オナガサナエ・ヒメサナエ・オグマサナエ・カトリヤンマ・ハネビロエゾトンボ・カワラバッタ・エサキアメンボ・ホッケミズムシ・ヒメマルミズムシ・カワラゴミムシ・イカリモンハンミョウ・ホソハンミョウ・カワラハンミョウ・ハラビロハンミョウ・ヒゲナガホラヒラタゴミムシ・マルケシゲンゴロウ・ナガケシゲンゴロウ・ゲンゴロウ・マルコガタノゲンゴロウ・シャープゲンゴロウモドキ・マルガタゲンゴロウ・シマゲンゴロウ・チュウブホソガムシ・コガムシ・オオクワガタ・ベーツヒラタカミキリ・キイロミヤマカミキリ・コトラカミキリ・トガシオオナギナタハバチ・シロズヒラタハバチ・イソメマトイ・カエルキンバエ・ゼニゴギンガクニクバエ・ゴヘイニクバエ・クロシジミ・アオモンギンセダカモクメ

絶滅危惧Ⅱ類　　35種（14種）

キイロサナエ・アオサナエ・マダラヤンマ・マダラナニワトンボ・オオゴキブリ・ヒナカマキリ・エゾエンマコオロギ・コオイムシ・オオヒョウタンゴミムシ・ウエダオオズナガゴミムシ・ヒメケシゲンゴロウ・テラニシセスジゲンゴロウ・コミズスマシ・ヒメミズスマシ・ヤマトホソガムシ・ネブトクワガタ・ヒメオオクワガタ・アカマダラハナムグリ・クロマダラタマムシ・カラマツカミキリ・ヒゲブトハナカミキリ・ベーツヤサカミキリ・ヨツボシカミキリ・クロツヤヒゲナガコバネカミキリ・オニホソコバネカミキリ・トホシカミキリ・オオルリハムシ・タカチホヒラタタマバチ・ハイイロクモバチ・アサマシジミ・ゴマシジミ・ヒメシジミ・ハマゴウノメイガ・ハマヤガ・カギモンキリガ

準絶滅危惧　　66種（49種）

モートンイトトンボ・オツネントンボ・ヒラサナエ・ネアカヨシヤンマ・カラカネトンボ・カオジロトンボ・キトンボ・ミネトワダカワゲラ・ウスバカマキリ・ハマスズ・ヤマトマダラバッタ・ハウチワウンカ・ハネナシアメンボ・ヒメミズカマキリ・ミヤケミズムシ・ミゾナシミズムシ・マツムラクサカゲロウ・オオウスバカゲロウ・ナガヒラタムシ・セアカオサムシ・ハクサンクロナガオサムシ・タカバクロヒラタゴミムシ・クビボソコガシラミズムシ・ヒメコガシラミズムシ・ルイスツブゲンゴロウ・クロゲンゴロウ・ミズスマシ・ガムシ・ツヤハマベエンマムシ・ヒメハマベエンマムシ・ミヤマツヤハダクワガタ・コブナシコブスジコガネ・オオセンチコガネ・オオチャイロハナムグリ・アオマダラタマムシ・エサキキンヘリタマムシ・ヒメボタル・ババジョウカイ・ヤマトヒメメダカカッコウムシ・クロズハマベゴミムシダマシ・フタスジカタビロハナカミキリ・トラフカミキリ・ニセリンゴカミキリ・ヌタッカゾウムシ・ウマノオバチ・キアシクロハラボソコマユバチ・クロモンアメバチ・エサキムカシハナバチ・カニギンモンアミカ・ニホンアミカモドキ・タシマツルギアブ・ギフチョウ・ホシチャバネセセリ・オオチャバネセセリ・ヘリグロチャバネセセリ・ウラギンスジヒョウモン・オオミスジ・オオムラサキ・クモマベニヒカゲ・モンクロキイロナミシャク・オオシモフリスズメ・ハネナガモクメキリガ・ガマヨトウ・オオチャバネヨトウ・チャバネキボシアツバ・ヤクシマコブヒゲアツバ

情報不足　　24種（―）

ムスジイトトンボ・クマコオロギ・ハマベツチカメムシ・エゾコセアカアメンボ・オオクロツヤミズギワカメムシ・コオナガミズスマシ・クロアリヅカエンマムシ・チビクワガタ・セスジカクマグソコガネ・イソジョウカイモドキ・ガガブタネクイハムシ・ツヤネクイハムシ・イネネクイハムシ・ハクサンハバチ・コマユバチ科の一種・アオスジクモバチ・ハクサンホシシリアゲ・タケウチケブカミバエ・キイロミヤマイエバエ・キバネクロバエ・ギンイチモンジセセリ・ルリイロスカシクロバ・ネズミホソバ・ヒメシロシタバ

地域個体群　　5種（1種）

ヤマトオサムシ・ヘグラシモフリコメツキ・ヘグラカバイロコメツキ・コムラサキ（黒色型）・アルプスヤガ

（　）内の数字は、「いしかわレッドデータブック〈動物編〉2000」の選定種数である。

表2　「いしかわレッドデータブック〈動物編〉2000」よりランクアップした昆虫

種　名	旧ランク→新ランク	種　名	旧ランク→新ランク
タガメ	Ⅰ類 → 絶滅	アオモンギンセダカモクメ	Ⅱ類 → Ⅰ類
ミヤマシジミ	Ⅰ類 → 絶滅	アオサナエ	準 → Ⅱ類
ルリイトトンボ	Ⅱ類 → Ⅰ類	マダラヤンマ	準 → Ⅱ類
カワラバッタ	Ⅱ類 → Ⅰ類	エゾエンマコオロギ	準 → Ⅱ類
ホッケミズムシ	Ⅱ類 → Ⅰ類	オオヒョウタンゴミムシ	準 → Ⅱ類
カワラゴミムシ	準 → Ⅰ類	ウエダオオズナガゴミムシ	準 → Ⅱ類
ホソハンミョウ	Ⅱ類 → Ⅰ類	ネブトクワガタ	準 → Ⅱ類
マルケシゲンゴロウ	準 → Ⅰ類	クロマダラタマムシ	準 → Ⅱ類
ゲンゴロウ	Ⅱ類 → Ⅰ類	アサマシジミ	準 → Ⅱ類
コガムシ	Ⅱ類 → Ⅰ類	ゴマシジミ	準 → Ⅱ類
ベーツヒラタカミキリ	Ⅱ類 → Ⅰ類	ヒメシジミ	準 → Ⅱ類
クロシジミ	準 → Ⅰ類		

表3　選定種の目別種数とおもな生息環境（情報不足、地域個体群を含む）

目　名	海 岸	水 辺	平 地	低山地	山 地	亜高山･高山	計
トンボ目		21(17)					21(17)
カワゲラ目					1(1)		1(1)
ゴキブリ目			1(1)				1(1)
カマキリ目			2(1)				2(1)
バッタ目	3(1)		2(1)				5(2)
カメムシ目		11(5)	1(0)				12(5)
アミメカゲロウ目	1(0)		1(1)				2(1)
コウチュウ目	9(5)	27(8)	10(6)	17(8)	11(2)	2(2)	76(31)
ハチ目	2(1)			8(5)	1(0)		11(6)
シリアゲムシ目					1(0)		1(0)
ハエ目	4(3)	1(1)		1(1)	4(1)		10(6)
チョウ目(チョウ類)			1(1)	9(5)	4(3)	1(1)	15(10)
チョウ目(ガ類)	2(0)	2(2)	5(6)	4(1)		2(2)	15(11)
計	21(10)	62(33)	23(17)	39(20)	22(7)	5(5)	172(92)

（ ）内の数字は「いしかわレッドデータブック〈動物編〉2000」の選定種数である。

4　生息環境の保全にむけて

レッドデータブックの作成によって、希少昆虫への関心が高まるのは望ましいことである。多くの昆虫が衰退に向かっているのは明らかであるし、その理由も多くの種類で推定されている。しかし、レッドデータブックの中で提言された保全対策が進まないのは残念なことである。一方、保全対策として事業化された環境改変の中には、都市公園と同様な環境創造や周囲の環境とマッチしないビオトープ造りが善意として進められ、結果として貴重な自然環境が破壊されたケースがある。まずは、現在の生息環境を保全することが最も重要なはずである。

石川県では「いしかわレッドデータブック〈動物編〉2000」の昆虫類の選定種のうち、過去 10 年間で保全に向けて積極的な保全対策を講じてきたのはイカリモンハンミョウと大型ゲンゴロウ類に限られる。しかし、これらの種の保全活動は個人の尽力によるところが大きく、行政が後押しして成果を上げたものであり、地域住民や行政が主導したわけではない。他のすべてのレッドリスト掲載種は、たとえ絶滅危惧Ⅰ類、Ⅱ類であっても、その生息地は、行政を含めた関係機関からあまり関心が払われずに、従来どおりに土地造成や河川改修、護岸工事、道路建設、外来生物等の脅威にさらされているのが現状である。その原因は、レッドデータブックで選定されても、関係者がどこをどのように保全したらよいか理解できる内容になっていないこと、行政や関係機関を含めた保全への体制が整っていないことがあげられる。いいかえれば、レッドデータブックは希少種をリストアップすることが目的となっていて、活かすことに十分に注意が払われていないのが現状で、このことは他府県でも同様である。

今後は保全対策をより効果的に進めるために、希少種の生息地にグレードを付けて３次メッシュで示し、関係機関に周知させる方法を考えることが重要である。環境改変にかかわる関係機関に、希少種の生息場所を３次メッシュ地図でわかりやすく示すことによって、工事の回避や環境に配慮した工事方法を模索することが可能になると思われる。この「生息地公開による環境保全」が効果的な保全対策として機能するには、昆虫のみならず、あらゆる希少生物を網羅した３次メッシュ地図を作成すること、保全にあたってのマニュアルや連絡体制を検討、整備することが必要である。

5 種の解説について

（1）種名の表示について

学名と和名は原則として、「日本産野生生物目録 無脊椎動物編（環境庁 1995）」に従ったが、一部の種については、最新の種名で表示した。また、亜種名については、亜種名表示が妥当な場合、種小名の後に付けた。

（2）分布図について

２次メッシュ地図における分布状況は、次の２種類に分けて表示した。ただし、表示した２次メッシュには、2007 年現在で、すでに絶滅した所が含まれていることを付記しておく。

■ ‥‥ 1990年以降に生息を確認している。
■ ‥‥ 1989年以前に生息を確認しているが、1990年以降の生息が不明である。

謝辞

本報告をまとめるにあたり、文献や写真提供、標本の借用などについて次の方々や機関からご協力をいただいた。ここにご芳名を記して厚くお礼申し上げる。

石川県ふれあい昆虫館、石原一彦、上馬康生、牛島釈広、江口元章、大脇淳、加藤明宏、金山晃、川瀬英夫、国立感染症研究所、小幡英典、小松市立博物館、左合直、白井伸和、鈴木邦雄、高橋久、竹谷宏二、入場登、三上秀彦、森幸彦、吉岡明良、吉村久貴

（富沢　章）

新旧対応表①

		前回						
		絶滅 0	絶滅危惧Ⅰ類 28	絶滅危惧Ⅱ類 14	準絶滅危惧 13	情報不足 0	地域個体群 0	カテゴリー外 22
今回	絶滅 2		タガメ ミヤマシジミ					
	絶滅危惧Ⅰ類 40		ホソミイトトンボ ホンサナエ オナガサナエ ヒメサナエ オグマサナエ カトリヤンマ ハネビロエゾトンボ エサキアメンボ イカリモンハンミョウ カワラハンミョウ ハラビロハンミョウ ヒゲナガホラヒラタゴミムシ ナガケシゲンゴロウ シャープゲンゴロウモドキ シマゲンゴロウ チュウブホソガムシ キイロミヤマカミキリ トガシオオナギナタハバチ シロズヒラタハバチ イソメマトイ カエルキンバエ ゼニゴギンガクニクバエ ゴヘイニクバエ	ルリイトトンボ カワラバッタ ホッケミズムシ ホソハンミョウ ゲンゴロウ コガムシ ベーツヒラタカミキリ アオモンギンセダカモクメ	カワラゴミムシ マルケシゲンゴロウ クロシジミ			コバネアオイトトンボ ヒルマルミズムシ マルコガタノゲンゴロウ マルガタゲンゴロウ オオクワガタ コトラカミキリ
	絶滅危惧Ⅱ類 35		キイロサナエ マダラナニワトンボ コオイムシ	オオゴキブリ ヒナカマキリ ベーツヤサカミキリ クロツヤヒガナガコバネカミキリ ハイイロクモバチ（※ハイイロベッコウ） タカチホヒラタタマバチ	アオサナエ マダラヤンマ エゾエンマコオロギ オオヒョウタンゴミムシ ウエダオオズナガゴミムシ ネブトクワガタ クロマダラタマムシ アサマシジミ ゴマシジミ ヒメシジミ			ヒメケシゲンゴロウ テラニシセスジゲンゴロウ コミズスマシ ヒメミズスマシ ヤマトホソガムシ ヒメオオクワガタ アカマダラハナムグリ カラマツカミキリ ヒゲブトハナカミキリ ヨツボシカミキリ オニホソコバネカミキリ トホシカミキリ オオルリハムシ ハマゴウノメイガ ハマヤガ カギモンキリガ

新旧対応表②

		前回						
		絶滅 0	絶滅危惧Ⅰ類 0	絶滅危惧Ⅱ類 0	準絶滅危惧 36	情報不足 0	地域個体群 1	カテゴリー外 61
今回	準絶滅危惧 66				オツネントンボ ヒラサナエ ネアカヨシヤンマ カラカネトンボ ミネトワダカワゲラ マツムラクサカゲロウ ナガヒラタムシ ハクサンクロナガオサムシ タカバクロヒラタゴミムシ クロゲンゴロウ オオチャイロハナムグリ アオマダラタマムシ ヒメボタル ババジョウカイ ヌタッカゾウムシ エサキムカシハナバチ カニギンモンアミカ（※カニアミカ） ニホンアミカモドキ ギフチョウ ホシチャバネセセリ オオムラサキ クモマベニヒカゲ モンクロキイロナミシャク オオシモフリスズメ ハネナガモクメキリガ ガマヨトウ オオチャバネヨトウ チャバネキボシアツバ ヤクシマコブヒゲアツバ			モートンイトトンボ カオジロトンボ キトンボ ウスバカマキリ ハマスズ ヤマトマダラバッタ ハウチワウンカ ハネナシアメンボ ヒメミズカマキリ ミヤケミズムシ ミゾナシミズムシ オオウスバカゲロウ セアカオサムシ クビボソコガシラミズムシ ヒメコガシラミズムシ ルイスツブゲンゴロウ ミズスマシ ガムシ ツヤハマベエンマムシ ヒメハマベエンマムシ ミヤマツヤハダクワガタ コブナシコブスジコガネ オオセンチコガネ エサキキンヘリタマムシ ヤマトヒメメダカカッコウムシ クロズハマベゴミムシダマシ フタスジカタビロハナカミキリ トラフカミキリ ニセリンゴカミキリ	ウマノオバチ キアシクロハラボソコマユバチ クロモンアメバチ タシマツルギアブ オオチャバネセセリ ヘリグロチャバネセセリ ウラギンスジヒョウモン オオミスジ
	情報不足 24				コマユバチ科の一種 ルリイロスカシクロバ			ムスジイトトンボ クマコオロギ ハマベツチカメムシ エゾコセアカアメンボ オオグロツヤミズギワカメムシ コオナガミズスマシ クロアリヅカエンマムシ チビクワガタ セスジカクマグソコガネ イソジョウカイモドキ ガガブタネクイハムシ	ツヤネクイハムシ イネネクイハムシ ハクサンハバチ アオスジクモバチ ハクサンホシシリアゲ タケウチケブカミバエ キイロミヤマイエバエ キバネクロバエ ギンイチホンジセセリ ネズミホソバ ヒメシロシタバ
172	地域個体群 5				コムラサキ(黒色型) アルプスヤガ		ヤマトオサムシ	ヘグラシモフリコメツキ ヘグラカバイロコメツキ
	カテゴリー外 3				コシボソヤンマ クロチャマダラキリガ マルミズムシ			

※(　)内 前回掲載種名

タガメ

Lethocerus deyrolli (Vuillefroy)

カメムシ目コオイムシ科

石川県カテゴリー　絶滅

国カテゴリー　絶滅危惧Ⅱ類

選定理由

全国的に激減し、北陸３県でも近年の確認例はほとんどなく、県内では絶滅したと判断される。

形　態

体長48～65㎜で日本最大の水生昆虫。体型は扁平で体色は灰褐色～褐色。１齢幼虫は黄色と褐色の縞模様、２齢以降は全身が淡緑色。口吻は短大で第２節は短い。前脚は先端が１本の爪となった捕獲脚、中・後脚は扁平な遊泳脚である。腹端には伸縮可能な短い呼吸管をもつ。

国内分布

北海道、本州、隠岐島、淡路島、四国、九州、対馬、琉球列島に分布する。

県内分布

1951年の小松市丸ノ内の採集個体が現存しているのみである。かほく市や輪島市では1970年代までは生息していたようで、かつては個体数は少ないものの、県内に広く分布していたと考えられる。

生　態

カエル、水生昆虫などを捕食する。４月頃から活動し、メスが５～６月頃に水面上の抽水植物の茎や杭に産みつけた卵塊を、オスが保護する。幼虫は約１ヶ月半で老熟し、８月頃に羽化する。成虫は数kmを飛翔し、灯火に飛来する。10月には上陸し、水際や林内の枯れ草や石の下、泥の中で越冬する。

生息地の条件

平野部～丘陵部の、抽水植物などの水草が多く、やや水深のある、池沼、湿地、ため池、水田、休耕田などのさまざまな止水域、緩やかな流れの河川や水路の水際部にも生息する。

生存の危機

池沼・河川の改修、圃場整備、休耕田の植生遷移などによる生息環境の消失や、水質の悪化による餌生物の減少、街灯の増加、近年では採集圧も脅威である。本種は農薬への感受性が高いため、北陸３県では1950～60年代の農薬使用によって大打撃を受けたと考えられる。（A）

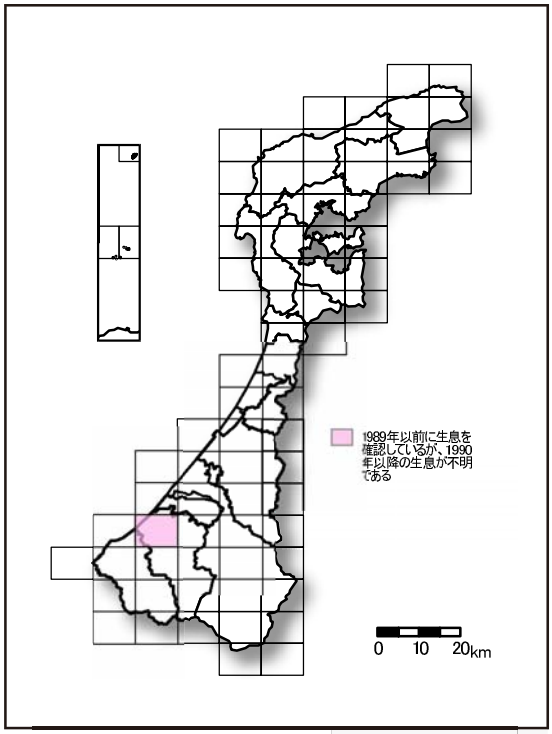
特記事項

近年、金沢や能登で発見例があるが、飼育個体の放逐の可能性が高い。

参考文献

市川憲平 1993-1994. 雄が子守する虫たち タガメの生態（1）-（3）. 海洋と生物, 15（5）: 353-356. 15（6）: 421-426. 16（1）: 55-61.
向井康夫 2007. 稲作水系におけるタガメの生活場所利用. 昆虫と自然, 42（12）: 13-16.

標本提供者：小松市立博物館



県内の分布

ミヤマシジミ

チョウ目シジミチョウ科

Lycaeides argyrognomon praeterinsularis (Verity)

石川県カテゴリー	絶滅
国カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類

選定理由

1961年当時は手取川河川敷や堤防法面に多数生息していたが、1973年の記録を最後に最近は全く観察されず、絶滅したものと考えられる。

形　態

開張30㎜内外の小型種。オスの翅表は紫の強い青色、裏面は灰白色で後翅外縁に橙色の帯があり、その外側の黒斑の中には光沢のある青色がある。メスの翅表は黒褐色で後翅外縁に橙色斑があり、裏面は地色がオスより茶色味が強い。

国内分布

本州のみに分布し、分布の中心は関東、中部地方にある。生息地の多くは大きな河川の水系に沿って知られ、本県の手取川下流部がミヤマシジミの分布の西限になっていた。

県内分布

1961年（昭和36年）には、旧辰口町の手取川河川敷、堤防法面で多数観察されているが、継続した調査がなされておらず、1973年に手取川河原で２頭のオスが採集されて以来、最近の記録はない。

生　態

主として食樹となるコマツナギ群落の見られる河川敷や堤防などに生息している。年に数回発生し、富山県では５月下旬から10月下旬にかけて３回発生することが知られている。成虫は好んで花に集まり、生息地であるコマツナギ群落から離れることはほとんどない。卵で越冬し、越冬卵はコマツナギの根元近くの落葉、枯枝、小石などに産みつけられる。

生息地の条件

コマツナギ群落が見られる河原や堤防が、広い範囲で残されていることが重要と思われる。

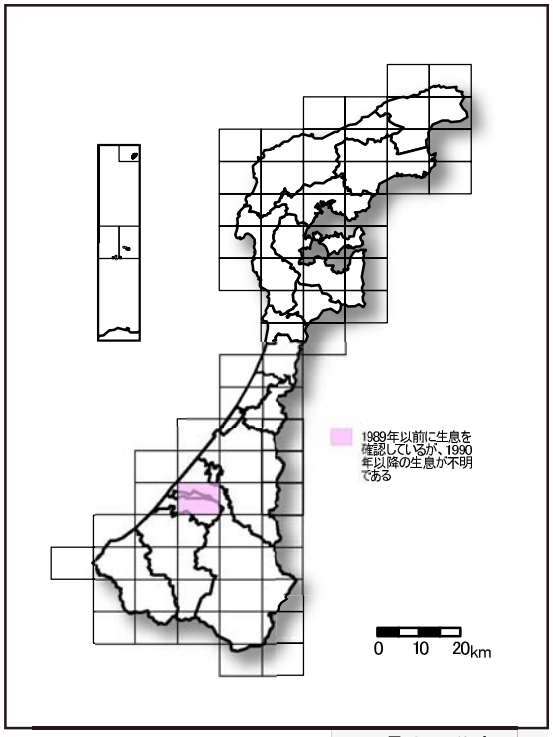
特記事項

現存の石川県産標本はメス１個体のみで、現在、国立科学博物館に所蔵されている。

参考文献

富沢　章 1975. 石川県のミヤマシジミについて. とっくりばち, (30･31) : 5.
福田晴夫ほか 1984. ミヤマシジミ. 原色日本蝶類生態図鑑（Ⅲ）: 316-319. 保育社. 大阪

標本提供者：富沢章



県内の分布

ホソミイトトンボ

Aciagrion migratum (Selys)

トンボ目イトトンボ科

石川県カテゴリー　絶滅危惧Ⅰ類

国カテゴリー　なし

選定理由　日本海側での分布北限に近く、県内で２頭確認されたのみで、最近10年間は発見されていない。

形　態　夏型は腹長24～25㎜、後翅長15～17㎜、越冬型は腹長28～31㎜、後翅長18～22㎜の細長いイトトンボ。越冬型は淡褐色で、成虫で冬を越して春に鮮やかな青色に変化する。

国内分布　西南日本に多く、日本海側では福井県の所々に生息し、富山県では発見されておらず、新潟県で１例の報告がある。

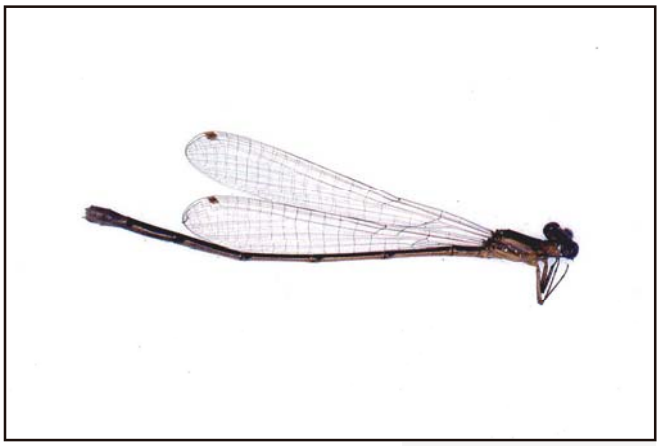
県内分布　金沢市小立野地区での1966年の１オスの採集例と1987年の１メスの確認例があるだけで、発生池は不明。

生　態　夏型は７～９月に活動し、越冬型は８月中旬から出現して秋まで草原などで摂食期を過ごす。成虫は越冬すると成熟し、体色も変って生殖活動に移る。産卵は、池沼の植物茎に単独または連結態で行なわれ、成虫は６月末には姿を消す。夏型と越冬型の生ずる原因はまだ不明。幼虫は平地～丘陵の抽水植物の多い池沼で育つ。

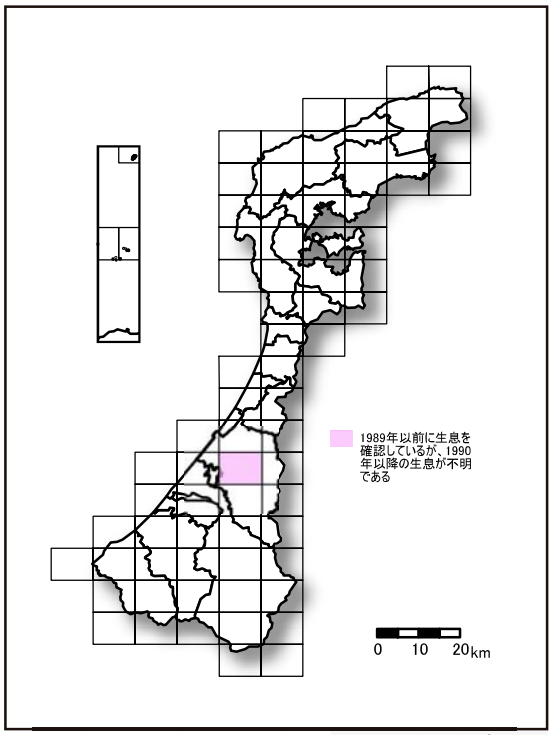
生息地の条件　平地や丘陵のヨシなど抽水植物の多い池や沼。農薬や廃水の影響がなく、堤防がコンクリートや防水シートでおおわれず、あまり深くはなくて、夏でも干上がらないこと。付近に摂食や越冬に利用できる林野のあることも重要である。

生存の危機　本県では特に個体数が少ないので、平地の池沼の埋立てや汚染、付近の開発などが今後の定着に影響すると考えられる。ブラックバスやブルーギルの移入も、生存をおびやかす。（A, B）

参考文献　武藤　明 1998. トンボ目. 石川県の昆虫：49-57. 石川県自然保護課.



標本提供者：武藤明



県内の分布

ルリイトトンボ

Enallagma boreale cirulatum Selys

トンボ目イトトンボ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類
国カテゴリー	なし

選定理由

分布西南限に近く、県内では２箇所で確認されたに過ぎず、そのうち、１箇所は近年の発生が見られない。ブルーギルやブラックバス等の移入や、開発の影響が危惧されている。

形　態

腹長25～30㎜、後翅長20～25㎜。オスは美しいるり色で、黒条があり、メスの地色は青緑で背面は黒条が発達する。

国内分布

本州中部以北から北海道に分布し、岐阜県白鳥町と高根村が西南限。福井県の上小池や刈込池にも生息するが、富山県では未発見。

県内分布

能美市鍋谷の蟹淵と、小松市桂町のため池から知られているに過ぎない。桂町の池は、標高度が極めて低い点でも注目されたが、最近はまったく見られなくなった。

生　態

本州の山地では５月末から成虫が出現し、８月下旬まで活動する。小松市桂町では、４月下旬にはすでに成熟虫も見られ、蟹淵では、８月上旬にも観察されている。未熟期には池沼の周囲の林内に分散しているが、成熟虫は水域にもどって水面を低く飛び、オスどうしで干渉し合ったりメスを追尾したりする。産卵は、水草の茎に単独または連結態で行なう。

生息地の条件

山間に開けた湖沼で、水温が低く、適当に水草が生えていること。周囲に雑木林があり、農薬の空中散布などの影響が及ばず、池沼には強力な捕食者がいないこと。

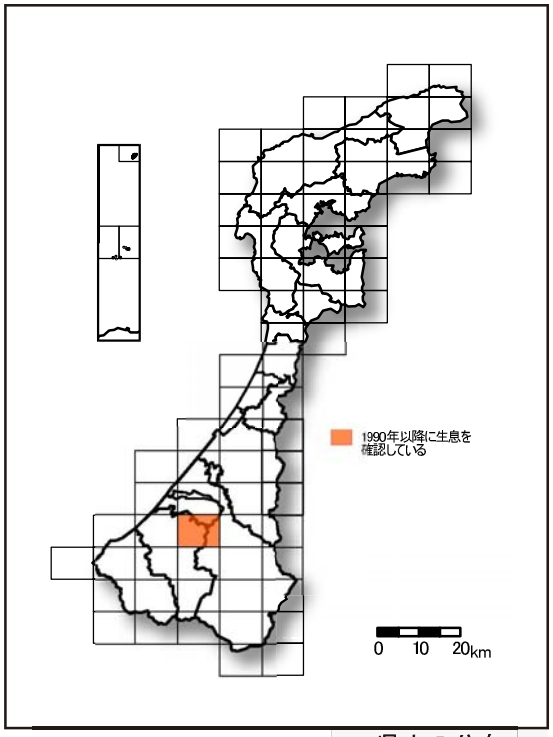
生存の危機

能美市の蟹淵では、ブルーギルによる捕食のためか個体数が一時減少したが、最近は回復傾向にある。小松市桂町の池への進出は最近のことと思われ、今後も発生するか否かは不明である。ここも、外来魚が放流されている。周囲の山林が伐採されたり、スギの植林が進むと直接ないし間接の影響を受ける。桂町の池は下方がすでに伐開されている。気候温暖化や水質悪化の影響も否定できない。
（A, C, D）

参考文献

武藤　明 1998. 石川・福井の1998年度の蜻蛉資料. Ｔｏｍｂｏ, 41：33-36.
武藤　明 2007. 石川県の蜻蛉に関する最近の知見. とっくりばち, (75)：24-28.

写真提供者：富沢章



県内の分布

コバネアオイトトンボ

Lestes japonicus Selys

トンボ目アオイトトンボ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類
国カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類

選定理由
アオイトトンボやオオアオイトトンボと異なり、もともと全国的に希少種であったが、ため池の乾燥や林野の開発など生息環境の劣化により、近年、急速に減少している。

形　態
腹長26～33㎜、後翅長18～22㎜、黄白色の地に金緑の部分がある。オオアオイトトンボより小型で、オスは成熟してもアオイトトンボのような白粉をふかない。

国内分布
東北から九州におよぶが、まれ。

県内分布
能登の２地域に生息するが、加賀からは未発見。志賀町（上野、酒見、久喜）と珠洲市（赤刈、正院、三崎付近）。

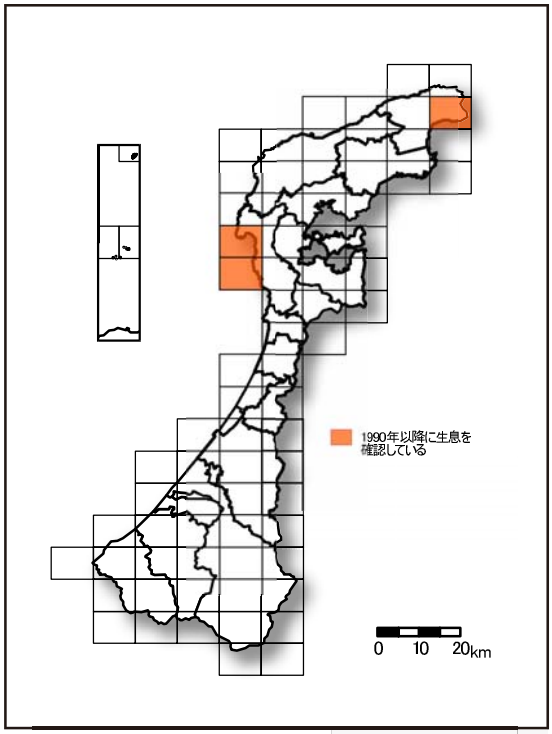
生　態
丘陵地の林間の、浅く抽水植物の多いため池や沼に生息し、７月下旬から羽化して11月中旬まで池沼の周辺で活動する。アオイトトンボやオオアオイトトンボよりはるかに劣勢で、前２種オスとの異種間連結も見られた。

生息地の条件
平地～丘陵の林間の、抽水植物が多く浅い池沼。珠洲では、かなり小さい沼沢でも見られる地点がある。

生存の危機
志賀町では主産地のため池の一つが最近干上り、本種がまったく見られない。アメリカザリガニの侵入した池もある。珠洲でもブラックバスの移入、山道の建設や開発に伴い減少した地点がある。池沼の周囲の林野の荒廃も、悪影響を及ぼす。（A, B, C）

参考文献
武藤　明 2006. 石川県の蜻蛉目、とっくりばち, (74) : 7-19.
武藤　明 2007. 石川県の蜻蛉に関する最近の知見、とっくりばち, (75) : 24-28.

写真提供者：富沢章



県内の分布

ホンサナエ

Gomphus postocularis Selys

トンボ目サナエトンボ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類
国カテゴリー	なし

選定理由

1950年代でも極めてまれであったが、この40年間に県内では確認例がない。

形　態

腹長33～36㎜、後翅長29～32㎜で、黄色の地に黒紋のあるずんぐりしたサナエ。オスは腹端がふくらみ、尾部上付器は強くまがっている。

国内分布

北海道から本州、四国、九州にまで分布する日本特産種。福井県では最近もかなり生息するが、富山県からは近年記録されていない。

県内分布

1950年代に金沢の低山帯の水域でごく僅かに見られたが、以降はまったく確認できない。金沢の内川地区の渓畔で、1957年６月９日に採れた１♀の標本が、実在する唯一のものである。

生　態

平地～丘陵の中流域の砂泥底に育ち、成虫は５～６月に出現する。未熟期には付近の樹林に移動し、成熟すると流れの近くに来て水辺の土などに静止したり、水面低く飛んだりするが、定住性は乏しい。メスは、腹端に大きい卵塊を形成してから、打水産卵する。

生息地の条件

自然状態のよく保たれた河川の中流域。流量が安定して保たれていて、底は砂泥～砂礫質。農薬や廃水による汚染がなく、岸辺に岩石や砂泥もあること。付近に樹林があり、摂食や休止の場所が確保できることも必要。

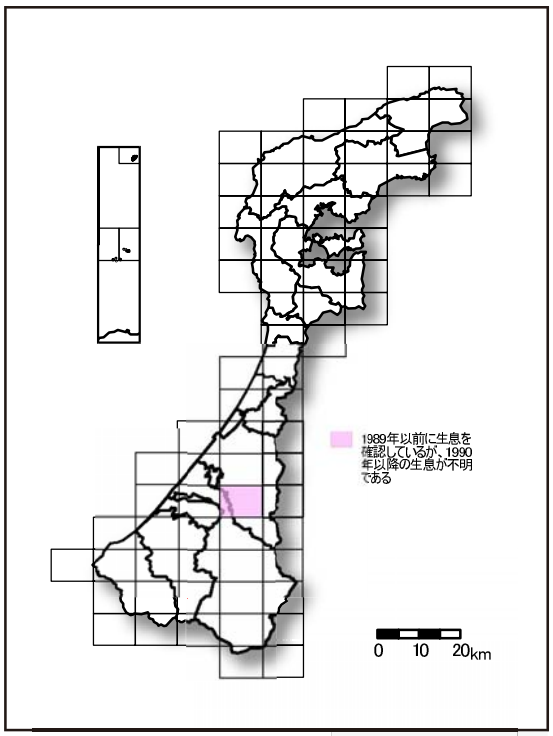
生存の危機

河川の中流域は、上流に比べ人工的な汚染を受けやすい。堰堤の造設で、上手は淀み下手は流量が減る傾向がある。流れの直線化や堤防のコンクリート化工事、水辺の除草や火入れ、摂食期を過ごす林野の開発や害虫防除、道路建設と車の増加なども負の要因。過去の農薬や洗剤などの影響が、遅れて顕現したとも考えられる。（A）

参考文献

武藤　明 1998. 昆虫の生態をめぐって. とっくりばち, (65) : 8-10.
武藤　明 2007. 石川県の蜻蛉に関する最近の知見. とっくりばち, (75) : 24-28.

標本提供者：武藤明



県内の分布

オナガサナエ

Onychogomphus viridicosta Oguma

トンボ目サナエトンボ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類
国カテゴリー	なし

選定理由
かつて金沢市で１頭採れただけで、この40年間に県内では確実な記録や採集例がなかったが、加賀市の２地域で再確認された。

形　態
腹長39～46㎜、後翅長32～37㎜で、黄緑の地に黒条がある。オスの腹端近くがふくらみ、尾部付器は長大で曲がっている。

国内分布
日本特産種で、本州の東北地方から九州南部まで分布する。北陸では富山県でも近年記録されていないが、福井県にはまれでない。

県内分布
金沢市石引で、1957年６月１日に未熟なオスが採れたのが、県内で唯一の確実な記録であった。2003年に加賀市の日谷川と曽宇川から羽化し、その後成虫も２頭確認されたが、定着しているか否か不明である。

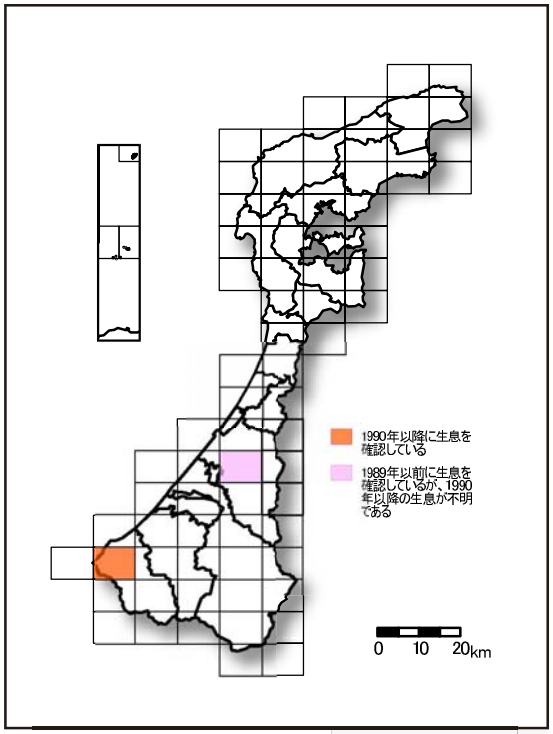
生　態
幼虫は、平地～丘陵の河川の中流域の砂礫底で育つ。成虫は６～７月に羽化し、林間で摂食期を過ごした後に水辺へ現われ、８～９月にかけて活動する。オスは水面に出ている岩石に静止したり、流れの上を飛びまわったりするが、かなり敏捷である。

生息地の条件
河川の中流から少し上流にかけて、砂礫～砂泥質のやや流速のある部分に生息する。汚染がなければかなり狭い川や、用水でも見られる。メスは移動性が高く、幼虫が狭い用水などで育つこともある。

生存の危機
農薬や廃水の流入による汚染と、ダム建設、川床ざらえ、堤防のコンクリート化、ヨシなどの除去を含めた河川の改修や、周辺の開発が絶滅をもたらす要因。未熟期には分散移動して摂食するため、餌を介した二次的影響も及び得る。生息域が人間の生活圏に近く、いったん滅びかけると回復が難しい。（A）

参考文献
武藤　明 1998. 昆虫の生態をめぐって. とっくりばち, (65) : 8-10.
武藤　明 2004. 石川県のトンボに関する知見. とっくりばち, (72) : 1-4.

標本提供者：武藤明



県内の分布

ヒメサナエ

Sinogomphus flavolimbatus Oguma

トンボ目サナエトンボ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類
国カテゴリー	なし

選定理由

成虫は過去に小松市大杉上町の大杉谷川で２頭採集されたのみである。近年、南加賀の３河川からのみ見つかっているが、局地的で個体数が少ない。

形　態

腹長31～34㎜、後翅長24～28㎜の小型でやや細いサナエ。胸側に１本の太い黒条がありオスの尾部上付器は角状で白い。

国内分布

日本特産種で、本州、四国、九州に分布するが、産地は比較的少ない。北陸では福井県の南川の本流や支流にかなり生息する。

県内分布

幼虫調査により小松市大杉上町の大杉谷川、丸山町の大日川、加賀市山中温泉九谷町の大聖寺川で生息が確認されているが、大日川や大聖寺川では少ない。

生　態

幼虫は、低山の渓流の比較的上流部にある砂礫質の水底で育ち、岸辺の石などの上で羽化する。幼虫が流下移動すると言われるが、本県ではいずれもダム湖より上流から得られている。未熟期には林間で摂食するが、成熟虫は７月から８月に渓畔で活動する。飛翔力は強くない。

生息地の条件

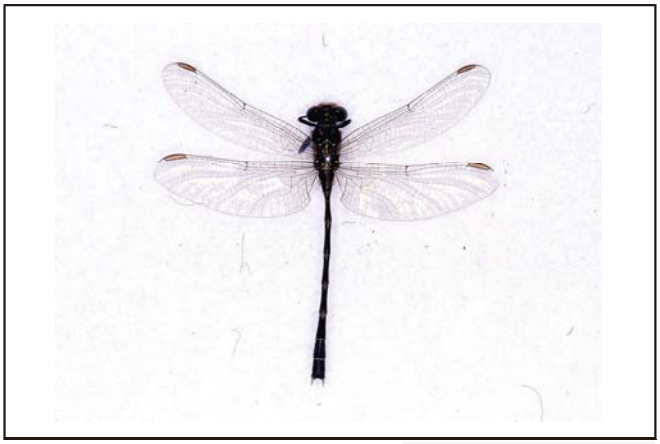
汚染のない砂礫底の中流域で、水面に出た石や岸辺の岩石、ヨシなどが存在すること、近くには摂食空間としての疎林があることが重要である。生息河川は比較的大きく、水量が適当に維持され、かつ停滞しないことも条件となる。

生存の危機

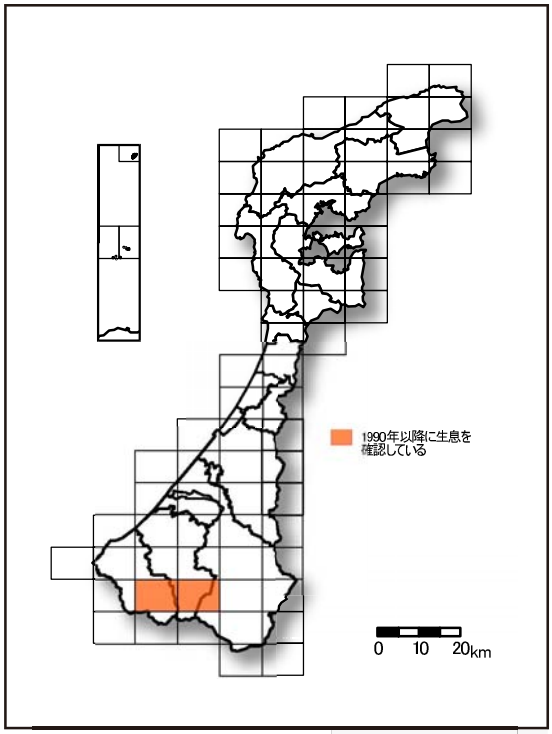
幼虫は生息環境の選択性が強く、源流域下流からダム湖までの、比較的狭い範囲だけから幼虫が確認されているので、ダム工事、道路建設、川床ならし等で礫や抽水植物が除去されることなどで生息環境が損なわれると影響が大きい。（A）

参考文献

中山佐一郎 1999. 小松のトンボ. 88pp. （自刊）.
武藤　明 1999. 石川・福井のトンボ資料（1999）. Ｔｏｍｂｏ, 42：64.
浅地哲也 2004. ヒメサナエの幼虫の記録. とっくりばち, (71) ：11.



標本提供者：武藤明



県内の分布

オグマサナエ

Trigomphus ogumai Asahina

トンボ目サナエトンボ科

石川県カテゴリー　絶滅危惧Ⅰ類

国カテゴリー　絶滅危惧Ⅱ類

選定理由

加賀市三木と奥谷でしか発見されておらず、三木が日本海側の分布北限。個体数も少なく、ため池の改修や捕食性魚類の影響が危惧される。

形　態

腹長33～35㎜、後翅長26～29㎜で、黄色の地に黒条があり、コサナエによく似るがやや大きい。オスの尾部上付器には背面に棘があり、メスの生殖弁は二又に深く裂けている。

国内分布

日本特産種で、本州中部以南から九州にかけて分布するが、普遍的ではない。北陸では福井～石川の県境の一部のため池に産するが、他地域からは未知である。

県内分布

加賀市三木の一つのため池で、成熟したオス２頭が1998年に記録され、1999年には同じ池で計８個の羽化殻が見つかり発生が確認された。その後この池は改修で生息しなくなったが、付近の２つのため池でも発見されている。

生　態

平地～丘陵の池沼、水田、用水溝などに幼虫は生息し、泥にもぐり長い腹端を突き出している。成虫は４月に羽化し、池の周辺の陽当りのよい土堤や草地で飛んだり静止している。成虫の生態はコサナエとあまり変わらないが、発生時期がやや早い。

生息地の条件

農薬や廃水の流入がなく、堤防はコンクリートや防水シートでおおわれていないこと。ブラックバスやブルーギルなどの捕食性魚類が繁殖していないこと。浮葉植物か適当に生え、開水面があり、周囲に草原や樹林もあることが要件。

生存の危機

ため池の埋めたて、水抜き後の放置、廃棄物の投入、外来魚の移入、林野の開発などが脅威となる。加賀市三木付近では、本種の生息する池の自然度は高いが、これをコンクリート化や防水シート張りにすると生存が危ぶまれる。周囲の道路建設で車の通行量が増えて間接的影響が及ぶこともある。（A, C）

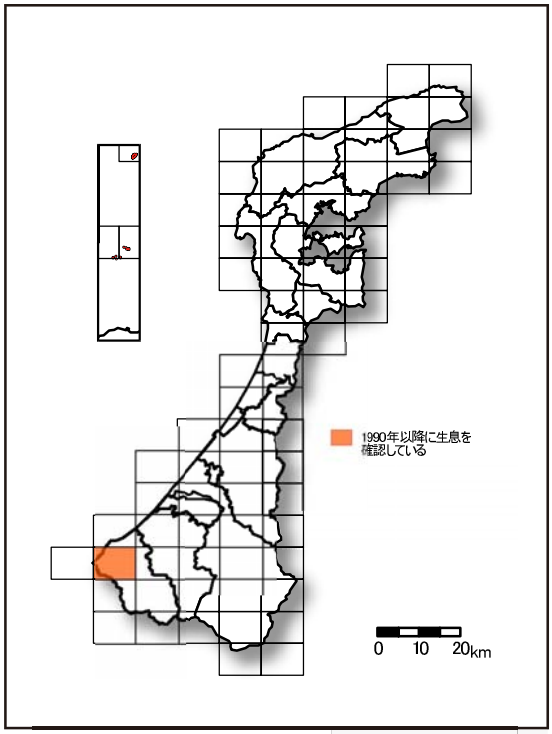
特記事項

県産の個体は、前肩条の黄色部が黒化し消失する特徴がある。

参考文献

武藤　明 1998. 石川・福井の1998年度の蜻蛉資料. Ｔｏｍｂｏ, 41：33-36.
武藤　明 2007. 石川県の蜻蛉に関する最近の知見. とっくりばち, (75)：24-28.

標本提供者：武藤明



県内の分布

カトリヤンマ

Gynacantha japonica Bartenef

トンボ目ヤンマ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類
国カテゴリー	なし

選定理由
以前は普通種であったが、10年以上にわたって、県内ではまったく確認されていなかった。能登半島の志賀町で2002年に確認され、2006～2007年にも観察されたが、極めて希少である。

形　態
腹長46～53㎜、後翅長42～50㎜。複眼が大きく、腹部のくびれが目立つ黄緑色で細長いヤンマで、オスの腹部には大きい耳状突起があり、メスの尾毛は極めて細長い。

国内分布
北海道南部から沖縄まで、広く分布。

県内分布
最近、志賀町の２地域で少数の成虫が確認されている。かつては南加賀から能登まで広く生息し、小松市（大杉谷、安宅、安宅新、松任町）や、金沢市の低山帯から丘陵部、羽咋市気多大社、中能登町石動山、七尾市小丸山公園などから記録されている。特に金沢市崎浦地区では、きわめて多かった。

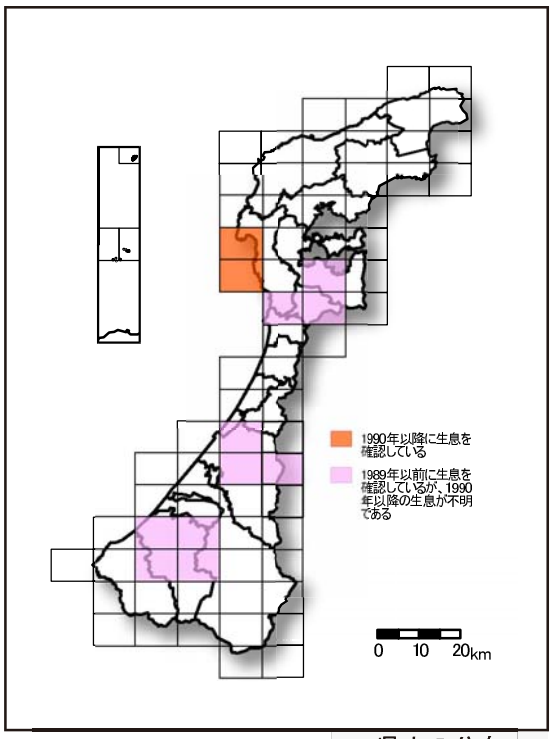
生　態
幼虫は平地～丘陵の水田、小川、樹陰の多い池などに育つ。成虫は６～７月に羽化し、11月頃まで活動する。夕刻と早朝の薄明時に主に飛翔して摂食し、日中はうす暗い林内の枝に下垂していることが多い。産卵は、水辺の軟泥中に単独で行う。

生息地の条件
樹林にかこまれた汚染のない池や小川、水田など里山的な環境の豊かな地域。行動範囲が広いため水圏～陸地を含めて広域の自然状態がよく保たれていること。

生存の危機
農薬、廃水などによる水系の汚染、池沼の埋めたて、堤防のコンクリート化や防水シート張り、農薬の空中散布、林野の開発、餌となる小昆虫の汚染や減少による二次的影響や、捕食性魚類の移入など。（A, B）

参考文献
武藤　明 1998. トンボ目. 石川県の昆虫：49-57. 石川県自然保護課.
武藤　明 2007. 石川県の蜻蛉に関する最近の知見. とっくりばち, (75)：24-28.

標本提供者：武藤明



県内の分布

ハネビロエゾトンボ

Somatochlora clavata Oguma

トンボ目エゾトンボ科

石川県カテゴリー　絶滅危惧Ⅰ類
国カテゴリー　絶滅危惧Ⅱ類

選定理由
元来は珍種であるにもかかわらず1950～60年代に金沢付近で多産したが、1991年に２頭採集されたのを最後に、県内でまったく確認できなかった。最近、小松市と志賀町で再発見されている。

形　態
腹長37～47㎜、後翅長39～45㎜の金緑色で、頑丈な感じの中型種。第１～２腹節がふくらみ、胸側に２黄条があり、メスの生殖弁は下方に突出する。

国内分布
日本特産種で、北海道から南九州にまで分布するが、産地は極めて限定される。福井県では1997年に初めて発見され、富山県でも同年に採集されている。

県内分布
現在、小松市と志賀町で確認されている。かつては金沢市の丘陵地帯の用水や水田の溝に多産したが、現在は確認されていない。また、旧松任市や野々市町での採集例もある。

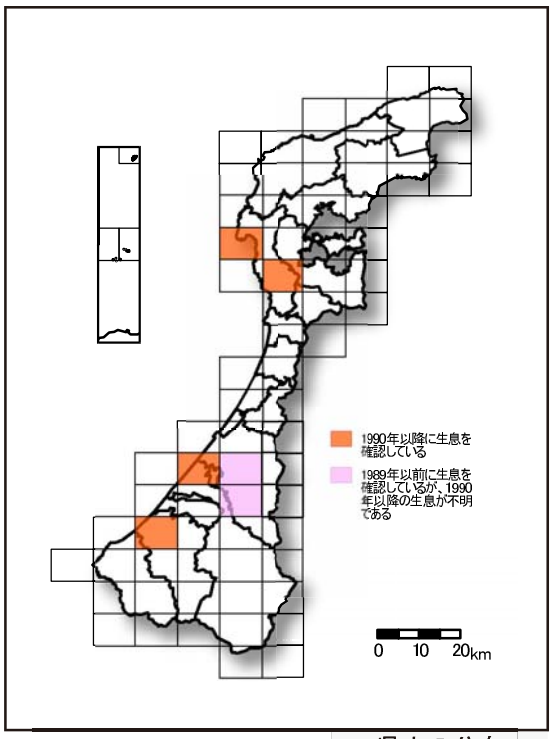
生　態
幼虫は丘陵や平地の流れの緩い小川や用水の砂泥底に育ち、成虫は７月中旬から羽化する。未熟期は林野に分散し、やや高空を旋回しつつ摂食飛翔を行なう。８月上～中旬から生殖水域に現れ、オスは用水や水田上で滞空型の縄ばりを占め、空中によく停飛する。メスは、浅い淀みに単独で水面または泥を腹端で打つようにして、生殖弁から卵を産下する。

生息地の条件
適当な水量が保たれ、汚染のない緩やかな小川や用水路が存在すること。側壁がコンクリートでなく、泥または砂泥底で、岸辺には植生があり、付近に摂食や休息用の疎林が存在することも要件。

生存の危機
里山から平地の水田地帯は、農薬や廃水の流入、廃棄物の投入、用水の暗渠化やコンクリート化の影響が大きい。摂食期には分散するため、広域にわたる環境保護が必要。乾田化で、用水が干上がることも影響する。金沢市の長坂用水はコンクリート化、人家も増え汚染が進み、野田山丘陵の害虫駆除とあいまって本種とキイロサナエの絶滅をもたらした。志賀町の個体数は少なく、絶滅の危険性が高い。（A）

参考文献
武藤　明 1960. ハネビロエゾトンボの生態. Ｔｏｍｂｏ, ３：８-15.
武藤　明 2006. 石川県の蜻蛉目. とっくりばち, (74)：７-19.

標本提供者：武藤明



県内の分布

昆虫類

カワラバッタ

Eusphingonotus japonicus (Saussure)

バッタ目バッタ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類
国カテゴリー	なし

選定理由

全国的に産地が減少している。石川県では手取川下流部で確認されているが、近年の堤防内の土木工事の影響で個体数が激減している。

形　態

体長は35㎜前後である。体色は灰青色で河原の石と紛らわしい。後翅中央部に褐色の半円帯があり、その内側が鮮やかな青色をしているのが特徴である。

国内分布

日本特産種で、本州、四国、九州に分布している。

県内分布

手取川の天狗橋より下流域に点在して生息している。

生　態

河川の増水によって生じた草本類の少ない砂礫地に適応した種で、着陸時には石の上を好んで降りる習性がある。成虫は７月から10月まで見られる。

生息地の条件

大雨時には水が流れて水没するような、草の生えていない広い砂礫地の河原において特異的に生息する。したがって河床が安定し、河原に草本類が多くなると、本種は生息できなくなる。

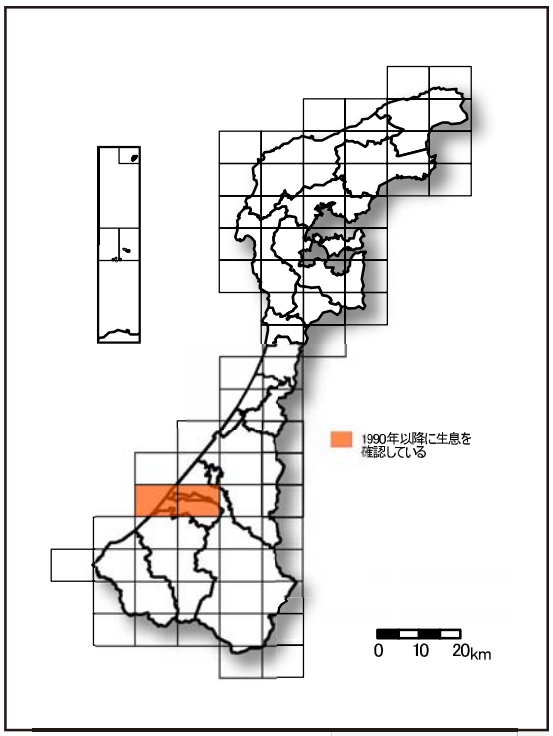
生存の危機

堤防内の土木工事によって河床の安定化が進み、河川敷への植物の進入が容易になってきている。そのため砂礫河川敷に強く適応した本種は好適な生息場所を失い、全国的に生息地が減少している。石川県でもかつては手取川下流部域に広く生息していたが、減少傾向にあり、特に2007年からの大規模な河川土木工事により、現在の生息地はごく一部に限られ、危機的状況にある。河川敷内の土木工事は河原の自然環境に配慮し、最少限にとどめるべきである。（A, B）

参考文献

富沢　章 2004. 手取川流域におけるカワラバッタの分布. とっくりばち, (72) : 7-8.

写真提供者：富沢章



県内の分布

エサキアメンボ

Limnoporus esakii (Miyamoto)

カメムシ目アメンボ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類
国カテゴリー	準絶滅危惧

選定理由

国内の生息地は局所的であり、全国的に急速に減少している。県内での生息地は１箇所にすぎない。

形　態

小型でスマートな種で、体長はオス7.9～8.5㎜、メス9.1～10.5㎜。体は暗赤褐色～褐色で、体側には銀白色の毛の縦帯がある。触角は褐色で、第４節が最長、黒色であることで他種と区別できる。

国内分布

北海道、本州、四国、九州および対馬に局所的に分布する。

県内分布

河北潟周辺できわめて局所的に生息する。現在の生息地は河北潟干拓地内の水路１箇所である。

生　態

ヨシの間や岸辺近くのやや暗い所に生息し、行動範囲は狭く、水面上の昆虫などを捕食する。河北潟の水路では、夕方～夜間に開放水面で確認された。抽水植物の茎に産卵し、幼虫は11月でも確認された。400～500m程の飛翔による移動が推定されている。繁殖場所の岸辺の堆積物中で越冬する。

生息地の条件

平野部の潟湖、池沼、水路の周縁部で、ヨシ、マコモなどの抽水植物群落内の植物の間や岸辺近くに生息する。水位低下によって卵の乾燥による死亡が起きやすいため、水位の安定した場所に生息する。

生存の危機

池沼や水路の抽水植物群落の護岸工事による消失、各種排水や農薬の流入、ゴミによる水質汚染、外来種の侵入が脅威である。かつての生息地であった津幡町の水路は2001年に環境改変され、絶滅した。現在の生息地では、アメリカザリガニの侵入、水質汚染への対策が必要である。（A）

参考文献

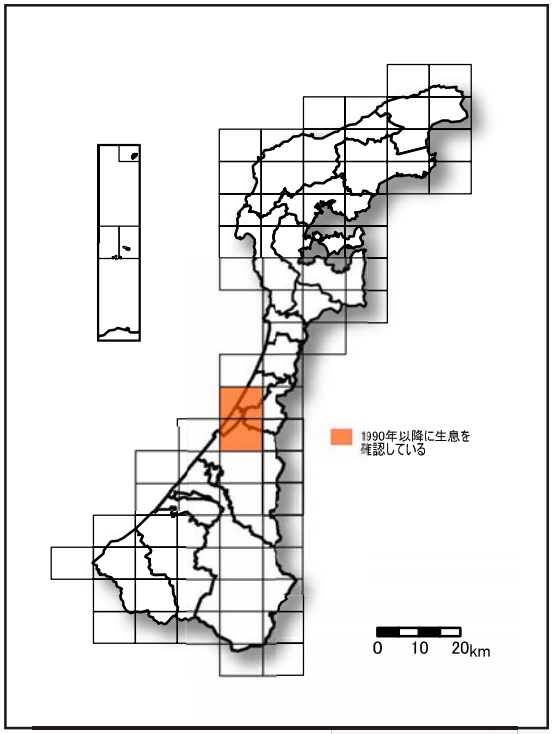
立川周二 1985. エサキアメンボは絶滅するかーその分布と生息地からー. Rostria, (37) : 521–525.

村路雅彦・加藤正雄 1990. エサキアメンボ *Limonoporus esakii* の生活史に関する知見. 中国昆虫 （４） : 1－5.

中尾史郎・江種伸之 2007. 紀の川流域におけるエサキアメンボ *Limnoporus esakii* のメタ個体群構造. 環境情報科学論文集, (21) : 99–104.

高橋　久 2008. 河北潟干拓地の排水路で確認されたエサキアメンボ. 河北潟総合研究, 11 : 13–14.

写真提供者：西原昇吾



県内の分布

ホッケミズムシ

Hesperocorixa distanti hokkensis (Matsumura)

カメムシ目ミズムシ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類
国カテゴリー	準絶滅危惧

選定理由

局所的に分布するうえ、生息環境が開発や都市化によって消失し、減少傾向が著しい。県内でも生息が確認された場所は数箇所で、個体数が少ない。

形　態

体長9.5～10.8㎜の大型のミズムシ類。体型は細長く扁平な短円筒形で、翅端は狭く丸まる。体は淡青黄色で背面には多数の黒色横条斑を装う。前肢は短く捕獲脚となる。中肢は細長く末端に細長い２本の爪を備える。後肢は脛節、跗節が扁平で長い毛を密生した遊泳脚となる。

国内分布

本州（山形県以南）、淡路島、四国、九州に局所的に分布する。

県内分布

羽咋市、旧能登島町、輪島市、旧柳田村、珠洲市。

生　態

３月頃に水草の茎に産卵、発生し、６月頃に新成虫が出現する。成虫はやや深さのある池などに移動し、灯火に飛来することもある。他の小動物を捕らえて体液を吸収するとともに、珪藻などの植物を摂食するとされる。成虫は、水辺の枯れ草、落ち葉、石の下で越冬する。

生息地の条件

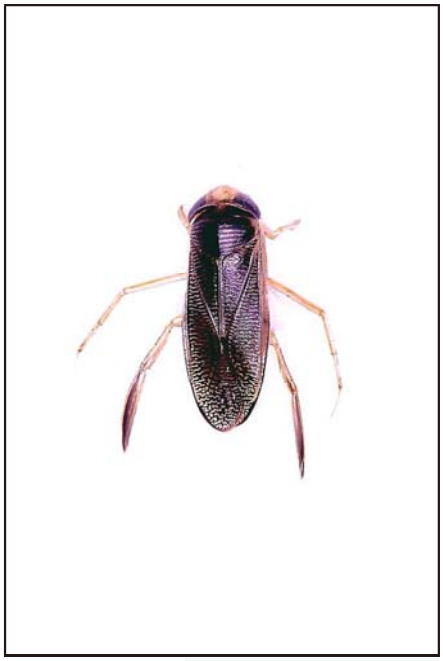
平野部～丘陵部のヒシやジュンサイなどの植生の豊富な池沼、湿地、緩やかな流れの水路。

生存の危機

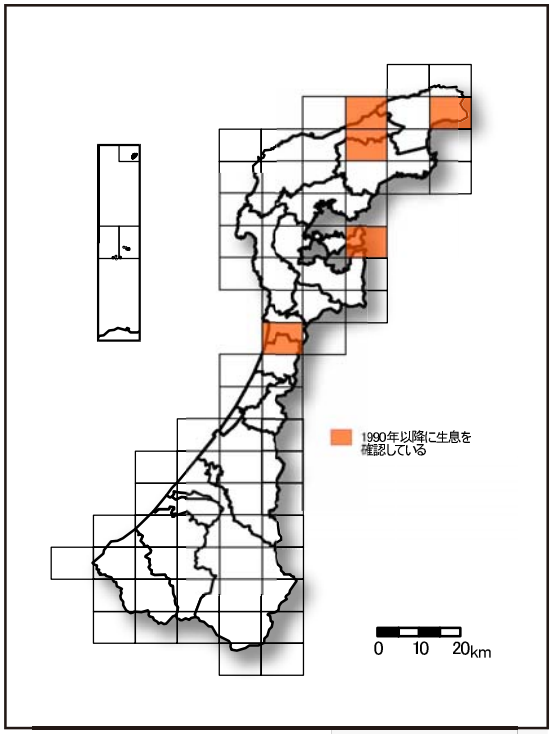
ため池、湿地などの開発や埋め立てによる消失、水質汚染、ため池の管理放棄、外来種の侵入が脅威となっている。羽咋市の生息地は埋め立てにより面積が減少した。珠洲市では、オオクチバスによる本種の捕食が確認されており、また、生息地の上流部の大規模な道路建設の影響が懸念される。ため池群の維持、河川周辺の遊水地の再生とともに、周辺の里山環境の維持が保全上重要である。
（A, B, C）

参考文献

Dodson VE．1975. Life Histories of Three Species of Corixidae (Hemiptera: Heteroptera) from Western Colorado. American Midland Naturalist, 94（2）:257-266.
林　正美・宮本正一 2005. 半翅目. 川合禎次・谷田一三(編), 日本産水生昆虫. 東海大学出版会.



標本提供者：富沢章



県内の分布

ヒメマルミズムシ

Paraplea indistinguenda（Matsumura）

カメムシ目マルミズムシ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類
国カテゴリー	なし

選定理由

全国的に生息に適した環境が失われつつある。県内での分布はきわめて局所的である。

形　態

体長は1.5～1.7㎜。頭部は幅広く、前胸背板は大きい。体色は背面が淡黄白色、淡褐色～黄褐色で腹面が黒色、脚は黄色。頭頂から顔面にかけて中央は顕著に線状に縦隆起がある。体表面には顕著に目立つ点刻がある。触角は３節。後脚脛節は円筒状で、跗節には２本の長い爪がある。

国内分布

本州、四国（徳島）、九州。

県内分布

輪島市曽々木における1965年の記録があるが、現在も生息しているかどうか確認されていない。近年、珠洲市内のため池１箇所で、再発見された。

生　態

島根県のため池では、幼虫は５月下旬～６月中旬に、成虫は５月下旬、７～８月、11月に確認された。背を下にして泳ぎ、ボウフラなどの微小な水生昆虫を捕まえて体液を吸う。水際の植生間でときに群生する。灯火にも飛来する。

生息地の条件

平野部～丘陵部の抽水植物および緑藻類が繁茂する、小規模で開放水面が狭い池沼、湿地。

生存の危機

生息する小さな池の埋め立て、各種排水や農薬による水質汚染が脅威となっている。現在の生息地を保全することが最重要であるが、生息地から数kmの水域でアメリカザリガニが増加傾向にあり、駆除の徹底、今後の分布拡大の防止が重要である。（A, B）

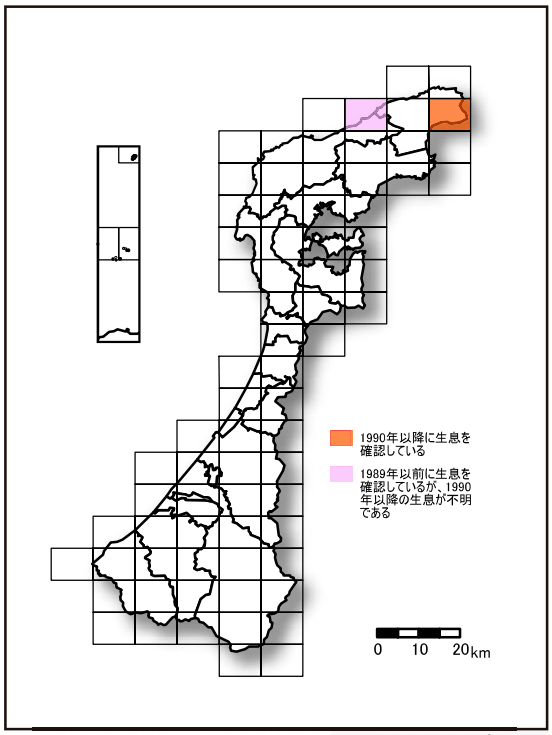
参考文献

日浦　勇 1968. 日本産水棲・半水棲半翅類の分布の研究１. 大阪市立自然科学博物館所蔵標本の検討. 大阪市立自然科学博物館研究報告, (20) : 65-81.

西城　洋 2001. 島根県の水田と溜め池における水生昆虫の季節的消長と移動. 日本生態学会誌, 51（1）: 1-11.

富沢　章 2008. 石川県でヒメマルミズムシを記録. とっくりばち, (75) : 59.

標本提供者：富沢章



県内の分布

カワラゴミムシ

Omophron aequalis Morawitz

コウチュウ目カワラゴミムシ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類
国カテゴリー	なし

選定理由
県内分布が局地的で、採集記録も少ない。数年前まで安定した生息地があったが、現在は確認されていない。

形　態
体長は5.5～6.5㎜。テントウムシのような丸い体形でやや扁平、脚は長い。大顎と複眼は大きく、触角は細くて体長の半分弱である。体色は、白黄色の地に緑色の光沢をおびた黒い斑紋を持つ。

国内分布
北海道、本州、四国、九州。

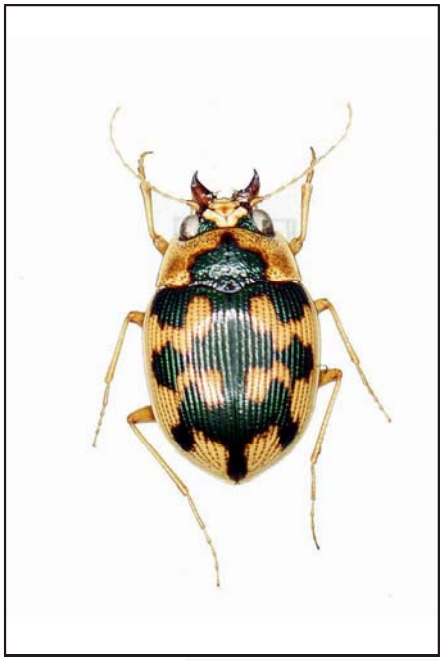
県内分布
白山市（旧白峰村）、羽咋市滝町、中能登町能登部で記録があるが、羽咋市と中能登町では、現在も生息しているかどうか不明である。

生　態
砂浜や河原の砂地に生息し、本県では成虫は６～８月頃に見られる。夜行性で、昼間は砂地に浅く潜り、夜間は砂地の上を活発に走り回る。灯火にも飛来する。

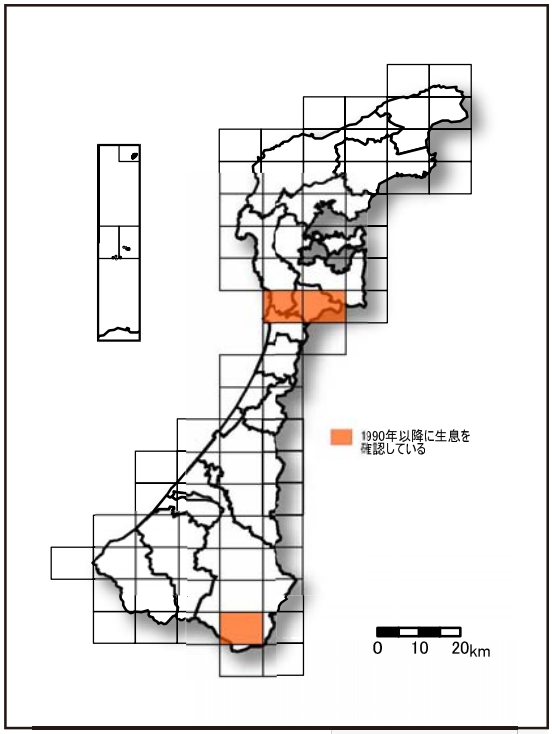
生息地の条件
本県では、小河川がそそぎ込む砂浜の周辺および大河川の河川敷にある安定した砂地帯に生息している。

生存の危機
生息地が局所的なこともあって生息基盤は脆弱である。本種の生息地は、砂浜の整備や開発、河川の砂地帯の減少等で消滅しつつあり、現在、生息が確認されているのは１箇所のみである。（A）

参考文献
高羽正治 1998. コウチュウ目カワラゴミムシ科. 石川県の昆虫：103. 石川県自然保護課.



標本提供者：井村正行



県内の分布

イカリモンハンミョウ

Cicindela anchoralis Chevrolat

コウチュウ目ハンミョウ科

石川県カテゴリー　絶滅危惧Ⅰ類

国カテゴリー　絶滅危惧Ⅰ類

選定理由

本州における生息地は石川県のみで隔離分布している。現在の生息地は狭く、約２kmの海浜に限られ、車の乗り入れや密漁が絶えないため、絶滅の危機に瀕している。

形　態

流線型の体と細長い足を持ち、体長12～15㎜の大きさである。体背面は茶褐色で、上翅には白いイカリ状の斑紋を持っている。

国内分布

石川県、大分県、宮崎県および鹿児島県の本土部と種子島に分布する。

県内分布

かつては金沢市から志賀町まで広く分布していたが、現在は羽咋市と志賀町の海岸の一部にのみ生息する。

生　態

幼虫は、海浜植物帯より汀線側の砂地に垂直に穴を掘り、生活している。成虫になるまで２～３年かかるものと思われる。成虫は６月下旬より湿り気のある砂地に出現し、８月上旬までに交尾、産卵しているが、少数の個体は８月末ないし９月上旬まで見られる。

生息地の条件

海浜植物帯から汀線までの間が長くゆるやかな傾斜を持つ砂浜であり、砂の粒子がかなり細かいことが重要である。また、背後に海浜植物帯や松林などの植生が存在することも重要である。

生存の危機

海からの砂の供給が少なくなり、海浜が狭小化している。砂浜への車の乗り入れや海水浴客の増大により個体数が減少している。防波堤などの人工物の造築および海浜植物帯や背後の松林の消失は生息環境の破壊につながる。これらの人為的影響や環境改変を最小限にとどめるような保護対策を強力に施すべきである。さらに今後の生息個体数の推移によっては、系統維持のための累代飼育が必要になる可能性がある。（A）

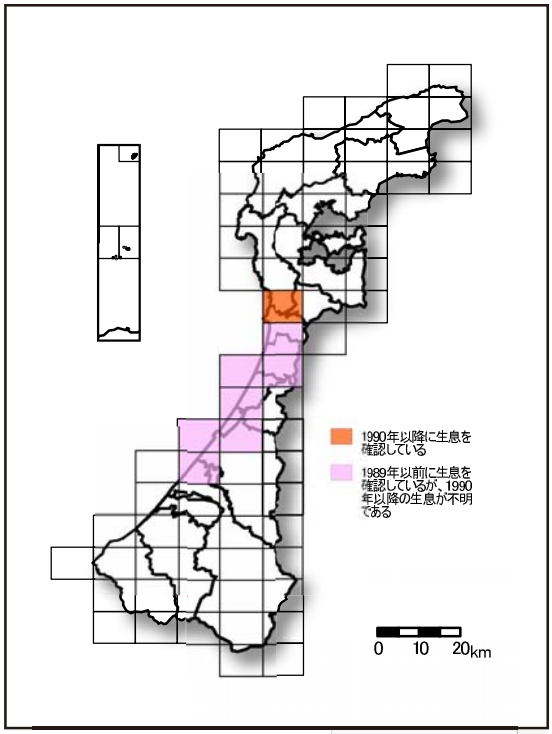
特記事項

石川県指定天然記念物、石川県指定希少野生動植物種（2005年）に指定されている。
内灘町の天然記念物にも指定されているが、現在は生息していない。

参考文献

大塚外次 1936. イカリモンハンメウに就いて. 昆虫界, 4（33）：787－789.
中根猛彦 1973. 日本の甲虫（２）. 昆虫と自然, ８（10）：７.
富沢　章 2001. イカリモンハンミョウの加温飼育. とっくりばち, (67)：10-11.
徳本　洋 2003. 石川県におけるハンミョウ類の古い記録. とっくりばち, (70)：15-16.

写真提供者：富沢章



県内の分布

ホソハンミョウ

Cicindela gracilis Pallas

コウチュウ目ハンミョウ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類
国カテゴリー	準絶滅危惧

選定理由　分布が全国的に局地的で、県内における生息地は１箇所だけであり、個体数も少ない。開発や昆虫マニアによる採集圧により、絶滅の可能性が高い。

形　態　体長は11㎜程度で、体表には金属光沢を持ち、複眼は突出している。脚は細長い。

国内分布　本州、四国、九州に分布する。

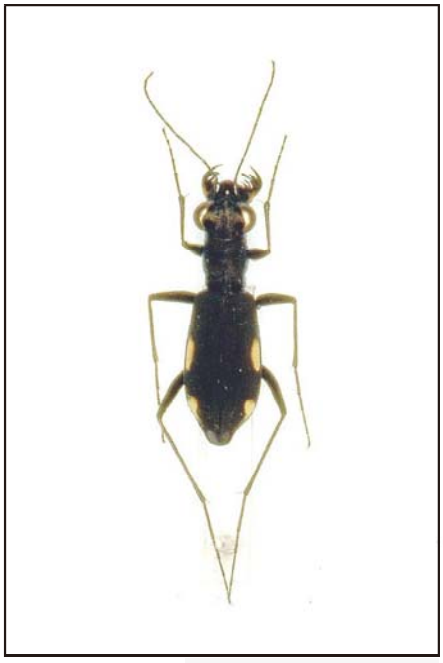
県内分布　金沢市内の１箇所に生息しているのみであり、しかも個体数は少ない。

生　態　成虫は７～８月に見られ、林縁の草地や芝生の上を敏速に走り回っている。他のハンミョウ類と同様、幼虫期には地中に穴を掘って生活しているものと思われるが、詳細な生態は不明である。

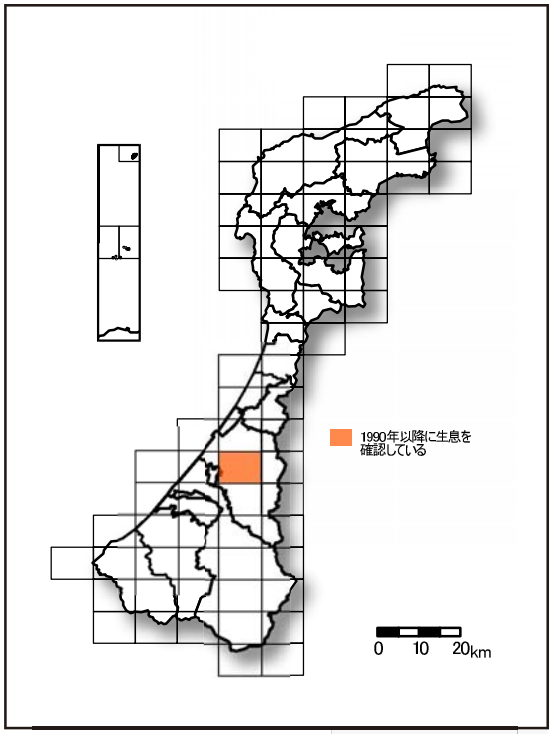
生息地の条件　林縁に位置し、裸地が多く、草がまばらに生えた草地に生息する。

生存の危機　植生の遷移により草のまばらな草地がなくなると生息に適さなくなることから、植生の貧弱な草地を維持することが重要である。（A）

参考文献　中根猛彦 1973. 日本の甲虫（２）. 昆虫と自然, ８（10）：5-7.



標本提供者：井村正行



県内の分布

カワラハンミョウ

Cicindela laetescripta Motschulsky

コウチュウ目ハンミョウ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類
国カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類

選定理由
かつては河川や海岸の砂地に比較的広く分布していたが、現在は激減し、生息地が限定されるうえ、採集圧がかかっている。

形　態
体長14～17㎜で比較的大型のハンミョウである。上翅に白い斑紋があるが、個体変異が大きい。

国内分布
北海道から九州まで分布するが、局地的でどの地域でも個体数は減少傾向にある。

県内分布
かつては加賀地方、能登地方の海浜や手取川中流域に比較的広く分布していたが、現在の生息地は、加賀市、かほく市、宝達志水町に限られる。

生　態
成虫は８月から出現し、９月まで見られる。海浜植物帯から砂浜への移行帯に見られることが多い。幼虫、成虫ともに肉食性で、成虫は俊敏に活動し小動物を捕食する。幼虫期は砂地に穴を掘って生活している。

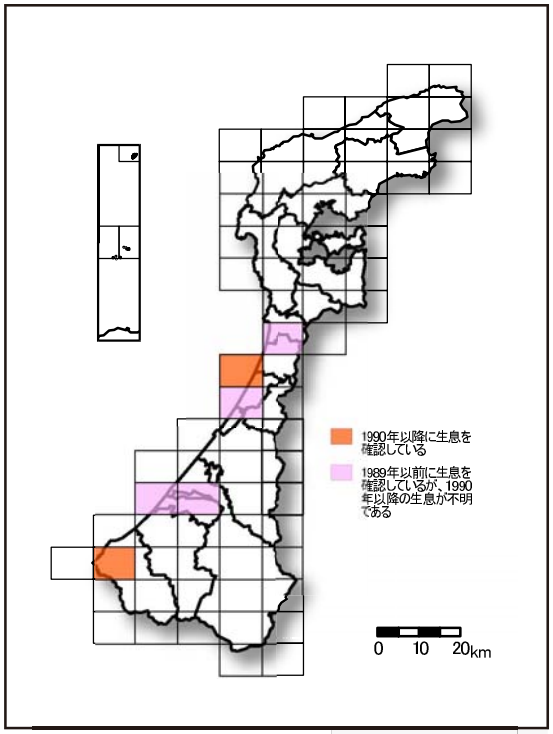
生息地の条件
河原の場合は、広い砂地のある所が生息地となっていた。海岸の場合は、河口部および海浜植物帯の近くに安定した砂地のあることが重要である。

生存の危機
河原における生息地は、砂地の減少により消滅した。海岸の生息地も、海浜道の建設、護岸工事、宅地化などの人為活動により激減している。また、採集圧も大きな脅威となっている。（A）

参考文献

中根猛彦 1973. 日本の甲虫（２）. 昆虫と自然, ８（10）：７.
芦田　久 1998. カワラハンミョウの分布と変異. 月刊むし, （333）：５−９.
徳本　洋 2001. 石川県内におけるカワラハンミョウの分布に関する記録. とっくりばち, （67）：２−４.

写真提供者：富沢章



県内の分布

ハラビロハンミョウ

Cicindela sumatrensis niponensis Bates

コウチュウ目ハンミョウ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類
国カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類

選定理由
全国的に分布が限られる種で、個体数が著しく減少している。県内においても生息場所が海岸に注ぎ込む細流の河口部付近の砂浜に限られるため、生息地の消滅により個体数が激減している。

形　態
体長13㎜程度である。体背面は黒っぽく鈍い金属光沢があり、白い斑紋を持っている。

国内分布
本州では新潟県以西に分布し、九州、種子島にも分布するが、産地は点在しているにすぎない。

県内分布
かつては加賀地方から能登地方の外浦海岸に分布していたが、現在は、加賀市および内灘町から志賀町、珠洲市の海浜の一部だけに限定される。

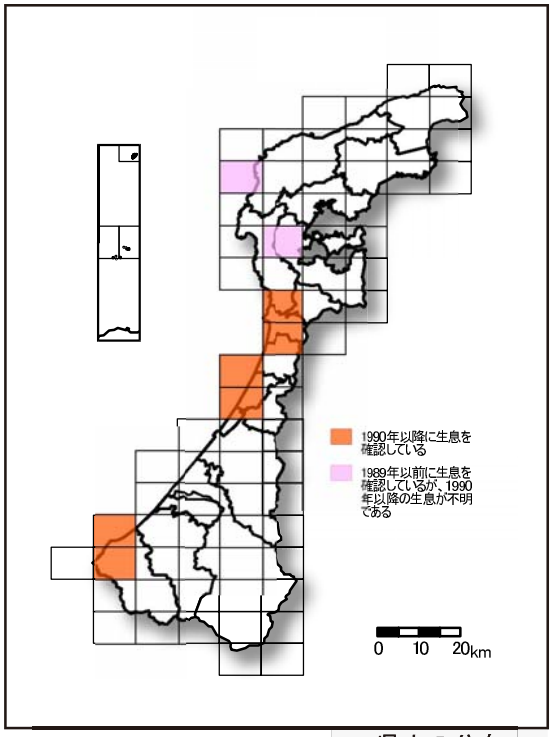
生　態
成虫が見られるのは、海岸に注ぎこむ細流の河口部の砂浜に多く、汀線沿いにも少ないながら見られる。また、幼虫は河口部の砂浜に多い。成虫は秋に羽化して越冬するようで、春に交尾、産卵する。

生息地の条件
海岸に注ぎこむ細流の河口部の砂浜の周囲が本種の生息中心域である。背後に海浜植物や松林などの植生があることや細流の水が汚染されていないことも重要である。

生存の危機
海浜に流れる細流の汚染や破壊、護岸工事、砂浜への車の乗り入れ、植生の破壊などの人為活動は、本種の生息地を消滅させることにつながる。特に四輪駆動車の乗り入れによる生息地破壊が目立つ。また、採集圧も大きな脅威となっている。（A）

参考文献
中根猛彦 1973. 日本の甲虫（２）. 昆虫と自然, ８（10）：７.
徳本　洋 2003. 石川県能登半島におけるハラビロハンミョウ成虫の春期出現状況. とっくりばち, (70)：１−７.

写真提供者：富沢章



県内の分布

昆虫類

ヒゲナガホラヒラタゴミムシ

Jujiroa imunada Uéno

コウチュウ目オサムシ科

石川県カテゴリー　絶滅危惧Ⅰ類

国カテゴリー　なし

選定理由

本県が日本海側唯一の*Jujiroa*属の分布地であり、さらに県内でも極めて局所的な分布をしている。生息地の一部が開発計画により影響を受けるため、保護対策の実施が求められている。

形　態

体長10～12㎜。体色は淡い赤褐色で、体型は扁平である。複眼は小さく退化しているが、触角と脚は長く、地下浅層での生活に適した形態をしている。また、後翅も退化し、飛ぶことができない。

国内分布

これまで正式な記録があるのは石川県だけである。

県内分布

金沢市の犀川中流域両岸の凝灰岩で構成される地下浅層だけに生息すると思われていたが、最近になり医王山にも生息することが報告された。

生　態

凝灰岩で構成される地下浅層に生息し、石切場跡の洞窟や山地帯の石の堆積した不安定な特殊環境に見られる。成虫は、厳冬期の１、２月を除き周年見ることができる。新成虫は８月頃から12月頃まで見られ、羽化は長期間続くものと思われる。成虫はカマドウマ類や小バエの死体など様々な微小動物の死体を食餌としていると考えられている。成虫の寿命は比較的長く、少なくとも７～８ヶ月程度は生きるようである。成虫で越冬すると思われるが、産卵や幼虫についての詳細はわかっていない。

生息地の条件

風化した凝灰岩で構成された地下浅層に生息するため、このような地下環境がある程度の規模で残されていることが重要である。

生存の危機

開発計画により生息地の一部が影響を受ける予定になっている。影響を受ける生息地の個体群に対する保護対策を実施することが必要である。（A, D）

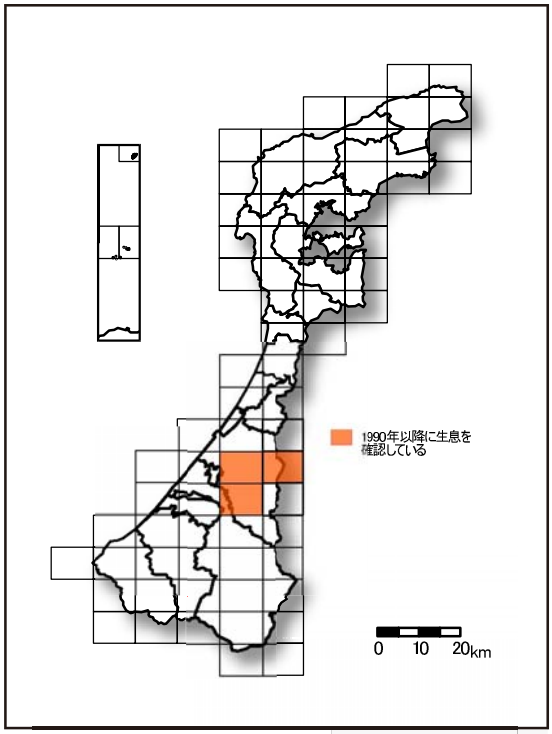
特記事項

本県産の個体がタイプ標本になっている。

参考文献

Uéno, S.　1993.　Discovery of highly modified species of Jujiroa (Coleoptera, Carabidae) on the Japan Sea side of central Honshu, Japan. Elytra,　(21)：329–335.
井村正行 2007.　医王山におけるウエダオオズナガゴミムシ(*Pterostichus uedaorum*)の生態に関する報告.　とっくりばち,　(75)：20–22.

写真提供者：富沢章



県内の分布

マルケシゲンゴロウ

Hydrovatus subtilis Sharp

コウチュウ目ゲンゴロウ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類
国カテゴリー	なし

選定理由

全国的に局所的な分布を示し、生息環境は限られ、個体数も少ない。県内の生息地も局所的で２箇所のみである。

形　態

体長2.4～2.7㎜で小型。体型は幅広い卵形をしており、背面、腹面ともに、黄赤褐色である。背面を微細な点刻と網目状の印刻が覆う。同属のコマルケシゲンゴロウ は体長がより小さく、やや体形が細く、背面の光沢がより強く、点刻と網目状印刻の形状が異なる。

国内分布

福島県以南の本州、四国、九州、南西諸島に分布するが、生息地は局所的で個体数も少ない。

県内分布

加賀市片野鴨池の記録が唯一であったが、2007年に加賀市南部の植生の豊富な放棄水田で発見された。

生　態

成虫は６～９月に確認されている。灯火に飛来する。

生息地の条件

抽水植物などの水生植物の豊富な、池沼、湿地、放棄水田に生息する。池沼では岸辺付近の浅く、植生の豊富な場所に生息する。

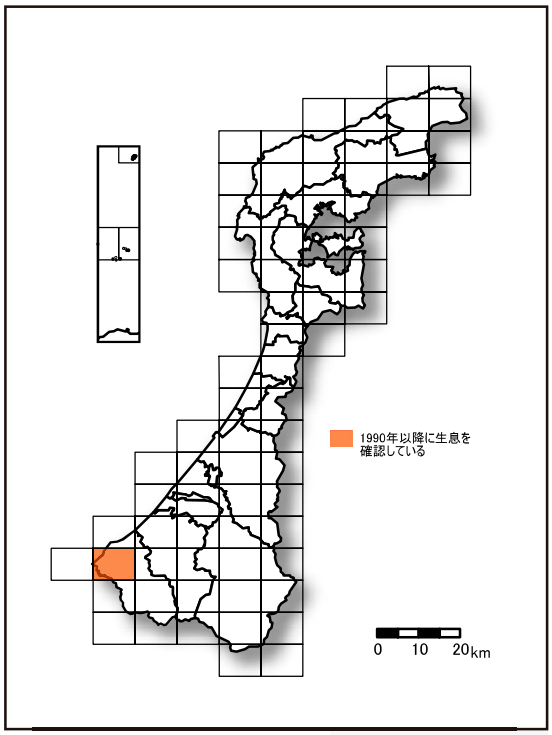
生存の危機

生息湿地の開発改修による消失や植生遷移、外来種の侵入が脅威となっている。片野鴨池では1996年８月にライトトラップで多数が採集されたが、その後の生息状況は不明である。加賀市南部の生息地にはウシガエルが侵入しているため、早期の駆除およびモニタリングの継続が必要である。（A, B）

参考文献

大桃定洋・佐藤光一 1991. マルケシゲンゴロウを栃木県で採集. 月刊むし, (250) : ８.
北野　忠・北山　昭 2000. 新潟県でマルケシゲンゴロウを採集. 月刊むし, (308) : ５-６.
林　成多 2007. 島根県産水生甲虫類の分布と生態. ホシザキグリーン財団研究報告, (10) : 77-113.

標本提供者：富沢章



県内の分布

ナガケシゲンゴロウ

Hydroporus uenoi Nakane

コウチュウ目ゲンゴロウ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類
国カテゴリー	なし

選定理由
国内では隔離分布を示し、本県が西限にあたる。県内では１箇所でしか生息が確認されておらず、個体数の減少が認められる。

形　態
体長3.5㎜。体型は長楕円形でやや扁平である。光沢は鈍い。背面は濃褐色、体下面は黒色。口枝は黄褐色。

国内分布
現在、本種の分布が確認されているのは青森県、山形県、長野県、石川県である。

県内分布
金沢市丘陵部のスゲ類に覆われた浅い自然湿地のみに生息する。

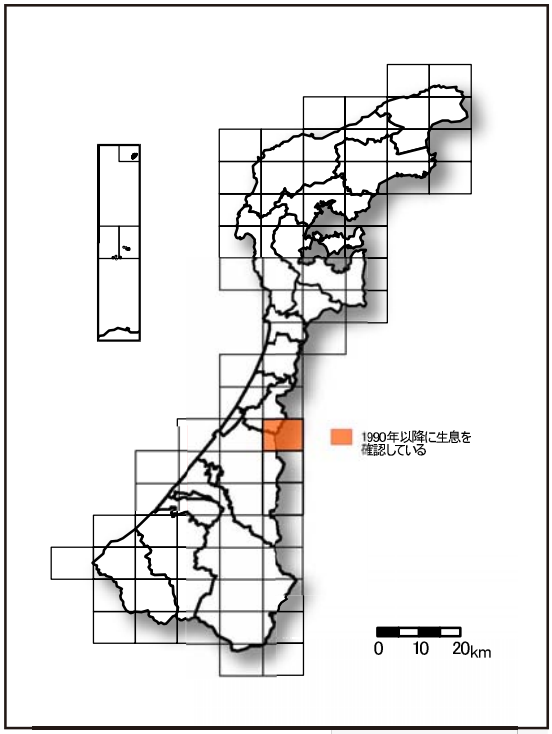
生　態
成虫は初夏～秋に確認されている。

生息地の条件
丘陵部のスゲ類などの水生植物で覆われた貧栄養の浅い池沼、湿地のごく浅い部分の、水生植物や堆積物の間に生息している。

生存の危機
池沼、湿地の開発による消失、植生遷移、水質汚染、アメリカザリガニの侵入が危惧される。1990年代にはゲンゴロウ類の採集者が湿地内へ頻繁に踏み込んだために環境が悪化し、個体数が減少した。現在の生息地を保全地域として指定することによる法的な保全がのぞまれる。（A, B）

参考文献
長谷川洋 1989. ナガケシゲンゴロウの採集記録. 月刊むし, (221) : 39.
森　正人・北山昭 2002. 改訂版図説日本のゲンゴロウ. 文一総合出版. 東京.

標本提供者：西原昇吾



県内の分布

ゲンゴロウ

Cybister japonicus Sharp

コウチュウ目ゲンゴロウ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類
国カテゴリー	準絶滅危惧

選定理由

かつては普通種であったが、全国的に減少傾向が著しい。北日本では比較的残存しているが、南日本の太平洋側では各県の生息地数は数箇所である。県内でも2000年以降の個体数の減少が著しい。

形　態

本土では最大のゲンゴロウ類で、体長34～42㎜。体型は卵形でやや扁平。背面は緑色～黒褐色で、前胸背板と上翅の側縁は黄褐色。体下面は黄～黄褐色で、腹部中央、各腹節前・後縁は黒色。脚は黄褐色～赤褐色。オスの前跗節の基部３節は吸盤状で後脚は遊泳脚である。幼虫は約70㎜のいも虫状。

国内分布

北海道、本州、四国、九州に広く分布する。

県内分布

金沢市および能登北部の丘陵部に分布する。

生　態

成虫は４月頃から活動を開始し、５、６月頃に水草の茎に産卵する。幼虫は６～８月に出現し水生昆虫やオタマジャクシを捕食する。３齢幼虫は岸辺の土中で蛹化する。新成虫は８～９月に出現する。成虫は灯火にも飛来し、約２㎞は移動する。11月頃から水中で越冬する。成虫も肉食で、寿命は約３年。

生息地の条件

平野部～丘陵部の、ヒルムシロやオモダカなどの水生植物が豊富な、比較的水深のある池沼やため池、水田、放棄水田、水田脇の水たまり、緩やかな流れの水路などに生息する。

生存の危機

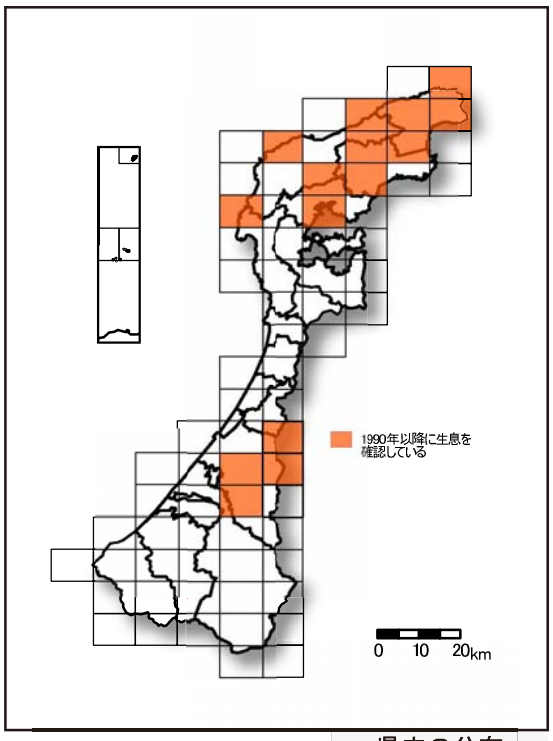
池沼の開発による消失、ため池の管理放棄や護岸工事、農薬使用、圃場整備による乾田化、放棄水田の植生遷移、外来種の侵入やコイの導入、採集圧が大きな脅威となっている。金沢市や珠洲市では、アメリカザリガニやオオクチバスの駆除が最重要である。生息に適した池の創出が開始されている。（A, B, C）

参考文献

市川憲平 2004. 放棄田ビオトープによる里の自然再生とタガメやその他の水生動物の定着. ホシザキグリーン財団研究報告, （７）: 137-150.

永幡嘉之 2007. ひとつのため池をとりまく問題 ―ゲンゴロウ類の生息地を維持するには―. 遺伝, 61（３）: 48-53.

写真提供者：小幡英典



県内の分布

マルコガタノゲンゴロウ

Cybister lewisianus Sharp

コウチュウ目ゲンゴロウ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類
国カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類

選定理由

池沼の開発、ため池の管理放棄、ほ場整備によって生息地が激減したうえに、外来種の侵入や採集圧によって、西日本の個体群を中心に絶滅の危機に瀕している。県内でも近年、生息環境が急速に悪化している。

形　態

体長21～26㎜。体型は卵形で丸みが強い。背面は暗緑色～褐色で光沢がある。腹面は全体に黄～赤褐色で側方および各腹節後縁は黒褐色。前胸背板・上翅側縁は黄色。幼虫は約50㎜のいも虫状。

国内分布

本州および九州の十数県。各県における生息地数はそれぞれ数箇所以下。

県内分布

能登北部の平野部～丘陵部。

生　態

成虫は５月頃から活動を開始し、水草の茎に産卵する。幼虫は５～８月に出現し、水生昆虫などを捕食する。老熟幼虫は岸辺の土中で蛹化する。新成虫は８月頃から出現し、10月頃より水中で越冬する。成虫も肉食である。

生息地の条件

ジュンサイ、ヒシなどの水生植物が豊富で、水質が良く、岸辺が緩やかな比較的大きなため池。

生存の危機

池沼の開発による消失、ため池の管理放棄、ため池改修事業に伴うコンクリートやゴムシートによる護岸化、生活排水や農薬等による水質汚染、オオクチバスやアメリカザリガニなどの外来種の侵入やコイの導入、過剰な採集圧が大きな脅威となっている。外来種の駆除、ため池の水管理の継続、遠浅の池の創出などによるため池群としての保全、地域住民による監視が重要であり、実施されつつある。
（A, B, C）

特記事項

石川県指定希少野生動植物種（2006年）に指定されている。

参考文献

山口英夫・荒木克昌 2001. マルコガタノゲンゴロウ石川県で記録（第１報），（第２報）. 翔, (151)：1, (152)：1-2.
西原昇吾・苅部治紀・富沢　章 2007. 農村における水生昆虫の保全. 自然再生のための生物多様性モニタリング　鷲谷いづみ・鬼頭秀一(編). 東京大学出版会. 東京.

写真提供者：富沢章

分布図はありません。

県内の分布

シャープゲンゴロウモドキ

Dytiscus sharpi Wehncke

コウチュウ目ゲンゴロウ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類
国カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類

選定理由

1962年の本県の記録を最後に絶滅したと考えられていたが、1984年に千葉県で再発見された。近年、全国的に生息地、個体数とも激減しており、生息地が全国で最も多い本県でも、ここ10年で半減した。

形　態

体長28～33㎜。体型は長卵型で厚みは少ない。背面は緑～黒褐色で、頭楯、触角、前胸背板、上翅側縁は黄褐色。体下面は暗赤褐色で一部は黒色。幼虫は最大55㎜のいも虫状。

国内分布

千葉県、新潟県、佐渡島、富山県、石川県、福井県、滋賀県、島根県。

県内分布

金沢市～奥能登の平野部～丘陵地に分布する。

生　態

成虫は10月頃より交尾を開始し、４月頃にセリやガマなどの茎に数十個の卵を産む。幼虫は４～５月に出現し、ミズムシや両生類幼生を捕食する。３齢幼虫は５～６月に岸辺の土中で蛹化する。新成虫は６～７月に出現し、夏～秋に移動・分散し、水中で越冬する。成虫は約600mは飛翔する。夜間に活動し、昼は水草の根元や泥に潜る。夏の高温時にも泥に潜る。寿命は１～３年。

生息地の条件

湧水や沢水が流入する泥深い湿地、ため池、放棄水田、水田脇の水たまりに生息する。水質が良好であることが重要。

生存の危機

池沼の開発、圃場整備、放棄水田の植生遷移、外来動物の侵入、過剰な採集圧によって危機に瀕している。過去に能登空港建設とそれに伴う周辺の圃場整備、ＬＰガス基地建設によって、多くの生息地が消滅した。谷津田の放棄水田の湛水化などによる水辺ネットワークの維持が重要であり、一部で開始されている。（A, B, C）

特記事項

氷河期の遺存種として生物地理学的に重要である。石川県指定希少野生動植物種（2005年）に指定されている。金沢市では生息地の地元集落と環境保全協定を結んでいる。

参考文献

西原昇吾・苅部治紀・鷲谷いづみ 2006. 水田に生息するゲンゴロウ類の現状と保全. 保全生態学研究, 11（2）: 143-157.

写真提供者：富沢章

分布図はありません。

県内の分布

マルガタゲンゴロウ

Graphoderus adamsii (Clark)

コウチュウ目ゲンゴロウ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類
国カテゴリー	準絶滅危惧

選定理由

近年、全国的に減少傾向にある。県内では、生息地が一地域に限定され個体数も少ない。

形　態

体長13～15 ㎜。体型は卵形で光沢を有する。胸部背面と上翅は黄褐色で、頭頂、後頭部、前胸背の前後両縁、小楯板は黒色。上翅は基部と会合部が細く黒色で、密な網目紋様も黒色。体下面、脚は赤褐色。頭部に黒色のＶ字紋がある。オスの前附節の基部３節は吸盤状。幼虫は約25㎜のいも虫状。

国内分布

北端部を除く北海道と、本州、四国、九州に分布する。

県内分布

能登北部。

生　態

幼虫は５～８月に出現する。水生小昆虫などを捕食し、老熟すると、岸辺に上陸して土中で蛹化する。新成虫は７～８月に出現する。成虫は４～10月に活動し、灯火にも飛来する。成虫も肉食で、寿命は約３年である。

生息地の条件

平野部～丘陵部の水生植物の豊富な、岸辺の緩やかな池沼、ため池、湿地、放棄水田などの止水域。生息地は、周辺に里山環境のある水質良好な水域に限られる。

生存の危機

池沼、湿地の開発などによる消失、ため池の管理放棄やコンクリートによる護岸化、農薬の使用などによる水質汚染、ほ場整備による乾田化、放棄水田の植生遷移、アメリカザリガニ、オオクチバスなどの外来種の侵入、採集圧が大きな脅威である。生息地付近に侵入した外来種の早期発見と駆除、分布拡大の防止が最重要である。ため池の維持管理の継続とともに、周辺の放棄水田などの湛水化による水辺ネットワークの維持が重要である。 (A, B, C)

参考文献

佐藤正孝 1984. 日本産水棲甲虫類の分類学的覚え書Ⅰ. 甲虫ニュース, (65) : 1-4.
山口英夫・荒木克昌 2001. マルコガタノゲンゴロウ石川県で記録（第２報）. 翔, (152) : 1-2

写真提供者：富沢章

分布図はありません。

県内の分布

シマゲンゴロウ

Hydaticus bowringi Clark

コウチュウ目ゲンゴロウ科

石川県カテゴリー　絶滅危惧Ⅰ類

国カテゴリー　なし

選定理由

かつては水田における普通種であるが、都市部ではほとんど見られなくなった。県内の記録は３例のみであり、2000年以降の確認例はない。

形　態

体長12.5～14㎜。体型は卵型でよく膨隆し光沢を有する。頭部、前胸背は淡黄褐色で、それらの後縁中央は黒色。上翅は黒色で、中央と側縁近くに淡黄色の縦条があり、後方で合一する。上翅内方の基部直後に淡黄色の２つの円紋がある。体下面は黄～赤褐色である。幼虫は最大約25㎜のいも虫状。

国内分布

北海道、本州、四国、九州、南西諸島に分布する。富山県では50年以上確認されておらず、福井県では若狭地方で2001年の発見例がある。

県内分布

平野部である小松市中心部における1951年６月の記録がある。1990年代に輪島市丘陵部の水田脇の浅い水たまり、穴水町平野部の灯火にて１個体ずつが確認されたが、いずれも発生地は不明である。

生　態

５～７月頃に水草の茎や葉の表面などに産卵する。幼虫は３齢になり老熟すると、岸辺に上陸して土中で蛹化する。成虫は日中でも活発に動き回り、夏季には灯火に飛来する。10月～４月頃は林床などに上陸して越冬すると考えられている。幼虫、成虫ともに肉食である。

生息地の条件

平野部～丘陵部の、浅く水生植物の豊富な池沼、湿地、水田、放棄水田に生息する。周辺には、多様な環境を含み、多くの生物が生息する良好な里山環境が必要である。

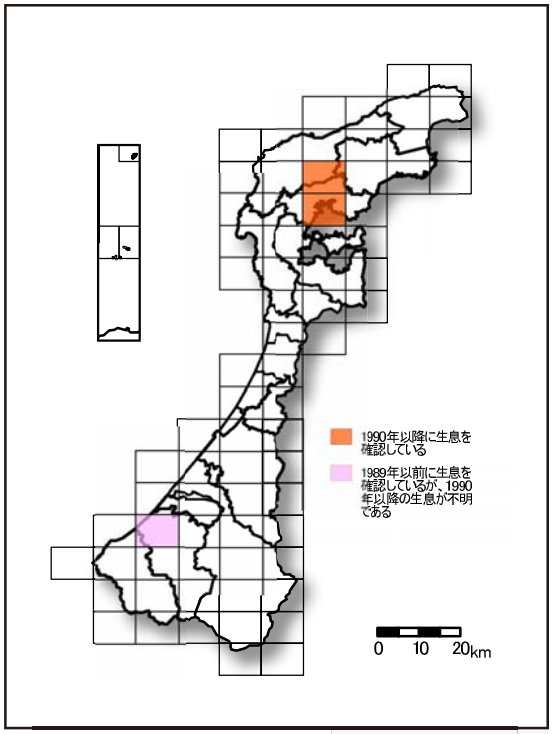
生存の危機

採集された地域の池沼、湿地の開発などによる消失、ほ場整備、アメリカザリガニの侵入、周辺の里山環境の変化が脅威である。発生地の発見がのぞまれる。（A, B）

参考文献

山口英夫 1996. 石川県でシマゲンゴロウ発見. 翔, (122) : 1.
和田茂樹 2001. 福井県におけるナガサキアゲハとシマゲンゴロウの記録. 福井市自然史博物館研究報告, (48) : 75-76.

標本提供者：小松市立博物館



県内の分布

チュウブホソガムシ

コウチュウ目ホソガムシ科

Hydrochus chubu Balfour-Browne et M. Satô

石川県カテゴリー　絶滅危惧Ⅰ類

国カテゴリー　準絶滅危惧

選定理由

全国的に分布が局所的であり、生息環境である低地の有機物の多い湿地が激減している。県内では３箇所で確認されていたが、うち１箇所はアメリカザリガニの侵入により絶滅した。

形　態

体長2.4～2.5㎜。体型は細長く、体表面に青緑金属光沢を持つ。複眼は大きく、側方に突出する。触角の先端は毛に被われ球桿を形成する。前胸背板の凹陥は顕著。同属のヤマトホソガムシに酷似するが、下唇基節の中央が丸くくぼむ点と、上翅第３、５、７、９間室が隆状となる点で識別できる。

国内分布

日本固有種。秋田、石川、香川、島根、山口、熊本の各県に局所的に分布する。かつては三重県や大阪府にも生息していた。

県内分布

小松市の生息地は2006年と2008年に各１箇所づつ発見された。加賀市の生息地は1996年に発見されたが、アメリカザリガニの侵入により絶滅した。

生　態

成虫は４月下旬～10月下旬に確認され、８～９月に個体数が増加した例がある。成虫はリターなどの有機物を摂食すると思われる。

生息地の条件

平野部～丘陵部にある広葉樹林に囲まれた池で、落ち葉の堆積するシルト底質の水生植物の豊富な、水深の浅い部分に局所的に生息する。加賀市は海岸付近の丘陵部の浅い池、小松市は丘陵部のため池であり、いずれも、小型の水生昆虫が多数生息している多様性の高い水辺環境である。

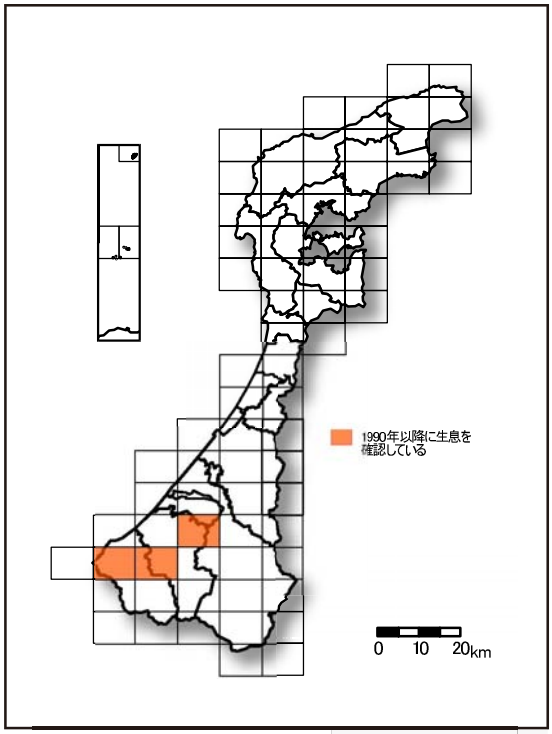
生存の危機

ため池の管理放棄、外来種の侵入が脅威となっている。加賀市の生息地は、周囲の水域から隔離された人為的影響のない所であったが、アメリカザリガニの繁殖によって植生が消失し、絶滅した。小松市のため池のうち１箇所は、30年ほど管理放棄され、2007年には水が抜けたが、水漏れ部を補修し水位を上昇させる保全作業により、現在も生息が確認されている。今後も、周辺環境と池の保全管理が求められる。（A, B, C）

参考文献

佐藤正孝 1978. 日本産ホソガムシ科概説. 甲虫ニュース, (40) : 1-3.
佐藤正孝・吉富博之 2005. 日本産水棲昆虫の分類学的覚え書きⅣ. 甲虫ニュース, (151) : 1-6.

標本提供者：富沢章



県内の分布

コガムシ

Hydrochara affinis (Sharp)

コウチュウ目ガムシ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類
国カテゴリー	なし

選定理由
かつては県内各地に生息していたと思われるが、近年確認されている生息地は離島の１箇所のみであり、本土部ではまったく確認されていない。

形　態
体長16～18㎜。体型は紡錘型。体は全体に黒色であるが、脚は赤褐色。脚は遊泳にはあまり適していない。幼虫はいも虫状で顎は左右非対称。同属のエゾコガムシは、脚が黒色であることから区別される。

国内分布
北海道、本州、四国、九州に分布する。

県内分布
輪島市舳倉島では2004年に確認されている。1964年の白山市（旧鶴来町）の記録があるが、環境破壊により現在は生息していない。

生　態
６月頃に水草の間に白いまゆ状のゆりかごをつくり、その中に産卵する。幼虫は肉食性で他の水生昆虫や巻貝などを捕食するが、成虫は主に草食性である。幼虫は３齢になり老熟すると岸辺に上陸し土中で蛹化する。灯火に飛来する。

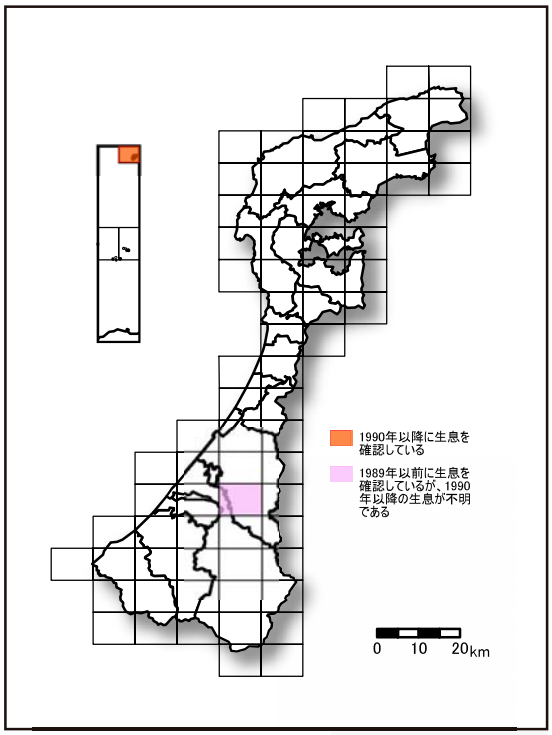
生息地の条件
一般的には、平野部～丘陵部の有機物の豊富な浅い池沼、湿地、水田に生息するといわれているが、輪島市の生息地は、離島の植物の少ない小さな池である。

生存の危機
離島の小さな池にのみ生息するため、生息基盤が脆弱であり、湿地の攪乱、水質汚染が脅威である。富山県では、1990年代に射水市の海岸沿いの池で生息が確認されたことから、本県の本土部においても再発見が期待される。（A, B）

特記事項
舳倉島の生息する池は特別保護地区に指定されている。

参考文献
細井　操 1947. コガムシの生活史. 採集と飼育, ９ : 201-204.
林　成多 2007. 島根県産水生甲虫類の分布と生態. ホシザキグリーン財団研究報告, (10) : 77-113.

標本提供者：高羽正治



県内の分布

オオクワガタ

Dorcus hopei binodulosus Waterhouse

コウチュウ目クワガタムシ科

石川県カテゴリー　絶滅危惧Ⅰ類

国カテゴリー　絶滅危惧Ⅱ類

選定理由

現在の「放虫問題」の無かった、35年前に採集された標本の存在により、石川県にも本種が分布していたことが確認されたが、その他には確実に石川県産と思われる個体の採集記録がない。

形　態

オスは頭部や胸部が幅広く、大アゴは強大で、大型の個体では中央より前方に斜め前向きの大きな内歯を持ち、先端部分には後方に向く小さな内歯を持つ。体長は最大で約80㎜に達する。メスは全体的に光沢が強く、胸部は丸みが強い。

国内分布

北海道（南部）、本州、佐渡島、四国、九州、対馬に分布するが個体数はとても少ない。

県内分布

現在、本種の生息地は見つかっていない。しかし、35年前に金沢市で採集された標本が現存し、県内に分布していたことを示す唯一の資料となっている。

生　態

成虫は６月から９月にかけて出現する。日中は樹洞に入ってほとんど姿を見せず、もっぱら夜に活動する。走光性があり、灯火に飛来することもある。卵から成虫になるまでに約２年かかる。成虫の寿命は長く、３年ほど生きることもある。

生息地の条件

樹液が出て、樹洞があるようなクヌギなどの大木が存在する、自然の豊かな森林であること。

生存の危機

本種はクワガタムシ類の中でも人気が高く、いわゆる乱獲（採集圧）が本種にとって最大の脅威である。さらに、もともと分布していない地域への放虫行為も大きな問題であり、近年では、放虫個体と思われる採集事例が県内でも数多く聞かれるようになった。その他、生息環境である森林の伐採や開発など、本種の生存を脅かす事柄は枚挙にいとまがないのが現状である。（A）

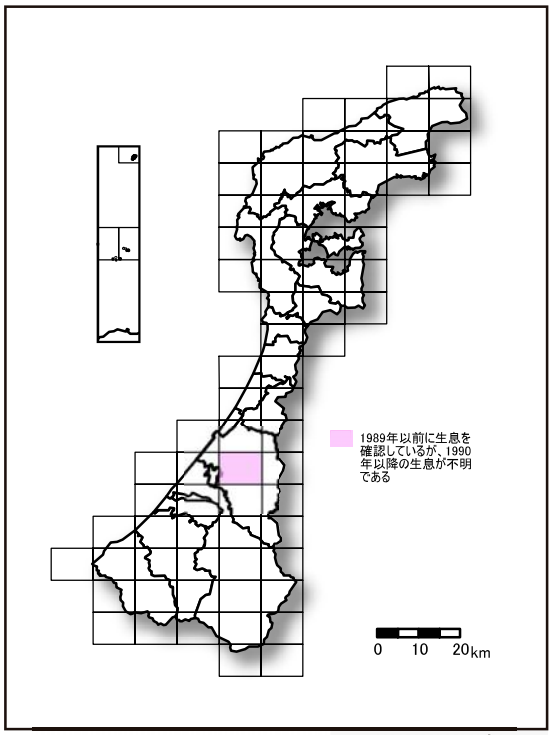
特記事項

石川県唯一の文献記録として、山本（2000）による金沢市森本での採集記録があるが、森本周辺では悪質な放虫行為が頻繁に行われていたことから、この記録は石川県産の個体であるとは断言できない。

参考文献

山本雅一 2000. 石川県におけるオオクワガタの採集記録. 月刊むし, (350) : 119.

標本提供者：森幸彦



県内の分布

ベーツヒラタカミキリ

Eurypoda batesi Gahan

コウチュウ目カミキリムシ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類
国カテゴリー	なし

選定理由
本種は南方系の種で、日本海側の北限に近く、個体数が少ない。また、生息地は照葉樹林に点在しているに過ぎず、隔離分布している。

形　態
体長は26～34㎜。体は赤褐色の扁平なカミキリで、全体に強い光沢がある。オスの大顎は大きく、発達している。触角は太く、オスでは長さが上翅の1/2を超える。脚は太く短かい。

国内分布
本州（関東以西）、福井県雄島、隠岐、淡路島、四国、高知県沖ノ島、九州、伊豆諸島、対馬、五島、屋久島、口永良部島、中之島、奄美大島、徳之島、沖縄本島。

県内分布
加賀市、小松市、羽咋市、七尾市、珠洲市。

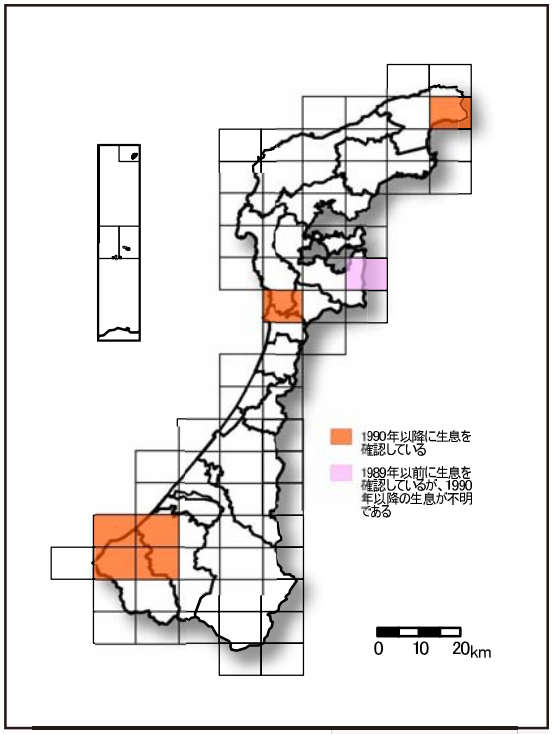
生　態
成虫は７～８月頃に出現し、スダジイの古木周辺で見られる。昼間は枯死部に潜入しているが、夜間に活動する。

生息地の条件
平地において、スダジイ等の大木が残る照葉樹林が残されていることが重要である。このような場所は、本県では社叢林や史跡にしか残されていないため、それらの保全が重要である。

生存の危機
県内の生息地は、社叢林など10箇所程度に点在しているに過ぎず、隔離分布している。また、生息地が狭いうえ、各生息地の個体群の交流が望めず、絶滅の恐れがきわめて高い。開発行為は言うにおよばず、社叢林内の枯死木の除去、林床の整備、伐採は、確実に絶滅につながる。（A）

参考文献
井村正行 1998. コウチュウ目カミキリムシ科. 石川県の昆虫：197-217. 石川県自然保護課.

写真提供者：富沢章



県内の分布

キイロミヤマカミキリ

Margites fulvidus (Pascoe)

コウチュウ目カミキリムシ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類
国カテゴリー	なし

選定理由

南方系の甲虫で、日本海側の北限と思われ、東限にも近い。石川県を挟む福井県（冠島）と富山県にも記録があるが、県内で得られた個体数はきわめて少ない。

形　態

体長は13～18㎜で、ガッチリした体形である。触角は太く、オスでは体長の1.5倍ある。体色は赤褐色で、前胸は黒く、上翅は黄色の微毛で被われ、黄褐色に見える。

国内分布

本州（関東以西）、冠島、淡路島、四国、竹島、高知県沖ノ島、九州、対馬、平戸島、馬渡島、天草、黒島、種子島、屋久島、口之永良部島、中之島、奄美大島、徳之島、沖縄本島。

県内分布

加賀市加佐岬、金沢市金沢城址、珠洲市蛸島。

生　態

成虫は平野部のスダジイの残る林に生息し、５～７月頃に現れる。県内では、灯火への飛来個体、スダジイに静止していた個体、スダジイの花で得られた個体が記録されている。幼虫はスダジイの衰弱部を食すという。

生息地の条件

平野部に残存しているスダジイ等の照葉樹のある暖帯林に生息するため、それらの照葉樹林が現存することが重要である。

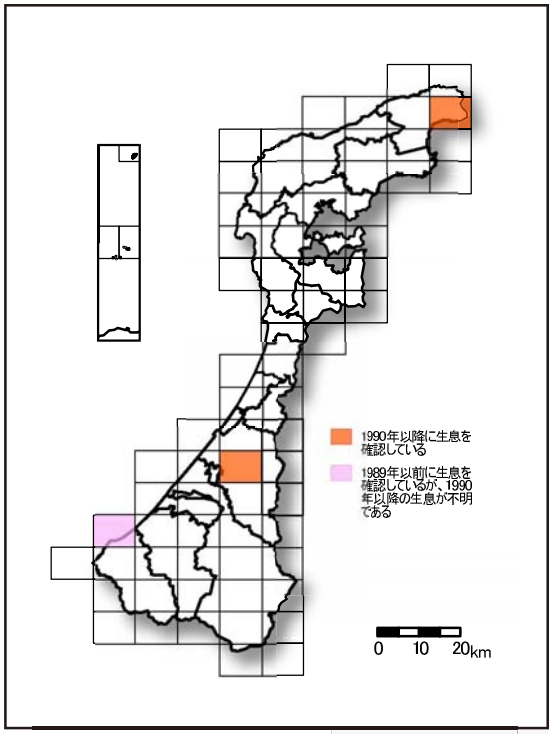
生存の危機

平野部に点在しているスダジイ等の照葉樹林に生息するため、生息環境は狭いうえ、生息地は大きく分断され、絶滅の危機がきわめて高い。また、生息域が平地のため、開発等で消滅する危険性が大きい。本種の生息地のひとつである金沢城址では、公園化により樹木伐採されたため、絶滅した可能性が高い。（A）

参考文献

井村正行 1998. コウチュウ目カミキリムシ科. 石川県の昆虫：197-217. 石川県自然保護課.
川瀬英夫 2002. 珠洲市で採集した甲虫３種の記録. とっくりばち, (69) : 24.

標本提供者：川瀬英夫



県内の分布

コトラカミキリ

Plagionotus pulcher (Blessig)

コウチュウ目カミキリムシ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類
国カテゴリー	準絶滅危惧

選定理由　全国的に産地が減少している種で、県内では1950年代の古い記録があるのみである。

形　態　体長は12～16㎜。中型のトラカミキリで、がっしりした体形をしている。体の地色は黒色で、頭部に２本、前胸背板に２本、上翅に５本の黄帯を持つ。脚と触角は黄褐色。触角は太く、オスで体長をわずかに超える。スズメバチ類に擬態していると思われる。

国内分布　北海道、本州（長野県、福島県）。

県内分布　白山市（旧白峰村）。

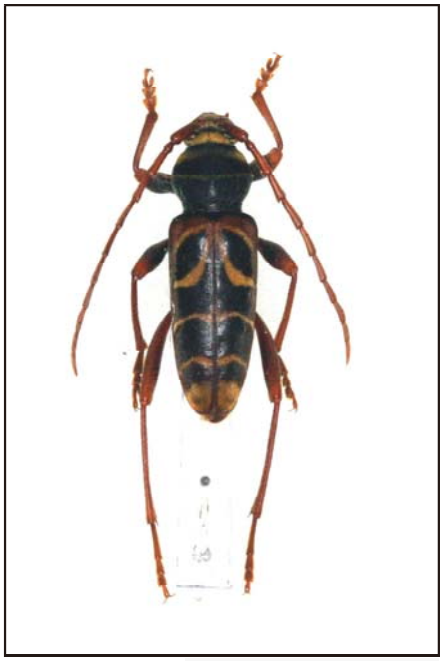
生　態　成虫は５～８月に見られ、ミズナラなどブナ科の新しい伐採木や倒木に飛来する。幼虫はそれらの枯死部を食する。

生息地の条件　ブナ科植物の多い広い面積の森林の存在が必要である。

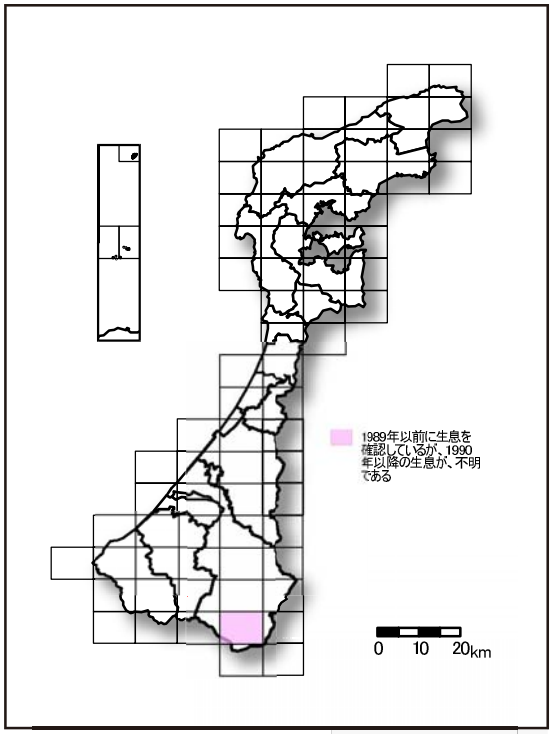
生存の危機　大きな環境変化のない山地帯においても近年の記録はまったくなく、減少の要因は不明である。（A）

特記事項　県内には、本種に良く似たクリストフコトラカミキリが分布しているので同定に注意を要する。

参考文献　井村正行 1998. コウチュウ目カミキリムシ科. 石川県の昆虫：197–217. 石川県自然保護課.



標本提供者：井村正行



県内の分布

トガシオオナギナタハバチ

Megaxyela togashii Shinohara

ハチ目ナギナタハバチ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類
国カテゴリー	情報不足

選定理由 個体数が非常に少ない珍しい種で、しかも環太平洋分布をする注目すべき種である。

形　態 触角第３節が長く、第４節以下は数珠状となる。

国内分布 石川県、兵庫県、岡山県、広島県に分布する。

県内分布 白山市瀬波での記録が唯一である。

生　態 谷川沿いのサワグルミ林で採集されていて、幼虫はサワグルミの葉を食する。詳しい生態については不明である。

生息地の条件 沢沿いに広がるサワグルミ林に生息する。同属のオオナギナタハバチはオニグルミを食することが知られているが、本種がオニグルミを食するかどうかは不明である。

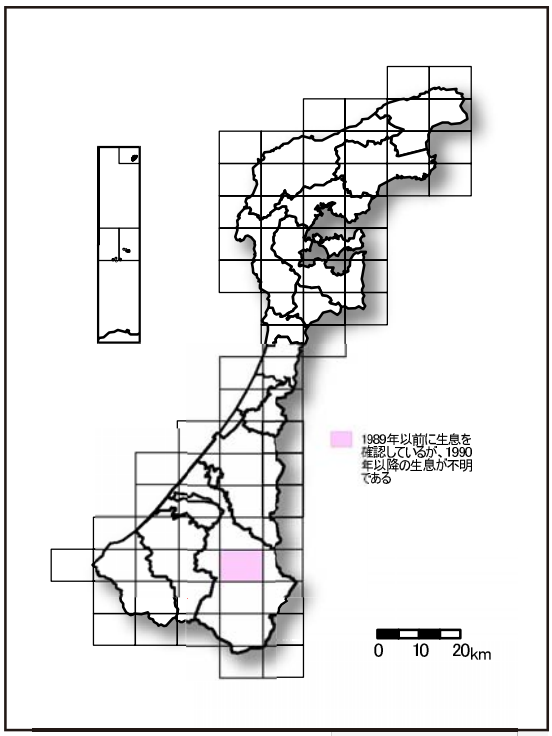
生存の危機 沢沿いのサワグルミ林が土木工事や土砂崩れ等で破壊されると、生存が危ぶまれる。（A）

特記事項 現在のところ、４個体が採集されているにすぎない。

参考文献

Shinohara, A. 1992. Sawfly genus *Megaxyela* (Hymenoptera, Xyelidae) in East Asia. Jpn. J. Ent., 60（4）:783–796.

標本提供者：富樫一次



県内の分布

シロズヒラタハバチ

Pamphilius leucocephalus Takeuchi

ハチ目ヒラタハバチ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類
国カテゴリー	情報不足

選定理由　分布が局限される、きわめて珍しい種である。

形　　態　体は腹背が扁平で、頭部は乳白色を呈する。

国内分布　北海道、宮城県、山梨県、石川県、福岡県に分布する。

県内分布　珠洲市若山町洲巻が唯一の産地である。

生　　態　現在のところ、生活史も食草も判明していない。採集された場所はコナラの疎林内に生育しているササの一種の葉上である。

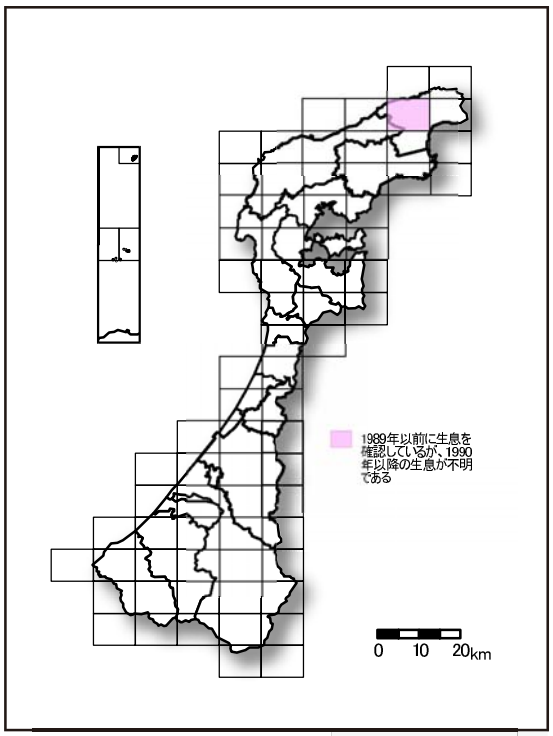
生息地の条件　里山のコナラ林に生息しているものと推察される。

生存の危機　県内唯一の産地である、珠洲市の宝立山麓の開発が進めば、絶滅の可能性が大きい。（A）

参考文献

Takeuchi, K. 1938. A systematic study on the suborder Symphyta (Hymenoptera) of the Japanese Empire（1）. Tenthredo, 2:173–229.

標本提供者：富樫一次



県内の分布

イソメマトイ

Hydrotaea glabricula (Fallen)

ハエ目イエバエ科

石川県カテゴリー　絶滅危惧Ⅰ類
国カテゴリー　絶滅危惧Ⅰ類

選定理由
石川県では1960年ごろまでは多く見られたが、それ以後は急激に減少し、現在は生息箇所を認めることができない。

形　態
体長３㎜ほどのごく小型のハエである。体色はわずかに光沢をもった黒色。ヒメクロイエバエ属に似るが、オスの前腿節先端腹面の切れ込みにある歯状突起により区別される。

国内分布
石川県と三宅島でのみで知られているが、現在の生息が確認されていない。

県内分布
白山市美川、金沢市（金石、安原、大野）、内灘町、かほく市高松で過去に多数採集されているが、現在はまったく見られない。

生　態
国外では、本種は人につきまとい、ほとんどがメスとされている。堀克重・倉橋弘両氏によって石川県から初めて記録され、６月から７月にかけて多かったという。また、伏流水の湧水付近や民家の洗濯場の周囲に普通と記されているので、その付近が発生地と思われるが、詳細は不明である。

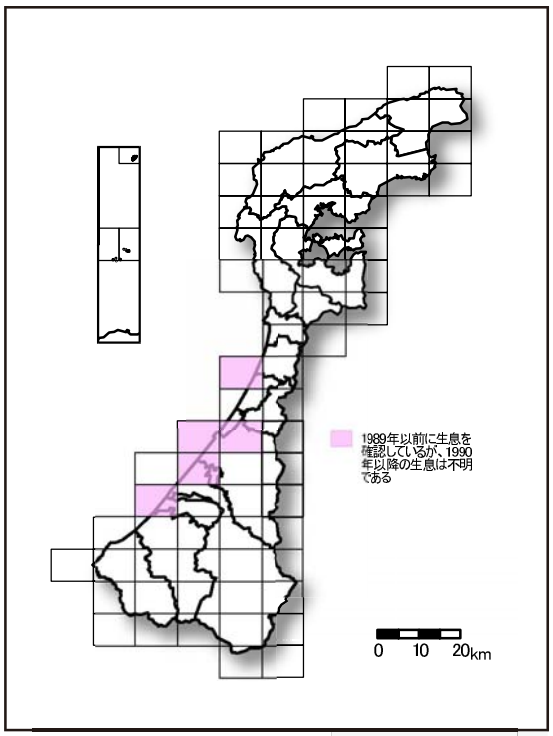
生息地の条件
海岸近くの湧水地点付近を生息地とするようである。

生存の危機
地下水揚水量の増加によって地下水位が低下しており、かつて存在した海岸近くの湧水箇所はほとんど消失している。さらに生息地付近での宅地化、農耕地化、水利・治水工事なども加わって、生息好適地がほとんどなくなったようである。本種の調査は十分ではないので、探索を続ける必要がある。（A）

参考文献

堀　克重 1955. 石川県の昆虫. 石川県郷土史学会編.　郷土の自然, : 77–89.
堀　克重 1962. 能登半島の昆虫.　中部日本自然科学調査団報告能登半島の自然 : 26–27.
堀　克重・倉橋　弘 1966. 日本未記録のイエバエ科３種. 昆虫, 34（1）: 68–75.
Shinonaga, S. and Kano, R. 1971. Fauna Japonica Muscidae (Insecta, Diptera) Vol. 1. Keigaku Publishing Co., Ltd., Tokyo. 244pp., 28pls.

写真提供者：国立感染症研究所



県内の分布

昆虫類

カエルキンバエ

Lucilia (Bufolucilia) chini Fan

ハエ目キンバエ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類
国カテゴリー	情報不足

選定理由

本種は1950～1960年代に県内で多く見られたが、現在は確認記録がない。

形　態

体長５～７㎜で、金緑色の小型キンバエ。腹背第３節に１対の直立剛毛があり、翅の前縁脈基部片は黒色で、亜前縁脈下部片に黒色毛をもたない。

国内分布

1960年代までは、栃木県、茨城県、千葉県、東京都、神奈川県、石川県、福井県、愛知県、京都府で文献記録や残存標本がある。その後は全国的に生息確認がされなかったが、2000年代になってから青森県で生息地が発見されている。

県内分布

1952年ごろは、河北潟周辺から金沢市大野町付近の農道にたくさん生息していたと記録され、能美市（旧寺井町）でも採集されている。しかし、その後は見出されなくなった。

生　態

成虫発生時期は５～10月で、年２回発生といわれる。欧州などの本種の近似種は、その幼虫がカエルの目や鼻に寄生することが知られているが、本種はカエルに寄生するかどうか不明である。

生息地の条件

これまでの採集記録から見ると、本種は池、潟、水田付近に多いように思われる。

生存の危機

かつて水田で多産したカエルが、ほ場整備や農薬の影響で激減した時期と同じ頃に、本種も姿を消したように考えられる。低地の水田から本種が消滅したが、丘陵地・低山間地などの池・湿地・水田付近などや能登半島で本種が残存していないか探索を続ける必要がある。（A）

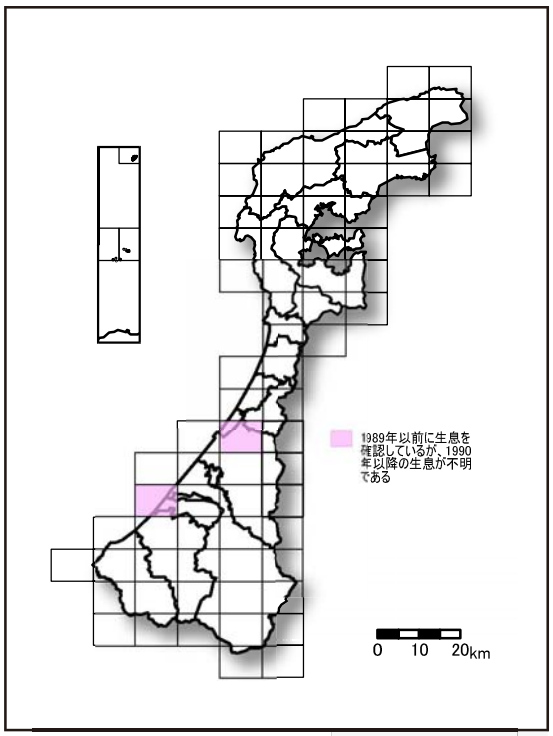
参考文献

堀　克重 1955. 日本産蝿族の重要群の形態学的研究Ⅴ. 日本産黒蝿科の数種について. 日本生物地理学会会報, 16～19: 230-234.

Kurahashi, H. 1966. Studies on the calypterate muscoid flies from Japan. V. Revision of the tribe Luciliini (Diptera, Calliphoridae). Sci. Rep. Kanazawa Univ., 11（2）:105-124.

徳本　洋 2000. カエルキンバエを探そう－研究史と種の特性解説. はなあぶ. (10) : 35-41.

写真提供者：国立感染症研究所



県内の分布

ゼニゴギンガクニクバエ

Metopia stackeibergi Rohdendorf

ハエ目ニクバエ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類
国カテゴリー	なし

選定理由
アジア大陸系の珍しい種で、全国的にごくわずかの記録があるだけである。県内では、近年の記録がない。

形　態
体長５～７㎜。体全体は明るい灰色で黒褐色の斑紋がある。腹部は短軟毛に覆われる。目立つのは頭部で、複眼は大きいが雌雄共に眼幅よりも大きく離れ、頭部が円錐形に前方に突出しており、その側面が銀白色（特にオスで顕著）である。

国内分布
石川県、愛知県、鳥取県から記録されている。国外では旧北区、中国、モンゴルで記録されている。

県内分布
1960年代に金沢市金石での記録があるだけで、以後、確認記録がない。

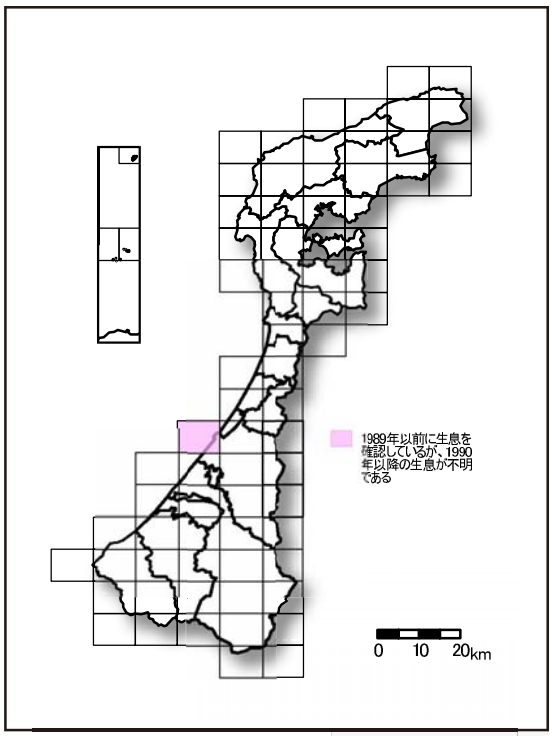
生　態
本種が属するヤドリニクバエ亜科の種は一般に幼虫がハチ類の巣に労働寄生しているので、本種もその可能性が大きい。

生息地の条件
砂浜にのみ生息するものと思われる。

生存の危機
近年の調査ではまったく発見されていない。石川県では大部分の砂浜海岸で自然環境悪化が著しいので、その影響を受けているものと思われる。（A）

参考文献
Kurahashi, H. 1970. Studies on the calypterate muscoid flies from Japan. Ⅶ. Revision of the subfamily Miltograminae (Diptera, Sarcophagidae). Kontyu, 38（2）:93-116.

写真提供者：国立感染症研究所



県内の分布

ゴヘイニクバエ

Sarcophila japonica Rohdendorf

ハエ目ニクバエ科

石川県カテゴリー　絶滅危惧Ⅰ類
国カテゴリー　絶滅危惧Ⅱ類

選定理由
日本における近年の生息確認はきわめて少なく、絶滅の恐れが高い。

形　態
体長５～６㎜の小型ニクバエで、他種のニクバエに比べてかなり小さい。他のニクバエに見られる胸部の３本線模様はなく、あっても、極細の線が２～４本見える程度である。オスの第６背板が第１生殖背板と癒着しているのが特徴。雌雄ともに額の幅は複眼の幅より広く、額顔縁剛毛をもつ。

国内分布
1965年ごろまでは石川県と鳥取県の砂丘に普通に見られたが、その後、まったく記録されなかった。2000年代になって石川、鳥取、新潟の各県で発見され、日本海側の沿岸部に分布している。国外ではロシア極東部、韓国に分布する。

県内分布
1960年代において金沢市金石海岸で記録があるだけであったが、2005年に白山市倉部海岸で生息が確認された。

生　態
成虫は1960年代の調査では、６月から８月にかけて海浜植物上でハマベニクバエと共に多数採集されたと記録されている。2000年代の各県の記録でも成虫は海浜植物群落内で確認されている。

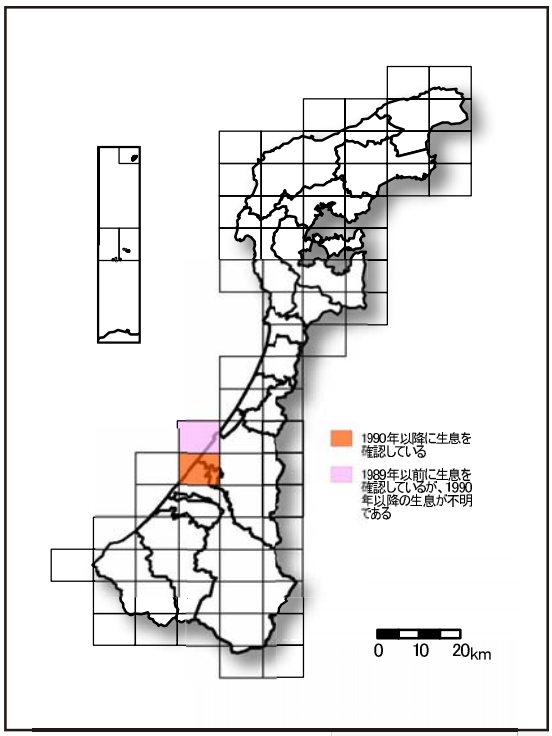
生息地の条件
成虫は海浜植物群落の発達している所に生息する。

生存の危機
海浜砂丘地の大部分は波浪浸食による海岸線の陸側への後退がきわめて著しく、また、陸側からの工事や植林の海側への進出、さらに、護岸工事により海浜植物帯の消滅が顕著である。そのため本種の生息域は各地で激減しつつある。（A）

参考文献

堀　克重・倉橋　弘 1962. 日本未記録のニクバエ２種. 昆虫, 30（2）: 174.
Kurahashi, H. 1975. Studies on the calypterate muscoid flies from Japan. XI. Subfamily Agrinae (Diptera, Sarcophagidae). Kontyu, 43(2):202–213.
古田　治 2005. 石川県におけるゴヘイニクバエの記録. はなあぶ, (20) : 89.

写真提供者：国立感染症研究所



県内の分布

昆虫類

クロシジミ

Niphanda fusca (Bremer et Grey)

チョウ目シジミチョウ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類
国カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類

選定理由

幼虫期にアリと共生するため、分布は局地的で生息環境は限定され、全国的に減少している。県内では、1978年の観察以降は発見されていない。

形　態

開張40㎜程度の小型種。オスの翅表は光沢のある青紫色で黒色の縁取りがあり、メスの翅表は黒褐色。裏面の地色は、雌雄ともに白色の強いものから褐色がかった灰白色のものまで見られる。

国内分布

北海道、沖縄を除くほぼ全県に局地的に分布するが、全国的に減少している。

県内分布

生息地は局限され、金沢市犀川ダム周辺と金沢市菊水・堂周辺から記録されているにすぎない。犀川ダム周辺では1957年から1978年にかけて、菊水・堂周辺では1970年に記録され、その後は度重なる調査においても発見されていない。

生　態

年１回の発生で７月上旬から８月上旬に見られる。出現期の後半に産卵が見られ、約１週間で孵化、２齢中期までは樹上でアブラムシやキジラミと共生、後にクロオオアリの巣中に入ってアリとともに生活し、翌年６～７月ごろに蛹化するというが、本県での生活史は知られていない。午前中は活動がにぶく、下草に静止しているものが多いが、特にオスは昼過ぎから夕方にかけて活発に飛翔する。

生息地の条件

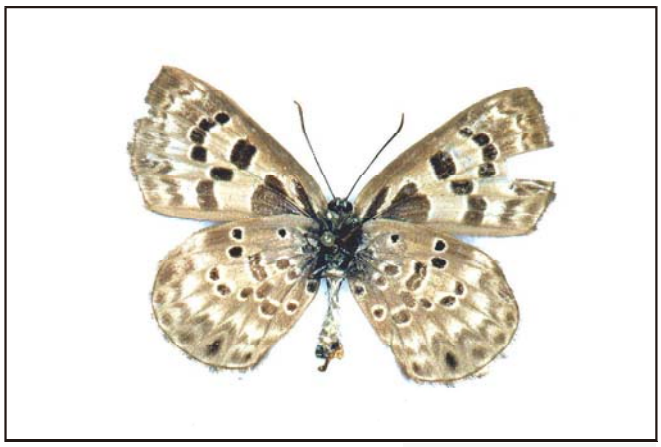
県外では、クヌギ、コナラ、ミズナラなどの疎林、アキグミの生えた草地、ススキを主にした草地、ヌルデ、ウツギなど低木の多い堤防などが、生息地として知られている。いずれも遷移の途中にあり、人手が加わった不安定な環境であるが、アブラムシ、キジラミが多いこと、クロオオアリが生息していることが共通している。

生存の危機

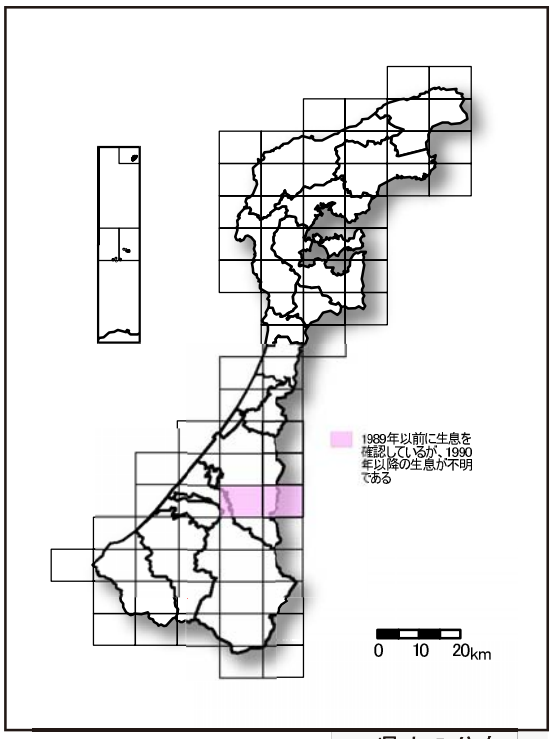
本種は、雑木林が伐られて２～３年経った場所でよく観察されている。これは、伐られた木が萌芽し、アブラムシやキジラミが発生し易くなっていること、アリの住み良い環境となっていることが考えられる。雑木林に人手が入らず更新されないことが、本種の減少に影響していると思われ、これは犀川ダム周辺や堂・菊水周辺にも言えることである。（A, B）

参考文献

福田晴夫ほか 1984. クロシジミ. 原色日本蝶類生態図鑑（Ⅲ）: 216-221. 保育社. 大阪.
吉村久貴 1998. 実在した菊水のクロシジミ標本. 翔, (135): 1-2.



標本提供者：吉村久貴



県内の分布

アオモンギンセダカモクメ

Cucullia argentea Hufnagel

チョウ目ヤガ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類
国カテゴリー	なし

選定理由
国内分布は局地的で個体数がきわめて少ない。本種の生息する河原の自然植生の草地は破壊が著しく、生存が危ぶまれる。

形　態
開張は35㎜内外。前後翅は銀白色で、前翅には緑色の網目模様の斑紋が表れる。

国内分布
秋田県、新潟県、富山県、石川県、福井県、佐賀県の日本海側と兵庫県、岡山県、香川県、愛媛県の瀬戸内沿岸域から得られているが、局地的であり、いずれの産地も個体数はきわめて少ない。

県内分布
川北町でのみ得られている（参考文献では美川町となっているが誤りである）。採集地点は手取川河口から1.2㎞上流の河川敷の草地であり、1998年９月に１頭が採集されたに過ぎない。

生　態
植生の貧弱な河原の草地に生息する。幼虫の食草はカワラヨモギで、幼虫は花穂を食している。成虫は８月下旬から９月にかけて発生していると思われる。

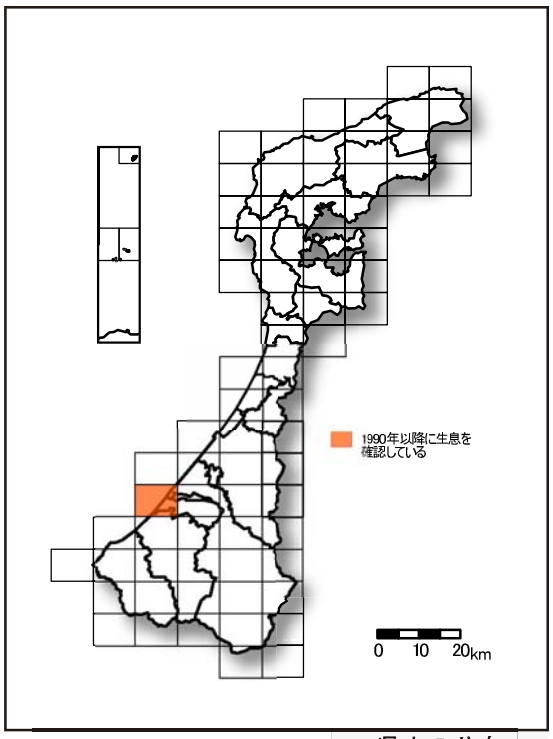
生息地の条件
カワラケツメイ、カワラヨモギ、カワラハハコなどの生育する河原の自然植生が残されていることが重要である。

生存の危機
生息地である手取川下流の右岸河川敷周辺は、護岸工事、公園化などで、河原本来の植生がほとんど失われている。本種の採集地点も2004年に土木工事が行われて生息地が破壊されたため、絶滅した可能性が高い。（A）

特記事項
国内分布が偏在しているうえ、海浜や河川敷の自然植生が保たれている平地草原という特殊環境に生息する点で重要である。

参考文献
富沢　章 1998. 石川県でアオモンギンセダカモクメを採集. 蛾類通信, (202) : 32.

標本提供者：富沢章



県内の分布

キイロサナエ

Asiagomphus pryeri (Selys)

トンボ目サナエトンボ科

石川県カテゴリー　絶滅危惧Ⅱ類

国カテゴリー　なし

選定理由

加賀地方では絶滅したと思われる。近年、津幡町や口能登の数箇所から見つかったが、個体数は少なく、開発の危機にさらされている。

形　態

腹長42～49㎜、後翅長37～43㎜で、ヤマサナエによく似た大型種である。

国内分布

日本特産種で、本州、四国、九州に分布するが、ヤマサナエほど普遍的ではなく、関東北部や東北ではほとんど見られない。富山県では小杉町に生息し、福井県からは近年いくつかの生息地が見つかっている。

県内分布

近年になり、津幡町、かほく市（宇ノ気町）、志賀町で生息が確認されている。

生　態

幼虫は平地や丘陵地の砂泥底のゆるい流れ(小川や用水)に育ち、ヤマサナエより下流に生息する場合が多い。成虫は５月下旬から８月に出現する。未熟期は林野など広範囲に分散するが、成熟すると発生地である小川付近で活動する。ヤマサナエに習性は似るが、出現期がやや遅い。

生息地の条件

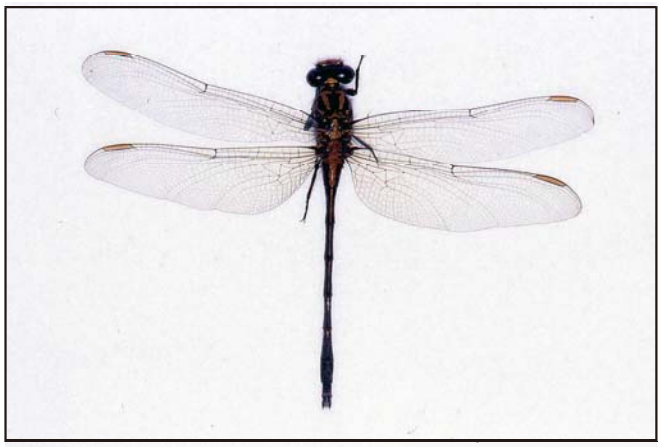
丘陵や山麓の汚染のない砂泥底の緩流(小川や用水、河川の中流など)が発生地である。その周辺に樹林や草地があることも重要。

生存の危機

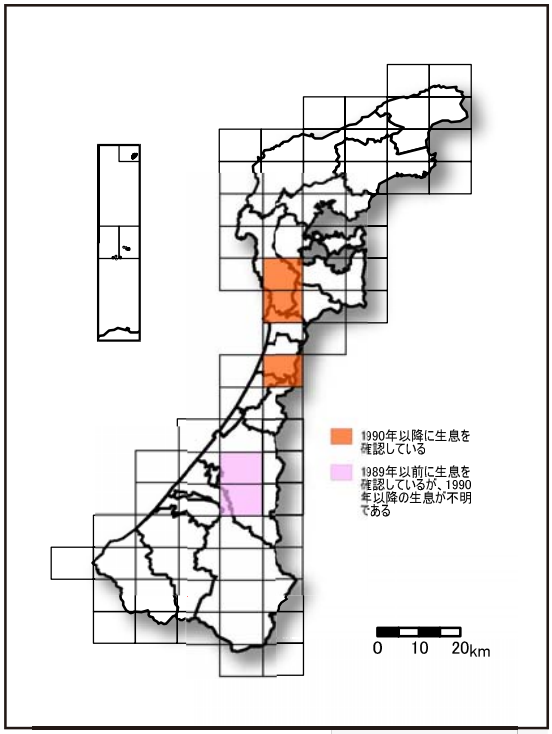
幼虫がヤマサナエよりも下流に生息するため、人間の生活圏と重なることが多く、人為的影響を大きく受けることになる。小川や用水は、一時は農薬で、近年は廃水や廃棄物の投入、コンクリート化により本種の生息が困難となった。水路の直線化や川床ならし、水抜きの影響も大きい。周囲の宅地化や雑木林の伐採も間接的なマイナス要因となる。未熟期を過ごす林野も開発や道路建設と車輌の通行増加で生息環境として適さなくなっている。（A）

参考文献

武藤　明 1988. 昆虫の生態をめぐって. とっくりばち, (65) : 8-10.
浅地哲也 2001. 中能登でキイロサナエを採集. とっくりばち, (71) : 25.



標本提供者：武藤明



県内の分布

昆虫類

アオサナエ

Nihonogomphus viridis (Oguma)

トンボ目サナエトンボ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類
国カテゴリー	なし

選定理由

小松市の３河川のみから知られ、個体数も少ない。

形　態

腹長37～43㎜、後翅長29～38㎜で、鮮やかな緑色の中型サナエ。肩に太い黒条があり、オスは第７～９節が著しくひろがって、長大な黄色の尾部上付器がある。

国内分布

日本特産種で、東北から南九州まで分布するが、産地は限定され、富山県でも希少種である。

県内分布

小松市の西俣川、大杉谷川、那谷川の中流域に生息するが、多くない。

生　態

丘陵地の砂礫底の河川の中流に育ち、成虫は５～７月に出現する。未熟期には林野に分散して摂食する。成熟オスは水面に出た石や岸辺の岩の上などに静止してメスを待ち、時々流れの上を飛翔するが、行動は極めて敏速である。メスを発見すると急追し、空中で捕えて環状となり、樹枝にとまる。産卵は卵塊を作ってから行なう。

生息地の条件

流れのゆるい砂礫底の中流域で、あまり深くなく水量がかなりあること。流れの中や岸辺に、静止するための水面に出た岩石があり、幼虫が羽化するための植物や岩石が散在することも必要。農薬や廃水が流入せず、付近に樹林もあること。

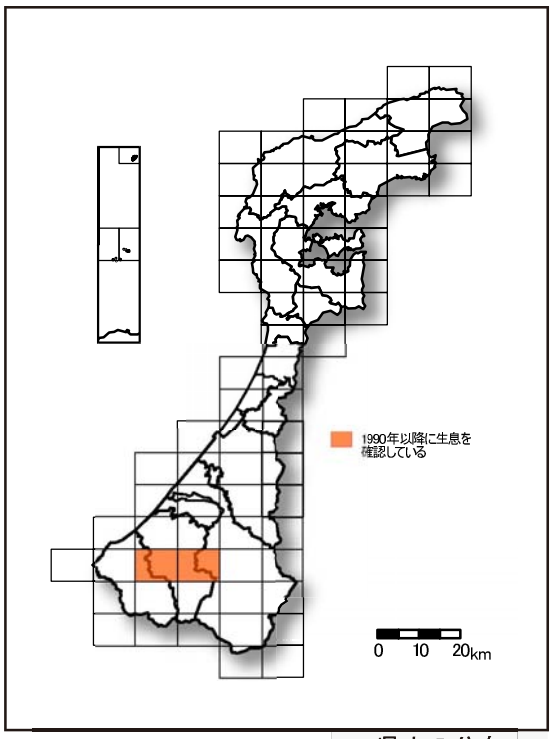
生存の危機

キイロサナエ、オナガサナエ、ホンサナエ同様、河川のゆるい中流域に生息するトンボとして、農薬や廃水、廃棄物の投入などによる影響を受けやすい。流れを直線化したり、岩石を除去し川床をならしたり、抽水植物を取り去るなども負の要因。ダムや堰で上手は水が淀み、下手は水量が減る場合もあり、コンクリート堤防が連続することなども減少につながる。付近の樹林の伐採も、摂食空間や休止場所をうばうことになる。（A）

参考文献

武藤　明 1998. トンボ目. 石川県の昆虫：49-57. 石川県自然保護課.
武藤　明 1998. 石川・福井の1998年度の蜻蛉資料. Ｔｏｍｂｏ, 41：33-36.

標本提供者：武藤明



県内の分布

マダラヤンマ

Aeschna mixta Latreille

トンボ目ヤンマ科

石川県カテゴリー　絶滅危惧Ⅱ類

国カテゴリー　なし

選定理由　本県が南限に近く、生息地が限られ、個体数も少なく、開発などの影響を受けやすい。

形　態　腹長42～47㎜、後翅長40～45㎜。オオルリボシヤンマを小型化したような種類。胸は黄緑、腹部は青い地に黒い条紋がある。

国内分布　北方種で、本州中部以北に分布し、福井県でも時に見られるが、富山県での確認例が多い。

県内分布　小松市（安宅新、四丁町、今江）、金沢市北部公園、羽咋市（大川町、寺家）などの報告があり、特に羽咋の太田崖や志賀町の一部では、ほぼ例年みられたが、最近はきわめてまれとなった。

生　態　平地～丘陵のヨシ、マコモ、ヒメガマなどの多い池沼に幼虫が育ち、成虫は主として９～10月を中心に活動する。未熟虫は疎林に分散して摂食し、成熟すると池沼に飛来してオスは初期にはやや高く旋回するが、やがて抽水植物のまばらになった部分で占有飛翔を行ない空中によく停飛する。周囲にだけヨシなどが生えている沼では、周回型の飛翔も見られ、よくトンボ科の種のような静止態をとる。

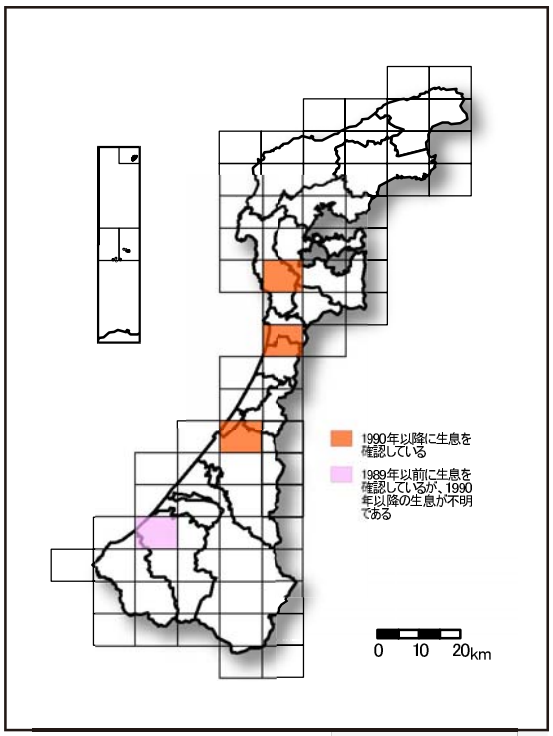
生息地の条件　北陸では主に海岸近くの丘陵や平地の池沼で、農薬、廃水などの影響がなく、ヨシ、ヒメガマ、マコモなどの抽水植物が多い環境が要件。ブラックバスやブルーギルの移入もなく、付近に疎林があり、堤防がコンクリートや防水シート張りでないこと、あまり深くないことも重要。

生存の危機　沿岸平野の池沼は、廃棄物投入や埋めたての対象にされやすい。農薬の空中散布、ブラックバスなど捕食性魚類の移入による直接的影響の他に、疎林の伐採なども減少をもたらす。ため池の改修による自然度の減少、逆に放置したために植物が進入し乾燥化する場合や、時にはサギなどの繁殖により汚染が進んだり、ハスがはびこり開水面が消失することもある。最初に発見された羽咋市寺家の沼は、公園化され放置されて乾燥し、小松市安宅新や四丁町の池も埋めたてや水抜きで、本種が現われなくなっている。（A, B）

参考文献

武藤　明 1998. トンボ目. 石川県の昆虫：49-57. 石川県自然保護課.

標本提供者：武藤明



県内の分布

マダラナニワトンボ

Sympetrum maculatum Oguma

トンボ目トンボ科

石川県カテゴリー　絶滅危惧Ⅱ類

国カテゴリー　絶滅危惧Ⅰ類

選定理由

かつては羽咋や小松の近郊などに分布していたが、近年は生息地が志賀町や七尾市に限られ、全国的にも絶滅が危惧されている。

形　態

腹長21～24㎜、後翅長25～28㎜の赤くないアカトンボ。黄色の地に黒斑があり、成熟すると黄色部は灰色がかってくる。

国内分布

日本特産種で、本州に分布するが、最近は見られなくなった地域が多い。富山県や福井県では、確実な記録がない。

県内分布

近年の確実な記録は、志賀町富来、七尾市の中島や能登島地区に限られる。過去に七尾市和倉での採集例があり、羽咋の寺家の松林の沼にかなり生息していた。その後、小松市の数箇所でも発見された。

生　態

平地～丘陵の松林にかこまれた明るく浅い池沼に幼虫が育ち、成虫は９～10月を中心に活動する。成熟オスは水辺の松の枝先などに静止して、縄ばりを占有する。産卵は主に雌雄が連結した状態で、水際の泥や草の上を飛びながら行ない、打空型である。意外に移動性がある。

生息地の条件

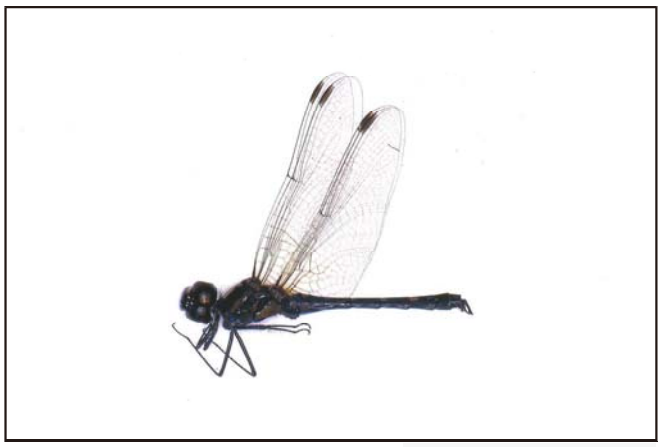
沿岸部や丘陵の中の池で、明るく開けて浅く、堤防がコンクリートや防水シート張りでないこと。農薬や廃水の影響がなく、強力な捕食者もいないことも要件。水量が安定し、夏に干上がらないこと。

生存の危機

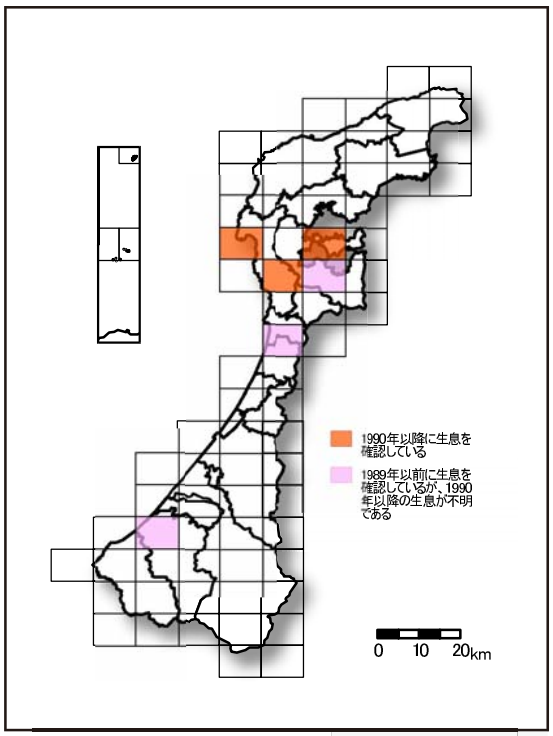
池沼の埋めたて、改修、農薬の散布、付近の開発などが悪影響を与えている。池沼に植物が進入し、開水面が失われたり乾燥化する場合もある。廃棄物の投入や、アメリカザリガニの進入、ブラックバスなどの移入も問題である。もともと個体数が少ないので、小さな要因でも生存をおびやかされる。本種の多かった寺家の沼は、松林が伐採された後に放置されており、付近の開発が進み、現在は生息していない。安宅新の池も埋めたてられた。志賀町では主産地のため池のひとつが干上っている。
（A, B）

参考文献

武藤　明 2006. 石川県の蜻蛉目. とっくりばち, (74) : 7-19.
武藤　明 2007. 石川県の蜻蛉に関する最近の知見. とっくりばち, (75) : 24-28.



標本提供者：武藤明



県内の分布

オオゴキブリ

Panesthia angustipennis (Shiraki)

ゴキブリ目オオゴキブリ科

石川県カテゴリー　絶滅危惧Ⅱ類

国カテゴリー　なし

選定理由

原植生の照葉樹林における代表的な昆虫で、県内の生息地は限られ、隔離分布している。

形　態

成虫の体長は40㎜内外である。体は漆黒色で翅は腹部全体を覆う。腹部は扁平で幅広く、前肢腿節には棘状の突起を有する。

国内分布

本州、四国、九州、屋久島に分布するが、北方における分布は局地的である。

県内分布

県内で生息が確認されたのは、加賀市から珠洲市まで13箇所で、そのうち９箇所は加賀地方南部に集中している。生息地は標高５ｍから80ｍの範囲にあって、平野部の原植生であるヤブコウジースダジイ群集が残存している社叢林や城跡が主であるが、二次林から発見された所もある。

生　態

発生木は照葉樹林内にある朽ち木で、太い倒木、切り株のほか、立枯れ木の高さ１～２ｍの部位から見つかった所もある。発生木の樹種はスダジイが最も多く、他にアカマツやモミからも見出される。幼、成虫は四季を通じて朽ち木の中で集団生活しており、移動性は小さいものと思われる。

生息地の条件

生息地が照葉樹林であっても二次林であっても、林内に幼虫の発生木となる大きな倒木や立枯れ木があることが重要である。発生木は表面が柔らかく、中が堅めのもので薄暗い湿った場所に多い。したがって、林内が明るく、枯木のない管理の行き届いた社叢林では生息できない。

生存の危機

生息地のうち９箇所は１ha以下で狭いうえ、発生木が１～５本と少なく生息基盤が脆弱なため、生存に好適な枯れ木がなくなれば、絶滅の可能性がある。生息地における倒木や立枯れ木の除去などの林内の整備は発生地の破壊につながる。生息地の環境整備は上記のことに留意し、最少限にとどめるべきである。（A）

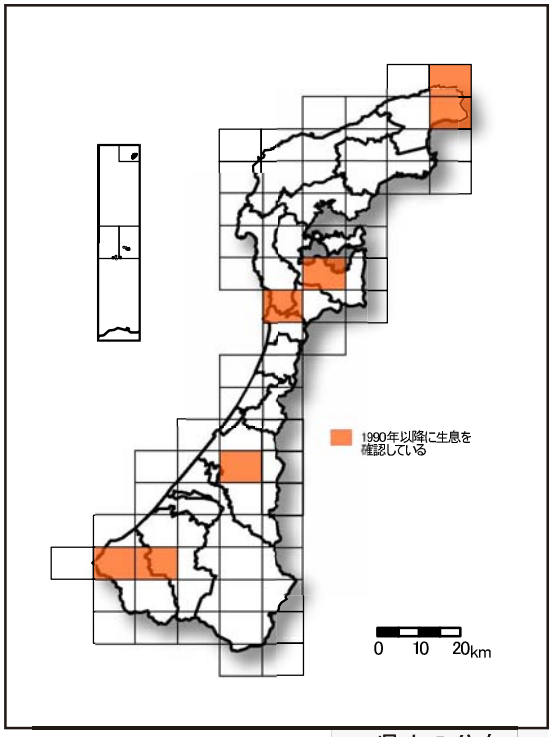
特記事項

照葉樹林の遺存種として重要である。

参考文献

富沢　章 1999. 石川県におけるオオゴキブリの新産地と生息状況. 月刊むし, (346) : 22-23.

写真提供者：富沢章



県内の分布

ヒナカマキリ

Amantis nawai Shiraki

カマキリ目カマキリ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類
国カテゴリー	なし

選定理由
暖地性のカマキリであり、石川県は北方の分布地で生息地が限定される。おもに照葉樹林に生息するが、個体数は少ない。

形　態
開張15㎜前後の小型のカマキリである。体は褐色で、ハネの無いのが特徴である。

国内分布
新潟県以西の本州、四国、九州、南西諸島に分布する。

県内分布
加賀市、七尾市、志賀町、穴水町、輪島市、珠洲市の約11個所から記録がある。

生　態
自然度の高い照葉樹林に生息するが、二次林からも記録がある。成虫は年１回発生し、８月から10月に見られ、地表徘徊性で、林床の落葉上や落葉の間を活発に行動する。地表の小動物を捕食する。

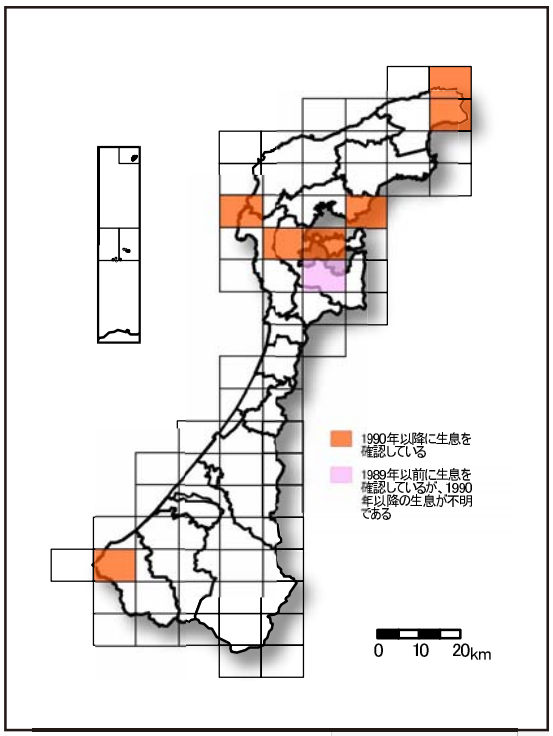
生息地の条件
落葉層に恵まれた自然度の高い照葉樹林や低地林の存在が必要である。林床はやや暗めで、湿度が保たれていることも重要である。

生存の危機
本種本来の生息地である自然の高い照葉樹林は孤立していること、ハネが無く、移動性に乏しい昆虫であることなどが減少要因となっている。現在の生息地である社叢林等の照葉樹林は、伐採や落葉の除去等の環境整備は避けるべきである。（A）

参考文献

富沢　章 2003. 石川県南部における照葉樹林の希少昆虫. 小松市立博物館研究紀要, （39）: 54-61.
松井正人 2004. 石川県でカマキリ類を採集. 翔, （171）: ６.
富沢　章 2005. ヒナカマキリの採集記録. とっくりばち, （73）: 25.
石原一彦 2006. 志賀町でヒナカマキリを採集. とっくりばち, （74）: 75.

写真提供者：富沢章



県内の分布

エゾエンマコオロギ

Teleogryllus infernalis (Saussre)

バッタ目コオロギ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類
国カテゴリー	なし

選定理由
日本海側では生息地が海浜に限られるようで、本県においては過去に数例の記録があるに過ぎず、近年の記録はまったくない。

形　態
体長25㎜前後。姿や大きさ、色彩は、近似種のエンマコオロギによく似ているが、鳴き声がまったく異なり、単調にリーリーと鳴く。

国内分布
北海道と本州に分布し、南限は和歌山県といわれている。北海道では多いが、本州における分布は局地的である。

県内分布
加賀市、小松市、内灘町、輪島市の海浜における古い記録がある。

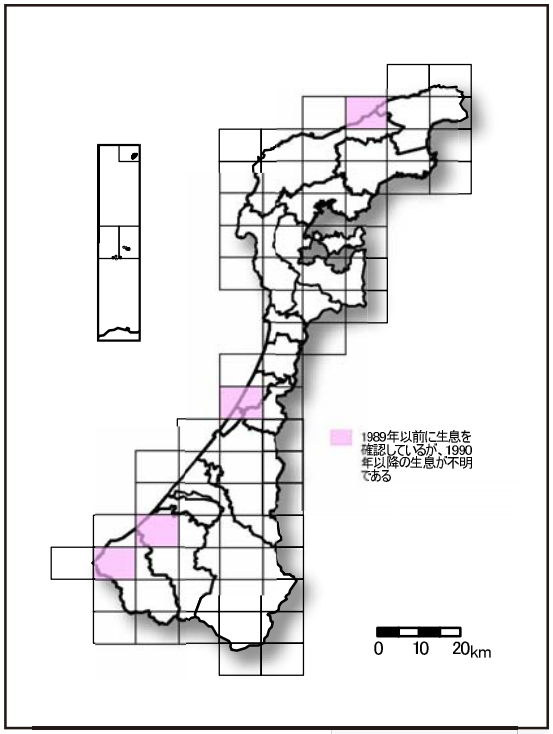
生　態
海浜植物帯およびその内陸部の草地に生息する。卵越冬で、成虫は秋に発生する。

生息地の条件
草のまばらな海浜が生息地となっている。

生存の危機
海岸付近の開発や護岸工事は本種の脅威となっているものと思われる。また、近似種のエンマコオロギが海浜にも生息していることから、競合によって本種が減少している可能性もある。（A）

参考文献
徳本　洋 1998. バッタ目. 石川県の昆虫：62-67. 石川県自然保護課.

写真提供者：吉岡明良



県内の分布

コオイムシ

Appasus japonicus (Vuillefroy)

カメムシ目コオイムシ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類
国カテゴリー	準絶滅危惧

選定理由

全国的に普通種であったが、激減した地域が多い。県内では２地域で生息が確認されているのみであり、その生息地も開発や生息環境の悪化が危惧される。

形　態

成虫は体長17～20㎜。体型は扁平な楕円形で、淡褐色～黄褐色。前脚跗節は捕獲脚で鎌状に発達し、中脚、後脚は遊泳脚で長い剛毛が生える。腹端の伸縮できる短い呼吸管を水面に出し呼吸する。同属のオオコオイムシとの正確な同定にはオス交尾器の検討が必要である。

国内分布

北海道、本州、隠岐島、四国、九州に分布する。

県内分布

かつての分布状況は不明であるが、七尾市、旧能登島町、珠洲市において局所的に分布する。

生　態

成虫５～６月頃にメスがオスの背面に卵塊を産みつけ、オスは孵化するまで約１ヶ月間、卵塊を保護する。産卵は数回行われる。ヤゴなどの水生昆虫や、オタマジャクシ、カエル幼体、小魚、巻貝などを捕らえ体液を吸う。水辺の枯れ草や石の下などで越冬する。

生息地の条件

平野部の水草が豊富な、比較的水深がある、池沼、放棄水田などの開放的な水域に生息する。

生存の危機

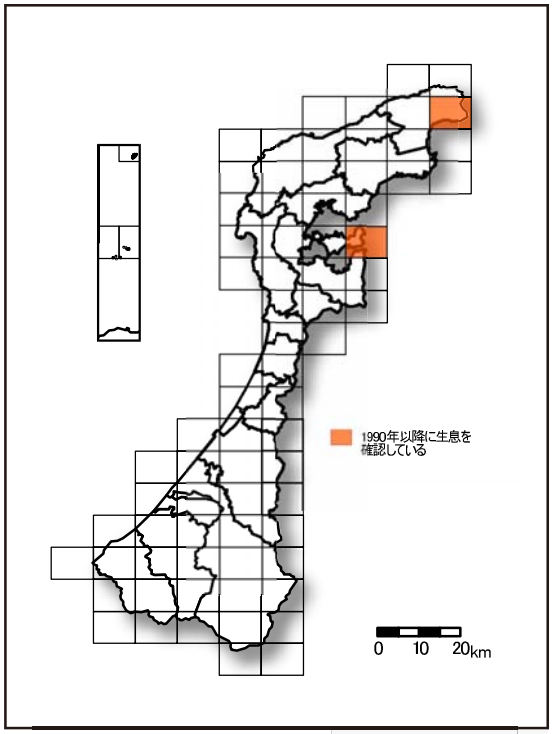
池沼の開発、水質汚染、放棄水田の植生遷移、アメリカザリガニなどの外来種の侵入が脅威である。とくに1950年代の農薬使用は本種を激減させたと考えられる。ため池の維持、管理の継続や放棄水田の湛水化が保全上重要である。七尾市ではＬＰガス基地建設によって生息地の大部分が破壊され、個体数は激減したため、放棄水田の湛水化、新たな水域の創出が必要である。（A, B, C）

参考文献

Okada, H. and Nakasuji, F. 1993. Comparative-studies on the seasonal occurrence, nymphal development and food menu in 2 giant water bugs, *diplonychus-japonicus* VUILLEFROY and *diplonychus-major* ESAKI (Hemiptera, Belostomatidae). Researches on population ecology, 35(1):15-22.

市川憲平 1996. コオイムシ類の繁殖生態（特集 子供の世話をする昆虫）. 昆虫と自然, 31（11）: 8-11.

標本提供者：富沢章



県内の分布

オオヒョウタンゴミムシ

Scarites sulcatus Olivier

コウチュウ目オサムシ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類
国カテゴリー	準絶滅危惧

選定理由
開発や海岸浸食等で生息地である砂浜海岸が消滅しつつあり、生息環境、個体数ともに減少している。

形　態
体長は37～42㎜の大型種。体は円筒状で瓢箪型であり、頭部は巨頭化して大顎は大きく発達する。後翅は退化して飛べない。

国内分布
本州、四国、九州に分布する。海浜性であるが、一部地域では大河川の河原に生息するという。

県内分布
加賀市から志賀町までの砂浜海岸に生息地が点在している。

生　態
成虫は６月から11月上旬まで見られ、８月下旬頃に新成虫が現れる。成、幼虫ともに肉食性である。夜行性で、昼間は深く砂の中に潜っている。

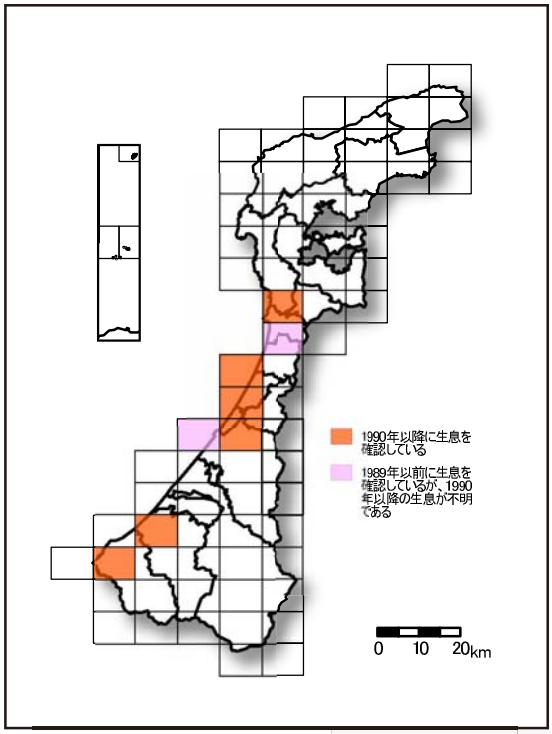
生息地の条件
海浜植物を伴う安定した広い砂浜海岸および海岸後背地。

生存の危機
沿岸部の土地開発、海水浴場のブルドーザーによる整備、道路建設等などで砂浜の生息環境が極端に悪化している。また、砂浜に側溝が設置されることにより、本種が落下し、死亡個体が多く確認されている。飛べないことも減少要因のひとつとなっている。海浜環境の悪化は、本種のような食物連鎖の頂点にある大型の捕食性昆虫にとって、特に影響が大きいと思われる。 (A)

特記事項
生息地では本種独特の足跡が砂地に残され、生息の指標となる。奥能登の広い砂浜海岸でも生息可能性があるので調査する必要がある。

参考文献
高羽正治 1998. コウチュウ目オサムシ科. 石川県の昆虫：103-120. 石川県自然保護課.

写真提供者：富沢章



県内の分布

ウエダオオズナガゴミムシ　コウチュウ目オサムシ科

Pterostichus uedaorum Morita et Hirasawa

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類
国カテゴリー	なし

選定理由　確認されている生息域は狭く、個体数も少ない希少種である。生息環境が特殊で、後翅が退化し、オオズナガゴミムシ系の進化の観点から、貴重な種といえる。

形　態　体長は大顎を含め16～19㎜。体は地下生活に適応した扁平な体形で、複眼は小さく後翅が退化している。頭部は巨頭化して大顎は大きく発達し、体色は赤褐色を帯びた黒色で艶があり、上翅は黒色が弱くより赤褐色になる。触角は体長よりもやや短い。

国内分布　石川県、富山県。岐阜県および福井県の白山山系にも生息するものと思われる。

県内分布　白山市（白山山系から医王山にかけての山地帯および亜高山帯）および金沢市。

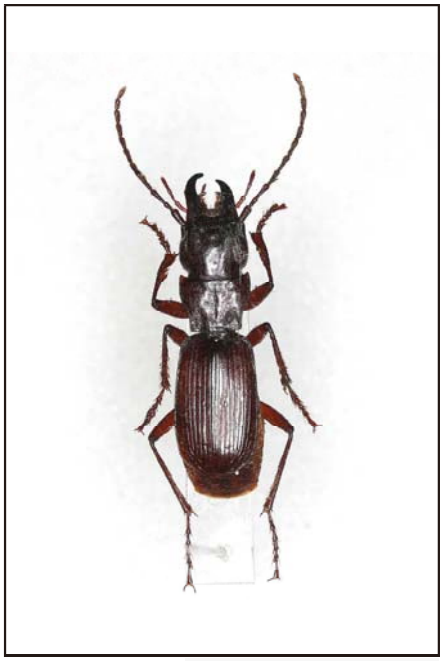
生　態　小石が堆積した地下浅層に生息する。成虫は、冬期を除き周年見られる。新成虫は９～11月の長期間にわたって見られる。

生息地の条件　山地帯から亜高山帯の小石の堆積した不安定な斜面という、特殊な環境に生息する。

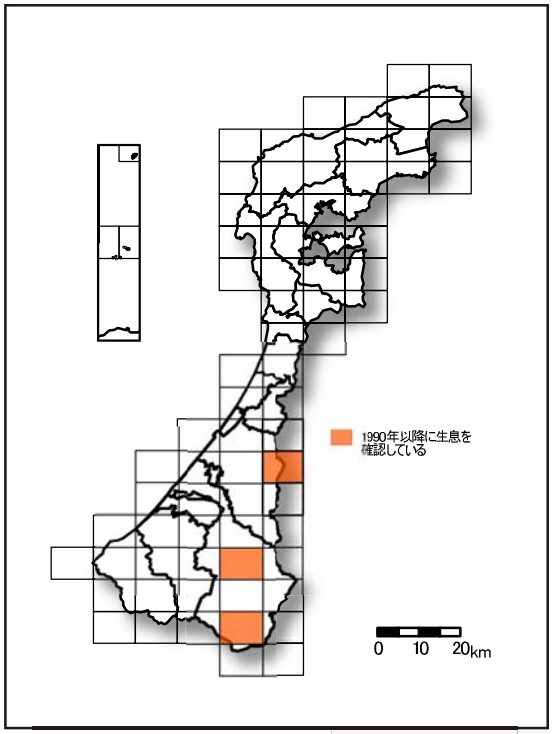
生存の危機　局地的に分布する種であるが、生息地が県立公園および国立公園内にあるため、現在のところ、種の維持には問題はない。しかし、生息環境が斜面の風化石の堆積層という不安定な場所なので、防災工事で生息地がコンクリート等で固められ、破壊される危険性がある。（A）

特記事項　1996年に記載された種で、金沢市医王山と白山市別当出合の採集個体がタイプ標本となっている。

参考文献
Morita,S. & Hirasawa,H. 1996. Macrocephalic Pterostichines (Coleoptera:Carabidae) from Central Honshu,Japan. Elytra, 24（1）:21–30.
高羽正治 1998. コウチュウ目オサムシ科. 石川県の昆虫：103–120. 石川県自然保護課.



標本提供者：井村正行



県内の分布

ヒメケシゲンゴロウ

Hyphydrus laeviventris Sharp

コウチュウ目ゲンゴロウ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類
国カテゴリー	なし

選定理由

全国的に生息地は局所的で個体数も少ない。県内では能登北部で確認されているにすぎない。

形　態

体長4.3～5.0㎜、体型は短卵形。背面は暗黄赤褐色で、光沢はやや強い。一般に暗色部が強く、かなり黒っぽく見える。触角、口枝、肢は黄赤褐色。同属のケシゲンゴロウ *H. japonicus* に比べ、かなり黒っぽく、点刻が粗い。幼虫はやや扁平な、いも虫状。

国内分布

本州、四国、九州。

県内分布

能登北部に局所的に分布する。

生　態

成虫は５～11月に確認されている。幼虫は比較的水深のある場所にも生息する。

生息地の条件

平野部～丘陵部の池沼、放棄水田などの止水域。

生存の危機

池沼、湿地の開発による消失、ため池の管理放棄、水質汚染、放棄水田の植生遷移、外来魚が大きな脅威となっている。県内の生息地では、ため池２箇所にオオクチバスが侵入したために、駆除が行われた。ため池の維持管理の継続、放棄水田の湛水化などの保全策が必要である。（A, B, C）

参考文献

森　正人・北山　昭 2002. 改訂版図説日本のゲンゴロウ. 文一総合出版. 東京.
川野敬介・中野浩史・林　成多・山内健生 2006. 出雲市平田地域のため池生物調査（２）止水性水生昆虫類の生息状況. ホシザキグリーン財団研究報告,（９）: 13-37.

標本提供者：西原昇吾

分布図はありません。

県内の分布

テラニシセスジゲンゴロウ

Copelatus teranishii Kamiya

コウチュウ目ゲンゴロウ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類
国カテゴリー	なし

選定理由

国内の分布は局所的、隔離的である。県内では、１箇所でしか採集されていない。

形　態

体長4.8～5.5㎜、体型は逆長卵形で扁平。背面は暗褐色～黒褐色で、後頭、前胸背両側、上翅の基部横帯および両側、口枝、肢は黄褐色。上翅には６条の縦溝、１条の亜縁溝があり、間室は細かい点刻を装い光沢がある。体下面は黄褐色～赤褐色で後基節はやや暗色。

国内分布

秋田県、山形県、福島県、石川県、福井県、愛知県、岐阜県、三重県、大阪府、兵庫県、広島県、福岡県、大分県、対馬。

県内分布

加賀市海岸付近で2006年８月にライトトラップによって３個体が採集されたのみである。発生場所は特定されていない。

生　態

灯火に飛来すること以外は不明である。

生息地の条件

疎林に囲まれている日陰の小さな、水深の浅い水たまりや、水底に落葉が堆積している一時的な水たまり、河川敷の小溝などに生息するといわれている。秋田では、沼のヨシの腐植物の周辺で確認されている。

生存の危機

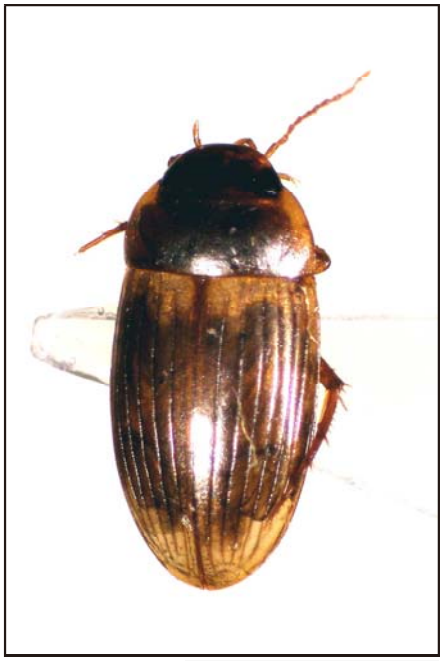
現在の生息地が局限されていること、発見地周辺の止水域は限られていることから、生息場所を明らかにすることが第一である。（A, B）

参考文献

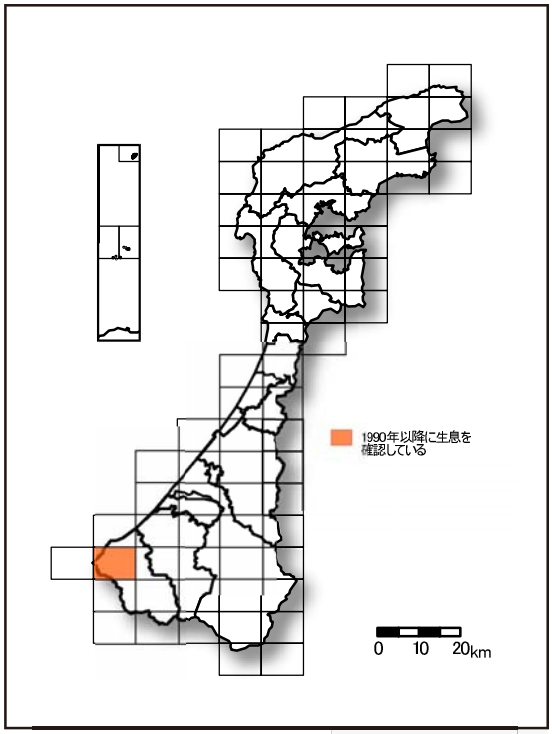
大桃定洋 1989. テラニシセスジゲンゴロウを福島県で採集. 月刊むし, (226) : 5.

櫻井俊一 1992. 鳥海山麓のセスジゲンゴロウ３種の記録. 月刊むし, (262) : 20-21.

秋山美文・坂本　充 2000. 広島県の水生食肉甲虫類（コウチュウ目, オサムシ上科）. 比和科学博物館研究報告, 39 (別冊) : 5-33.



標本提供者：富沢章



県内の分布

コミズスマシ

Gyrinus curtus Motschulsky

コウチュウ目ミズスマシ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類
国カテゴリー	なし

選定理由

普通種とされるが、水辺環境の改変や外来種の侵入などにより、全国各地で生息地が減少している。県内の生息地は２箇所のみであり、1997年を最後に確認されていない。

形　態

体長4.7～5.6㎜。黒色で鋼様の光沢があり、肢は黄褐色である。体型は楕円形で長さは幅の約1.8倍。背面はよく膨隆し、体下面は平坦。上翅はやや隆起し、中央部で最も幅広く、11条の点刻を有する。オス交尾器中央片は先端に向かい細まり、末端は弧状を呈する。

国内分布

北海道、本州、四国、九州。

県内分布

加賀市（加佐岬、片野鴨池）。

生　態

成虫は水面を旋回し、水面に落ちた小昆虫を捕食するとされる。幼虫も肉食とされる。県内では３月、５月に確認されている。

生息地の条件

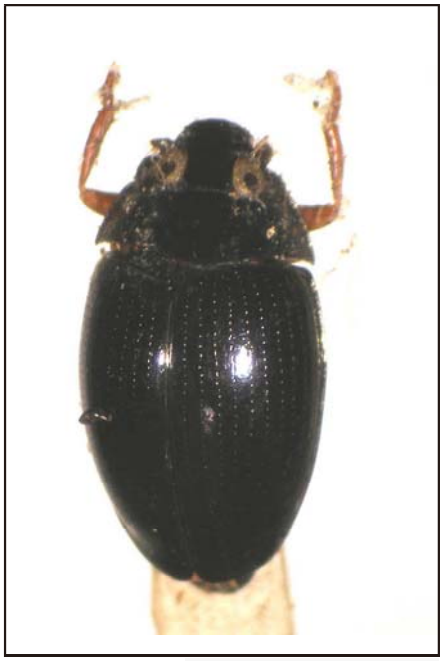
平野部～丘陵部の水生植物の豊富な池沼や流れの緩やかな小河川。

生存の危機

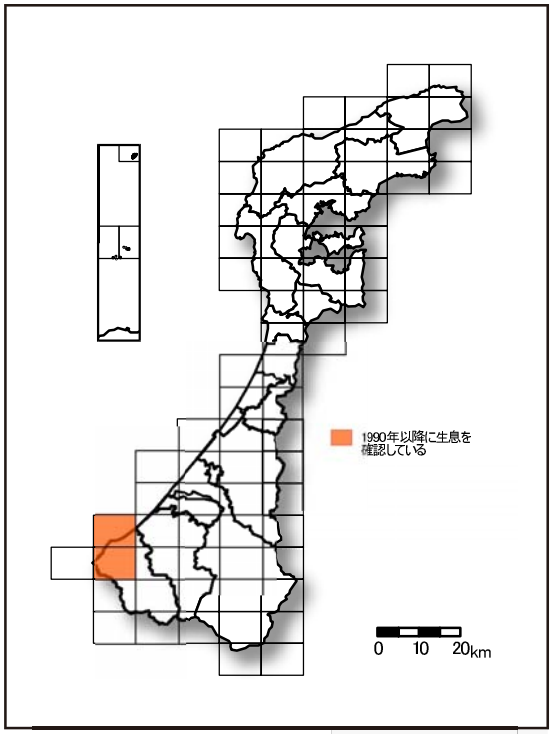
生息地は平野部の水辺であり、池沼の開発による消失、水質汚染（特に油など界面活性剤の流入）による環境破壊を受けやすい。水面上で同様に生活するアメンボ類に比べ、ミズスマシ類の減少傾向は著しい。県内の生息地周辺における分布調査を早急に行う必要がある。片野鴨池では、アメリカザリガニ、オオクチバスが侵入しているため、外来種の駆除および、侵入できない区域の設置などの保全策が必要である。（A, B）

参考文献

横山桐郎 1929. ミヅスマシ *Gyrinus curtus* MOTSCHULSKY の卵と幼蟲. 昆蟲, ３（２）：83–84.
佐藤正孝 1977. 日本産ミズスマシ科概説（１）–（３）. 甲虫ニュース, (37)：１–５, (38)：１–２, (39)：１–４.
中根猛彦 1987. 日本の甲虫 (81–82), みずすまし科. 昆虫と自然, 22 (12)：36–40, 22 (13)：27–29.



標本提供者：入場登



県内の分布

ヒメミズスマシ

Gyrinus gestroi Régimbart

コウチュウ目ミズスマシ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類
国カテゴリー	なし

選定理由
普通種とされるが、水辺環境の改変や外来種の侵入などにより、全国各地で生息地が減少している。県内では２箇所に生息するが、1998年の記録が最後である。

形　態
体長4.6～5.2㎜。体型は短楕円形で長さは幅の約1.9倍、背面はよく膨隆し、体下面は平坦。上翅の点刻列は11条で普通で、側方でも溝条にならない。オス交尾器中央片末端は広く丸まる。

国内分布
日本固有種。本州、四国、九州。

県内分布
加賀市片野鴨池、志賀町宿女。

生　態
成虫は植物の間を旋回し水面に落ちた昆虫を捕食するが、開放水面にはあまり出てこないようである。幼虫も肉食とされる。灯火にも飛来する。県内では、４、５、10月に記録されている。

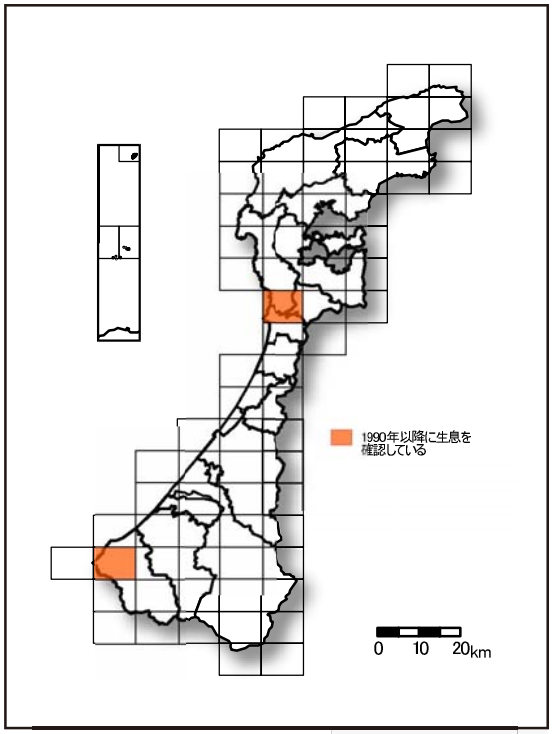
生息地の条件
水生植物の豊富な池沼や流れの緩やかな小河川。

生存の危機
池沼の開発による消失、コンクリートなどによる護岸化、水質汚染（特に油など界面活性剤の流入）、外来種の侵入が脅威となっている。水面上で同様に生活するアメンボ類に比べ、ミズスマシ類の減少傾向は著しい。県内の近年の調査ではまったく確認されていないため、生息地周辺における分布調査を早急に行う必要がある。片野鴨池では、アメリカザリガニ、オオクチバスが侵入しているため、それらの駆除および侵入できない区域を設けるなどの保全策が必要である。（A, B）

参考文献

佐藤正孝 1977. 日本産ミズスマシ科概説（1）-（3）. 甲虫ニュース, (37) : 1-5, (38) : 1-2, (39) : 1-4.
中根猛彦 1987. 日本の甲虫 (81-82), みずすまし科. 昆虫と自然, 22(12) : 36-40, 22 (13) : 27-29.
北野　忠・石田和男 2000. 遠州地方で確認された水生鞘翅目. 遠州の自然, (23) : 9-14.

標本提供者：西原昇吾



県内の分布

ヤマトホソガムシ

Hydrochus japonicus Sharp

コウチュウ目ホソガムシ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類
国カテゴリー	なし

選定理由
かつては全国的に普通であったが、近年、個体数が少なくなったようである。県内でも、長期間にわたって確認されていない。

形　態
体長2.6～3.1㎜。体型は長細く、両側はほぼ平行で、体色は黒色。上翅は暗褐色となるが、緑～藍色の金属光沢を有する。付属物は黄褐色。前胸背には５～６個の凹陥があり、上翅は粗大点刻列を具える。第３、７、９間室が明瞭に隆起し、第５間室が隆条となる。体下面は光沢を欠き絨毛状となる。

国内分布
本州、四国、九州、琉球列島。

県内分布
金沢市の1944年の記録、金沢市粟崎における1959年の記録のみである。粟崎では海岸の藻の下から生体が得られたが、その後10年ほどの継続調査では確認されなかった。

生　態
成虫は灯火に飛来するとされる。県内では６月に確認されている。

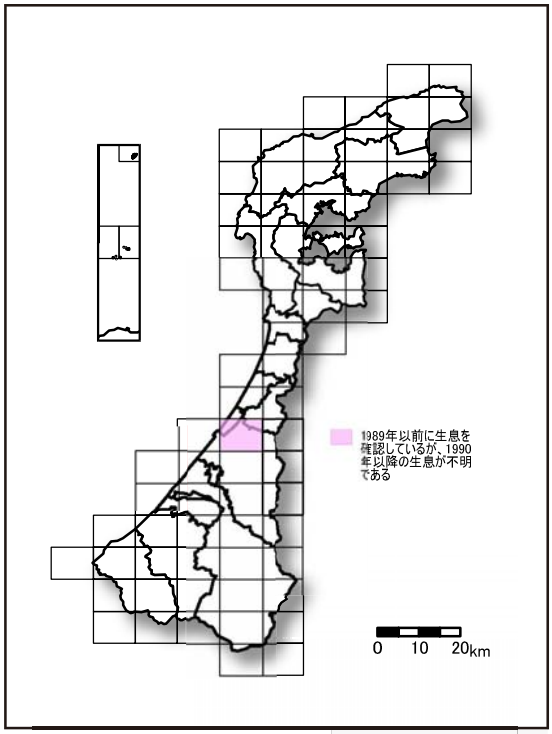
生息地の条件
一般的には、平野部の水生植物の豊富な自然の池沼、湿地などの止水域である。

生存の危機
池沼、湿地の埋め立てなどの様々な開発による消失、水質汚染。採集地周辺の再調査および平野部の自然環境の豊かな池沼における生息調査を行うことが先決である。（A）

参考文献

佐藤正孝 1978. 日本産ホソガムシ科概説. 甲虫ニュース, (40) : 1-3.
佐藤正孝・吉富博之 2005. 日本産水棲昆虫の分類学的覚え書きⅣ. 甲虫ニュース, (151) : 1-6.
林　成多 2007. 島根県産水生甲虫類の分布と生態. ホシザキグリーン財団研究報告, (10) : 77-113.

標本提供者：高羽正治



県内の分布

ネブトクワガタ

Aegus laevicollis subnitidus Waterhouse

コウチュウ目クワガタムシ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類
国カテゴリー	なし

選定理由
暖地性の種で、開発されやすい平地から低山地に生息し、産地が局所的である。また、生息地における個体数がきわめて少ない。

形　態
体長は大顎を含め14～28㎜の中小型のクワガタムシ。体色は黒色で上翅には９本の縦条がある。オスの大顎は細く、内歯が２本あり、基部近くの第１歯は大きい。第２歯は中央付近にあるが、小型の個体では消失する。メスの大顎は小さい。

国内分布
本州、四国、九州、対馬、種子島、屋久島。

県内分布
加賀市、小松市、能美市、金沢市、津幡町。

生　態
平地から低山地に生息し、成虫は７月から８月に現れる。ブナ科やマツ類の樹液に集まり、樹木の低い位置から出ている樹液を好むようである。成虫は灯火にも飛来する。幼虫は、マツ類の朽ち木が赤枯れ菌に侵され、シロアリに分解された泥状化した腐朽部を食する。

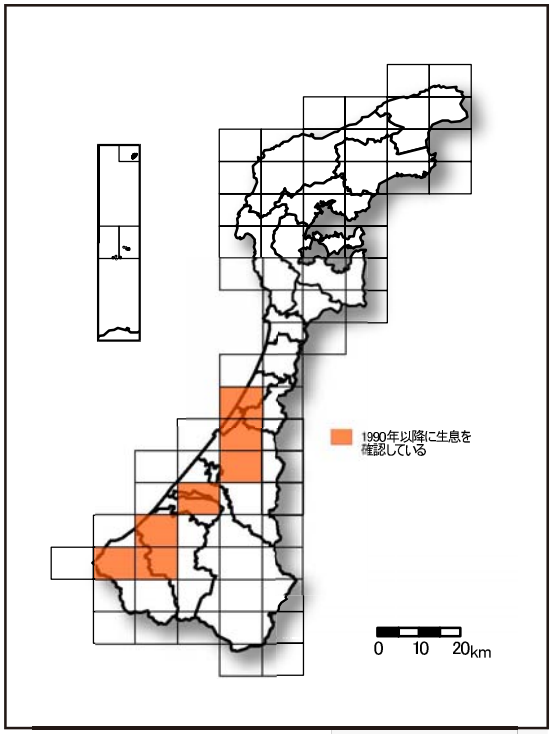
生息地の条件
里山で、自然環境の良好な雑木林が保たれていることが重要である。

生存の危機
生息域が平地ないし低山地であるため、伐採や開発による生息環境の消滅が危惧される。小松市の生息地の一つは、大規模な伐採によって消滅した。（A）

特記事項
本種は、南方の離島に多くの亜種があり10亜種に分かれる。

参考文献
高羽正治 1998. コウチュウ目クワガタムシ科. 石川県の昆虫：146. 石川県自然保護課.

写真提供者：富沢章



県内の分布

ヒメオオクワガタ

コウチュウ目クワガタムシ科

Nipponodorucus montivagus montivagus (Lewis)

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類
国カテゴリー	なし

選定理由
生息域が1,000m以上のブナ帯に限られる。また、近年の個体数の減少は著しく、採集圧が要因と思われる。

形　態
体長は大顎を含め30～55㎜の大型のクワガタムシ。体色は黒色で弱い光沢を持つ。オスの大顎は太く、大きな内歯が中央前に内斜め前方を向いている。メスの大顎は小さい。

国内分布
北海道、本州、四国、伊豆大島。

県内分布
白山市（旧白峰村、旧尾口村）の白山山系山地帯。

生　態
標高1,000m以上のブナ帯に生息し、成虫は６月下旬から９月に現れ、ヤナギの樹液に集まる。また、灯火にも飛来する。幼虫は太いブナの朽木を食する。成虫は晩夏に羽化した後、そのまま蛹室にとどまり越冬する。幼虫期は２年以上かかる。

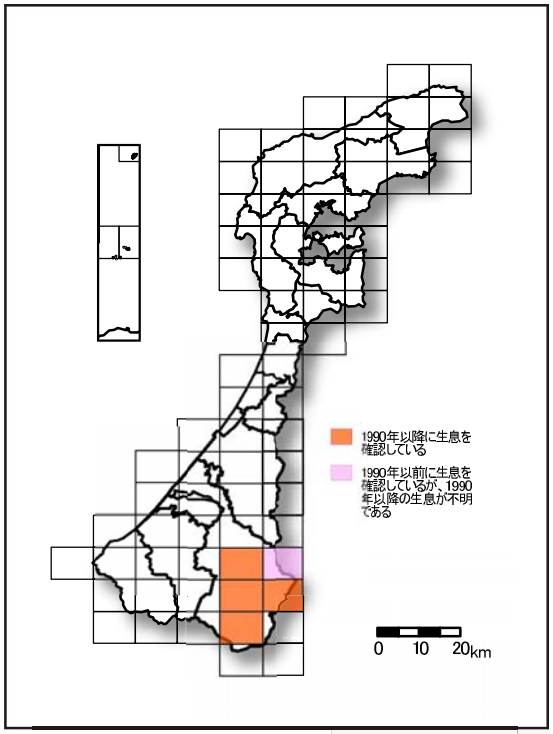
生息地の条件
ブナの原生林が残されていること。

生存の危機
生息地は白山国立公園内のため、自然環境は保たれている。しかし、最近のクワガタムシブームで、業者によると思われる採集圧が顕著であり、有名な産地では個体数が激減している。（A）

特記事項
九州には別亜種のキュウシュウヒメオオクワガタが分布する。

参考文献
高羽正治 1998. コウチュウ目クワガタムシ科. 石川県の昆虫：146. 石川県自然保護課.

写真提供者：富沢章



県内の分布

アカマダラハナムグリ

Anthracophora rusicola Burmeister

コウチュウ目コガネムシ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類
国カテゴリー	情報不足

選定理由

本種は猛禽類、特にハチクマの巣内を発生場所とすることが確認されているが、ハチクマ自体が石川県では準絶滅危惧種に指定されていて減少傾向にあり、その巣に依存している本種もハチクマと同様に減少が懸念される。

形　態

体長約20㎜。和名の由来となる赤褐色と黒色のまだら模様を持つことが大きな特徴である。

国内分布

北海道南部、本州、四国、九州、屋久島に分布する。

県内分布

県内では、小松市と金沢市からの記録がある。1990年以降記録がなかったが、富沢（2007）により県内から17年ぶりに記録された。

生　態

本種はこれまで、樹液に訪れた個体がまれに採集される程度であった。ところが最近になり、本種はクマタカやハチクマなどの猛禽類の巣、特にハチクマの営巣中の巣を好んで発生場所としていることが明らかになった。春に本種のメスが日本に渡来してきたばかりのハチクマの巣に産卵、孵化した幼虫は巣内のペリットなどをエサにして成長し、夏頃には新成虫となって出現する。成虫越冬をするようであるが越冬場所などはわかっていない。

生息地の条件

ハチクマやクマタカが営巣、繁殖のできる、健全な自然の残された里山環境であること。

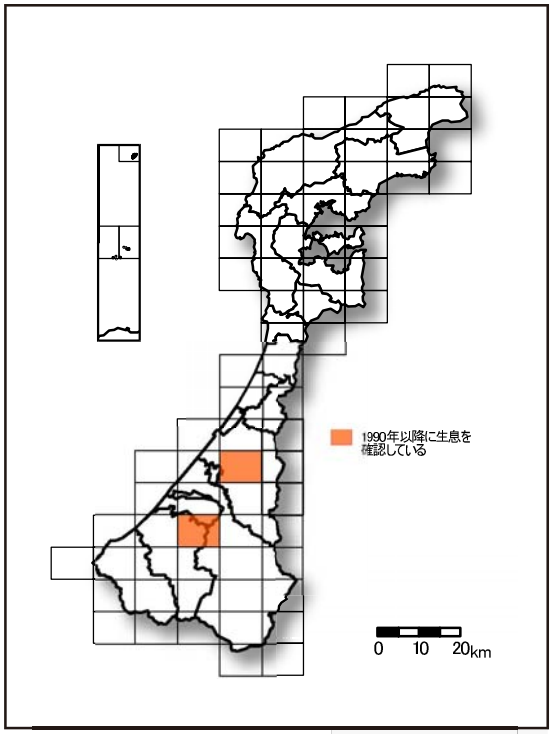
生存の危機

宅地開発やさまざまな公共事業による里山環境の破壊や、薪炭林として利用していた里山林の荒廃は、ハチクマなどの猛禽類が生息できなくなるばかりではなく、その巣を発生場所として依存している本種の生存さえをも危うくする。（A）

参考文献

槇原　寛・阿部　学・新里達也・早川浩之・飯島一浩 2004. ワシタカ類の巣で生活するアカマダラハナムグリ. 甲虫ニュース, (148) : 21-23.
富沢　章 2007. 小松市におけるアカマダラハナムグリの記録. とっくりばち, (75) : 61. 石川むしの会.

標本提供者：牛島釈広



県内の分布

クロマダラタマムシ

Nipponobuprestis querceti (E.Saunders)

コウチュウ目タマムシ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類
国カテゴリー	なし

選定理由
全国的にも稀な種である。本県は日本海側の北限に近く、産地が局地的で、個体数もきわめて少ない。

形　態
体長は17～28㎜で、タマムシとしては大型種。アオマダラタマムシに似ているが、より丸い体形であり、上翅の縦隆脈がやや弱い。体色は黒緑色で、黄、橙、紫などの金属光沢の斑模様を有している。メスの腹端は丸く、オスは三角形にえぐられる。

国内分布
本州（関東以西）、四国、九州。

県内分布
加賀市、かほく市。

生　態
成虫は６～８月頃に現れ、エノキの葉を後食し、また、その衰弱部に集まる。幼虫はエノキの枯死部や衰弱部を食し、成虫になるまでは２年以上を要する。晩夏に羽化した後、そのまま蛹室で越冬する。

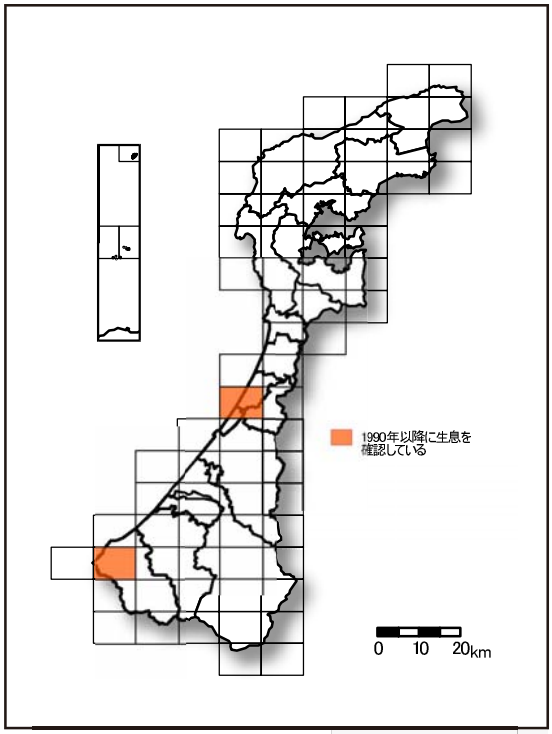
生息地の条件
平地や丘陵地において、食樹となる大木のエノキの林が存在することが重要である。

生存の危機
知られている生息地は２箇所のみで、しかもごく限られた場所のため、個体群を維持することは困難な状況にある。また、伐採や開発等による生息地の消滅が危惧される。平野部から里山に残存するエノキの大木の保全と本種の生息調査が必要である。（A）

特記事項
本種の幼虫はエノキの枯死部の衰弱部分を好むようで、完全な枯死部を食するヤマトタマムシとの棲み分けも観察されている。

参考文献
高羽正治 1998. コウチュウ目タマムシ科. 石川県の昆虫：155-157. 石川県自然保護課.
浅地哲也 2003. 大型タマムシ３種の記録. 翔, （172）：１.

写真提供者：竹谷宏二



県内の分布

カラマツカミキリ

Tetropium castaneum (Linnaeus)

コウチュウ目カミキリムシ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類
国カテゴリー	なし

選定理由　県内の記録は１例のみであり、国内分布の西限である。

形　　態　体長は8～13㎜。トドマツカミキリに良く似るが、触角と脚は細く、上翅基部に白毛を密生する。体色は黒色。触角の長さは上翅中央に達する。

国内分布　本州（中部地方）。

県内分布　白山市（旧白峰村）。

生　　態　成虫は７～８月頃に出現し、ブナ帯上部のカラマツの衰弱木に集まる。幼虫はその衰弱部を食する。本県の採集個体は、採集場所の標高が低いためか、通常の発生時期より早い６月12日に記録された。採集個体は、新しいカラマツの伐採木上にいたものである。

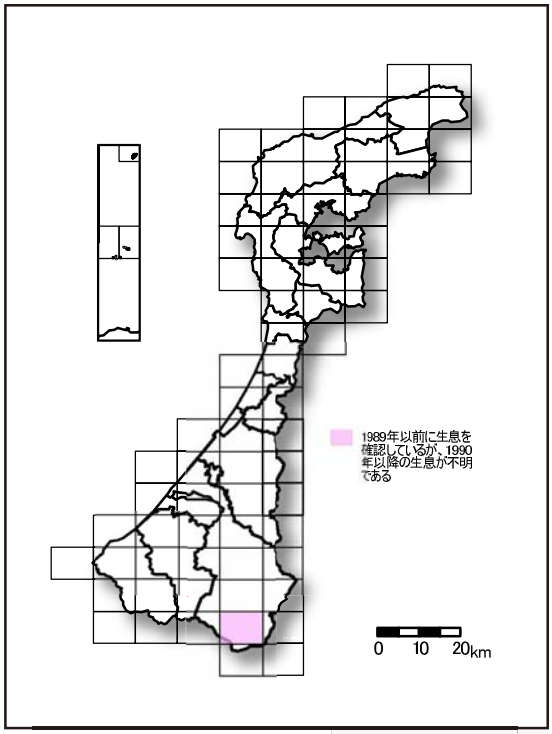
生息地の条件　カラマツの自然林があることが重要である。

生存の危機　生態や分布が不明な点が多い。本県ではカラマツ自然林の分布が確認されていないうえ、確認個体が１例のみなので、今後はカラマツ林の探索と本種の生息調査が急務である。（A）

特記事項　本種はトドマツカミキリと良く似ているので同定には注意を要する。

参考文献　井村正行 1998. コウチュウ目カミキリムシ科. 石川県の昆虫：197–217. 石川県自然保護課.

標本提供者：入場登



県内の分布

ヒゲブトハナカミキリ

Pachypidonia bodemeyeri (Pic)

コウチュウ目カミキリムシ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類
国カテゴリー	なし

選定理由
得られた個体数が少ないこと、および幼虫の発生場所が自然環境の良い森林に存在する数少ない大木の樹洞であるという特殊性があるため、生息地が限られる。

形　態
体長は13～16㎜。中型のハナカミキリで、体形は太く短かい。体色は頭部および前胸背が赤褐色、上翅は黒く、赤味を帯びる個体もいる。触角は太く、その長さはオスで上翅の2/3にとどく程度である。

国内分布
北海道、本州、四国、九州。

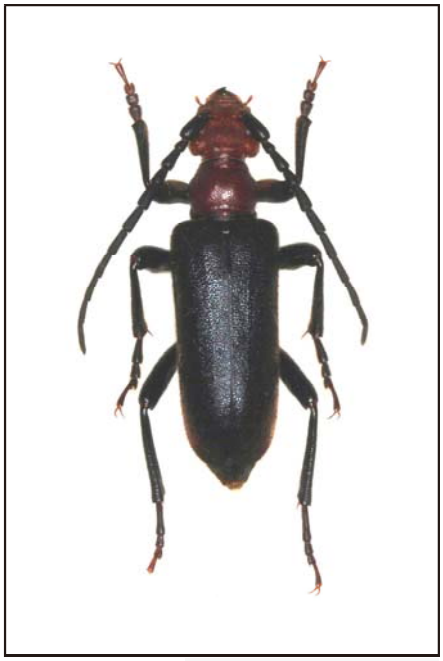
県内分布
白山市。

生　態
ブナ帯に生息する。本種は、繁殖期のごく短い一時期を除き、大木の樹洞内で過ごす。成虫は７月中旬～８月中旬にトチやブナの樹洞内で見られ、幼虫は樹洞内部の腐朽部を食する。他県ではミズメやドロノキも食樹として記録されている。

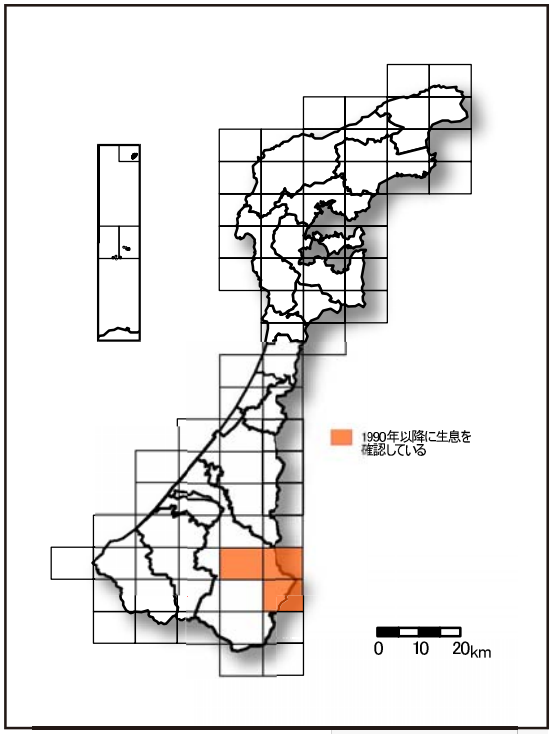
生息地の条件
ブナ原生林内にブナやトチなどの古木の樹洞があることが生息条件であり、人手の入らない大木の残る豊かな森林が重要といえる。

生存の危機
全国的にも、樹洞を有する大木の残る豊かな森林環境が減少しており、ブナ原生林の保全が重要である。先人の知恵で、谷間の村を雪崩から防ぐため、斜面の樹木を切らずに残された原生林が、本種の生息場所になっている地域がある。このことは、人と自然との共生の一例であり、樹木を切り、崖をコンクリートで固め、鉄柵で雪崩を防ごうとばかり考えないでほしいものである。（A）

参考文献
江崎功二郎・八神徳彦 2005. 石川県内で採集例が少ないカミキリムシおよびコメツキムシの記録. とっくりばち, (73) : 20.



標本提供者：井村正行



県内の分布

ベーツヤサカミキリ

Leptoxenus ibidiiformis Bates

コウチュウ目カミキリムシ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類
国カテゴリー	なし

選定理由
南方系の種で、本県が国内分布の北限である。生息地は加賀南部に限られ、開発等により生息地が狭小化している。

形　態
体長は11～15㎜。体は細く、脚が長い。体色は淡黄褐色～赤褐色で、上翅に濃淡の斜帯がある。触角は細く、長さはオスで体長の1.5倍弱である。

国内分布
本州（中部以西）、四国、九州、対馬。

県内分布
加賀市（福井県境～橋立地区の沿岸部）。

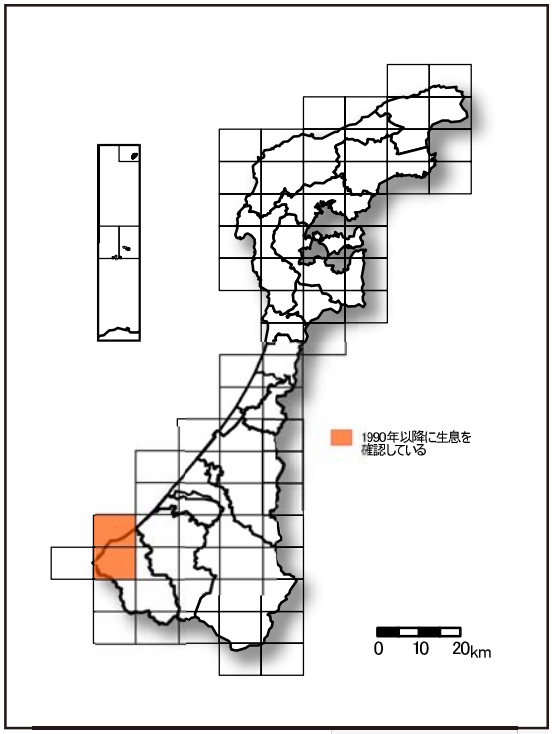
生　態
本県では、沿岸部のタブノキの大木が残された照葉樹林に生息する。成虫は４月下旬～６月頃に出現し、タブノキの新しい枯れ枝やスダジイ、クリの花に飛来する。幼虫はタブノキの新しい枯れ枝を食する。秋に羽化し、そのまま枝内の蛹室にとどまり、越冬する。

生息地の条件
タブノキの大木の残る林があることが重要である。

生存の危機
加賀市沿岸部のタブノキ、スダジイなどの大木が残された照葉樹林は、伐採や土地開発等により確実に減少しているため、これらの照葉樹の保全が重要である。（A）

参考文献
井村正行 1998. コウチュウ目カミキリムシ科. 石川県の昆虫：197-217. 石川県自然保護課.

写真提供者：富沢章



県内の分布

ヨツボシカミキリ

Stenygrium quadrinotatum Bates

コウチュウ目カミキリムシ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類
国カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類

選定理由　県内における最近の記録がきわめて少なくなった。この傾向は、全国的なようである。

形　態　体長は８～14㎜。体色は暗赤色で、上翅にはやや大きめの黄白色の円紋を２対有する。脚の各腿節は肥大する。オスの触角の長さは体長を越える。

国内分布　北海道（南部）、本州、飛島、佐渡島、隠岐島、淡路島、四国、九州、対馬、壱岐島、屋久島、伊豆新島、奄美大島、徳之島。

県内分布　小松市原沢林道、金沢市（寺町、諸江、若松、菱池、医王山）、穴水町大町。

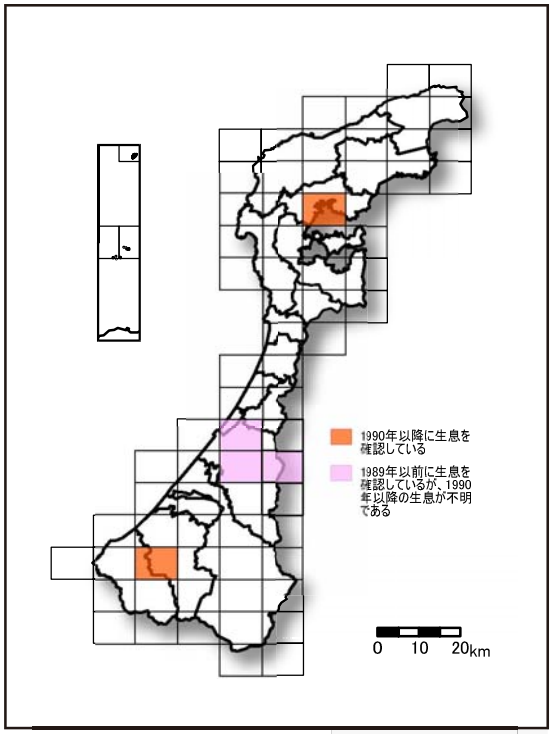
生　態　平地～低山帯で見られ、成虫は６～８月頃に出現し、クリの花や灯火に飛来する。幼虫はブナ科の枯れ枝を食するという。

生息地の条件　平地～低山帯において、ブナ科を含む雑木林が存在すること。

生存の危機　開発等の人為的影響を受けやすい所が生息地であるため、減少しやすい。しかし、全国的に普通種であった本種が激減したのは、他に要因があるのかもしれない。（A）

参考文献　井村正行 1998. コウチュウ目カミキリムシ科. 石川県の昆虫：197–217. 石川県自然保護課.

標本提供者：入場登



県内の分布

クロツヤヒゲナガコバネカミキリ　コウチュウ目カミキリムシ科

Glaphyra hattorii (Ohbayashi)

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類
国カテゴリー	なし

選定理由　本県での生息地は、手取川流域に限られ、しかも点在しているにすぎない。また、本県が国内分布の西限にあたると思われる。

形　態　体長は5.5～７㎜で、カミキリムシでは小型である。体色は黒色で艶があり、上翅は短く退化し、体形は細長い。オスの触角は体長を少し超える程度である。

国内分布　本州、佐渡島。

県内分布　白山市、能美市、川北町（以上、手取川下流部）、白山市（旧白峰村：手取川上流部）。手取川上流部での個体数は少ない。

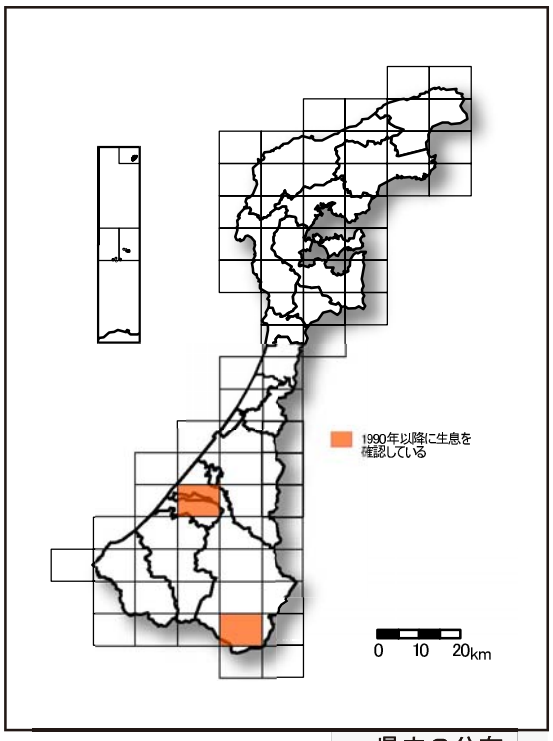
生　態　年１化で、幼虫は手取川河川敷に生えているアキグミの枯れ枝を食し、枯れ枝の中で蛹越冬する。標高の低い場所では４月～５月上旬に、標高の高い場所では５月中旬～６月上旬に出現する。手取川河川域から離れた地域での記録は確認されていない。

生息地の条件　大きな河川の河川敷で、アキグミの群生地があることが重要である。

生存の危機　アキグミの生育する不安定な河川敷に適応した本種であるが、近年、下流部の河川敷の開発や公園化の進行、河川敷内の大規模な土木工事により、生息域であるアキグミ群落が縮小し、生息環境が著しく悪化している。（A）

参考文献　井村正行 1998. コウチュウ目カミキリムシ科. 石川県の昆虫：197-217. 石川県自然保護課.

写真提供者：富沢章



県内の分布

オニホソコバネカミキリ

Necydalis gigantea gigantea Kano

コウチュウ目カミキリムシ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類
国カテゴリー	なし

選定理由
県内における、採集例は２例ときわめて少ない。また、全国的にみても産地が少なく、近年、特に個体数の減少が著しい。

形　態
体長は30～40㎜。上翅は退化し短く、体形は細長く、体色は黒く、触角と腹部の基部、脚（後脚の一部を除く）は黄褐色である。前胸背の縁に金色の微毛を有し、半透明の下翅は露出する。触角の長さは、オスで腹部中央付近までで短めである。止まっている時や飛んでいる姿は、大型のヒメバチと似ていて、それに擬態していると思われる。

国内分布
北海道、本州、四国、九州。

県内分布
白山市。

生　態
成虫は７～８月に現れ、訪花することも知られている。一般に、幼虫はクワの古木の枯死部を食することが知られている。本県ではトチノキの樹洞で産卵している個体と、樹洞から飛びたった個体の２頭が採集されている。

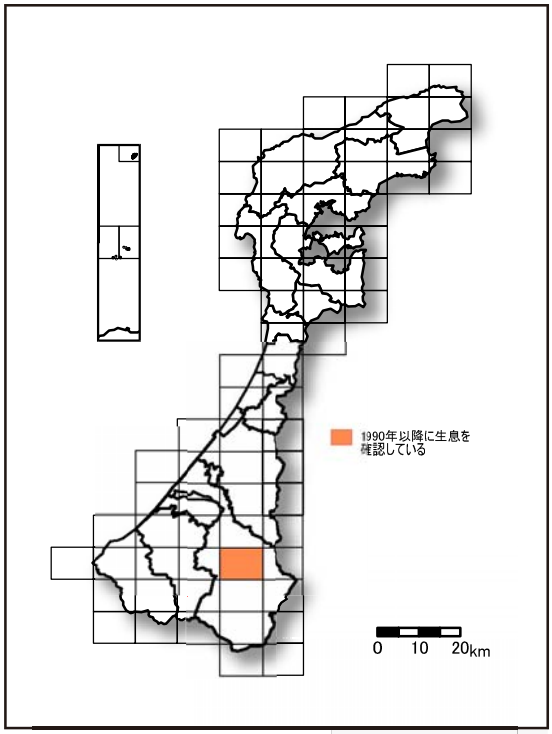
生息地の条件
本種はクワ、ケヤキ、トチなどの大きな古木の枯死部を利用することから、大木の残る豊かな森林の存在が重要である。

生存の危機
今後、伐採や林道建設により、樹洞のある大木が残る森林が破壊される可能性が高く、生息地の森林保全が必要である。

特記事項
屋久島には、本種の別亜種が分布する。（A）

参考文献
井村正行 1998. コウチュウ目カミキリムシ科. 石川県の昆虫：197-217. 石川県自然保護課.
井村正行 2001. 石川県におけるオニホソコバネカミキリの採集報告. とっくりばち, （68）：26.

標本提供者：井村正行



県内の分布

トホシカミキリ

Saperda alberti Plavistchikov

コウチュウ目カミキリムシ科

石川県カテゴリー　絶滅危惧Ⅱ類

国カテゴリー　なし

選定理由　本州では稀な種で、本県が西限になると思われる。本県では１例の記録があるのみである。

形　態　体長は13～20㎜。体形はやや細く平行で、前胸背板に４個、上翅に５対の黒紋を持つ。上翅側縁は黒く、体全体が黄褐色の微毛におおわれる。触角は、オスで体長を少し超える。

国内分布　北海道、本州、四国、九州。

県内分布　白山市白山。

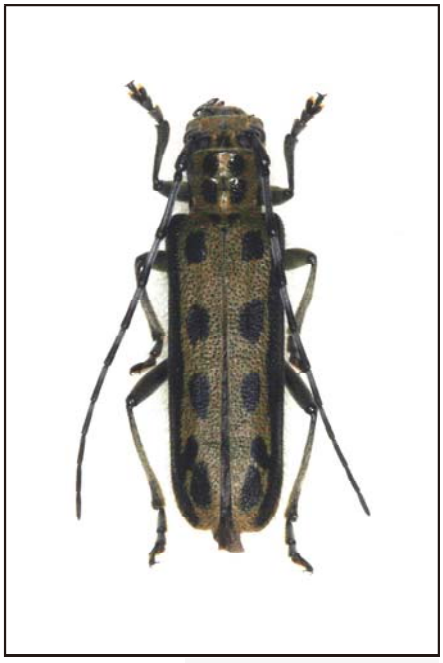
生　態　成虫は、６～７月にブナ帯のヤナギ類の新しい伐採木や倒木に集まる。幼虫はその樹皮下部分を食する。

生息地の条件　幼虫は比較的太い材を食するため、ブナ帯でヤナギ類の大木の林があることが重要である。

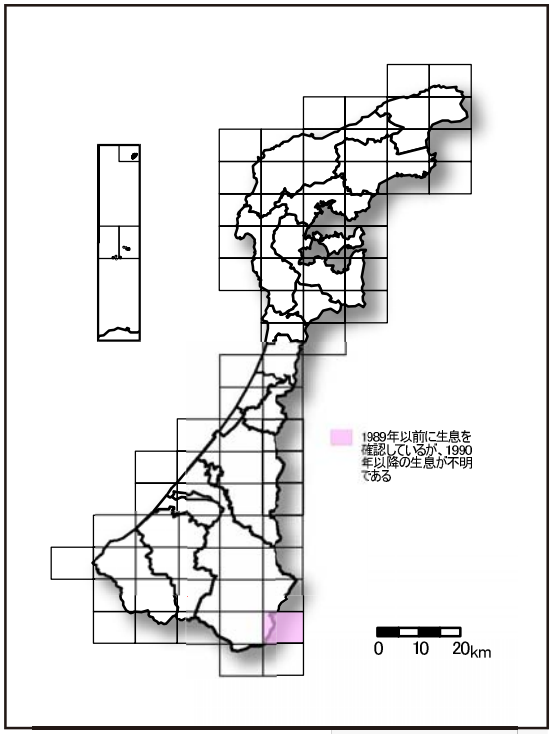
生存の危機　生息地が白山国立公園内にあることから、環境破壊による危険はないと思われる。（A）

特記事項　本県唯一の記録は1969年７月22日である。今後、白山山系における調査が必要である。

参考文献　井村正行 1998. コウチュウ目カミキリムシ科. 石川県の昆虫：197-217. 石川県自然保護課.



標本提供者：野中勝



県内の分布

オオルリハムシ

Chrysolina virgata (Motschulsky)

コウチュウ目ハムシ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類
国カテゴリー	なし

選定理由
不安定な水辺環境に生息し、本県の生息地は能登地域に限られ、産地は局地的である。

形　態
体長は９～14㎜。ハムシ科では大型で、楕円形のずんぐりした体形である。体色は赤褐色の金属光沢ないし、橙色の弱い金属光沢で、外縁は帯状に緑の金属光沢を有する。

国内分布
本州。

県内分布
七尾市（旧中島町）以北の能登地域。

生　態
成虫は５月から10月まで見られ、ため池の岸辺や廃田などの湿地環境に生育するシロネ類の葉を食する。幼虫もシロネ類を食する。

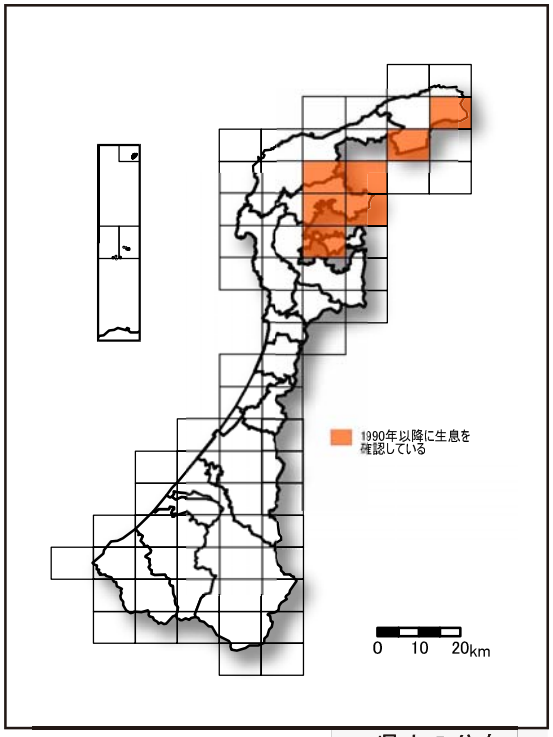
生息地の条件
シロネ類の群落が生育する湿地環境。

生存の危機
生息環境が湿地や池の岸辺、廃田と不安定なため、開発等の環境改変で容易に消滅してしまう。現在の能登空港周辺にあった生息地は、空港建設に伴う周辺の埋め立てや工事、ほ場整備のためにすべて消滅した。（A, B）

特記事項
シロネ類は県内全域で見られるが、奥能登地域以外の生息地は見つかっていない。

参考文献
高羽正治 1998. コウチュウ目ハムシ科. 石川県の昆虫：217–232. 石川県自然保護課.

写真提供者：富沢章



県内の分布

タカチホヒラタタマバチ

Ibalia jakowlewi Yasumatsu

ハチ目ヒラタタマバチ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類
国カテゴリー	なし

選定理由 現在のところ、生息地が局限されている。

形　態 腹部が縦に扁平であり、一見して他のタマバチ類と区別できる。

国内分布 石川県、京都府、福岡県において確認記録がある。

県内分布 輪島市猿山岬が唯一の生息地である。

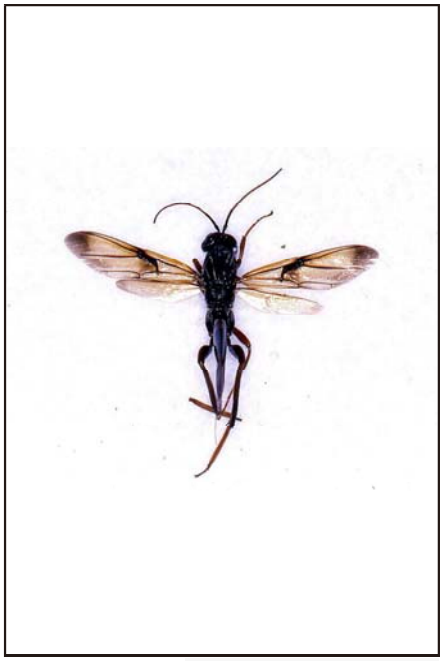
生　態 エノキの枯れ枝から採集された。ヒラアシキバチに寄生するものと思われるが、詳しい生態については不明である。

生息地の条件 猿山岬でしか確認されておらず、不明である。

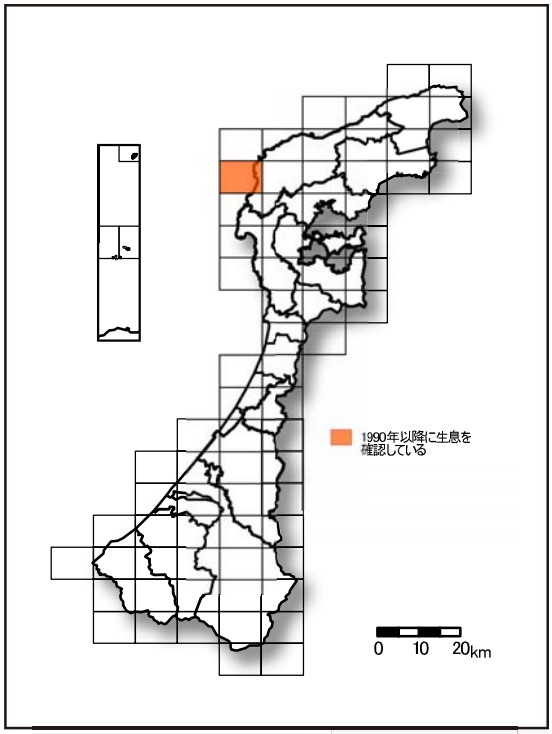
生存の危機 現在のところ、生存を危うくするような条件はないと思われる。 (A)

参考文献

Yasumatsu, K. 1937. Ibalinae of Nippon (Hym., Cynipidae). Ins. Mats., 12:13–18, p1. 1.
富樫一次 1999. タカチホヒラタタマバチ及びモンキアシブトコバチの新産地. 福井虫報, (25) :23.



標本提供者:富樫一次



県内の分布

ハイイロクモバチ

Pompilus cinereus (Fabricius)

ハチ目クモバチ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類
国カテゴリー	なし

選定理由

海岸砂丘地に生息するが、生息地は限定される。護岸工事や海岸後背地の開発により、生息環境が悪化している。

形　態

体長はオス４～7.5㎜、メス５～14㎜である。体は黒色をしており、体には灰白色の微毛が密生する。アオスジクモバチに似るが、各肢脛節の距が乳白色であること、メスの前肢付節には櫛歯状の刺列が発達していることなどから区別できる。別名、ナミコナフキベッコウ。

国内分布

本州、沖縄、八重山諸島。

県内分布

加賀市塩屋海岸、小松市安宅、能美市小舞子、白山市倉部、羽咋市一宮海岸、志賀町大島海岸で記録があるが、一部の海浜では、護岸工事により近年、見られなくなった。

生　態

比較的自然に恵まれた海浜植物帯に生息している。徘徊性のクモを狩り、砂中に穴を掘り産卵する。営巣は海浜植物群落内およびその周辺と思われる。

生息地の条件

本種のエサとなるクモやクモのエサとなる小昆虫類が生息できる海浜植物群落の多い砂丘地の存在が重要である。

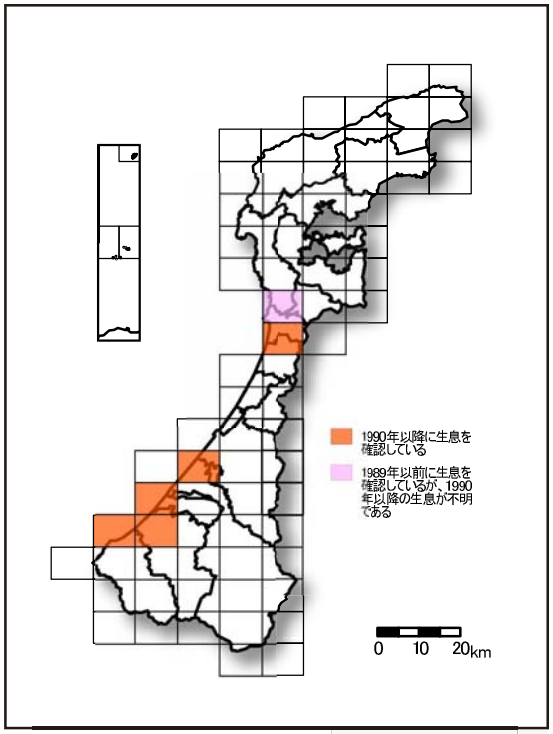
生存の危機

海岸浸食により砂丘地が狭くなったり、護岸工事により海浜植物群落周辺の自然環境が消滅すると本種は生存できなくなる。現に、小松市や能美市、羽咋市においては、護岸工事により海浜植物帯が破壊され、本種が確認できなくなった所がある。護岸工事の際には、海浜植物帯を破壊しないようにする配慮が必要である。（A）

参考文献

富樫一次 1994. 石川県産ベッコウバチ類について　福井虫報, (15) : 73-76.
富樫一次 1997. 石川県の海浜昆虫相（第１報）福井虫報, (20) : 35-40.
平嶋義宏ほか 2008. 新訂 原色昆虫大図鑑 第Ⅲ巻 : 570. 北隆館. 東京.

写真提供者：富沢章



県内の分布

アサマシジミ

Lycaeides subsolanus yarigadakeanus (Matsumura)

チョウ目シジミチョウ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類
国カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類

選定理由

分布は局地的で生息地は局限され、全国的に減少している。

形　態

開張30㎜程度の小型種。オスの翅表は灰青色、裏面は灰白色で前後翅外縁には橙色帯がある。メスの翅表は黒褐色で前後翅外縁に橙色斑があり、裏面の地色はオスより茶色味が強い。

国内分布

北海道と本州の関東、中部地方の山地のみに分布し、長野県には生息地が多い。石川県は分布の西限になっている。

県内分布

尾添川水系の、蛇谷、中の川、丸石谷に生息地が多く、白山スーパー林道三方岩岳駐車場から北方へ伸びる稜線上には、見越山に至るまで点々と記録がある。

生　態

ナンテンハギやイワオウギを食草とし、河原や畑跡、岩棚、ガレ場などに生息している。年１回の発生で、６月中頃から飛びはじめ、高地や残雪の多い渓谷の河原では、８月中頃でも見られる。発生は残雪の影響を大きく受け、同一産地であっても毎年同じ時期に発生するとは限らない。

生息地の条件

主な生息地は、ナンテンハギやイワオウギが生える河川に沿った河原や岩棚、ガレ場で、時にイワオウギが生える尾根部のガレ場でも見られる。

生存の危機

渓谷域の河原は狭く小さいが、道路や公園、駐車場などに真っ先に開発される場所である。残された河原も治山工事によって安定した結果、遷移が進み食草が見られなくなった地域が増えている。人間活動がおよばない奥山においては、生息環境は保たれている。

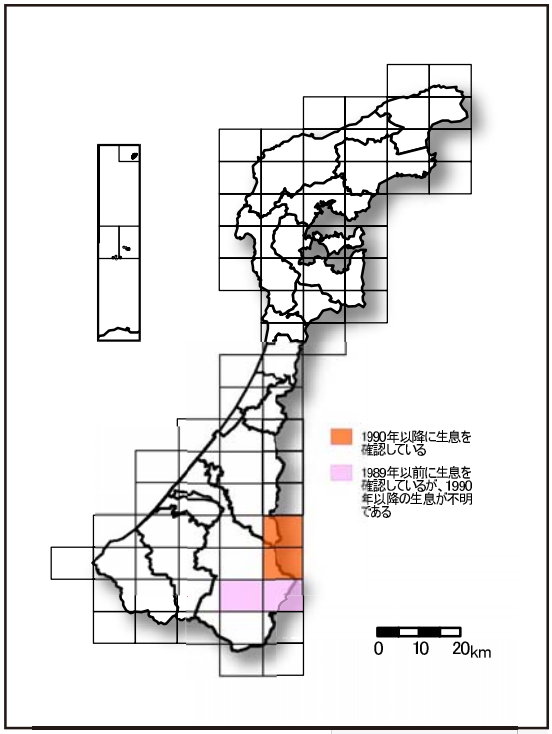
特記事項

いずれの生息地も隔離され個体群も小さいので、ヤリガタケシジミ、トガクシシジミ、シロウマシジミなど、それぞれの生息地を冠した名称が存在するほど地理的変異に富んでいる。（A）

参考文献

福田晴夫ほか 1984. アサマシジミ. 原色日本蝶類生態図鑑（Ⅲ）: 323-327. 保育社. 大阪.
松井正人 1998. 蝶類. 石川県の昆虫 : 342-365. 石川県自然保護課.

写真提供者：松井正人



県内の分布

ゴマシジミ

Maculinea teleius hakusanensis Fujioka

チョウ目シジミチョウ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類
国カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類

選定理由

露岩地に生えるカライトソウを食草とし、幼虫期にアリと共生するため、生息環境は限定され生息地は局限される。

形　態

開張30～40㎜の小型種。オスの翅表は黒褐色に薄く藤色を帯び、裏面は淡い褐色に黒色斑が散らばる。メスはオスに似るが藤色を欠く。

国内分布

北海道、本州、九州に分布し、本州では、青森県と岩手県北部、関東・中部地方、中国地方の３地域に分布する。

県内分布

白山周辺の大長山・赤兎山周辺、砂御前山周辺、白山北方稜線の妙法山から奈良岳・見越山周辺、丸石谷など、概ね標高1,000m以上の露岩地に生息する。現在のところ山道沿いや沢沿いしか調査されておらず、分布の実態は良くわかっていない。

生　態

年１回７月下旬から８月中旬に発生する。若齢幼虫は、カライトソウの花穂を食べて育ち、後にクシケアリ類によって巣中に運ばれる。アリは幼虫の出す液をなめ、幼虫はアリの幼虫を食べて成長する。蛹化、羽化ともにアリの巣中で行われ、翅が伸びきらないうちに巣からはい出し、翅を伸ばす。

生息地の条件

標高は概ね1,000m以上で、カライトソウが生える露岩地を生息場所とするが、幼虫期にアリと共生するため、特殊な生息環境を必要とする。

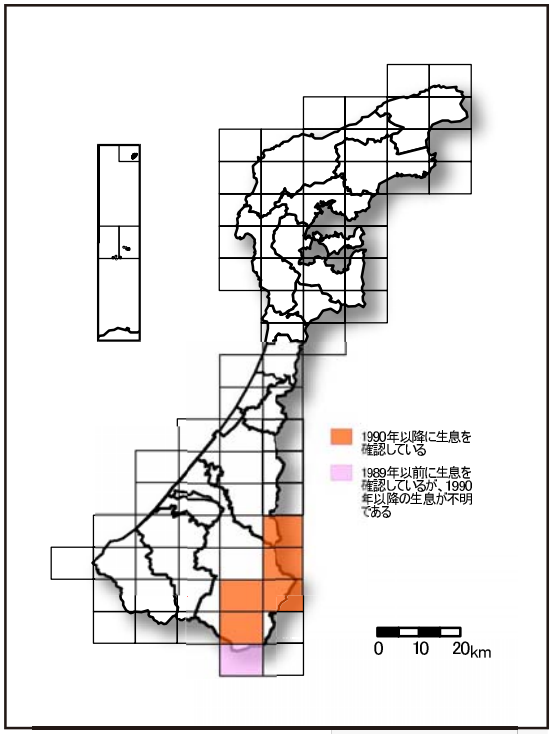
生存の危機

生息地は、標高1,000m以上の露岩地であり、人間活動があまり活発に行われていない地域である。また、判明している生息地も山道沿いや沢沿いなどわずかであり、調査が進めば新たな生息地が発見される可能性は高い。生息地は小さくとも広い範囲に散らばっており、大きな破壊が進むおそれはないと思われるが、狭い生息地は山岳道路の開設などで、簡単に消滅してしまう。（A）

参考文献

福田晴夫ほか 1984. ゴマシジミ. 原色日本蝶類生態図鑑（Ⅲ）：262-266. 保育社. 大阪.

写真提供者：松井正人



県内の分布

ヒメシジミ

Plebejus argus micrargus (Butler)

チョウ目シジミチョウ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類
国カテゴリー	準絶滅危惧

選定理由

全国的に減少し、県内で観察される場所は生息基盤が不安定なうえ範囲が狭い。

形　態

開張30㎜程度の小型種。オスの翅表は青色で後翅外縁には黒斑が並ぶ。メスの翅表は黒褐色で後翅外縁に橙色の斑紋があり、この斑紋は前翅外縁に出ることもある。オスの裏面は灰白色、メスの裏面は淡い褐色で、ともに前後翅外縁に橙色の帯がある。

国内分布

北海道、本州、九州に分布し、関東地方北部山地から中部地方にかけては分布が広く、北アルプスから上信越高原国立公園一帯にかけては生息密度が高い。

県内分布

白山周辺の尾添川流域と柳谷流域の渓流に沿った河原から稀に記録されているが、同じ場所で連年にわたって記録されたことはない。山岳渓流域を生息地とするため、調査は不十分で、分布の実態は良くわかっていない。

生　態

年１回の発生で、６月下旬から７月下旬かけて、日当たりの良い渓流に沿った河原で観察されている。飛翔は緩やかで、草むらの低いところを飛び交い、オスは好んで湿地で吸水する。幼虫の食性は広くキク科、マメ科、バラ科、ヤナギ科など数十種の植物が全国で知られているが、本県では、マメ科のハギの仲間１種が知られているだけである。

生息地の条件

主な食草はアザミ類、ヨモギ類、イタドリ類、イワオウギなどであり、これらが生育する河原が残されていることが重要である。

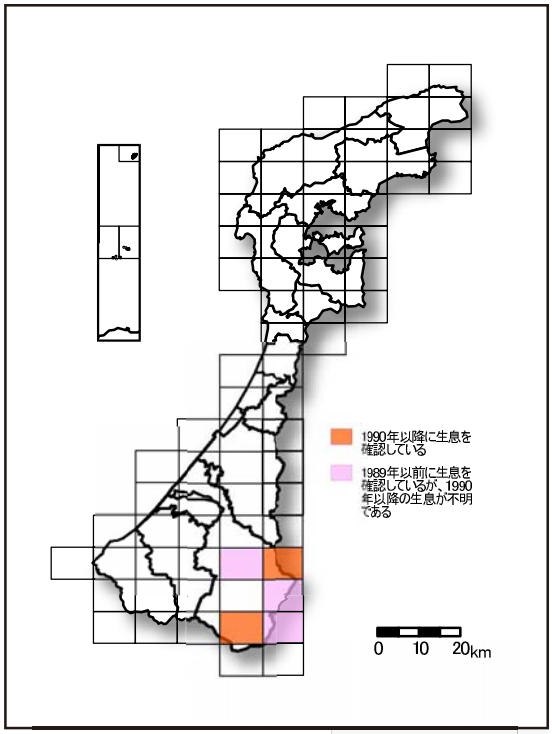
生存の危機

渓流に沿った河原は狭く小さいが、道路や公園、駐車場などに真っ先に開発される場所である。また、河原は不安定で小規模な出水で消失したり、逆に遷移が進んでススキ原になってしまうこともある。（A）

参考文献

福田晴夫ほか 1984. ヒメシジミ. 原色日本蝶類生態図鑑（Ⅲ）：320-323. 保育社. 大阪.
松井正人 1998. 蝶類. 石川県の昆虫 ： 342-365. 石川県自然保護課.

写真提供者：松井正人



県内の分布

ハマゴウノメイガ

Herpetogramma albipennis Inoue

チョウ目ツトガ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類
国カテゴリー	なし

選定理由

土木工事等によって海浜植物帯が破壊され、本種の食草であるハマゴウが消滅し、生息地が激減している。特に、小松市において生息地の減少が著しい。

形　態

開張18㎜前後の小型のガである。翅の色は白色で、前後翅ともに数本の褐色の横線が走っている。

国内分布

これまでに石川県、福井県、和歌山県、伊豆大島、佐賀県、熊本県から得られている。

県内分布

加賀市、小松市、能美市、白山市、金沢市の海岸部に生息しているが、内灘町以北には生息していない。

生　態

成虫は７月下旬から８月に出現し、ハマゴウ群落から離れることはない。幼虫はハマゴウの雄しべ、雌しべ、花弁を食べ、７月中旬から９月上旬まで見られる。老熟幼虫は、地下部のハマゴウの匍匐茎に付着させたマユの中で越冬する。

生息地の条件

砂浜海岸において、食草であるハマゴウ群落がある程度まとまって存在していることが重要である。護岸工事がされても、まとまったハマゴウ群落が帯状に残っていれば、本種の生息は可能である。

生存の危機

砂浜海岸は護岸工事や土地造成の影響を受け、ハマゴウ群落のある海浜植物帯が消滅あるいは狭小化している所が多く、本種は確実に減少している。特に小松市において減少が著しく、安宅から安宅新の生息地は、過去数年の護岸工事でほぼ消滅した。海浜植物を保全しつつ土木工事を実施することが重要である。また、砂浜への車の乗り入れも本種の生息を脅かしている。（A）

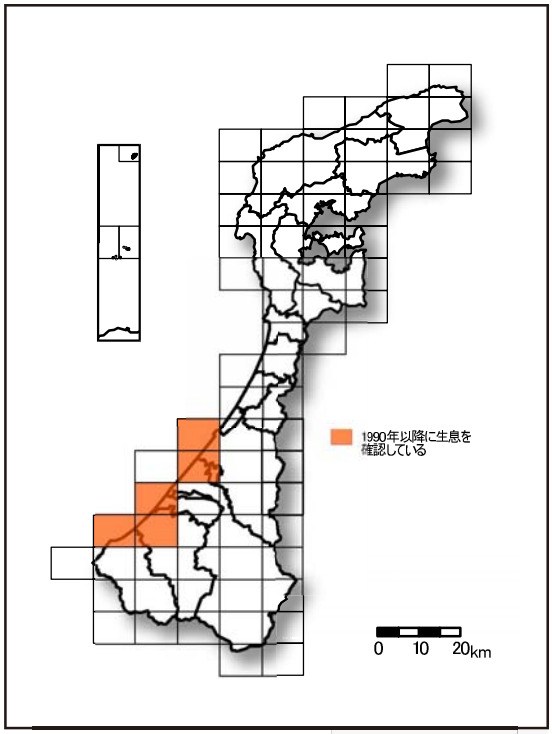
特記事項

石川県産がholotypeに指定されている。

参考文献

Inoue, H. 2000. A new species of the genus *Herpetogramma* Lederer（Pyraustinae Crambidae）from Japan. Trans. lepid. Japan 51(4) : 316–318.
富沢　章 2000. 石川県におけるハマゴウノメイガの分布と生態. 蛾類通信, （211） : 208–212.

写真提供者：富沢章



県内の分布

ハマヤガ

Agrotis ripae albovenosa Tschetverikow

チョウ目ヤガ科

石川県カテゴリー　絶滅危惧Ⅱ類

国カテゴリー　なし

選定理由　全国的な希少種で、生息地が自然環境に恵まれた砂浜海岸に限定される。本県の生息地は加賀海岸のみである。

形　態　開張32㎜の中型のガである。前翅は一様に淡褐色であるが、後翅はさらに淡色である。

国内分布　これまでに新潟県の数箇所および秋田県、石川県で各１箇所が知られているに過ぎない。

県内分布　2006年に加賀市塩屋海岸において初めて発見された。

生　態　成虫は８月下旬から９月に出現する。幼虫の食草はカワラヨモギで晩秋までには老熟し、老熟幼虫のまま砂の中で越冬する。老熟幼虫は翌年の７月に蛹化する。

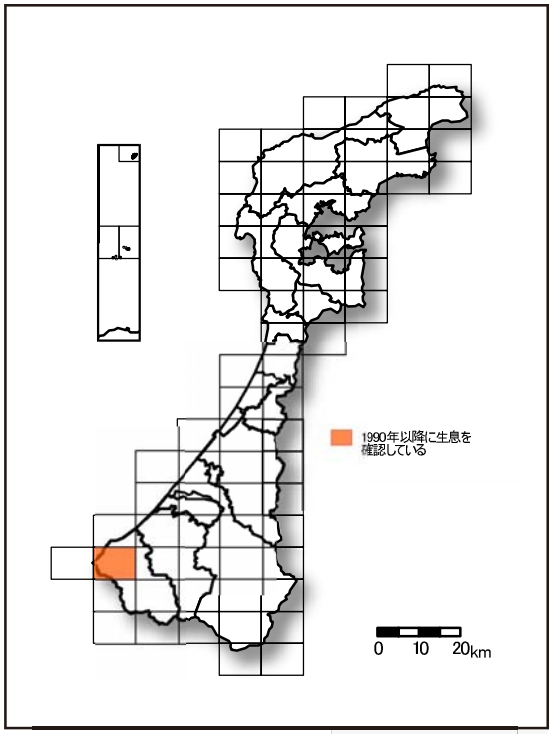
生息地の条件　海浜性のガで、既知産地はすべて砂浜海岸や海岸後背地、河口付近である。海浜植生が豊富で、カワラヨモギ群落が発達していることが重要である。

生存の危機　砂浜海岸の植生破壊は本種を絶滅させることとなる。既知産地の塩屋海岸は良好な自然環境が保たれているが、他の砂浜海岸では護岸工事等による海浜植生の破壊が進んでいる。護岸工事を実施する場合、海浜植生に配慮すべきである。（A）

特記事項　小松市や能登半島南部における本種の調査が必要である。

参考文献
田中政行ほか 1992. 秋田県未記録のヤガ. 誘蛾燈, （130）：99-101.
富沢　章 2008. 加賀市塩屋海岸の蛾類. 誘蛾燈, （192）：57-67.

標本提供者：富沢章



県内の分布

カギモンキリガ

Orthosia nigrormaculata (Hone)

チョウ目ヤガ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類
国カテゴリー	なし

選定理由　国内における生息地が限定され、個体数が少ない。

形　態　開張30㎜前後の中型のガである。前翅は淡褐色で後翅は黒褐色。前翅表面に特徴的なＣ字状の黒い紋がある。

国内分布　本州、四国、九州のほか、屋久島に分布する。

県内分布　1997年４月に小松市上荒屋で１頭が得られているに過ぎない。

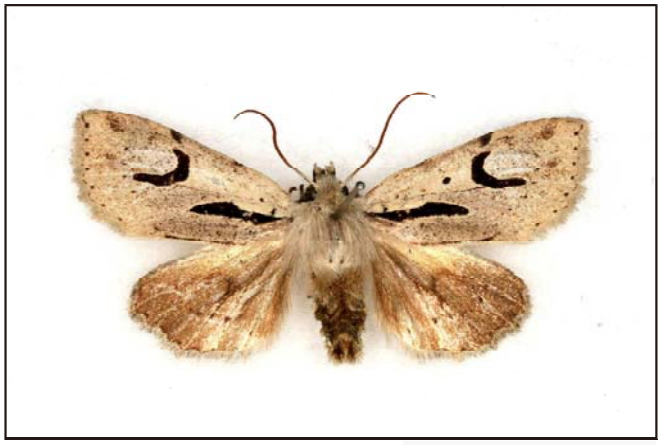
生　態　常緑樹林にすむ暖地性の蛾で、幼虫の食草はツルグミやナツグミである。蛹越冬で、成虫は４月から５月の春期にのみ現れる。

生息地の条件　食草であるツルグミの生育していることが重要であるが、本県での生育地は多くはない。

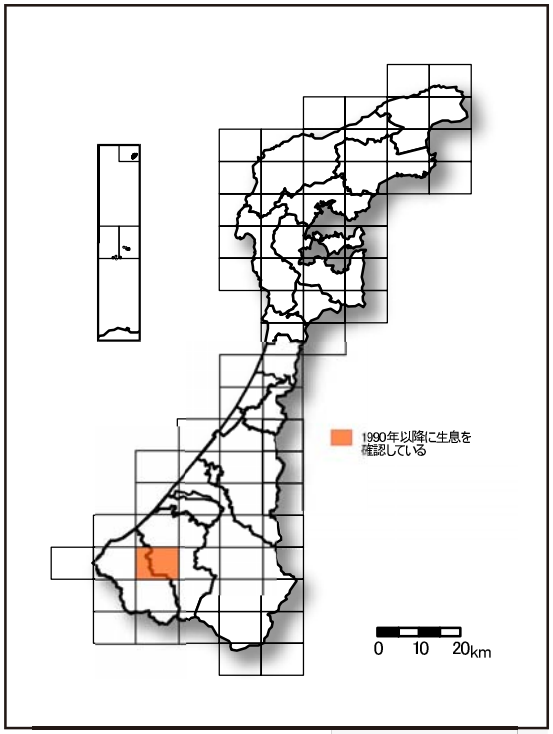
生存の危機　採集地近くでは、宅地化等の開発が進みつつあり、生息地の破壊が懸念される。（A, B）

特記事項　採集地周辺の分布調査が急務である。

参考文献　富沢　章 1998. 蛾類. 石川県の昆虫：366-486. 石川県自然保護課.



標本提供者：富沢章



県内の分布

モートンイトトンボ

Mortonagrion selenion (Ris)

トンボ目イトトンボ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	準絶滅危惧

選定理由
以前は県内の平地や丘陵の浅い池沼、水田などに生息していたが、近年は激減し、まれにしか見られない。

形　態
腹長17～24㎜、後翅長11～16㎜の小さいイトトンボ。成熟オスは体の前半が黄緑の地に黒紋、後半は橙赤色である。未熟なメスは橙色で、成熟すると緑化する。

国内分布
北海道南端～九州南部。

県内分布
小松市那谷、金沢市（夕日寺、榎尾）、七尾市能登島町須曽など。

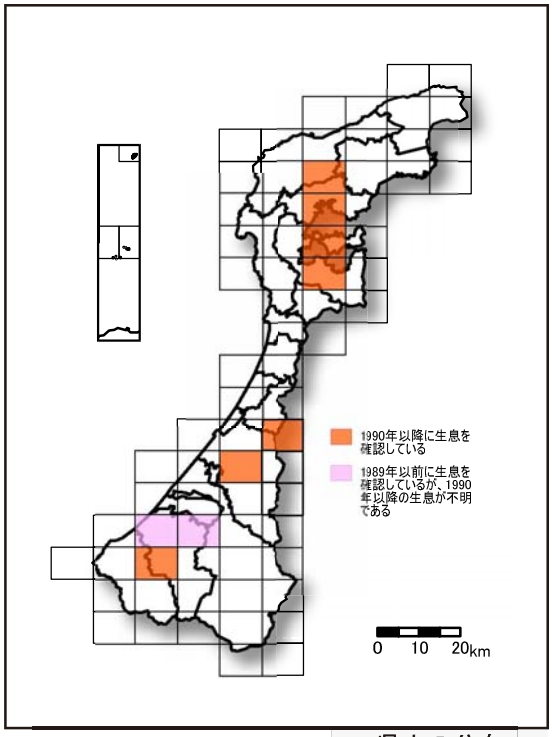
生　態
浅い湿原の水たまりに育ち、初夏に丈の低い抽水植物の間などで活動しているが、目立たない。

生息地の条件
丈の低い抽水植物の豊かな浅い水たまりや沼地。近年は一部の湿地化した休耕田で発見される。

生存の危機
平野の水田地帯では乾田化や農薬の使用で絶滅し、丘陵間の休耕田は放棄されて乾燥し、草原となって生息地が消失する傾向にある。（A, B, C）

参考文献
武藤　明 2006. 石川県の蜻蛉目. とっくりばち, (74) : 7-19.

写真提供者：西原昇吾



県内の分布

オツネントンボ

トンボ目アオイトトンボ科

石川県カテゴリー　準絶滅危惧

国カテゴリー　なし

Sympecma paedisca paedisca (Eversmann)

選定理由

生息地、個体数とも非常に少なく、開発や水質汚染の影響も受けやすい。

形　態

腹長26～31㎜、後翅長20～24㎜のイトトンボ。越冬後は、複眼が青色に変化する。体は淡褐色で、青銅色の斑紋がある。

国内分布

北海道から九州北部まで分布するが、中部以北に多い。福井県では確実な記録がなく、富山県でも極めてまれである。

県内分布

小松市安宅新、白山市後高山、穴水町乙ヶ崎、能登町小木の記録があり、1998年には羽咋市大川町の沼で３頭を確認した。近年は能登半島の多くの地点で発見されている。

生　態

平地～丘陵の抽水植物の茂る池沼に生息し、８～９月に羽化する。未熟虫は林野に分散して摂食し、日当たりのよい疎林などで成虫のまま越冬する。春になると成熟し、池沼に現われて生殖活動を行なう。卵は、連結または単独で植物組織内に産みつけられる。

生息地の条件

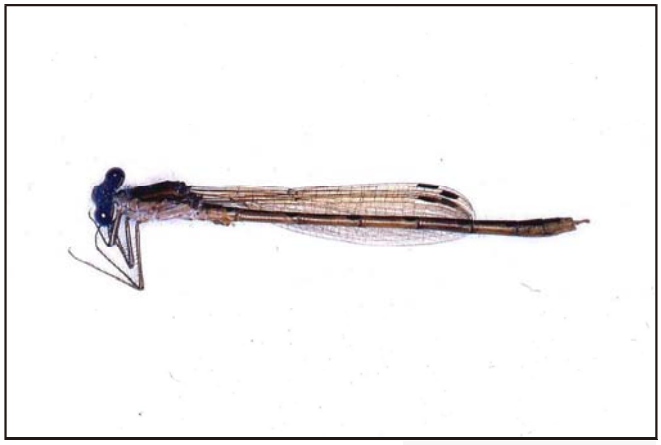
平地や丘陵、沿岸平野のヨシやマコモの多い池沼で、強力な捕食者がおらず、汚染がなく、付近に樹林があること。

生存の危機

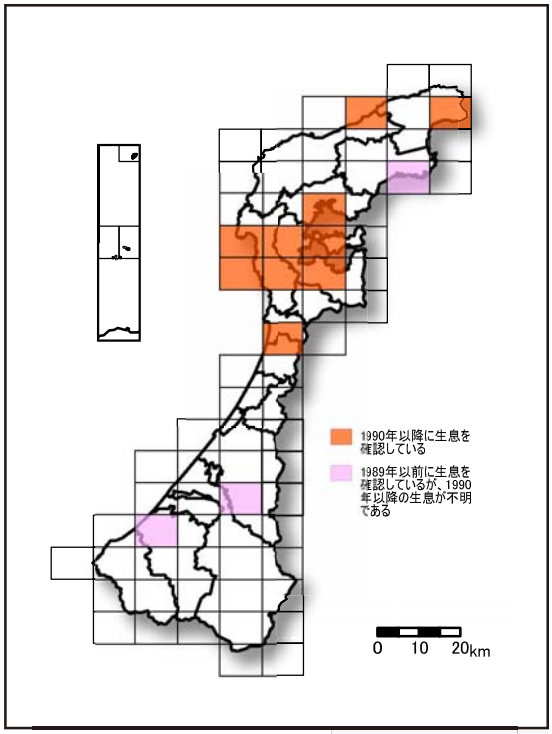
もともと県内ではまれで、生息する池沼が沿岸平野にあるため、埋めたてられることが多い。ブラックバスやブルーギルの移入、廃棄物投入のおそれもある。池沼に植物が進入し乾燥したり、サギなどの繁殖により汚染がもたらされる場合もあり得る。樹林の伐採や、道路建設なども間接的に悪影響を及ぼす。（A, B）

参考文献

武藤　明 1998. 石川・福井の1998年度の蜻蛉資料. Ｔｏｍｂｏ, 41：33-36.
武藤　明 2006. 石川県の蜻蛉目. とっくりばち, (74)：7-19.



標本提供者：武藤明



県内の分布

ヒラサナエ

Davidius moiwanus taruii Asahina et Inoue

トンボ目サナエトンボ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由

産地が限定され、個体数も多くないうえに、開発や伐採による影響が危惧される。

形　態

腹長22～32㎜、後翅長21～28㎜の小型のサナエ。黄色の地に黒条があり、モイワサナエやヒロシマサナエに類似するが、オスは尾部上付器、メスは後頭孔縁の形で区別される。

国内分布

富山県高岡市郊外から小矢部市の低山帯、福井県、滋賀県、京都府、兵庫県、岡山県にわたり産地が点在するが、多くない。

県内分布

南加賀では記録がないが、金沢市（薬師、宮野、小池）に生息する。能登半島では志賀町（田原、尊保）、中能登町末坂、輪島市三井、穴水町細野、能登町（柏木、中斉）、珠洲市上戸など、各地から知られている。

生　態

低山～丘陵の山間の陽地の小流や、湿原の細流の泥底に幼虫が育つ。４月下旬から５月初めに岸辺の草の葉や茎にとり付いて羽化し、成虫は５～６月に活動する。日の当たる流れの傍の植物に静止したり、少し飛んで移動したりしている。卵は空中で産下され、水際の泥土やコケに落ちることが多い。

生息地の条件

幼虫が育つためには、低山帯の、開けた陽地のゆるく流れる泥～砂泥底の小川や、湿原の細流が必要で、廃田の用水溝に見られる場合もある。周囲には、成虫の摂食や休止のための樹林や草原があることも要件。

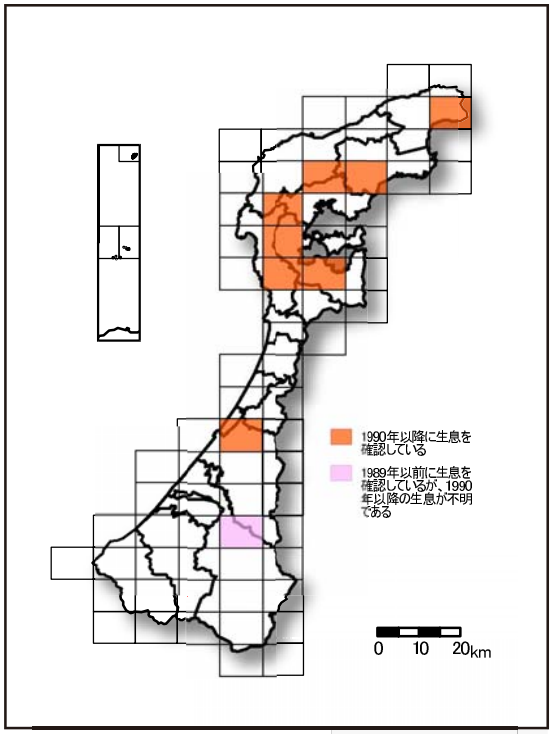
生存の危機

森林の伐採や道路の建設のため、直接的ないし間接的に小流や溝が消失したり、出水時の泥で埋まったり、乾燥化するなどの危険性が高い。白山市口直海の既知産地は、ダム建設により水没し、能登でも開発の影響が危惧される。植林されたスギなどが成長して細流が暗くなると、生息に不適となる。（A）

参考文献

江口元章 1991. 能登半島のヒラサナエ. Ｔｏｍｂｏ, 34 : 33-35.
武藤　明 2007. 石川県の蜻蛉に関する最近の知見. とっくりばち, (75) : 24-28.

写真提供者：富沢章



県内の分布

ネアカヨシヤンマ

Aeschnophlebia anisoptera (Selys)

トンボ目ヤンマ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	準絶滅危惧

選定理由
もともと個体数も産地も多くなかったが、近年はほとんど見られない。生息地は里山にあり、開発や汚染の影響を受けやすい。

形　態
腹長48～56㎜、後翅長46～54㎜。黄褐色の地に黒条があり、他のヤンマと異なって腹部がくびれず太い棒状である（アオヤンマも形が似るが、鮮やかな緑色）。

国内分布
中部以南から九州南部まで分布するが、産地は限られる。福井県の中池見や、富山県の乱橋池などにも生息する。

県内分布
小松市（遊泉寺、蓮代寺）、津幡町（北中条、清水）、かほく市宇ノ気、中能登町芹川、七尾市（福浦、田鶴浜）、穴水町乙ヶ崎の記録があり、近年は加賀市片野、金沢市（夕日寺、俵原、榎尾）、志賀町久喜、珠洲市三崎などでも確認されている。

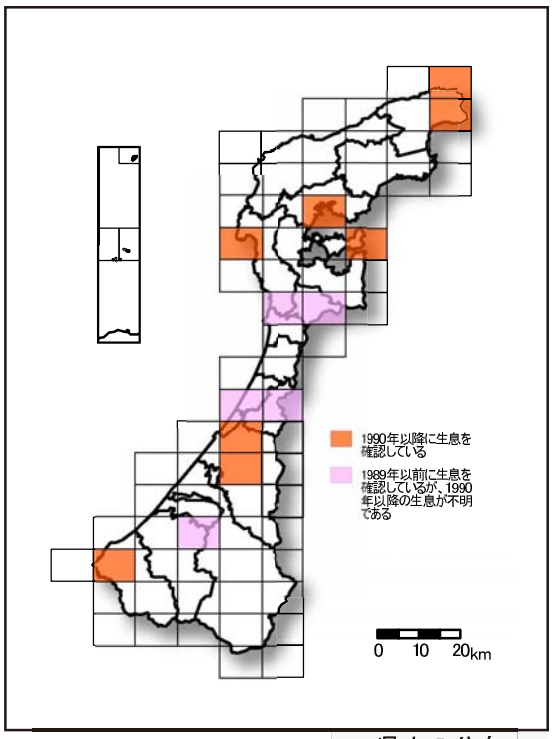
生　態
平地～丘陵のヨシやヒメガマなど抽水植物の多い池沼や湿原に育ち、６月頃に羽化する。未熟期には樹林の傍の水田の上空などを高く旋回飛翔しつつ摂食し、成熟すると夕方や早朝の薄明時に活動することが多い。メスは樹陰のある水際の泥などに、腹端をさし込むようにして産卵する。

生息地の条件
平地や里山にあって、ヨシ、ヒメガマ、マコモなどが生え、樹陰を伴うため池や休耕田。産卵のための泥土があり、下垂休止するための林、摂食空間としての林野も要件。

生存の危機
平地や里山の池沼は埋めたて、堤防のコンクリート化や防水シート張り（それに伴う水抜き工事）やブラックバス・ブルーギルの移入、廃棄物の投入、樹林の伐採、道路建設など直接的～間接的な影響が及び得る。小松市蓮代寺などの湿原も、埋めたてられた。（A, B）

参考文献
武藤　明 1998. トンボ目. 石川県の昆虫：49-57. 石川県自然保護課.
武藤　明 2006. 石川県の蜻蛉目. とっくりばち, (74) ：7-19.

標本提供者：武藤明



県内の分布

カラカネトンボ

Cordulia aenea amurensis Selys

トンボ目エゾトンボ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由

金沢市の医王山と日尾池周辺および白山市白峰地区から知られるのみで、個体数も多くなく、湿原の乾燥化による減少の恐れがある。

形　態

腹長29～33㎜、後翅長30～34㎜の金緑色の中型種。オスの尾部上付器は円筒状で、下付器背面に突起がある。後翅の肘脈室に１本の横脈があるのが特徴。

国内分布

中部以北の山地～亜高山帯に生息し、東北や北海道では低地にも見られる。福井県大野市上小池～刈込池が西限。岐阜県白鳥町村間が池が南限。

県内分布

白山市白峰の明谷川源頭付近の高層湿原と、金沢市の医王山の３つの池と、日尾池および日尾平の湿原の小池が既知産地である。

生　態

幼虫は山地の池沼や湿原に育ち、成虫は６月に活動する。未熟期には移動分散するが、成熟すると沼に現われ、オスは岸に沿って時々停飛しつつ占有飛翔を行う。メスは、岸近い水面上を低く飛びつつ、単独で打水産卵する。日尾湿原では、沼が小さいので、複数のオスが入り乱れて飛びかっていた。

生息地の条件

山地の樹林に囲まれた沼や湿原の池で、抽水植物や浮葉植物が適当に生え、開水面があり、夏季にも干上らないこと。強力な捕食者がいないこと。

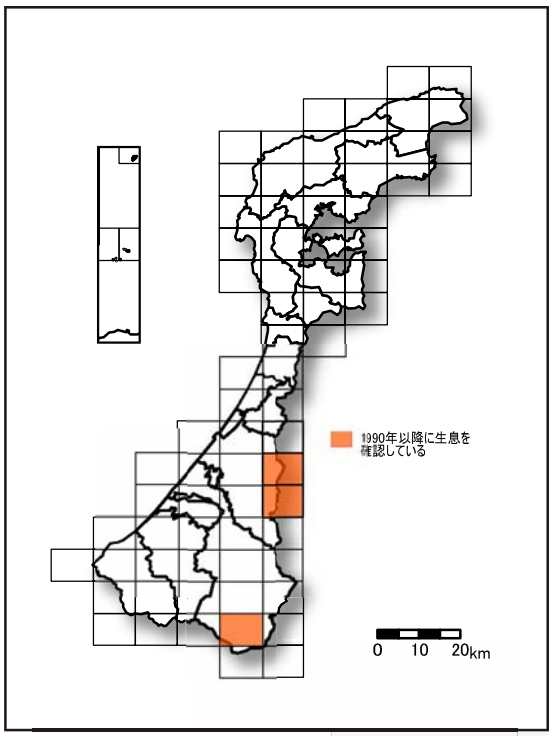
生存の危機

池沼を直接埋立てなくても、山道の建設や山林の伐採により乾燥化を起こす危険性がある。特に医王山では，堆積物で開水面が縮小し、干上りかける時もあり、個体群の小さいこともあって、継続して発生し得るか懸念される。日尾平湿原も、近年の高温化や寡雨のためか、乾燥化傾向にある。
(B, D)

参考文献

武藤　明 1998. 石川・福井のトンボ４種について. 昆虫と自然, 33（７）：38.
武藤　明 2006. 石川県の蜻蛉目. とっくりばち, (74) : 7-19.

標本提供者：武藤明



県内の分布

カオジロトンボ

Leucorrinia dubia orientalis Ris

トンボ目トンボ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由
白山連峰に生息し、分布西限にあたるが、産地が限られ、個体数も多くない。

形　態
腹長20～25㎜、後翅長25～30㎜、顔面が白く、体は黒い。成熟オスの胸部には、暗赤色の紋がある。

国内分布
北方系の種で、北海道から本州中部地方の高層湿原に生息する。

県内分布
白山市尾口地区の小桜平付近、清浄ヶ原、加越国境の赤兎山や明谷川源頭付近（西限）。

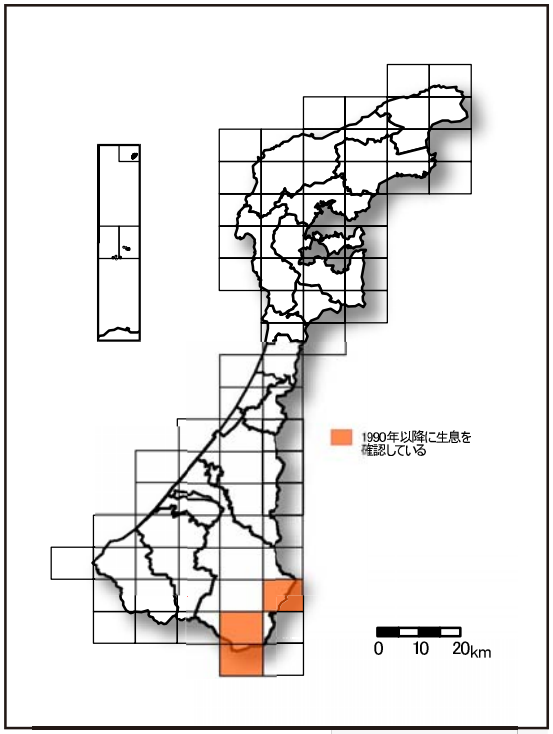
生　態
幼虫は寒冷地の池塘（ガキの田）に育ち、６月から羽化して、７月上～中旬（加越国境）から８月上～中旬（清浄ヶ原）に活動する。池塘の周辺の樹木の葉や地面に静止したり、水面上に飛来したりしている。

生息地の条件
植生の豊かな高層湿原の池塘。

生存の危機
登山道の建設や、温暖化によって池塘が消失する恐れがある。 (D)

参考文献
武藤　明 2002. 2001年～2002年４月分の昆虫資料. とっくりばち, (69) : 8-11.
武藤　明 2004. 石川県のトンボに関する知見. とっくりばち, (72) : 1-4.

写真提供者：白井伸和



県内の分布

キトンボ

Sympetrum croceolum Selys

トンボ目トンボ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由
県内の平地～低山帯のため池などに生息し、金沢付近でも珍しくなかったが、近年は産地、個体数とも著しく減少している。

形　態
腹長21～29㎜、後翅長25～32㎜。体も翅の大部分も橙黄色で頑丈な体形をしたトンボ。

国内分布
北海道、本州、四国、九州に分布するが少ない。

県内分布
加賀市、白山市相川、志賀町（久喜、田原）、輪島市門前、能登町、珠洲市。

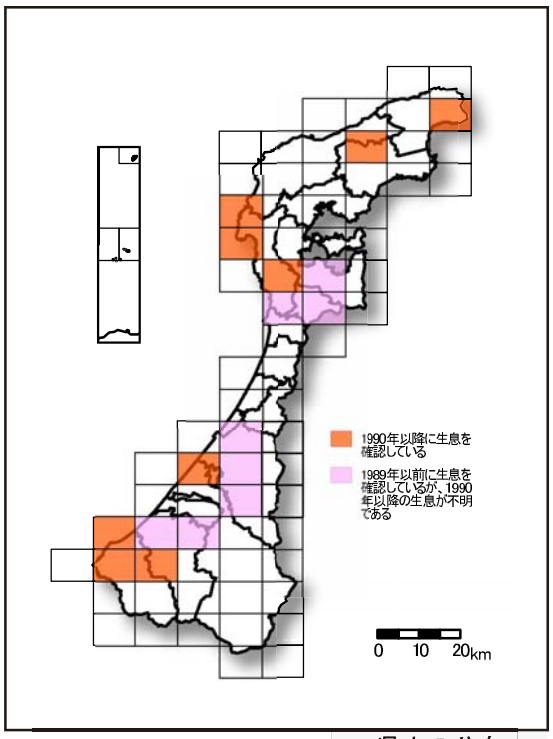
生　態
平地～丘陵の林間の池沼に育ち、７月に羽化して、成熟虫は10～11月に活動する。オスは抽水植物にとまったり、水面を飛びまわったりしているが、夕方が近づくと池から離れ、日当りの樹木に静止する。

生息地の条件
林間や山際の植生の豊かな池沼。

生存の危機
安定した古いため池がコンクリートや防水シート張りに変ったり、水抜き後に放置されたり、道路建設などで消滅する。摂食空間である林野の汚染なども影響を及ぼす。（A, B）

参考文献
武藤　明 1999. 石川県のトンボ相の変遷：1957年との比較. とっくりばち, (66)：2-7.
武藤　明 2006. 石川県の蜻蛉目. とっくりばち, (74)：7-19.

写真提供者：富沢章



県内の分布

ミネトワダカワゲラ

Scopura montana Maruyama

カワゲラ目トワダカワゲラ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由 低水温域に生息する昆虫であるため、その分布が限定されるようである。

形　態 成虫の体長は13～35㎜。体は暗褐色で、無翅の昆虫であり、水生生活をするので腹部末端に環状鰓をもつ。

国内分布 北海道、東北、関東、甲信越、北陸に分布する。

県内分布 加賀市、小松市、能美市（旧辰口町）、白山市（旧鶴来町、旧白峰村）、金沢市、宝達志水町から記録がある。

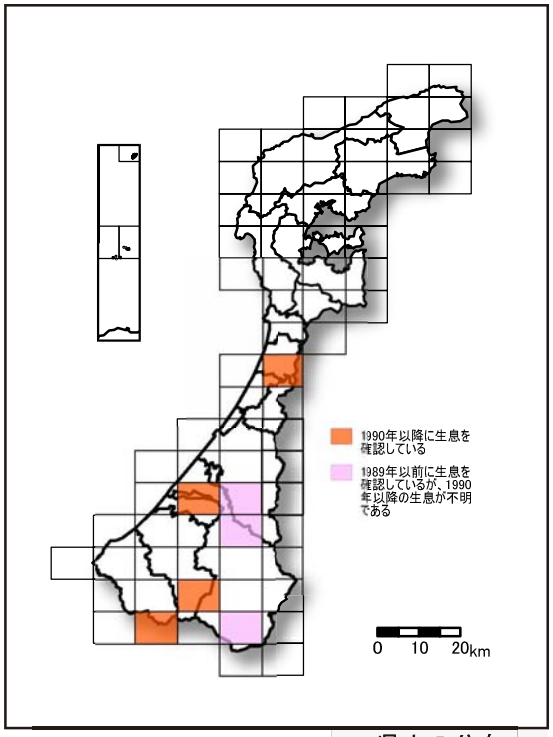
生　態 水温10℃前後の冷水域の清流に生息する、氷河期の遺存昆虫ともいわれている。

生息地の条件 清流でかつ、冷水温域が生息の条件である。

生存の危機 道路整備や洪水による渓流への土砂の流入がなされると、生存が危ぶまれる。（A）

参考文献 富樫一次 1960. 加賀白山のカワゲラ類. 生物研究（福井）, ４ : ３.

写真提供者：金山晃



県内の分布

ウスバカマキリ

Mantis religiosa (Linnaeus)

カマキリ目カマキリ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由

本種の生息する海岸草地や河川敷は、土木工事の影響を受けやすく、生息地が狭小化している。

形　態

体長は50～70㎜でメスのほうが大きい。体色は淡緑色であるが、淡褐色の個体も見られる。前脚の基部の内側に、黒色の楕円形の斑紋があるのが特徴である。

国内分布

北海道南部から南西諸島まで広く分布するが、生息地は点在していて、個体数は少ない。

県内分布

加賀市、小松市、能美市、珠洲市の海岸草地および手取川河川敷に生息している。過去には白山市の記録がある。

生　態

成虫は年に１回発生する。幼虫は６月から見られ、成虫は８月から11月にかけて出現する。幼成虫とも草地の地表に近い所に生息し、小型の昆虫類を捕食する。卵のうはやや長めの枕型で、石や木片などに産付される。成虫は夜間、灯火によく飛来する。

生息地の条件

生息地は海浜植物帯や海岸近くの草地、大きな河川敷の草地に限られるようである。本種は、丈の短い草本類がやや疎に生えている明るくて開けた環境を好む。

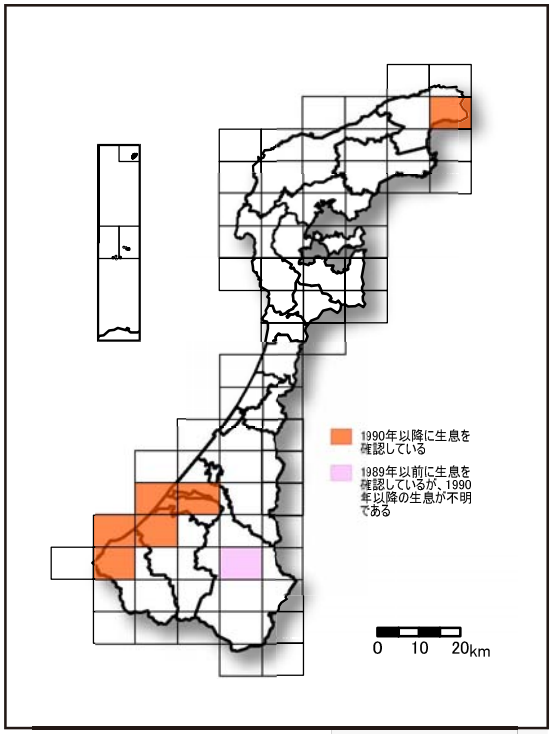
生存の危機

海岸部では、護岸工事や植林、土地造成の影響を受け、海岸草地が狭小化して生息地が悪化、消滅している所が多い。手取川河川敷では、土木工事による生息地の破壊が進んでいる。（A, B）

参考文献

富沢　章 2007. 石川県におけるウスバカマキリとヒロバネカンタンの記録. とっくりばち, (75) : 40-41.

写真提供者：富沢章



県内の分布

ハマスズ

Dianemobius csikii (Bolivar)

バッタ目コオロギ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由

全国的な希少種で、石川県においても生息地、個体数ともに少ない。自然環境に恵まれた海浜の指標種として重要であるが、土木工事により生息地が減少している。

形　態

体長が７㎜前後の小型のコオロギである。体色は、淡褐色ないし灰色で褐色の斑紋があり、砂浜の砂によく似ていて見つけにくい。脚には黒褐色の斑がある。

国内分布

本州、四国、九州から奄美諸島まで分布しているが、生息地は局地的である。

県内分布

加賀市、小松市、内灘町、志賀町の海浜において局地的に分布している。白山市では過去に旧白峰村の手取川流域で記録されている。

生　態

成虫は年に２回発生し、６月から10月に見られるといわれるが、本県では８月から10月にしか確認されていない。海浜植物の多い砂浜に生息し、日中でも砂浜上で活動している。夜間、ビィービィーと、比較的大きな声で鳴く。

生息地の条件

海浜植物が多い自然に恵まれた砂浜海岸に生息する。

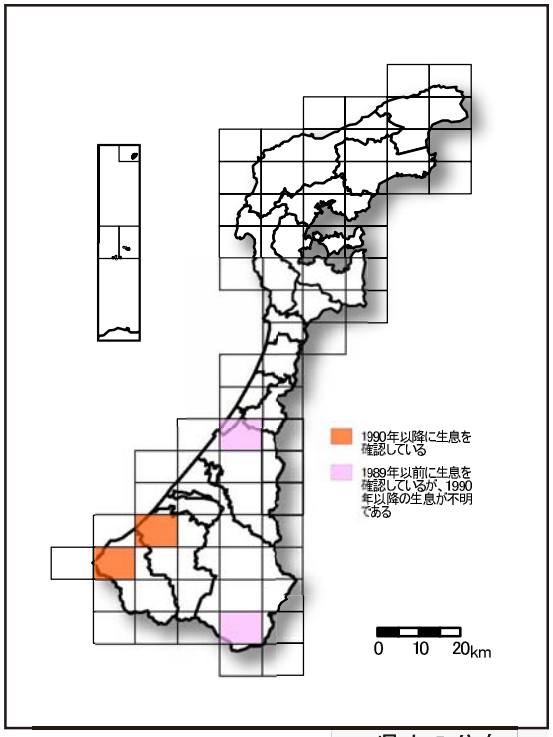
生存の危機

砂浜海岸は、護岸工事や土地造成の影響を受け、海浜植物帯が消滅あるいは狭小化している所が多く、本種は激減している。また、海浜への車の乗り入れや海岸浸食も本種の生息を脅かしている。さらに、防波堤下の個体は天候の荒れた日に波にさらわれる可能性が高い。海岸部においては、海浜植物帯に配慮した護岸工事を実施する必要がある。かつて本種は、手取川河川敷においても生息していたようであるが、河原の砂地帯が少なくなったことや土木工事の影響を受け、現在は確認されておらず、絶滅した可能性が高い。（A）

参考文献

市川顕彦ほか 2006. バッタ・コオロギ・キリギリス大図鑑. 687pp. 日本直翅学会編. 北海道大学出版会. 札幌.

写真提供者：富沢章



県内の分布

ヤマトマダラバッタ

Epacromius japonicus (Shiraki)

バッタ目バッタ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由
自然環境に恵まれた海浜の指標種として重要であるが、土木工事によって生息地が激減している。石川県においても生息地、個体数ともに少なくなりつつある。

形　態
体長は30㎜前後である。体色は淡褐色で、褐色の斑点を散布しているが、まれに緑色型も現れる。後翅の基部は淡い青色をしているのが特徴である。

国内分布
北海道、本州、四国、九州の海岸地帯に分布する。

県内分布
加賀市、小松市、内灘町、宝達志水町、珠洲市などの海岸部に分布していて、生息地によっては個体数が多い所もある。

生　態
砂浜海岸に限って生息する。卵越冬で、成虫は８月から10月にわたって見られる。地上性で、日中、砂上を活発に飛びまわっているが、体色が砂地とまぎわらしく、見つけにくい。

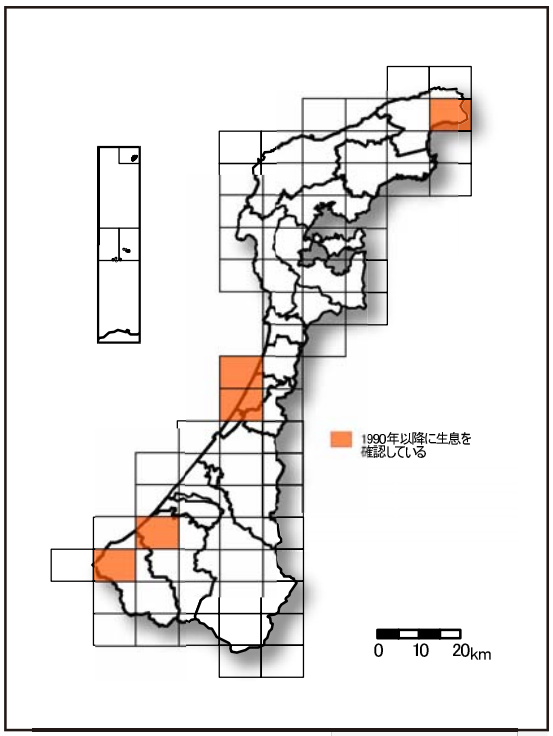
生息地の条件
海浜植物のある広い砂浜海岸が存在することが重要である。

生存の危機
砂浜海岸は、護岸工事や土地造成の影響を受け、海浜植物帯が消滅あるいは狭小化している所が多く、本種は減少している。また、砂浜への車の乗り入れや海岸浸食も本種の生息を脅かしている。海浜植物帯の保全に配慮した護岸工事を実施すべきである。（A）

参考文献

徳本　洋 1998. バッタ目. 石川県の昆虫：62-67. 石川県自然保護課.
市川顕彦ほか 2006. バッタ・コオロギ・キリギリス大図鑑. 687pp. 日本直翅学会編. 北海道大学出版会. 札幌.

写真提供者：富沢章



県内の分布

ハウチワウンカ

Trypetimorpha japonica Ishihara

カメムシ目グンバイウンカ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	準絶滅危惧

選定理由　全国的に分布が局所的なうえ、生息地の湿生草原は減少している。県内でも分布は局所的で、志賀町の３箇所で確認されているのみである。

形　　態　体長（翅端まで）３～４㎜。体は灰白色で不規則な暗褐色斑がある。前翅は灰白色不透明で中央部は黒色、周辺部に向かって放射状に黒帯を発する。短翅型と長翅型の２型が知られ、通常は短翅型であるが、稀に長翅型も出現する。

国内分布　本州（栃木県以西）、九州に分布する。

県内分布　志賀町。

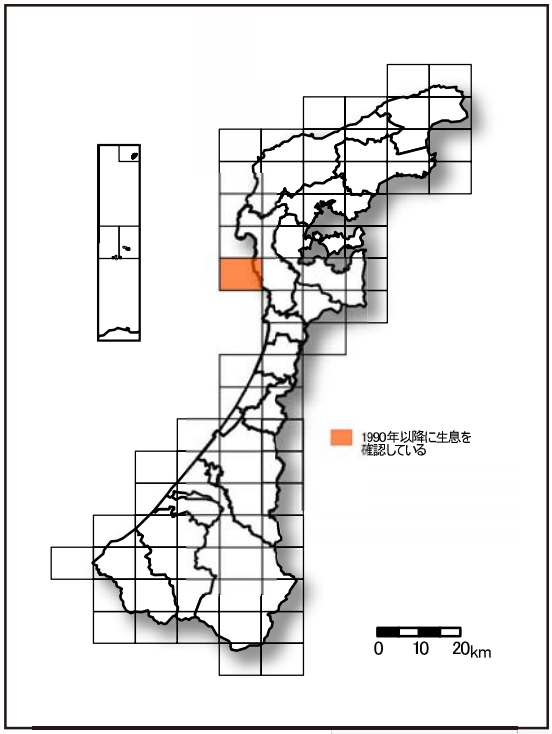
生　　態　成虫は８～９月に出現し、湿生草原の中に生育するチガヤで発見される。

生息地の条件　志賀町では、丘陵部の尾根筋に広がるアカマツ・コナラ林の間にある裸地と森林の境界の赤土部分のイネ科草本で発見された。県内の生息環境は従来のチガヤの生育する湿生草原と異なる可能性があるため、詳細な調査による発生地の確認がのぞまれる。

生存の危機　生息場所である平野部の湿生草原は限られており、かつ、開発や植生遷移によって減少している。現在の生息地の保全が必要である。（A）

参考文献　江口元章 2008. 石川県で確認されたハウチワウンカ. 翔, (190) : 7.

標本提供者：江口元章



県内の分布

ハネナシアメンボ

Gerris (Gerris) nepalensis Distant

カメムシ目アメンボ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由

都市部などで減少傾向にある。県内の生息地は約10箇所であり、生息環境の悪化の危険がある。

形　態

体長6.5～10.0㎜。体型は比較的幅広く、菱形である。腹部は短く、体長の1/2以下。体色は灰黒色～黒色。前脚の腿節内縁が褐色。触角は全体黒色。後胸基部、各腹節側部、各腹節側板の境界付近および体下面は灰青色の微毛で覆われる。無翅型が多いが長翅型も出現する。

国内分布

北海道、本州、隠岐島、四国、九州。

県内分布

加賀市、金沢市、かほく市、七尾市、珠洲市。分布は局所的であるが、生息地での個体数は多い。

生　態

５～６月頃に水草に産卵し、幼虫は１ヶ月程で成長し、新成虫は８月頃に出現する。多化性ともいわれる。成虫は水辺の枯れ草、石、落ち葉の下で越冬する。通常は葉上で生活し水面を遊泳することもあるが、広い水面には出ない。ヒシにつくジュンサイハムシ幼虫や水面に落下した小昆虫を捕食する。

生息地の条件

平野部～丘陵部の、ヒシ、ジュンサイなどの浮葉植物の多い池沼などの開放水面の多い止水域。

生存の危機

池沼の開発や埋め立て、各種排水や農薬による水質汚染、コンクリートなどによる護岸化、管理放棄などによる浮葉植物の消失。加賀市片野鴨池では、オオクチバス、アメリカザリガニが侵入しているため、外来種の駆除、侵入できない区域の設置などの保全策が必要である。（A, B, C）

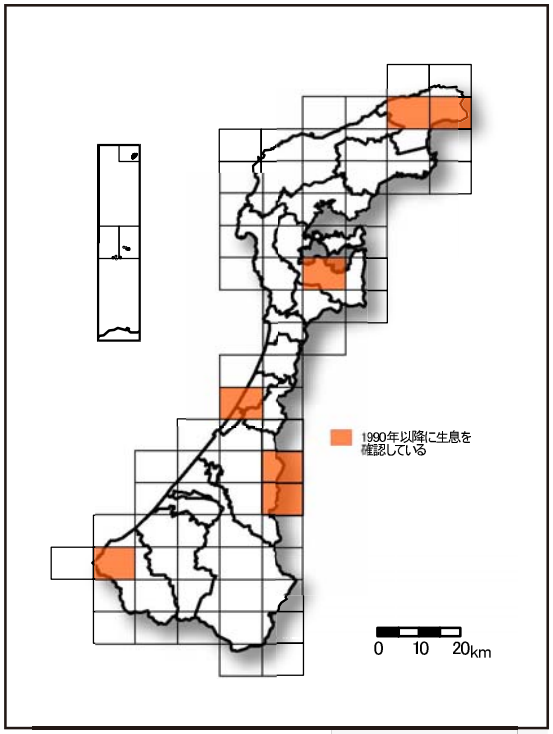
参考文献

佐伯仁規・原田哲夫 2002. ハネナシアメンボの餌資源としてのジュンサイハムシ. 昆蟲ニューシリーズ, ５(１) : ９-15.

山尾あゆみ・中尾史郎・中島敦司・養父志乃夫・山田宏之 2002. アメンボ類の生息環境保全を目的とした淡水湿地の環境整備指針. ランドスケープ研究, 65(５) : 527-532.

池田綱介・中筋房夫 2003. ヒシ群落のある溜池におけるジュンサイハムシとその他の昆虫の季節変動. 昆蟲ニューシリーズ, ６(１) : ９-18.

写真提供者：西原昇吾



県内の分布

ヒメミズカマキリ

Ranatra unicolor Scott

カメムシ目タイコウチ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由

平野部を中心に全国的に生息地が減少傾向にある。県内でも局所的に分布し、最近の確実な生息地は約10箇所であり、生息環境の悪化している場所も少なくない。

形　態

体長（呼吸管を除く）は24～32㎜。体色は淡褐色～淡黄褐色で、前脚腿節の突起は歯状で中央付近にある。呼吸管は体長の2/3程度であり、前翅より明らかに短い。

国内分布

北海道、本州、淡路島、四国、九州、琉球列島。

県内分布

加賀市、小松市、かほく市、羽咋市、志賀町、中能登町、珠洲市の約10箇所で確認されている。

生　態

産卵期は６～７月。卵はヒシやジュンサイなどの浮葉植物の組織内に産み付けられる。８月頃に新成虫が出現する。幼虫、成虫ともに水生昆虫などの体液を吸収する。水中では浮葉植物や抽水植物の間で静止していることが多い。水中で越冬する。

生息地の条件

平野部～丘陵部の、植生の豊富で比較的深い潟湖、池沼、ため池。

生存の危機

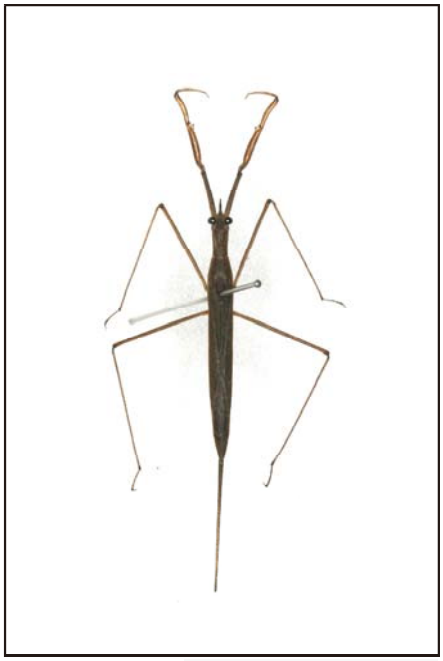
池沼の開発、埋め立てによる消失、ため池のコンクリートなどによる護岸化、管理放棄、生活排水や農薬の流入、ゴミの投棄による水質汚染、外来種の侵入が脅威となっている。河北潟では、オオクチバス、ブルーギルが侵入し、加賀市片野鴨池では、オオクチバス、アメリカザリガニの侵入後に本種の減少傾向が著しい。羽咋市三日月池は一部が埋め立てられたため、開発の防止が必要である。
（A, B, C）

参考文献

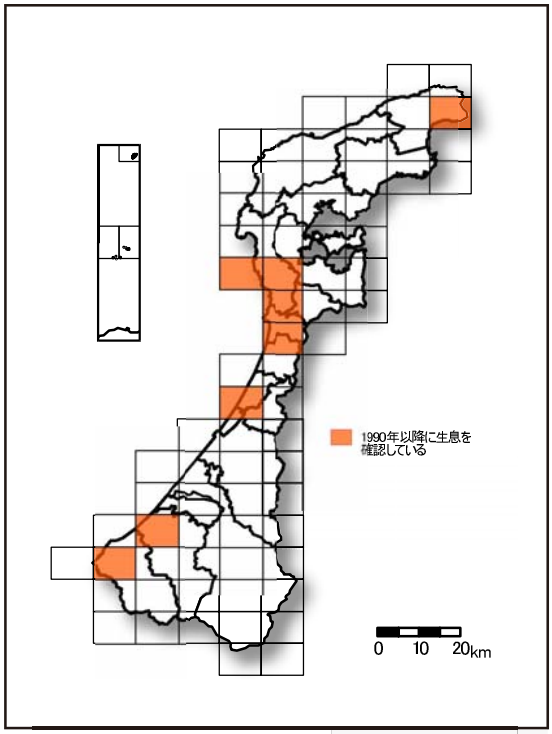
Ban Y 1981. Some observation on the life cycle of the water scorpion, *Ranatra unicolor* Scott (Hemiptera: Nepidae) in Yamanoshita Bay, Lake Biwa. Verh Internat Verein Limnol, 21:21–1625.

富沢　章 2006. 中能登町（旧鳥屋町）春木で得られた昆虫類. とっくりばち, (74) : 61–64.

平嶋義宏ほか 2008. 新訂原色昆虫大図鑑 第Ⅲ巻. 北隆館. 東京.



標本提供者：富沢章



県内の分布

ミヤケミズムシ

Xenocorixa vittipennis (Horváth)

カメムシ目ミズムシ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由

全国的に減少傾向にある。県内でも、生息地が４箇所と限られており、２箇所では生息環境が悪化している。

形　態

体長7.2～9.1㎜と比較的大型である。体型は短円筒形で丸みがあり幅広く後方が細まる。背面は淡黄色で強い光沢があり、前翅の多少とも不規則な多数の黒色線条は他の大形ミズムシ類に比べて明瞭である。前胸背板着色部は比較的短く、側縁は角ばり、６～８本の太い黒色横帯がある。肢は前肢が短い捕獲脚、中肢は細長い把握脚、後肢は扁平な遊泳脚となる。

国内分布

本州、四国、九州。

県内分布

加賀市、羽咋市、志賀町、中能登町。

生　態

小昆虫を捕食する。成虫は春から秋にかけて個体数が多く、高密度に群生する。灯火にも飛来する。

生息地の条件

平野部～丘陵部の水生植物が豊富な池沼などの止水域に生息する。餌生物が豊富に生息することが必要である。

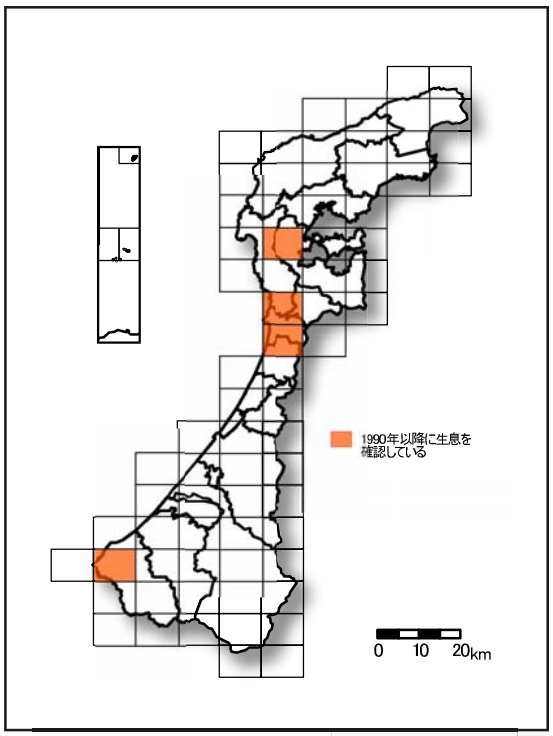
生存の危機

池沼の開発による生息環境の消失、各種排水や農薬による水質汚染、外来種の侵入が脅威である。加賀市片野鴨池では、1990年代には多産していたが、オオクチバス、アメリカザリガニの侵入後に本種の個体数が著しく減少した。外来種の駆除および、侵入できない区域を設けるなどの保全策が必要である。羽咋市の三日月池は平野部の抽水植物の多い河跡湖であり、一部が埋め立てられたため、これ以上の開発の防止が必要である。（A, B, C）

参考文献

林　正美・宮本正一 2005. 半翅目. 川合禎次・谷田一三（編）. 日本産水生昆虫―科・属・種への検索. 東海大学出版会. 秦野.

標本提供者：富沢章



県内の分布

ミゾナシミズムシ

Cymatia apparens（Distant）

カメムシ目ミズムシ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	準絶滅危惧

選定理由

生息密度が低いうえに、近年、個体数がさらに減少している傾向にあり、全国的に生息地が失われつつある。県内でも局所的に分布し、生息地は1990年代に確認された２箇所のみであり、いずれも開発による影響を受けており、2000年代の確認例はない。

形　態

体長5.0～5.9㎜。体型はやや細長い。体色は淡褐色～淡黄褐色。頭部腹面（顔）は非常に短く、口吻（下唇）に横条を欠く。前脚跗節は扁平にならず、きわめて細長く指状で先端には顕著な爪が見られる。

国内分布

北海道、本州、四国（徳島）、九州。

県内分布

羽咋市、七尾市。

生　態

ボウフラなどの水生昆虫を捕食する。６月頃に新成虫が出現する。

生息地の条件

平野部の植生の豊富な池沼、湿地、放棄水田に生息する。

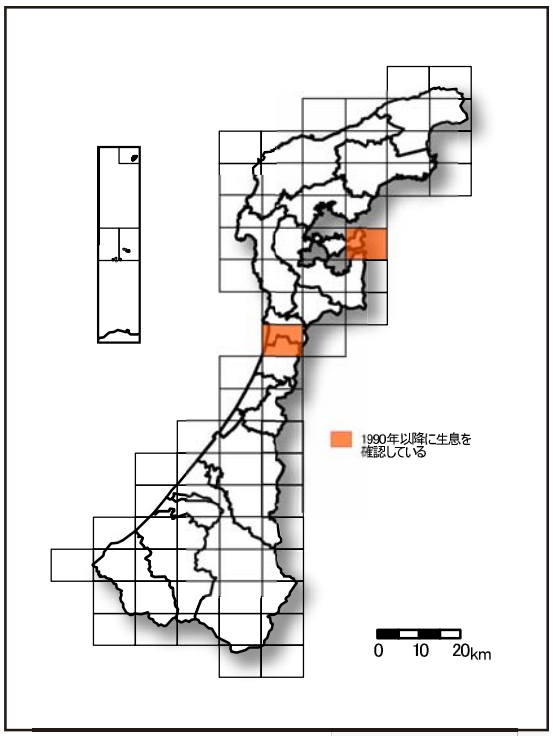
生存の危機

羽咋市の三日月池は平野部の抽水植物の多い河跡湖であり、一部が埋め立てられた。七尾市の放棄水田はＬＰガス基地建設に伴う埋め立てによって、面積が減少した。羽咋市では生息地の保全、七尾市では生息地における耕起、湛水化などの保全対策が必要である。（A, B, C）

参考文献

林　正美・宮本正一 2005. 半翅目. 川合禎次・谷田一三（編）. 日本産水生昆虫―科・属・種への検索. 東海大学出版会. 秦野.
平嶋義宏ほか 2008. 新訂原色昆虫大図鑑 第Ⅲ巻. 北隆館. 東京.

標本提供者：江口元章



県内の分布

マツムラクサカゲロウ

Semachrysa matsumurae (Okamoto)

アミメカゲロウ目クサカゲロウ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由　加賀市が国内分布の北限であり、隔離された生息地でもある。

形　態　翅の開張は約20㎜で、体は濃緑色をしている。

国内分布　石川県、大阪府、兵庫県、四国、長崎県、鹿児島県、沖縄県に分布する。

県内分布　加賀市「鹿島の森」が唯一の産地である。

生　態　生活史などについては不明である。

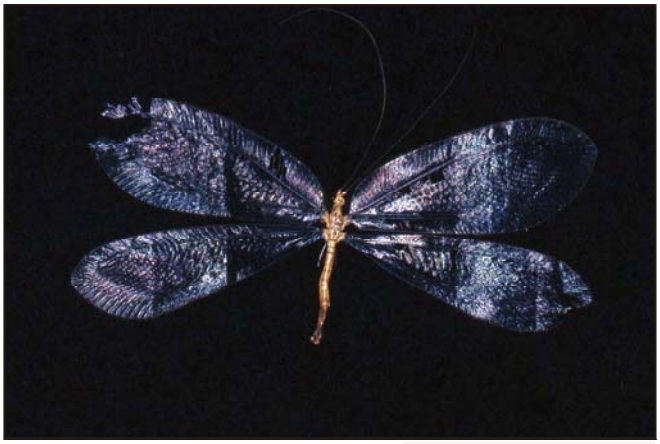
生息地の条件　照葉樹林内に生息するが、個体数は多くない。

生存の危機　照葉樹林の伐採が脅威であるが、生息地は国の天然記念物に指定されているため、生存が脅かされることはないと思われる。（A）

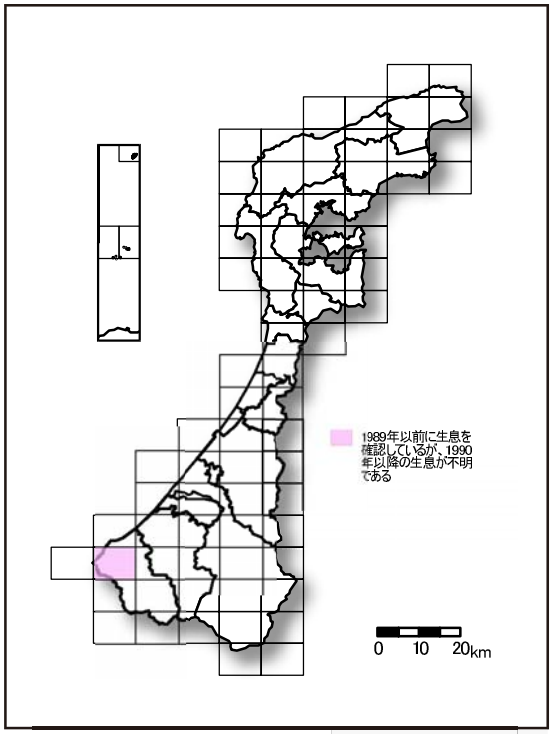
特記事項　国の天然記念物である「鹿島の森」に生息する。

参考文献

Tsukaguchi, S. 1995. Chrysopidae of Japan (Insecta, Neuroptera). Osaka, pp. 221.



標本提供者：富樫一次



県内の分布

オオウスバカゲロウ

Heoclisis japonica（Hagen）

アミメカゲロウ目ウスバカゲロウ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由

平野部においては、近年の記録がなく激減したものと思われる。また、海岸砂地においても土地造成や農耕地化によって、生息地が減少している。

形　態

体長45㎜、開張10㎝前後の大型種である。翅は白色がかっているが透明で、褐色の斑紋が点在する。頭部や胸部、脚は長毛で被われている。

国内分布

北海道から九州に分布する。

県内分布

現在の確実な生息地は、加賀市、小松市、金沢市の海岸部のみである。過去に金沢市の内陸部や白山市（旧鶴来町）で記録があるが、現在生息している可能性は低い。

生　態

幼虫は砂地に潜み、コガネムシやガの幼虫などの大型種を捕食する。成虫は７月から９月に出現し、ガを捕食することが知られている。成虫は灯火に飛来する。

生息地の条件

幼虫の生活できる砂地の存在が重要である。海岸部や湖岸、河川敷などの雑草がまばらに生える砂地帯が本種の生息地になるものと思われる。また、成、幼虫ともに大型昆虫を食する肉食性なので、エサとなる大型種の生息できる自然環境が存在することも重要である。

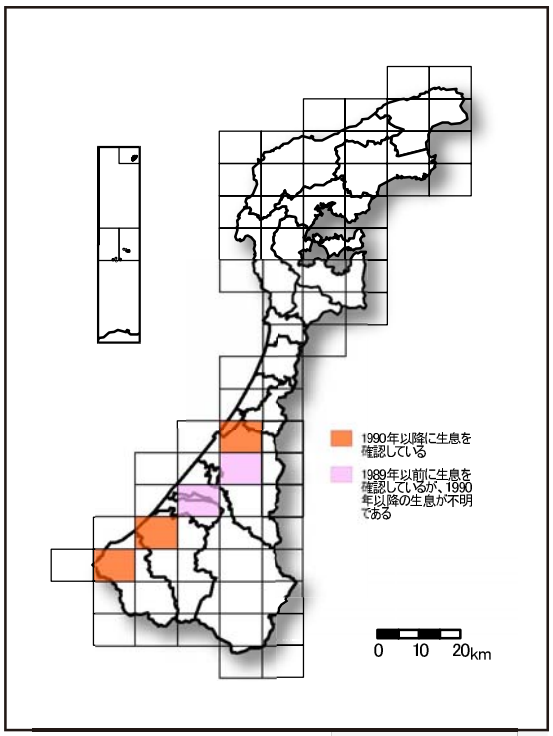
生存の危機

平野部においては、宅地化、農耕地化、河川敷における砂地帯の消失などによって、本種の生息地は激減したものと思われる。海岸部においても、護岸工事や土地造成の影響を受け、砂地帯が狭小化して生息地が悪化、消滅している所が多い。海浜植物帯に配慮した土木工事を実施すべきである。（A）

参考文献

富樫一次 1998. アミメカゲロウ目. 石川県の昆虫：100–101. 石川県自然保護課.

標本提供者：富沢章



県内の分布

ナガヒラタムシ

Tenomerga mucida (Chevrolat)

コウチュウ目ナガヒラタムシ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由
局地的分布を示し、開発されやすい里山に生息する。近年の発見例は少ない。

形　態
体長は９～17㎜で長い鋸歯状の触角を持っている。体形は細長く、両側はほぼ平行である。体色は赤褐色で、上翅はやや黒い小顆粒でおおわれている。

国内分布
北海道から南西諸島まで広く分布する。

県内分布
能美市、白山市、金沢市、珠洲市から得られている。

生　態
幼虫は腐朽菌に侵された立ち枯れや倒木に生息し、成虫は７～８月頃、伐採木や立ち枯れ木で見られる。また、成虫は灯火によく飛来する。

生息地の条件
平地から山地の枯木や倒木が多い所に生息している。

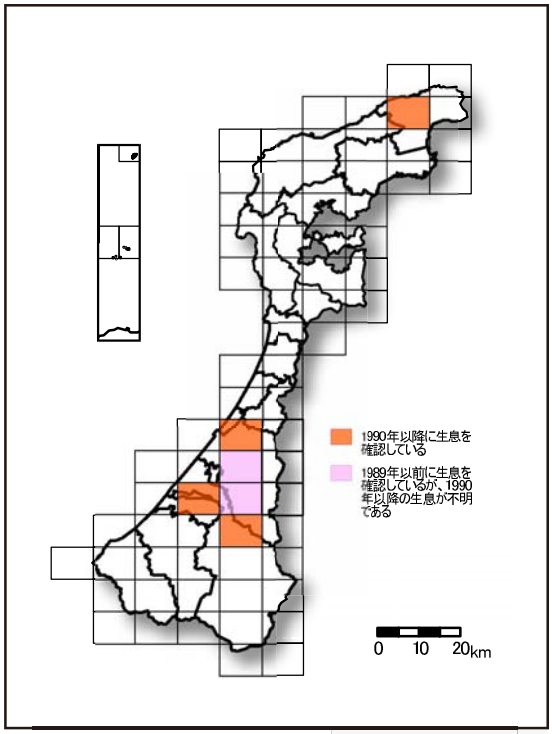
生存の危機
里山の開発が進み、生息環境は悪化している。 (A)

特記事項
コウチュウ目の原始型を残している種として重要である。

参考文献

Miyatake, M (1985) Notes on the genus *Tenomerga of* Japan (Coleopt.:Cupedidae) Trans. Shikoku Ent. Soc. 17(1/2) : 1-4.
高羽正治. 1998. コウチュウ目. 石川県の昆虫 : 102-251. 石川県自然保護課.
高羽正治. 1999. 「石川県の昆虫」の追加・訂正 (Ⅰ). アカハネムシ, (27) : 5-6.
富沢　章・吉道俊一・浅地哲也. 2006. 能美市昆虫調査報告書　ー辰口地区の昆虫ー, 42pp. 能美立博物館.

標本提供者:高羽正治



県内の分布

セアカオサムシ

Hemicarabus tuberculosus (Dejean et Boisduval)

コウチュウ目オサムシ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由
全国的な分布は、局地的で個体数も少ない。本県では、２箇所から少数個体が採集されているのみである。

形　態
体長は19～22㎜で、オサムシ亜科では小型種。体色は前胸背板と上翅の一部を除き黒色、前胸背板は赤銅色の金属光沢をおびる。上翅と上翅側縁も弱い赤銅色の金属光沢をおびる。後翅は退化して飛べない。

国内分布
北海道、本州、四国、九州。

県内分布
金沢市倉ヶ岳と金沢市坪野の２箇所から知られる。

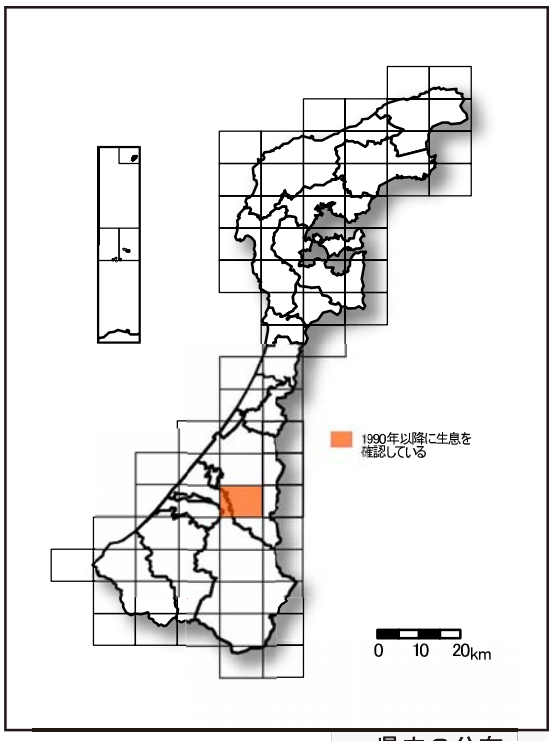
生　態
成虫は一年中見られ、成虫越冬するが、本県では６月頃に採集されている。肉食性で、歩行性の種である。

生息地の条件
湿地や池の周辺を好む傾向があるといわれているが、詳細は不明である。

生存の危機
開発されやすい金沢市の低山地に生息するため、公園化や宅地化等による生息地破壊が危惧される。(A)

参考文献
高羽正治 1998. コウチュウ目オサムシ科. 石川県の昆虫：103-120. 石川県自然保護課.

標本提供者：石川県ふれあい昆虫館



県内の分布

ハクサンクロナガオサムシ　コウチュウ目オサムシ科

Leptocarabus arboreus hakusanus (Nakane)

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由　コクロナガオサムシの白山亜種で、白山の亜高山、高山帯にのみ分布する。

形　態　体長は19～24㎜である。体色は黒く、体形は細長い。

国内分布　本県と福井県の白山山系の高地にのみ分布する。

県内分布　白山山系の釈迦林道上部、お花松原、南竜馬場、室堂など標高1,700m以上の高地に分布する。

生　態　成虫の出現期は７月から９月までである。他のオサムシと同様、昼間は石の下などにいて、夜間に採餌行動をとるようである。

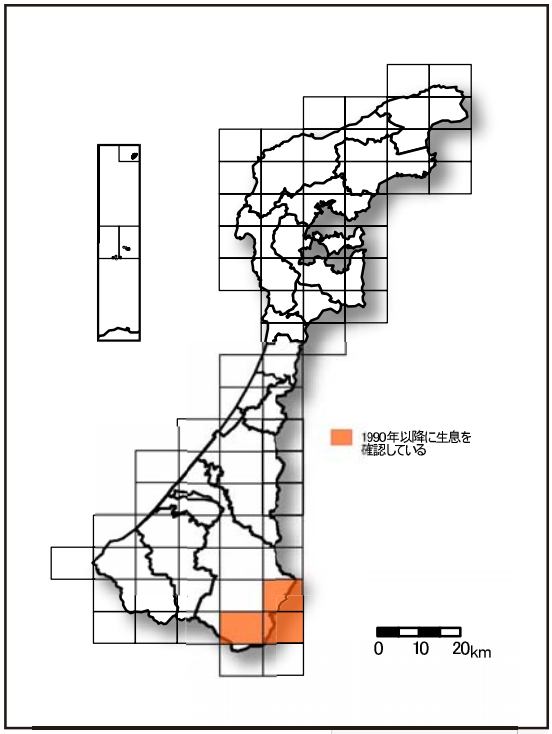
生息地の条件　亜高山帯、高山帯で草地が少なく、岩石がころがっているような所に多く生息する。

生存の危機　登山道整備等の工事や登山者の増加による露岩地への踏み込みは生息環境の悪化につながる。（A）

特記事項　生息地は白山国立公園の特別保護地区内である。

参考文献
Nakane,T. 1961. New or little-known Coleoptera from Japan and its adjacent regions.XV. Fragmenta Coleopt.,（1）：1－5.
中根猛彦 1962. 日本昆虫分類図説　第２集. 第３部：59.

写真提供者：富沢章



県内の分布

タカバクロヒラタゴミムシ

Platynus takabai (Habu)

コウチュウ目オサムシ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由　日本における産地は２県に限られ、得られた個体数が少ない。

形　　態　体長15㎜程度で、黒色で平たい体形をしている。頭部と前胸背板に光沢があり、頭頂に赤い斑紋を有する。

国内分布　石川県と島根県からのみ発見されているが、記録の大部分は石川県である。

県内分布　現在のところ金沢市と津幡町の低山地だけに分布していて、金沢市では生息地が多い。

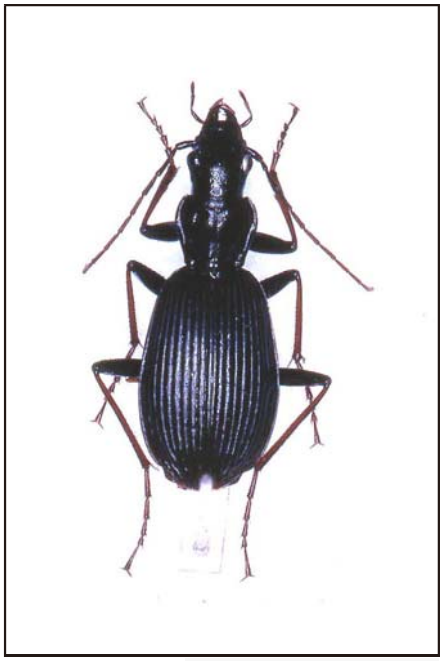
生　　態　成虫は湿地、休耕田、池の縁に生息していて、草の上や低木上で活動する。特に、秋にミゾソバの葉上で複数の個体が見られた。岩や土の割れ目、朽ち木で成虫越冬する。

生息地の条件　不明。

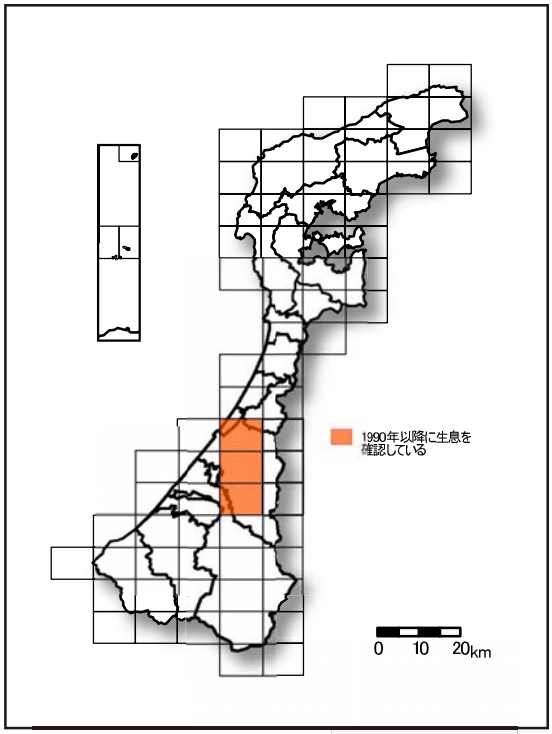
生存の危機　不明。（A）

参考文献　金沢市卯辰山で得られた１♂に基づき、記載された種である。

参考文献　Habu, A. 1962. Two new Agonum species from Japan (Coleoptera, Carabidae). Kontyu, 30（３）: 169-174.



標本提供者：高羽正治



県内の分布

クビボソコガシラミズムシ

Haliplus (Haliplinus) japonicus Sharp

コウチュウ目コガシラミズムシ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由
県内では数箇所で確認されているのみであり、生息環境の悪化が懸念される。

形　態
体長2.7～3.3㎜。体型は卵形。楕円形。体色は淡黄褐色。前胸背板の基部両側の縦条は中央付近まで伸びる。前胸腹板突起先端は中央で角張る。上翅の基部は側方へあまり拡がらない。頭頂の点刻は密。

国内分布
北海道、本州、四国、九州。

県内分布
川北町、能美市、白山市（旧美川町）、金沢市、輪島市、珠洲市。

生　態
新成虫は秋に発生し、成虫で越冬する。手取川下流部の細流では、春期から秋期に成虫が見られ、秋期には多数の個体が確認されている。

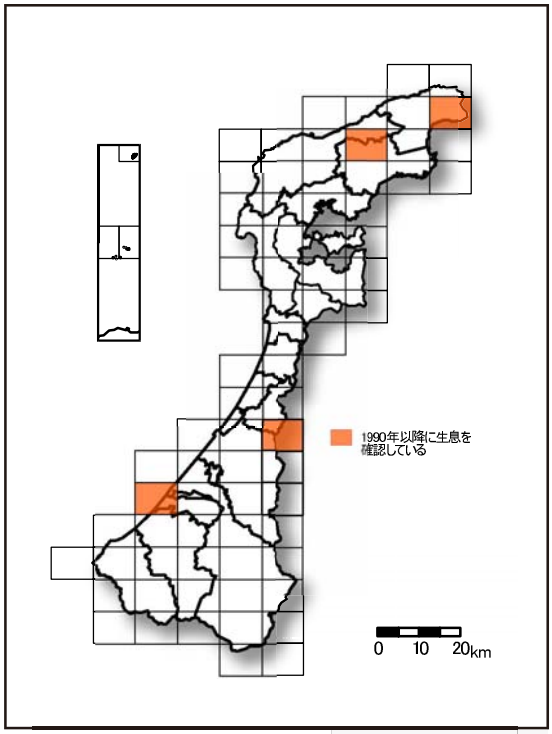
生息地の条件
水草や藻類の多く繁茂する水辺に生息する。川北町、能美市、白山市では、手取川河川敷の細流の藻類の多い岸辺で、金沢市では廃田で、珠洲市ではため池で確認された。

生存の危機
池沼の埋め立て、水質汚染、放棄水田の植生遷移、手取川河川敷の大規模な土木工事が大きな脅威となっている。（A, B）

参考文献

佐藤正孝 1984. 日本産水棲甲虫類の分類学的覚え書Ⅰ. 甲虫ニュース, (65) : 1-4.
中根猛彦 1985. 日本産ヒメコガシラミズムシ属の種の再検討. 北九州の昆虫, 32(2) : 61-67.
中根猛彦 1987. 日本の甲虫 (80), こがしらみずむし科. 昆虫と自然, 22 (11) : 26-30.

標本提供者：富沢章



県内の分布

ヒメコガシラミズムシ

Haliplus (Liaphlus) ovalis Sharp

コウチュウ目コガシラミズムシ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由
池沼や湿地、水田などの生息環境が、農薬使用による水質汚染などのために全国的に悪化している。県内の分布も局所的であり、生息環境の悪化が懸念される。

形　態
体長4.0～4.3㎜。体型は長楕円形で体色は黄褐色。上翅会合線に沿った黒色部は細く、合着した中央の紋は円形であまり大きくならず、基部の横紋を欠く。

国内分布
北海道、本州、四国、九州。

県内分布
加賀市、小松市、能美市、金沢市、志賀町、珠洲市に局所的に生息する。

生　態
８～10月に成虫が確認されている。

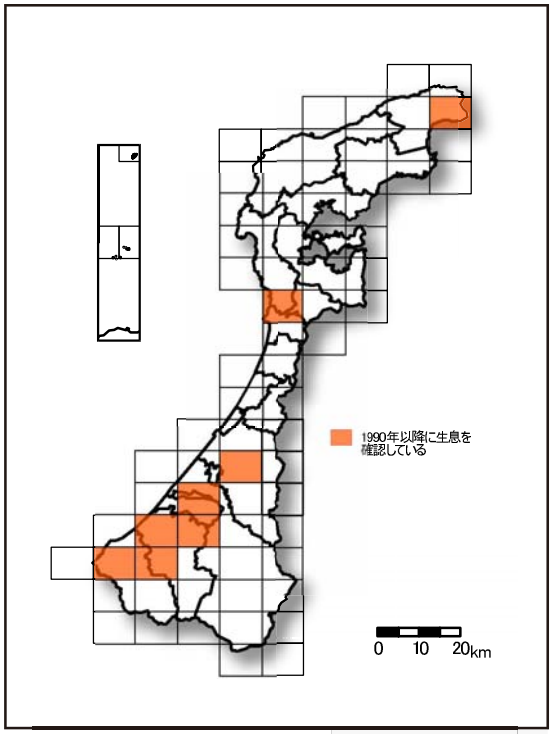
生息地の条件
平野部～丘陵部の水生植物が豊富な池沼、湿地や放棄水田に生息する。

生存の危機
池沼、湿地の開発や管理放棄、圃場整備、水質汚染、放棄水田の植生遷移、外来種の侵入が脅威となっている。ため池の維持管理の継続、放棄水田の湛水化が保全上重要である。加賀市片野鴨池では、オオクチバス、アメリカザリガニが侵入しているため、外来種の駆除および侵入できない区域を設けるなどの保全策が必要である。（A, B, C）

参考文献

佐藤正孝 1984. 日本産水棲甲虫類の分類学的覚え書Ⅰ. 甲虫ニュース, (65) : 1-4.
中根猛彦 1985. 日本産ヒメコガシラミズムシ属の種の再検討. 北九州の昆虫, 32(2) : 61-67.
中根猛彦 1987. 日本の甲虫 (80), こがしらみずむし科. 昆虫と自然, 22(11) : 26-30.

標本提供者：富沢章



県内の分布

ルイスツブゲンゴロウ

Laccophilus lewisius Sharp

コウチュウ目ゲンゴロウ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由

全国的に減少傾向にある。県内でも生息地が比較的局所的であり、９箇所で確認されている。生息地の環境変化による減少のおそれが高い。

形　態

体長3.9～4.7㎜。体型は逆卵形で幅広い。背面は淡黄褐色～黄褐色。腹面は黄褐色。上翅には６～７条の暗褐色～黒色の輪郭をもつ縦条が並列するが、不規則に断続、合着する。上翅は微細な網状印刻に密に覆われやや強い光沢がある。

国内分布

本州、四国、九州。

県内分布

加賀市、金沢市、津幡町、宝達志水町、中能登町、志賀町、輪島市、珠洲市。

生　態

成虫は４～10月に確認されている。ツブゲンゴロウと同所的に生息する場合に、生息環境が悪化すると、本種が先に確認されなくなるようである。

生息地の条件

平野部～丘陵部において浮葉植物などの豊かな植生がある、池沼、湿地、放棄水田などの止水域に生息する。

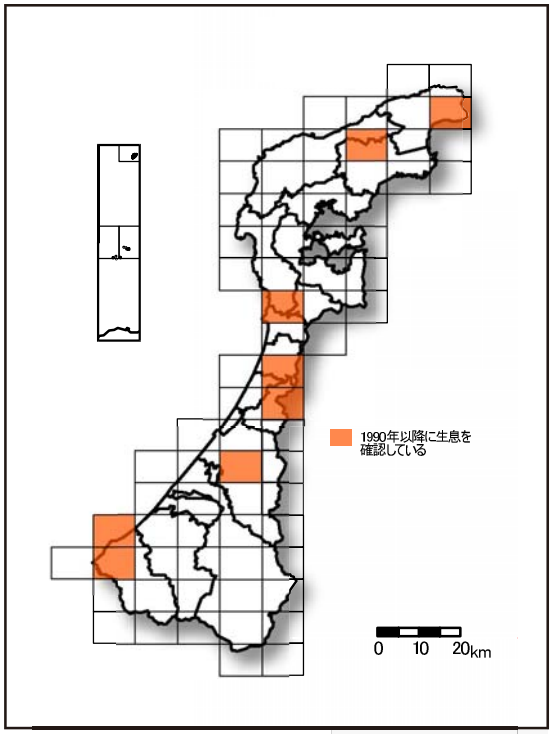
生存の危機

池沼、湿地の開発、ため池の管理放棄。各種排水や農薬による水質汚染。放棄水田の植生遷移。アメリカザリガニ、オオクチバスなどの外来種の侵入、コイの導入が脅威となっている。加賀市の生息地では、アメリカザリガニの侵入により、他の多くの水生生物とともに本種も絶滅した。ため池の維持管理の継続、放棄水田の湛水化が保全上重要である。外来種の侵入防止および、早期の駆除も重要である。（A, B, C）

参考文献

森　正人・北山　昭 2002. 改訂版図説日本のゲンゴロウ. 文一総合出版. 東京.
富沢　章 2006. 中能登町（旧鳥屋町）春木で得られた昆虫類. とっくりばち, (74) : 61-64.

標本提供者：富沢章



県内の分布

クロゲンゴロウ

Cybister brevis Aubé

コウチュウ目ゲンゴロウ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由

北日本では比較的残存しているが、南日本の太平洋側では、各県の生息地数は数箇所程度と減少している。県内でも、加賀地方、奥能登では個体数は少なくないが、生息地は限られている。

形　態

体長20～25㎜。体型は卵型。背面は一様に緑色～褐色を帯びた黒色で、光沢がある。体下面は黒～暗赤褐色である。腹部第３～４節の両端に黄褐色の小紋を具える。上翅には３点刻列があり、翅端付近に小黄褐色紋を有する。オスの前附節の基部３節は吸盤状となる。幼虫は体長約45㎜のいも虫状。

国内分布

本州、四国、九州。

県内分布

加賀市、小松市、能美市、金沢市、七尾市、能登町、珠洲市。

生　態

成虫は水草の茎に５～７月頃に産卵する。幼虫は池沼の浅い部分などで５～８月に出現し、他の水生昆虫などを捕食する。老熟すると岸辺に上陸し土中で蛹化する。新成虫は８～９月に出現し、水域内で10月頃に越冬し、３年ほど生存する。成虫も肉食である。700mほどは飛翔し、ため池や水田を移動して生活する。

生息地の条件

平野部～丘陵地の水生植物の豊富な浅い池沼、湿地、水田、放棄水田、水田脇の水たまり、緩やかな流れの水路に生息する。小規模で浅い水域にも生息する。

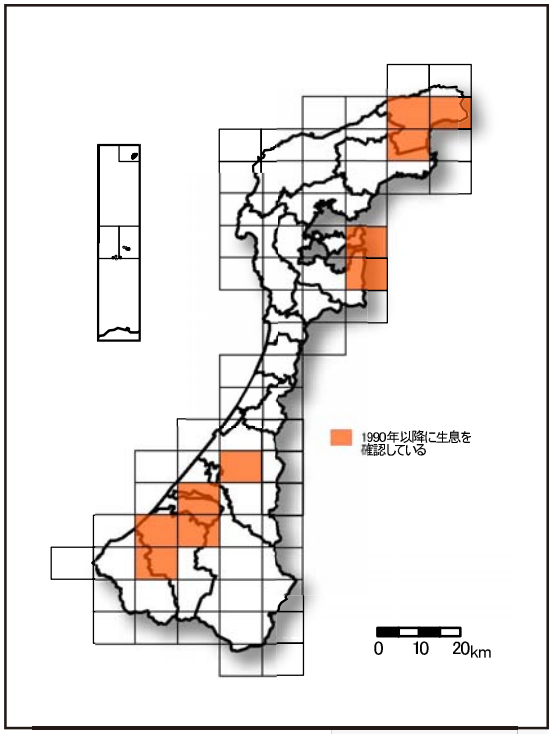
生存の危機

池沼の開発による消失、ため池の管理放棄、コンクリートによる護岸、ほ場整備による乾田化、水質汚染、外来種の侵入、採集圧が脅威となっている。生息地であった小松市金平のため池が埋め立てられた例があり、今後は関係者への生息地の公開による保全が必要と思われる。放棄水田の湛水化や水田脇の水たまりの創出、ため池の維持管理の継続などによる水辺ネットワークの維持が保全上重要である。（A, B, C）

参考文献

西城　洋 2001. 島根県の水田と溜め池における水生昆虫の季節的消長と移動. 日本生態学会誌, 51（1）: 1-11.

写真提供者：小幡英典



県内の分布

ミズスマシ

Gyrinus japonicus Sharp

コウチュウ目ミズスマシ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由
かつては全国的に普通にみられたが減少傾向が著しい。県内でも2000年代の確認例は減少している。

形　態
体長6.0～7.5㎜。体型は紡錘形で背面はやや膨隆し体下面は平坦。上翅は11条の点刻列を有する。背面に飴色の光沢がある。前脚は捕獲脚、中・後脚は扁平な遊泳脚でいずれも黄褐色。眼は上下に２分される。幼虫は約18.5㎜で細長く、やや扁平。体色は白色で頭・胸部は黄～黄褐色である。

国内分布
日本固有種。北海道、本州、四国、九州、対馬、種子島に分布する。

県内分布
加賀市、小松市、白山市（旧鶴来町）、能美市、金沢市、津幡町、かほく市、宝達志水町、羽咋市、中能登町、七尾市、輪島市、穴水町、珠洲市。

生　態
成虫は止水域の開放水面を旋回しながら泳ぎ、水面に落ちた昆虫を捕食し、驚くと水中へ潜る。５～６月頃に水草の葉の表面に産卵し、１週間ほどで孵化した幼虫は水中や水面の小昆虫を捕食する。４～５週で老熟すると岸辺に上陸し、高さ10㎝以内の部分にある植物などに泥と分泌物で蛹室をつくって蛹化する。数日後に羽化した成虫は飛翔して移動、分散する。成虫は岸辺の泥中で越冬する。

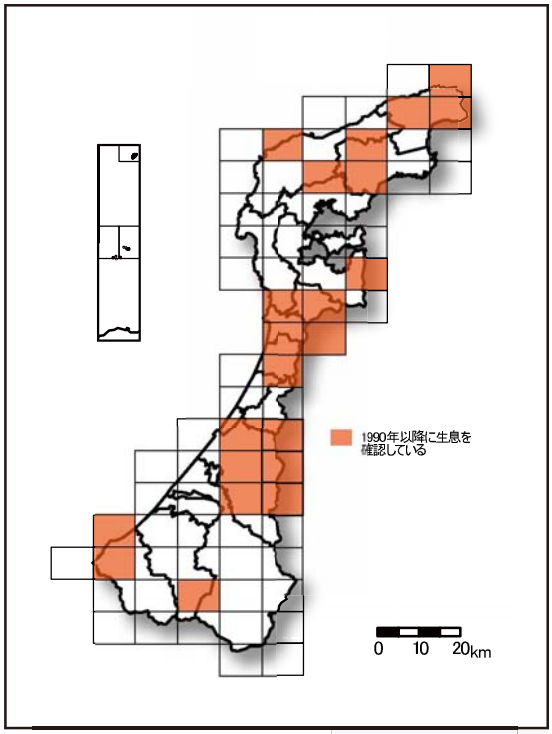
生息地の条件
平地～山地の、水生植物の豊富な池沼、放棄水田や流れの緩やかな水路。

生存の危機
ため池のコンクリートなどによる護岸化、管理放棄、植生遷移、水質汚染（特に油など界面活性剤の流入）、外来種の侵入などが脅威である。水質悪化の防止、土の岸辺の維持、ため池の維持管理の継続、放棄水田の湛水化による水辺のネットワークの維持が保全上重要である。（A, B）

参考文献

恒遠マキ 1936. ミズスマシ科２種の生活史. 昆蟲, (10) : 302-312.
佐藤正孝 1977. 日本産ミズスマシ科概説１-３. 甲虫ニュース, (37) : １-５, (38) : １-２, (39) : １-４.
富沢　章 2006. 中能登町（旧鳥屋町）春木で得られた昆虫類. とっくりばち, (74) : 61-64.

標本提供者：西原昇吾



県内の分布

ガムシ

Hydrophilus acuminatus Motschulsky

コウチュウ目ガムシ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由

かつては普通種であったが、全国的に減少傾向にある。県内でも、1990年代までは丘陵部では珍しくなく、能登では局所的に多くの個体が見られたが、2000年以降の減少傾向が著しい。

形　態

体長33～40㎜で日本最大のガムシ類。体型は紡錘形で、体は黒色、背面は膨隆し、やや銅色の光沢を帯びる。触角や髭は黄褐色。腹面はやや赤みを帯び、毛がない。脚は細く、中・後脚は各跗節の内側に黄褐色の長毛が密生する遊泳脚である。幼虫はいも虫状で約70㎜。

国内分布

北海道、本州、四国、九州、南西諸島。

県内分布

加賀市、小松市、能美市、金沢市、津幡町、かほく市、志賀町、中能登町、七尾市、輪島市、穴水町、能登町、珠洲市。

生　態

６月頃に卵嚢を水草に付着させる。幼虫はモノアラガイなどを捕食し、老熟すると岸辺に上陸し土中で蛹化する。成虫は藻や水草、植物質の腐植物などを摂食する。成虫は飛翔し、繁殖期にはため池から水田や水路へ移動し、灯火にも飛来する。３～11月まで確認され、水中で越冬する。

生息地の条件

平野部から丘陵部の水生植物の豊富な池沼、水田、放棄水田、水田脇の水たまり、掘り上げなどに生息する。

生存の危機

池沼の開発による消失、ため池の管理放棄、各種排水や農薬による水質汚染、圃場整備による乾田化、外来種の侵入、街灯の増加などが脅威となっている。ため池の維持管理の継続、放棄水田の湛水化、外来種の侵入防止と早期の駆除が保全上重要である。（A, B, C）

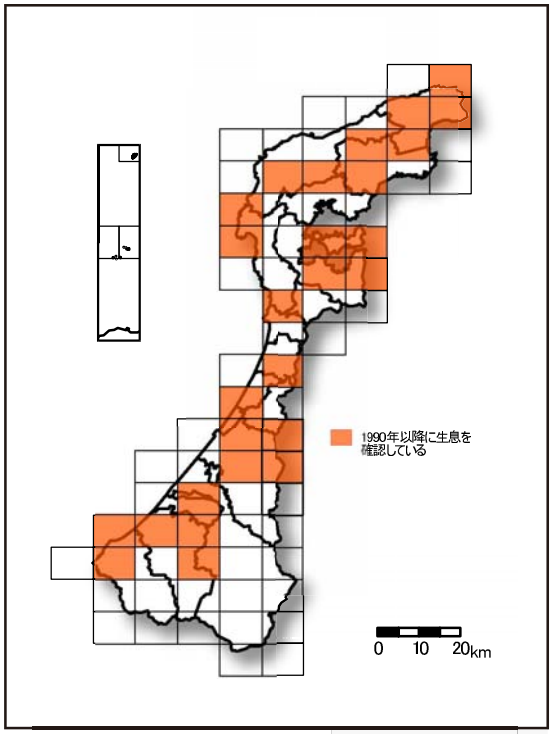
参考文献

細井　操 1939. ガムシの幼蟲及び蛹に就て. 昆蟲界, (67) : 509–513.

細井　操 1947. ガムシ *Hydrophilus acuminatus* Motschulsky の生活史. 植物及動物, 7 (11) : 43–50.

西城　洋 2001. 島根県の水田と溜め池における水生昆虫の季節的消長と移動. 日本生態学会誌, 51 (1) : 1–11.

標本提供者：富沢章



県内の分布

ツヤハマベエンマムシ

Eopachylopus ripae (Lewis)

コウチュウ目エンマムシ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由
海浜性エンマムシ類の中では個体数が少ないため、護岸工事などの開発行為による影響を受けやすく、個体数の減少が危惧される。

形　態
体長2.0～3.0㎜。体全体が黒色のものと、上翅に赤紋をもつものがいる。脛節が長くて頑丈な棘に覆われていて、他の海浜性エンマムシ類との区別は容易である。

国内分布
北海道から南西諸島まで広く分布している。

県内分布
文献上は白山市（旧美川町）、小松市、能美市（旧根上町）、金沢市、内灘町および志賀町からの記録がある。その他、加賀市片野海岸と羽咋市一の宮海岸で採集確認している。

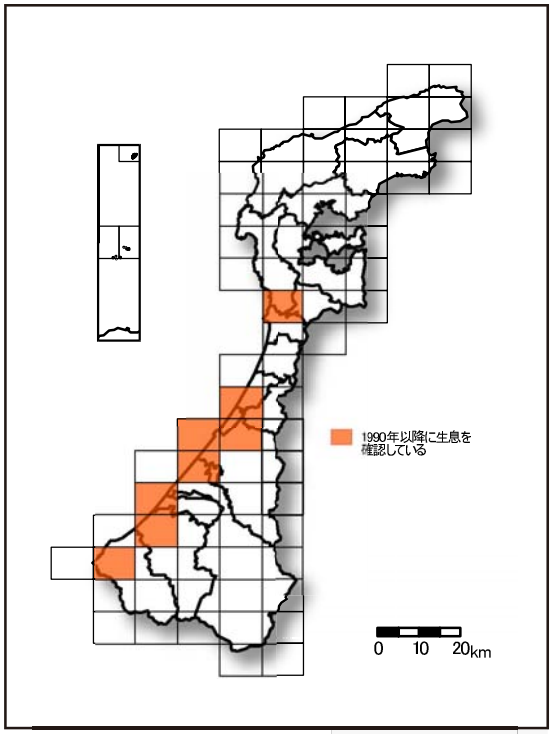
生　態
成虫は４月から９月頃まで見られる。海岸に打ち上げられた魚の死がいなど、動物性の腐敗物に集まる。

生息地の条件
良好な砂浜のある海岸であることが重要で、砂利の多い海岸には生息しない。

生存の危機
護岸工事などの開発による砂浜の改変は、本種の生存に大きな影響を与える。（A）

参考文献
大原昌宏 1998. 日本産エンマムシ上科概説IX. 甲虫ニュース, (122) : 1-3.
大原昌宏 2004. 海浜性エンマムシ. 昆虫と自然, 39 (12) : 12-15.

標本提供者：吉道俊一



県内の分布

ヒメハマベエンマムシ

コウチュウ目エンマムシ科

Hypocacculus (Nessus) asticus (Lewis)

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由
本種はハマヒルガオの分布する海浜植物帯に生息するが、もともと個体数が少ないうえに、さまざまな開発行為による海浜植物帯の減少が、本種の生存に大きな影響を与えている。

形　態
体長2.1～2.4㎜。前頭一面に細かい皺を持つことで他の海浜性エンマムシ類と区別できる。

国内分布
本州、四国、九州に分布するが全国的に記録は少なく、その分布は局所的である。

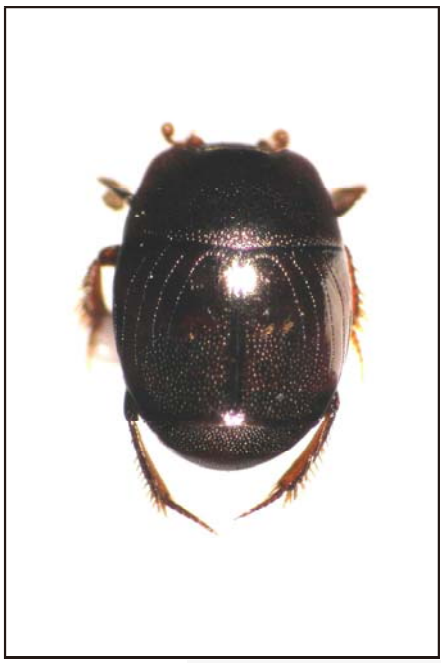
県内分布
文献記録は、1964年５月にかほく市（旧宇ノ気町）で採集された１例のみである。近年は2007年６月に羽咋市一ノ宮海岸で確認されたに過ぎない。このように分布は局所的で、個体数もかなり少ない。

生　態
県内では成虫は初夏に確認されている。ハマヒルガオなどの海浜植物の根際深くに生息し、他の海浜性エンマムシ類のように砂浜帯に打ち上げられた動物性腐敗物の下から見いだされることはほとんどない。

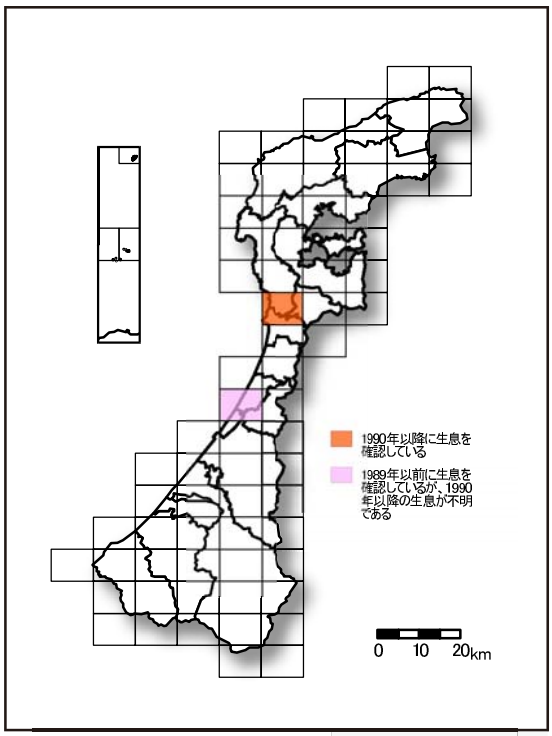
生息地の条件
ハマヒルガオなどの海浜植物帯があること。

生存の危機
さまざまな開発行為、護岸工事により海浜植物帯が減少することは、本種の生息場所が減少することを意味しており、本種の生存にとって大きな脅威となる。（A）

参考文献
大原昌宏 1998. 日本産エンマムシ上科概説Ⅷ. 甲虫ニュース, (121) : 1-6.
大原昌宏 2004. 海浜性エンマムシ. 昆虫と自然, 39 (12) : 12-15.



標本提供者：吉道俊一



県内の分布

ミヤマツヤハダクワガタ（ツヤハダクワガタ中部亜種）

Ceruchus lignarius monticola Lewis

コウチュウ目クワガタムシ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由

生息箇所、個体数ともきわめて少ない。

形　態

体長は大顎を含め13～21㎜の中型のクワガタムシ。体色は黒色で艶があり、前胸背板は方形状で、頭部の複眼後方には横皺がある。上翅には明瞭な10条の縦の隆線を持つ。オスの頭部は大きく、大顎は短大で内歯が１本ある。その内歯は原亜種より前方にあり区別点となる。メスは頭部、大顎とも小さい。

国内分布

本州（本県産は本州中部亜種で、中部地方に分布する）。

県内分布

白山市（旧白峰村）の白山山系山地帯に分布。

生　態

標高1,000m以上のブナ帯に生息し、成虫は６月下旬～８月に現れ、カツラやミズナラの幹を這う。幼虫は、広葉樹や針葉樹の赤枯れ菌に侵された腐朽部を食する。本県では、カツラとミズナラが食樹として記録されている。成虫は晩夏に羽化した後、そのまま蛹室にとどまり越冬する。冬期の材内には、成虫、終齢幼虫、中齢幼虫が同時に見られることから、幼虫期間は２年以上かかるものと思われる。成虫は灯火にも飛来すると聞くが、樹液には集まらない。

生息地の条件

標高1,000m以上のブナを中心とする原生林が残されていること、および幼虫の食樹となる赤枯れ菌に侵された枯死木が存在することが重要である。

生存の危機

生息地が白山国立公園内なので生息環境は保たれている。しかし、採集圧がかかる可能性が大きい。

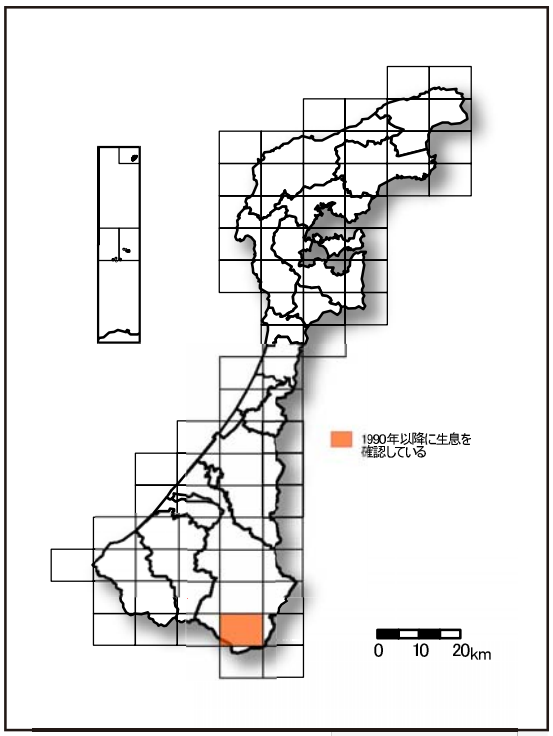
特記事項

中部地方を除く、本州、北海道、四国と九州に各別亜種を産する。（A）

参考文献

高羽正治 1998. コウチュウ目クワガタムシ科. 石川県の昆虫：146. 石川県自然保護課.

写真提供者：富沢章



県内の分布

コブナシコブスジコガネ

Trox nohirai Nakane

コウチュウ目コガネムシ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由

最近になり、本種の発生場所として、フクロウ類営巣後の樹洞が大きな役割を果たしていることが報告されたが、樹洞ができるような大木は各種開発による伐採で減少傾向にあり、それに伴って本種の減少が懸念される。

形　態

体長5.5～7.2㎜。本属に特徴的な体表面のコブや毛塊を欠く。

国内分布

北海道、本州、四国、九州、対馬に分布する。

県内分布

最近、白山麓での観察事例が報告されたほか、釈迦林道における記録が１例知られている。いずれも白山麓周辺でのみ確認されている。

生　態

成虫は５月頃から９月頃まで見られる。従来より樹洞内のフレーク状になった腐植堆積物に発生することが知られていたが、その後の調査で樹洞内に残されたフクロウのペリットや動物死体を食餌のひとつとしていることが確認された。また、フクロウの営巣後間もない樹洞よりも、営巣から数年が経過した樹洞を好むようで、条件がよければ100個体を超える個体が見いだされることもある。

生息地の条件

フクロウ類が営巣できるような大木と、フクロウ類の繁殖が可能となる自然の豊かな森林があること。

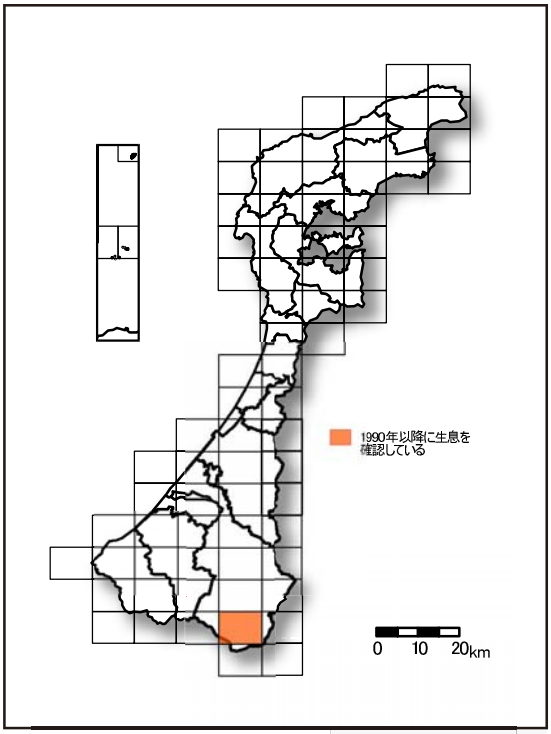
生存の危機

開発によりフクロウ類の営巣できるような大木や自然が消失することは、それに依存している本種の生息にも大きな影響を与える。

参考文献

稲垣政志・稲垣信吾 2007. コブナシコブスジコガネ*Trox nohirai* Nakane の生態について. 鰓角通信, (15) : 7-10.

写真（図）はありません。



県内の分布

オオセンチコガネ

Ceotrupes auratus auratus Motschulsky

コウチュウ目コガネムシ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由
県内では分布地が一地域に限定され、個体数も少ない。採集圧によると思われる個体数の減少が認められる。

形　態
体長は16～22㎜。体形はタマゴ型でガッチリし、強い金属光沢を持つ。本種は分布域による色彩変異が顕著で、瑠璃、緑、青、赤とさまざまな色彩変異が認められている。本県産は赤色系で、金赤色～濃赤色の美しい金属光沢を持つのが特徴である。

国内分布
北海道、本州、四国、九州、対馬、屋久島。

県内分布
津幡町、宝達志水町、羽咋市、中能登町（旧鹿島町）。三国山～宝達山～碁石ヶ峰にいたる山塊に分布する。

生　態
成、幼虫とも食糞性である。成虫は４月下旬から11月中旬まで見られ、獣糞や人糞に集まる。本種はニホンジカの分布と重なることが多いが、県内の生息地にシカは生息していない。

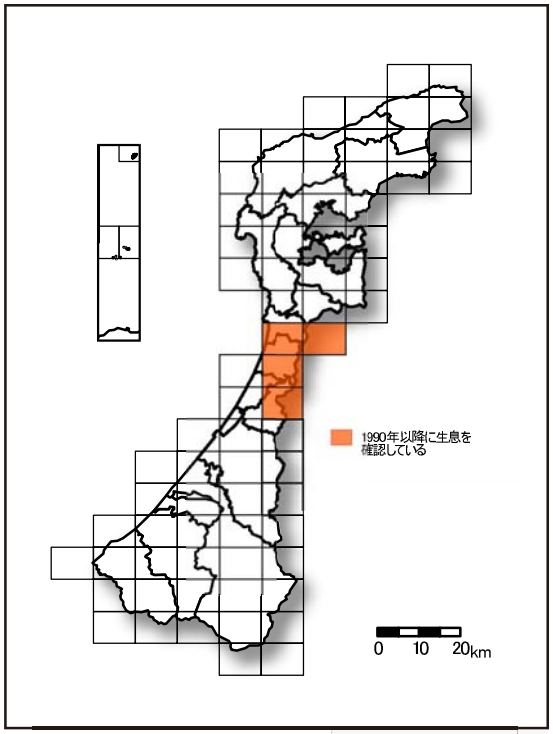
生息地の条件
エサとなる動物の糞の確保が重要であり、動物が住めるような自然環境を保つことが重要である。

生存の危機
エサとなる糞が多いとは思えない地域に分布しているためか、他県と比べて個体数は少なく、今後の個体数の維持が危惧される。本種の生息地は平坦な開けた尾根沿いに多いので、土地造成が進行している所がある。また、放牧場の縮小や廃止も気がかりであり、採集圧も問題である。（A）

特記事項
屋久島には、別亜種のヤクシマルリセンチコガネが分布する。

参考文献
高羽正治 1998. コウチュウ目コガネムシ科. 石川県の昆虫：147–152. 石川県自然保護課.
富沢　章 2001. オオセンチコガネの採集記録. 翔, （151）：２.

写真提供者：富沢章



県内の分布

オオチャイロハナムグリ

Osmoderma opicum Lewis

コウチュウ目コガネムシ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	準絶滅危惧

選定理由

幼虫の発生場所が樹洞という特殊な環境であるため、局所的に生息し個体数も少ない。

形　態

体長は23～32㎜の大型のハナムグリ。体色は黒褐色でつやがある。オスはメスと比べ、前胸背板は広く、中央の２縦隆条は強く稜状となる。メスの腹端は突出する。

国内分布

本州、四国、九州、屋久島。

県内分布

白山市。白山山系の標高450～2,000mの地域に生息する。

生　態

ブナ帯からダケカンバ帯に生息する。成虫は７～８月頃に現れ、樹洞内やその周辺に止まったり、飛翔している。また、成虫の周囲には、強いジャコウの独特の臭気が漂っている。幼虫は樹洞の腐朽部を食し、成虫になるまで２年を要す。本県において本種が確認されている樹種は、トチノキ、ブナ、カツラ、ミズナラ、キリ、ヤマナシ、サワグルミ、コメツガと多種にわたっている。

生息地の条件

幼虫の発生場所となる大木の樹洞が多く存在する広大な原生林。

生存の危機

ブナ帯下部の450mから900mの生息地では、本種の繁殖可能な樹洞のある大木は減少していて、個体数は激減している。広大な原生林の保全が重要である。（A）

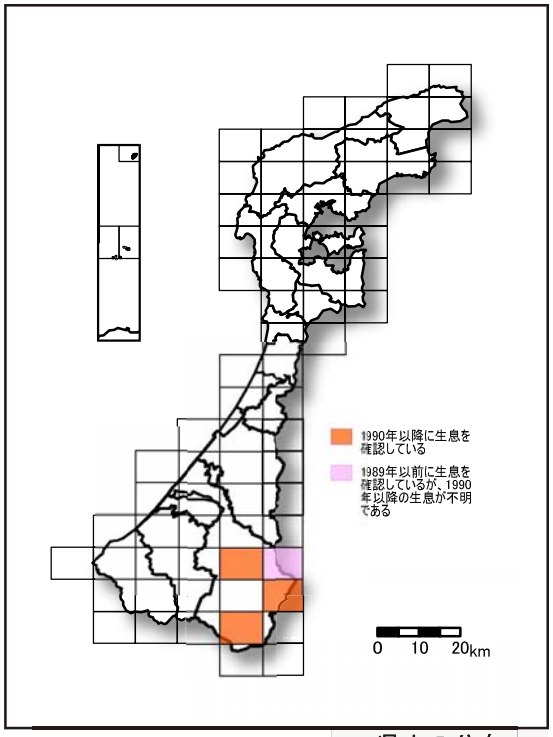
特記事項

生息地の大部分は白山国立公園内に位置する。

参考文献

高羽正治 1998. コウチュウ目コガネムシ科. 石川県の昆虫：147–152. 石川県自然保護課.

写真提供者：富沢章



県内の分布

アオマダラタマムシ

Nipponobuprestis amabilis (Snellen van Vollenhoven)

コウチュウ目タマムシ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由
日本海側の分布北限に近い種で、個体数が少ない。また、本種の生息地域での開発が急速に進んでいる。

形　態
体長は16～29㎜。タマムシとしては大型で美麗種。体色は、緑の地に黄、橙、赤などの金属光沢の斑模様がある。上翅には明瞭な縦隆脈が認められ、２対の丸い陥凹紋がある。メスの腹端は丸く、オスは三角形にえぐられる。

国内分布
本州、四国、九州、対馬。

県内分布
加賀市から能美市にいたる平地～丘陵地。白山市以北にも、食樹のソヨゴが多く分布しているが、まだ、生息が確認されていない。

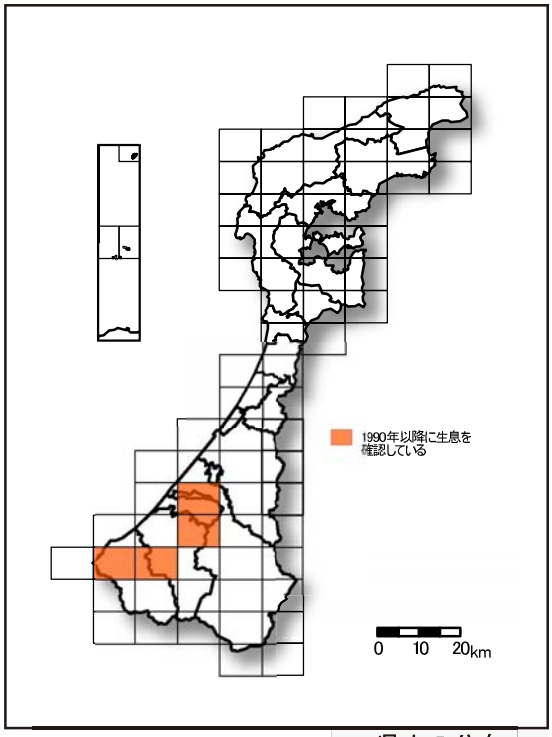
生　態
成虫は６～８月頃に現れ、ソヨゴの葉を後食する。また、ソヨゴの衰弱部や新しい枯れ木に集まる。幼虫はソヨゴの枯死部や立枯木を食し、成虫になるまで２年以上を要する。晩夏に羽化した後、そのまま蛹室で越冬する。

生息地の条件
平地から丘陵地において、ソヨゴが自生する広い林の存在が重要である。

生存の危機
本種の生息地およびその周辺において、開発が急速に進んでいる。（A）

参考文献
高羽正治 1998. コウチュウ目タマムシ科. 石川県の昆虫：155-157. 石川県自然保護課.

写真提供者：竹谷宏二



県内の分布

エサキキンヘリタマムシ

Scintillatrix kamibochiana (Obenberger)

コウチュウ目タマムシ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由　個体数が少なく、日本海側の分布西限に近いと思われる。

形　態　体長９～16㎜の中型のタマムシで、美麗種。体色は黄色味がかった緑色で、細かい黒点を散らし、上翅外縁は金橙色をおびる。オスの腹端は半月形にえぐられ、メスは丸く先端に小さい切れ込みがある。

国内分布　北海道、本州。

県内分布　白山市。旧鶴来町より旧白峰村までの手取川流域に分布する。

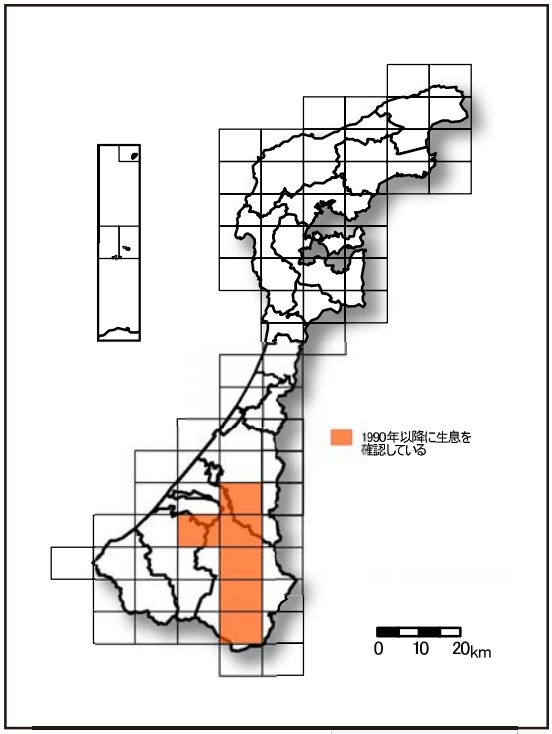
生　態　成虫は５月下旬～８月に見られ、ヤナギ類やハンノキ類の葉を後食する。幼虫はヤナギ類の生木やその衰弱部を食し、成虫になるまで２年以上を要する。発生地では、林道沿いのカワヤナギや河川敷のネコヤナギに食害が見られる。

生息地の条件　河川流域にヤナギ類の群落があること。

生存の危機　現在は生息範囲が広いが、今後、河川の改修工事等による食樹の減少が懸念される。（A）

参考文献　高羽正治 1998. コウチュウ目タマムシ科. 石川県の昆虫：155–157. 石川県自然保護課.

写真提供者：富沢章



県内の分布

ヒメボタル

Hotaria parvula Kiesenwetter

コウチュウ目ホタル科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由
石川県における生息地が加賀南部に限られていて、今後、森林開発による環境変化が生ずる可能性がある。

形　態
体長６㎜前後で、ヘイケボタルに似ているが、前胸背は淡赤色である。

国内分布
本州、四国、九州に分布する。

県内分布
加賀市、小松市、白山市の低山地から山地に生息するが、発生地は限られる。

生　態
成虫は、６月下旬から７月上旬にかけて出現する。オスはフラッシュ光を放ちながら飛翔するが、メスは後翅が退化し飛べない。幼虫は陸生で、オカチョウジガイ等の陸生貝類を食するといわれているが、本県では確認されていない。

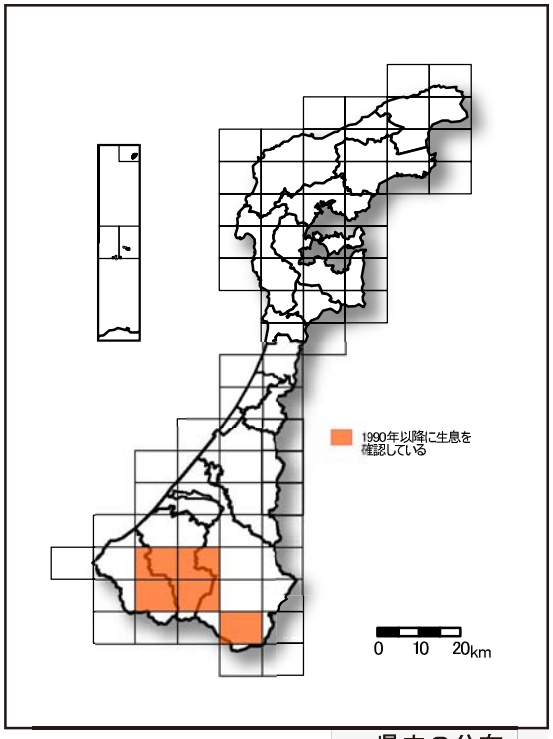
生息地の条件
渓流に比較的近く、湿気が多い杉林の林床で草や灌木が生育している所に生息する。エサとなる陸生の貝類が生息することも重要である。

生存の危機
現在のところ生息地における本種の個体数は比較的安定しているが、本種がエサとしている陸生貝類は分布が局地的で、環境の変化に敏感なため、森林の開発や荒廃による影響を受けやすい。一部の生息地では、開通した道路の街灯照明が本種の生態に影響を与えている。（A）

特記事項
石川県のヒメボタルはいわゆる「小型ヒメボタル」で、現在のところ杉林以外の林床からは見つかっていない。

参考文献
大場信義 2004. ホタル点滅の不思議. 199pp. 横須賀市自然･人文博物館発行, 特別展示解説書.
加藤明宏 2007. ヒメボタルの調査. とっくりばち, （75）: 22–24.

写真提供者：富沢章



県内の分布

ババジョウカイ

Athemus babai (Ishida)

コウチュウ目ジョウカイボン科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由　局地的分布を示し、開発されやすい湿地に生息する。

形　　態　体長７～８㎜である。前胸背は黄色で中央に黒紋を有する。上翅には黒地に黄褐色の縦すじがある。

国内分布　関東以西の本州、四国、九州に分布する。

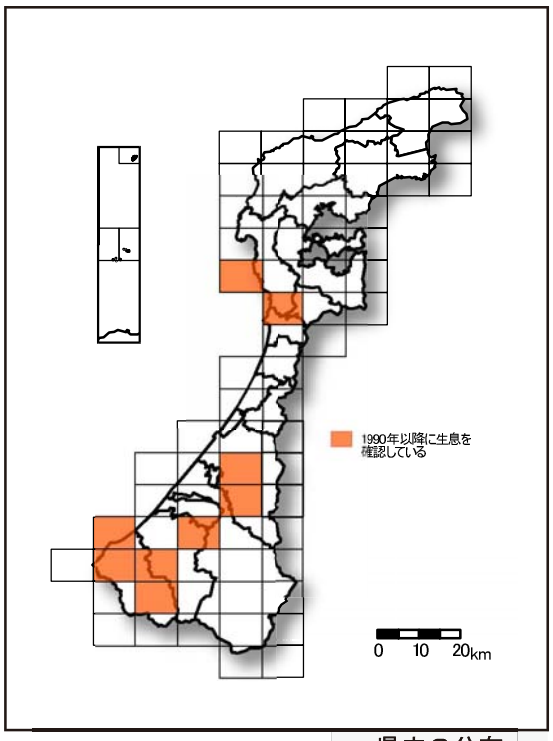
県内分布　加賀市、小松市、金沢市、志賀町の低山地の湿地から生息が知られている。

生　　態　成虫の出現期は４月から５月である。湿地帯の草地に生息し、他の小昆虫を捕食する。幼虫は林床に生息し、肉食性である。

生息地の条件　低山地において、湿地とそれに続く草地が存在することが重要である。

生存の危機　本種の生息する湿地帯は開発等により、埋め立てられる可能性が高い。また、植生の遷移や乾燥化による湿地の消滅も大きな脅威となる。（A, B）

標本提供者：高羽正治



県内の分布

ヤマトヒメメダカカッコウムシ

Neohydnus hozumii Nakane

コウチュウ目カッコウムシ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由
護岸工事や宅地開発等にともなうヨシ原の減少や消失により、ヨシ原に固有に生息する本種もまた減少傾向にある。

形　態
体長5.0～6.0㎜で、前胸の色彩には褐色型と黒色型があるが、県内で見られる個体は大部分が黒色型である。上翅には１対の黒色斑紋があるが、その大きさや形には変異がある。

国内分布
本州、四国および九州に局所的に分布する。2003年には青森県から記録されており、同県が分布の北限となっている。日本固有種。

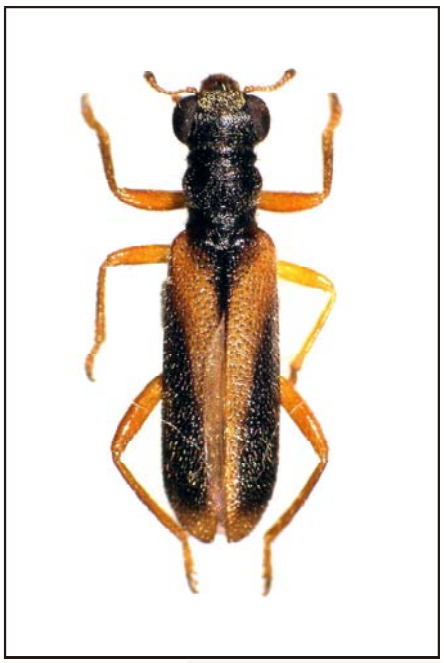
県内分布
加賀市、小松市、金沢市および七尾市で局所的に確認されている。

生　態
成虫は６月頃に出現し、飛翔と歩行を交えて俊敏に動き回る。他の小さな昆虫類を捕食すると考えられている。ヨシ原に固有に生息するが、幼虫期についての詳細な生態はわかっていない。

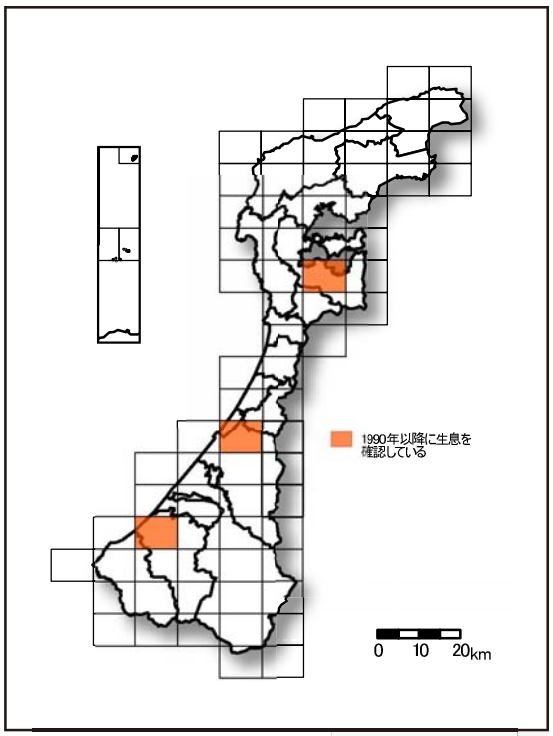
生息地の条件
ヨシ原があること。

生存の危機
護岸工事、干拓事業や宅地開発等によるヨシ原の減少や消失が、本種の生息に大きな打撃を与えている。ヨシ原の開発は全国的に行われており、本種の個体数もまた全国的に減少傾向にある。（A）

参考文献
吉道俊一 2006. 石川県におけるヤマトヒメメダカカッコウムシ（ホヅミカッコウムシ）事情. とっくりばち, (73) : 1-5. 石川むしの会.



標本提供者：吉道俊一



県内の分布

クロズハマベゴミムシダマシ

Epiphaleria atriceps Lewis

コウチュウ目ゴミムシダマシ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由
近年の県内の砂浜環境における詳細な調査にもかかわらず、内灘町宮坂以外からは本種を見いだすことができず、分布が極めて局所的であり、個体数も多くない。

形　態
体長約 5.0㎜。体色は黄褐色で、頭部、前胸背板の中央後部と上翅の中央前部が黒色を呈する。

国内分布
本州、四国、九州に分布する。

県内分布
内灘町宮坂の権現森海水浴場周辺から得られているのみである。

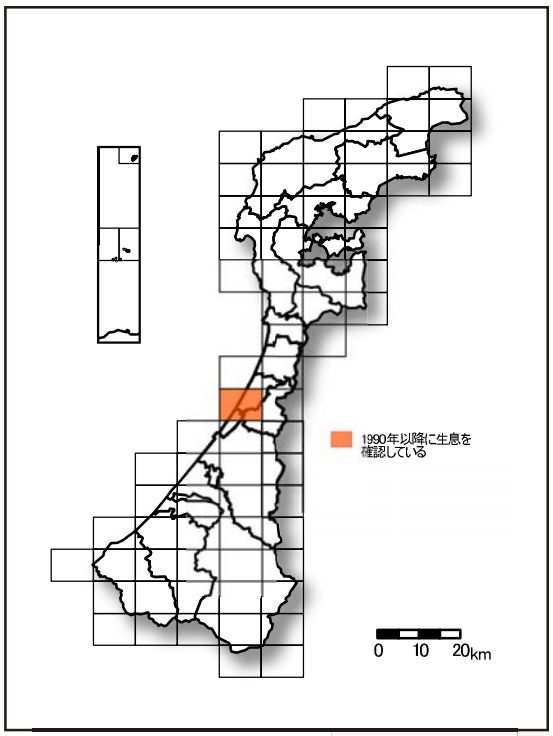
生　態
海浜性のゴミムシダマシで、初夏から秋季にかけて、砂浜に漂着した魚の死体、海藻や流木の下などに見られる。やや湿った砂から見つかることが多い。

生息地の条件
海藻や流木などの隠れ場所となるものが漂着し、その下に湿った状態の砂が維持されていること。乾燥した砂は本種の生息には適さないようである。

生存の危機
護岸工事のほか、海水浴客の投棄する様々なゴミ類、化学薬品等の入った容器の漂着、砂浜への車両の進入などによる砂浜環境の汚染や破壊は、局所的に分布する本種にとって脅威となる。（A）

参考文献
高羽正治 1995. 石川県の砂丘地にいる甲虫. アカハネムシ, (15) : 5.

標本提供者：吉道俊一



県内の分布

フタスジカタビロハナカミキリ　コウチュウ目カミキリムシ科

Brachyta bifasciata japonica (Matsushita)

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由　本来、個体数が少ない種である。ヤマシャクヤクと密接な関係を持つ本種は、ヤマシャクヤクの減少とともに、生息地、個体数が激減している。

形　態　体長は16～18㎜。中型のハナカミキリで、体形は太く短かい。頭部および前胸は黒色、上翅は白黄色地に３対の黒い斑紋を持つ。脚は黒と黄白色の２色に分かれる。触角は太く、第２～５節が白黄色で他は黒色。その長さはオスで上翅の3/4に達する。

国内分布　本州、四国。

県内分布　白山市（左礫、木滑、一里野、中宮温泉、新岩間）。

生　態　成虫は５～６月上旬にブナ帯下部のヤマシャクヤクの花に飛来し、花粉を食す。幼虫はその塊根部分や地中の朽ち木を食するといわれているが、その生態は、不明な点が多い。

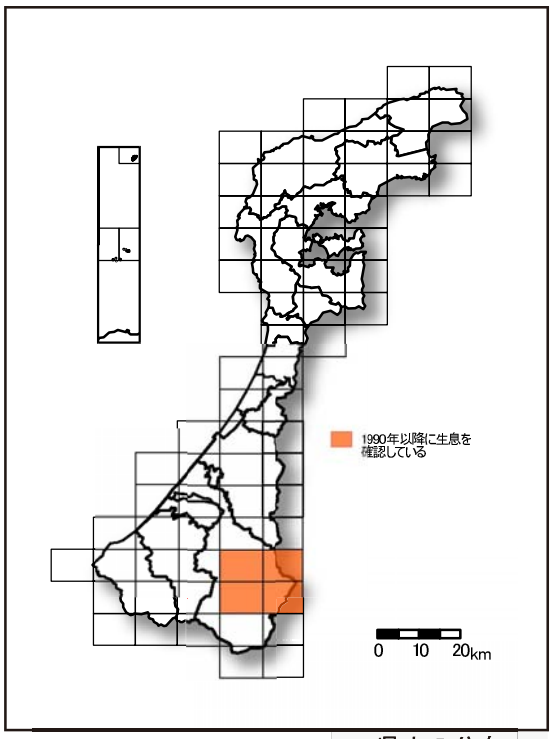
生息地の条件　自然林の残る山地において、ヤマシャクヤクが自生していることが重要である。

生存の危機　山野草としてヤマシャクヤクが採取されることが多くなり、そのことが本種の減少を招く一因となっている。他に、林道建設や土木工事も脅威となっている。（A）

特記事項　北海道には別亜種がいる。

参考文献　井村正行 1998. コウチュウ目カミキリムシ科. 石川県の昆虫：197–217. 石川県自然保護課.

写真提供者：野中勝



県内の分布

トラフカミキリ

Xylotrechus chinensis (Chevrolat)

コウチュウ目カミキリムシ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由

丘陵地や低山地におけるクワの古木の減少により、個体数が激減した。

形　態

体長は17～26㎜。大型のトラカミキリで、がっしりした体形である。頭部は黄色で、前胸背板は前方より黄、黒、赤褐色、黒の順に横帯をもつ。上翅は黄色の地に黒の横斑紋を持ち、スズメバチ類に擬態している。触角は太くて短く、オスでも体長の半分程度である。

国内分布

北海道、本州、四国、九州、伊豆諸島、琉球列島。

県内分布

白山市、金沢市、津幡町。

生　態

成虫は７～８月に出現し、クワの生木に集まる。幼虫は生木の衰弱した太い部分の樹皮下を食する。

生息地の条件

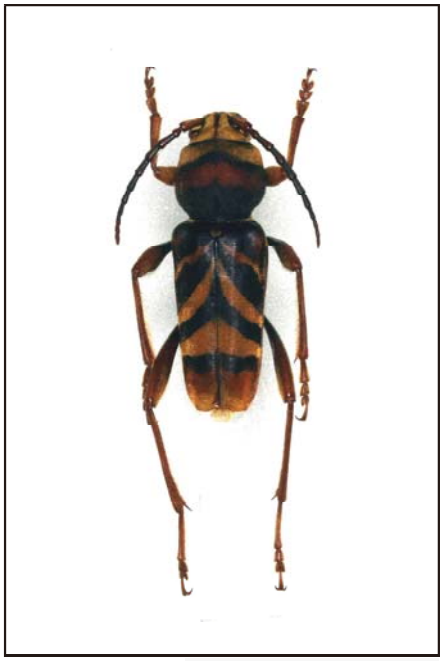
幼虫はクワの古木の衰弱部を食するため、古木が多く残されていることが重要である。

生存の危機

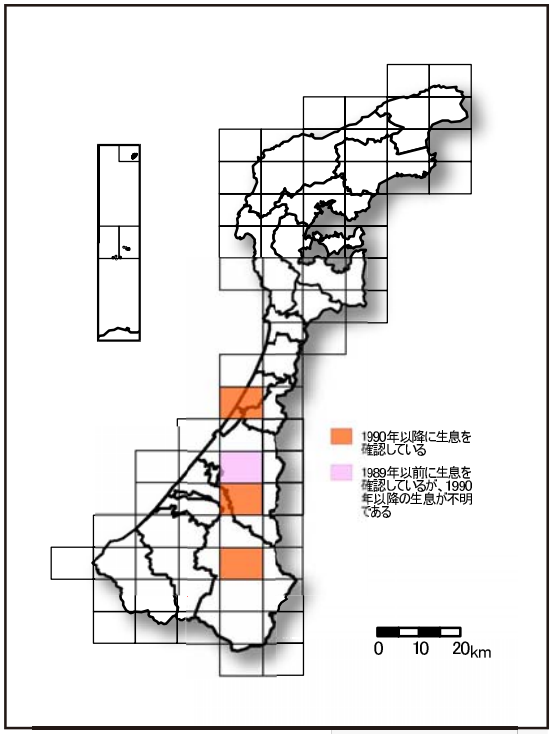
かつては、クワの害虫として養蚕家に嫌われたほどであり、低山地のクワの古木によく見られた。しかし、養蚕が行われなくなったこと、里山の開発が進んだことなどにより、クワの木が減少し、本種の個体数が激減した。（A, B）

参考文献

井村正行 1998. コウチュウ目カミキリムシ科. 石川県の昆虫：197–217. 石川県自然保護課.



標本提供者：入場登



県内の分布

ニセリンゴカミキリ

Oberea mixta Bates

コウチュウ目カミキリムシ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由
本県は、本種と近縁のシラハタリンゴカミキリとの分布境界線に近い。本県での記録は１例のみであり、きわめて稀である。

形　態
体長は12～18㎜。体形は筒状で細長い。前胸背板は橙黄色で、上翅は黒色、上翅基部は橙黄色部がある。脚は橙黄色、頭部と触角は黒く、触角の長さはオスで翅端にとどく程度である。

国内分布
本州（愛知県以西）、四国、九州。

県内分布
輪島市（旧門前町白禿）。

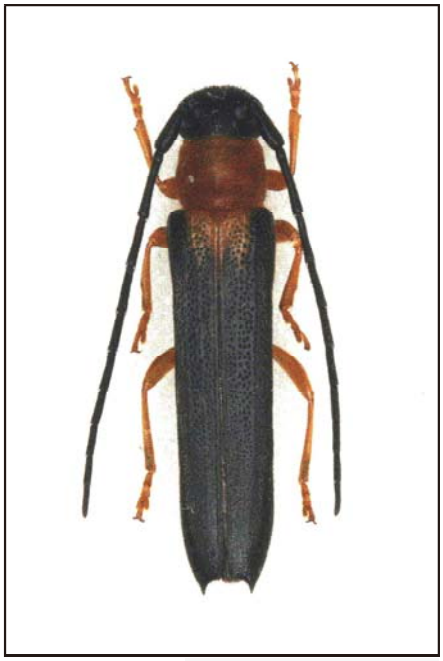
生　態
成虫は５～８月に見られ、スイカズラの葉脈を後食し、幼虫はその茎を食する。成虫の後食痕は、特徴的であり、本種の生息の指標となる。

生息地の条件
スイカズラの群生地があること以外は不明である。

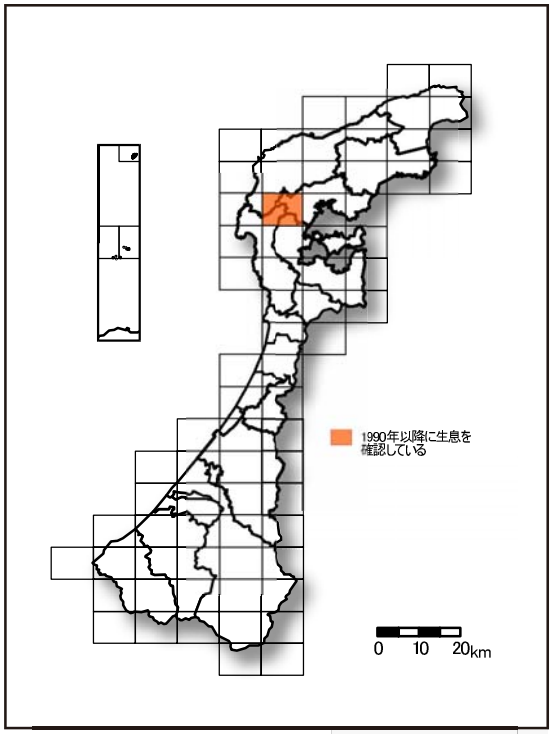
生存の危機
生息地における当面の環境改変はないが、生息地は廃田が広がる林縁環境であり、開発の恐れのあることは否定できない。（A）

特記事項
リンゴカミキリ属は本県から６種記録されているが、ホソツツリンゴカミキリ以外はよく似ているので、同定には注意を要する。

参考文献
井村正行 1998. コウチュウ目カミキリムシ科. 石川県の昆虫：197–217. 石川県自然保護課.
井村正行 2005. 石川県におけるニセリンゴカミキリの初記録報告. とっくりばち, （73）：31.



標本提供者：富沢章



県内の分布

ヌタッカゾウムシ

Trichalophus nutakkanus (Kono)

コウチュウ目ゾウムシ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由　本県では白山の高山帯のみに生息し、国内分布の西限にあたるうえ、個体数が少ない。

形　態　体長は13㎜程度である。体形は細長い流線型である。体色は黒いが、白い粉のような模様を有している。

国内分布　北海道と本州の高山帯に分布する。

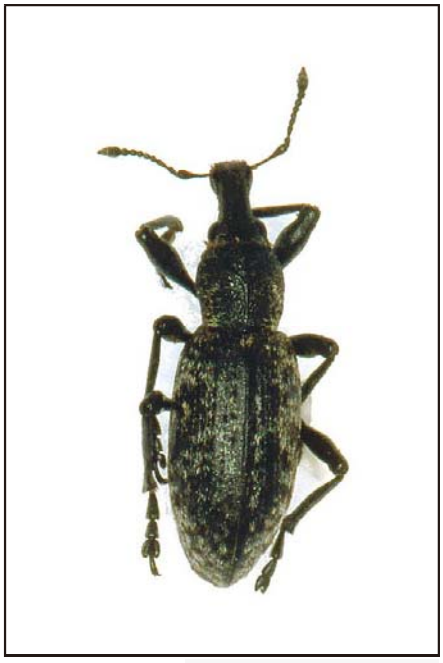
県内分布　白山の頂上付近（標高2,500～2,700m）からのみ得られている。

生　態　頂上付近の石の下から採集されている。行動は緩慢であるが、生態の詳細はわかっていない。

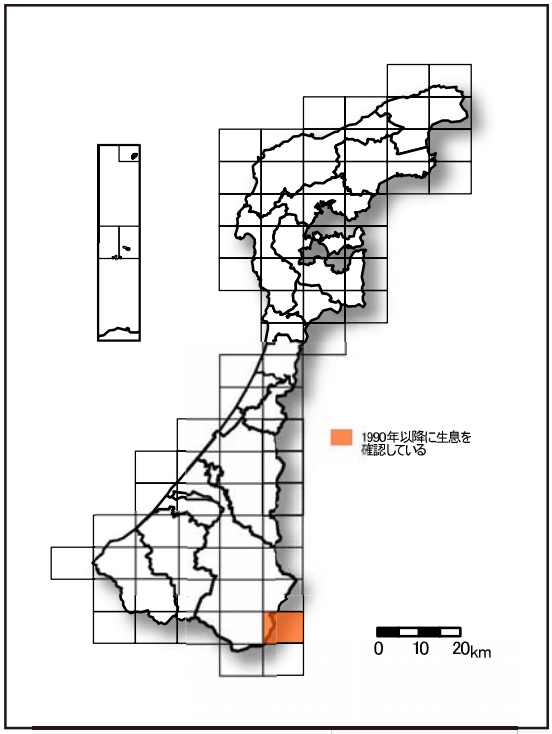
生息地の条件　高山帯で岩石が多く、草地がまばらな所に生息する。

生存の危機　登山道整備等の工事や登山者の増加による露岩地への踏み込みは生息環境の悪化につながる。高山帯のみに分布するため、白山における生息域が狭く生息基盤が脆弱である。（A）

特記事項　生息地は白山国立公園特別保護地区内にある。



標本提供者：高羽正治



県内の分布

ウマノオバチ

Euurobracon yokahamae (Dalla Torre)

ハチ目コマユバチ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	準絶滅危惧

選定理由
日本全土に広く分布するが、県内の個体数は少なく、希少種といえる。

形　態
体長は15～24㎜で、体全体は黄赤褐色をしており、腹部は暗褐色を呈することがある。長く伸びた産卵管は、体長の6.5～９倍に達する。

国内分布
北海道、本州、四国、九州に広く分布する。

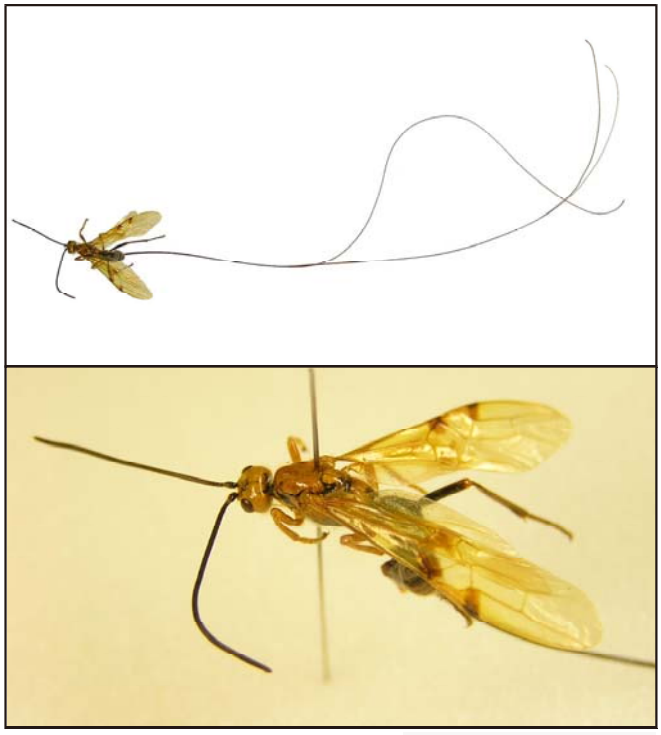
県内分布
白山市、金沢市、旧高松町（未発表）、穴水町での記録がある。

生　態
シロスジカミキリ幼虫の穿孔を見つけ、長く伸びた産卵管を挿入して幼虫体表面に産卵する。

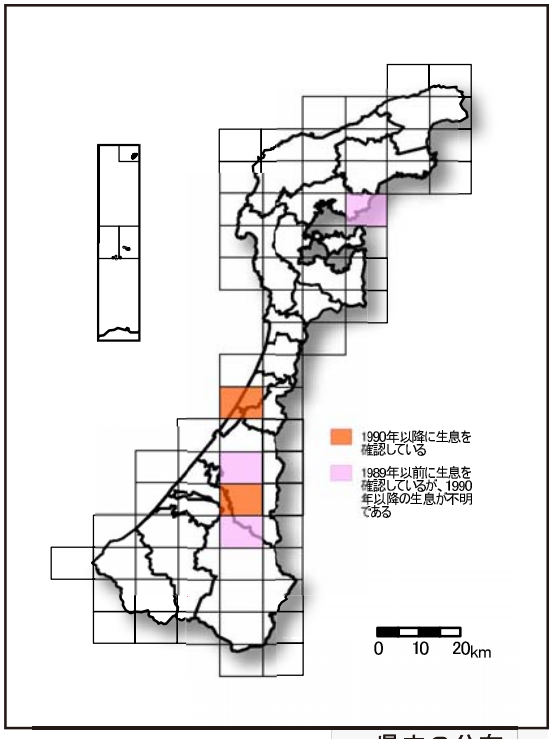
生息地の条件
シロスジカミキリのすむ雑木林に生息する。穴水町の記録はクリ園内である。

生存の危機
宿主のシロスジカミキリが里山の雑木林に生息するため、開発等により里山の広葉樹林が破壊されれば、本種の生息が危ぶまれる。（A）

参考文献
平嶋義宏ほか 2008. 新訂 原色昆虫大図鑑 第Ⅲ巻 : 515. 北隆館. 東京.



標本提供者：富樫一次



県内の分布

キアシクロハラボソコマユバチ

Meteorus flavicoxa Maeto

ハチ目コマユバチ科

石川県カテゴリー　準絶滅危惧

国カテゴリー　なし

選定理由　国内では３道県でしか採集されておらず、本県が分布の西限となっている。また、採集例も少ないことから、比較的珍しい種といえる。

形　態　体長は10㎜内外で、メスの産卵管が長いのが特徴である。体は黒色、脚は黄色を呈している。

国内分布　北海道（豊平峡、野幌）、山形県長者原、石川県白山でしか採集されていない。

県内分布　県内では、白山の標高1,500～1,700mの区間で採集されているのみである。

生　態　鱗翅類の幼虫に寄生するものと思われるが、種類については不明である。

生息地の条件　亜高山帯に生息する。

生存の危機　白山の特別保護地区に生息しているため、現在のところ生存を脅かす要因はないと思われる。

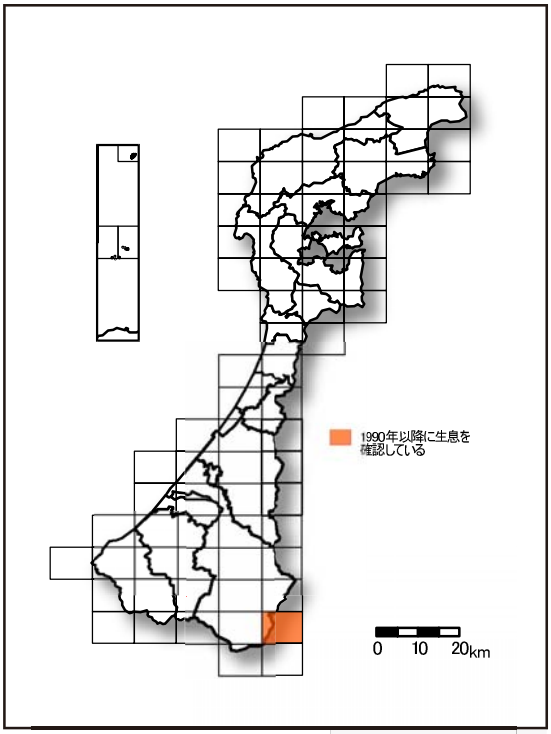
特記事項　白山の特別保護区地内に生息する。

参考文献

Maeto, K. 1986. Systematic Studies on the Tribe Meteorini from Japan (Hymenoptera, Braconidae) II. The *corax* Group of the Genus *Meteorus* HALIDAY. Kontyu, Tokyo, 54(3): 405-4 13.

富樫一次 2002. 加賀白山初記録の昆虫類（第４報）. 石川県白山自然保護センター研究報告 第29集 : 7-16.

写真（図）はありません。



県内の分布

クロモンアメバチ

Dicamptus nigropictus (Matsumura)

ハチ目ヒメバチ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由
日本全土に広く分布しているようであるが、個体数は少なく、稀である。

形　態
体長は約20㎜で、体色は茶褐色（飴色）をしており、第３腹節に黒い紋があるのが特徴である。翅は透明であるが、縁紋部は後縁を除いて黄色をしている。

国内分布
栃木県、石川県、岐阜県、愛知県、京都府、愛媛県、福岡県、鹿児島県（奄美大島）、沖縄県にて採集されている。

県内分布
白山市の舟岡山、宝達志水町にて採集記録がある。

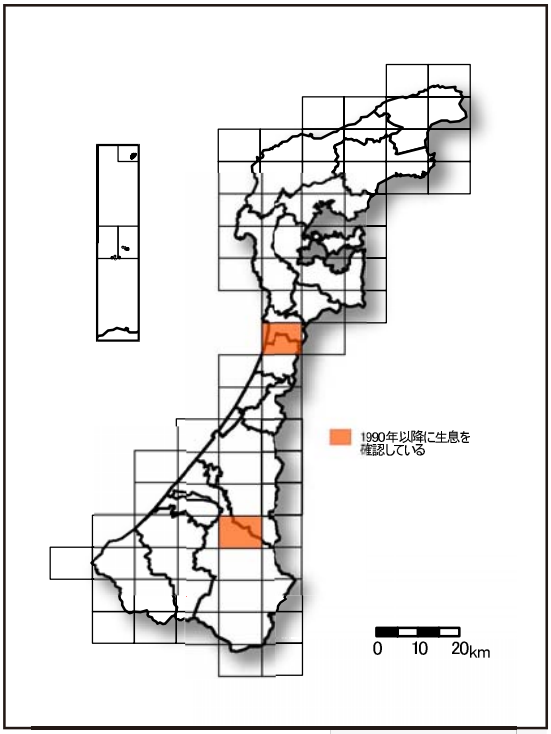
生　態
マツカレハに寄生することが知られており、灯火で採集されている。

生息地の条件
マツなどの針葉樹林の発達した地域に生息する。

生存の危機
マツの害虫駆除のための薬剤散布によって、本種の生存が危ぶまれる。（A）

参考文献
富樫一次 1998. ハチ目. 石川県の昆虫：276. 石川県自然保護課.
平嶋義宏ほか 2008. 新訂 原色昆虫大図鑑 第Ⅲ巻 ： 512. 北隆館. 東京.

写真（図）はありません。



県内の分布

エサキムカシハナバチ

Colletes esakii Hirashima

ハチ目ムカシハナバチ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由　本県は国内分布上の東北限となっている。

形　態　体長12㎜ほどで、腹部背面に黄褐色短毛を密生する。腹部第１背板の基半部には、淡黄灰色の短毛を密生する。

国内分布　石川県、福井県、鳥取県、島根県、鹿児島県に分布する。

県内分布　小松市、白山市、金沢市、津幡町、志賀町にて採集記録がある。

生　態　崖の斜面や粘土質土壌の平坦地に生息し、ツクシハギに訪花しているのが観察されている。

生息地の条件　粘土質土壌の所に営巣する。

生存の危機　崖の場合、道路に面した斜面に営巣するので、刺害を防ぐため薬殺駆除されてしまうことがある。また、宅地造成、道路建設などで、営巣地がなくなることもある。（A）

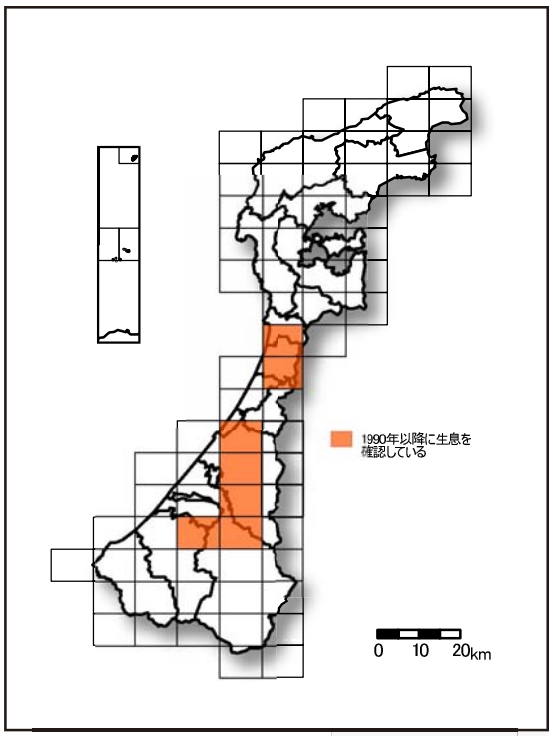
参考文献

Ikudome, S. 1989. A revision of the Family Colletidae of Japan (Hymenoptera: Apoidae). Bull. Inst. Minami-Kyusyu Reg. Sci., 5:43–314.

富樫一次 1991. 石川県産ムカシハナバチ類の分布資料. 福井虫報, （８）: 21–25.

平嶋義宏ほか 2008. 新訂 原色昆虫大図鑑 第Ⅲ巻 : 573. 北隆館. 東京.

標本提供者：富樫一次



県内の分布

カニギンモンアミカ

Neohapalothrix kanii Kitakami

ハエ目アミカ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由
国内および県内における分布が局限されている。

形　態
オスの体長は６㎜内外で、翅長は６～6.5㎜。メスの体長は4.5～５㎜、翅長は６～6.5㎜である。幼虫の腹背が扁平である。改称前の種名はカニアミカ。

国内分布
石川県、長野県、岐阜県、和歌山県に分布する。

県内分布
白山市渡津～若原までの大日川と杖川で生息が確認されている。

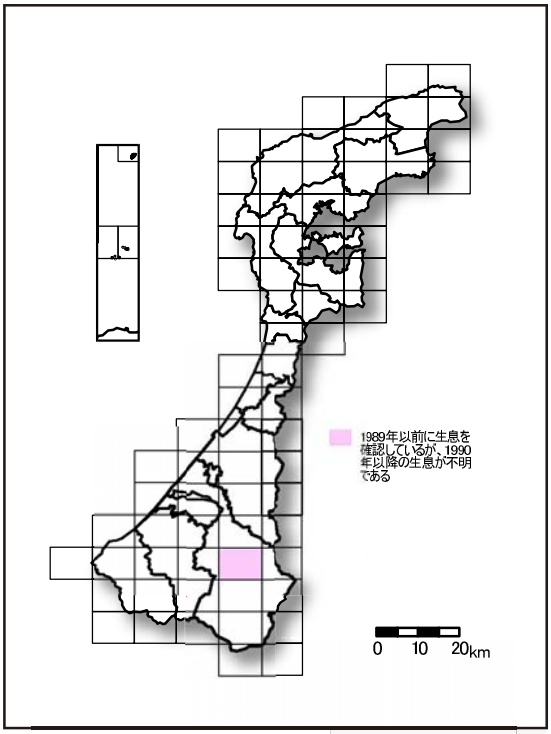
生　態
年１化性で、成虫は６～７月に出現する。幼虫はやや流速のある渓流の水底の礫面上で固着生活をする。

生息地の条件
水質の良い流域に生息する。

生存の危機
河川改修や土砂の流入、水質汚染が進めば、生存が脅かされる。（A）

参考文献
富樫一次 1960. 手取川水系に産するアミカ類. 生物研究（福井）, ４(１)： 1-2.
平嶋義宏ほか 2008. 新訂 原色昆虫大図鑑 第Ⅲ巻 : 384. 北隆館. 東京.

写真（図）はありません。



県内の分布

ニホンアミカモドキ

Deuterophlebia nipponica Kitakami

ハエ目アミカモドキ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類

選定理由

本州、九州でわずかの分布地が知られているだけで、著しく減少しているとみられている。また世界的にもごくわずかの種しか存在しない特異なハエ目昆虫で、学術的にも貴重である。

形　態

体長1.8～4.0㎜で細長く、体色は暗褐色。単眼を欠く。翅は非常に幅広く、また薄くて網目状のシワが走っており、翅脈が退化している。口も退化していて、成虫になってからは餌をとらない。脚は細長く、ほとんど歩くことはできない。オスの触角は非常に長く、体長の３倍に達する。

国内分布

本州と九州に分布する。

県内分布

1971年10月に白山市小嵐谷（手取ダム右岸）で幼虫１個体が採集された記録がある。

生　態

幼虫は山地渓流の急流部の石上に生息する。成虫は数時間の寿命しかなく、野外では容易に発見できない。オスの出現はまれで、単為生殖の可能性も示唆されている。

生息地の条件

水のきれいな山地渓流の存在が必要である。夏の水温が18℃以下、秋の水温が４℃以上の川に生息するという調査例がある。

生存の危機

渓流の土石流や林道建設で渓流環境が悪化すると絶滅する恐れがある。かつては京都周辺の渓流でも多産していた所があったが、渓流環境の悪化で、現在は全国的にも少数の幼虫が採集されているのみといわれる。（A）

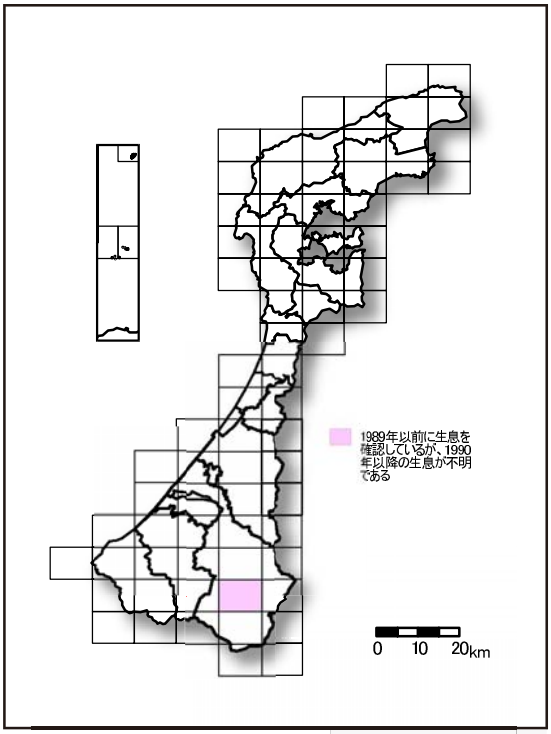
参考文献

谷田一三 1975. 白山周辺の河川における水生昆虫目録（1）. 白山自然保護センター研究報告, 第２集：65–75.

西尾規孝 2001. ニッポンアミカモドキの生活史. まつむし, (91)：83–89. まつもと虫の会会誌.

林　利彦 2006. ニホンアミカモドキ. 改訂・日本の絶滅のおそれある野生生物 昆虫類（環境省編）, 139pp. 自然環境センター. 東京.

写真（図）はありません。



県内の分布

タシマツルギアブ

Acrosathe tashimai Nagatomi et Lyneborg

ハエ目ツルギアブ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由　土木工事の影響を受けやすい海浜にすむうえ、生息地が局所的である。

形　態　体長10㎜内外、胸部及び腹部は暗褐色をしており、白色の軟毛で覆われている。

国内分布　北海道（斜里町、サロマ湖）、新潟県、石川県、福岡県、佐賀県、鹿児島県。

県内分布　1996年に能美市山口の海浜で採集された記録が唯一であるが、現在も生息しているか不明である。

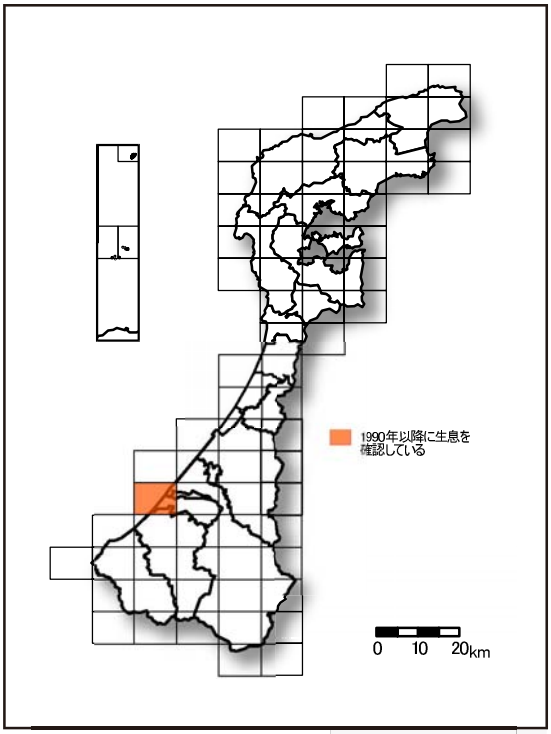
生　態　海浜性のアブで、小昆虫を捕らえ体液を吸う。

生息地の条件　海浜植物群落の広がる砂丘地に生息する。

生存の危機　海浜の浸食や護岸工事により、海浜植物が消滅すると絶滅する恐れがある。（A）

参考文献　Nagatomi, A. and Lyneborg, L. 1988. The Japanese Acrosathe (Diptera, thenanidae). Kontyu, 56: 600–617.

写真（図）はありません。



県内の分布

ギフチョウ

Luehdorfia japonica Leech

チョウ目　アゲハチョウ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類

選定理由

日本特産種で、本州本島にのみ生息している。本県での生息地は少なくはないが、いずれの地域においても土地開発などにより、生息地は狭められている。

形　態

開張50㎜程度の中型種で、モンシロチョウほどの大きさである。黄色と黒のだんだら模様で、後翅外縁には橙色と青色の斑紋が並び、左右に一対の赤斑とやや長い尾状突起がある。

国内分布

北限は秋田県の鳥海山麓、西限は山口県萩市付近で、東京・神奈川地区、山梨・静岡地区（富士川流域）に孤立分布域がある。

県内分布

能登地方には分布せず、金沢市を通過する北陸自動車道以南の山地に広く分布している。しかし、金沢市戸室山・キゴ山周辺とその北西部一帯、手取川ダム以奥右岸、吉野谷村中宮集落以奥、標高1,000ｍを越える地域での生息は確認されていない。

生　態

主に落葉広葉樹林に生息し、ヒメカンアオイ、ナタデラカンアオイを食草としている。年１回３月下旬から発生し、５月中旬まで見られる。成虫は、明るい林内を飛び、山頂部や尾根筋、伐採跡地などに集まる。卵は、カンアオイ類の新葉裏面に10個程度が並んで産み付けられ、２週間程で孵化する。幼虫期は40日程、地表近くで蛹化し、そのまま越夏越冬する。

生息地の条件

林床にカンアオイ類が豊富に生え、春は明るく夏は薄暗い落葉広葉樹林をおもな生息地としている。金沢市周辺では、管理が行き届いたモウソウチク林も重要な生息地となっている。

生存の危機

おもな生息場所となっている里山の落葉広葉樹林は、土地開発が最も行われ易い場所である。また、柴刈りや下刈りなどの人手が入らなくなったことによって森林が荒廃し、生息場所は狭められつつある。（A, B）

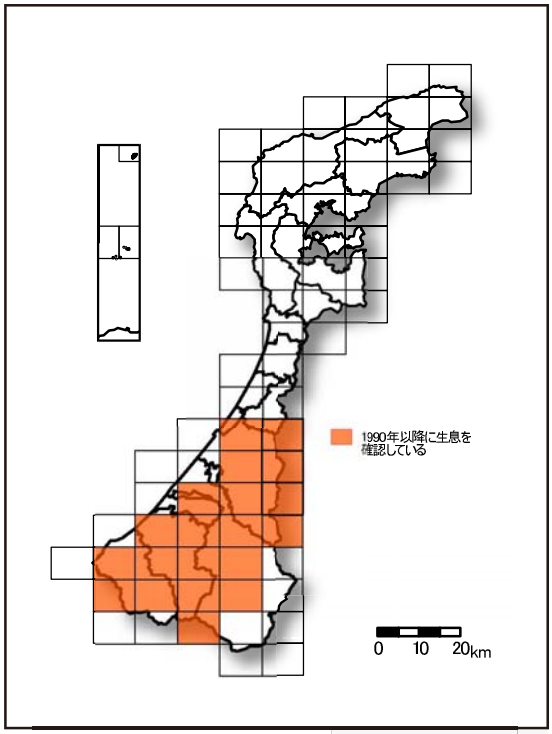
特記事項

Luehdorfia（ギフチョウ）属は極東の特産種で、ギフチョウは日本の本州本島のみに生息する。

参考文献

福田晴夫ほか 1982. ギフチョウ. 原色日本蝶類生態図鑑（Ⅰ）：76-80. 保育社. 大阪.

写真提供者：松井正人



県内の分布

ホシチャバネセセリ

チョウ目セセリチョウ科

Aeromachus inachus inachus (Menetries)

石川県カテゴリー　準絶滅危惧

国カテゴリー　絶滅危惧Ⅰ類

選定理由

丘陵、低山地の生息地は、近年急速に失われている。

形　態

開張25㎜内外の小型種。翅表は茶褐色で前翅には白色の点列がある。裏面は後翅が黄褐色で前後翅ともに白色の点列がある。

国内分布

本州と対馬に分布している。福井・石川県境付近の生息地は飛び離れた場所で、周辺は分布の空白地帯になっている。

県内分布

食草は県内に広く見られるにもかかわらず、現在は手取川以南の丘陵、低山地で分布が確認され、特に小松市、能美市に生息地が多い。

生　態

年２回発生し６月中旬から９月上旬まで見られるが、小型であり飛翔が敏速なので、その存在にはなかなか気付かない。林間の小さな草地や道路沿い、林の周辺で見られ、各種の花に集まる。幼虫は木陰に生える貧弱なミヤマアブラススキを食べ、幼虫で越冬する。県内での食草は、ミヤマアブラススキしか知られていない。

生息地の条件

丘陵、低山地の明るい雑木林やその林縁部が生息場所となっているが、人手が加わった明るい林であれば、スギ林やアカマツ林でも発生する。

生存の危機

主な生息場所となっている里山の落葉広葉樹林は、土地開発が最も行われやすい場所である。また、柴刈りや下刈りなどの人手が入らなくなったことによって森林が荒廃し、生息場所となる明るい林が少なくなっている。（A, B）

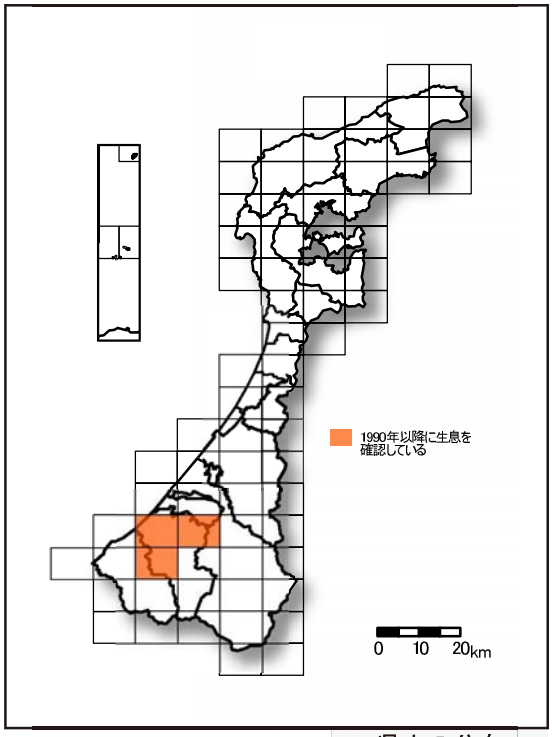
特記事項

良好な里山環境の標徴種として重要。

参考文献

福田晴夫ほか 1984. ホシチャバネセセリ. 原色日本蝶類生態図鑑（Ⅳ）：220-223. 保育社. 大阪.

写真提供者：大脇淳



県内の分布

昆虫類

オオチャバネセセリ

Polytremis pellucida pellucida (Murray)

チョウ目セセリチョウ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由 かつては、普通に見られる種でいたるところで観察されたが、1990年代から観察数が減少している。

形　態 開張35㎜程の小型種。翅表は黒褐色で後翅裏面の白斑がジグザグに並ぶ点で近似種と区別できる。

国内分布 北海道から九州まで広く分布するが、全国的に減少している。

県内分布 加賀から能登にかけて平地から山地まで広く分布し普通に観察されたが、観察数が減っている。

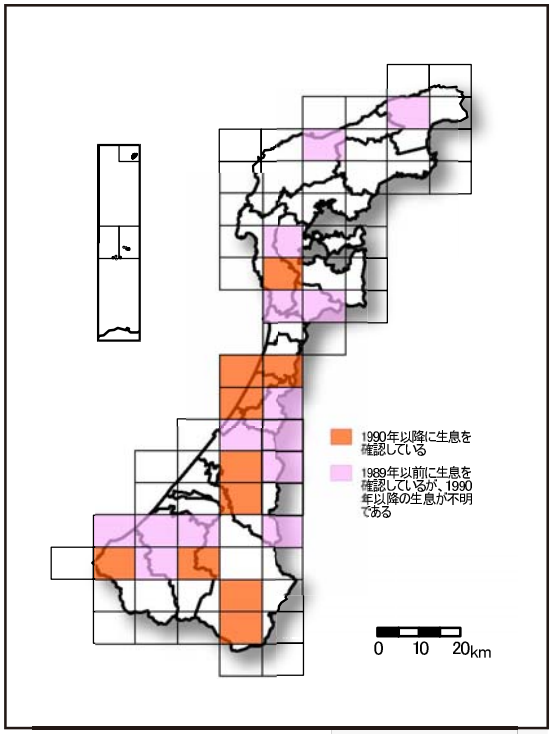
生　態 年２回発生し、６月上旬から10月上旬まで観察されている。敏速に飛翔し各種の花を訪れ、特にアザミ類、ヒメジョオン、オカトラノオ、ウツボグサに集まる。幼虫は、主としてメダケやササなどタケの仲間を食べる。

生息地の条件 適度に人手が加わった、明るい疎林的環境と思われる。

生存の危機 森林に人手が加わらなくなったことが影響していると思われる。（A, B）

参考文献 福田晴夫ほか 1984. オオチャバネセセリ. 原色日本蝶類生態図鑑（Ⅳ）：266-269. 保育社. 大阪.

写真提供者：大脇淳



県内の分布

ヘリグロチャバネセセリ　チョウ目セセリチョウ科

Thymelicus sylvaticus sylvaticus (Bremer)

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由　分布は局地的で生息地が限定されている。

形　態　開張30㎜程の小型種。翅の地色は、表裏ともに赤橙色で、近似種のスジグロチャバネセセリは、石川県では観察されていない。

国内分布　北海道から九州にかけて離散的に分布し、関東地方、中部地方、中国地方に生息地が多いが、全国で減少している。

県内分布　白山市の旧吉野谷村、旧尾口村、旧白峰村の手取川右岸で観察されている。

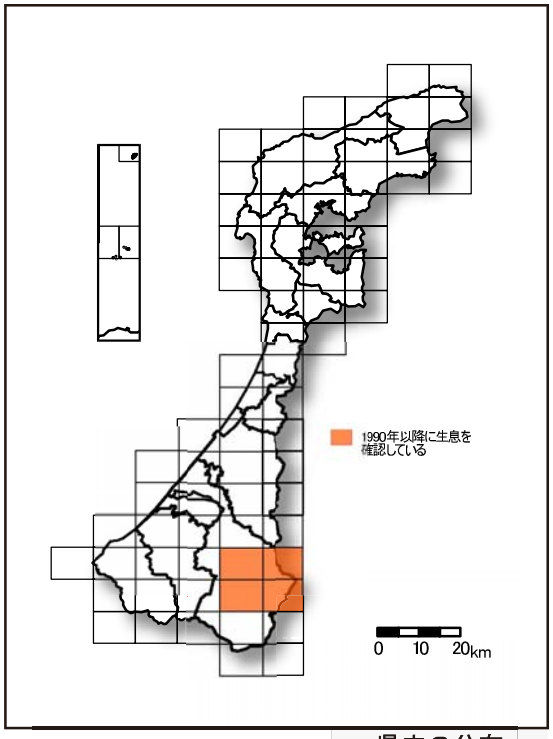
生　態　７月下旬から８月にかけて年１回発生し渓流沿いの草地を敏速に飛翔し、オカトラノオなどの花を訪れる。幼虫は露岩地に生えるヒゲノガリヤスから観察され、５月から６月には葉を筒状に丸めた巣が観察できる。

生息地の条件　ヒゲノガリヤスが生える露岩地が生息場所になっている。

生存の危機　道路改良などによって露岩地がコンクリート化されると発生地が消失する。（A）

参考文献　福田晴夫ほか 1984. ヘリグロチャバネセセリ. 原色日本蝶類生態図鑑（Ⅳ）：234-236. 保育社. 大阪.

写真提供者：竹谷宏二



県内の分布

ウラギンスジヒョウモン　チョウ目タテハチョウ科

Argyronome laodice japonica (Menetries)

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	準絶滅危惧

選定理由　近年、全国的に減少し、加賀南部では激減している。

形　態　開張50～60㎜程の中型種。翅表の地色は赤褐色で黒い豹柄がある。オオウラギンスジヒョウモンに良く似ているが、後翅表基部よりの豹柄は、本種では帯状に連続せず点状に分離する。

国内分布　北海道から九州まで広く分布するが、全国的に減少している。

県内分布　加賀から能登にかけて広く分布し、普通に観察されるが、加賀南部では近年、稀にしか観察されなくなった。

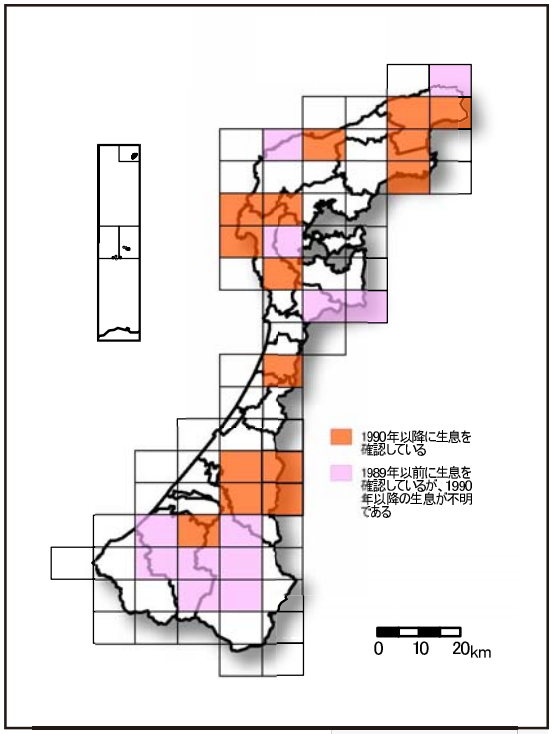
生　態　年１回の発生で、６月中頃から森林周辺の明るい草地で観察され、アザミ類やオカトラノオなどの花で吸蜜する。低標高地では盛夏には夏眠し秋に再び活動するが、奥山では盛夏にも活動する。卵は、地表の落葉、枯枝、小石などに産まれ、幼虫はスミレの仲間を食べる。

生息地の条件　草地環境が人手によって維持され、樹林と草原が入り混じった環境と思われる。

生存の危機　里山に人手が入らなくなったことによる環境変化と思われる。（A, B）

参考文献　福田晴夫ほか 1983. ウラギンスジヒョウモン. 原色日本蝶類生態図鑑（Ⅱ）：82-86. 保育社. 大阪.

写真提供者：竹谷宏二



県内の分布

オオミスジ

Neptis alwina (Bremer et Grey)

チョウ目タテハチョウ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由
観察数が減少している。

形　態
開張70㎜程の中型種。翅表は黒色の地に数本の白い帯が入り、裏面は地色が褐色に置き換わる。類似種の中では最も大きい。

国内分布
北海道と本州に分布し、伊吹山脈が西南限になっている。

県内分布
小松市、白山市、金沢市において山間地の集落周辺で観察されている。

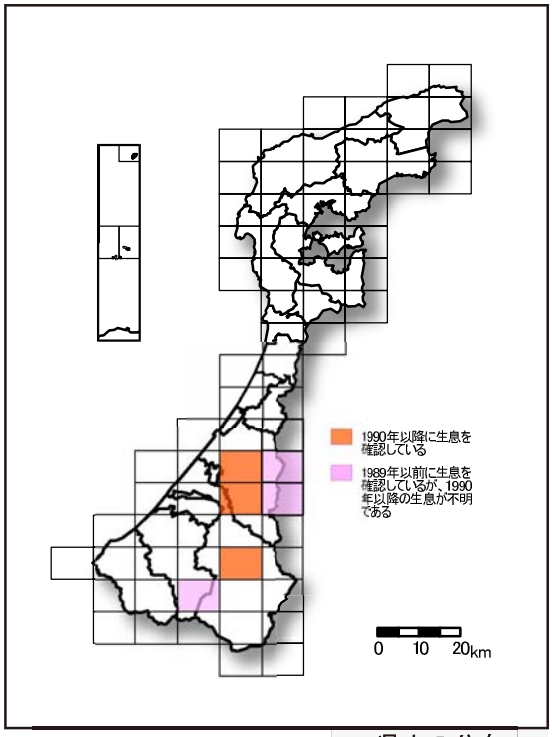
生　態
山間地の集落周辺で栽培されているウメの木の周辺を飛び回る個体が、６月中旬から８月にかけて観察されている。食樹はウメ、アンズ、スモモなどである。幼虫越冬で、食樹の樹幹や小枝の分岐で行われる。

生息地の条件
農薬を使わず適度に管理されたウメなどの食樹の存在が必要と思われる。

生存の危機
過疎や荒廃によって、山間地集落周辺のウメ、アンズ、スモモなどが、食樹として利用できなくなったことが原因と思われる。（A, B）

参考文献
福田晴夫ほか 1983. オオミスジ. 原色日本蝶類生態図鑑（Ⅱ）：159-163. 保育社. 大阪.

写真提供者：竹谷宏二



県内の分布

オオムラサキ

Sasakia charonda charonda (Hewitson)

チョウ目タテハチョウ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	準絶滅危惧

選定理由

全国に分布するが、石川県の個体数は少ない。

形　態

開張100㎜前後の大型種。オスの翅表は黒褐色で白色と黄色の斑紋があり、翅の中半分程が紫色に輝く。メスはオスより一回り大きく、紫色の輝きが無い。

国内分布

北海道から九州まで分布し、本州では山麓から山地帯にいたる落葉広葉樹林に広く生息している。

県内分布

加賀地方の山麓や丘陵地に広く生息しているが、能登地方では稀となる。邑知潟より北では、輪島市と珠洲市の生息地が知られているが、1990年の観察以降は発見されていない。

生　態

年１回の発生で、６月下旬～８月下旬に見られる。人家や耕作地に近いクヌギ、コナラ、エノキなどから構成される雑木林に生息することが多く、雌雄ともに好んで樹液に集まり、クワガタやカナブンなどと一緒に吸っている。幼虫は、エノキ、エゾエノキを食し、越冬は食樹を下り根際の枯葉の中で行われ、翌春になると再び食樹に上る。

生息地の条件

クヌギ、コナラ、エノキなどから構成される広い雑木林が必要で、山間地では、人家の庭や社寺の境内、公園などでも発生している。

生存の危機

里山の落葉広葉樹林は、土地開発が最も行われやすい場所である。近年は、柴刈りや伐採更新などの人手が入らなくなり放置され、生息環境は悪化している。（A, B）

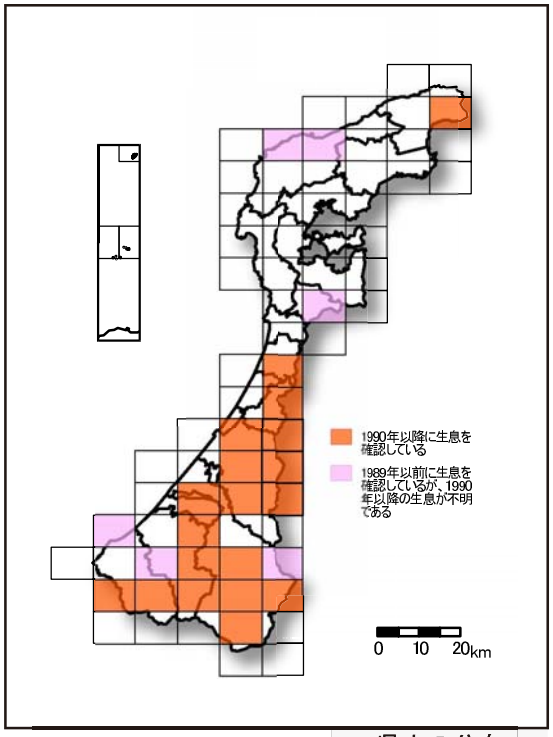
特記事項

全国に広く分布し、大型で力強く飛翔し色鮮やかなことから国蝶に選ばれている。

参考文献

福田晴夫ほか 1983. オオムラサキ. 原色日本蝶類生態図鑑（Ⅱ）: 269-276. 保育社. 大阪.
松井正人 2007. 石川県能登地方に於けるオオムラサキの近況. 翔, (185): 8.

写真提供者：竹谷宏二



県内の分布

クモマベニヒカゲ

Erebia ligea takanonis Matsumura

チョウ目ジャノメチョウ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	準絶滅危惧

選定理由

生息地域は標高1,900m以上に限定され、白山は国内分布の西限である。

形　態

開張45㎜前後の小型種。前後翅表裏とも黒褐色で、前後翅表裏とも外縁に橙色の太い帯があり、その中に黒点がある。さらに後翅裏面の橙色の帯の内側は白帯で縁取られている。

国内分布

北海道と本州の高山帯に分布し、本州では八ケ岳山塊、北アルプス、中央アルプス、南アルプス、白山の標高1,600～2,800mに分布し、白山は分布の西限になっている。

県内分布

白山の清浄ケ原～北龍ケ馬場、甚之助小屋～弥陀ケ原、観光新道馬背～黒ボコ岩、釈迦岳周辺、別山周辺など、多くは標高1,900m前後から上に生息している。

生　態

年１回発生し７月中旬から８月下旬にかけて発生する。草原が切れて断崖になる所や、山稜近くの急斜面の草付き、樹木が隣接する小さな草原などに生息する。通常は1,900m以上で観察されるが、時として谷筋に沿って下ってきたと思われる個体が、やや低い地点で観察されている。１年目は卵、２年目は幼虫で越冬し、３年目に蛹化し羽化する。食草は、イネ科、カヤツリグサ科が知られている。

生息地の条件

標高1,900m以上で、断崖際の草原、山稜近くの急斜面の草付き、樹木が隣接する小さな草原。

生存の危機

生息地は、全て白山国立公園の特別保護地区に包含されているので、生息環境は保護されている。しかし、発生地のすべてが特別保護地区内にあることなどから、十分な調査は行われていないために、現在の生息状況は不明である。（A）

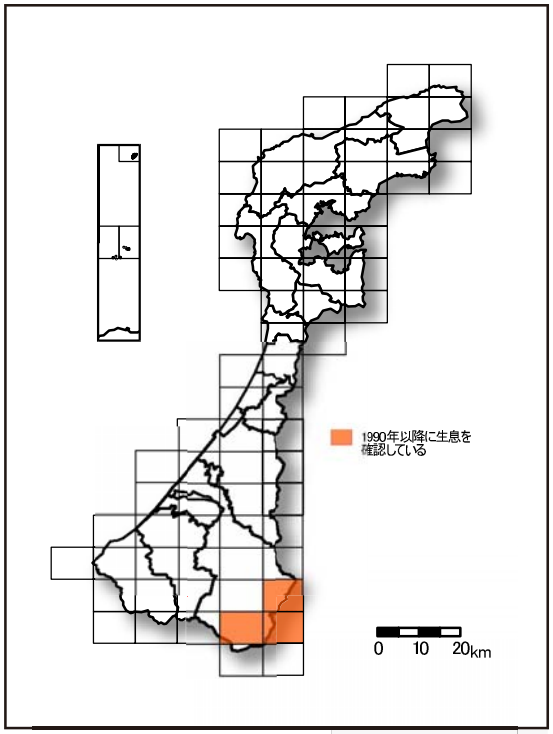
特記事項

国内のいずれの生息地も隔離され個体群も小さいので、地理的変異が進み、分布西限の白山個体群の存在は重要となる。

参考文献

福田晴夫ほか 1984. クモマベニヒカゲ. 原色日本蝶類生態図鑑（Ⅳ）：88-91. 保育社. 大阪.

写真提供者：松井正人



県内の分布

モンクロキイロナミシャク

Stamnodes danilovi sugitanii Prout

チョウ目シャクガ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由
国内における分布が限定され個体数も少ない。本県が分布の西限にあたる。

形　態
開張28㎜内外である。前後翅とも地色は橙色で黒く縁取られ、翅中央部に黒斑を有し、鮮やかな色彩をしている。

国内分布
北海道中部の山地、本州の関東北部から中部地方の亜高山帯や高山帯に分布する。

県内分布
白山の観光新道上部の亜高山帯および釈迦岳山頂付近で確認されている。

生　態
成虫は７月下旬から８月上旬にかけて発生する。昼飛性の蛾で、富山県の立山では高山植物の花で吸蜜しているのを見かけたことがある。幼虫の食餌植物としてミソガワソウが記録されている。

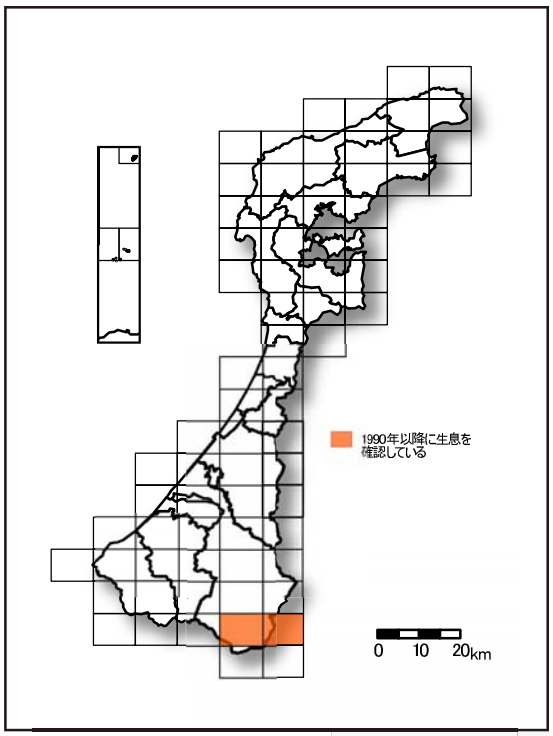
生息地の条件
高山植物の豊富な亜高山帯の草原が分布中心域と思われる。

生存の危機
目立つ色彩の蛾であるが、目撃例が少なく、個体数は多くないものと思われる。亜高山帯から高山帯下部の高茎草原の環境改変は避けるべきである。（A）

特記事項
本種の生息地は白山国立公園の特別保護地区内にある。

参考文献
西尾規孝 1986. 木曽山脈将棊頭山付近に生息する蛾類の生態. 誘蛾燈, （105）：75-90.

標本提供者：富沢章



県内の分布

オオシモフリスズメ

チョウ目スズメガ科

Langia zenzerides nawai Rothchild & Jordan

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由
日本における分布の東限および北限に近い。個体数が少ないうえ、生息地が開発されやすい里山である。

形　態
開張13～15cmの大型種である。前翅は翅頂が鋭くとがり、樹皮状の模様がある。口吻は退化して短い。

国内分布
富山県、長野県、愛知県以西に分布するが、紀伊半島、四国南部、九州南部が分布空白域となっている。したがって、九州北部、中国地方、瀬戸内周辺から愛知、岐阜が分布中心域である。

県内分布
小松市、白山市、金沢市に分布するが、個体数はきわめて少ない。市街地周辺や低山地に生息し、樹木の少ない水田地帯でも得られている。近年の採集記録は金沢市の低山地に多く、能美市以南からは得られていない。

生　態
成虫は年１回、４月から５月にかけて発生する。サクラ、ウメ、モモ等のバラ科樹木を寄主とする里山の蛾として知られている。幼虫は５月から６月に見られ、その後、地表の落葉などの下で蛹化し、越冬する。

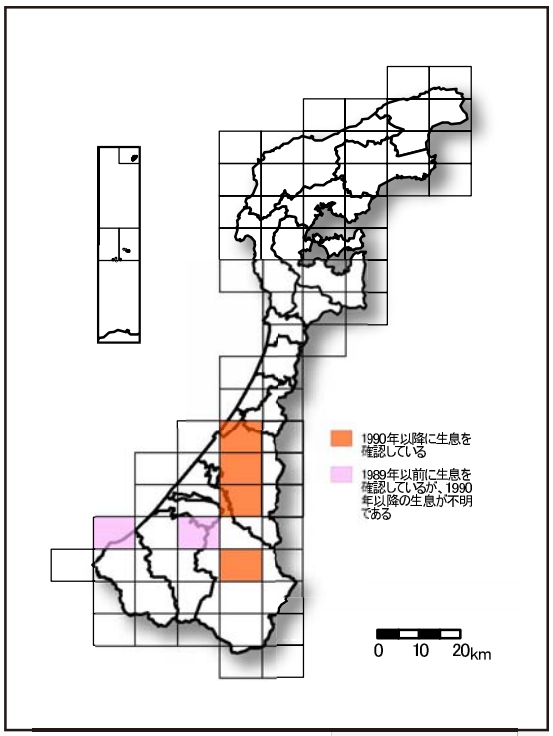
生息地の条件
管理された明るい開放的な里山が維持されていること、食草であるウメ、モモ等のバラ科樹木が植栽されていることが重要である。

生存の危機
小松市、加賀市の平野部の既知産地は、公園化、宅地化等の開発により、現在は生息できる環境ではない。生息地である里山の開発および管理放棄による里山のブッシュ化が生息地の減少、分断を招いている。また、食草であるウメやアンズの木や林の減少も影響しているものと思われる。また、走光性が強いため、人工照明の増加が個体数の減少をもたらしている可能性が高い。（A, B）

特記事項
良好な里山環境の標徴種である。

参考文献
杉　繁郎 1979. オオシモフリスズメ. 昆虫と自然, 14（4）: 27-33.
富沢　章 2006. 金沢市におけるオオシモフリスズメの追加記録. とっくりばち, （74）: 81.

写真提供者：富沢章



県内の分布

ハネナガモクメキリガ

Xylena nihonica (Hone)

チョウ目ヤガ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由
暖地性の種で石川県が国内分布の北限にあたり、個体数がきわめて少ない。

形　態
開張50㎜前後である。前翅は幅が狭く細長いのが特徴である。前翅の斑紋や色彩は個体変異が大きい。

国内分布
日本特産種。本州、四国、九州の暖温帯林に分布し、北限は日本海側が石川県、太平洋側が関東南部である。西南暖地では個体数が多い。

県内分布
加賀市の錦城山と片野鴨池および金沢市の金沢城跡の３箇所で記録があり、いずれも照葉樹林の多い所である。

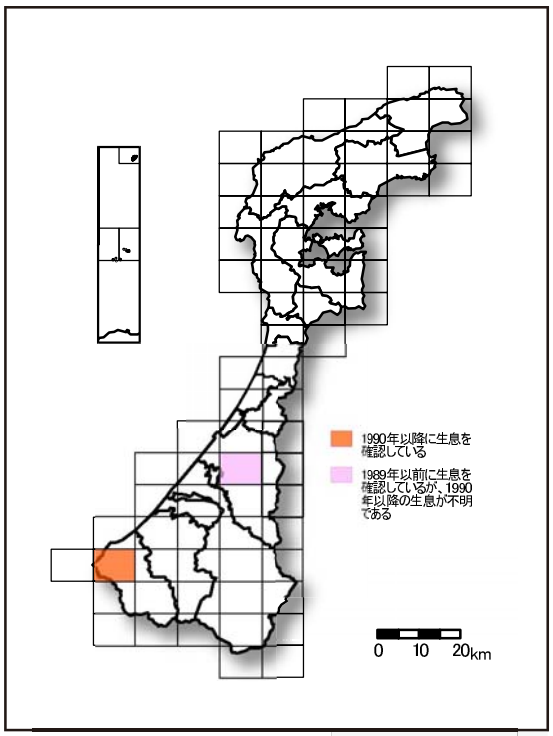
生　態
成虫は年１回、10月から11月に出現し、そのまま越冬、翌春の３～４月に再び活動する。幼虫はサクラやカシで育つので、食性は広いようである。平地の照葉樹林または照葉樹林を含む二次林に生息する。

生息地の条件
常緑カシを含む照葉樹林ないし平地林が存在することが重要である。

生存の危機
加賀海岸丘陵地の照葉樹林を含む平地林は農耕地や宅地に変貌しつつあり、生息地が狭小化している。本種の生息する社叢林や城趾は、現状のままの環境を維持するべきであるが、金沢城趾は樹木の伐採が進行し、本種のすめる環境ではなくなった。（A）

参考文献
井上　寛ほか 1982. 日本産蛾類大図鑑, 966pp. 講談社. 東京.

標本提供者：富沢章



県内の分布

昆虫類

ガマヨトウ

Archanara aerata (Butler)

チョウ目ヤガ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由
低湿地に固有の種で産地が局限される。

形　態
開張は37㎜前後である。前翅は黄褐色ないし橙褐色で、中央部に翅基部から外縁に向かってはっきりした黒色条が認められる。後翅は一様に黄褐色である。

国内分布
中部地方以北から北海道まで広く分布する北方系の種である。生息地は平地の低湿地帯に限られるため、産地は点在している。日本の特産種である。

県内分布
現在、知られている産地は加賀市の柴山潟と片野鴨池、七尾市福浦の３箇所である。

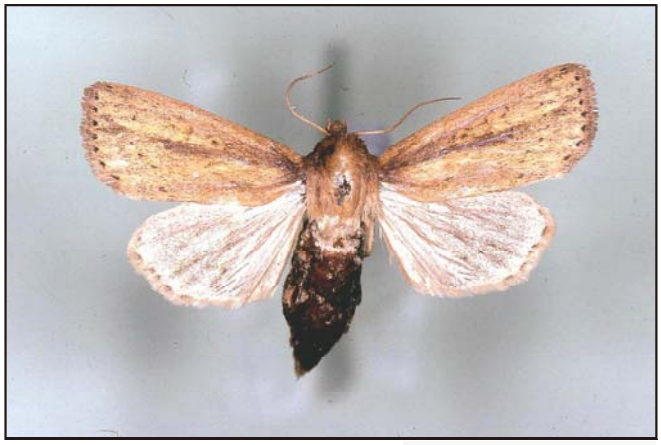
生　態
成虫は年１回、７月から８月に発生する。食草としてガマが知られ、幼虫は茎内にすんでいる。

生息地の条件
ガマをはじめとする抽水植物の多い平野部の広大な低湿地に生息する。

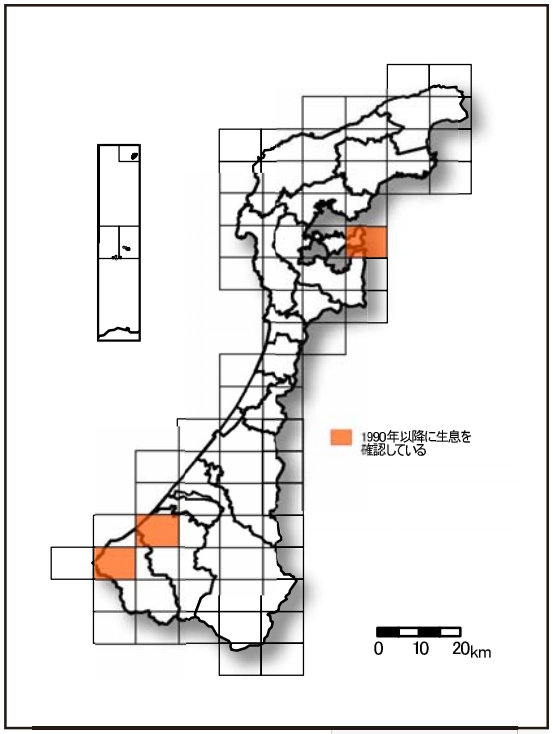
生存の危機
平野部の低湿地は埋め立てや護岸工事が進んでいる。生息地のひとつである柴山潟周囲のガマ群落は、埋め立てにより減少しつつある。 (A)

特記事項
低湿地の環境指標種として位置づけられる。

参考文献
富沢　章 1987. 加賀市柴山潟の蛾類. 誘蛾燈, (109) : 87–97.



標本提供者：富沢章



県内の分布

オオチャバネヨトウ

Nonagria puengeleri (Schawerda)

チョウ目ヤガ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由　低湿地に固有の種で産地が局限されるうえ、生息地周辺の抽水植物群落は狭小化している。

形　態　開張は40～50㎜である。前翅は一様に黒褐色であるが、中央部に黒色条と小白点がある。後翅は黄白色である。

国内分布　北海道から九州まで広く分布するが、生息するのは平地の低湿地に限られるため、産地は点在している。

県内分布　現在、知られている産地は加賀市柴山潟のみである。

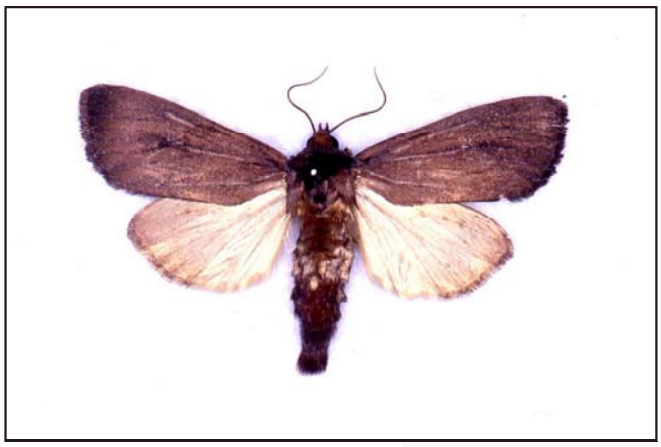
生　態　成虫は年１回、７月から８月に発生する。食草としてガマが知られ、幼虫は茎内にすんでいる。

生息地の条件　ガマをはじめとする抽水植物の多い平野部の広大な低湿地に生息する。

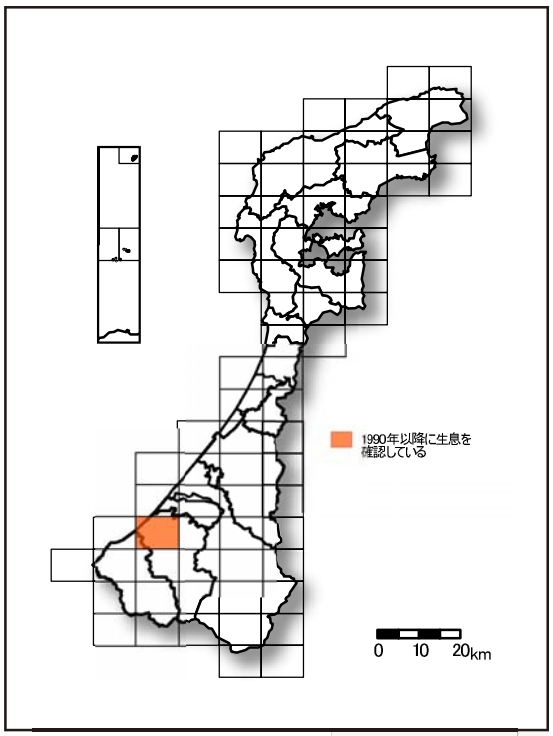
生存の危機　平野部の低湿地は埋め立てや護岸工事が進んでいる。生息地である柴山潟周囲のガマ群落は、埋め立てにより減少しつつある。（A）

特記事項　低湿地の環境指標種として位置づけられる。

参考文献　富沢　章 1987. 加賀市柴山潟の蛾類. 誘蛾燈, 109 : 87–97.



標本提供者：富沢章



県内の分布

チャバネキボシアツバ

Paragabara ochreipennis Sugi

チョウ目ヤガ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由 開発されやすい低地に生息し、全国的にも分布が限定される。

形　　態 開張22㎜前後である。前後翅は黄褐色をおび、前翅頂が鋭くとがる。

国内分布 北海道から九州まで分布するが、中国、四国地方からは未知である。産地は局地的で主に低地から得られ、個体数は少ない。

県内分布 加賀市の柴山潟と小松市の木場潟周辺の低地で記録がある。

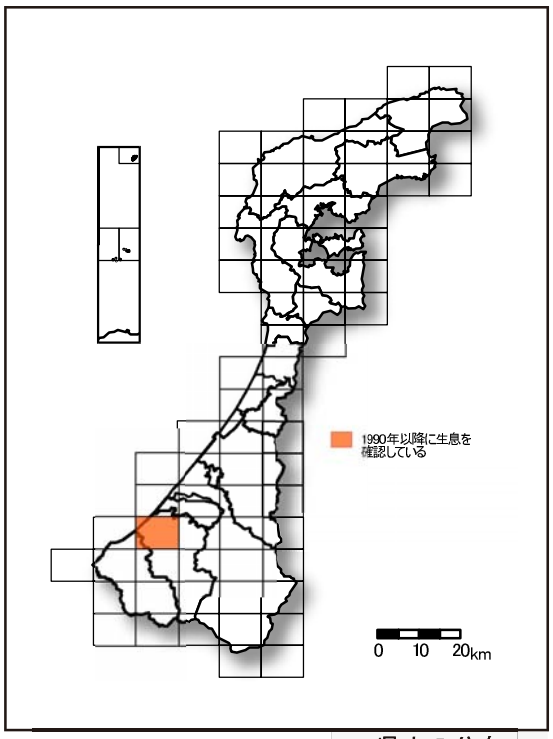
生　　態 年２回発生するものと思われるが、詳しい生態はわかっていない。

生息地の条件 平野部の低湿地およびそれに続く草地が本種の生息域と思われる。

生存の危機 平野部の草地は宅地化や公園化等のため開発され、本種の生息域が狭められている。（A）

参考文献 富沢　章 1987. 加賀市柴山潟の蛾類. 誘蛾燈, （109）：87–97.

標本提供者：富沢章



県内の分布

ヤクシマコブヒゲアツバ

Zanclognatha yakushimalis Sugi

チョウ目ヤガ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由
本県が国内分布の北限であり、孤立した生息地となっている。

形　態
開張22～30㎜である。前後翅全体が黒褐色を呈していて、斑紋は不明瞭だが鋸歯状の内、外横線ははっきりしている。

国内分布
暖地性の種で沖縄、屋久島、九州、四国には少なくない。しかし、本州では山口県、和歌山県、静岡県、石川県で採集されているにすぎない。

県内分布
平野部の原植生の照葉樹林が残っている加賀市鹿島の森が唯一の産地であり、本来の分布地からかけ離れている。

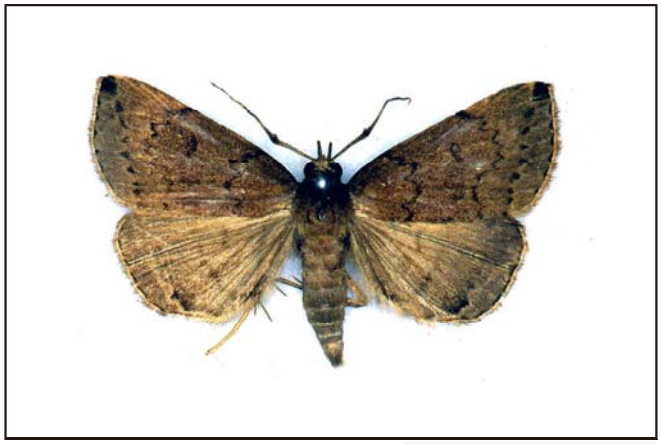
生　態
幼虫は枯葉を食べることが知られている。本州では年２回発生するものと思われる。

生息地の条件
低地に照葉樹林が残存されていることが重要と思われる。

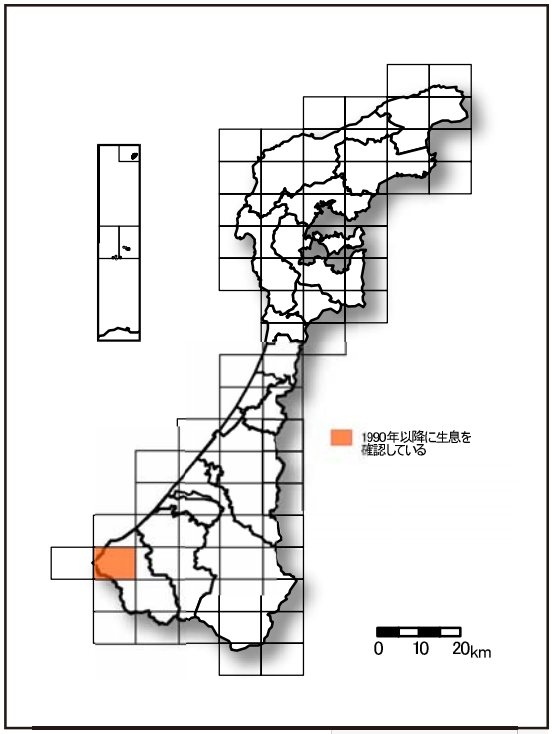
生存の危機
現在の生息地は３haときわめて狭い。県内のまとまりのある照葉樹林を有する社叢林は本種が生息している可能性が高いので、現状のまま環境を維持すべきである。（A）

特記事項
生息地の鹿島の森は、国指定の天然記念物に指定されている。

参考文献
富樫一次 1988. 鹿島の森の昆虫相. 金沢大学日本海域研究所報告, 20 : 49-80.



標本提供者：富樫一次



県内の分布

ムスジイトトンボ

Cercion sexlineatum (Selys)

トンボ目イトトンボ科

石川県カテゴリー	情報不足
国カテゴリー	なし

選定理由　最近、県内の沿岸地方で発見されたが、能登島を除けば観察例数が少なく定着性も明らかでない。

形　　態　腹長21～25㎜、後翅長14～17㎜。セスジイトトンボに似るが、眼後紋が細長い。メスの肩に黒条が３対＝６本ある。

国内分布　主に本州中部以西、四国、九州、沖縄。

県内分布　小松市日末町、志賀町（上野、大津）、七尾市能登島町（通、ニ穴、佐波）。

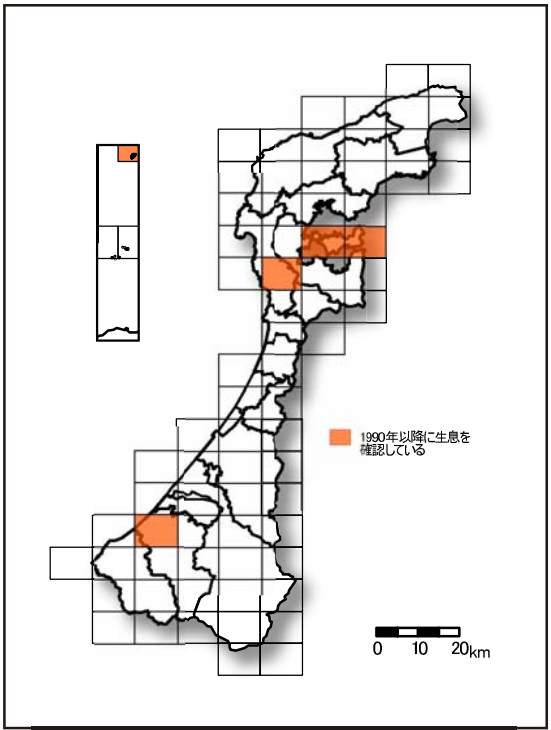
生　　態　暖地性種で、気侯温暖化に伴って沿岸地帯を北上中である。浮葉植物などのある平地の池沼で育つ。

生息地の条件　温暖地であること以外はセスジイトトンボやクロイトトンボなどの普通種と共通。

生存の危機　沼沢の埋めたてや汚染などが影響し得る。

参考文献　二橋　亮・二橋弘之 2006. 能登半島のトンボ相（２）. Ｔｏｍｂｏ, 48：18-20.

写真（図）はありません。



県内の分布

クマコオロギ

Mitius minor (Shiraki)

バッタ目コオロギ科

石川県カテゴリー	情報不足
国カテゴリー	なし

選定理由
水田のほ場整備に伴い激減した可能性が高く、現在、県内では１箇所でしか確認されていない。生息状況が不明である。

形　態
体長が約13㎜の小型のコオロギである。体色が一様に暗褐色、脚は赤褐色であることが特徴である。翅は短翅で飛ぶことはできない。

国内分布
本州、四国、九州、対馬、種子島に分布する。日本海側では新潟県が北限である。

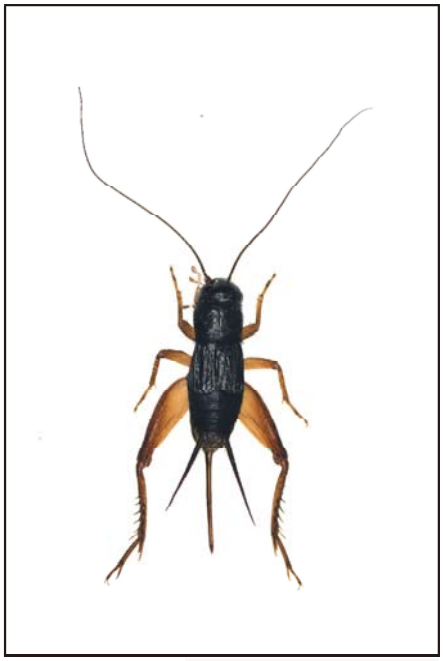
県内分布
2005年に、輪島市（旧門前町）で記録があり、手取川下流部においても採集されている。

生　態
卵で越冬。年１回発生で、成虫は８月から10月に出現する。湿った草地に浅く穴を掘ってすみ、オスはリッ、リッと短く切って鳴く。

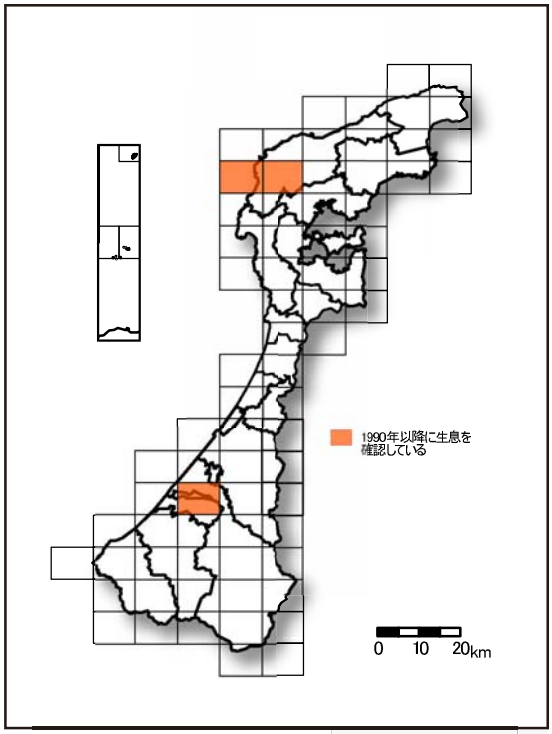
生息地の条件
本種は平野部から丘陵地にかけて分布し、一年中、乾燥することのない湿った草地を生息環境としている。輪島市の生息地も山際にある湿った休耕田で、イネ科を主体とした丈の短い草本類が密生している。

生存の危機
平野部の湿田周辺において、かつては広く分布していたものと思われるが、ほ場整備による乾田化で生息地が激減したものと思われる。また、廃田も乾燥化が進みつつある。谷津田の廃田や湿った河川敷、潟周辺の湿性草地に生息している可能性が高く、今後の調査が必要である。

参考文献
市川顕彦ほか 2006. バッタ・コオロギ・キリギリス大図鑑. 687pp. 日本直翅学会編. 北海道大学出版会. 札幌.



標本提供者：富沢章



県内の分布

ハマベツチカメムシ

Byrsinus varians (Fabricius)

カメムシ目ツチカメムシ科

石川県カテゴリー	情報不足
国カテゴリー	準絶滅危惧

選定理由

本種の生息場所である海浜植物帯は、各種開発により縮小傾向にある。さらに近年は、海浜植物帯へのRV車やモトクロスバイクの直接的な乗り入れが頻繁に行われるようになっており、これらの複合的な要因が生息場所の縮小や消失、本種の生息数の減少に繋がることが懸念されている。

形　態

体長４㎜内外。体表には光沢があり、体色は赤褐色。頭部前縁には10数本の刺毛と長毛が混生し、体側に沿って長毛が列生している。触角は短く、第２節が最も短い。第３～５節は長卵形である。同所的にマルツチカメムシが分布するため、同定には注意が必要である。

国内分布

本州、四国、九州に分布する。

県内分布

2008年５月に羽咋市一の宮海岸で１個体が採集されたのみである。

生　態

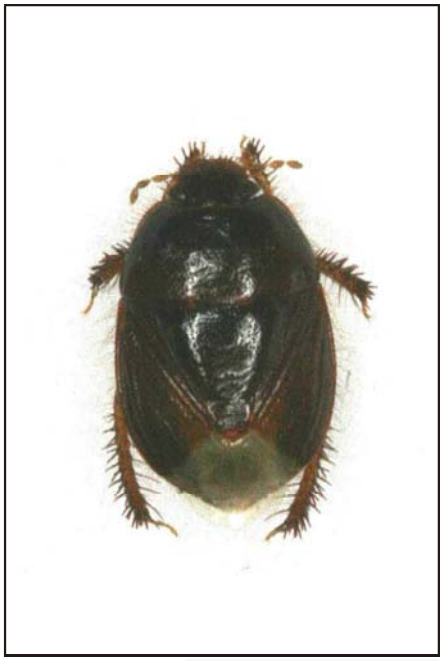
海浜植物の根際の土中で生活している。

生息地の条件

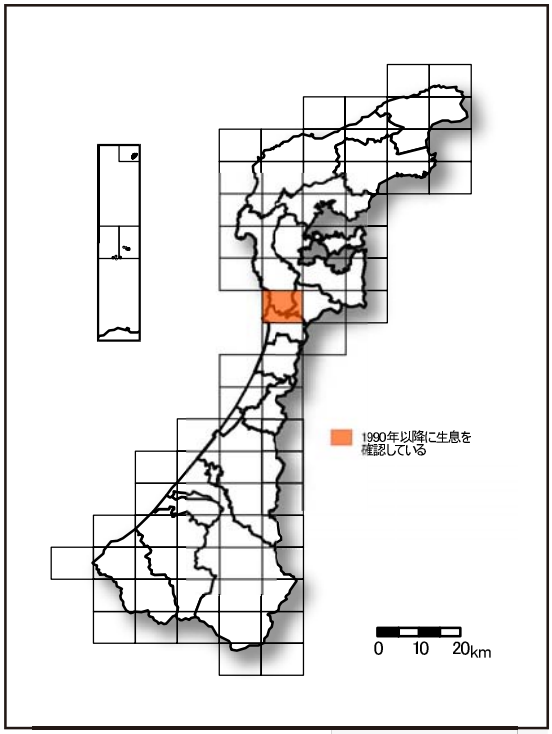
比較的大きな海浜植物帯があること。

生存の危機

開発行為や各種レジャーによって生息場所である海浜植物帯が縮小、消失することは、本種を含めた様々な生物にとって生存の危機である。本種を確認した羽咋市一の宮海岸では、2007年にRV車の運転技術を競う大会が開催されたが、海浜植物帯をコースに含んでいたため、コース上の海浜植物はRV車に踏みつぶされて完全に消滅していた。このような大会を開催する場合、開催場所やコースの選定には慎重の上にも慎重を期すべきである。



標本提供者：吉道俊一



県内の分布

エゾコセアカアメンボ　カメムシ目アメンボ科

Gerris (Macrogerris) yezoensis (Miyamoto)

石川県カテゴリー　情報不足

国カテゴリー　なし

選定理由　北方系の種で、県内では白山山系の１箇所で確認されているのみである。本県は国内分布の西限である。

形　態　体長10～15㎜。胸背部および前翅は暗褐色～暗赤褐色。体形、色彩はコセアカアメンボによく似ており、外見での区別は困難である。腹部第７結合板後縁の突出は鈍い。オス生殖器の末端片の形状は特異的で、長い嘴状となる。長翅型のみ。

国内分布　北海道、礼文島、本州。

県内分布　白山山系の１箇所の池（殿池）の1950年代の記録のみである。

生　態　水面に落下した小昆虫などを捕食する。

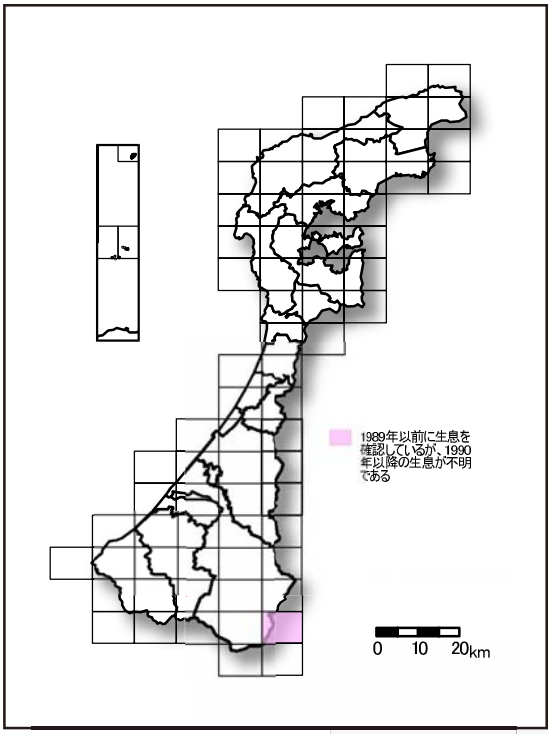
生息地の条件　寒冷地の池沼に生息する。

生存の危機　生息地は高山帯であり、人為的な環境の変化が生じにくいため、現在も生息していると思われるが、調査する必要がある。

参考文献

宮本正一 1961. 日本昆虫分類図説アメンボ科. １(３) 1-39. 北隆館. 東京.
根来　尚 1988. 富山県産アメンボの分布と生息環境について. 日本生態学会誌, 38(１) : ９-18.
村路雅彦 2003. 日本産 *Gerris* 属 *Macrogerris* 亜属の mtDNA 塩基配列, 外部形態および交尾行動の解析 : 系統関の進化的関係について. 昆蟲ニューシリーズ, ６(３) : 141-156.

写真（図）はありません。



県内の分布

オオクロツヤミズギワカメムシ

Macrosaldula koreana (Kiritshenko)

カメムシ目ミズギワカメムシ科

石川県カテゴリー	情報不足
国カテゴリー	なし

選定理由

日本では石川県の１箇所でのみ記録があるが、その生息地は河川改修により消滅した。

形　態

体長は5.4～7.3㎜で、近似種のクロツヤミズギワカメムシよりさらに大きい。体全体は黒色で背面の藍色の光沢は弱い。

国内分布

石川県でのみ記録がある。国外では北朝鮮、モンゴル、東シベリア、極東に分布している。

県内分布

1985年６月に、白山市（旧鶴来町）で得られているに過ぎない。生息地は手取川の河川敷である。

生　態

成虫は６月下旬に得られていること以外、生態は不明である。

生息地の条件

採集された個体は、手取川河川敷にある岩盤付近に生育していたネコヤナギの下で得られた。近くには小さな流れがあったことから、流水性の種の可能性がある。

生存の危機

本種が採集された地点は、すでに河川改修、土地造成により公園化されてしまったので現在は生息していない。しかし、類似の環境は周辺に残されているので、河川改修等の大がかりな土木工事は避けるべきである。

特記事項

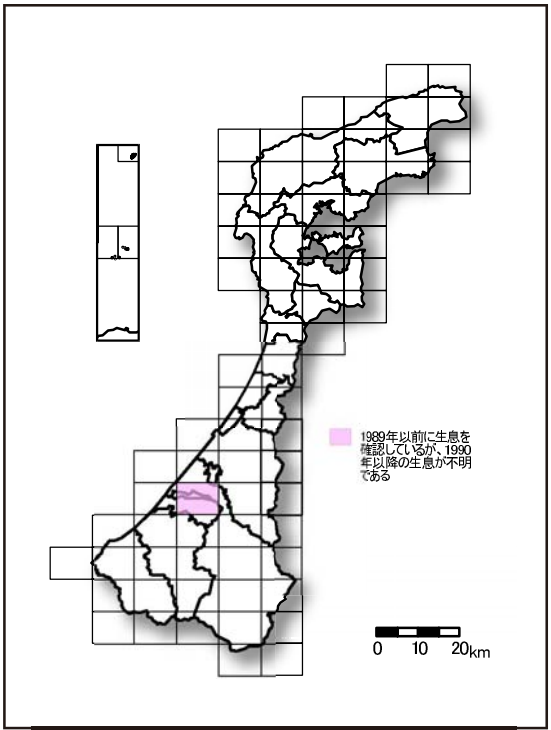
本種を採集したのは富樫一次博士であるが、標本は現在、ロシアの研究者の手にある。富樫（1995）の31ページの *Saldula* sp. は本種を指している。

参考文献

富樫一次 1995. 鶴来町の昆虫相：21–33. 鶴来町教育委員会報告調書, 第10冊. 102pp.
Miyamoto, S & M, Hayashi 1998. New records of aquatic Heteroptera from Japan. Japanese Journal of Systematic Entomology, 4 : 321–323.
川合禎次・谷田一三 2005. 日本産水生昆虫：370. 東海大学出版会. 1341pp.

昆虫類

写真（図）はありません。



県内の分布

コオナガミズスマシ

Orectochilus punctipennis Sharp

コウチュウ目ミズスマシ科

石川県カテゴリー	情報不足
国カテゴリー	なし

選定理由

全国的に生息地が減少している。県内でも１箇所で確認されているに過ぎない。

形　態

体長5.5～6.2㎜。体型は長楕円形で舟形。体色は黒褐色でやや金属光沢を帯びる。肢などの付属物は赤褐色。上翅の点刻は密で、オスの会合部先端はほぼ直角で先が丸まり、メスではやや斜めで会合端が少し後方に張り出す。頭楯前縁に突起が無く、平坦かあるいは中央部が単に前方へ張り出すに過ぎない。頭部前半のしわ状部は細かく、小点刻をやや密に装う。

国内分布

本州、四国、九州。

県内分布

小松市丘陵部にある河川上流域のツルヨシがまばらに生える水面上で、2004年６月に確認された。

生　態

成虫は昼間、石の影に隠れていて、夜間に活動する。水面上を遊泳し、水面に落ちた小昆虫を捕食するとされる。幼虫は水中で捕食生活をし、岸辺で蛹化するとされる。

生息地の条件

丘陵部の比較的大きい河川の上流域下部～中流部で、川幅５～10mほどの、岸辺が水草で覆われているような環境に生息する。川岸の流れのよどみや，ときには河川敷の水溜まりにも見られるという。

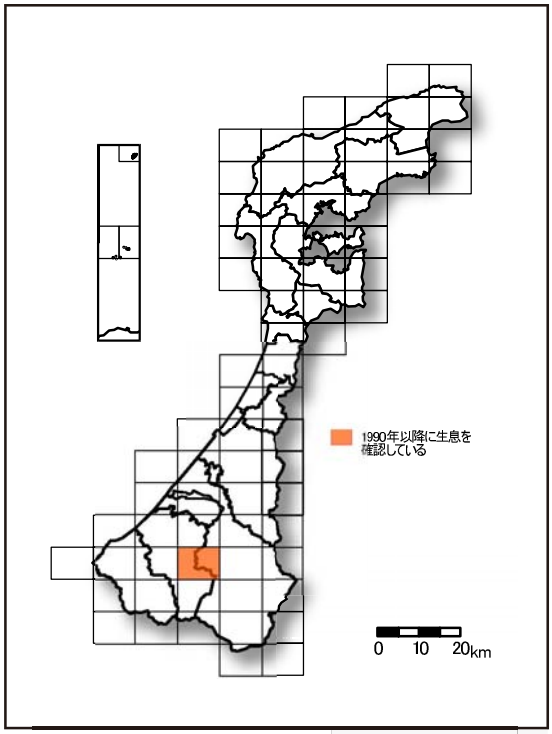
生存の危機

河川中流域の自然の岸辺が、堰堤工事、護岸工事などによって環境改変や消滅することが脅威である。また、生活排水などによる水質汚染にも注意が必要である。

参考文献

佐藤正孝 1977. 日本産ミズスマシ科概説１−３．甲虫ニュース，(37)：1−5，(38)：1−2，(39)：1−4．
石原一彦 2005. コオナガミズスマシの採集記録. とっくりばち，(73) ： 30.
佐藤正孝・吉富博之 2005. 鞘翅目. 川合禎次・谷田一三（編）. 日本産水生昆虫―科・属・種への検索. 東海大学出版会. 秦野.

標本提供者：石原一彦



県内の分布

クロアリヅカエンマムシ

Hetaerius optatus Lewis

コウチュウ目エンマムシ科

石川県カテゴリー	情報不足
国カテゴリー	なし

選定理由

全国的に記録の少ない種で、石川県でもわずか１例が知られるに過ぎない。

形　態

体長2.1～2.5㎜。全体黒色で体表には長毛を持つが、一部には欠くものもいる。各脚の脛節が強く平圧されていて幅広く、特徴的な外観を呈している。

国内分布

北海道、本州、四国、九州に分布するが、その分布は極めて局所的である。

県内分布

能美市鍋谷の蟹淵付近で2004年６月に採集された１例が知られるのみである。

生　態

アシナガアリ *Aphaenogaster famelica* Smith と共生関係にあることが報告されているが、詳細な生態はまったくわかっていない。

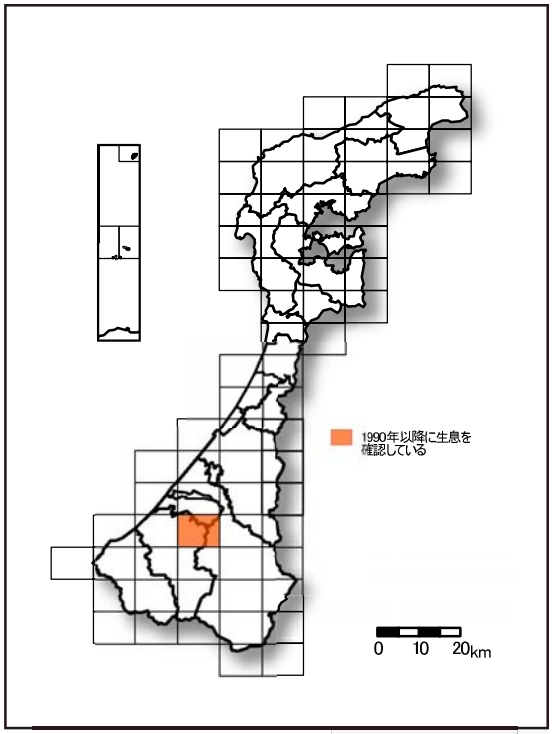
生息地の条件

詳細は不明である。

参考文献

Maruyama, M (2004) Symbiotic host of the myrmecophilous histerid beetle, *Hetaerius optatus* (Coleoptera, Histeridae, Hetaeriinae). *Elytra*, (32): 326.
吉道俊一 2005. 石川県におけるクロアリヅカエンマムシの採集事例. 甲虫ニュース, (149): 22.

標本提供者：吉道俊一



県内の分布

チビクワガタ

Figulus binodulus Waterhouse

コウチュウ目クワガタムシ科

石川県カテゴリー	情報不足
国カテゴリー	なし

選定理由

県内の２箇所でわずかな個体が採集確認されているものの、詳細な調査はこれまで行われていない。

形　態

クワガタムシ類の中では小型の種で筒型の体型をしている。体色は全体黒色で光沢が強く、上翅の条溝は浅いが完全である。大顎に雌雄二型が現れないため、慣れないと雌雄の区別が難しい。前胸背板には深くよく目立つ縦溝を持つ。

国内分布

暖地性の種で、本州（静岡県以西）、四国、九州、伊豆諸島（御蔵島、八丈島）に分布する。

県内分布

加賀市と金沢市の２箇所で生息が確認されている。より南方から海流に乗って石川県にまで分布を拡げてきたものと思われ、県内では海岸に沿って分布している可能性が高い。海岸付近に残された雑木林を調査することで、新たな産地が見つかるものと思われる。

生　態

一生の大部分を朽ち木の中ですごすクワガタムシで、１年を通して成虫を見ることができる。成虫は肉食性が強く、ゴミムシダマシの幼虫などを捕食する。しかし、幼虫は肉食性ではなく、他のクワガタムシ類と同様に朽ち木を食べて成長する。幼虫が朽ち木を食べやすいように成虫が朽ち木を噛み砕くという習性があることから、亜社会性昆虫と考えられている。産卵時期は初夏頃で、数ヶ月程度で羽化してそのまま朽ち木の中で越冬する。成虫の寿命は１年ほどで、同じ朽ち木の中に親世代の成虫と新成虫とが入り交じった状態で見られることがある。

生息地の条件

水分がある程度保たれている、生息に適した広葉樹の朽ち木があること。

生存の危機

海岸付近の雑木林は常に開発の危機にさらされているが、開発に伴う伐採は雑木林の乾燥化を促進する。そのため、本種の生息に適する水分を保った朽ち木の乾燥化も進み、本種の生息できる環境がなくなってしまう。

標本提供者：森幸彦

分布図はありません。

県内の分布

セスジカクマグソコガネ

Rhyparus azumai azumai Nakane

コウチュウ目コガネムシ科

石川県カテゴリー	情報不足
国カテゴリー	なし

選定理由　本種は南方系の種であり、石川県は国内分布の北限にあたるが、採集記録が１例しかない。

形　態　夏体長5.0～6.5㎜程度。体は光沢のない黒色である。前胸背板には粗大な点刻が粗布され、前角は横方向に突出している。上翅の間室は２列の点刻列を持つ。一見して独特な体型をしている。

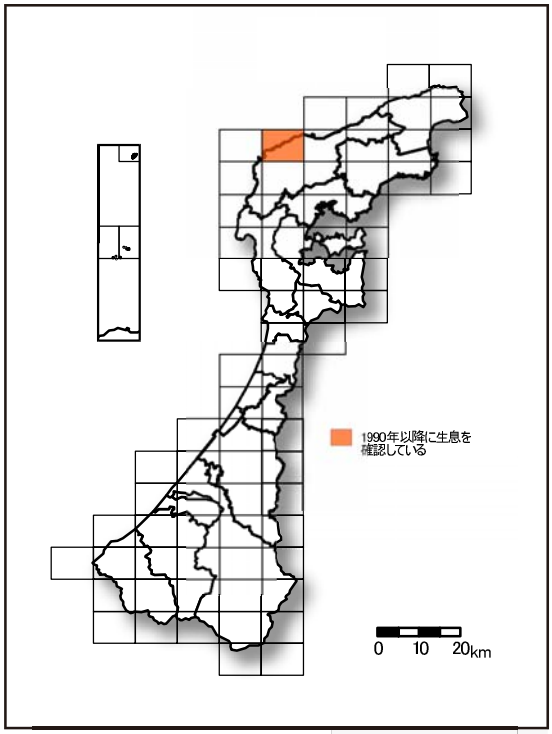
国内分布　西本州（関東）から八重山諸島まで分布する、広域分布種である。

県内分布　輪島市で灯火採集により2006年７月に得られた１個体が唯一の記録である。

生　態　生態や生息環境の詳細はわかっていないが、土や朽ち木などに潜入しているようである。

参考文献　吉道俊一・富沢　章 2007. 石川県におけるセスジカクマグソコガネの採集記録. 鰓角通信, (14) : 61.

標本提供者：富沢章



県内の分布

イソジョウカイモドキ

Laius asahinai Nakane

コウチュウ目ジョウカイモドキ科

石川県カテゴリー	情報不足
国カテゴリー	情報不足

選定理由　全国的に記録が少なく局所的な分布をしていて、環境省のレッドリスト（2007年）で情報不足とされた。県内では志賀町の海岸岩礁でこれまでに３個体が採集されているが、その他の地域における詳細な分布状況が不明である。

形　態　体長約4.0㎜。体色は全体が青藍色だが、触角の第１節と第２節のみ橙色。また、オスの触角第２節は腎臓型で大きく、中央部が深くくぼむ。

国内分布　本州、四国、九州に局所的に分布している。日本海側からの記録は少なく、新潟県と島根県から記録されているに過ぎない。

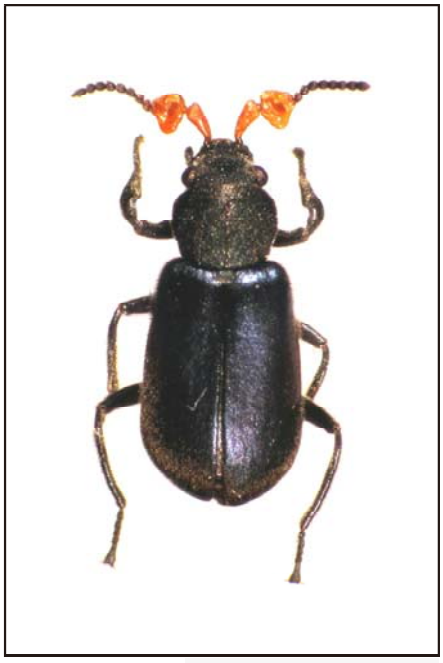
県内分布　志賀町の小さな海岸岩礁で2007年６月に１個体、2008年５月に２個体が採集されているが、その他の地域では未発見である。

生　態　海岸岩礁に生息する潮間帯性の甲虫で、打ち上げられた海草類の下や岩のわずかな隙間に潜んでいる。他の微小な小動物を捕食していると思われる。

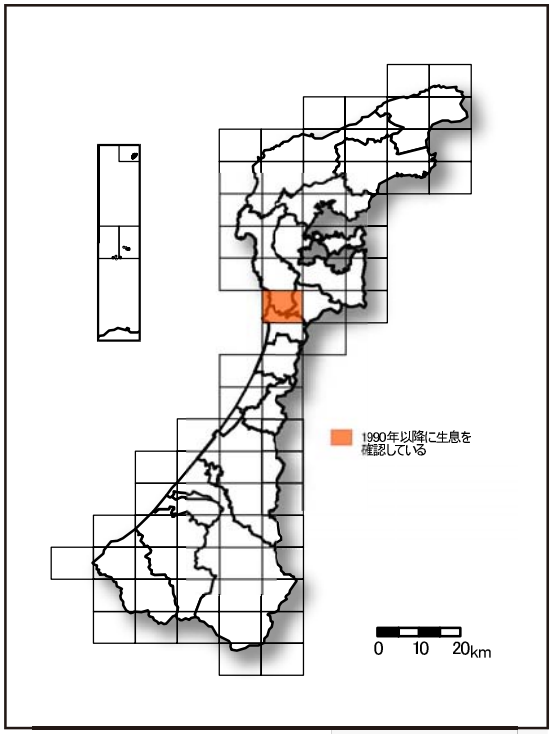
生息地の条件　岩礁地帯であること。ただし、志賀町町では非常に規模の小さな岩礁で採集されており、生息に必要な岩礁の規模や条件は不明である。

生存の危機　港湾整備や護岸事業などの各種開発に伴う岩礁地帯の縮小や消失は、本種の生存にとって大きな問題となる。

参考文献　河上康子・林　成多 2007. 日本海沿岸の海岸性甲虫類の研究（2）島根半島. ホシザキグリーン財団研究報告, (10) : 37-76.



標本提供者：吉道俊一



県内の分布

ガガブタネクイハムシ

Donacia lenzi Schönfeldt

コウチュウ目ハムシ科

石川県カテゴリー	情報不足
国カテゴリー	なし

選定理由
生息環境が限られるうえ、開発等により、生息環境が悪化しつつある。県内の分布は局所的で、生息地は４箇所である。

形　態
体長は6.1～7.3㎜。上翅は金属光沢が強く、濃い紫色。触角は暗褐色で、第３節は第２節とほぼ同長。

国内分布
北海道、本州、佐渡島、四国、九州。

県内分布
加賀市、小松市、珠洲市。

生　態
成虫は５～11月に出現し、ジュンサイ、ヒツジグサ、ヒルムシロなどの浮葉植物上に見られる。

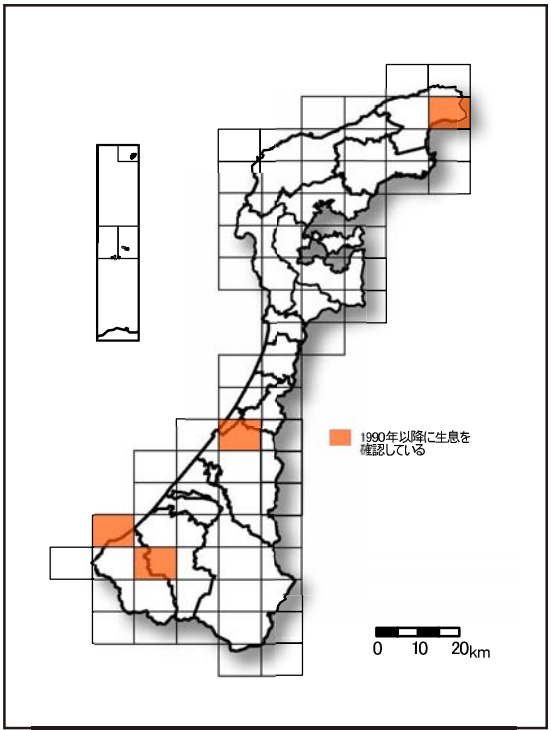
生息地の条件
丘陵部のジュンサイ、ヒツジグサ、ヒルムシロなどの生育する池沼、湿地。

生存の危機
池沼、湿地の各種開発による消失、アメリカザリガニなどの外来種の侵入や水質汚染による浮葉植物の消失。

参考文献

入場　登 1993. 石川県産甲虫の記録. アカハネムシ, (5) : 3-5.
林　成多 2004. 総説・日本のネクイハムシ亜科. ホシザキグリーン財団研究報告, (7) : 29-126.
林　成多 2006. 日本産ネクイハムシ亜科の分布記録（2）ネクイハムシ属・キイロネクイハムシ属. ホシザキグリーン財団研究報告, (9) : 151-192.

写真（図）はありません。



県内の分布

ツヤネクイハムシ

Donacia nitidior (Nakane)

コウチュウ目ハムシ科

石川県カテゴリー	情報不足
国カテゴリー	なし

選定理由
全国的に分布が限られ、開発されやすい環境に生息するため、絶滅するおそれがある。これまでの知見では、県内での分布も限定される。

形　態
体長5.0～6.5㎜。上翅は金属光沢を帯びた銅色である。脚、特に後腿節が短く、腿節基部は赤褐色。前胸背板は荒い点刻を装い、一部は皺状である。

国内分布
本州（宮城県以西）、佐渡島。

県内分布
小松市から能美市の丘陵部の約７箇所の湿地で確認されている。

生　態
水生植物に依存した生活史をおくる。成虫は５～６月に出現し、スゲ科植物の花粉などを食する。幼虫は水中（土中）でスゲ類の根を食べると考えられている。

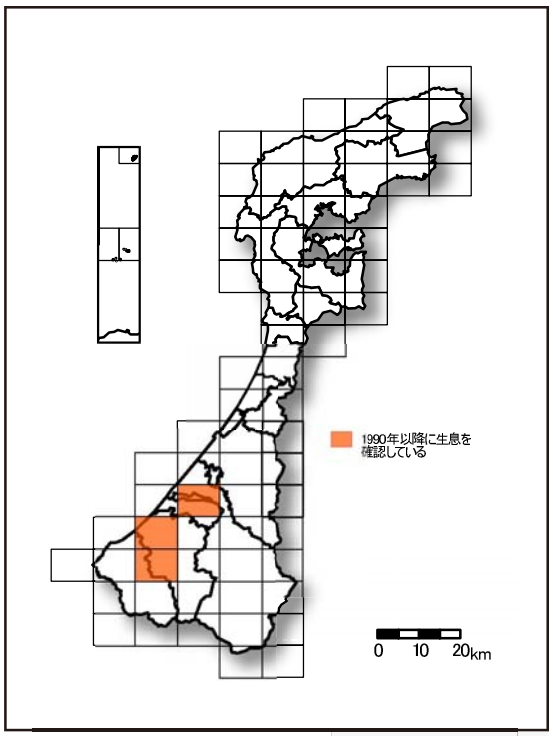
生息地の条件
平野部から丘陵部にある放棄水田やため池上部の湿地で、スゲ類などの水生植物が生育する日当たりのよい所。

生存の危機
湿地などの環境改変、植生遷移が脅威となる。生息地の開発防止、掘削などによる植生遷移の進行防止が保全上重要である。

参考文献

川瀬英夫 2002. ツヤネクイハムシの採集記録ほか. とっくりばち, (69) : 12–13.
林　成多 2004. 総説・日本のネクイハムシ亜科. ホシザキグリーン財団研究報告, (7) : 29–126.
林　成多 2006. 日本産ネクイハムシ亜科の分布記録（2）ネクイハムシ属・キイロネクイハムシ属. ホシザキグリーン財団研究報告, (9) : 151–192.

写真提供者：富沢章



県内の分布

イネネクイハムシ

Donacia provostii Fairmaire

コウチュウ目ハムシ科

石川県カテゴリー　情報不足

国カテゴリー　なし

選定理由

幼虫はイネやハスの根を食害することから、害虫として比較的よく知られた種である。しかし、近年、各地で減少が著しい。県内でも分布は局所的で、２箇所で確認されているのみである。

形　態

体長6.0～7.0㎜。上翅の金属光沢は弱く、赤、緑、紫、青色を帯びる。上翅末端は幅広い。上翅会合部は末端近くで反転せず、腹部第１節は中央に１対の小突起を装う。触角第３節は第２節より長い。

国内分布

北海道、本州、佐渡島、隠岐島、四国、九州、口永良部島、種子島、与那国島。

県内分布

加賀市、穴水町。

生　態

成虫は５～11月に出現し、ハス、ジュンサイ、ヒツジグサ、ヒルムシロ、ヒシなどの浮葉植物を摂食する。夏期に灯火に飛来する。

生息地の条件

平野部～丘陵部の浮葉植物の生育する池沼、湿地。

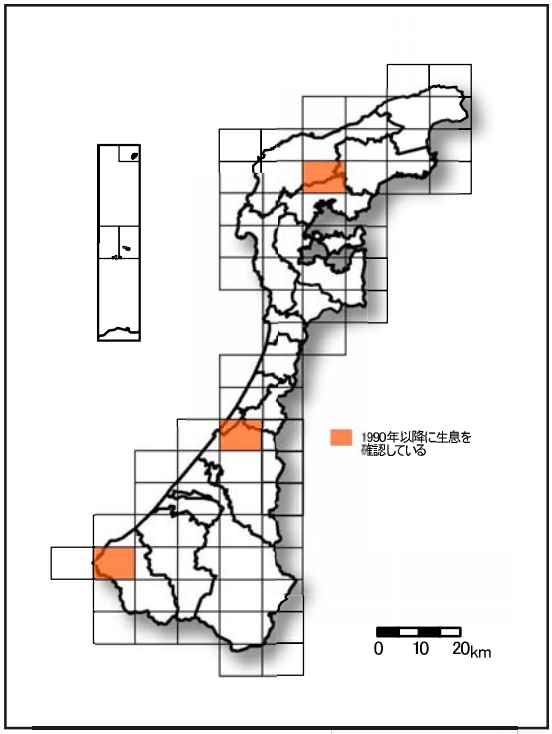
生存の危機

池沼、湿地の様々な開発による消失、各種排水や農薬使用による水質汚染が脅威となっている。

参考文献

林　成多 2004. 総説・日本のネクイハムシ亜科. ホシザキグリーン財団研究報告, (７) : 29–126.
林　成多 2006. 日本産ネクイハムシ亜科の分布記録（２）ネクイハムシ属・キイロネクイハムシ属. ホシザキグリーン財団研究報告, (９) : 151–192.
小池賢治 2005. ハスを加害するイネネクイハムシの発生消長と産卵能力. 北陸病害虫研究会報, (54) : 59–63.

標本提供者：富沢章



県内の分布

ハクサンハバチ

Neocolochelyna hakusana Togashi

ハチ目ハバチ科

石川県カテゴリー	情報不足
国カテゴリー	なし

選定理由
本県が国内分布上の北限となる。幼虫の食草のサルナシが、登山道の整備により減少しているため、個体数の減少が懸念される。

形　態
体長15㎜内外で、ハバチ科としては大型種である。体は赤褐色をしており、腹部には黒色斑がある。類似種としてイトウハバチがいるが、産卵管鞘の鋸状の歯形が本種と異なる。

国内分布
石川県、福井県大野市。

県内分布
白山の別当出合付近で採集されている。

生　態
幼虫はサルナシの葉を食べる。若齢期は集団で葉を食するが、老齢期になると単独で活動する。

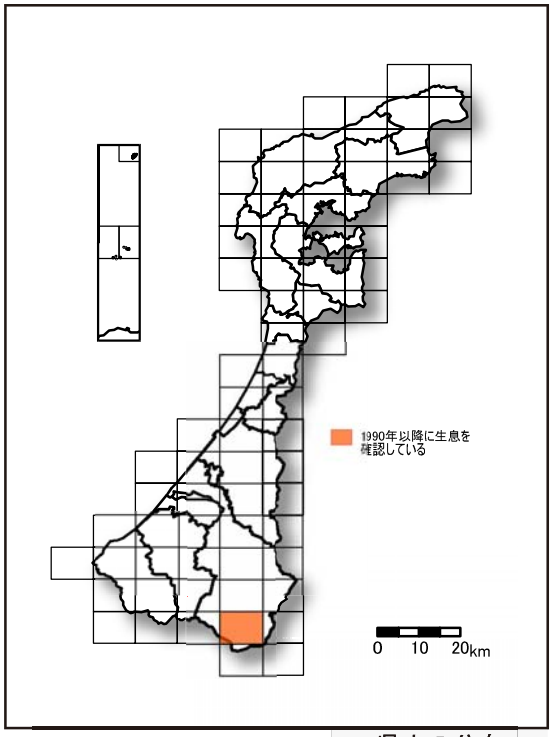
生息地の条件
食草であるサルナシの生育していることが重要である。

生存の危機
サルナシの減少による個体数減少が懸念される。

特記事項
白山の特別保護地区内に生息する。

参考文献
Togashi, I. 1995. Description of *Neocolochelyna hakusana* sp. nov., and its larva (Hymeonoptera: Tenthredinidae) from Japan. Proc. Ent. Soc. Wash., 97:866-871.

写真提供者：石川卓弥



県内の分布

コマユバチの一種

Yelicones nipponicus Togashi

ハチ目コマユバチ科

石川県カテゴリー	情報不足
国カテゴリー	なし

選定理由 本属の種の多くは、北米や南米大陸の太平洋岸に生息しており、分布上注目すべき種といえる。

形　態 体長10㎜内外で、体は黄色をしている。触角は長く、脚は頑丈である。

国内分布 現在のところ、石川県のみから知られる。

県内分布 穴水町二子山で記録されたのが、唯一である。

生　態 クリ園内で採集されたこと以外、生態については不明である。

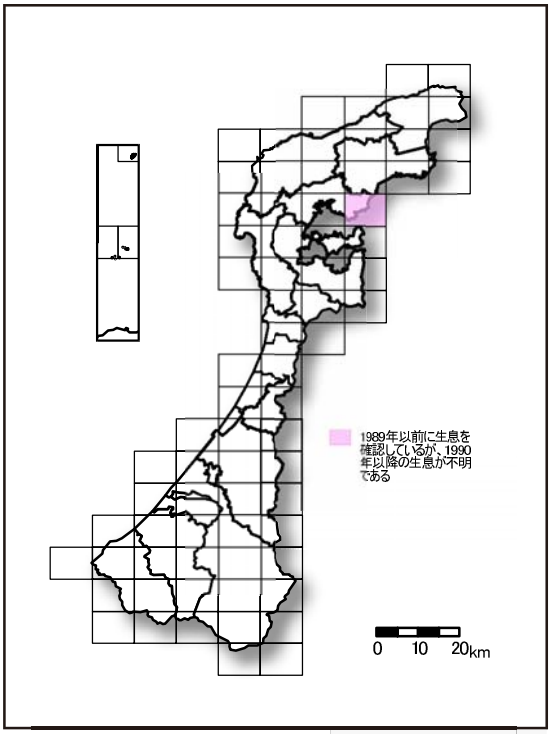
生息地の条件 現在のところ不明である。

生存の危機 二子山のクリ園は放任園が多くなっているので、現在も生息しているかどうか不明である。

参考文献

Togashi, I. 1980. Discovery of the genus *Yelicones* Cameron (Hymenoptera, Braconidae) from Japan. Kontyu, 48(4): 517–520.

写真（図）はありません。



県内の分布

アオスジクモバチ

Paracyphononyx alienus (Smith)

ハチ目クモバチ科

石川県カテゴリー	情報不足
国カテゴリー	なし

選定理由
海岸砂丘地に生息するが、その生息地は限定されている。

形　態
体長は13㎜内外である。体色は黒、体には灰青色の微毛からなる明瞭な線斑がある。

国内分布
本州、四国、九州。

県内分布
金沢市金石海岸、志賀町大島海岸。

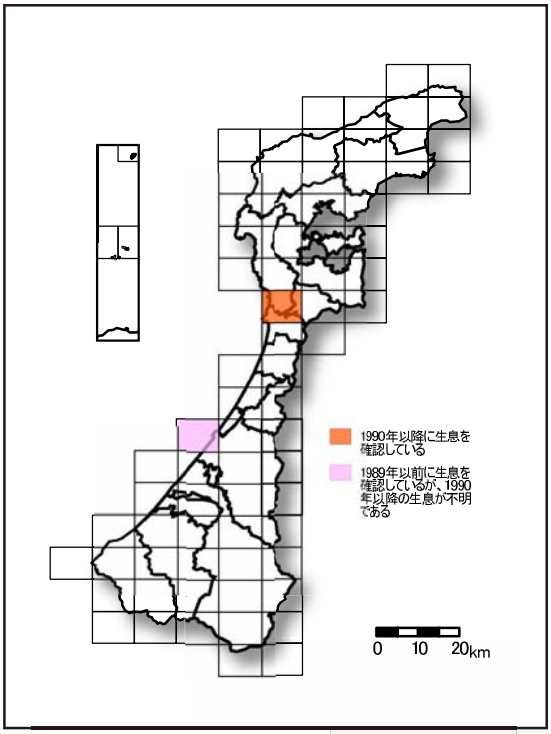
生　態
海浜に生息しているが、海浜近くの林縁部などでも活動しているようである。徘徊性のクモを狩る狩バチで、海浜性のイソコモリグモを攻撃するところが観察されているが、他にどのような種類のクモを狩るのかは不明である。

生息地の条件
本種のエサとなるクモやクモのエサとなる小昆虫類が生息できる海浜植物群落の多い砂丘地の存在が重要である。

生存の危機
砂丘地が浸食により狭くなることに加え、護岸工事により、海浜植物群落が失われると生存できなくなる。護岸工事においては、海浜植物帯の保全を考慮した工法が必要である。

参考文献
富樫一次 1994. 石川県産ベッコウバチ類について 福井虫報, (15) : 73-76.
平嶋義宏ほか 2008. 新訂 原色昆虫大図鑑 第Ⅲ巻 : 570. 北隆館.

写真（図）ありません。



県内の分布

ハクサンホシシリアゲ

Panorpa kagamontana Miyamoto

シリアゲムシ目シリアゲムシ科

石川県カテゴリー	情報不足
国カテゴリー	なし

選定理由　分布が限定されており、個体数も少なく希少種といえる。

形　態　体は黄色を呈しており、翅に斑紋がある。

国内分布　現在のところ、長野県の谷川岳、石川県の白山の２箇所でのみ記録がある。

県内分布　白山の標高1,500～1,700mで採集されたのが、唯一である。

生　態　本種は、白山において標高1,500m以上の高所に生息しており、1,500m以下に生息する近似種のホシシリアゲとは、棲み分けをしているように思われる。生態の詳細は不明である。

生息地の条件　不明である。

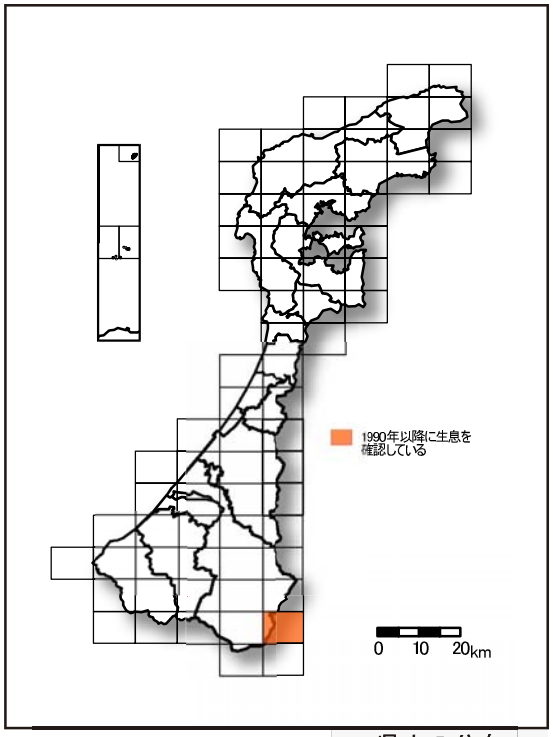
生存の危機　特別保護地区内に生息しているので、開発などで生存が脅かされる可能性は低い。

特記事項　本種は白山の特別保護地区内に生息する。

参考文献

Miyamoto, S. 1978.　Geographical forms in the *Leucoptera* - Group of the genus *Panorps* Linnaeus（2）(Insecta, Mecoptera). Jour. Chikushi Jogakuen Junior College,（13）：33-44.

標本提供者：富樫一次



県内の分布

タケウチケブカミバエ

Paratephritis takeuchii Ito

ハエ目ミバエ科

石川県カテゴリー	情報不足
国カテゴリー	なし

選定理由
個体数が少なく、希少種である。

形　態
体長は約５㎜と微少種である。頭部は褐色をしており、黄色い毛で覆われている。胸部は黒色、翅には斑紋がある。腹部は黒褐色で、黄色の紋がある。

国内分布
石川県白山、奈良県大台ヶ原山、福岡県英彦山。

県内分布
白山の釈迦岳、大嵐山で採集されている。

生　態
釈迦岳と大嵐山においては、ミズバショウの葉に寄生している。大台ヶ原山ではオタカラコウの葉柄に虫瘤を形成する。

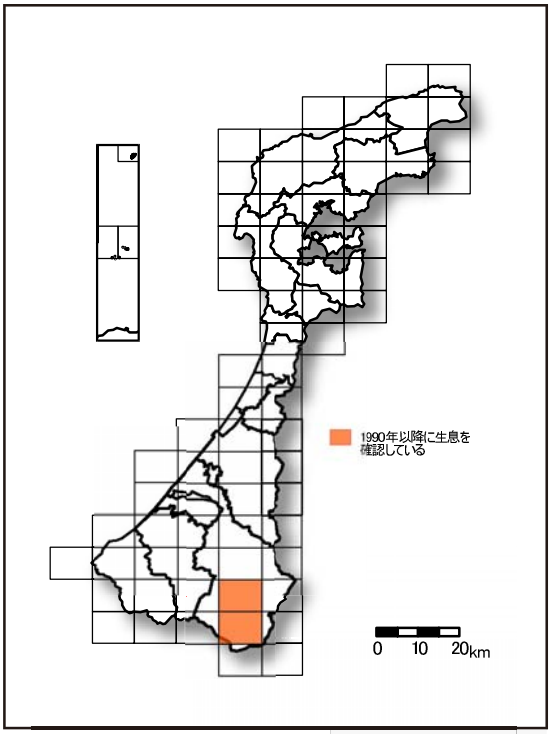
生息地の条件
県内では、ミズバショウに寄生することが確認されているので、ミズバショウの生育する環境が重要と思われる。

生存の危機
ミズバショウは植生破壊されることが少ないので、生存が脅かされる可能性は低い。

特記事項
本種は白山の特別保護地区および、その周辺に分布する。

参考文献
Ito, S. 1983–1985. Die Japanischen Bohrfliegen. 233–234.
徳本　洋・佐伯芳造 1998. ハエ目. 石川県の昆虫 : 323. 石川県自然保護課.

写真（図）はありません。



県内の分布

キイロミヤマイエバエ

Thricops diaphanus (Wiedemann)

ハエ目イエバエ科

石川県カテゴリー	情報不足
国カテゴリー	なし

選定理由　個体数が少なく、希少種と思われる。

形　態　体長は8.0～8.5㎜で、胸部及び腹部は黄色もしくはオレンジ色を呈している。腹部は部分的に黒色となっている。

国内分布　北海道、本州に分布している。

県内分布　白山（標高1,500～1,700m）にて採集されている。

生　態　詳しい生態は不明であるが、ヨーロッパでは、幼虫が菌類から見つかっている。

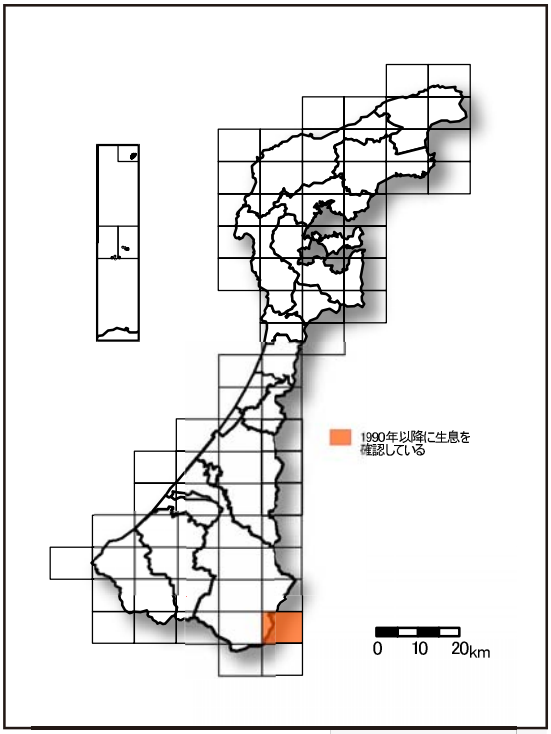
生息地の条件　菌類が本種の幼虫の成育に関わっているようであるが、詳細については不明である。

生存の危機　特別保護地区に生息しているので、生存が脅かされる可能性は低いと思われる。

特記事項　本種は白山の特別保護地区内に生息する。

参考文献　篠永　哲 2003. A Monograph of the Muscidae of Japan. 日本のイエバエ科. 東海大学出版会.

写真（図）はありません。



県内の分布

キバネクロバエ

ハエ目イエバエ科

Mesembrina resplendens cillimaculata Fan & Zhang

石川県カテゴリー	情報不足
国カテゴリー	なし

選定理由　北海道および本州の山地で採集されているが、個体数は少ない。

形　態　体長は約12㎜で、日本産のイエバエ科の中では最大の大きさである。前翅の基部は、黄褐色に色づいている。体は光沢をおびた黒色であるが、胸背前部中央と左右の肩瘤には白粉がついている。

国内分布　北海道、本州。

県内分布　白山市の尾添地区、白峰地区で採集されている。

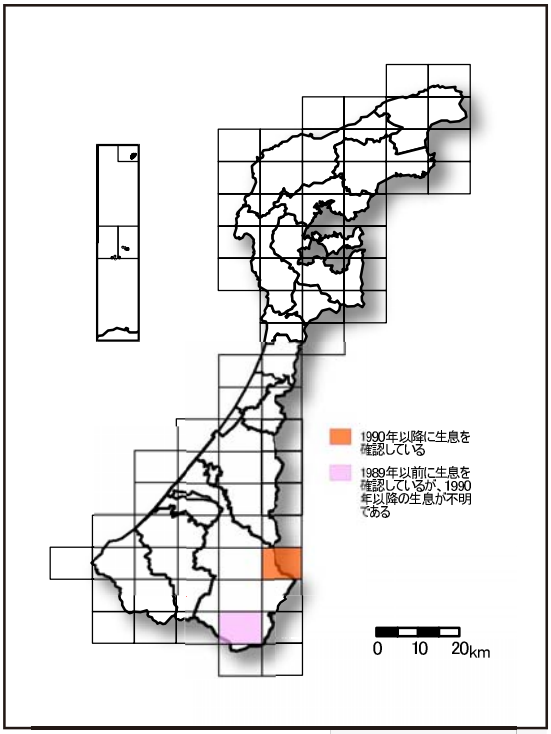
生　態　成虫は８～９月に渓流付近に多く見られ、クマの糞に特異的に産卵するようである。幼虫はクマの糞を食して成長するが、国外では牛糞などクマ以外の獣糞から発生している記録がある。

生息地の条件　生息地は、クマの生息域に準じるものと思われる。

生存の危機　クマの生存が脅かされている状況ではないので、本種の生存に関しては問題ないと思われる。

参考文献　篠永　哲 2003.　A Monograph of the Muscidae of Japan.　日本のイエバエ科.　東海大学出版会.

写真（図）はありません。



県内の分布

ギンイチモンジセセリ

Leptalina unicolor (Bremer et Grey)

チョウ目セセリチョウ科

石川県カテゴリー	情報不足
国カテゴリー	準絶滅危惧

選定理由
1992年から1994年にかけての３例の記録しかない。

形　態
開張30㎜程度の小型種。翅表は一様に黒いが、後翅裏面には、雌雄ともに鮮やかな銀色の線が１本入る。

国内分布
北海道から九州まで広く分布するが、全国的に減少している。

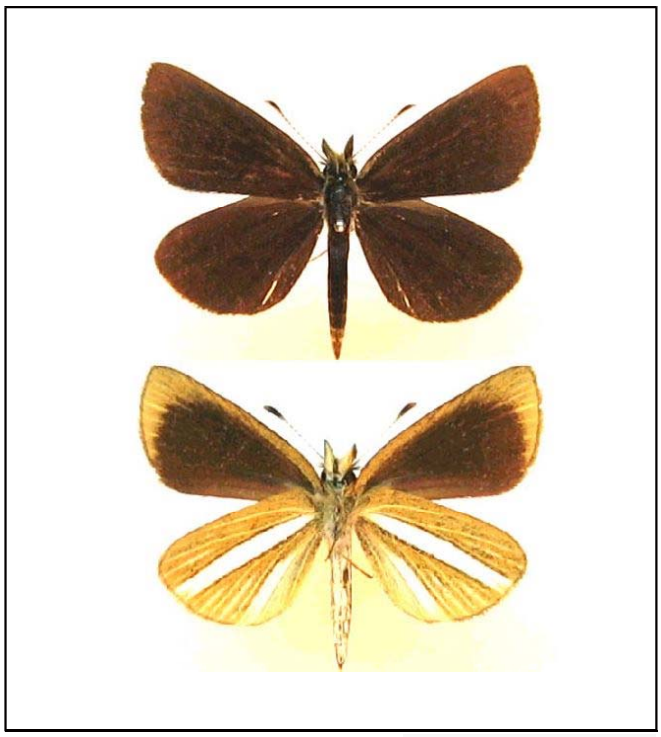
県内分布
中能登町石動山の宿坊跡地周辺で、1992年から1994年にかけて、毎年１個体が観察されているに過ぎず、その他の地域では全く観察されていない。

生　態
ススキなどイネ科植物がある明るい草地に生息し、草上を弱々しく飛翔し、よく止まる。寒冷地では５月下旬から７月中旬に見られ、温暖地では、春型は５月上旬～６月中旬、夏型は７月下旬～８月下旬頃に見られる。幼虫は、ススキやチガヤ、エノコログサなどのイネの仲間を食べる。

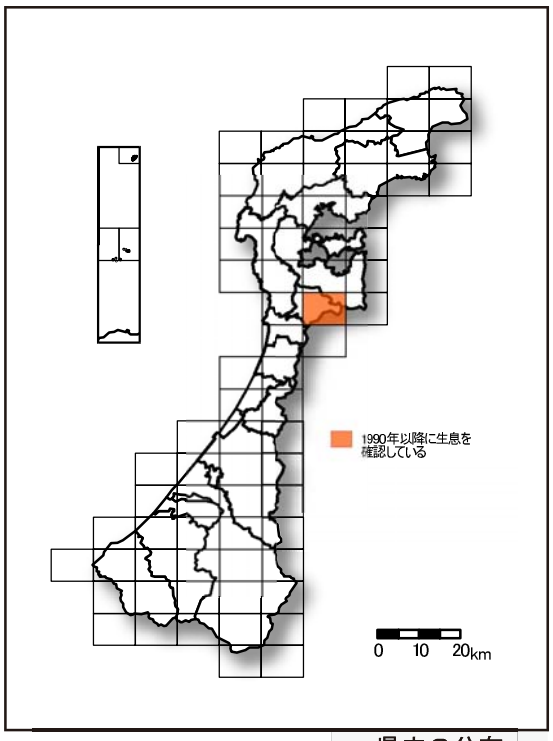
生息地の条件
人為的に維持されている道路脇や耕作地周辺の小規模な草地。

生存の危機
耕作地は放棄され、人為的に維持されてきた草地環境はほとんど消失している。

参考文献
福田晴夫ほか 1984. ギンイチモンジセセリ. 原色日本蝶類生態図鑑（Ⅳ）：216-220. 保育社. 大阪.
松井正人 1994. 石動山のギンイチモンジセセリについて. 翔, (107)： 1-2.



標本提供者：松井正人



県内の分布

ルリイロスカシクロバ

Illiberis consimilis Leech

チョウ目マダラガ科

石川県カテゴリー	情報不足
国カテゴリー	なし

選定理由　産地が局地的で、得られる個体数が少なく、石川県が国内分布の北限である。

形　態　開張は28㎜前後である。翅全体が白っぽく、前翅の翅脈がはっきりしている。後翅は前翅より淡色である。腹部が青色に輝いて見えるのが特徴である。

国内分布　神奈川県、石川県、京都府、愛知県、三重県、大阪府、広島県、大分県、熊本県。

県内分布　1992年３月に加賀市深田で得られているにすぎない。採集地はコナラ、アカマツを主体とした平地の二次林である。

生　態　詳しい生態は不明である。幼虫の食草はツタで、成虫は年１回、３月から４月にかけて発生し、昼間活動する。

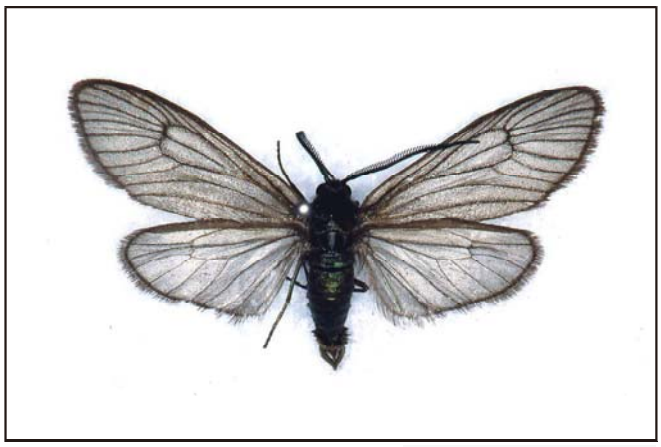
生息地の条件　平野部の二次林に生息する以外、詳細は不明である。

生存の危機　本種が生息している加賀市海岸丘陵地の平地林は畑地化、宅地化等で減少している。

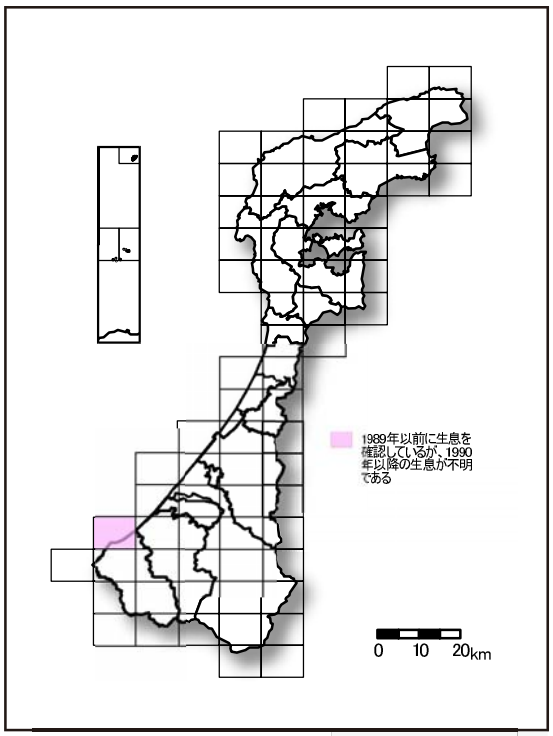
特記事項　県内における分布状況が不明なため、生息調査が必要である。

参考文献

井上　寛ほか 1982. 日本産蛾類大図鑑, 966pp. 講談社. 東京.



標本提供者：江口元章



県内の分布

ネズミホソバ

Pelosia angusta (Staudinger)

チョウ目ヒトリガ科

石川県カテゴリー	情報不足
国カテゴリー	なし

選定理由　全国的な希少種で、既知の生息地、個体数はともにきわめて少ない。

形　　態　開張16㎜前後の小型のガである。ハネは褐色で、前翅の中央に弱い横線が走っている。

国内分布　北海道、栃木県、石川県、島根県、隠岐島、対馬、長崎県から記録されているに過ぎない。

県内分布　1987年８月に小松市金平で得られた１♂が本県唯一の記録である。

生　　態　成虫が５月（栃木県）、７～８月（島根県、石川県）に得られていること以外、生態はわかっていない。幼虫は地衣類を食しているものと思われる。

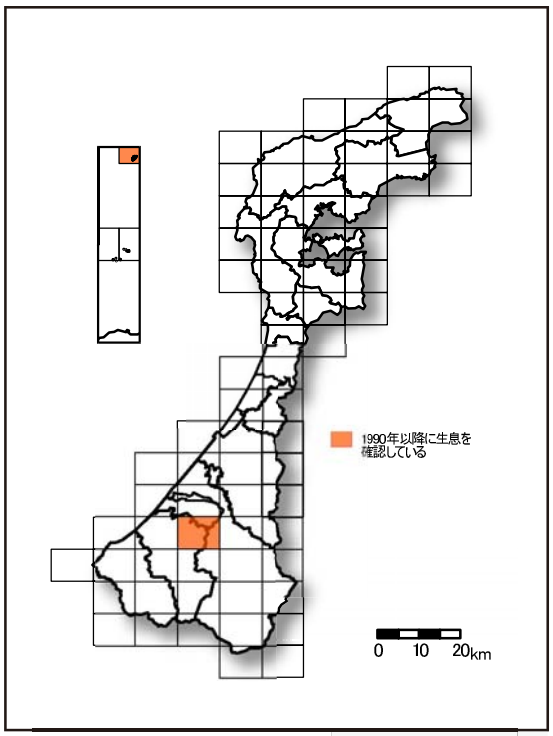
生息地の条件　これまでに本種が得られた環境は、低湿地、草地、林地などさまざまであり、生息制約要因は不明である。

生存の危機　本県の生息地は里山であり、現在もその環境は採集当時とほとんど変わっていない。今後も生息地の環境保全が重要である。

特記事項　採集地区周辺の再調査が必要である。

参考文献　富沢　章 1998. 蛾類. 石川県の昆虫：366-486. 石川県自然保護課.

標本提供者：富沢章



県内の分布

ヒメシロシタバ

Catocala nagioides Wileman

チョウ目ヤガ科

石川県カテゴリー	情報不足
国カテゴリー	なし

選定理由
全国的に分布地が限定される種である。本県においては１例の採集記録があるのみである。

形　態
開張50㎜前後の大型種である。前翅は灰褐色の樹皮模様であるが、後翅は黒色で白色の鮮やかな紋がある。

国内分布
北海道、本州、九州に分布するが、食樹のカシワが局地的な混合林でしか見られないので、本種の産地も限定される。四国には産しない。

県内分布
2005年８月に、輪島市（旧門前町）で得られているに過ぎず、県内の詳細な生息状況は不明である。県内のカシワ林は能登地方の二次林に局在しているので、他にも生息している可能性はある。

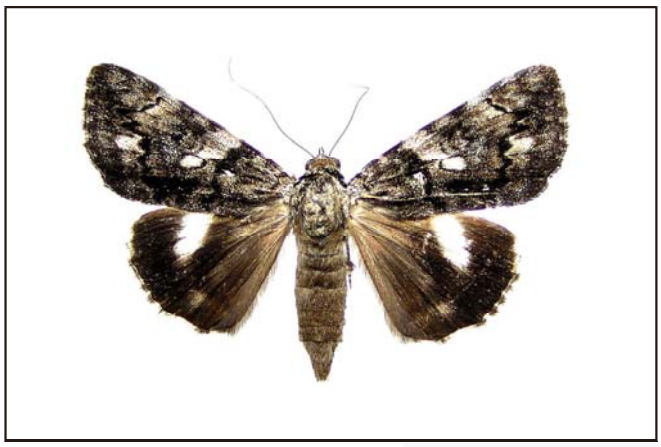
生　態
成虫は、年に１回発生し、７月から８月にかけて出現する。カシワの固有種で、幼虫は５月から７月にかけて育つ。卵越冬する。

生息地の条件
幼虫の食樹であるカシワ林の存在が重要である。

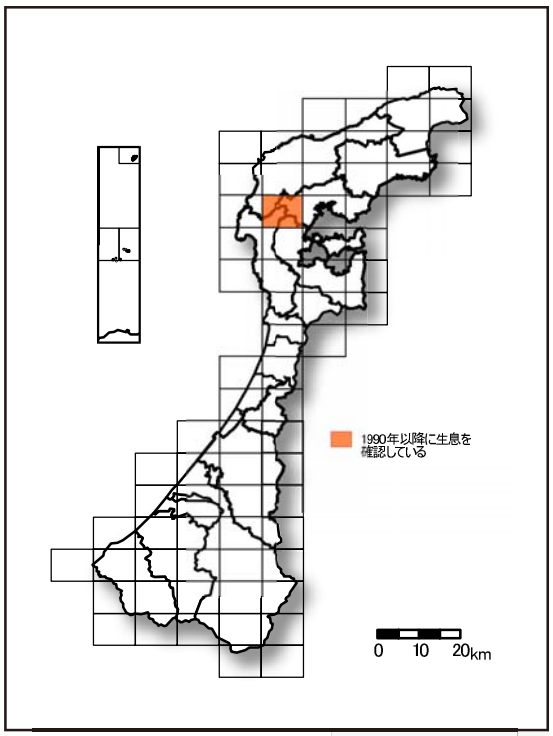
生存の危機
本種の生息可能性のあるカシワ林は、宝達志水町、輪島市、珠洲市の海岸近くに局在しているので、これらの地域ではカシワ林の保護を優先すべきである。

特記事項
本種の調査は不十分で、今後の課題である。

参考文献
富沢　章 2007. 石川県産蛾類の追加記録. 誘蛾燈, （188）: 55–60.



標本提供者：富沢章



県内の分布

ヤマトオサムシ

Carabus yanato (Nakane)

コウチュウ目オサムシ科

石川県カテゴリー	地域個体群
国カテゴリー	なし

選定理由　局地的な分布を示し、県内における生息地は一地域に限られ、開発の恐れがある。

形　　態　マヤサンオサムシと似ているが、体長19～22㎜で小型である。背面は金銅色をしており、光沢がある。外部形態は安定していて変異はない。

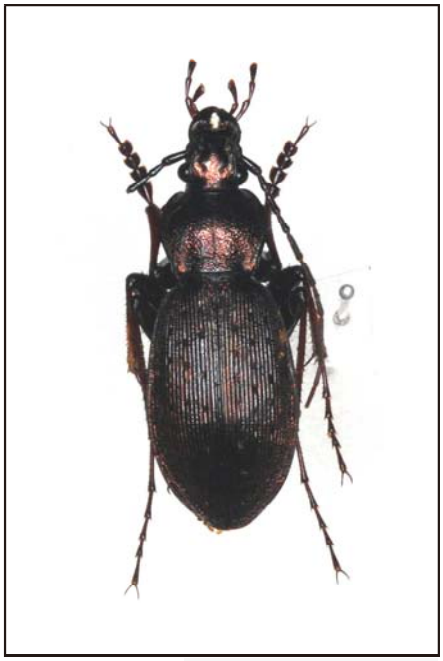
国内分布　中部地方から近畿地方にかけて局地的な分布を示す。

県内分布　白山市（旧河内村）の一区域においてのみ生息し、個体数は比較的多い。

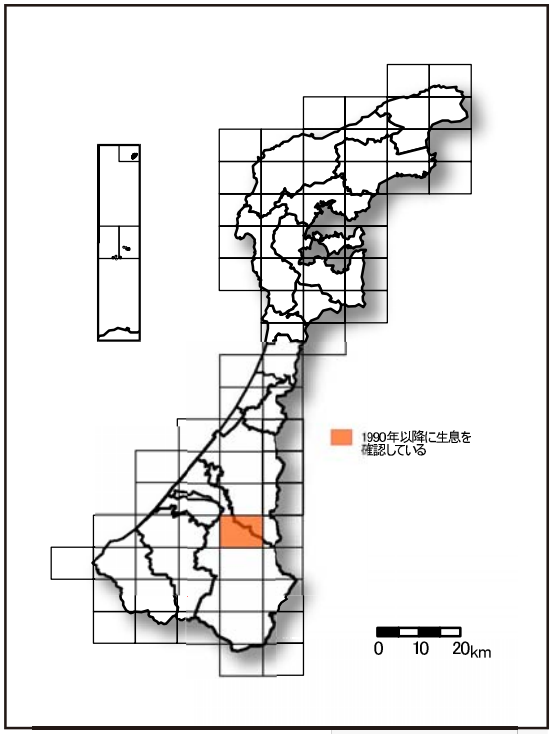
生　　態　成虫は５月から10月まで見られ８月下旬に新成虫が現れる。昼間は石の下などに潜み、夜間活動し、小動物の死体を食しているものと思われる。

生息地の条件　生息地では、杉林に多いように思われるが不明である。

生存の危機　現在のところ、個体数は安定しているが、生息している所が狭い区域なので、大規模な開発が行われれば、絶滅の恐れがあるので、事前に保全策を講ずる必要がある。



標本提供者：富沢章



県内の分布

ヘグラシモフリコメツキ

Actenicerus suzukii hegrensis (Kishii)

コウチュウ目コメツキムシ科

石川県カテゴリー	地域個体群
国カテゴリー	なし

選定理由

舳倉島で採集された個体をタイプ標本として記載された舳倉島特産亜種であるが、記載以降の記録がなく、絶滅が危惧されている。

形　態

体長12.5㎜、幅3.8㎜。Kishii（1964）は、原亜種 *A. suzukii suzukii* (Miwa) と比較して、体が少し幅広くわずかに盛り上がること、触角がより細長いこと、前胸背板中央部にある縦長の平圧部が幅広く、より明瞭であること、上翅の間室にある点刻がやや大きいことなどの相違点を根拠として、亜種として記載している。

国内分布

石川県舳倉島にのみ分布するが、現在も生息しているかは不明である。

生　態

詳細は不明である。

生息地の条件

詳細は不明である。

生存の危機

本亜種記載当時の舳倉島には樹木が生育していたようであるが、現在ではそれらの大部分が枯れてしまい、生息していない可能性も高い。小さな島に特化した亜種であることから、環境改変は本種の生存に致命的な打撃を与えることになる。本種の保全には、島全体の植生を記載当時の状況に復元することが重要と思われる。

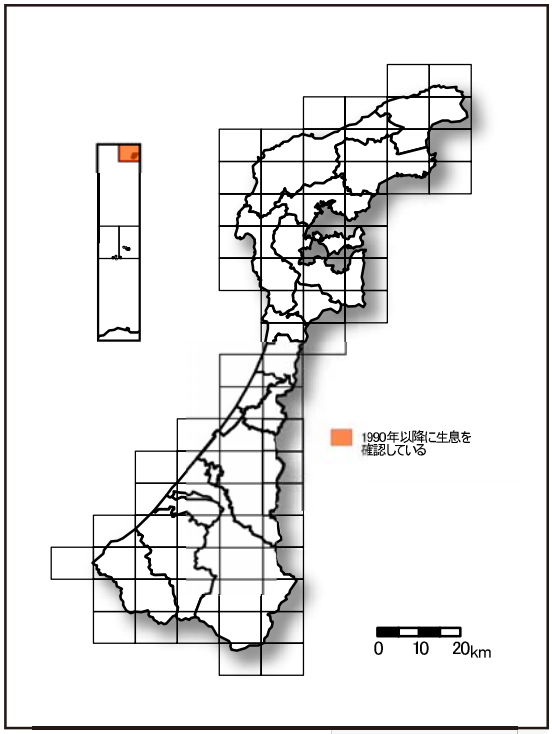
特記事項

舳倉島が本亜種の基産地である。現在の生息状況を調査する必要がある。

参考文献

Kishii, T. 1964. Elateridae of Island Awa-shima, Hegura-jima and Nanatsu-jima "The Snappers of Islands (IV)". Bull. Heian High School,（8）: 1–39.

写真（図）はありません。



県内の分布

ヘグラカバイロコメツキ

Agriotes subvittatus hegurensis Kishii

コウチュウ目コメツキムシ科

石川県カテゴリー	地域個体群
国カテゴリー	なし

選定理由

舳倉島で採集された個体をタイプ標本として記載された亜種であるが、ヘグラシモフリコメツキと同様に記載以降の記録がなく、絶滅が危惧されている。

形　態

体長8.0～9.5㎜。体は細長く艶消し状で、体色は黄褐色。本土に分布する亜種チャイロムナボソコメツキ *A. s. ogurae* Lewis と比較して、触角第２節がわずかに長いこと、前胸背板の点刻がより粗く濃いこと、前胸背板側縁がより平行であることなどの差異により、別亜種として記載された。

国内分布

本亜種はこれまでのところ、舳倉島、佐渡島と隠岐島の日本海離島でのみ確認されている。ただし、舳倉島では現在も生息しているかは不明である。

生　態

県内本土側に分布する *A. s. ogurae* Lewis は河川敷の堆積物の下で年間を通して見られ、灯火にも飛来するという。そのため、本亜種も類似の生態を有しているものと考えられる。

生息地の条件

草本植物の繁茂する環境を好んで生息すると思われる。

生存の危機

記載当時と現在とでは島の植生が大きく変化している。本種は環境改変には弱いと思われるため、島全体の植生を記載当時の状況に復元することが必要と思われる。

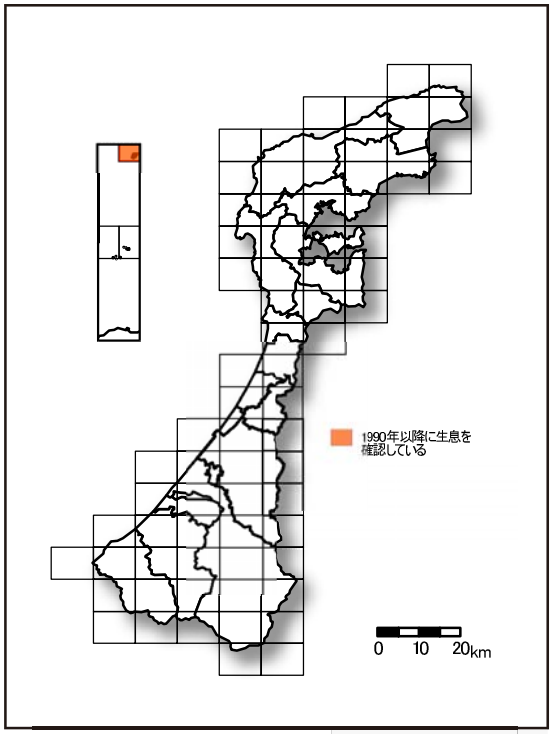
特記事項

舳倉島が本亜種の基産地である。現状における生息状況を確認する必要がある。

参考文献

Kishii, T. 1964. Elateridae of Island Awa-shima, Hegura-jima and Nanatsu-jima "The Snappers of Islands (IV)". Bull. Heian High School, (8): 1–39.

写真（図）はありません。



県内の分布

コムラサキ（黒色型）

Apatura metis substituta Butler

チョウ目タテハチョウ科

石川県カテゴリー	地域個体群
国カテゴリー	なし

選定理由

褐色型と黒色型の２遺伝型があり、遺伝的に劣性な黒色型の分布は限られる。ほとんど黒色型しか見られない奥能登は、褐色型遺伝子がほとんど存在しない全国的にも特殊な地域である。

形　態

開張60～70㎜の中型種。オスの翅表は黒褐色に白帯があり、見る角度によって黒褐色部分が紫色に輝く。メスはオスと同じ斑紋を有し一回り大きいが、紫色に輝かない。

国内分布

黒色型は、静岡、愛知、岐阜、長野、富山、石川、九州の熊本県以南などに分布が集中し、褐色型に混じって見られる。

県内分布

黒色型は、加賀地方では褐色型に混じって稀に観察される程度であるが、口能登から黒色型の割合が増え、奥能登では逆転して褐色型が稀となる。個体数が多いのは河川沿いで、河原のヤナギ類で発生している。人為的環境にもよく適応し、公園のシダレヤナギや民家のウンリュウヤナギなどでも発生している。

生　態

年３回発生し、５月下旬から10月上旬まで、河川に沿ったヤナギ類の木の周辺で良く見られる。朝方はヤナギ類の樹液を吸っているが、陽が高くなるとヤナギ類の樹冠をなめるように、枝から枝へせわしげに飛び回る。幼虫は、主に河原のヤナギ類、川沿いの大きくならないヤナギからカワヤナギのように大きくなるヤナギを食し、越冬は樹皮の割れ目や、小枝の分岐点で行われる。

生息地の条件

河川周辺にヤナギ類が生えている所。

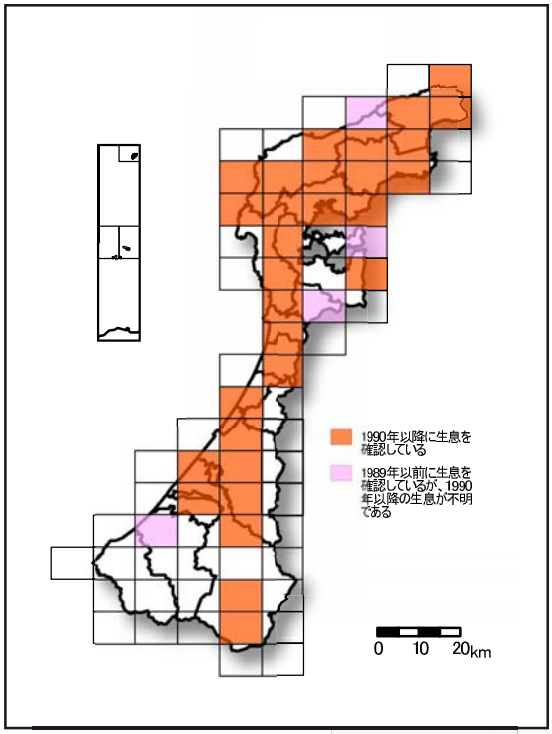
生存の危機

近年、コンクリート護岸工事などの河川改修でヤナギ類が伐採され、奥能登のヤナギ林はほとんど姿を消し、本種は減少している。また、街路樹や公園の樹木に他地域のヤナギ類が植栽されることにより、それに寄生していた褐色型が侵入することが十分考えられる。黒色型遺伝子が減少している現在、わずかな褐色型遺伝子が持ち込まれても、劣性な黒色型は大きな打撃を受けることになる。ヤナギ林の保全はいうまでもなく、褐色型遺伝子を持ち込む恐れのある他地域のヤナギ類は、搬入を控えるべきである。

参考文献

福田晴夫ほか 1983. コムラサキ. 原色日本蝶類生態図鑑（Ⅱ）：255-259. 保育社. 大阪.

写真提供者：左合直



県内の分布

アルプスヤガ

Xestia speciosa (Hubner)

チョウ目ヤガ科

石川県カテゴリー	地域個体群
国カテゴリー	なし

選定理由
中部山岳では高山帯にのみに分布し、白山がその西限にあたる。また、白山産の個体群は他産地と比べ、外部形態が特異的である。

形　態
大きさは開張40㎜前後である。後翅は一様に灰白色である。前翅は通常、黒褐色の鱗片を密布し、黒っぽく見えるが、白山の個体は赤褐色の鱗片で被われているため、赤褐色味の強い個体が90%以上を占め、特異的である。

国内分布
北海道および本州の中部山岳地帯を中心として2,000m以上の稜線部に分布し、南限は荒川岳、西限は白山である。

県内分布
白山の標高2,400m以上の室堂平と千蛇ヶ池付近で記録があるが、2,000m付近では得られておらず、亜高山帯には生息しないようである。

生　態
成虫は年一回、７月から８月に発生する。野外における食草としてコケモモが知られているが、詳しい生態は不明である。

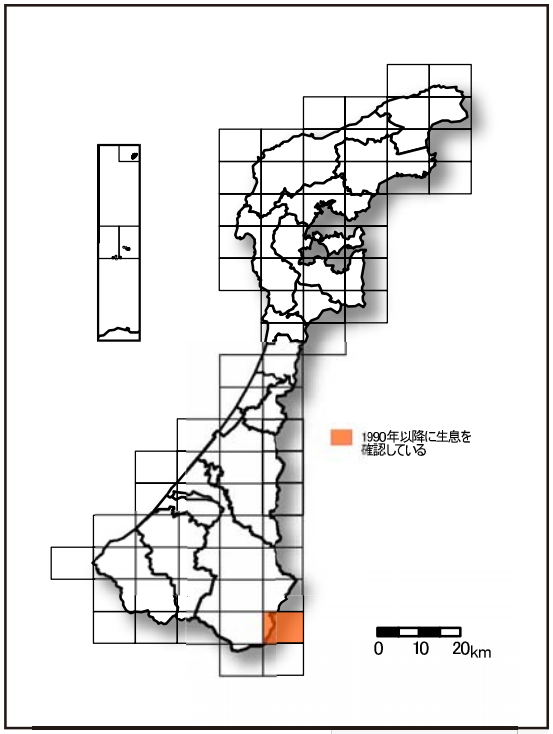
生息地の条件
標高2,400m以上の高山帯で、ハイマツ群落内に多様なわい性低木の群落が形成されていることが重要である。

生存の危機
全国的にみると白山における本種の生息域はきわめて狭く、孤立している。温暖化や踏みつけによる自然植生の破壊は、生息環境の悪化を招く。

特記事項
白山の個体は赤褐色味の強い個体がほとんどで、飛騨山脈等の個体群とは異なり、地理的に隔離されたものと考えられ、貴重である。本種の生息地は白山国立公園の特別保護地区内にある。

参考文献
神保一義 1984. 高山蛾. 191pp. 築地書館. 東京
大和田　守・富沢　章 1985. 白山高山帯の蛾相. 国立科学博物館専報, 18 : 199-208.

写真提供者：富沢章



県内の分布

6．浅海域の生物

＜海藻類＞

1　石川県の海藻相

能登沿岸は、国内でも比較的早い時期に海藻相の研究が始まった地域として知られる。日本の海藻学の創始者である岡村金太郎（1867年～1935年）が第四高等中学校在勤（1892年～1896年）中に「能州の海藻」と題した採集旅行記録（岡村 1893）を記している。岡村は、能登半島の海藻だけをまとめることはなかったが、集大成の「日本海藻誌」（1936年）の産地欄には能登各地の地名が随所に記されている。

これまでに能登沿岸から報告された海藻は、緑藻41種、褐藻86種、紅藻187種の計314種である（藤田ら 1998）。しかし、調査研究は充分とはいえず、能登町（旧内浦町）と輪島市（旧輪島市）からは、それぞれ200種を超える報告があるものの、他の市町では調査例が少なく、報告数も極めて少ない。

2　種の選定基準

先に石川県の海藻の希少種・保護対象種として、ホソエガサなど緑藻2種、褐藻9種、紅藻7種の計18種をあげた。このうち、多くの市町から報告のあるスギモクなど4種と輪島市沿岸の潮間帯に優先するナラサモの計5種は、今の所、絶滅の危機のない普通種と判断し、残り13種を希少種と評価した(表１、石川県 2000）。

表1　希少種・保護対象種の選定項目

地理的分布からみて特記される種 （北限の種）	ホソエガサ、フジノハズタ、シダモク、 ツクシアマノリ、ススカケベニ
地理的分布からみて特記される種 （日本海固有の種）	スギモク、カタノリ、ウスバノコギリモク、ウスイロモク、ノトイトグサ、ホソナガベニハノリ
全国的･国際的にみて、ある地域に限定されて分布する特異な種	ホソエガサ、ウスイロモク、マルバアサクサノリ
全国的にみれば普通種であるが、石川県での分布が限定されている種	イシゲ、ヒジキ、シダモク、タマハハキモク、 ウスバノコギリモク、ススカケベニ
全国的にみれば希少種であるが、石川県には広く分布している種	ホソエガサ
南方系または北方系だが石川県に広く分布している種	ホソエガサ
基準産地が石川県内にある種	ホソナガベニハノリ（柴垣）、ノトイトグサ（柴垣）

前回も述べたが、リストアップした13種を生態分布からみると、いくつかのグループに分けられる。1. 北限の種：ホソエガサなど5種。2. 特定の環境にしか生育しない種：貝類の遺骸堆積地に生育するホソエガサ、時々砂をかぶるところに生育するウスイロモク、河口に隣接する砂地に形成される岩場に生育するマルバアサクサノリ。3. 漸深帯の深いところに生育する種：フジノハズタとウスバノコギリモク。4. 普通は潮間帯に群落を作る種：イシゲとヒジキ。の4グループである。

これははからずも、本県沿岸の大きな環境特性を示している。つまり、1. から、対馬海流の影響を強く受ける海域である。2. から能登沿岸には多様な環境がある。3. から漸深帯の深いところまで光合成に必要な光が届いており、透明度のある沿岸水が保たれている。4. から干満の差が少なく潮間帯に生育する海藻は生活し難い。以上のことがいえよう。

今回の改訂にあたっては、潮間帯に生育し、比較的目立つヒジキの調査に重点をおき、県内の岩礁海岸を広

く踏査した。その結果、13箇所でヒジキを確認した（東出ら 2004）。このうち、能登町新保、穴水町根木、能登島町鰀目、七尾市庵、志賀町赤住（水産総合センター前）の5箇所でヒジキの群落を確認した。しかし、いずれも新たに造成された離岸堤や護岸などの人口構造物に、他の海藻に先んじて入植した群落で、規模は幅50㎝から30㎜までであった。その後は競合するウミトラノオやイソモクの入植によりヒジキの衰退は進行している。なお、能登島町野崎の人工護岸の2㎜の群落は2007年には消失していた。このほか5箇所で人工構造物に生育するヒジキを認めたが、1株から数株に過ぎない。

人工構造物に入植したヒジキは、その後衰退していく傾向が強いため、絶滅危惧の判定材料に用いにくい。今回はカテゴリーの変更は行わないこととし、今後、群落の衰退状況をよく観察した上で資料に加えるか否かを決めたい。

自然海岸に生育するヒジキは3箇所しかなく、この10年間、志賀町福浦の群落には、大きな変化は生じていない。能登町姫の群落は縮小傾向、そして志賀町赤住（漁港前）には2株が生育しているに過ぎない。

表2　海藻類選定種一覧

区　分	海　藻　類	種類数等
絶滅	―	―
絶滅危惧Ⅰ類	―	―
絶滅危惧Ⅱ類	ヒジキ、マルバアサクサノリ	2
準絶滅危惧	ホソエガサ、イシゲ、シダモク、ホソナガベニハノリ、ノトイトグサ	5
情報不足	ウスバノコギリモク、タマハハキモク、ススカケベニ	3
地域個体群	フジノハズタ、ウスイロモク、ツクシアマノリ	3
計		13

（佐野　修）

＜魚類・無脊椎動物＞

1　石川県の魚類・無脊椎動物相

ここで言う浅海とは、海岸に沿って海水や波浪の影響を受ける潮上帯（飛沫帯)の海岸から、素潜りやスキューバー潜水によって比較的容易に観察できる水深 20m 付近までの範囲を総称的に用いた。そのために、日本海固有種であるオオエッチュウバイなどが生育している深海性の動物は対象から除外した。

潮の干満の影響を受ける海岸といっても、基質の違いによって砂泥海岸（干潟を含む)、ごろた石（礫）海岸、巨礫転石海岸、岩礁海岸に区別できる。しかし、日本海沿岸の潮位は、冬から春にかけては全体に低くなる非調和型の潮汐変動を示すとはいえ、年間を通じた毎日の干満差は、たかだか 30cm 程しかない。そのため、太平洋や東シナ海などの内湾に見られるような干潟の形成はなく、干潟特有の動物は極めて少ないのが特徴である。

また、日本海を北上し、その主流は津軽海峡を通って三陸沿岸へと南下する対馬海流の源は、暖流の黒潮である。この黒潮は、太平洋側では北から南下する寒流の親潮と銚子沖で出会うために、そこを境として海産の動物相は異なる。一方、本州の日本海側を北上する対馬海流が寒流と出会う海域はないので、太平洋側と同じ緯度の浅海域と比べても海水の温度は高く、南方系と北方系の動植物相の境界は顕著でない。また、タコブネ・ハリセンボン・ソラスズメダイ・オヤビッチャ・セグロウミヘビなどの熱帯・亜熱帯海域由来の動物が対馬海流に乗って日本海にやって来る。しかし、日本海の表面海水の温度は冬になれば低下するので、これらの南方系の動物は、そこで周年生活し産卵して子孫を残す前に死んでしまう。このような現象を無効分散（死滅回遊）といい、冬の日本海で毎年繰り返される出来事である。このように同じ浅海といっても、日本海の環境は太平洋などのそれとは異質なものがあり、動物相、水平・垂直的な分布域、生息密度などの違いに反映される。

2　種の選定基準

IUCN（国際自然保護連合）の絶滅のおそれのある生物に関するレッドリストカテゴリーの基準を踏まえて、環境庁（当時）が日本の生物のリストの作成を行い「日本の絶滅のおそれのある野生生物」(1991）を出版した。その後も逐次見直しが行われ、2007（平成 19）年 8 月までに新レッドリストが公表された。しかしながら、その主な対象は陸上と陸水の生物であり、ウミガメ類と海草類を除いた海産の生物群について、国レベルのカテゴリー区分に基づいた希少種の正式なリストはない。一方、沖縄県や千葉県、岡山県など、地方自治体が独自に海産動物を希少種としてレッドリスト等に取り上げる事例が増えつつある。

言うまでもないことであるが、生物はそれぞれの環境に応じて地域的に分布している。連続的に分布しているものがある一方、不連続的に、それも飛び地のように極めて限定した場所に分布しているものもいる。また、太平洋側では普通種であっても、日本海側、さらに石川県では希少なものや、その反対に全国的にみれば希少だが、石川県では普通にみられるものもある。さらに、本来の分布域が人為的な環境かく乱によって生息域が限定されたり、絶滅してしまう危機にさらされるほうが高くなっている場合がある。しかし、陸上の生物に比べて定性・定量的な調査研究の蓄積が十分でない海産の生物について希少種を選定し、ランク付けするための基準をどこに設定したら良いのかを検討すべき問題が多く残されている。

このような事情が多くあることを承知の上で、石川県の浅海域の動物の現在の生息状況を検討し、希少種の中でも代表的といわれるものを中心にカテゴリーの定義に基づいてランク別にまとめた。

表3　希少種・保護対象種の選定項目

地理的分布からみて特記される種 （北限の種）	キクメイシモドキ（群生）、マクラガイ、 ナメクジウオ、イチモンジハゼ
地理的分布からみて特記される種 （日本固有であるが、能登半島を中心に分布している種）	ムツサンゴ、ツクモジュズサンゴ
地理的分布からみて特記される種 （国際的にみて、ある地域に限定して分布している種）	マシコヒゲムシ
全国的にみれば普通種であるが、石川県での分布が限定している種	タマカイメン、クロガヤ、ウミイチゴ、ウミサボテン、ホソウミエラ、フトウミエラ、ウメボシイソギンチャク、ムラサキハナギンチャク、アンズイソギンチャク、グビジンイソギンチャク、ホウキムシ、アマガイ、シロカラマツガイ、ヤカドツノガイ、ツノガイ、ロウソクツノガイ、ハボウキガイ、ベニガイ、バラフマテガイ、オトヒメゴカイ、ヤツデスナヒトデ、ユウレイボヤ、カタユウレイボヤ、アカハゼ
全国的にみれば希少種だが、石川県に多くみられる種	ウミニナ
南方系だが、石川県に広く分布している種	チャイロキヌタ、メダカラ

なお、レッドリストの脊椎動物については、周年生育しているとともに産卵して子孫を残している、または、その可能性が高い魚類を対象とした。そのために、一時的に回遊してくるウミガメ類（ただし、県内で産卵・孵化の記録があるアカウミガメは、両生・爬虫類に掲載）、クジラ、オットセイ、海鳥の仲間や、無効分散する魚介類などは、取り上げなかった。

今回の改訂に当たり、日本海にも分布することが明らかとなったワダツミギボシムシを地域個体群として追加した。本種は当初、能登町の小浦と姫の海岸で見つかったが（坂井ほか 2001）、その後の調査で九十九湾周辺や恋路海岸、そして志賀町の増穂ヶ浦でも生息することが明らかとなった。一方、能登町の九十九湾にだけ生息するマシコヒゲムシは、原記載では有鬚動物門に分類されていたが、近年の研究により環形動物門に再分類され、また、生理学的特徴も明らかになっている（Sasayama et al. 2003）。このため、情報不足から地域個体群のカテゴリーに移した。前回、和名をサクラゴカイ（仮称）とした記載には、明らかにサクラオフェリアとエゾオフェリアの 2 種が含まれることが分かったので、前者を削除して後 2 者を記載した。なお、サクラオフェリアは白山市、エゾオフェリアはかほく市から志賀町の砂浜海岸だけで見つかっているため、地域個体群として扱った（川原ほか 2007; 坂井恵一 2008）。

前回は準絶滅危惧種に分類されたメダカラとマクラガイ、そしてグビジンイソギンチャクの 3 種は、当地域が分布のほぼ北限に当たるが、その生息数は少なくないことが明らかとなったため、アンズイソギンチャク（カワリギンチャクを修正）は長崎県や瀬戸内海にも分布するが（内田・楚山勇 2001）、日本海における分布地は本県能登町の九十九湾と七尾市百海に限られていることから地域個体群に変更した。また、前回は準絶滅危惧種とされたチャイロキヌタ、ウミサボテン、ホソウミエラ、そしてフトウミエラの 4 種は生息場所や個体数に関する資料が極めて少なかったので、情報不足に移した。

表4　魚類・無脊椎動物選定種一覧

区分	無脊椎動物	種類数等	魚類	種類数等
絶滅	―	―	―	―
絶滅危惧Ⅰ類	―	―	―	―
絶滅危惧Ⅱ類	―	―	―	―
準絶滅危惧	キクメイシモドキ、ムツサンゴ	2	―	
情報不足	タマカイメン、ウミサボテン、ホソウミエラ、フトウミエラ、チャイロキヌタ、ハボウキガイ、コシダカウニ、オトヒメゴカイ、カタユウレイボヤ、ナメクジウオ	10	アカハゼ	1
地域個体群	ツクモジュズサンゴ、シオガマサンゴ、アンズイソギンチャク、グビジンイソギンチャク、アマガイ、メダカラ、マクラガイ、マシコヒゲムシ、サクラオフェリア、エゾオフェリア、ミサキギボシムシ、ワダツミボシムシ	12	イチモンジハゼ	1
	計	24	計	2

（坂井　恵一）

新旧対応表

		前回						
		絶滅 0	絶滅危惧Ⅰ類 0	絶滅危惧Ⅱ類 2	準絶滅危惧 15	情報不足 11	地域個体群 9	カテゴリー外 3
今回	絶滅 0							
	絶滅危惧Ⅰ類 0							
	絶滅危惧Ⅱ類 2			ヒジキ マルバアサクサノリ				
	準絶滅危惧 7				ホソエガサ イシゲ シダモク ホソナガベニハノリ ノトイトグサ キクメイシモドキ ムツサンゴ			
	情報不足 14				ウミサボテン ホソウミエラ フトウミエラ チャイロキヌタ	ウスバノコギリモク タマハハキモク ススカケベニ タマカイメン ハボウキガイ コシダカウニ オトヒメゴカイ カタユウレイボヤ ナメクジウオ アカハゼ		
39	地域個体群 16				アンズイソギンチャク グビジンイソギンチャク メダカラ マクラガイ	マシコヒゲムシ	フジノハズタ ウスイロモク ツクシアマノリ シオガマサンゴ ツクモジュズサンゴ アマガイ ミサキギボシムシ イチモンジハゼ	ワダツミギボシムシ サクラオフェリア(※サクラゴカイ(仮称)) エゾオフェリア(※サクラゴカイ(仮称))
	カテゴリー外 1						サクラゴカイ(仮称)	

※(　)内 前回掲載種名

ヒジキ

Hizikia fusiformis (Harvey) Okamura

ヒバマタ目 ホンダワラ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類
国カテゴリー	なし

選定理由
これまで知られていた能登の3箇所の群落の内、人工護岸の能登島町野崎の群落は消失。自然岩礁の能登町姫はかつての生育面積に比べ10％まで減っている。同自然岩礁の志賀町福浦の群落に変化ない。新たに、5箇所の人口構造物に群落が発生したが、その後衰退が進行している。

形　態
葉は円柱状で多肉質、食用となる。

国内分布
北海道南部、本州太平洋岸、四国、九州、本州日本海中・南部、南西諸島。

県内分布
自然岩礁では能登町姫と志賀町福浦に小さな群落が、同赤住に2株が生育している。新たに造成された離岸堤や護岸の5箇所で群落を認めたが、その後、衰退している。このほか、5箇所の人口構造物で、1株から数株の生育を認めた。

生　態
潮間帯下部に群落を作る。

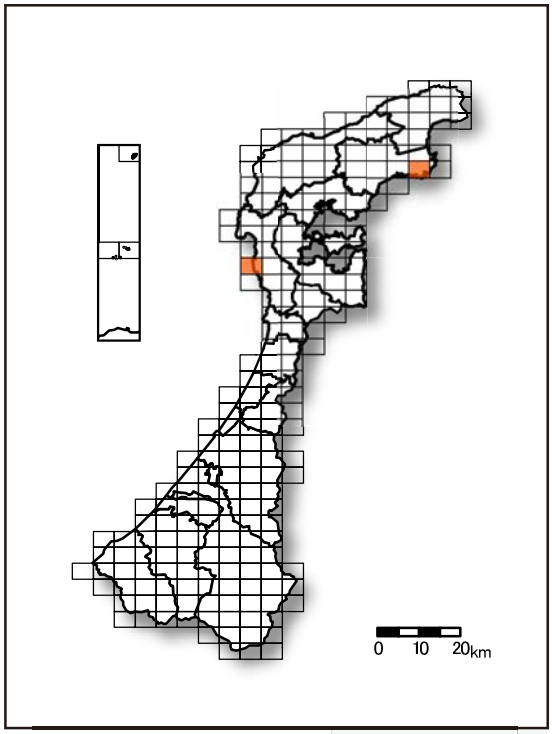
生育地の条件
干満の差がある潮間帯に生育する。また、ウミトラノオとの競合関係がよく知られている。

生存の危機
元金沢大学理学部臨海実験所技官の新谷 力氏（故人）によれば、能登町姫の群落は昭和20年代時には幅10m以上と大規模で、地元では食用に利用したという。現在は幅1mしかない。 (D)

特記事項
干満の差の少ない本県沿岸における潮間帯特性と生物の関係を知る上で貴重な海藻である。

参考文献
佐野　修. 1988. 春は海からやって来る. 石川の四季と自然, 12ｐ. 石川自然誌研究会, 金沢
東出幸真・池森貴彦・新井章吾・佐野修, 2004. 石川県におけるヒジキの分布概況. のと海洋ふれあいセンター研究報告, 第10号：17-20

写真提供者：佐野修



県内の分布

マルバアサクサノリ

Porphyra kuniedae Kurogi

ウシケノリ目 ウシケノリ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類
国カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類

選定理由

珠洲市狼煙海岸でしか採集されていない。飯田湾から七尾湾にかけての内湾域での生育が期待されるが、この地域でのアマノリ属海藻の調査は不十分である。しかし、全国的に本種の野生種の発見は限られており、本県での生育数も微々たるものと考えられる。

形　態

体は卵形、円形、半円形。高さ5～10cm、幅4～15cm。縁辺は全縁、雌雄同株、雌雄の部分は体の縁辺部に混じって生じる。精子嚢斑は体上部では体の内側に向かって縦に伸びる縞状となる。

国内分布

自然分布は本州太平洋岸北部、古くは養殖対象種で、瀬戸内海と有明海で採集されたことがある。

県内分布

珠洲市狼煙。

生　態

河口域とそれに隣接する内湾域の潮間帯に生育する。

生育地の条件

河口域とそれに隣接する内湾域。

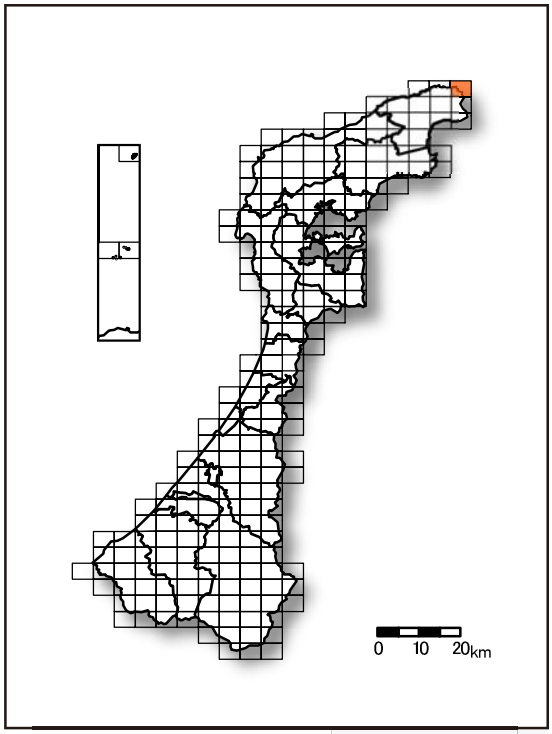
生存の危機

糸状体の時期は貝殻片の中で過ごすが、その上に泥が堆積すると光合成ができなくなる。河川上流での森林伐採やダム建設などに伴って、河口域に泥の堆積が進むと次第に衰退する（三浦，1998）。(A)

参考文献

佐野　修．1984．冬の味覚ー岩ノリー．能登の自然，110-111．石川自然誌研究会，金沢
三浦昭雄．1998．日本の希少な野生水生生物に関するデータブック（水産庁編）．306-307．日本水産資源保護協会，東京

写真提供者：佐野修



県内の分布

ホソエガサ

Acetabularia caliculus Lamouroux

カサノリ目 カサノリ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類

選定理由
浚渫等により一部の生育地で、消失が確認されている。能登半島がカサノリ科海藻の世界の北限地として知られる。また、日本では今の所、確実に採集できるのは能登沿岸しかない。本県にとって貴重な海藻である。

形　態
体は高さ4～5cmになり、茎部は石灰質を沈積する。成長の初期（6～7月中旬）は毛状葉を輪生し、成長する（7月下旬～9月）と頂部に傘状部を付ける。傘は、風で裏返しになったような形で、直径は5㎜くらい。

国内分布
本州太平洋岸中・南部、瀬戸内海、九州、本州日本海岸中部。

県内分布
能登沿岸の旧13市町村の内10市町村で記録がある。特に能登内浦では新産地が次々と知られてきている。

生　態
貝殻やウニの殻などに付着生育する特性があり、能登沿岸では砂地のアマモ場の中あるいはやや沖合のウミヒルモ群落内に形成される貝類の遺骸堆積地で見出されている。ここは、白い貝殻片が明るく輝いているので砂泥質の海底との区別は容易である。

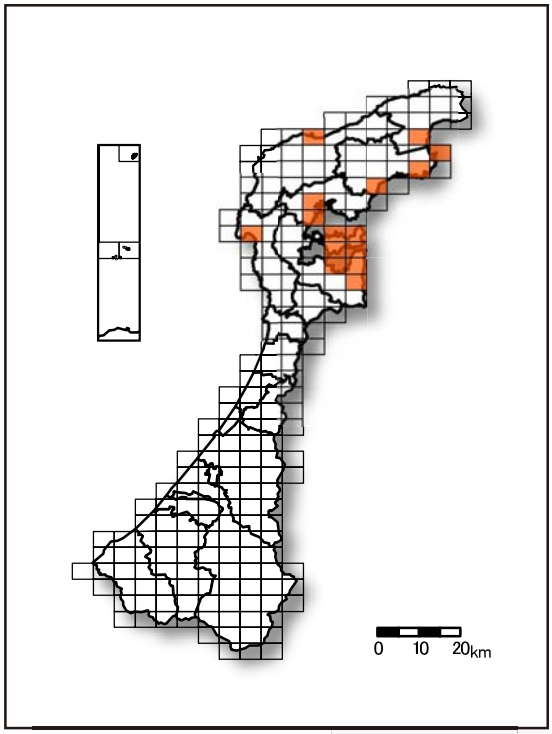
生育地の条件
波浪などの影響で貝殻片が集積される「貝類の遺骸堆積地」に限る。貝殻片は、付近に生息する貝類に由来しており、多様な貝類が豊富に生息していることが大切な条件となる。

生存の危機
県内では、さしあたっての生存の危機はない。しかし、本種が生育し続けるには、海底で光合成するに十分な光を届ける透明度の高い海水を、また貝類が豊富に生息する環境を維持する必要がある。現状維持が存続の条件と思われる。

特記事項
近年の日本においては能登沿岸以外では思うように採集されず、瀬戸内海や伊勢湾ではすでに絶滅したと考えられることから石川（1998）は絶滅危惧種とした。

参考文献
佐野　修・池森雅彦・新崎盛敏. 1981. ホソエガサの能登半島における分布と生態. 藻類, 29：31-38.
石川依久子. 1998. ホソエガサ. 日本の希少な野生水生生物に関するデータブック（水産庁編）, 348-349. 日本水産資源保護協会, 東京

写真提供者：佐野修



県内の分布

イシゲ

Ishige okamurae Yendo

ナガマツモ目イシゲ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由　干満の差が少ない本県では稀にしか発見されない。

形　　態　体は10cmくらいになり、又状に分岐する。質はかたい。

国内分布　本州太平洋岸中・南部、四国、九州、本州日本海岸中・南部。

県内分布　旧富来町、輪島市、能登島町から報告がある。

生　　態　本州太平洋岸中部において、イロロ、イワヒゲと共に潮間帯中部に大きな群落を作る。

生育地の条件　干満の差がある潮間帯中部。

生存の危機　もっぱら潮間帯中部に生育する本種にとって、干満の差が少ない本県沿岸は不安定な環境と思われる。

特記事項　ヒジキと同様に、本県沿岸における潮間帯特性と生物の関係を知る上で貴重な海藻である。

写真提供者：新井章吾

分布図はありません。

県内の分布

シダモク

Sargassum filicinum Harvey

ヒバマタ目 ホンダワラ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由　海藻関係者の間では古くから本種の生育が注目されていたが、舟橋（1967）が採集し、北海道大学理学部に保管されている標本が県内では唯一のものである。分布の北限に位置し、本来、数少ない海藻と考えられる。

形　態　アカモクに似るが、気胞が球形から楕円形ないし紡錘形で、円柱状のアカモクと区別する。また、雌雄同株である。

国内分布　太平洋岸関東以西、日本海岸能登半島から九州西岸、瀬戸内海。

県内分布　能登町立壁。

生　態　1年生で春から夏に成熟する。

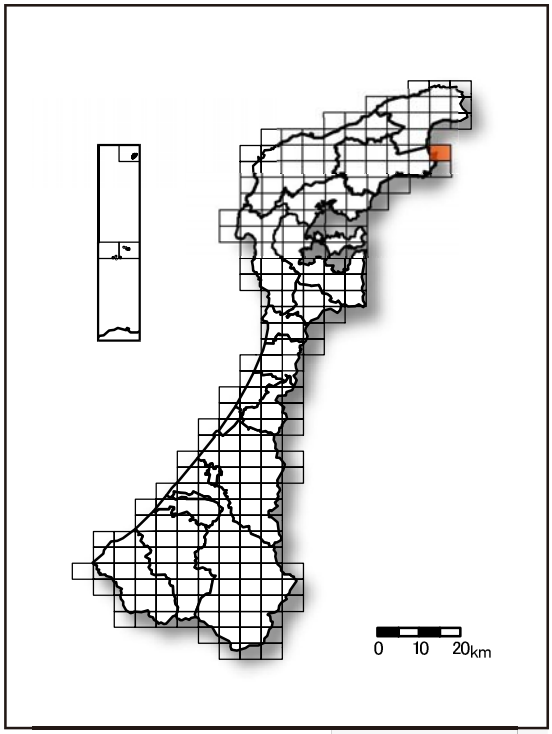
生育地の条件　漸深帯。

生存の危機　県内での生態が不明で言及できない。

特記事項　流れ藻や打上げ藻の中には出現している。

参考文献　舟橋説往．1967．能登臨海実験所付近の海藻．金沢大学能登臨海実験所年報，7：15–36.

写真提供者：新井章吾



県内の分布

ホソナガベニハノリ

Hypoglossum nipponicum Yamada

イギス目コノハノリ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由　羽咋市柴垣がタイプ産地だが、県内での発見例は少ない。穴水町で採集されている。

形　　態　体は9㎝くらいまでのゆるく絡み合った塊を形成し、枝は線状で細く幅約1㎜。質は薄い膜質。

国内分布　本州日本海岸。

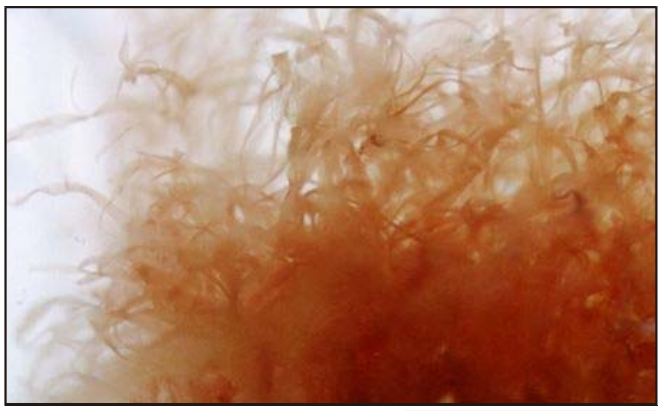
県内分布　羽咋市、門前町、穴水町、七尾市から報告がある。

生　　態　漸深帯に生育する。

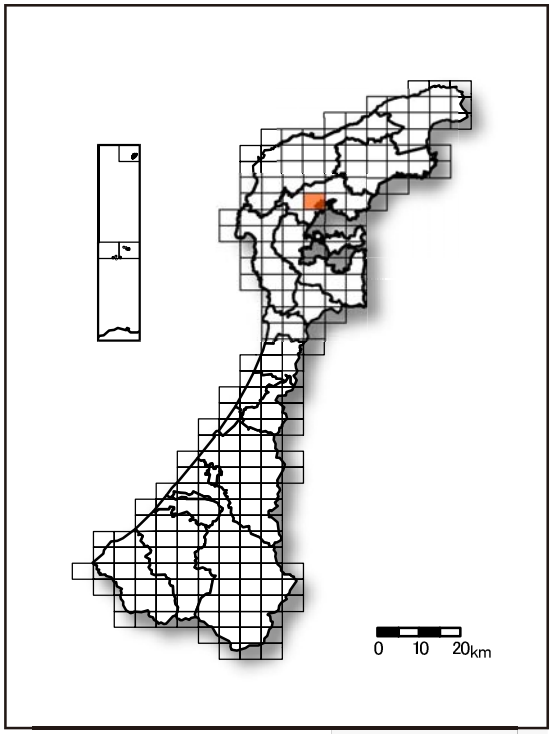
生育地の条件　富山県では、時々砂を被るような転石帯に多い。マクサなど他の海藻に着生することもしばしば。入善町沿岸に大群落があり、氷見市や魚津市などでも時折みつかる。

生存の危機　県内での生態はよく分かっておらず言及は避ける。

特記事項　今後、富山県の例を参考に、転石帯での調査が必要である。



写真提供者：藤田大介



県内の分布

ノトイトグサ

Polysiphonia notoensis Segi

イギス目フジマツモ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由 羽咋市柴垣がタイプ産地だが、近年の発見例はない。

形　　態 他の海藻の上に房状に生育し、高さ5.5～10cmになる。色は暗褐色。

国内分布 本州日本海岸中・北部。

県内分布 羽咋市、輪島市、内浦町から報告がある。

生　　態 他の海藻につくこと以外はよく分かっていない。

生育地の条件 よく分かっていない。

生存の危機 生態が不明で言及できない。

写真（図）はありません。

分布図はありません。

県内の分布

キクメイシモドキ

Oulastrea crispata (Lamarck)

イシサンゴ目キクメイシ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由
造礁サンゴの仲間では能登半島が世界の群生分布の北限地であり、学術上貴重である。

形　態
殻皮状またはかたまり状の群体をつくり、骨格はチョコレート色か紫黒色。莢の直径は5㎜位で、莢と莢との間には溝があるか結合する。ポリプは緑褐色。

国内分布
日本海沿岸は新潟県以南、太平洋沿岸は館山湾以南に分布する。

県内分布
能登半島の内浦海岸、能登町から七尾市（七尾北湾と南湾）にかけて分布し、九十九湾と九里川尻湾に群生地がある。外浦海岸では志賀町の福浦と大島に生息する。

生　態
内湾の潮間帯から水深3mほどの潮下帯の岩上に見られる。群体の長径は5㎝前後のものが多く、昼間でもポリプを開いていることがある。

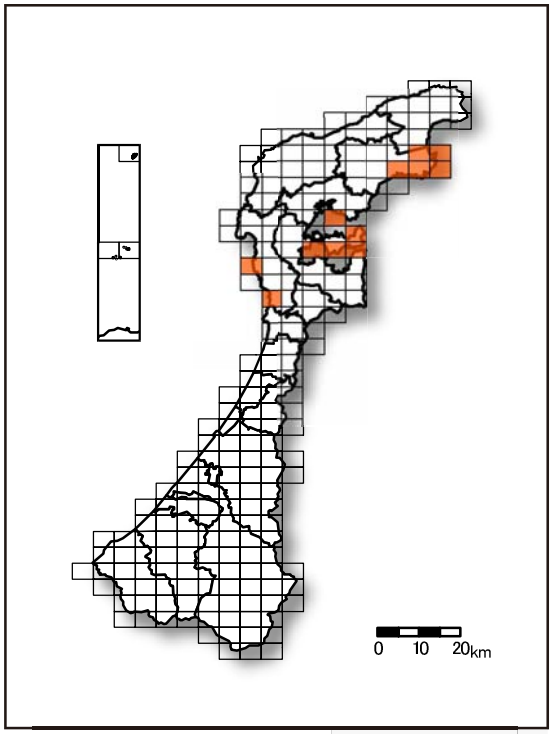
生息地の条件
陸からの砂泥の流入が激しくないこと。

生存の危機
以前は釣り餌のイワムシ捕りの影響で付着基盤を含む破壊が顕著であったが、現在は埋め立てや道路造成などによる生息環境の変化が懸念される。

特記事項
造礁性イシサンゴ類の中では水温10℃以下でも生育し、低温耐性がある。

参考文献
矢島孝昭・佐野修・岡本武・白井芳弘・新谷力・又多政博. 1986. 能登九十九湾周辺海域におけるキクメイシモドキ *Oulastrea crispaya* (Lamarck) の生態分布
Veron, J, E.N., 1992. Hermatypic Corals of Japan.

写真提供者：岡本武



県内の分布

ムツサンゴ

イシサンゴ目キサンゴ科

Rhizopsammia minuta mutuennsis Yabe et Eguchi

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由
他の道府県では類をみないほどに能登半島の内浦海岸を中心に広く分布し、かつ生息密度も極めて高い。

形　態
各個虫は石灰質の共骨で連絡し、莢は直径5㎜、高さ8㎜以下。触手は48本で共肉は美しい黄色またはオレンジ色をしている。

国内分布
陸奥湾が模式産地。日本海沿岸は小樽以南から若狭湾までと隠岐に分布する。太平洋沿岸では三陸海岸、相模湾、伊豆半島、大阪湾と瀬戸内海に分布する。

県内分布
能登半島の内浦海岸を中心に広く分布し、外浦海岸でも散見される。

生　態
やや開放浜の岩礁性潮間帯の低潮位から水深3mほどの比較的平坦部で、ホンダワラ類が生育する仮根周辺を中心に生育している。場所によっては、浮き転石上でも見られる。

生息地の条件
陸からの土砂の流入や海洋汚染がないこと。

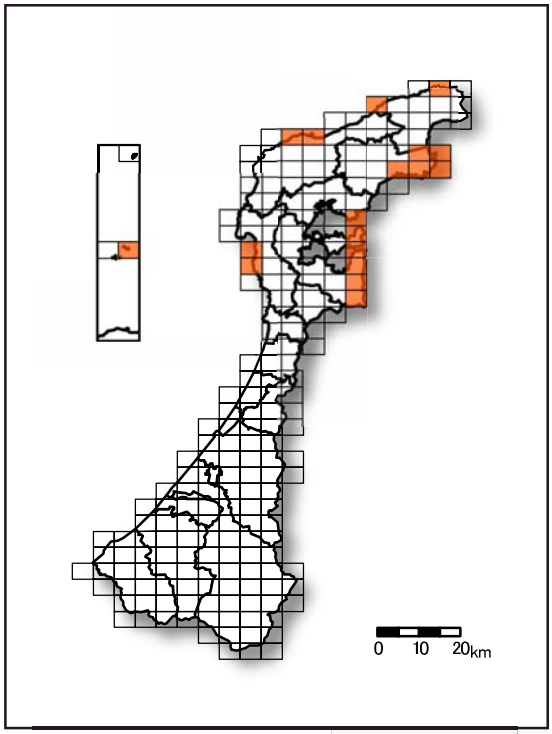
生存の危機
現在、人為的影響による生息環境の破壊はみられないが、堤防の設置や埋め立てなどの漁港の整備・拡張に伴う生息環境の破壊が懸念される。

特記事項
日本固有種。飛島での分布地は、山形県の天然記念物に指定されている。

参考文献

矢島孝昭・新谷力・又多政博．1979．能登九十九湾周辺海域におけるムツサンゴ *Rhizopsammia minuta mutsuensisi* の生息状況．金沢大学日本海域研究報告，(11)：81–91
矢島孝昭．1986．ムツサンゴの生態分布．南紀生物，28：37–40
坂井恵一・筒井功・山岸祐一・又多政博．1996．九十九湾周辺におけるムツサンゴ *Rhizopsammia minuta mutuensisi*の分布状況．のと海洋ふれあいセンター研究報告，(2)：61–63

写真提供者：岡本武



県内の分布

ウスバノコギリモク

ヒバマタ目ホンダワラ科

Sargassum serratifolium (C.Agardh) C.Agardh

石川県カテゴリー	情報不足
国カテゴリー	なし

選定理由 本種が認識されたのは1983年と最近のことであり、また漸深帯の深いところに生育するため調査不足であり、現時点では情報不足とせざるを得ない。

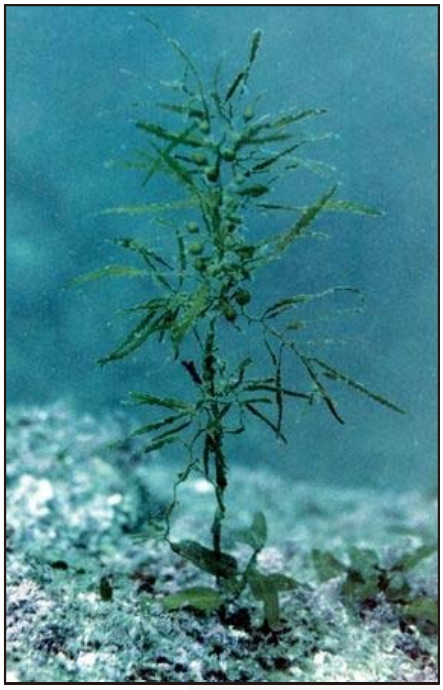
形　態 主枝の縁辺が平滑、下部の葉は薄く、鋸歯がない。

国内分布 長崎県から新潟県までの日本海沿岸。

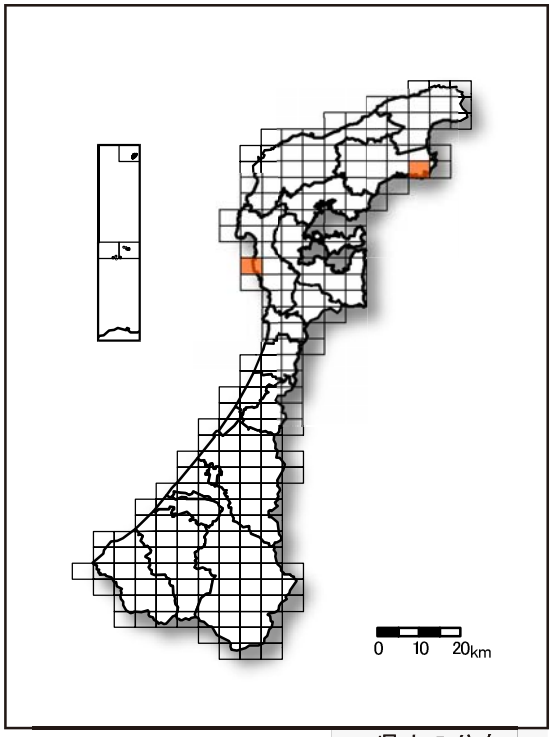
県内分布 九十九湾と福浦港沖で採集されている。

生育地の条件 水深20mくらいまでの深い岩礁地あるいは転石地。

生存の危機 県内での生態が不明で言及できない。



写真提供者：新井章吾



県内の分布

タマハハキモク

Sargassum muticum (Yendo) Fensholt

ヒバマタ目ホンダワラ科

石川県カテゴリー	情報不足
国カテゴリー	なし

選定理由 県内での分布は限られた場所だけ、それも低密度の生育状態と考えられが、本種が認識された1978年以降において、専門家による七尾湾や穴水湾などでの広範囲な調査はなされていない。

形　　態 付着器は平たい盤状で、その中央から短い1本の茎をだす。その頂部から数本の主枝をらせん配列に生じる。

国内分布 北海道南部、本州中部から四国、九州。

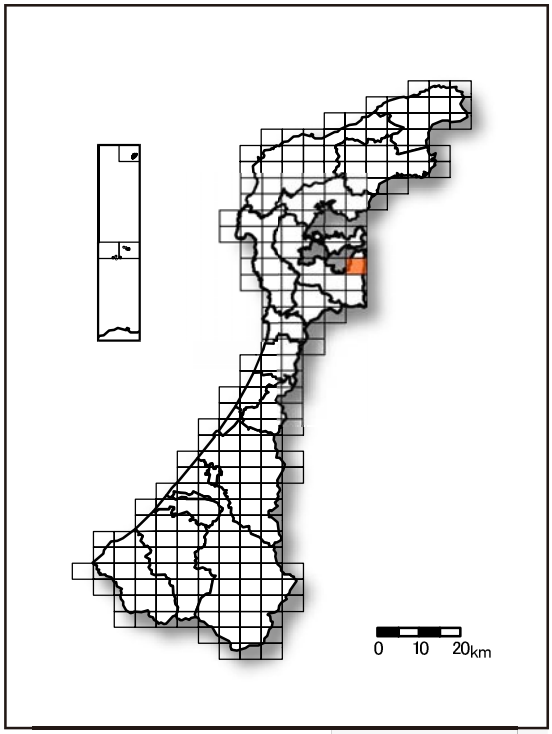
県内分布 七尾市大田で採集されている。

生育地の条件 波当りの弱い、やや静かな場所に生育し、低潮線付近から水深1mくらいまでの浅いところ。

生存の危機 県内での生態が不明で言及できない。

特記事項 直立部はよく似ているが、付着器が小さな盤状で糸状根も出すミヤベモクはよく見られている。

写真提供者：新井章吾



県内の分布

ススカケベニ

Halarachnion latissimum Okamura

スギノリ目ススカケベニ科

石川県カテゴリー	情報不足
国カテゴリー	なし

選定理由　今の所、日本海岸からの報告はない。したがって、能登島町に生育する本種は貴重である。

形　　態　体は高さ10～30㎝で、円形から長楕円形に広がる。色はくすんだ紅色で、質は粘滑。体の回りが裂け、縁辺から同様な葉体を出すこともある。

国内分布　本州太平洋岸中部、瀬戸内海。

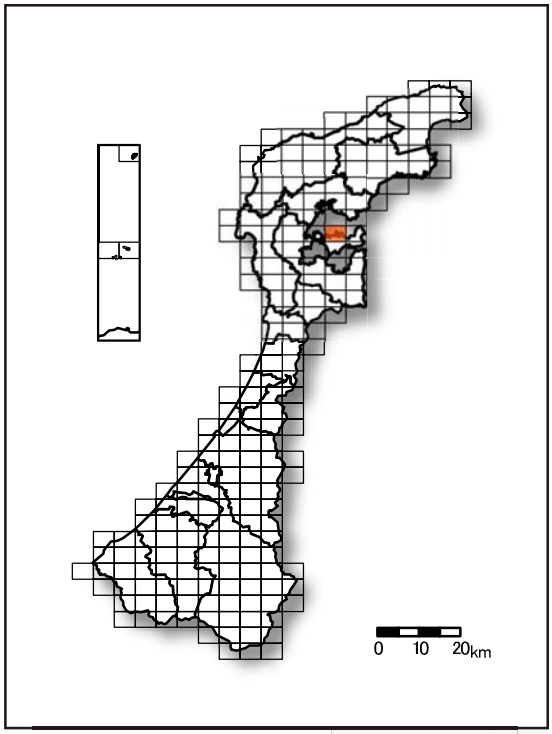
県内分布　能登島町曲。

生育地の条件　波静かな内湾の漸深帯の石や貝殻、他の海藻の上などに生育する。

生存の危機　生態が不明で言及できない。

特記事項　のとじま水族館の水槽内に自然発生し、よく繁茂している。

写真提供者：池口新一郎



県内の分布

タマカイメン

Tethya japonica Sollas

硬海綿目タマカイメン科

石川県カテゴリー	情報不足
国カテゴリー	なし

選定理由　本種は1963年に九十九湾越坂で採集され日本海沿岸では初記録として記載された。その後の調査でも九十九湾内及び湾口だけで見つかっている。

形　　態　外形は球状または卵円形、高さ16㎜、径14㎜、生時は赤黄色。小さな乳様突起があるように見える。

国内分布　九十九湾内及び湾口。

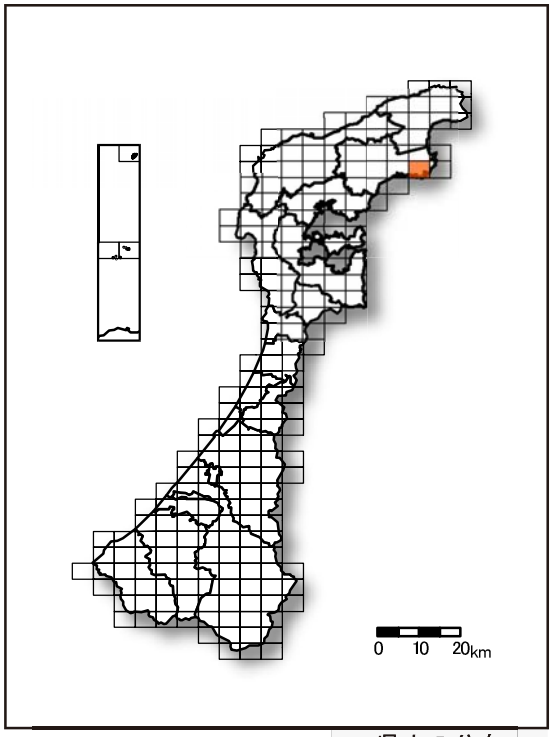
県内分布　九十九湾内及び湾口。

生息地の条件　九十九湾では波当たりの少ない比較的浅い岩盤上または転石上に多く生息している。

生存の危機　現在の所、県内他地域では確認していないが、浅海に生息し、固着種であるため護岸工事などがあると壊滅のおそれがある。

参考文献　谷田専治．1964．能登九十九湾沿岸の海綿(金沢大学能登臨海実験所年報，第4巻)．

写真提供者：又多政博



県内の分布

ウミサボテン

Cavernularia obesa Milne-Edwards et Haime

ウミエラ目ウミサボテン科

石川県カテゴリー	情報不足
国カテゴリー	なし

選定理由　水深がやや深い砂泥底に生息し、年々少なくなっていると思われる。

形　　態　群体はこん棒状をしていて柔軟性があり、伸びると50cmにもなる。

国内分布　石狩湾以南に分布。

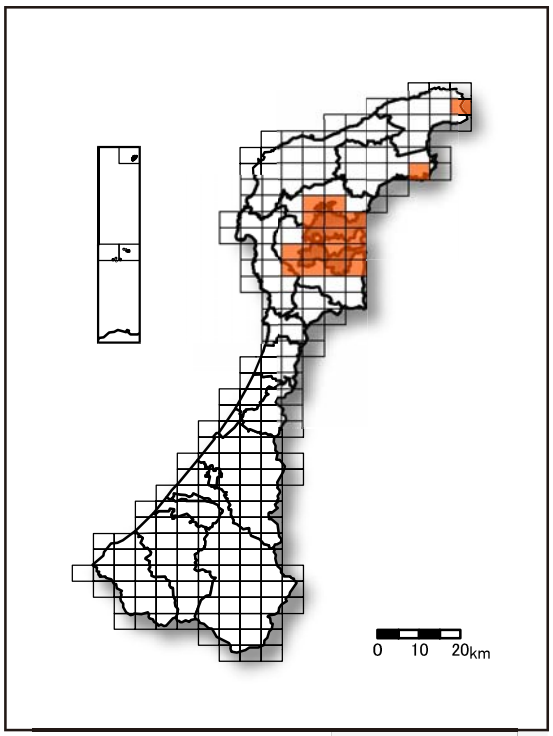
県内分布　水深10m以深より見られるが、九十九湾では近年あまり見かけなくなった。七尾南湾・西湾・北湾にやや多く見られる。また、珠洲市粟津海岸でも確認している。加賀から外浦海岸でも生息すると思われるが情報不足である。

生　　態　内湾の20m以深まで生息、日昼はちぢんで砂泥に潜っていることが多い。刺激するとかなり強い発光をする。ウミエラ類は八放サンゴの仲間で、固着しない個種群である。

生育地の条件　比較的波あたりの少ない内湾の砂泥に生息しているため人為的攪乱には弱い。

生存の危機　ナマコなどの桁網により生息域が減少していると思われる。

写真提供者：岡本武



県内の分布

ホソウミエラ

Scytalium martensii Kölliker

ウミエラ目ヤナギウミエラ科

石川県カテゴリー	情報不足
国カテゴリー	なし

選定理由　七尾湾に分布が限定されている。

形　態　むち状の群体で、下半分の柄の部分を砂泥中に埋めてたつ。幹の部分は左右に分れ、よく発達した葉状体が20～40対、えら状に並列している。

国内分布　相模湾以南の日本各地に分布。

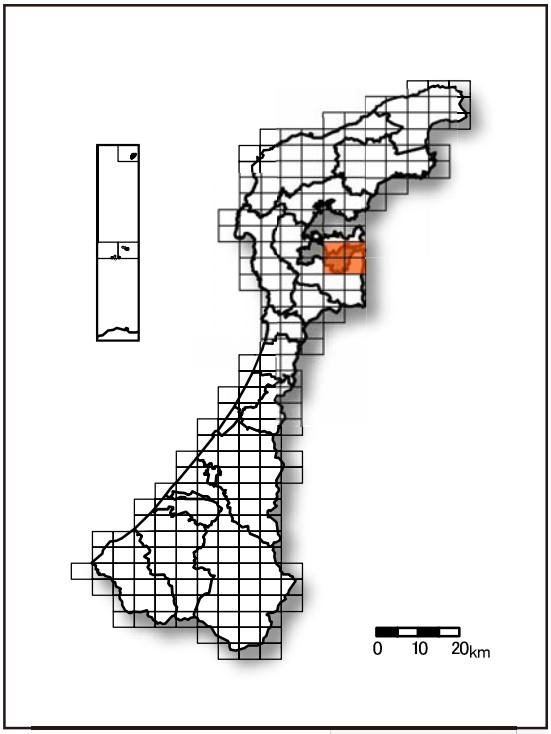
県内分布　内浦海岸でみられるのは稀。七尾南湾・西湾・北湾の水深10m以深ではみることができるが、さかんに行われるナマコなどの桁網により棲息場所が狭まれている。

生　態　個体の高さは20～30cm、ときに60cmをこえることもある。内湾の水深20m以上の砂泥底に生息する。

生息地の条件　やや波あたりがよく砂泥質の急激な変化のないところ。

生存の危機　内湾における人為的撹乱の影響は大きい。

写真（図）はありません。



県内の分布

フトウミエラ

Leioptilus fimbriatus (Herklots)

ウミエラ目ウミエラ科

石川県カテゴリー	情報不足
国カテゴリー	なし

選定理由 七尾湾に分布が限定されている。

形　態 幅の広い羽状(幹)で、柄の部分は太く短く砂泥に埋もれ立つ。葉状体は30対で左右に重なり合って並ぶ。

国内分布 相模湾以南に分布。

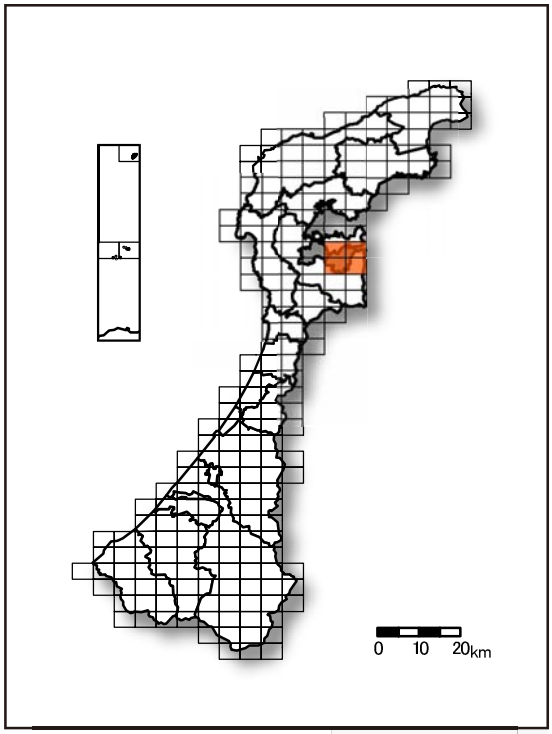
県内分布 七尾南湾・西湾・北湾で希にみられるが、個体数はホソウミエラよりかなり少ない。
外浦海岸での情報が少ない。

生　態 個体の高さは20cm前後で内湾の水深20m以上の砂泥底に生息する。

生息地の条件 やや波あたりがよく砂泥質の急激な変化のないところ。

生存の危機 ホソウミエラよりもさらに危機に陥っているようである。

写真提供者：岡本武



県内の分布

チャイロキヌタ

Palmadusta artuffeli (Jousseaume)

中腹足目タカラガイ科

石川県カテゴリー	情報不足
国カテゴリー	なし

選定理由　南方系だが県内各地に広く分布している。

形　　態　殻高2cm、殻径1.5cm程。背側は褐色で、まれに中央付近に暗帯がある。腹側は白色で斑はなく、外套膜は黒色。

国内分布　房総半島以南、四国、九州、奄美、沖縄。

県内分布　能登半島各地の砂浜海岸で、打ち上げられた貝殻が観察される。

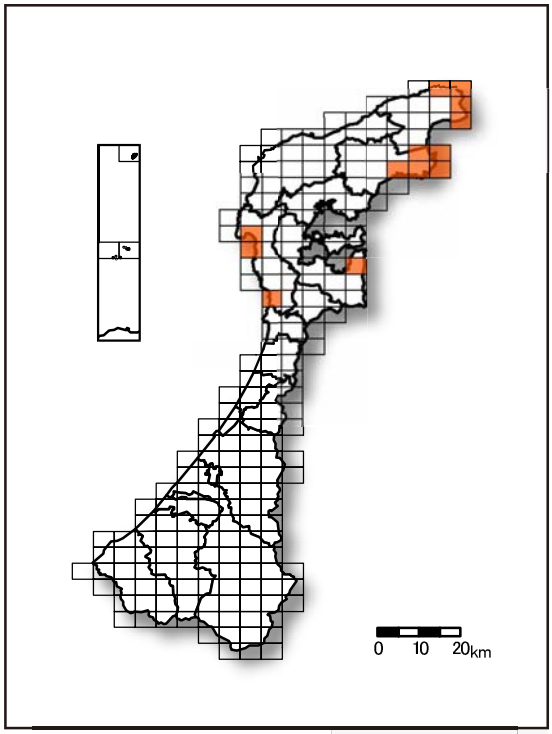
生　　態　毎年、砂浜に打ち上げられる貝殻は多く、周年生息していると思われるが、生貝の生態は不明である。

生息地の条件　生態が不明なので言及できない。

生存の危機　生態が不明なので言及できない。

特記事項　能登町姫海岸の浮き転石裏面で生貝を確認している。

写真提供者：坂井恵一



県内の分布

ハボウキガイ

Pinna bicolor Gmelin

ウグイスガイ目ハボウキガイ科

石川県カテゴリー	情報不足
国カテゴリー	なし

選定理由 内湾あるいは港湾などの波あたりの少ない場所に生息しているが、港湾工事などにより著しくその個体数が減っていると思われる。

形　態 殻長約25cm、殻は薄く、膨らみは弱い。殻色は黄土色。

国内分布 房総半島以南。

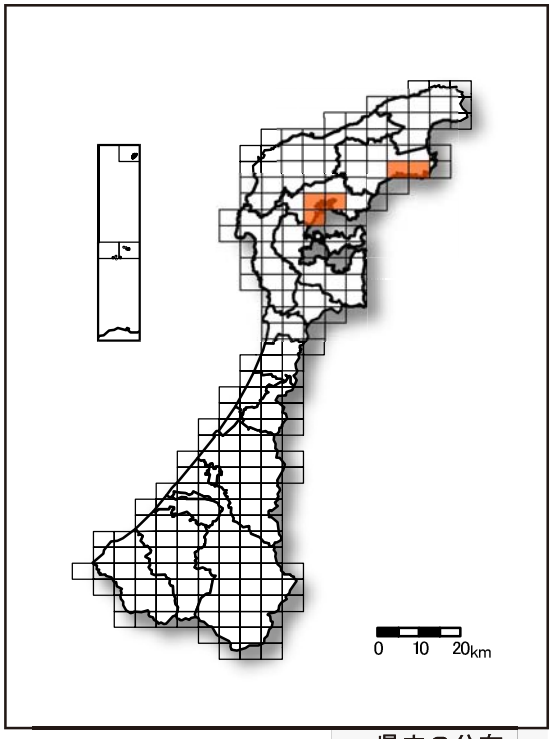
県内分布 九十九湾内、宇出津港、穴水湾周辺。

生　態 砂泥底に体長（殻）の半分ほどを埋没して生息している。

生息地の条件 比較的波あたりの少ない内湾あるいは港の中などの潮間帯から水深10m前後の砂泥底に生息している。

生存の危機 港湾に生息しているものは工事などにより絶滅する可能性がある。

写真提供者：又多政博



県内の分布

コシダカウニ

Mespilia globulus (Linnaeus)

ホンウニ目サンショウウニ科

石川県カテゴリー	情報不足
国カテゴリー	なし

選定理由　比較的暖海性のウニで、本県ではその生息数が少ないものと思われる。

形　　態　殻径3cm内外、殻高が高く球状に近い。棘は明るい赤橙色、間歩帯にオリーブ色の幅広い裸状帯域がある。

国内分布　房総半島・相模湾以南に分布。

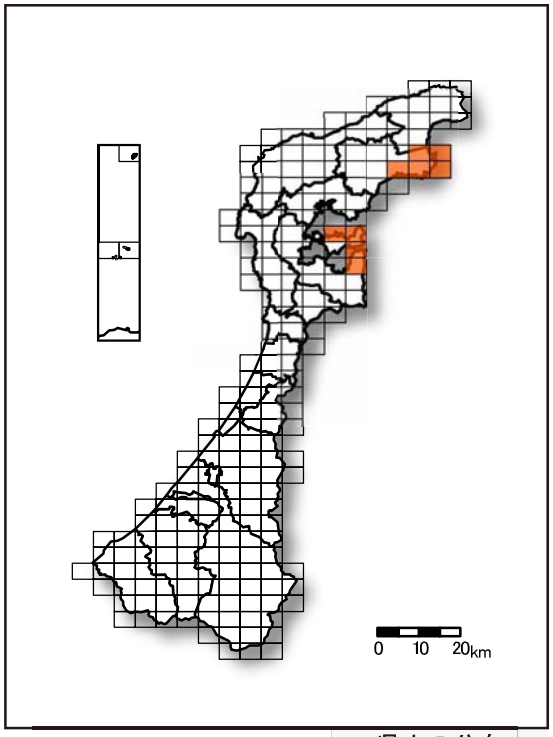
県内分布　能登半島の内浦海岸では毎年生息を確認しているが、近年わずかながら増加の傾向にあるように思われる。

生　　態　比較的波あたりの弱い浅所または波静かな内湾に生息している。

生息地の条件　陸からの土砂などの影響のない浅所。

生存の危機　暖海性であり、本県での生息数はきわめて少ないと思われる。また、浅所に生息するため陸上からの土砂などの影響も受けやすい。

写真提供者：又多政博



県内の分布

オトヒメゴカイ

Hesione reticulata Marenzeller

サシバゴカイ目オトヒメゴカイ科

石川県カテゴリー	情報不足
国カテゴリー	なし

選定理由 元来普通に見られた種であったが、近年急速にその数が激減している。

形　態 体長4～8cm、背面は赤褐色と無色のまだらで縦長のすじがある。

国内分布 本州中部～沖縄に分布。

県内分布 九十九湾内、能登町姫海岸など。

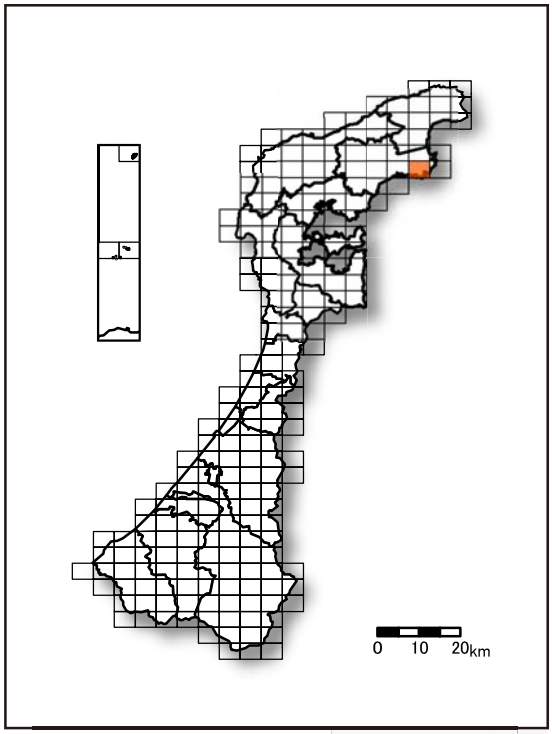
生　態 潮間帯のタイドプールなどにある転石下に生息している。

生息地の条件 多少転石の下に砂がある方が良いようである。

生存の危機 現在確認している生息場所では、春の大潮時には干上がる様な場所に生息していることもあり、雨水の影響を受けやすいように思われる。

特記事項 日本固有種である。

写真提供者：又多政博



県内の分布

カタユウレイボヤ

Ciona intestinalis (Linnaeus)

マメボヤ目ユウレイボヤ科

石川県カテゴリー	情報不足
国カテゴリー	なし

選定理由 年によっては比較的多く確認する事があるが、近似種ユウレイボヤとともに個体数は少ないと思われる。

形　態 体長10㎝、細長い円筒形で、色彩は透明あるいは白色、先端は橙色。

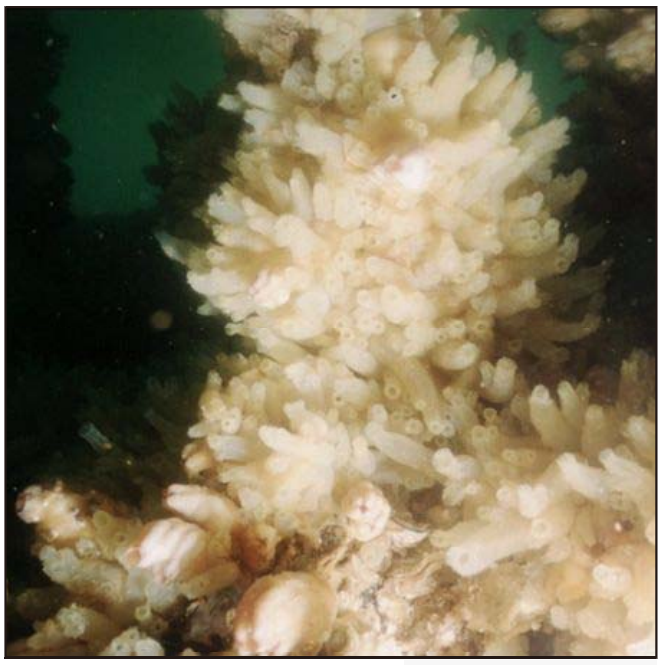
国内分布 本州の各内湾、瀬戸内海に分布。

県内分布 九十九湾周辺に分布する。

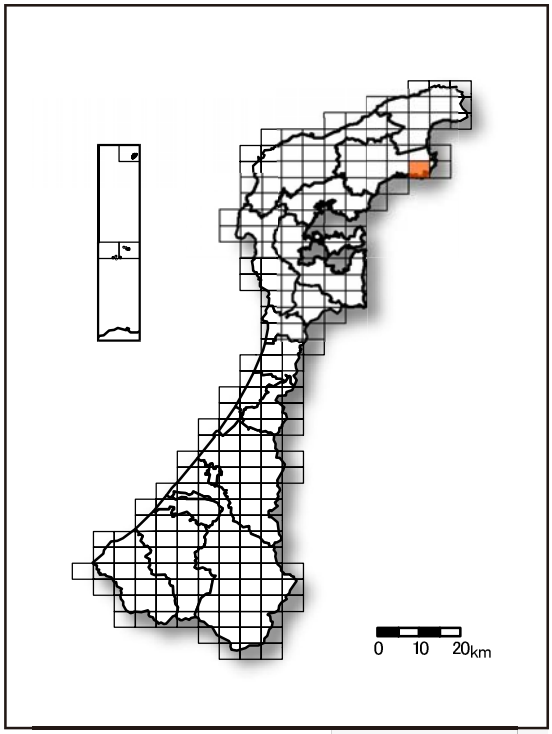
生　態 岩礁地帯の転石、ブイ、ロープ等に付着。近年確認することが少なくなった。

生息地の条件 内湾のロープ、ブイなどに付着することが多い。

生存の危機 年によってその生息数に増減があり、広範囲の調査が必要。



写真提供者：井本善次



県内の分布

ナメクジウオ

Branchiostoma belcheri Gray

ナメクジウオ目ナメクジウオ科

石川県カテゴリー	情報不足
国カテゴリー	なし

選定理由　日本海沿岸における分布の北限地。

形　態　半透明で全長約5cmに達する。口は体前端に開き、その周縁に外触手(外髭)がある。

国内分布　分布の北限は三陸山田湾だが、房総半島以南に産地が多く、瀬戸内海、有明海にも分布する。日本海では丹後半島沖で採集記録がある。

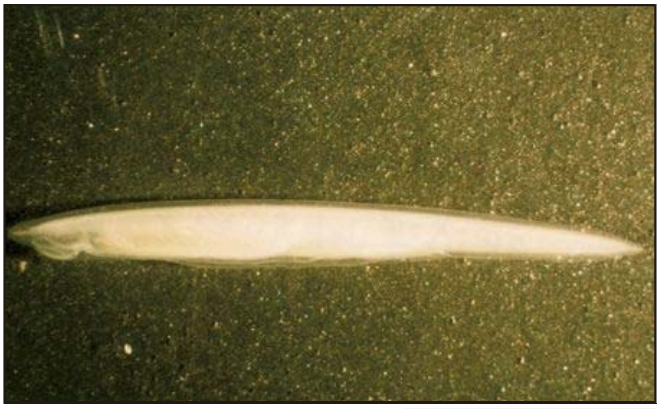
県内分布　1997年7月19日、七尾市花園沖の水深約10mで変態直後の2個体(全長約1cm)が採集された。
一方、1998年の8月と10月に同海域で本種の採集を試みたが、1個体も採集されなかった。

生　態　本県沿岸では、本種の成熟個体が採集されたことはない。このため、1997年に採集された2個体は、前年の夏に別の海域で生まれた浮遊幼生が当海域まで流されてきて着底して変態した可能性がある。

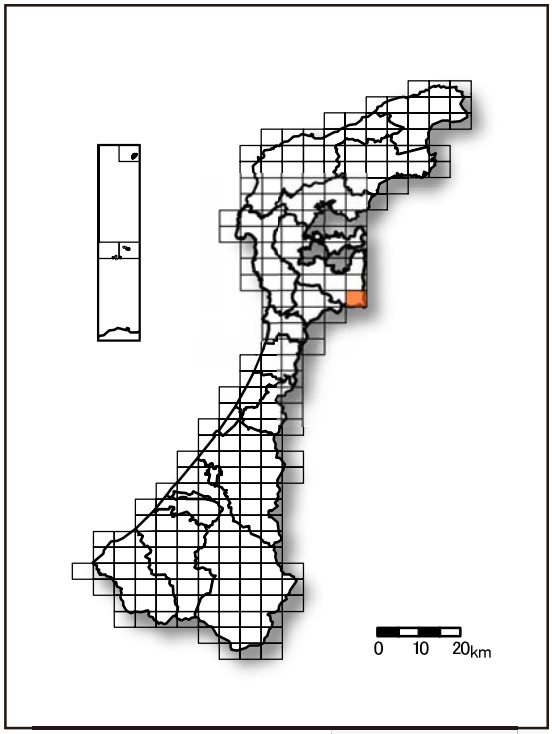
生息地の条件　七尾市の採集地付近での海底砂は中砂（<0.590）～細砂（<0.150）が主体であった。

生存の危機　生態が不明なので言及はできない。

特記事項　愛知県蒲郡市大島と広島県三原市有龍島が生息地として国の天然記念物に指定されている。



写真提供者：坂井恵一



県内の分布

アカハゼ

Amblychaeturichthys hexanema (Bleeker)

スズキ目ハゼ科

石川県カテゴリー	情報不足
国カテゴリー	なし

選定理由 全国的には普通種だが、本県での分布は極めて限定されている。

形　態 マハゼに似るが、体色は全身が赤っぽく、下顎に3対のヒゲがあり、尾鰭先端は細くとがる。

国内分布 北海道以南から宮崎県と山口県まで分布する。

県内分布 七尾北湾、七尾西湾、および七尾南湾に限られている。

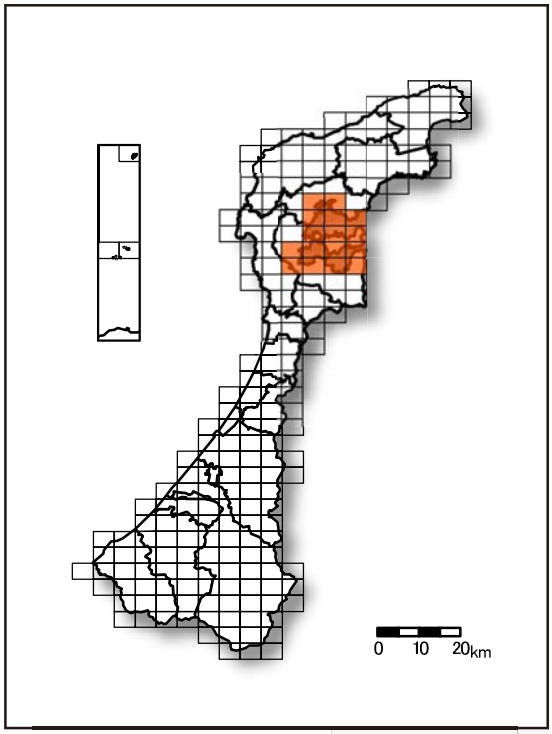
生　態 本県における生活史の詳細は不明。

生息地の条件 内湾のやや深所の砂泥底（アマモ場）に生息すると推測されるが、詳細は不明。

生存の危機 七尾湾周辺では、マナマコやアカガイなどの桁網漁が盛んに行われており、この際に混獲される。また、アマモ場の消失や水質汚染などの生息環境の悪化にともなう個体群の減少が危惧される。

特記事項 浮遊期、底生生活期ともに砕波帯や極く浅い場所には出現しないようである。

写真提供者：坂井恵一



県内の分布

フジノハズタ

Caulerpa fergusonii Murray

ミル目イワズタ科

石川県カテゴリー	地域個体群
国カテゴリー	なし

選定理由
能登内浦沿岸で機会あるごとに本種の発見に努めてきた。しかし、いまだに矢波以外では見出されていない。本県では稀な海藻と考えられる。また、本種の北限の生育地であり、学術的にも貴重な海藻である。現時点では地域個体群としておくのが妥当と考える。

形　態
体は匍匐枝と直立部からなる。直立部は6～7㎜ごとにくびれ、対生して小枝を生じる。小枝は長さ1㎝、幅5～6㎜で頂端は丸い。

国内分布
本州太平洋岸中・南部、四国、九州、日本海南部。

県内分布
能登町の矢波沖の水深16m付近。

生　態
漸深帯の深所に生育する。

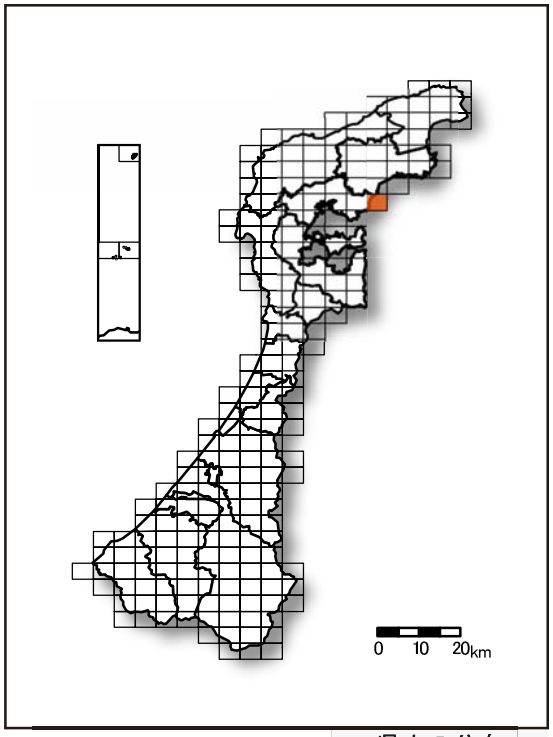
生息地の条件
矢波は砂泥質の海底であるが、カシパン類や貝類の遺骸（貝殻片）が多量に埋もれており、フジノハズタはカシパン類の貝殻上に匍匐枝を伸ばし、仮根を張って生活している。したがって、本種の生育には貝殻片などの石灰質の着生基盤が必要と思われる。

生存の危機
生態がよく分っていないので言及できない。

特記事項
今の所、能登町が本種の北限の生育地。近くの珠洲市の飯田湾は、生物遺骸と思える石灰質を多く含む海底が広がることが知られており、本種の生育が期待できる。今後の調査課題である。

参考文献
佐野　修．1988．ホソエガサが住む海．石川の四季と自然，79ｐ．石川自然誌研究会，金沢

写真提供者：佐野修



県内の分布

ウスイロモク

Sargassum pallidum (Turner) C.Agardh

ヒバマタ目ホンダワラ科

石川県カテゴリー	地域個体群
国カテゴリー	なし

選定理由 七尾市沿岸でしか確認されず、分布生育範囲が限られている可能性がある。他の地域に生育していることも十分考えられるが現時点では地域個体群としておくのが妥当と考える。

形　態 主枝の下部につく葉は長さ10cm、幅2cmと大きい。また、薄い膜質で、色はやや淡色のため、ウスイロの名がある。

国内分布 本州日本海沿岸、新潟県から秋田県。

県内分布 七尾市沿岸、百海町から大泊町の間および観音崎から三室湾の間。

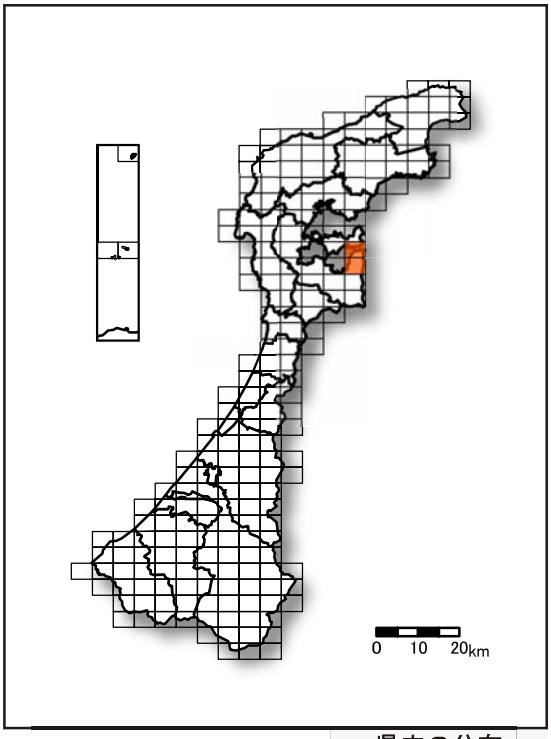
生　態 数m以上の深さで、ときどき砂をかぶるような所に生育している。この点は他のホンダワラ類とは異なる大きな特徴である。

生育地の条件 ときどき砂をかぶる岩や泥岩地。

生存の危機 さしあたって脅威はないが、河川改修による砂の供給減、あるいは富栄養化などによる泥の堆積などが生育阻害となろう。

特記事項 七尾市大泊町の隣の富山県氷見市沿岸にも生育する。

写真（図）はありません。



県内の分布

ツクシアマノリ

Porphyra yamadae Yoshida

ウシケノリ目ウシケノリ科

石川県カテゴリー	地域個体群
国カテゴリー	なし

選定理由
今の所、能登外浦の志賀町から輪島市沿岸にかけては見出すことができず、珠洲市沿岸でのみ、しかも狭い範囲での確認しかない。本種の分布の北限でもある。現時点では地域個体群とするのが妥当と考える。

形　態
体は初期では円形だが、成長すると縮れてボタンの花のような団塊状になる。体は厚く、硬いためか、珠洲市の狼煙では「はちのす」と呼び、食用とはしない。

国内分布
兵庫県（山陰）、本州太平洋岸中部、九州、南西諸島。

県内分布
珠洲市の狼煙、木の浦、仁江の3箇所で採集されている。

生　態
外海に面する高潮線付近の岩上に生育する。散らばることは少なく、本種だけの小さなパッチ状の群落を作る。

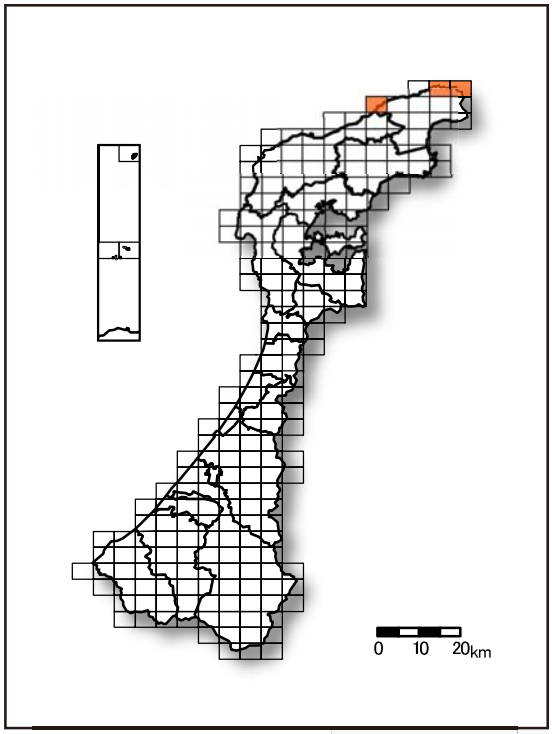
生育地の条件
分布から見て水温の高い海域で、波の荒い外海に面する岩礁と考えられる。

生存の危機
分らないことが多く、言及できない。

特記事項
能登のいわのり群落はウップルイノリが主体で、これにオニアマノリとクロノリが混生するが、上記の3箇所では小範囲ながら本種のかたまりも形成される。
本種は、山陰地方からの報告は兵庫県のみであるが、九州から能登まで連続分布している可能性もある。

参考文献
佐野　修. 1984. 冬の味覚ー岩ノリー. 能登の自然, 110-111. 石川自然誌研究会, 金沢

写真提供者：佐野修



県内の分布

ツクモジュズサンゴ

イシサンゴ目シオガマサンゴ科

Culicia japonica tenuisepes Ogawa, Takahashi and Sakai

石川県カテゴリー	地域個体群
国カテゴリー	なし

選定理由
能登町の九十九湾で発見された非造礁性の群体イシサンゴ。

形　態
ポリプはオレンジ色か透明、莢(骨格)は白色で直径約5㎜。直接岩などに固着し、各個虫は共骨で連なり群体を造る。沈設されたテトラポッドや自然石等にも群体を形成することがある。

国内分布
能登半島と山形県の飛島、佐渡島に分布する。

県内分布
主に能登半島の内浦海岸に分布しているが、外浦海岸でも小規模な群体の生息地が見つかっている。

生　態
生息場所は平均水面から水深約2mまで。岩礁の水直面やオーバーハングした天井部の内側等で大規模な群体が形成されることがある。

生息地の条件
生息場所の環境条件ならびに生息水深はムツサンゴと類似するが、本種が主に岩の垂直面や窪みの内側を好むのに対し、ムツサンゴは比較的平坦な岩肌を好む傾向がある。

生存の危機
生息水深が浅いので、自然海岸の減少に伴う生息適地の破壊が危惧される。

特記事項
産卵期は夏。本種は有性生殖で別の新しい場所に個虫を着底させて群体数の増殖を図り、無性生殖(芽生)で群体内の個虫数を増加させる。

参考文献

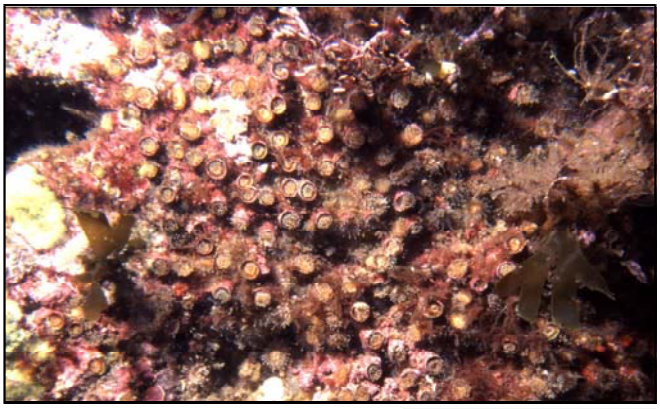
Ogawa, K., K. Takahashi and K. Sakai. 1997. Notes on Japanese Ahermatypic Coral-I, New Species and Subspecies of *Culicia* and *Phyllangia*. Publications of the Seto marine Biological laboratory, 38(1/2): 45-52.

坂井恵一・筒井功・山岸祐一・又多政博・小川数也・矢島孝昭. 1996. 九十九湾で確認されたジュズサンゴ属の一種 *Culicia* sp. について. のと海洋ふれあいセンター研究報告, (2): 1-5.

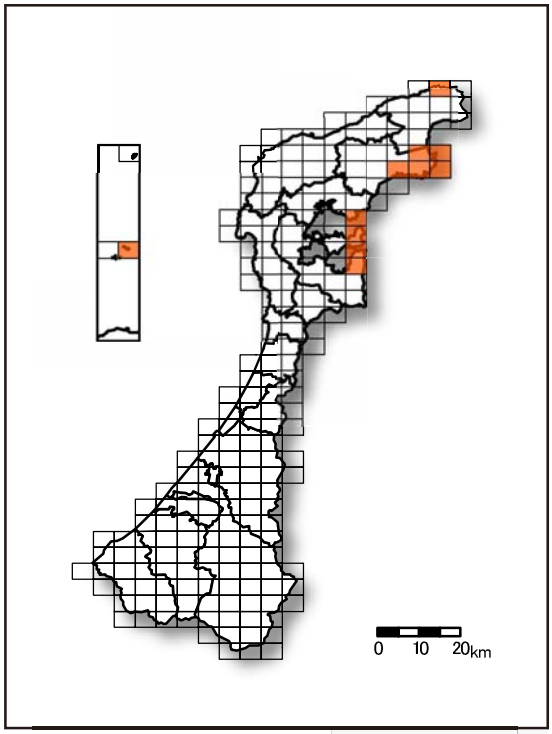
坂井恵一・小川数也・筒井功・福島広行. 1997. ツクモジュズサンゴ(新称和名) *Culicia* sp. (Scleractinia,Rhizangiidae)に見いだされた受精卵とプラヌラ. のと海洋ふれあいセンター研究報告, (3): 1-8.

坂井恵一・筒井功・福島広行. 1997. 能登半島におけるツクモジュズサンゴ *Culicia* sp. (Scleractinia, Rhizangiidae) の分布と生息状況. のと海洋ふれあいセンター研究報告, (3): 9-16.

小川数也・坂井恵一. 1997. ツクモジュズサンゴ *Culicia* sp (Scleractinia, Rhizangiidae) に見いだれた共生藻とラン藻について(予報). のと海洋ふれあいセンター研究報告, (3): 17-21.



写真提供者：坂井恵一



県内の分布

シオガマサンゴ

Oulangia stokesiana miltoni Yabe et Eguchi

イシサンゴ目シオガマサンゴ科

石川県カテゴリー	地域個体群
国カテゴリー	なし

選定理由
日本海沿岸では山形県飛島と能登半島の2箇所が生息地として知られている。

形　態
触手は透明、ポリプの大きさは最大で直径約2cm。莢(骨格)は直径約1cm、莢内の隔壁は黒色だが上縁だけは白色、莢壁は白色。非造礁性の単体イシサンゴで、個虫は直接岩などに固着する。

国内分布
冷水性の種類で、太平洋沿岸では三陸海岸に多いが、相模湾、伊勢湾、土佐湾(南限)などに分布する。

県内分布
主に能登半島の内浦海岸主体に分布しているが、外浦海岸でも志賀町七見で見つかっている。

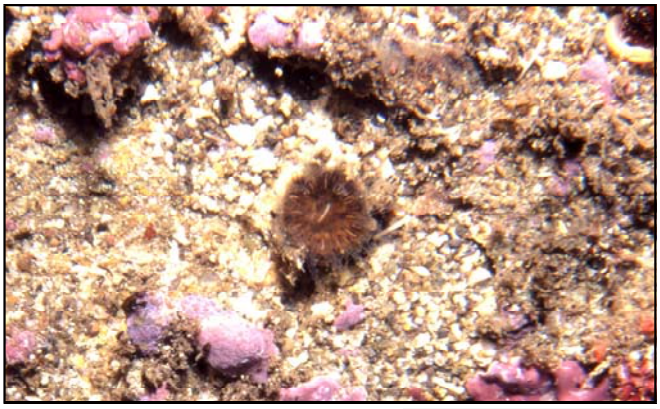
生　態
岩礁性潮間帯の低潮位から水深15～16mまでに多いようであるが、詳細は不明。

生息地の条件
九十九湾では、多少浮泥が堆積している海底にも生息している。

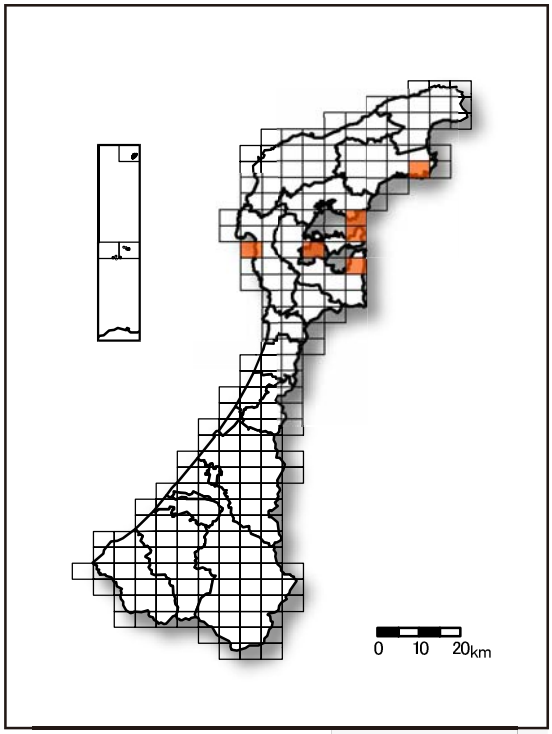
生存の危機
生息水深が浅いので、自然海岸の減少に伴う生息適地の破壊が危惧される。

特記事項
日本固有種で模式産地は宮城県の塩釜湾。九十九湾周辺等ではチョウジガイ科のアオチョウジガイモドキとヒラチョウジガイモドキの2種が生息分布する。

参考文献
坂井恵一・福島広行. 1997. 能登半島の3海域でみられた魚類と海産無脊椎動物. のと海洋ふれあいセンター研究報告, (3): 33-42.



写真提供者：坂井恵一



県内の分布

アンズイソギンチャク

イソギンチャク目ウメボシイソギンチャク科

石川県カテゴリー　地域個体群

国カテゴリー　なし

Aulactinia coccinea (Verrill) sensu Uchida and Soyama

選定理由　県内での分布が限定されているため。

形　態　体壁は暗緑色とベージュの縞模様、触手と口盤は一様に赤色で、体壁にはややまばらに吸着イボがある。このイボはかなり大きく、良く目立つが吸着力は弱い。

国内分布　長崎および瀬戸内海に分布する。

県内分布　九十九湾で多く見られる。また、七尾の百海でも少ないが生息している。外浦海岸での情報はない。

生　態　長崎および瀬戸内海では水深数mの岩礁にみられるとされている。本県でも内浦沿岸の水深2～3m以深の岩礁に着生しているのが見られるが個体数は少ない。飼育すると、夜間に触手を広げることが多い。また、胃腔や触手内でプラヌラ幼生が見つかることがある。

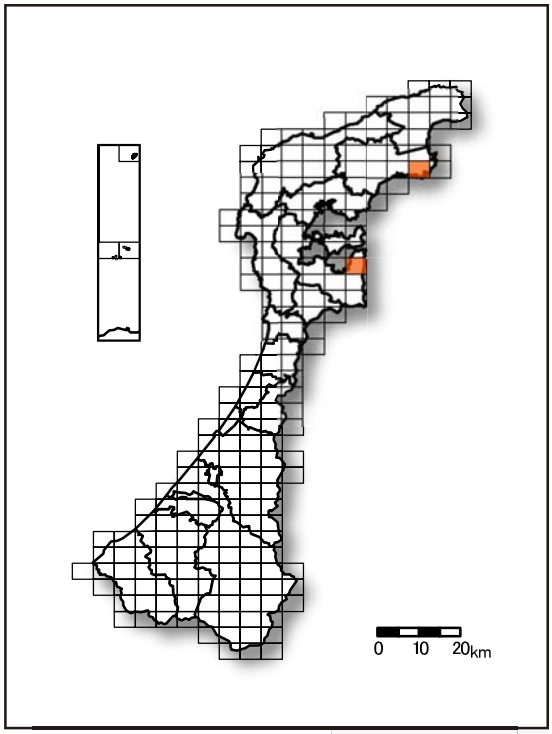
生息地の条件　波あたりのやや強い岩礁地帯の遮蔽部。

生存の危機　人為的な構築物などにより生息地が脅かされているようである。

特記事項　本種の学名はあくまでも内田・楚山(2001)のイソギンチャクガイドブック(TBSブリタニカ)で記載されたアンズイソギンチャクに適用されたものであり、その分類学的位置づけは不明瞭である(千葉県立中央博物館海の博物館、柳研介研究員からの私信)。

参考文献　内田紘臣・楚山勇．2001．イソギンチャクガイドブック．TBSブリタニカ

写真提供者：岡本武



県内の分布

グビジンイソギンチャク

Stichodactyla tapetum (Ehrenberg)

イソギンチャク目ハタゴイソギンチャク科

石川県カテゴリー	地域個体群
国カテゴリー	なし

選定理由　生息地での個体数の減少が顕著であるため。

形　態　盤はいぼ状の短い触手で覆われる。盤の直径10cmくらいの個体が多い。

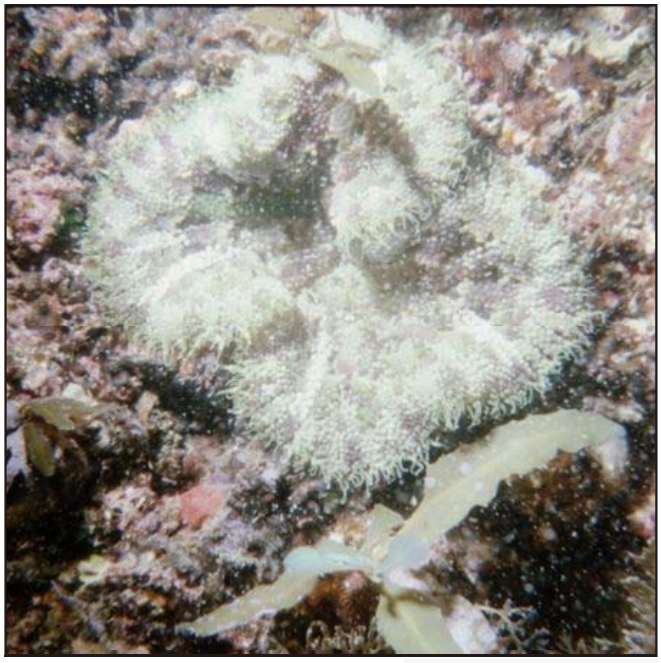
国内分布　千葉県以南に分布する。

県内分布　数年前は能登町の九十九湾や羽根沖の瀬、それに七尾市百海の海岸等でみられたが、ここ2～3年くらいは、なかなかみかけられなくなってきた。

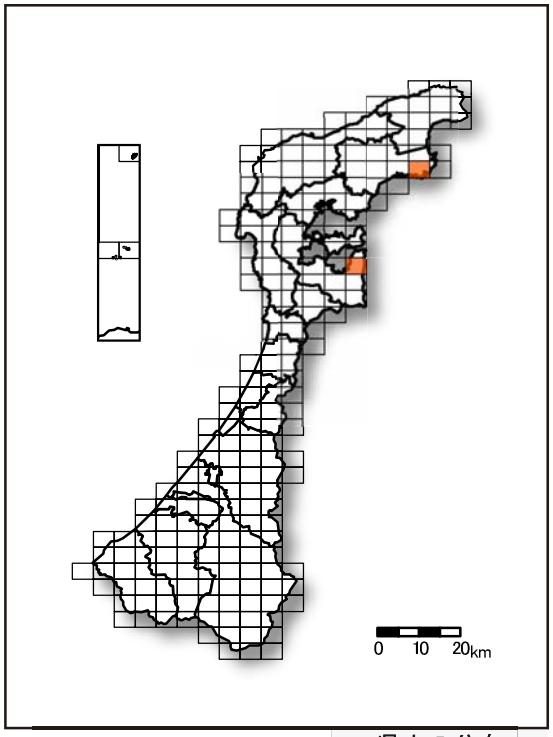
生　態　低潮線より水深10m以深の岩礁に着生している。

生息地の条件　生態が不明なので言及できない。

生存の危機　人為的な構築物などにより生息地が脅かされているようである。



写真提供者：岡本武



県内の分布

アマガイ

Nerita (Heminerita) japonica Dunker

原始腹足目アマオブネガイ科

石川県カテゴリー	地域個体群
国カテゴリー	なし

選定理由　全国的には普通種であるが、県内の分布地は一か所で、それも極めて狭い範囲に限定されているため。

形　態　殻高、殻径ともに2㎝程で、殻表はざらざらしていて黒く、三角形の不規則な模様がある。内唇の滑層は黄色、蓋は半月形で顆粒と柄がある。

国内分布　房総半島以南、四国、九州。

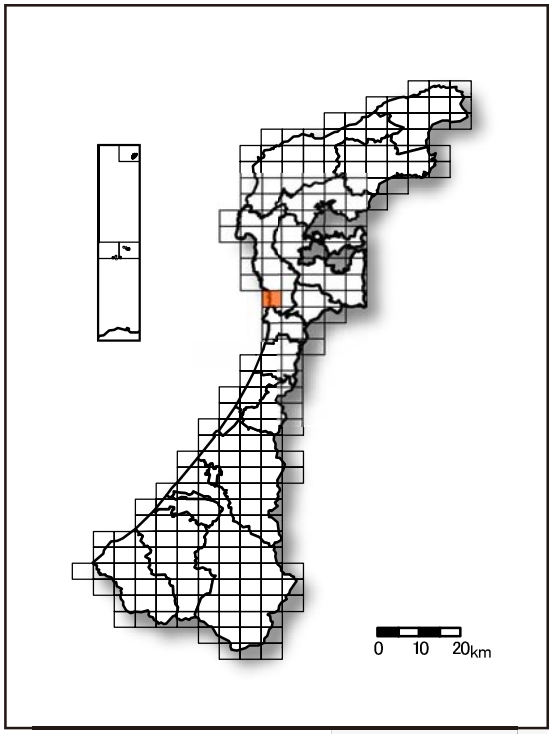
県内分布　志賀町。

生　態　汀線上部の岩の割れ目の中などに巻貝のタマキビガイやイシダダミと混生している。

生息地の条件　陸からの環境破壊や海洋汚染を行なわないこと。

生存の危機　生息地が極めて狭く限定されているので、採集を始め小さな人為的撹乱でも絶滅の危機が心配される。

写真提供者：坂井恵一



県内の分布

メダカラ

Purpuradusta (Cupinota) gracillis (Gaskoin)

中腹足目タカラガイ科

石川県カテゴリー	地域個体群
国カテゴリー	なし

選定理由　南方系だが県内各地に広く分布している。

形　　態　殻高2cm、殻径1.2cm程。前方にやや細まり、側方は平行的でない。灰褐色の背には褐色のやや帯状になる不規則な斑が、両腹面には褐色のごまふ斑点がある。外套膜は朱色に近い。

国内分布　陸奥湾以南、四国、九州、奄美、沖縄。

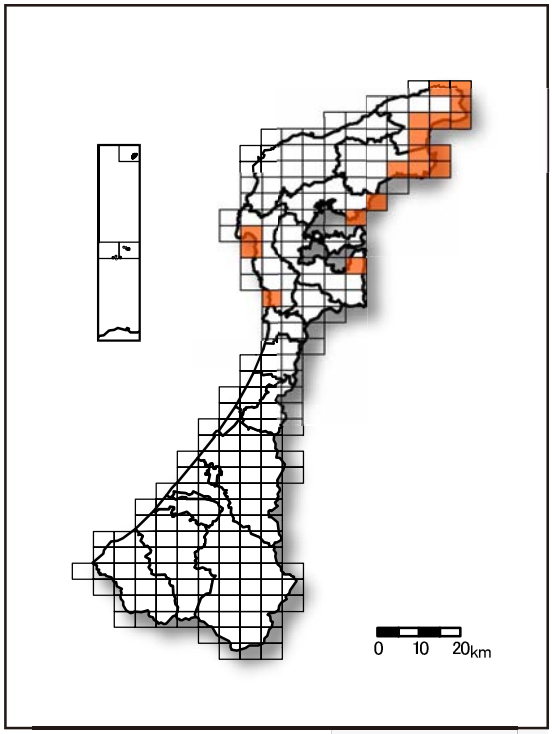
県内分布　能登半島各地の砂浜海岸で、打ち上げられた貝殻が観察できる。

生　　態　毎年、砂浜に打ち上げられる貝殻は多く、周年生息していると思われるが、生貝の生態は不明である。

生息地の条件　生態が不明なので言及できない。

生存の危機　生態が不明なので言及できない。

写真提供者：坂井恵一



県内の分布

マクラガイ

Oliva mustelina Lamarck

新腹足目マクラガイ科

石川県カテゴリー	地域個体群
国カテゴリー	なし

選定理由　南方系の種で、佐渡島と並び能登半島は分布の北限に近いが、県内各地に広く分布している。

形　　態　殻高4cm、殻径1.2cm程。殻は円筒形で黄褐色の地に細かいジグザグ模様が密にある。殻口内は紫色で、内唇上端に滑層瘤がある。マクラガイ属には全て蓋がない。

国内分布　房総半島、佐渡島以南、四国、九州。

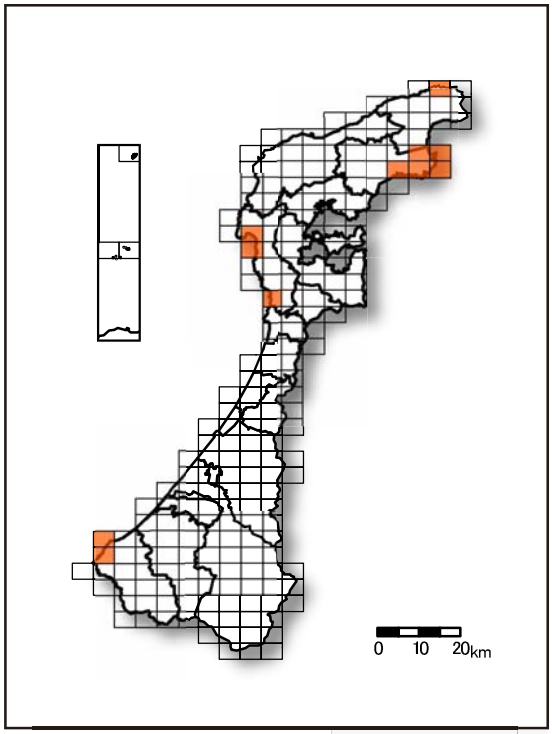
県内分布　能登半島各地および加賀の砂浜海岸で、打ち上げられた貝殻が観察できる。

生　　態　毎年、砂浜に打ち上げられる貝殻は多く、周年生息していると思われるが、生貝の生態は不明である。

生息地の条件　生態が不明なので言及できない。

生存の危機　生態が不明なので言及できない。

写真提供者：岡本武



県内の分布

マシコヒゲムシ

Oligobrachia mashikoi Imajima

環形動物門

石川県カテゴリー	地域個体群
国カテゴリー	なし

選定理由
ヒゲムシの仲間の多くは深海に生息し、浅海域のものもそのほとんどが寒流域に生息している。本種は対馬海流の影響下にある九十九湾の水深25m前後に生息していて、この種の仲間の中では大変珍しい。

形　態
平成15年に金沢大学自然計測応用研究センター臨海実験施設の調査により完全個体が採集された。体長は13cmであった。棲管の中に生息し、色は血液のような赤色、体幅0.6mm前後、触手(10～18本)がある。

国内分布
能登九十九湾内に分布。

県内分布
能登九十九湾内に見られる。

生　態
還元的な砂泥地に埋没し、棲管の一部と触手を底面より出して生息している。

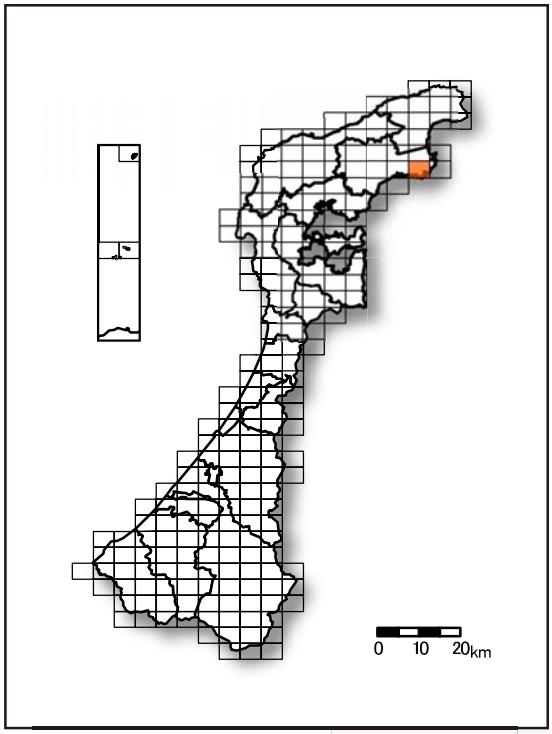
生息地の条件
九十九湾内でも比較的細かい砂泥地の水深25m前後に生息しているが、平成16年には水深9m前後でも生息を確認した。

生存の危機
九十九湾内のみで確認しているが、比較的狭い範囲に棲息しているため、ナマコ桁網などにより、絶滅の恐れあり。

特記事項
能登町九十九湾が基産地。

参考文献
今島実. 1973. 能登半島の九十九湾から得られた有鬚動物(Pogonophora), *Oligobrachia*属の一新種について. 金沢大学理学部附属能登臨海実験所年報, 第13巻, 7–12
Sasayama Y., M. Matada, Y. Fukumori, M. Umebayashi, A. Matuno, T. Nakagawa and M. Imajima. 2003. External Morphology of the Posterior End, the “Opisthoma” of the Beard Worm *Oligobrachia mashikoi* (Pogonophora). *Zoological Sciense* 20: 1411–1416.

写真提供者：又多政博



県内の分布

サクラオフェリア

Euzonus arcticus Grube

オフェリアゴカイ目オフェリアゴカイ科

石川県カテゴリー	地域個体群
国カテゴリー	なし

選定理由
我が国で最初に発見されたのが金沢市の金石海岸、2007年に金沢市在住の川原英氏らにより新称和名が提唱された。

形　態
体形はみみずに似ている。頭部は先が尖り、後方は丸く膨らみ、胸部(中部)は円筒形で深い溝がある。腹部(後部)には枝分かれした樹枝状のエラが対に並ぶ。体長は5～6cm、頭幅が4～5mmに成長し、生時の体色は鮮やかな赤色、または小豆色で背面は虹色または薄菫色。

国内分布
石川県、北海道余市他。

県内分布
白山市倉部からかほく市内灘にかけての砂浜海岸。

生　態
砂の直径が約0.3～0.5mmのやや粗めの汀線付近で、約20cmの深さに潜って生活している。産卵期は夏。

生息地の条件
細かい土砂の堆積や人為的撹乱による砂の粒度組成に変化がないこと。

生存の危機
日本で最初に発見された金石海岸は、堤防や離岸堤の設置による砂浜の粒度組成が変化し、生息環境が不適となって絶滅した。

特記事項
金沢市金石の地元民はオフェリアゴカイの仲間をサクラミミズと呼び親しみ、釣りの餌として利用していた。本種の模式産地はロシアの北極海である。

参考文献

安田作二郎. 1936. 金石海岸産多毛類 *Thoracophelia yasudai*. 石川縣天然記念物調査報告, 第9輯, 63-70.

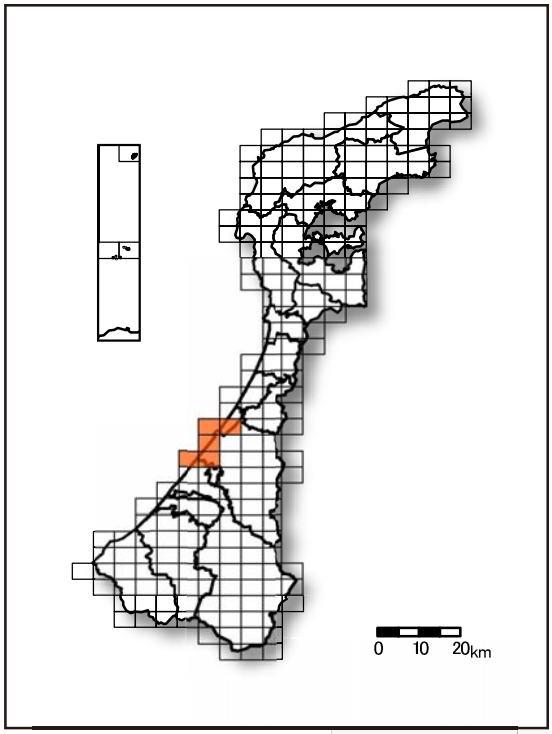
Imajima, M. and O. H. Hartman. 1964. Polychaetous annelids of Japan, Part II. Allan Hancock Foundation Publications Occasional Paper, (26): 239-452.

Okuda, S., 1934. Description of a new Polychaete *Thoracophelia yasudai* n. sp. Journal of the Faculty of Science, the Hokkaido imperial University, series 6, 3: 169-175.

川原 英・美坂 正・坂井恵一. 2007. 石川県の砂浜海岸に生息する2種のオフェリアゴカイ. 能登の海中林, (27): 5-6.

坂井恵一. 2008. 石川県に分布する2種のオフェリアゴカイ. うみうし通信, (58): 2-3.

写真提供者：坂井恵一



県内の分布

エゾオフェリア

Euzonus ezoensis (Okuda)

オフェリアゴカイ目オフェリアゴカイ科

石川県カテゴリー	地域個体群
国カテゴリー	なし

選定理由
2007年に金沢市在住の川原英氏らにより新称和名が提唱された。

形　態
体形はみみずに似ている。頭部は先がやや尖り、後方は円筒形、胸部(中部)は円筒形でやや短い。腹部(後部)には櫛状のエラが対に並ぶ。体長は約3～4cm、頭幅は1.5-2mm程度で、サクラオフェリアより小型である。生時の体色は鮮やかな赤色または小豆色。

国内分布
石川県、北海道のオホーツク海に面した枝幸(えさし)。

県内分布
かほく市高松から志賀町高浜にかけての砂浜海岸。

生　態
砂の直径が約0.2mmの細かい砂浜の海岸で、汀線付近から少し陸寄りの波がやっとかぶるような場所の深さ約30cmまで潜って生活している。産卵期は夏。

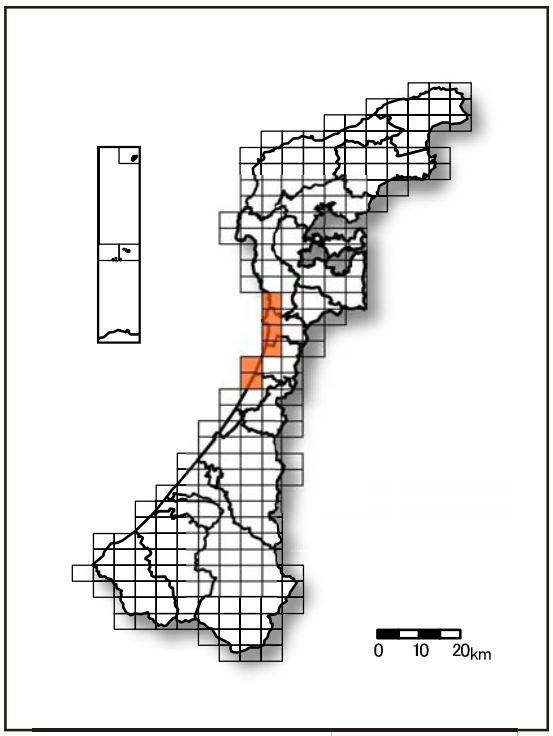
生息地の条件
細かい砂の流出など、人為的撹乱等による砂の粒度組成に変化がないこと。

生存の危機
砂浜の侵食・後退が進めば生活場所自体が少なくなり、生存を脅かすことになる。

特記事項
主な生息地である千里浜海岸は海岸侵食が進行している。

参考文献
Imajima, M. and O. H. Hartman. 1964. Polychaetous annelids of Japan, Part II. Allan Hancock Foundation Publications Occasional Paper, (26): 239-452.
川原 英・美坂 正・坂井恵一. 2007. 石川県の砂浜海岸に生息する2種のオフェリアゴカイ. 能登の海中林, (27): 5-6.
坂井恵一. 2008. 石川県に分布する2種のオフェリアゴカイ. うみうし通信, (58): 2-3.

写真提供者：坂井恵一



県内の分布

ミサキギボシムシ

Balanoglossus misakiensis Kuwano

ギボシムシ綱ギボシムシ科

石川県カテゴリー	地域個体群
国カテゴリー	なし

選定理由
能登半島が日本海沿岸における最初の生息発見地。

形　態
体はミミズ型で全長は多くがおよそ30～40㎝。頭部は先が尖り、後方は丸く、橋の欄干等に飾られる擬宝珠(ぎぼし)に似ている。襟と生殖翼の接合部は左右の自由端が離れ、肛門は体軸のやや背方に開く。体色は黄色っぽく、強烈なヨウドホルム臭を放つ。

国内分布
日本固有種で、従来は太平洋沿岸の千葉県以南と瀬戸内海にだけ分布するとされていた。

県内分布
志賀町増穂ヶ浦海岸の水深2m～7m付近に生息する。能登町の海岸一体からも生息情報が得られているので、調査が進めば生息地は増えると考えられる。

生　態
砂中に潜入しているが、肛門付近には糞塊を築かない。産卵期は夏。

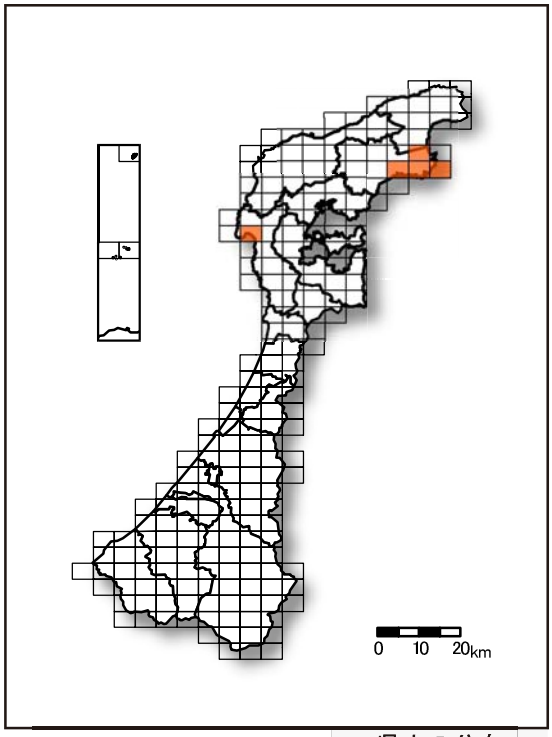
生息地の条件
増穂ヶ浦の生息地における海底砂の粒度は、細砂(<0.25)～極細砂(>0.06)が主体であった。同海域はカバザクラガイが高密度に生息する場所でもある。

生存の危機
浅い砂泥底が主な生活場所のため、埋立などにともなう生息適地の減少が危惧されている。

特記事項
本種の他、九十九湾にはハネナシギボシムシが生息する。

参考文献
坂井恵一．1999．富来町増穂ヶ浦で発見されたミサキギボシムシ．能登の海中林，(10)：6.
坂井恵一・福島広行・東出幸真・又多政博・西川輝昭．2001．能登半島に生息するミサキギボシムシ *Balanoglossus misakiensisi* Kuwano（半索動物門、ギボシムシ綱）の生態学的知見．のと海洋ふれあいセンター研究報告，(7)：11-20

写真提供者：坂井恵一



県内の分布

ワダツミギボシムシ

Balanoglossus carnosus (Willey)

ギボシムシ綱ギボシムシ科

石川県カテゴリー	地域個体群
国カテゴリー	なし

選定理由
能登半島が日本海沿岸における最初の生息発見地。

形　態
体はミミズ型で全長は最大約80cmに達する。頭部は丸く、襟と生殖翼の接合部は左右の自由端が接し、肛門は体軸と直角に開く。体色は黄色っぽく、強烈なヨウドホルム臭を放つ。

国内分布
インド－西太平洋の熱帯水域の河口部に多く、太平洋沿岸の千葉県館山以南に分布する。

県内分布
能登町の九十九湾を含む小浦から新保、そして恋路の水深2m～10m前後の砂泥底に生息する。ただし、調査が進めば生息地は増えると考えられる。

生　態
砂中に潜入し、吻端付近には2～3cmの砂の窪みを、また肛門付近には直径20cm程度のなだらかな糞塊を築く。能登における産卵期は夏。

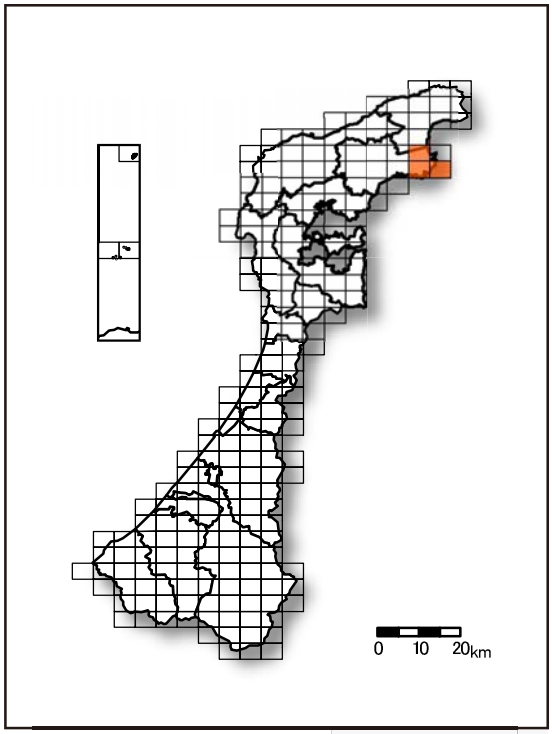
生息地の条件
海底砂の粒度はミサキギボシムシとほぼ同じく細砂（<0.25）～極細砂（>0.06）が主体であった。

生存の危機
浅い砂泥底が主な生活場所のため、埋立などにともなう生息適地の減少が危惧されている。

特記事項
九十九湾にはハネナシギボシムシが生息する。

参考文献
坂井恵一．2002．能登半島で見つかったワダツミギボシムシ．能登の海中林，(16)：6.
坂井恵一・福島広行・東出幸真・小木曽正造．2001．日本海における初記録種，ワダツミギボシムシ *Balanoglossus carnosus* (Willey)（半索動物門、ギボシムシ綱）の能登半島沿岸での生態について．のと海洋ふれあいセンター研究報告，(7)：1-10

写真提供者：坂井恵一



県内の分布

イチモンジハゼ

Tremma garmmistes (Tomiyama)

スズキ目ハゼ科

石川県カテゴリー	地域個体群
国カテゴリー	なし

選定理由　暖海性の小型ハゼ類であるベニハゼ属の一種、日本海には本種だけが分布し、本県が北限の生息地。

形　　態　全長約5㎝。上顎先端から背鰭、眼の後方から尾鰭基部に至る2本の褐色縦帯がある。

国内分布　太平洋沿岸の神奈川県から高知県、九州西岸、日本海沿岸では能登半島と隠岐諸島に分布する。

県内分布　九十九湾で2個体が採集されている。また1999年夏、輪島市鵜入で撮影されたビデオ映像で生息を確認した。

生　　態　岩礁の岩穴や亀裂の中など少し暗い場所を好む。本県沿岸においても越冬し、周年生息している可能性が示唆されているが、生活史の詳細は不明。

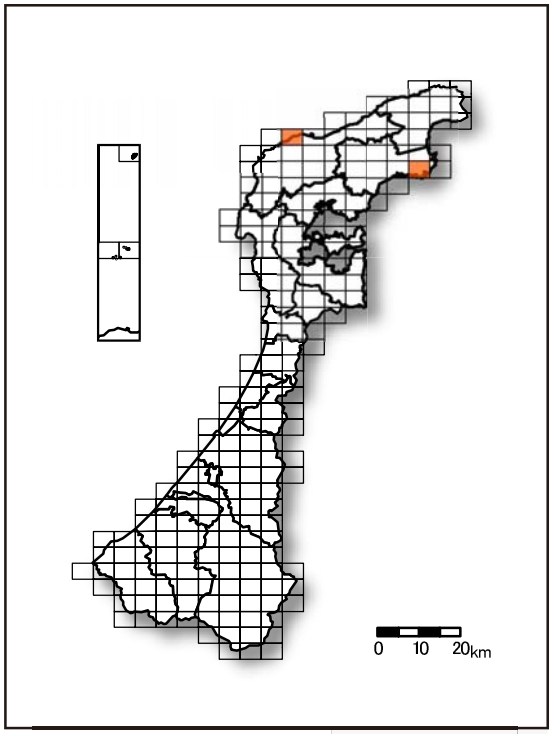
生息地の条件　小型種のうえ、生息場所がやや深いので、スキューバ潜水を用いなければ観察・採集は難しい。

生存の危機　生態が不明なので言及はできない。

特記事項　ハゼの仲間だが、左右の腹鰭は融合せず、吸盤を形成していない。

参考文献　坂井恵一．1997．九十九湾で採集されたイチモンジハゼ *Trimma garmmistes* (Pisces，Gobiidae)．のと海洋ふれあいセンター研究報告，(3)：43-44.

写真提供者：坂井恵一



県内の分布

7．陸産貝類

1　石川県の陸産貝類相

軟体動物マキガイ綱は、陸産種と水産種を含み、また陸域と水域の境界線である水際を主な生息場所とする種もいる。ここでは、通常は水域から離れて陸上を主な生息環境とする種や、水際に生息するもので主に水面より高い位置に生息する種を陸産貝類とした。水際に生息する種の中には海浜性の種や汽水域潮上帯の種も含まれる。

論文や調査報告書における記載に基づくと、これまでに石川県内において生息が確認されている陸産貝類は 110 種程度である。この中には採集時期が明らかでないものや再検討が必要なものもいくつか含まれており、記載された全ての種が現在の石川県に生息しているとはいえない。一方、筆者らは最近の比較的短期間の調査で、数種の県内未記載種を確認している。まだ生息が確認されていない多くの陸産貝類が石川県には存在するものと考えられ、おそらく 100 種を超える陸産貝類が生息しているであろう。

原生自然を残す山岳と植生の豊かな丘陵、平野部の湿地や潟、岩礁海岸や内湾を伴う長い海岸線および島嶼など、石川県には多様な陸産貝類の生息環境が存在しており、それを反映して深山に生息するクロイワマイマイやミヤマヒダリマキマイマイなどの大型種やキセルガイ類、丘陵地に多産するノトマイマイやベッコウマイマイ科、ニッポンマイマイ科の中～小型種、人工林や広葉樹林に広くみられるケシガイ類やゴマガイ類などの微小種、低湿地にみられるナガオカモノアラガイやヒメオカモノアラガイ、海岸線に分布するサツマクリイロカワザンショウ類やヘソカドガイなど、多様な種が確認される。

能登における構成種の特徴は、海浜性貝類が豊富であること、海岸の照葉樹林に稀種を伴う樹林性から半地中性の陸産貝類相がみられること、点在するブナ原生林において山地性の種が特異的にみられることが挙げられる。一方、加賀では、里地や低山に普遍的にみられる種群が多いことに加え、白山山系を背景とした山地性種群が豊富であることが挙げられる。

石川県における固有種としては、舳倉島のみにみられるヘグラマイマイと、白山の高度 2,350～2,400m で確認されているハクサンケマイマイが挙げられる。

2　選定にあたって

石川県における陸・淡水産貝類の研究は多くの都道府県と比較して遅れている。例えば 2002 年にまとめられた環境省の生物多様性調査の陸産貝類・淡水産貝類調査において、石川県から収集された生息情報は陸・淡水産貝類あわせて 354 件で、全国平均の約 9%、27 都道府県中 26 番目の低さとなっている。ちなみに県境を接する福井県は 4,861 件、富山県は 447 件、岐阜県は 4,688 件となっており、地域的に陸・淡水産貝類が少ないものではなく、情報が不足していることがわかる。

石川県のリッドリストをまとめるにあたっては、これまでの情報の蓄積が不足している状況の中で、既存の情報収集とともに、筆者らにより実施された現地調査により情報を補った。調査により、これまで石川県内で未記載のものも確認され、石川県における陸産貝類の生息状況の現状を大まかに知ることができた。その結果、2000 年に刊行された「いしかわレッドデータブック〈動物編〉2000」においては、陸・淡水産貝類としては、ヘグラマイマイ一種のみが選定されただけであったが、今回の改訂においては、陸産貝類と淡水産貝類はそれぞれ独立の分類群として扱い、陸貝においてはヘグラマイマイを含む 38 種を選定した。

ところで陸産貝類や淡水産貝類といったカテゴリーは、生息場所に基づいた便宜的な分類であり、必ずしも系統分類学的な観点から分けられるものではない。また、水際を住みかとする貝類については陸生と水生との区別が困難なものもあり、都道府県のレッドリストにおいてもどちらに扱うかは、種によってまちまちである。今回は、概ね 2002 年の環境省生物多様性調査の陸産貝類・淡水産貝類調査の分類に従って、陸産貝類と淡水産貝類を振り分けている。ただし、一部例外もあり、選定種のリストを確認する上では、淡水産貝類の章も参照いただきたい。

選定にあたっては、筆者らにおいて近年採集された種を中心に扱い、補足的に文献による記載を参照し

た。文献により記載事項が不十分なものや、文献中に採集場所等の十分な裏付けがないものは除外した。また、文献の著者への問い合わせや情報収集が不十分なことから、選定において参照できなかった情報があるものと思われる。次回の改訂においては、詳細な情報の収集と精査が求められる。

現地調査における知見や既存情報が十分でないことから、生息がきわめて限定されると予想される種においても、準絶滅危惧や情報不足とした種もあり、今後の情報の集積により選定ランクの見直しを図らなければならない種もあるものと思われる。

3　陸産貝類選定種とその概要

今回の選定種の一覧は表の通りとなっている。表の和名と並び順、また本文中の学名は、概ね環境省の日本産野生生物目録（1998）に従っている。

選定された 37 種のうち絶滅危惧Ⅰ類には、クビキレガイモドキを選定した。本種は、石川県の他には青森県と北海道のみに生息が知られる種である。石川県においては 1969 年以来、確認情報がなかったが、今回筆者らにより七尾南湾における生息が確認された。海岸の特殊な環境に生息し、岩礁の崖となっている場所を除いて、ほとんどの海岸に護岸が施されている七尾南湾において、生息環境はきわめて限られており、石川県においては、もっとも絶滅が危惧される海浜性貝類である。

絶滅危惧Ⅱ類には、海浜性の貝類から 2 種、山地性の種より 5 種を選定した。ヤマトクビキレガイ、オオウスイロヘソカドガイとも岩礁性海岸の飛沫帯に生息する種であるが、それぞれ生息場所が限られており、また多産はしない。海岸の護岸工事やその他の開発によって容易に消滅してしまう種である。ココロマイマイ、オオミケマイマイは丘陵地から山岳に生息する種であり、生息分布は比較的広いが産地において多産することはない。また開発が進んだ場所においては確認されない。環境変化には脆弱な種であると考えられる。トノサマギセル、ハクサンマイマイ、ミヤマヒダリマキマイマイは山地から奥山に生息する種であり、いずれも稀種である。詳細な生息状況は不明であるが、生息分布が狭い可能性があり、一つの生息地が消滅すると種全体への影響が大きいものと考えられる。

準絶滅危惧には、県内における生息地点の情報が少ない種、または環境省レッドリストに選定される種の中で県内に分布する種より 24 種を選定した。構成は、海浜性種から 1 種、低湿地の水際に生息する種から 1 種、里地から山地に生息する種から 22 種となっている。

情報不足に選定した 5 種は、過去に県内において記録がある種で現状が不明の種及び、分類学的に検討が求められる種を選定している。

最後に、今回の選定からは除外したが、最近の確認記録のあるもので注目すべき種について述べる。

カンムリケマイマイ *Aegista Kanmuriyamensis* に酷似する種が金沢市近郊の丘陵から確認されている。カンムリケマイマイは、福井県、岐阜県県境の山岳地帯の極めて限定された地域に分布するとされる種である。また、2005 年発行の環境省レッドデータブックでは、分類学的再検討を要する種とされ情報不足に選定されたが、2007 年の見直しにおいてはランク外となっている。石川県で確認された類似種の生息条件は不明であるが、これまでに知られているカンムリケマイマイの生息条件とは異なっている。

イボイボナメクジ *Granulilimax fuscicornis* と思われる種が金沢市の丘陵地から確認されている。イボイボナメクジは 1989 年に新種記載された種であるが、十分に研究が進んでおらず、分布の詳細が不明であることから、今回の選定からは除外した。ただし、原記載にいずれの産地でも複数個体が採集されることは困難とかかれているように、稀種であることは確実である。

4　付記

今回、陸産貝類のレッドリストの選定を高橋が担当したが、最近の生息情報の収集、標本の作成および同定においては、新潟水族館の野村卓之氏による多大な貢献があった。また種の選定と原稿のとりまとめにあたっても示唆を賜ったことを付記しておく。

（高橋　久）

新旧対応表

		前回						
								1
		絶滅 0	絶滅危惧Ⅰ類 0	絶滅危惧Ⅱ類 0	準絶滅危惧 1	情報不足 0	地域個体群 0	カテゴリー外 36
今回	絶滅 0							
	絶滅危惧Ⅰ類 1							クビキレガイモドキ
	絶滅危惧Ⅱ類 7							ヤマトクビキレガイ オオウスイロヘソカドガイ トノサマギセル ココロマイマイ オオミケマイマイ ハクサンマイマイ ミヤマヒダリマキマイマイ
	準絶滅危惧 24				ヘグラマイマイ※			イツマデガイ ナガオカモノアラガイ オオタキコギセル ナミコギセル コンボウギセル オクガタギセル ハゲギセル オオコウラナメクジ ヤマコウラナメクジ ヒラベッコウガイ クリイロベッコウ カズマキベッコウ キヌツヤベッコウ ヒメハリマキビ スジキビ オオウエキビ ヒメカサキビ エチゼンビロウドマイマイ ケハダビロウドマイマイ コシタカコベソマイマイ コベソマイマイ ヤマタカマイマイ タワラガイ
	情報不足 5							サツマクリイロカワザンショウ類の一種 ナガナタネガイ ミドリベッコウ ハクサンベッコウ ハクサンマイマイ
37	地域個体群 0							
	カテゴリー外 0							

※前回 その他の動物に分類

クビキレガイモドキ

Cecina manchurica A. Adams

ニナ目イツマデガイ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類
国カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類

選定理由
護岸改修が進んでいる現状において、生息地における生息可能な環境が極端に限定される。また生息場所の成立条件が不安定であり、絶滅を回避するためには計画的な保全対策が必要である。

形　態
貝殻はやや小型で殻高約5㎜。螺塔は高いが成長に伴って殻頂は欠損するため円筒形の外観となる。殻はやや薄く、茶褐色で光沢がある。

国内分布
石川県のほかに青森県と北海道に分布。

県内分布
七尾南湾。

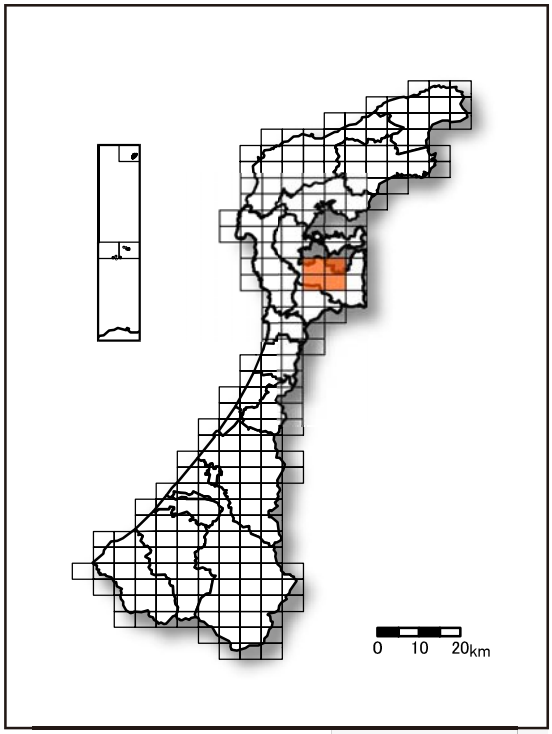
生　態
内湾の海藻などの漂着物が溜まる場所の潮上帯（飛沫帯）のうち限られた狭い幅の中に生息する。

生存の危機
海岸の開発や護岸改修による生息環境の消失、破壊。廃油等による環境汚染。（A）

特記事項
湊宏博士が1969年に七尾市内の生息地で調査・採集を行って以降、確認されていなかったが、2008年に筆者らが七尾南湾の1箇所において生息を確認した。生息場所は海岸線に沿った20mほどの範囲であり複数個体が確認されたが、生息密度はあまり高くなかった。その両側はコンクリート護岸や崖となっており、生息に適した環境はみられなかった。

参考文献
川端義信 2004. 能登半島産の軟体動物目録. 七尾市少年科学館研究報告8：43-82.
湊宏 2003. クビキレガイモドキの分布とその生息地. ちりぼたん. 34（4）：92-96.

写真提供者：野村卓之



県内の分布

ヤマトクビキレガイ

Truncatella pfeifferi Martens

ニナ目クビキレガイ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類
国カテゴリー	なし

選定理由 稀種であるとともに生息環境の悪化が懸念される。県内の生息地における生息密度が低い。

形　　態 殻高6㎜。成貝では幼貝層である殻頂部が欠落して円筒形となる。顕著な縦肋を持つ。

国内分布 北海道南部以西。

県内分布 能登地区の海岸。

生　　態 海浜の飛沫帯に分布する。湿った石やゴミの下に生息する。

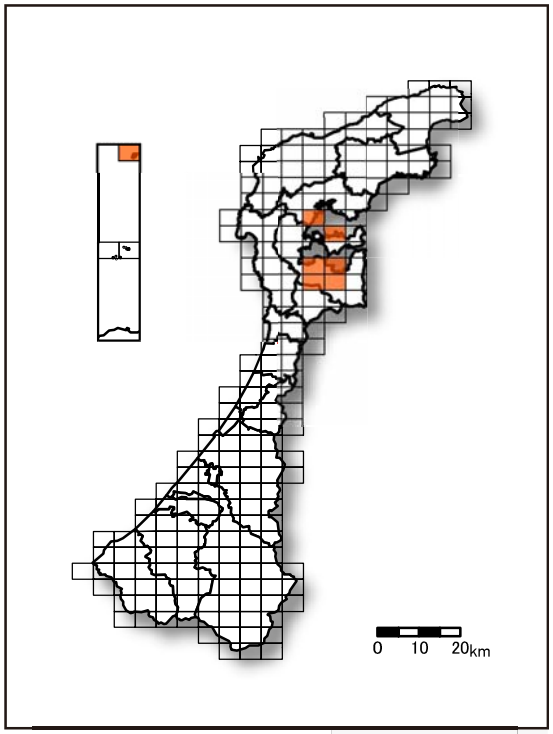
生息地の条件 転石などを有する海岸線の飛沫帯。

生存の危機 海岸線の開発、ゴミの堆積などの環境悪化。（A）

特記事項 近年の確実な確認記録は舳倉島及び能登島のみのである。

参考文献 南波紀昭 2006. 舳倉島観察会. しぶきつぼ. 27 : 1-4.

写真提供者：野村卓之



県内の分布

オオウスイロヘソカドガイ

Paludinella tanegashimae (Pilsbry)

ニナ目カワザンショウ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類
国カテゴリー	なし

選定理由 生息情報が少ない稀種であり、また生息環境が限定される。県内の生息地の生息密度は低い。

形　　態 殻は殻高8㎜の茶褐色の円錐形。軟体は黒褐色で触角基部に眼がある。

国内分布 本州、九州。

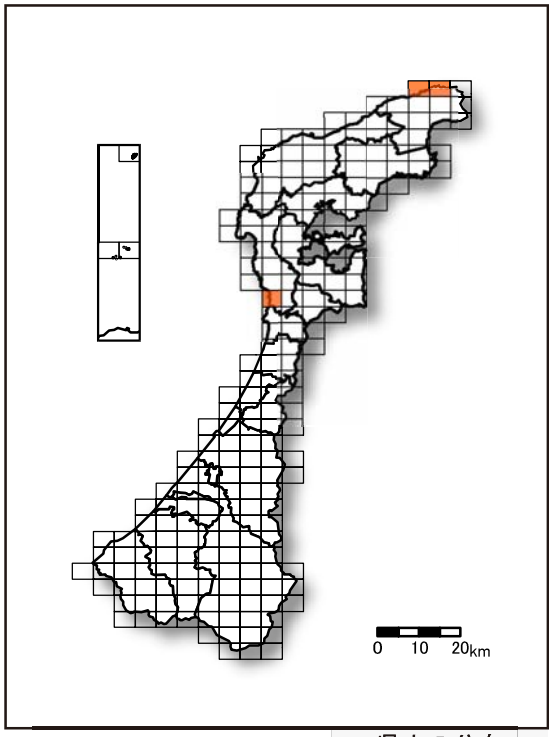
県内分布 能登。

生　　態 飛沫帯より上方の草むら付近や、浸出水のある岩礁の日陰部分、海岸の打ち上げ物の陰など。

生息地の条件 波打ち際に陰となる構造があること。

生存の危機 海岸線の開発。 (A)

写真提供者：野村卓之



県内の分布

トノサマギセル

Mundiphaedusa ducalis (Kobelt)

マイマイ目キセルガイ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類
国カテゴリー	準絶滅危惧

選定理由　分布地が限られるが、生息地である山林の環境が悪化しているため。

形　態　棍棒状の左巻きの巻貝。キセルガイ類としては大型で殻高は35㎜前後、殻径8㎜。殻の色は黄褐色で、油状光沢がある。

国内分布　石川県白山山系を中心とする北陸地方、福井県、岐阜県、滋賀県北部、愛知県北部の山岳地帯に分布する。

県内分布　白山山系に分布するとされるが、白山市白峰地区（六万山）の他は具体的な分布情報が少ない。2007年の調査では、加賀市山中地区の低山帯で記録された。

生　態　倒木や朽ち木の下などに生息。卵生。

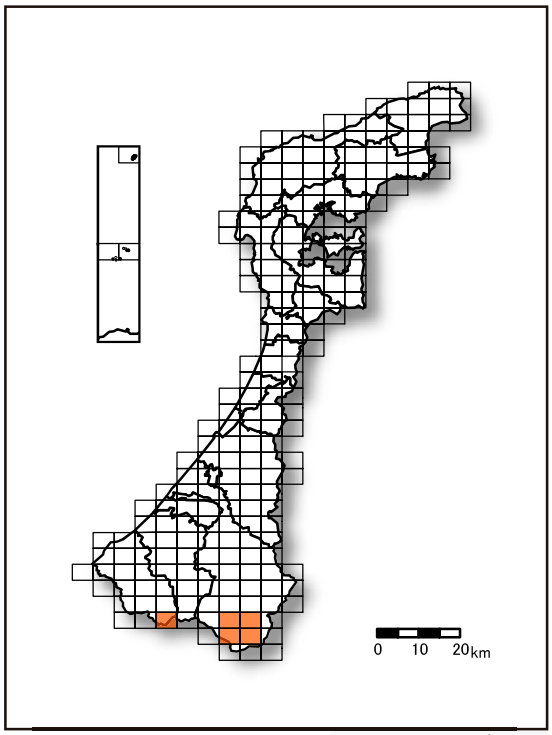
生息地の条件　詳細不明。

生存の危機　林道開発、森林整備による山林の乾燥化。（A）

特記事項　山中地区では林道脇の溜め桝の中にいたものが偶然発見された。当地の標高は460mと本種の生息地としては標高が低い。福井県RDBでは県域絶滅危惧Ⅱ類にランクされている。

参考文献　湊宏・上馬康生 1996. 白山とその周辺の陸産貝類. 石川県白山自然保護センター研究報告23：39-50.

写真提供者：石原一彦



県内の分布

ココロマイマイ

Satsuma cardiostoma (Kobelt)

マイマイ目ニッポンマイマイ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類
国カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類

選定理由 稀産種であるとともに分布域が狭い。県内においての確認地点は少ない。

形　態 殻高14㎜程度で、殻は球状をした円錐形。螺色は茶褐色で光沢がある。

国内分布 北陸から近畿北部。

県内分布 手取川流域の丘陵地帯などにみられるが詳細は不明。

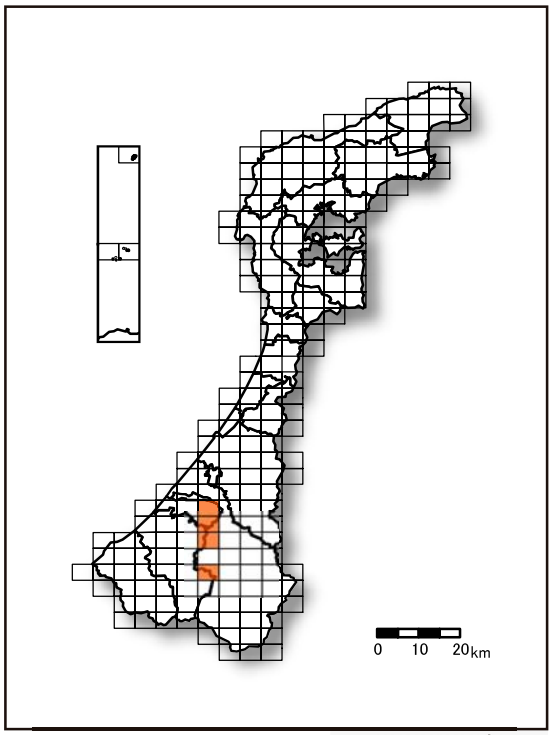
生　態 湿った茂みの下草、あるいは林床の地中などに生息する。

生息地の条件 不明。

生存の危機 里山の開発や森林伐採。 (A)

参考文献 野村卓之・高橋久 2008. 石川県の陸・淡水産貝類. しぶきつぼ. 29 : 45-52.

写真提供者:野村卓之



県内の分布

オオミケマイマイ

Aegista omiensis (Pilsbry)

マイマイ目オマジマイマイ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類
国カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類

選定理由
稀産種であるとともに分布域が狭い。また生育地が限定されるとともに生息地における生息密度が低い。

形　態
殻高4㎜。殻径8㎜程度で、殻は低円錐状で淡褐色。殻皮に三角形の鱗片をつける。

国内分布
岐阜県、滋賀県と北陸地域。

県内分布
加賀および能登の丘陵地。

生　態
森林の腐植層下で、礫の多い土壌などに生息する。

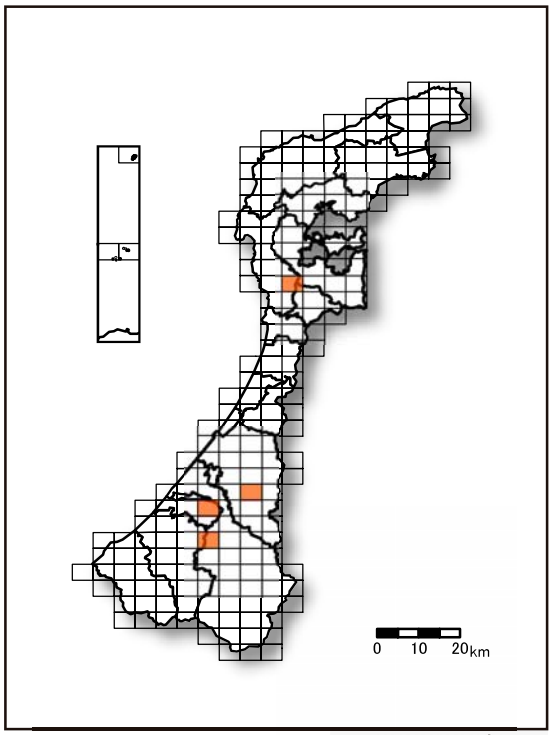
生息地の条件
丘陵斜面などの水はけの良い場所に多い。

生存の危機
里山の開発や森林伐採。（A）

特記事項
確認地点のうち1箇所を除くとそれぞれの場所での確認数は1個体であった。

参考文献
野村卓之・高橋久 2008. 石川県の陸・淡水産貝類. しぶきつぼ. 29：45–52.
湊宏・上馬康生 1996. 白山とその周辺の陸産貝類. 石川県白山自然保護センター研究報告. 23：39–50.

写真提供者：野村卓之



県内の分布

ハクサンマイマイ

Euhadra latispira latispira (Pilsbry et Hirase)

マイマイ目オナジマイマイ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類
国カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類

選定理由　生息地が限定される稀種。

形　　態　大型で殻はやや厚く、殻径は48㎜、殻高30㎜に達する。殻の色は黄緑～濃い赤褐色まで変異が多い。殻表には火炎彩が出ない。

国内分布　石川県（白山、別山）。

県内分布　白山の標高約1500～2500mに分布。

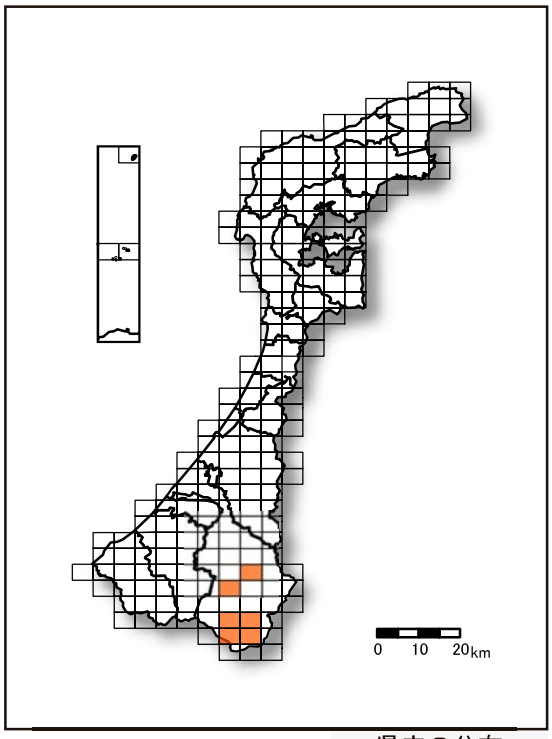
生　　態　地表性の種で、ダケカンバやチシマザサ、ネマガリザサ等の群落に生息する。

生息地の条件　良好な植生群落を有する山岳環境。

生存の危機　自然度の高い山岳に生息する種であり生息環境の改変の影響を受けやすいものと思われる。 (A)

参考文献　湊宏・上馬康生 1996. 白山とその周辺の陸産貝類. 石川県白山自然保護センター研究報告. 23 : 39-50.

写真提供者：野村卓之



県内の分布

ミヤマヒダリマキマイマイ　マイマイ目オマジマイマイ科

Euhadra scaevola scaevola (Martens)

石川県カテゴリー　絶滅危惧Ⅱ類
国カテゴリー　絶滅危惧Ⅱ類

選定理由　森林性の大型種で生息地における個体数が少ない。

形　態　貝殻は左巻で殻径30㎜程度になる。殻は低円錐状で濃褐色。成長脈が明瞭。

国内分布　本州中部。

県内分布　加賀の山地。

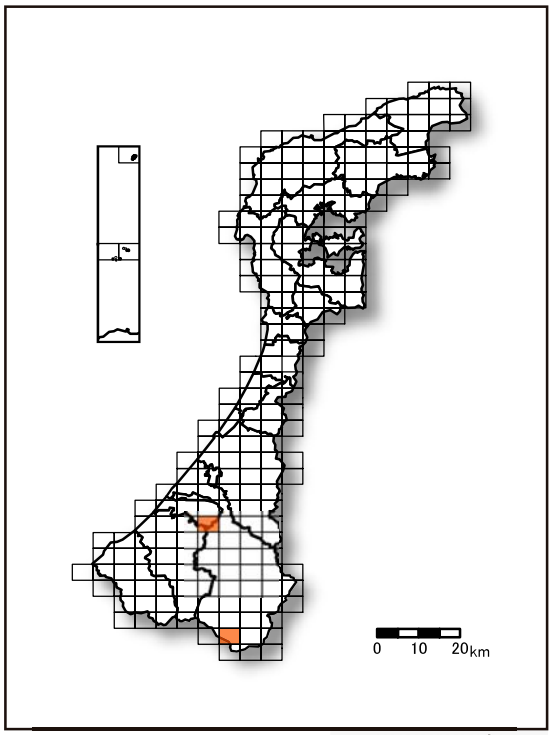
生　態　地上性の種であるが、礫間や石垣の間にも生息する。

生息地の条件　石礫が堆積する山地の沢沿いなどで、周辺は発達した森林が続いている。

生存の危機　森林伐採。 (A)

参考文献
野村卓之・高橋久 2008. 石川県の陸・淡水産貝類. しぶきつぼ. 29 : 45-52.
湊宏・上馬康生 1996. 白山とその周辺の陸産貝類. 石川県白山自然保護センター研究報告. 23 : 39-50.

写真提供者：野村卓之



県内の分布

ヘグラマイマイ

Euhadra quaesita heguraensis Kuroda et Tan

マイマイ目オナジマイマイ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	準絶滅危惧

選定理由　舳倉島・七ツ島のみに生息することから個体群サイズが小さい。

形　　態　ヒダリマキマイマイの離島型亜種であり、基本形態はこれに似るが、基本亜種に比べてかなり小型で丸い。

国内分布　輪島市舳倉島および七ツ島。

県内分布　同上。

生　　態　地上性の大型種で、活動期には樹上や陸上を活発に這い回る。

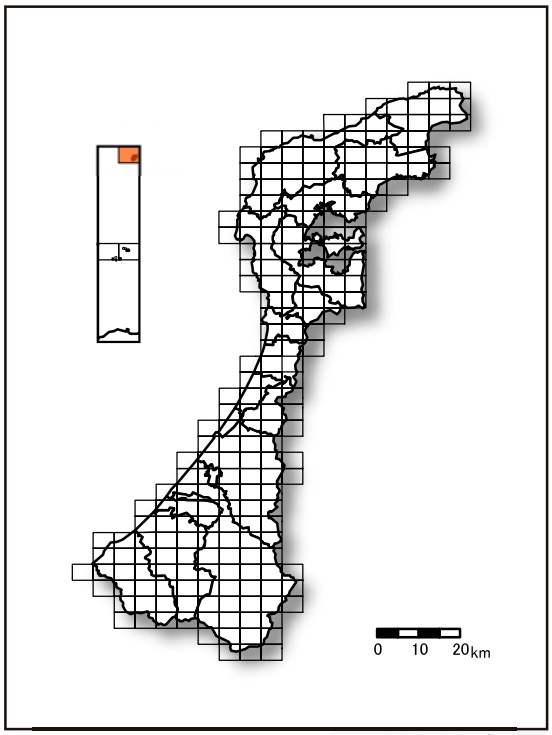
生息地の条件　樹林。

生存の危機　道路造成。 (A)
天災等による個体群全体へのダメージ。 (D)

特記事項　にいがた貝遊会の2005年の観察会の記録ではメダケ群落中に多くの個体を確認したとある。

参考文献
南波紀昭 2006. 舳倉島観察会. しぶきつぼ. 27 : 1-4.

写真提供者：野村卓之



県内の分布

イツマデガイ

Blanfordia japonica japonica (A. Adams)

ニナ目イツマデガイ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	準絶滅危惧

選定理由　福井県以北の日本海側沿岸に分布し、生息環境が限定される。県内においては、これまでに確認されている地点が少ない。

形　　態　殻高8.5㎜程度で、螺層は6層。殻は長卵形で栗褐色、光沢がある。

国内分布　本州、四国、九州。

県内分布　能登地域の岩礁海岸。

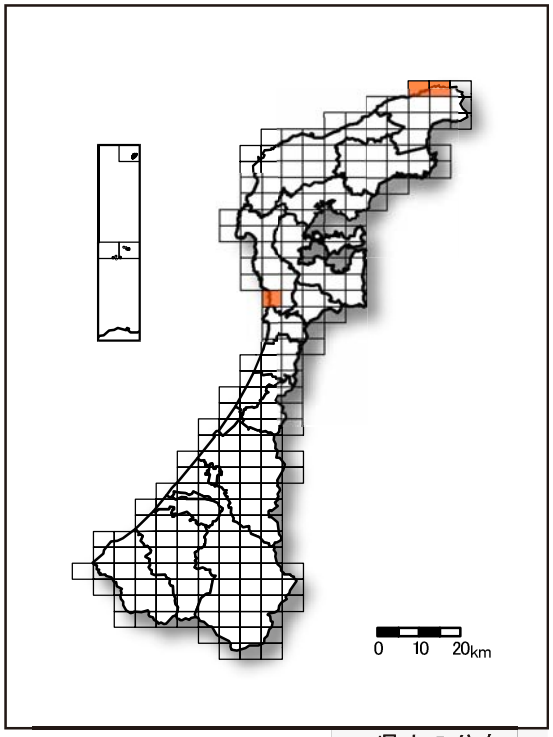
生　　態　海岸の草地および低木林内に生息する。

生息地の条件　海岸林の腐植を多く含む土壌、あるいは浸出水のみられる湿った岩場等。

生存の危機　開発による海岸線の改造。（A）

参考文献　野村卓之・高橋久 2008. 石川県の陸・淡水産貝類. しぶきつぼ. 29：45-52.

写真提供者：野村卓之



県内の分布

ナガオカモノアラガイ

Oxyloma hirasei (Pilsbry)

マイマイ目オカモノアラガイ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	準絶滅危惧

選定理由　抽水植物の残る自然度の高い水辺に生息が限定される。

形　　態　殻径6㎜程度。殻口部は大きく、螺旋部が小さい。やや光沢のある薄くて透明感のある黄白色。

国内分布　北海道、本州、四国、九州。

県内分布　能登および加賀の平野部（潟など）。

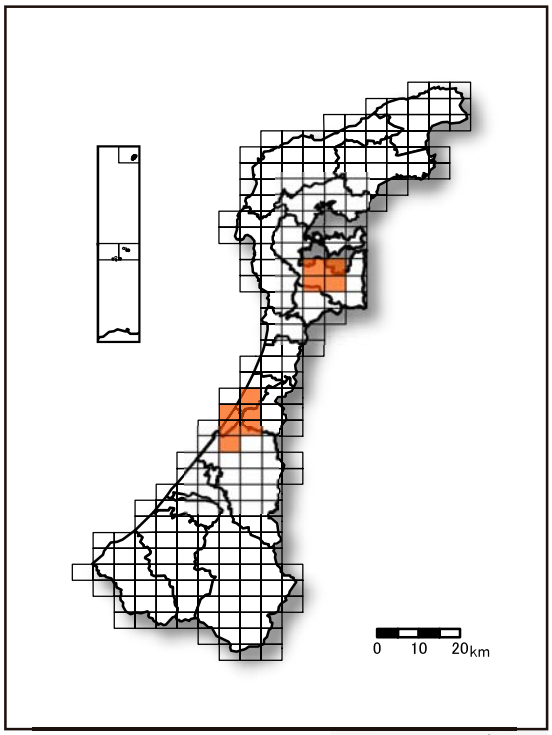
生　　態　水辺の抽水植物帯に生息する。

生息地の条件　水辺のエコトーン。

生存の危機　湿地開発、土地造成。（A）

参考文献
野村卓之・高橋久 2006. 河北潟地域の陸・淡水産貝類相. 河北潟総合研究. 9：7–22.
川端義信 2004. 能登半島産の軟体動物目録. 七尾少年科学館研究報告. 8：43–82.

写真提供者：高橋久



県内の分布

オオタキコギセル

Euphaedusa digonoptyx (Boettger)

マイマイ目キセルガイ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由　県内では稀産。

形　　態　小型のキセルガイ類で殻高は14㎜程度。細長い紡錘形で唇縁は厚く、殻口が体層より突出し、大きく拡がる。

国内分布　本州。

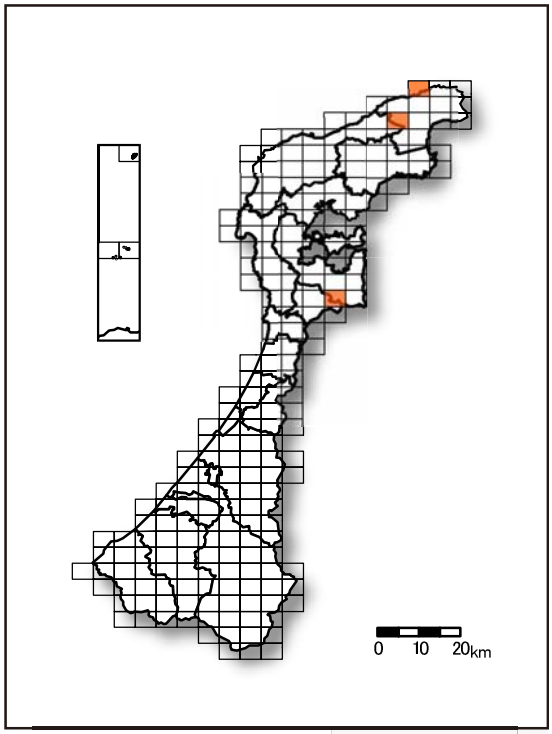
県内分布　詳細不明。

生　　態　鬱蒼とした森林の中にある神社の階段や墓地の墓石などの上を這う。

生息地の条件　森林中あるいは林縁に湿った石やコンクリート構造物があること。

生存の危機　森林伐採など。 (A)

写真提供者：野村卓之



県内の分布

ナミコギセル

Euphaedusa tau (Boettger)

マイマイ目キセルガイ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由　県内では稀産。

形　　態　小型のキセルガイ類で殻高は14㎜程度。細長い紡錘形で唇縁は厚く、殻口が体層よりわずかに突出し、大きく拡がる。

国内分布　本州。

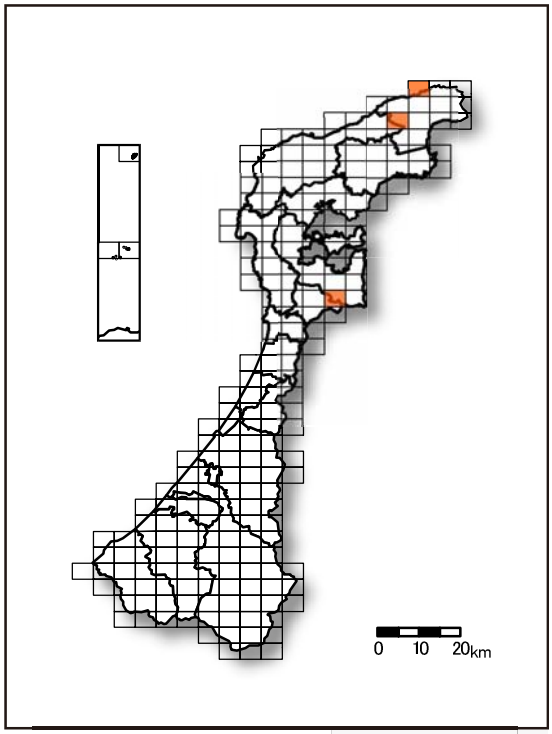
県内分布　詳細不明。

生　　態　鬱蒼とした森林の中にある神社の階段や墓地の墓石などの上を這う。

生息地の条件　森林中あるいは林縁に湿った石やコンクリート構造物があること。

生存の危機　森林伐採など。 (A)

写真提供者：野村卓之



県内の分布

コンボウギセル

マイマイ目キセルガイ科

Mesophaedusa hickonis hickonis (Boettger)

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由 稀種であり県内における既知の生息地が少ない。

形　態 大型のキセルガイ類で殻高は24～32㎜。殻は棍棒状、淡黄褐色で光沢があり、規則的な成長脈がある。

国内分布 本州中部から西部、四国。

県内分布 加賀の山地で確認されている。

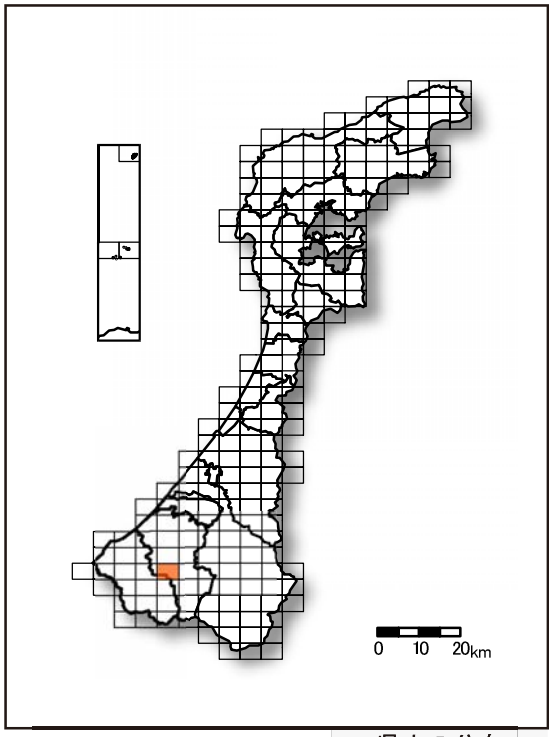
生　態 朽木の中や落ち葉の下から確認される。

生息地の条件 詳細不明。

生存の危機 山地開発。 (A)

参考文献 湊宏・上馬康生 1996. 白山とその周辺の陸産貝類. 石川県白山自然保護センター研究報告23 : 39-50.

写真提供者：野村卓之



県内の分布

オクガタギセル

Mundiphaedusa dorcas (Pilsbry)

マイマイ目キセルガイ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	準絶滅危惧

選定理由 稀種であり県内における既知の生息地が少ない。

形　　態 大型のキセルガイ類で殻高27～30㎜。殻表は平滑だが、光沢は鈍い。

国内分布 房総半島～関東西部～中部地方南部～北陸に分布する。

県内分布 白山山系に分布するとされるが、具体的な産地としては白山市白峰地区（六万山）。

生　　態 落ち葉の堆積中に生息。卵生。

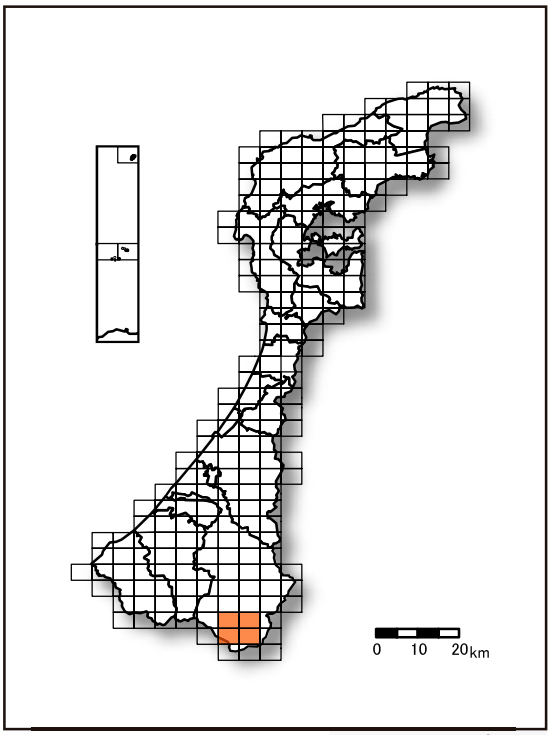
生息地の条件 詳細不明。

生存の危機 山地開発。 (A)

特記事項 福井県RDBでは準絶滅危惧にランクされている。

参考文献 湊宏・上馬康生 1996. 白山とその周辺の陸産貝類. 石川県白山自然保護センター研究報告23：39-50.

写真（図）はありません。



県内の分布

ハゲギセル

Pinguiphaedusa attrita attrita (Boettger)

マイマイ目キセルガイ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由 稀種であり県内における既知の生息地が少ない。

形　態 大型のキセルガイ類で殻高38～40㎜。若い個体の殻は淡黄褐色で光沢があるが、成体は殻皮がはげ落ち、殻頂が脱落する。

国内分布 本州中部。

県内分布 加賀及び能登の山地で確認されている。

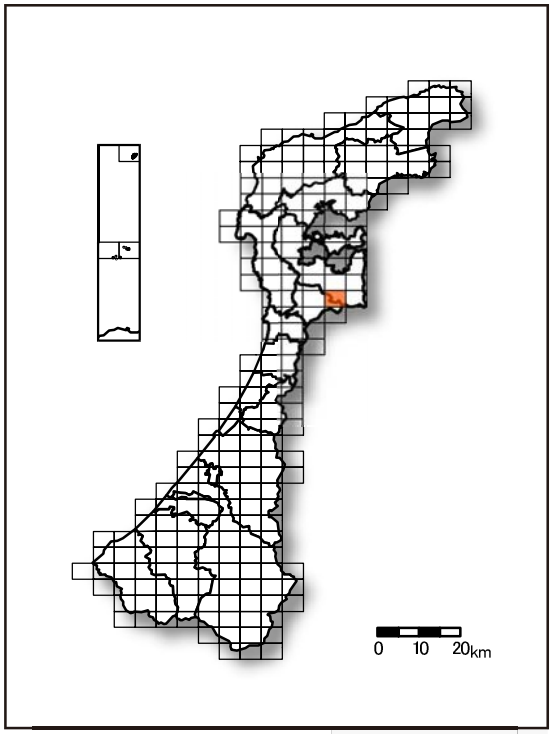
生　態 朽木や落ち葉の下に生息する。

生息地の条件 詳細不明。

生存の危機 山地開発。（A）

参考文献 湊宏・上馬康生 1996. 白山とその周辺の陸産貝類. 石川県白山自然保護センター研究報告23：39–50.

写真提供者：野村卓之



県内の分布

オオコウラナメクジ

Nipponolimax carinatus Yamaguchi & Habe

マイマイ目オオコウラナメクジ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	準絶滅危惧

選定理由 広域に分布するが稀種。比較的自然度の高い森林に生息する。

形　　態 体長50㎜程度。褐色で頭部と触角は黒色。体の前方背面に大きな外套膜の楯を持ち、その後方の背面に著しい稜角がある。

国内分布 本州。

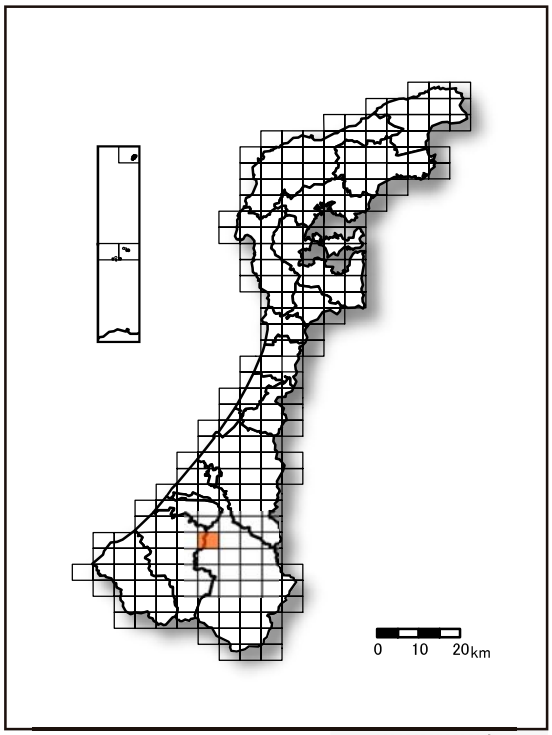
県内分布 加賀の山地で確認されている。

生　　態 落葉広葉樹林などに生息する。

生息地の条件 湿った林床と腐葉土の堆積。

生存の危機 道路・林道整備、森林伐採、土地造成。（A）

写真提供者：野村卓之



県内の分布

ヤマコウラナメクジ

マイマイ目オオコウラナメクジ科

石川県カテゴリー　準絶滅危惧

国カテゴリー　準絶滅危惧

Nipponolimax monticola Yamaguchi et Habe

選定理由　広域に分布するが稀種。比較的自然度の高い森林に生息する。

形　態　体長30㎜程度で青黒色、体の前方背面に大きな外套膜の楯を持ち、その後方の背面に著しい稜角がある。

国内分布　本州。

県内分布　加賀の山地で確認されている。

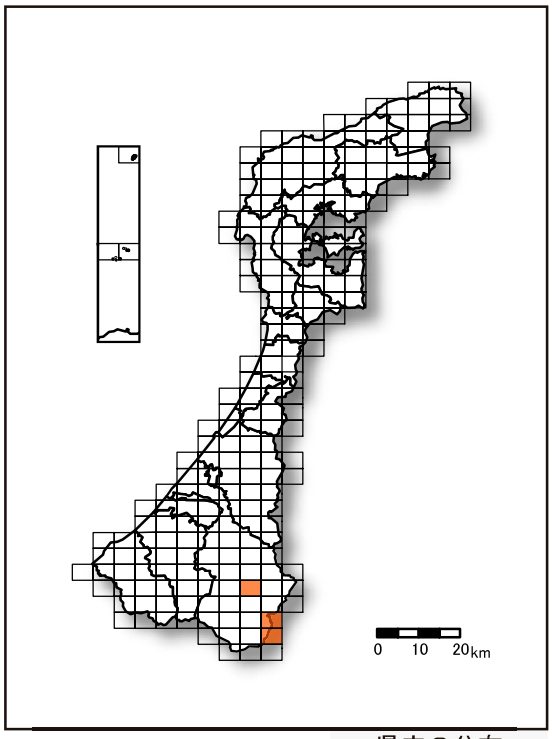
生　態　落葉広葉樹林などに生息する。半樹上性。

生息地の条件　腐葉土の堆積。

生存の危機　道路・林道整備、森林伐採、土地造成。（A）

参考文献　湊宏・上馬康生 1996. 白山とその周辺の陸産貝類. 石川県白山自然保護センター研究報告. 3 : 9–50.

写真提供者：野村卓之



県内の分布

ヒラベッコウガイ

Bekkochlamys micrograpta (Pilsbry)

マイマイ目ベッコウマイマイ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	情報不足

選定理由　稀種であり、県内での確認地点が少ない。

形　　態　殻径9㎜程のやや小型のベッコウガイ。殻はやや扁平で体層は徐々に大きくなり、殻口部はやや広い。殻色は光沢のある黄色。

国内分布　本州、四国、九州。

県内分布　加賀および能登の丘陵部。

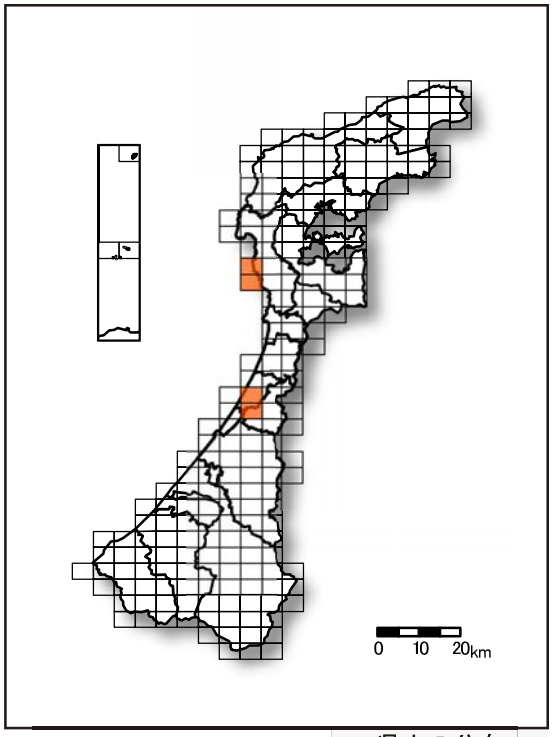
生　　態　落葉広葉樹の林床などに生息する半土壌性。

生息地の条件　落葉の堆積。

生存の危機　森林伐採、土地造成。（A）

参考文献
野村卓之・高橋久 2006. 河北潟地域の陸・淡水産貝類相. 河北潟総合研究. 9：7–22.
川端義信 2004. 能登半島産の軟体動物目録. 七尾少年科学館研究報告. 8：43–82.

写真提供者：野村卓之



県内の分布

クリイロベッコウ

Japanochlamys cerasina (Pilsbry)

マイマイ目ベッコウマイマイ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	情報不足

選定理由 稀種であり、県内の確認地点が少ない。

形　態 殻は小型で殻径8㎜程度。赤みがかった琥珀色。螺塔は低い円錐形で光沢があり繊細な成長線が現れる。

国内分布 東北、中部。

県内分布 加賀の丘陵部。

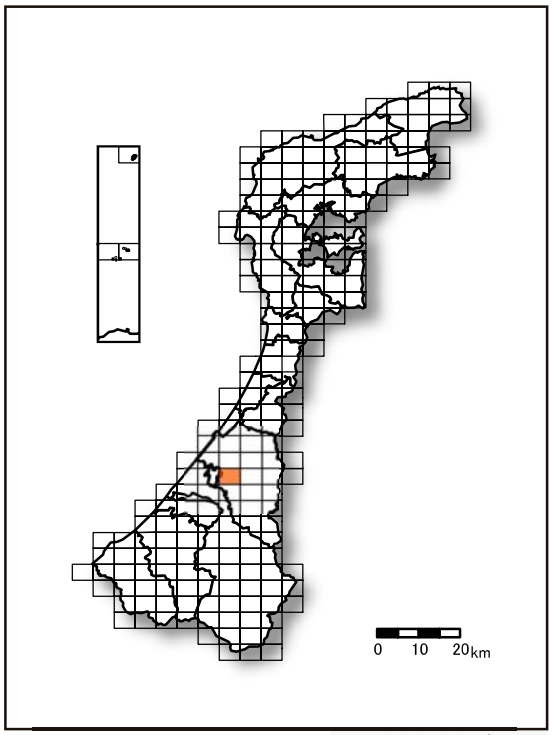
生　態 落葉広葉樹の林床などに生息する半土壌性の種である。

生息地の条件 落葉の堆積があること。

生存の危機 森林伐採、土地造成。（A）

参考文献 野村卓之・高橋久 2008. 石川県の陸・淡水産貝類. しぶきつぼ. 29：45-52.

写真提供者：村上均



県内の分布

カズマキベッコウ

Japanochlamys decens (Pilsbry et Hirase)

マイマイ目ベッコウマイマイ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	情報不足

選定理由 生息域が狭い稀種。

形　態 殻は薄く小型で殻径5㎜程度。やや透明でくすんだ琥珀色。偏球形で螺塔は低円錐形。殻には光沢があり、不規則な皺状成長線がある。

国内分布 新潟県、石川県。

県内分布 加賀の丘陵部。

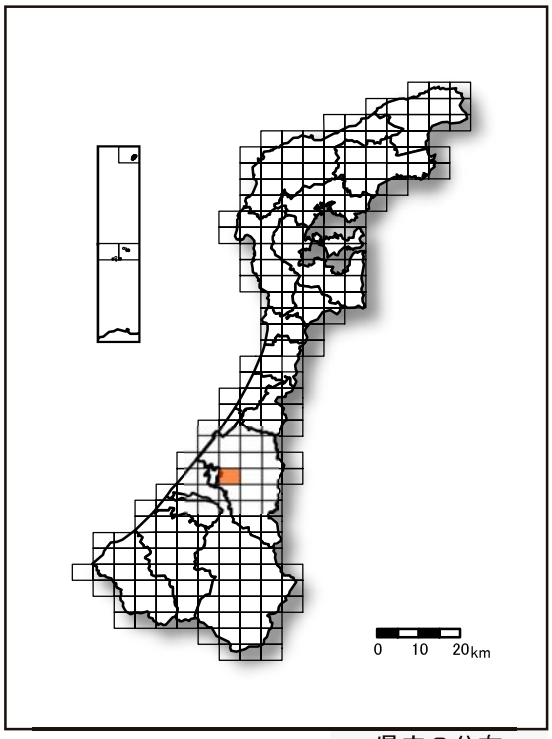
生　態 落葉広葉樹の林床などに生息する半土壌性。

生息地の条件 落葉の堆積があること。

生存の危機 森林伐採、土地造成。（A）

参考文献 野村卓之・高橋久 2008. 石川県の陸・淡水産貝類. しぶきつぼ. 29：45-52.

写真提供者：野村卓之



県内の分布

キヌツヤベッコウ

Nipponochlamys semisericata (Pilsbry)

マイマイ目ベッコウマイマイ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	情報不足

選定理由 稀種であり、県内での確認地点が少ない。

形　　態 殻は小さく殻径5㎜程度で、うすく半透明。暗い赤褐色で、絹のような光沢がある。

国内分布 本州中部～西部、四国。

県内分布 加賀の丘陵部。能登での報告があるが現状は不明。

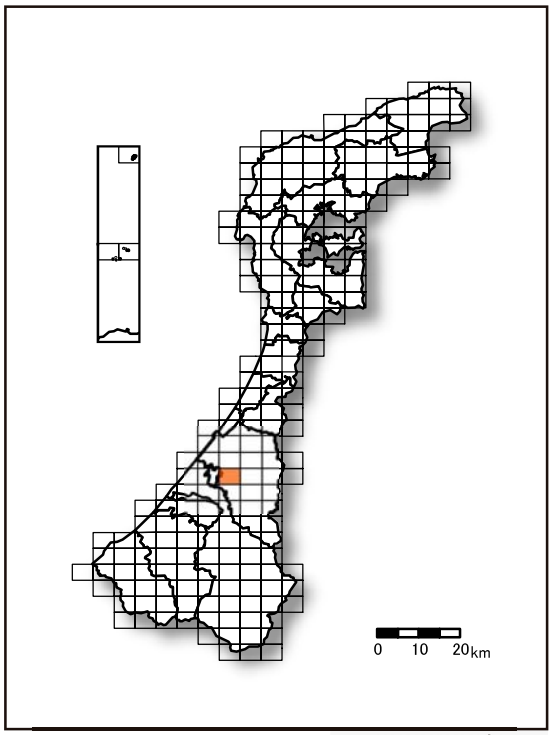
生　　態 落葉広葉樹の林床などに生息する半土壌性。

生息地の条件 落葉の堆積があること。

生存の危機 森林伐採、土地造成。 (A)

参考文献 野村卓之・高橋久 2008. 石川県の陸・淡水産貝類. しぶきつぼ. 29 : 45-52.

写真提供者：野村卓之



県内の分布

ヒメハリマキビ

Parakaliella pagoduloides (Gude)

マイマイ目ベッコウマイマイ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	準絶滅危惧

選定理由　生息環境が限定され生息地における生息密度は低い。

形　態　殻高1.8㎜、殻径2.5㎜、殻は螺塔が高く殻頂は丸い円錐形。殻色は栗褐色で軟体部は青味がかった暗黒色。頭部や触角は黒色。

国内分布　本州（関東北部以西）、四国、九州。

県内分布　現在のところ加賀の丘陵地のみで確認されている。

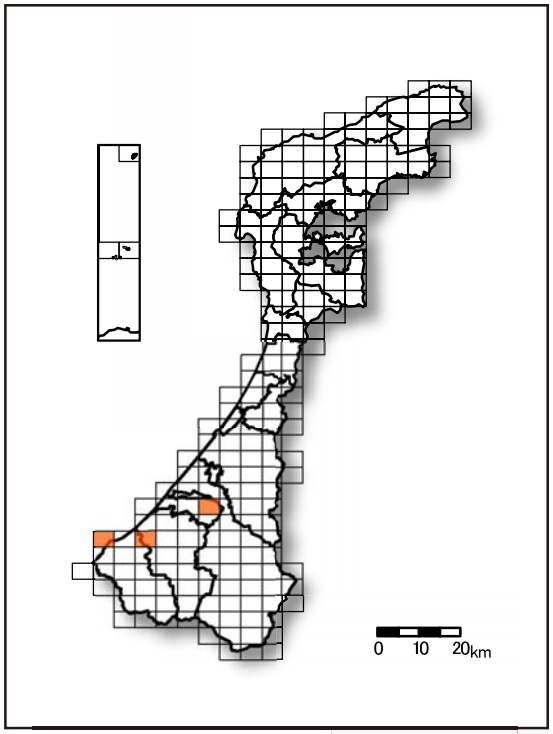
生　態　森林中のやや乾燥気味な腐葉土の堆積した所に生息する。

生息地の条件　下層植生があること。

生存の危機　道路・林道整備、森林伐採。（A）

参考文献　野村卓之・高橋久 2008. 石川県の陸・淡水産貝類. しぶきつぼ. 29：45-52.

写真提供者：野村卓之



県内の分布

スジキビ

Parakaliella ruida (Pilsbry)

マイマイ目ベッコウマイマイ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	準絶滅危惧

選定理由 稀種であり、県内での確認地点が少ない。

形　態 殻高2㎜、殻径3.5㎜。殻は薄質でもろい。体層が膨らみ、規則的な肋状の成長脈がある。周縁は鋭く角張る。

国内分布 東北から中国地方。

県内分布 現在のところ加賀の丘陵地のみで確認されている。

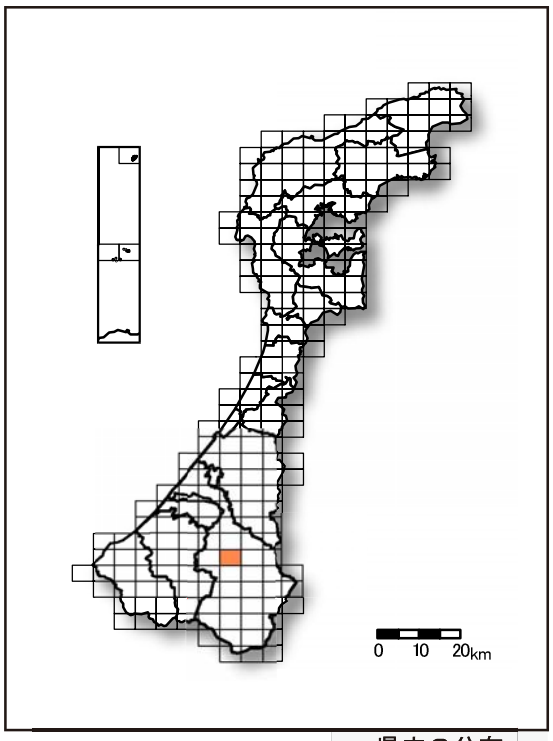
生　態 森林中のやや乾燥気味な腐葉土の堆積した所に生息する。

生息地の条件 保存状態の良い自然林。

生存の危機 道路・林道整備、森林伐採。 (A)

参考文献 野村卓之・高橋久 2008. 石川県の陸・淡水産貝類. しぶきつぼ. 29：45-52.

写真提供者：野村卓之



県内の分布

オオウエキビ

Trochochlamys fraterna (Pilsbry)

マイマイ目ベッコウマイマイ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	情報不足

選定理由　稀種であり、県内の生息状況の詳細が不明。

形　　態　殻高3㎜、殻径2㎜のやや丸みのある円錐形で螺層は膨らむ。

国内分布　本州、四国、九州。

県内分布　詳細は不明だが、近年、金沢市周辺の丘陵地で採集されている。

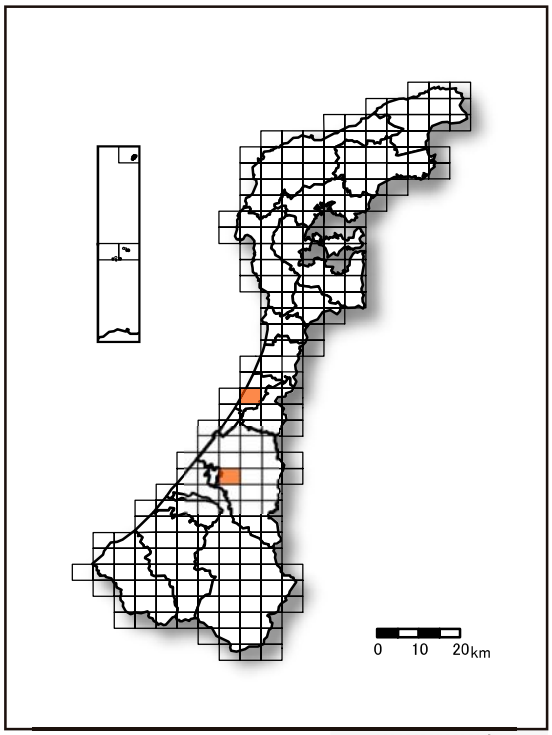
生　　態　森林の林床に生息する。

生息地の条件　発達した森林と下層植生。

生存の危機　森林伐採、土地造成。 (A)

参考文献
野村卓之・高橋久 2008. 石川県の陸・淡水産貝類. しぶきつぼ. 29 : 45-52.
野村卓之・高橋久 2006. 河北潟地域の陸・淡水産貝類相. 河北潟総合研究. 9 : 7-22.

写真提供者：野村卓之



県内の分布

ヒメカサキビ

マイマイ目ベッコウマイマイ科

Trochochlamys subcrenulata subcrenulata (Pilsbry)

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	準絶滅危惧

選定理由 低標高の比較的自然度の高い森林に生息する種である。

形　　態 殻径約3㎜。殻は薄質で、螺塔が低く、体層周縁に強い角を持つ。殻は褐色で光沢がある。

国内分布 本州、四国、九州。

県内分布 加賀と能登の丘陵地で確認されている。

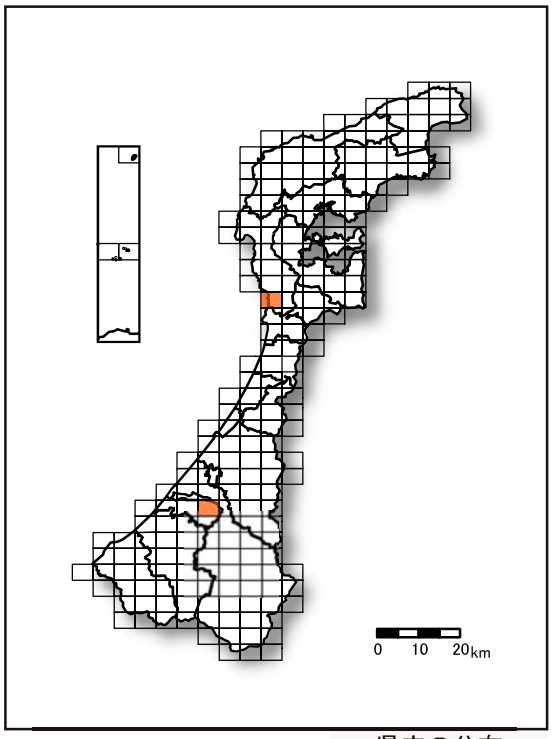
生　　態 森林中のやや乾燥気味な腐葉土の堆積した所に生息する。

生息地の条件 保存状態の良い自然林。

生存の危機 道路・林道整備、森林伐採。 (A)

参考文献 野村卓之・高橋久 2008. 石川県の陸・淡水産貝類. しぶきつぼ. 29 : 45-52.

写真提供者：野村卓之



県内の分布

エチゼンビロウドマイマイ

Nipponochloritis echizenensis (Pilsbry et Hirase)

マイマイ目ニッポンマイマイ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	情報不足

選定理由
比較的自然度の高い森林に生息する種である。

形　態
殻高12㎜、殻径18㎜。殻は淡黄褐色で縫合が深く、体層が急激に膨らむ扁平な球状。殻は薄質で、殻表には先端がカギ状の短毛状の殻皮が密生してビロード状になる。

国内分布
北陸、近畿、中国。

県内分布
加賀の丘陵地～山地で多く確認されている。

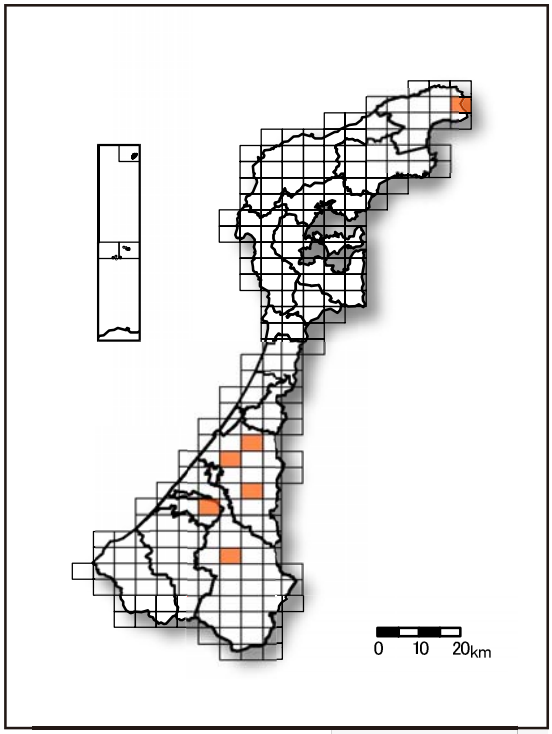
生　態
湿潤な倒木の下や落葉下に生息する。

生息地の条件
保存状態の良い自然林。

生存の危機
道路・林道整備、森林伐採。 (A)

参考文献
野村卓之・高橋久 2008. 石川県の陸・淡水産貝類. しぶきつぼ. 29：45–52.
野村卓之・高橋久 2006. 河北潟地域の陸・淡水産貝類相. 河北潟総合研究. 9：7–22.
南波紀昭 2006. 舳倉島観察会. しぶきつぼ. 27：1–4.

写真提供者：高橋久



県内の分布

ケハダビロウドマイマイ

Nipponochloritis fragilis (Gude)

マイマイ目ニッポンマイマイ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	準絶滅危惧

選定理由　比較的自然度の高い森林に生息する種である。

形　　態　殻高12㎜、殻径18㎜。殻は淡黄褐色で縫合が深く、体層が急激に膨らむ扁平な球状。殻は薄質で、殻表には先端がカギ状の短毛状の殻皮が密生して粗いビロード状になる。

国内分布　北陸、近畿、中国。

県内分布　加賀と能登の丘陵地で確認されている。

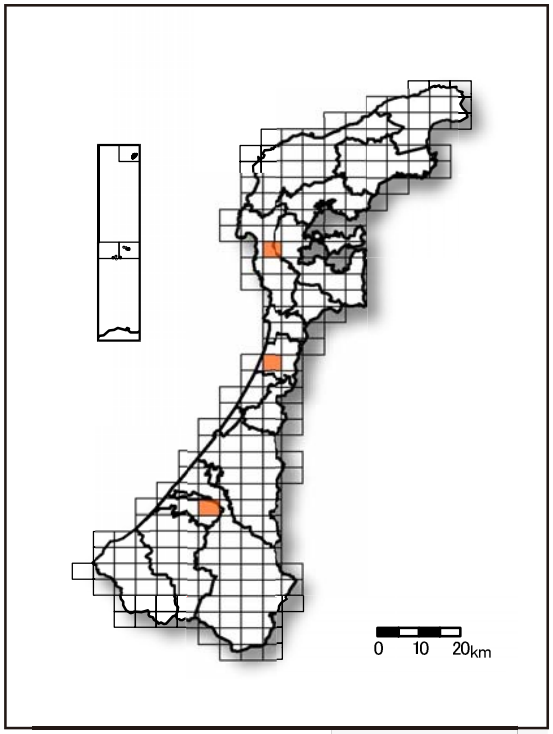
生　　態　湿潤な倒木の下や落葉下に生息する。

生息地の条件　保存状態の良い自然林。

生存の危機　道路・林道整備、森林伐採。（A）

参考文献　野村卓之・高橋久 2008. 石川県の陸・淡水産貝類. しぶきつぼ. 29：45-52.

写真提供者：野村卓之



県内の分布

コシタカコベソマイマイ

Satsuma fusca (Gude)

マイマイ目ニッポンマイマイ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	準絶滅危惧

選定理由 生息地が限定され生息地における生息密度は非常に低い。

形　態 殻径は30～40㎜。螺塔は著しく高い。殻表はなめらかで赤褐色の地に明瞭な黒褐色の色帯を周縁部に持つ。

国内分布 甲信越から北陸、近畿北東部。

県内分布 県内全域の丘陵地～山地。

生　態 広葉樹林などに生息する地上性の種。

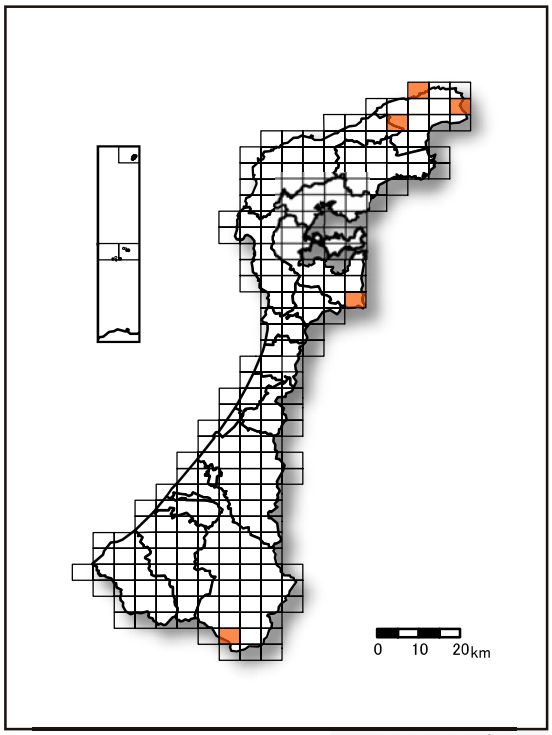
生息地の条件 まとまった樹林があること。

生存の危機 森林伐採。 (A)

参考文献

川端義信 2004. 能登半島産の軟体動物目録. 七尾少年科学館研究報告. 8 : 43-82.
湊宏・上馬康生 1996. 白山とその周辺の陸産貝類. 石川県白山自然保護センター研究報告. 23 : 39-50.

写真提供者:野村卓之



県内の分布

コベソマイマイ

Satsuma myomphala myomphala (Martens)

マイマイ目ニッポンマイマイ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由
県内では稀種であり、生息場所が限定される。また、近年激減している可能性がある。

形　態
殻高25～35㎜の大型種で殻は螺層が膨らみ縫合は深い。臍孔は閉じる。

国内分布
関東以西の本州と四国、九州。

県内分布
能登から加賀にかけての平地および丘陵。

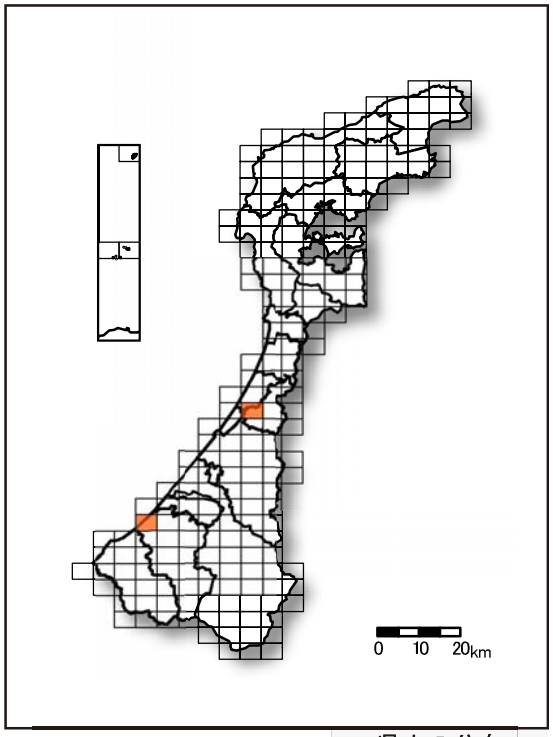
生　態
落葉樹の根元や落葉の下に生息し、活動期には樹上などを這い回る。

生息地の条件
樹木を伴う群落。

生存の危機
里地の開発。 (A)
その他不明の減少要因があるものと思われる。 (D)

参考文献
野村卓之・高橋久 2008. 石川県の陸・淡水産貝類. しぶきつぼ. 29：45-52.
野村卓之・高橋久 2006. 河北潟地域の陸・淡水産貝類相. 河北潟総合研究. 9：7-22.

写真提供者：野村卓之



県内の分布

ヤマタカマイマイ

Satsuma papilliformis (Kobelt)

マイマイ目ニッポンマイマイ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	準絶滅危惧

選定理由
広域に分布し福井県では比較的普通に見られるようであるが、県内での確認数は少なく、比較的自然度の高い森林に生息する。

形　態
殻は殻高31㎜前後、殻径は25㎜前後、螺塔は高く卵形。殻色は淡茶褐色で、周縁に細く淡い茶褐色の色帯がある。軟体部は淡茶褐色。

国内分布
中部、近畿。

県内分布
加賀および能登の丘陵地で確認されている。

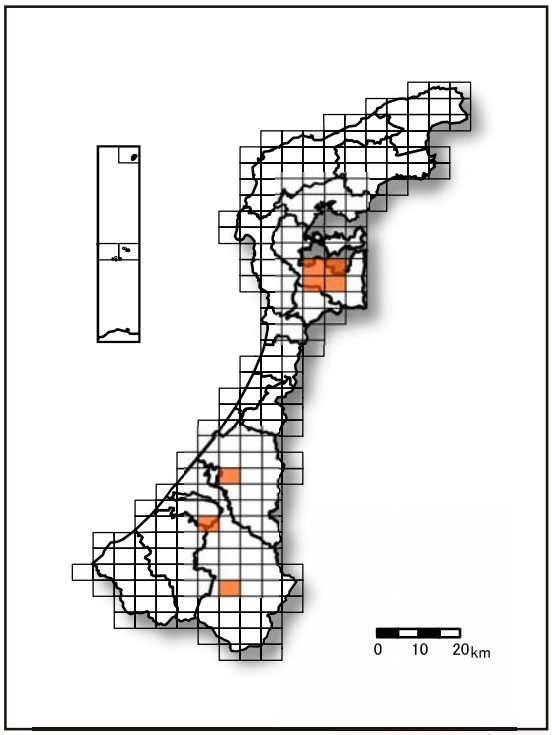
生　態
樹上性。

生息地の条件
落葉広葉樹などの自然林。

生存の危機
道路・林道整備、森林伐採、土地造成。（A）

参考文献
野村卓之・高橋久 2008. 石川県の陸・淡水産貝類. しぶきつぼ. 29：45–52.
川端義信 2004. 能登半島産の軟体動物目録. 七尾少年科学館研究報告. 8：43–82.
湊宏・上馬康生 1996. 白山とその周辺の陸産貝類. 石川県白山自然保護センター研究報告. 23：39–50.

写真提供者：野村卓之



県内の分布

タワラガイ

Sinoennea iwakawa (Pilsbry)

マイマイ目タワラガイ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由　県内では稀産。

形　　態　殻高3～4㎜。昔の米俵に似た白色の樽型であるが殻形は変異に富む。各螺層には多数の板状の強い縦肋がある。軟体部は灰白色。

国内分布　関東以西。

県内分布　能登から加賀にかけての丘陵地。

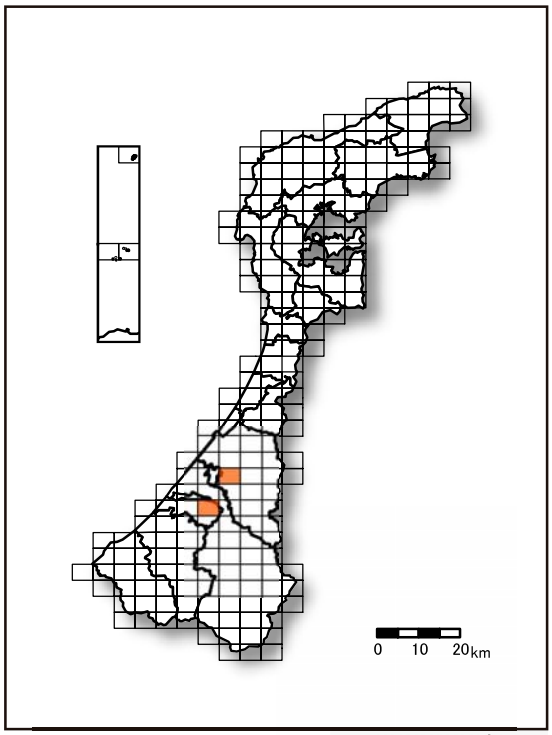
生　　態　丘陵地の樹林内。

生息地の条件　腐葉土の堆積。

生存の危機　森林開発。（A）

参考文献　野村卓之・高橋久 2008. 石川県の陸・淡水産貝類. しぶきつぼ. 29：45-52.

写真提供者：野村卓之



県内の分布

サツマクリイロカワザンショウ類の一種

Angustassiminea sp.

ニナ目カワザンショウガイ科

石川県カテゴリー	情報不足
国カテゴリー	なし

選定理由
未記載種の可能性があるとともに生息環境が限定される種である。

形　態
殻高3㎜前後、サツマクリイロカワザンショウAngustassiminea satsumana（増田・内田，2004）に酷似する。殻質は薄く、軟体が淡黄色。

国内分布
不明。

県内分布
能登の岩礁海岸に割合広く分布する可能性があるが、奥能登先端部においては確認されていない。

生　態
海岸の礫下に生息する。

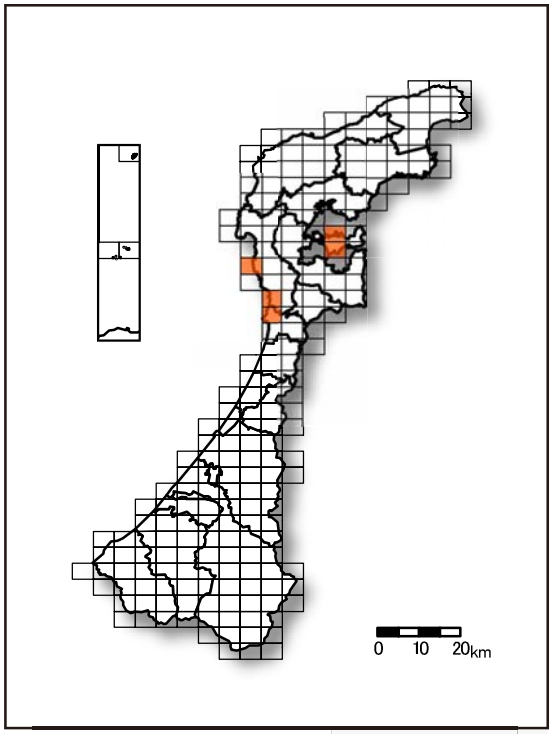
生息地の条件
これまでは転石や砂礫の多い岩礁海岸の陸域で確認されている。

生存の危機
生息状況の詳細が不明である。（D）
海岸開発や海岸の漂着ゴミの増加が生息環境を悪化させている可能性がある。（A）

特記事項
佐藤（2003，2004）が新潟県佐渡市高瀬と八幡で確認した未記載種に形態や生息環境が酷似する。

参考文献
野村卓之・高橋久 2008. 石川県の陸・淡水産貝類. しぶきつぼ. 29：45-52.
増田修・内山りゅう 2004. 日本産淡水産貝類図鑑2　汽水域を含む全国の淡水貝類.

写真提供者：高橋久



県内の分布

ナガナタネガイ

Columella edentula (Draparnaud)

マイマイ目キバサナギガイ科

石川県カテゴリー	情報不足
国カテゴリー	地域個体群

選定理由 北方系の種であり県内では稀種である。

形　態 殻高は2㎜、殻径は0.6㎜程度、やや長い円筒形で殻は黄褐色で光沢がある。軟体は灰黒色。

国内分布 北海道、本州、四国。

県内分布 過去に加賀白山での記録があるが現状は不明である。

生　態 発達した森林の林床に生息する。

生息地の条件 県内では高標高で生息するものと思われる。

参考文献 湊宏・上馬康生 1996. 白山とその周辺の陸産貝類. 石川県白山自然保護センター研究報告23：39-50. .

写真提供者：金安健一

分布図はありません。

県内の分布

ミドリベッコウ

Bekkochlamys kagaensis (Pilsbry et Hirase)

マイマイ目ベッコウマイマイ科

石川県カテゴリー	情報不足
国カテゴリー	情報不足

選定理由　比較的稀種で県内の分布状況が不明。

形　態　殻高12㎜、殻径17㎜程度でベッコウマイマイ属としてはやや大型の種。殻はうすく緑がかった黄褐色で光沢が強い。

国内分布　本州の中部以西、九州。

県内分布　加賀地域の山地。

生　態　広葉樹林の落葉層中から多く見出される。

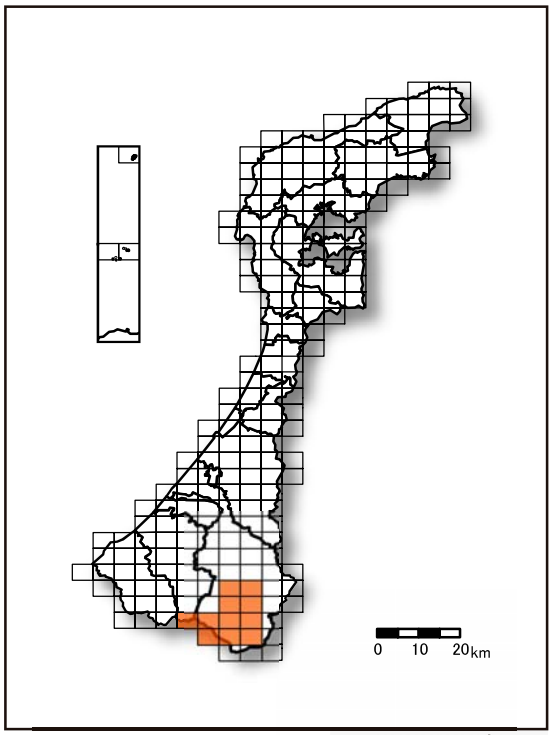
生息地の条件　落葉の堆積。

生存の危機　道路・林道整備、森林伐採。（A）

特記事項　加賀白山が模式山地となっているが、筆者らは県内では確認していない。

参考文献
湊宏・上馬康生 1996. 白山とその周辺の陸産貝類. 石川県白山自然保護センター研究報告. 23：39–50.
環境省自然環境局 2002. 生物多様性調査生物分布調査報告書（陸産および淡水産貝類）.

写真提供者：村上均



県内の分布

ハクサンベッコウ

Nipponochlamys hakusanus (Pilsbry et Hirase)

マイマイ目ベッコウマイマイ科

石川県カテゴリー	情報不足
国カテゴリー	情報不足

選定理由 稀種で県内の生息状況が不明。

形　　態 殻は小型で殻径7.5㎜程度。うすく半透明。光沢がある赤褐色。

国内分布 本州。

県内分布 白山地区。現在の状況は不明。

生　　態 落葉の堆積しているスギ林や原生林。

生息地の条件 転落葉の堆積があること。

生存の危機 森林伐採、土地造成。（A）

参考文献 湊宏・上馬康生 1996. 白山とその周辺の陸産貝類. 石川県白山自然保護センター研究報告. 23：39-50.

写真（図）はありません。

分布図はありません。

県内の分布

ハクサンケマイマイ

マイマイ目オナジマイマイ科

Aegista hakusanensis M.Azuma et Y.Azuma

石川県カテゴリー　情報不足

国カテゴリー　なし

選定理由　極めて稀種で現状が不明。

形　　態　殻径6.5㎜のやや高い円錐形。殻は薄い。

国内分布　石川県（白山）。

県内分布　白山の高度2350～2400mで採集されている。

生　　態　不明。

生息地の条件　不明。

生存の危機　登山道の開発や登山による人為的影響全般。（A）

特記事項　原記載では1個体のみが採集されている。2005年発行の環境レッドデータブックでは情報不足に選定されているが、2007年の見直しにおいてはランク外となった。

参考文献　湊宏・上馬康生 1996. 白山とその周辺の陸産貝類. 石川県白山自然保護センター研究報告. 23：39–50.

写真（図）はありません。

分布図はありません。

県内の分布

8．淡水産貝類

1　石川県の淡水産貝類相

淡水産貝類（汽水産の種を含む）の国内生息種数については、環境省の種の多様性調査（動物分布調査）における対象種一覧（環境省 2002）には 215 種（亜種を含む）があげられている。そのうち、2007 年に改訂された国の貝類レッドリストでは 96 種がリストアップされている。

先の「いしかわレッドデータブック〈動物編〉2000」においては、淡水産貝類は独立の項目としてとり上げられておらず、また当時の「その他の動物分野」の項（同書 146～147 ページを参照）においても選定種は皆無であった。これには、以下の理由があげられている。

①県内全域の状況を把握するにはまだ情報が不十分で、特に個体数の少ない種の県内分布がよくわかっていない。

②選定対象として検討すべきものがあるが（例えば、カラスガイ）、過去の文献に記載されている場所の位置が不明である。

今回の「いしかわレッドデータブック〈動物編〉2009」の改訂作業の中で、現地調査を進め、最近の分布情報と過去の文献情報を整理した。その中には、高橋 久氏を中心に行われた河北潟周辺の外来種を含む貝類調査（野村・高橋 2006）や筆者によるイシガイ類調査（石原 2008，2009）の記録が含まれる。暫定的ではあるが、石川県に生息する淡水産貝類を整理したところ表 1 に示す 44 種があげられた。

ここでは、淡水産貝類には環境省（2002）の陸産及び淡水産貝類の対象種一覧に従い、汽水産貝類として扱われたものも含めている。したがって、本項でとり上げる貝類には、以下のものが含まれることになる。

①水路、溜池、湖沼に生息するカワニナ、タニシ類、イシガイ類

②河川渓流域の飛沫帯に生息するニクイロシブキツボ、ナタネミズツボ

③河川の河口近くの汽水域で見られるイシマキガイ、カワザンショウガイ、ウミニナ類

北陸地方では、富山県で約 30 種、福井県で 40 種の淡水産貝類が記録されているので、ようやく石川県においても同程度に淡水産貝類相が判明したと言える。まず、イシガイ類（カワシンジュガイ科とイシガイ科）の知見が飛躍的に増加した。イシガイ類は黒色の殻を持つ二枚貝であるため、一般には「カラスガイ」や「タガイ（タンガイ）」などと通称されるが、石川県には少なくとも 10 種のイシガイ類が生息することが判明した。能登地方では氷河期の遺存種であるカワシンジュガイが現存することが判明した。柴山潟や邑知潟では、特に周辺の水路にイシガイ類の多産する場所があることが判明した。特に、邑知潟ではカラスガイやカタハガイを含む 5 種ものイシガイ類が見られ、北陸有数のイシガイ類の多様性が高い場所として評価される。

地理的分布では、能登地方で見られるナタネミズツボが国内では他に、佐渡島に分布することが注目される。イシガイ類のカタハガイは主に西日本に分布することから、県内の個体群は東限（北限）のものとして貴重である。

一方で、多くの外来種が既に石川県内に侵入していることが判明した。巻貝類ではサカマキガイ以外にコモチカワツボ、ハブタエモノアラガイ、インドヒラマキガイ、二枚貝類ではタイワンシジミ、カワヒバリガイ、コウロエンカワヒバリガイが外来種である。中でも、カワヒバリガイは外来生物法（特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律）で特定外来生物に指定されている。

表１　石川県の淡水産貝類リスト

科　名	種　名（和　名）
アマオブネ科	イシマキガイ
タニシ科	マルタニシ、オオタニシ、ヒメタニシ
イツマデガイ科	ニクイロシブキツボ、ナタネミズツボ
ミズツボ科	ホソミジンツボ、コモチカワツボ
ミズゴマツボ科	ミズゴマツボ
カワザンショウガイ科	カワザンショウガイ
カワニナ科	カワニナ、チリメンカワニナ
ウミニナ科	ウミニナ、ホソウミニナ
サカマキガイ科	サカマキガイ
モノアラガイ科	ヒメモノアラガイ、モノアラガイ、ハブタエモノアラガイ
ヒラマキガイ科	カワネジガイ、ヒダリマキモノアラガイ、クロヒラマキガイ、ヒラマキミズマイマイの一種、ヒラマキガイモドキ、インドヒラマキガイ、ヒラマキガイ科の一種（*Menetus* 属の一種）
カワコザラガイ科	カワコザラガイ、コビトノボウシザラガイ
イガイ科	カワヒバリガイ、コウロエンカワヒバリガイ
カワシンジュガイ科	カワシンジュガイ
イシガイ科	ドブガイ（※）、フネドブガイ、マルドブガイ、カラスガイ、マツカサガイ、ヨコハマシジラガイ、カタハガイ、イシガイ、オバエボシガイ
シジミ科	ヤマトシジミ、マシジミ、タイワンシジミ
マメシジミ科	フクイマメシジミ
ドブシジミ科	ドブシジミ

※　ヌマガイとタガイを含む。

2　種の選定基準

今回「いしかわレッドデータブック〈動物編〉2009」の改訂版で新たに淡水産貝類のリスト種を選定するにあたり、主として国の改訂版・貝類レッドリスト（2007）を参考としたが、選定基準は以下に拠った。

絶滅危惧Ⅰ類にランクされた種のうち、カワネジガイとヒダリマキモノアラガイの２種については、県内でも十分な調査が行われたと言い難いが、国内ではほぼ絶滅状態にある。ナタネミズツボ、カワシンジュガイ、カタハガイについては、国内分布を考慮して絶滅危惧Ⅰ類にランクした。カタハガイについては他の４種に比べると生息個体数はやや多いと考えられるが、水路という改変されやすい環境に生息するので、絶滅危惧Ⅰ類にランクした。

（選定基準）

a.改訂版・貝類レッドリスト（2007）の掲載種で、国内における地理的分布を考慮して分布の境界域にあたる種についてはランクを高めに設定した。

b.石川県では比較的普通種と考えられる種はとり上げなかった。

例、マルタニシ、オオタニシ、モノアラガイ。

c.移入種はとり上げなかった。例、マルドブガイ。

d.同定上の問題のある種は保留した。

例、ヒラマキミズマイマイ（類似の在来種がいる可能性がある：ヒメヒラマキミズマイマイ）、ホソミジンツボ。

この結果、表２に示す 18 種が今回の改訂版にランクされた。種数では、石川県産淡水貝類の約４割にあたる結果となった。生息情報が不足する部分が多いため、今後の調査が求められる。特に、潟湖の調査で

は周辺の水路で調査が進んだが、潟の本体では調査が困難なこともあり、十分な調査が行われていない。カワシンジュガイについては、県内における分布状況を精査し、地理的遺伝変異の情報も含めて県内における現状を早急に把握する必要がある。今後、県の希少野生動植物種としての指定も視野に入れたい。

新たな生息情報が得られた場合には、自然保護課または筆者に寄せられるように望みたい。

表２　淡水産貝類選定種一覧

区　分	淡 水 産 貝 類	種類数
絶滅	―	―
絶滅危惧Ⅰ類	ナタネミズツボ、カワネジガイ、ヒダリマキモノアラガイ、カワシンジュガイ、カタハガイ	5
絶滅危惧Ⅱ類	カラスガイ、ヨコハマシジラガイ	2
準絶滅危惧	イシマキガイ、ニクイロシブキツボ、カワザンショウガイ、ウミニナ、マツカサガイ、イシガイ、マシジミ	7
情報不足	ヒラマキガイモドキ、ホソウミニナ、オバエボシガイ、ヤマトシジミ	4
地域個体群	―	―
計		18

謝辞

標本の同定と生息情報・文献の収集にあたりまして、多くの方々（機関）からご協力をいただきました。ここにご芳名を記して感謝いたします。

岐阜県博物館、近藤高貴、徳本洋、西村三郎、のと海洋ふれあいセンター、長谷川巖、湊宏、山本邦彦（敬称略、アイウエオ順）

（石原　一彦）

新旧対応表

		前回						0
		絶滅 0	絶滅危惧Ⅰ類 0	絶滅危惧Ⅱ類 0	準絶滅危惧 0	情報不足 0	地域個体群 0	カテゴリー外 18
今回	絶滅 0							
	絶滅危惧Ⅰ類 5							ナタネミズツボ カワネジガイ ヒダリマキモノアラガイ カワシンジュガイ カタハガイ
	絶滅危惧Ⅱ類 2							カラスガイ ヨコハマシジラガイ
	準絶滅危惧 7							イシマキガイ ニクイロシブキツボ カワザンショウガイ ウミニナ マツカサガイ イシガイ マシジミ
	情報不足 4							ヒラマキガイモドキ ホソウミニナ オバエボシガイ ヤマトシジミ
18	地域個体群 0							
	カテゴリー外 0							

ナタネミズツボ

Fukuia minima (Bartsch)

ニナ目イツマデガイ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類
国カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類

選定理由
日本固有種であり、既知の生息地が佐渡島と能登半島に限られるが、能登における生息環境が悪化しているため。

形　態
殻高3㎜程度の塔形の巻貝で、緑黄褐色を呈した半透明の殻を持つ。二次的な付着物により、殻の外観はほとんど黒褐色のこともある。軟体はほぼ黒色で、口器は幅広い。水中にいる生体を観察すると触角の基部に眼点が見える。

国内分布
佐渡島と能登半島北部。

県内分布
志賀町（富来地区）、輪島市（輪島地区、門前地区）、能登町（柳田地区）。

生　態
湧水が滴る湿岩帯や渓流の岩肌、石上に生息。

生息地の条件
まとまった広さをもつ湿岩帯の存在。

生存の危機
道路工事に伴う湿岩帯の消失。水脈の消失。（A, D）

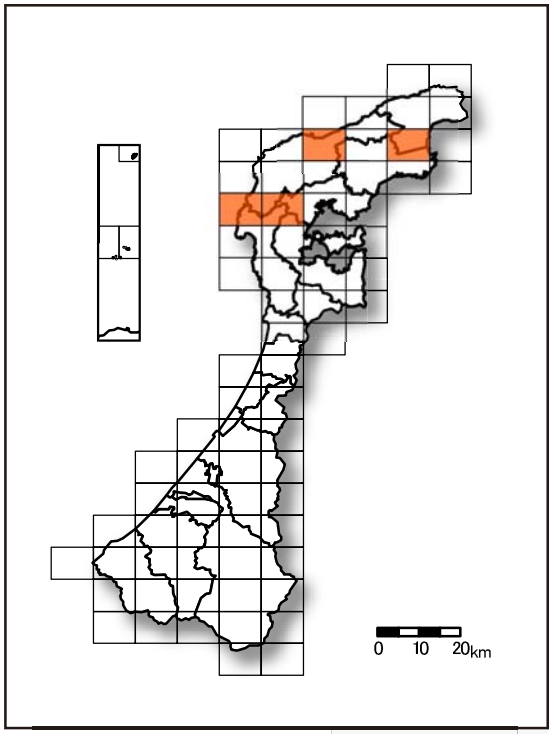
特記事項
これまで海岸近くに生息地が多いとされてきたが、能登地方では山間部にも生息地があることが判明した。水中で生体を観察すると「触角の基部に眼点がある」ことがわかり、従来の文献記録とは異なる特徴が見られる。

参考文献

増田修 2005. ナタネミズツボ. 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 6　陸・淡水産貝類：175.

増田修・内山りゅう 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類. 240pp. ピーシーズ. 東京.

写真提供者：石原一彦



県内の分布

カワネジガイ

Camptoceras terebra hirasei Walker

モノアラガイ目ヒラマキガイ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類
国カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類

選定理由　全国的に生息地が激減しているため。

形　　態　殻は左巻きで、殻高10㎜、殻径3㎜ほどで著しく細長い。

国内分布　本州（山形県から岡山県にかけて）、四国、九州での報告がある。

県内分布　柴山潟からの古い記録があるが、最近の生息状況は不明。

生　　態　潟湖などの止水的環境下で水面直下～水深1m位に生息。堆積した落葉や枯れ枝、水草の茎に付着している。

生存の危機　潟湖の改修工事と水質汚濁。（A）

特記事項　溜池に生息する場合もあるので、石川県においても今後調査が必要である。

参考文献

松田征也 2000. カワネジガイ. 日本の希少な野生水産生物に関するデータブック（水産庁編）：30-31.

増田修 2005. カワネジガイ. 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 6　陸・淡水産貝類：79.

増田修・内山りゅう 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類. 240pp. ピーシーズ. 東京.

湊宏 1993. 文献にみるカワネジガイの記録. 南紀生物. 35(2)：154-156.

写真（図）はありません。

分布図はありません。

県内の分布

ヒダリマキモノアラガイ

Culmenella rezvoji (Lindholm)

モノアラガイ目ヒラマキガイ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類
国カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類

選定理由　全国的に生息地が激減しているため。

形　態　殻は左巻きで、殻高6㎜、殻径3㎜ほどの縦長に巻くヒラマキガイ類である。

国内分布　本州（青森県から大阪府）、最近では全国的に再確認がほとんど不可能な状態に至っている。

県内分布　柴山潟からの古い記録があるが、最近の生息状況は不明。

生　態　潟湖などの止水的環境下に生息。堆積した落葉や枯れ枝、水草の茎に付着している。

生存の危機　潟湖の改修工事と水質汚濁。（A）

特記事項　カワネジガイと同時に採集されることがある。石川県においても今後の調査が必要である。

参考文献

松田征也 2000. ヒダリマキモノアラガイ. 日本の希少な野生水産生物に関するデータブック（水産庁編）：32-33.
増田修 2005. ヒダリマキモノアラガイ. 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 6　陸・淡水産貝類：80.
増田修・内山りゅう 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類. 240pp. ピーシーズ. 東京.

写真（図）はありません。

分布図はありません。

県内の分布

カワシンジュガイ

Margaritifera laevis (Haas)

イシガイ目カワシンジュガイ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類
国カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類

選定理由
国内の分布状況から考えて石川県における生息地は極めて重要であるが、県内生息地（奥能登地方）における生息環境が悪化しており、早急な対策が望まれるため。

形　態
殻は長卵形で殻長は10㎝を越える個体もいる。イシガイ科の種とは異なり、軟体部（特に足の先端）が茶褐色である。

国内分布
北海道と本州。ただし、福井県以西では絶滅したと考えられる場所が多い。

県内分布
2008年の調査で輪島市山間部の小河川において生息が確認された。羽咋市と七尾市からも情報があるが現状不明。

生　態
ヤマメ等のサケ科魚類の鰓に幼生が寄生する。輪島市の生息地では生貝は河川の砂礫底に生息。

生息地の条件
生貝が潜る砂礫底と幼生が寄生するヤマメの存在。生息地では最高水温が20℃を越えないことが重要。

生存の危機
河川上流域の開発。奥能登地方里山の過疎化。（A, B）

特記事項
「福井県レッドデータブック（動物編）」（2002）では「絶滅」にランクされており、北陸地方で生息が確実なのは奥能登地方のみである。早急に生息状況の把握が求められる。岐阜県では、生息地が天然記念物に指定されている場所がある。

参考文献

福井県 2002. 福井県の絶滅のおそれのある野生動物：230-238.
石原一彦 2009. 石川県能登半島で見つかったカワシンジュガイ. ちりぼたん. 39（2）：131-132.（淡水貝類研究会第14回研究集会講演要旨）.
近藤高貴 2005. カワシンジュガイ. 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 6 陸・淡水産貝類：301.
近藤紀巳・大森清孝・後藤常明 1993. 岐阜県におけるカワシンジュガイの生息状況. 岐阜県博物館調査研究報告. (14)：11-18.
輪島市 1973. 輪島市史 資料編第5巻自然環境資料.

写真提供者：石原一彦

分布図はありません。

県内の分布

カタハガイ

Pseudodon omiensis (Heimburg)

イシガイ目イシガイ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類
国カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類

選定理由
国内分布から考えて石川県の生息地は多くないと推測されるが、本種の生息地である水路の生息環境が悪化しているため。

形　態
殻は長卵形で後背縁に放射状の肋がある。殻の内側にある後側歯が弱いことがイシガイ科の他の小型種との区別点である。殻長は最大で90㎜に達する。

国内分布
愛知県以西に分布。日本海側では富山県まで記録あるが、富山県では絶滅したとみられ、生息確実な東限は石川県。

県内分布
邑知潟周辺と志賀町（志賀地区、富来地区）の水路。

生　態
小川や水路の砂泥底に生息する。

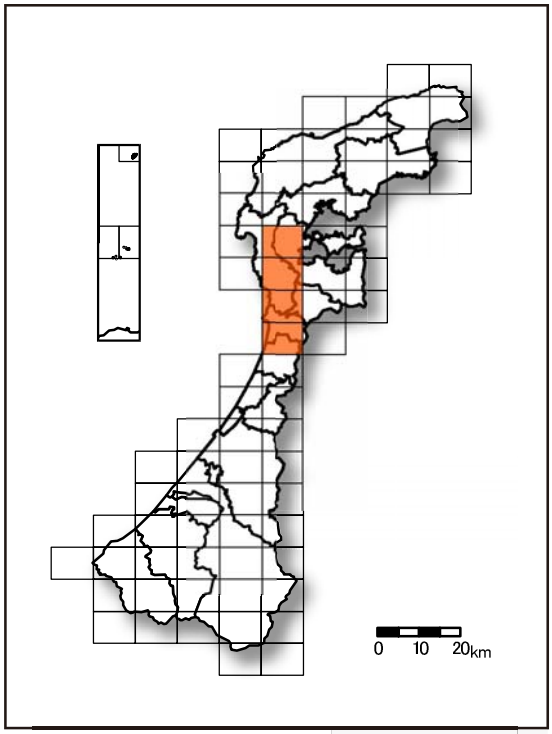
生息地の条件
生貝が潜る砂泥底と幼生が寄生する魚類（ハゼ類など）の存在が条件。

生存の危機
水路の改修工事による砂泥底の消失。外来魚の侵入により幼生の寄主となる魚類がいなくなること。（A, C）

特記事項
石川県の個体群は東限（北限）域にあたる。

参考文献
石原一彦 2008. 石川県邑知潟周辺の水路で見られるイシガイ類（予報）. ちりぼたん. 39（1）：55–56.（淡水貝類研究会第13回研究集会講演要旨）.
近藤高貴 2005. カタハガイ. 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 6　陸・淡水産貝類：356.
近藤高貴 2008. 日本産イシガイ目貝類図譜. 日本貝類学会特別出版物第3号. 69pp. 日本貝類学会
富山県 2002. 富山県の絶滅のおそれのある野生生物ーレッドデータブックとやまー.

写真提供者：石原一彦



県内の分布

カラスガイ

Cristaria plicata (Leach)

イシガイ目イシガイ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類
国カテゴリー	準絶滅危惧

選定理由
水路の改修工事により生息環境が悪化しているため。

形　態
殻は後背縁が張り出した卵円形。幼貝では後背縁の翼状突起が特に発達する。県内では殻長が20cmを越える個体も見つかっている。殻の内側に弱い後側歯のあることがドブガイ類との識別点となる。

国内分布
本州と北海道。

県内分布
柴山潟のほか、2008年初めに邑知潟の水路でも生息が確認された。今江潟干拓地でも死殻が得られている。

生　態
水路の砂泥底に生息する。

生息地の条件
生貝が潜る砂泥底と幼生が寄生する魚類（ハゼ類など）の存在が条件。

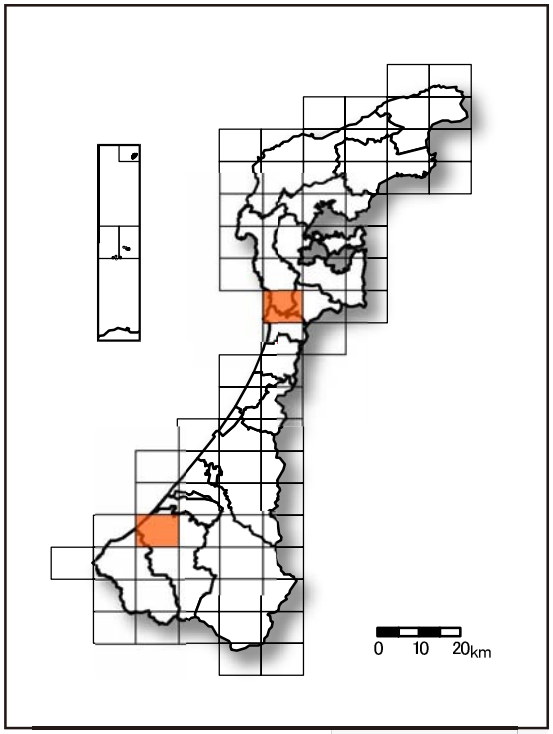
生存の危機
水路の改修工事による砂泥底の消失。外来魚の侵入により幼生の寄主となる魚類がいなくなること。（A, C）

特記事項
柴山潟と邑知潟では水路以外の生息状況が不明であるため、潟本体における調査が必要である。ドブガイ等と混同されていることが多いので、既存情報については精査が必要である。

参考文献

近藤高貴 2005. カラスガイ. 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 6　陸・淡水産貝類：355.
近藤高貴 2008. 日本産イシガイ目貝類図譜. 日本貝類学会特別出版物第3号. 69pp. 日本貝類学会
増田修・内山りゅう 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類. 240pp. ピーシーズ. 東京.

写真提供者：石原一彦



県内の分布

ヨコハマシジラガイ

Inversiunio jokohamensis (Ihering)

イシガイ目イシガイ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類
国カテゴリー	準絶滅危惧

選定理由
水路の改修工事により生息環境が悪化しているため。

形　態
類似のマツカサガイと比較すると、殻頂付近に顆粒状の模様があり、後背縁の放射状模様は不明瞭。しかし、殻の表面が摩耗した個体では区別が困難なことがある。

国内分布
山陰地方・近畿地方東部から北海道南部。

県内分布
邑知潟周辺、志賀町（志賀地区）、珠洲市。

生　態
水路の砂泥底に生息する。

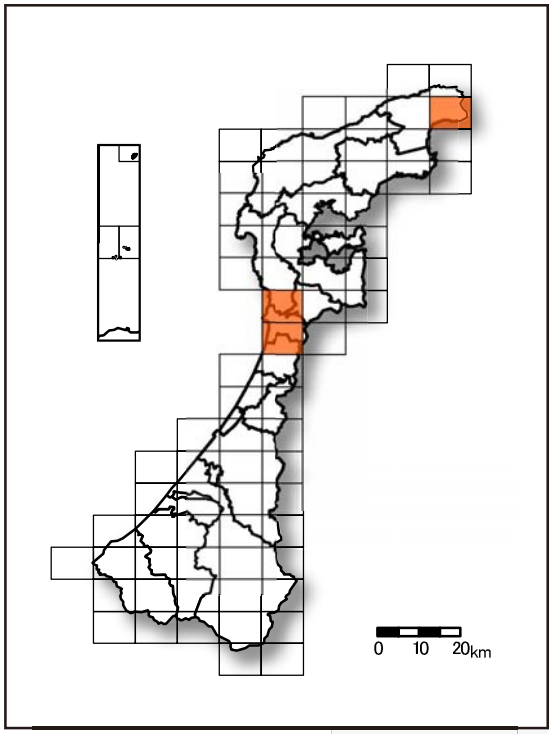
生息地の条件
生貝が潜る砂泥底と幼生が寄生する魚類（ハゼ類など）の存在が条件。

生存の危機
水路の改修工事による砂泥底の消失。外来魚の侵入により幼生の寄主となる魚類がいなくなること。（A, C）

参考文献

石原一彦 2008. 石川県邑知潟周辺の水路で見られるイシガイ類（予報）. ちりぼたん. 39（1）：55-56.（淡水貝類研究会第13回研究集会講演要旨）.
Kondo, T. 1998. Revision of the Genus *Inversiunio* (Bivalvia : Unionidae). VENUS. 57（2）：85-93.
近藤高貴 2008. 日本産イシガイ目貝類図譜. 日本貝類学会特別出版物第3号. 69pp. 日本貝類学会
増田修・内山りゅう 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類. 240pp. ピーシーズ. 東京.

写真提供者：石原一彦



県内の分布

イシマキガイ

Clithon retropictus (Martens)

オキナエビス目アマオブネ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由
本種は回遊型であり、幼生の生息環境である汽水域の生息環境が悪化しているため。

形　態
殻はほぼ球形で、成貝では殻経15～20㎜になる。成貝では殻頂部が浸食されていることが多い。殻表面は緑褐色から黒褐色で微少な三角形模様が密にある。

国内分布
房総～新潟県以南のほぼ全域に分布。

県内分布
川北町、手取川、志賀町（富来地区）、七尾市、能登町、珠洲市。珠洲市では河川に通じる水路内で本種が多産する例が知られている。

生　態
汽水域上部～淡水域に生息。産卵は岩礫上やコンクリート表面で行われ、卵嚢は長径1～2㎜の楕円形。孵化した幼生は一度海に下り、幼貝となって遡上してくる。

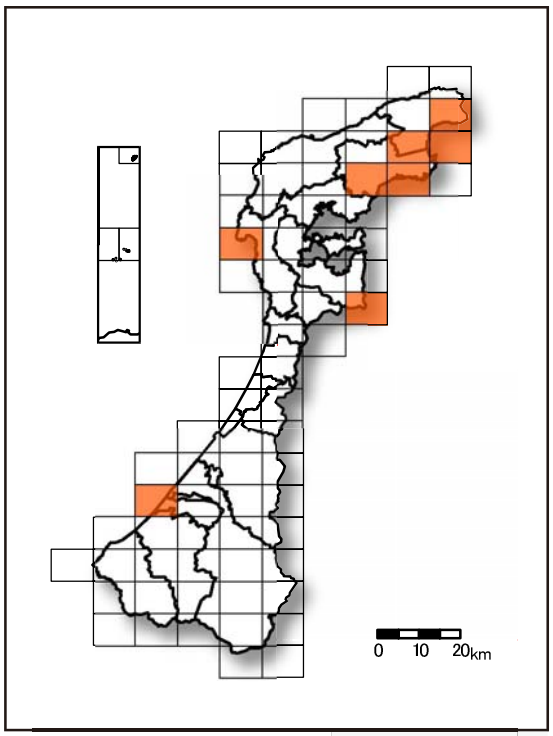
生息地の条件
幼生の生息環境である汽水域と産卵基質となる石などの存在。

生存の危機
工事による汽水環境の消失、水質悪化。（A）

特記事項
「水産庁レッドデータブック」（1998）では「減少種」にランクされている。

参考文献
増田修・内山りゅう 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類. 240pp. ピーシーズ. 東京.
西村三郎 1996. イシマキガイ. 日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料（Ⅲ）：3-7、79. （社）日本水産資源保護協会.

写真提供者：石原一彦



県内の分布

ニクイロシブキツボ

ニナ目イツマデガイ科

Fukuia kurodai kurodai Abbott et Hunter

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	準絶滅危惧

選定理由　生息環境が限定され生息地における生息密度は低い。

形　　態　殻高9㎜、殻径5㎜、螺層は6層。軟体部は黄褐色、殻は卵状の円錐形、光沢のある赤褐色。

国内分布　秋田県から兵庫県にかけての日本海側の山地。

県内分布　能登および加賀山間部より生息報告がある。

生　　態　渓流の源流部の水が滴り落ちるような崖地にみられる。

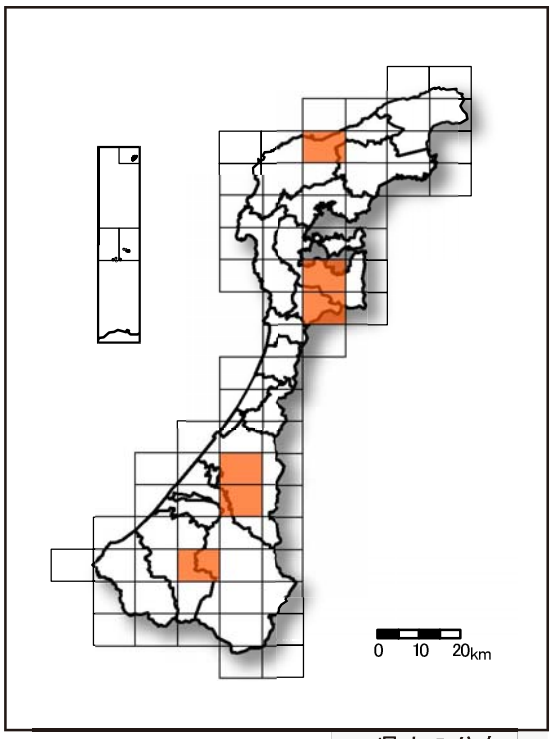
生息地の条件　常に飛沫がかかる岩肌や渓流の水際の垂直な崖の存在。

生存の危機　道路・林道整備、渓流の砂防工事。（A）

参考文献

野村卓之・高橋久 2008. 石川県の陸・淡水産貝類. しぶきつぼ. 29：45–52.
川端義信 2004. 能登半島産の軟体動物目録. 七尾少年科学館研究報告. 8：43–82.
江川和文 1994. 石川県産ニクイロシブキツボの諸知見. ちりぼたん. 25：18–20.

写真提供者：高橋久



県内の分布

カワザンショウガイ

Assiminea lutea japonica Martens

ニナ目カワザンショウガイ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由
本県においては、今のところ汽水域のヨシ帯に出現するが、生息確認地点は多くない。水辺の開発により消失の可能性がある。

形　態
殻は丸味を帯びた円錐形。殻径5～6㎜、殻高6～7㎜。体層下部はやや角張り、褐色の色帯を持つ個体もいる。

国内分布
本州、四国、九州。

県内分布
能登の小河川の河口域、および加賀の潟湖の汽水域など。

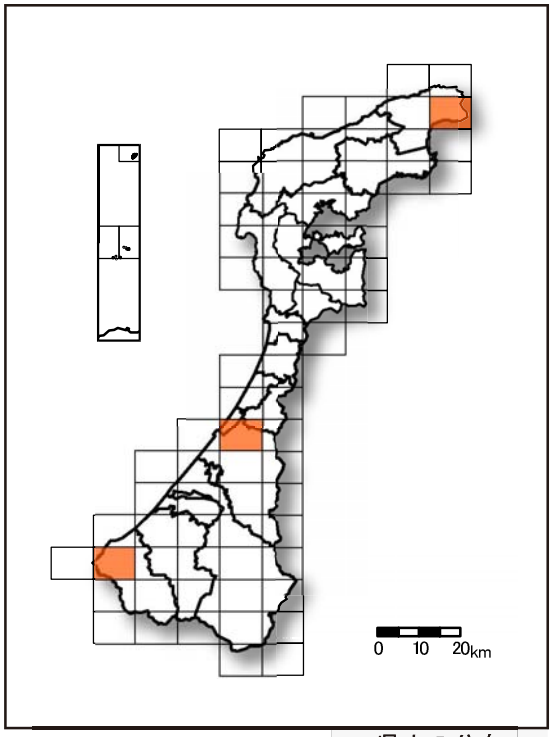
生　態
県内の確認地点はヨシ帯につながる礫や岩などの表面であり、群生する。

生息地の条件
露出した水際を伴う汽水域のヨシ帯。

生存の危機
湖岸や河口域の工事。（A）

参考文献
野村卓之・高橋久 2006. 河北潟地域の陸・淡水産貝類相. 河北潟総合研究. 9：7–22.
野村卓之・高橋久 2008. 石川県の陸・淡水産貝類. しぶきつぼ. 29：45–52.

写真提供者：高橋久



県内の分布

ウミニナ

Batillaria multiformis (Lischke)

ニナ目ウミニナ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	準絶滅危惧

選定理由
石川県では生息環境が限定されているが、生息環境の悪化が著しいため。

形　態
殻高30～35㎜の細長い塔形の巻貝。ホソウミニナに似るが殻口上端にある滑層瘤の発達が顕著である。

国内分布
北海道から九州の主に太平洋岸に分布。

県内分布
九十九湾周辺、穴水湾周辺、志賀町の海岸。

生　態
広い干潟の形成されない石川県では、淡水のしみ出しのある、時には潮に浸かる（飛沫がかかる）岩礁帯で、うっすらと泥がたまる窪みに生息。特に群生することがある。

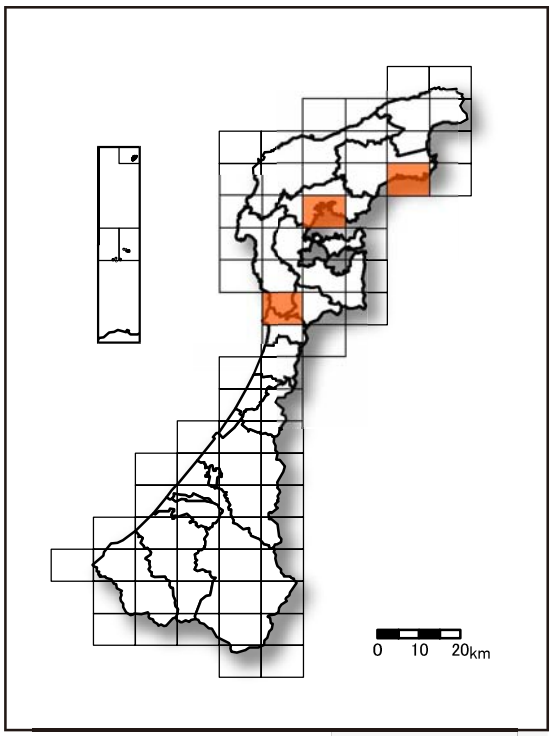
生息地の条件
淡水のしみ出しのある海岸部。

生存の危機
海岸の護岸工事や埋立工事。（A）

特記事項
「水産庁レッドデータブック」（1998）では「減少傾向」にランクされている。

参考文献
増田修・内山りゅう 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類. 240pp. ピーシーズ. 東京.
黒住耐二 1995. ウミニナ. 日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料（Ⅱ）：73-78, 124.

標本・写真提供者：のと海洋ふれあいセンター



県内の分布

マツカサガイ

Inversidens japanensis (Lea)

イシガイ目イシガイ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	準絶滅危惧

選定理由
石川県内では溜池やその下流部の水路に生息するが、寄主である淡水魚類の消失も含めて生息環境が悪化しているため。

形　態
殻は卵円形で、殻長は最大で90㎜に達する。殻表には逆Ｖ字型の模様があり、後背縁の放射状の模様は顕著に発達する。

国内分布
本州、四国、九州。

県内分布
加賀市、小松市、金沢市、宝達志水町、羽咋市、志賀町（富来地区）、七尾市（中島地区）。津幡町からも死殻が得られている。

生　態
小川や水路の砂礫底に生息。溜池内にも生息する例がある。丘陵地の溜池下の水路に多産することがある。

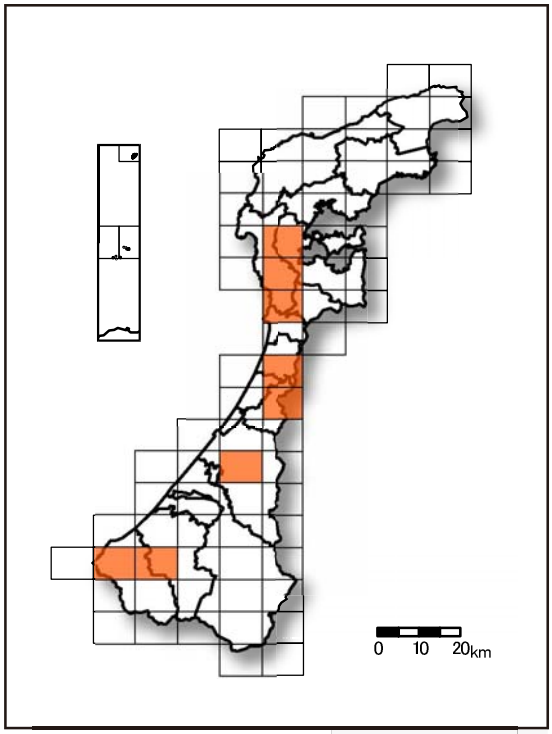
生息地の条件
生貝が潜る砂泥底と幼生が寄生する魚類（ハゼ類など）の存在が条件。

生存の危機
水路の改修工事による砂泥底の消失。外来魚の侵入により幼生の寄主となる魚類がいなくなること。また溜池の放棄による影響も大きいと考えられる。（A, B, C）

特記事項
類似のヨコハマシジラガイは殻頂付近に顆粒状の模様があり、後背縁の放射状模様は不明瞭とされるが、殻の表面が摩耗した個体では区別が困難なことがある。

参考文献
近藤高貴 2005. マツカサガイ. 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 6　陸・淡水産貝類：355. 増田修・内山りゅう 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類. 240pp. ピーシーズ. 東京.

写真提供者：石原一彦



県内の分布

イシガイ

Unio douglasiae Martens

イシガイ目イシガイ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	なし

選定理由
水路の改修工事により生息環境が悪化しているため。

形　態
殻はやや細長く、殻長50㎜前後になる。成貝では殻表面の彫刻模様は目立たないが、幼貝では漣状の模様が見られる。

国内分布
日本全国。

県内分布
柴山潟、木場潟、邑知潟周辺の小河川、水路。河北潟水系の河川においても死殻が得られているが、河北潟水系では現状が不明。

生　態
小川や水路の砂泥底に生息する。

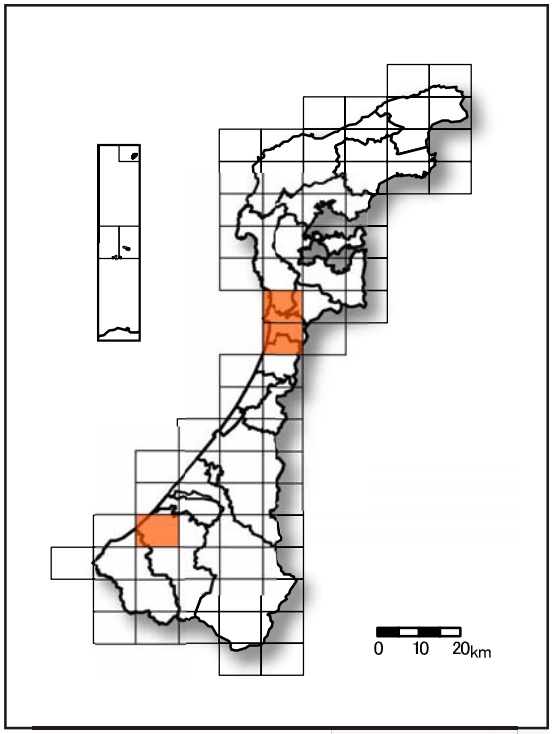
生息地の条件
生貝が潜る砂泥底と幼生が寄生する魚類（ハゼ類など）の存在が条件。

生存の危機
水路の改修工事による砂泥底の消失。外来魚の侵入により幼生の寄主となる魚類がいなくなること。（A, C）

参考文献

石原一彦 2008. 石川県邑知潟周辺の水路で見られるイシガイ類（予報）. ちりぼたん. 39（1）：55-56.（淡水貝類研究会第13回研究集会講演要旨）.
近藤高貴 2008. 日本産イシガイ目貝類図譜. 日本貝類学会特別出版物第3号. 69pp. 日本貝類学会
増田修・内山りゅう 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類. 240pp. ピーシーズ. 東京.
野村卓之・高橋久 2006. 河北潟地域の陸・淡水産貝類相. 河北潟総合研究. 9：7-22.

写真提供者：石原一彦



県内の分布

マシジミ

Corbicula leana Prime

ハマグリ目シジミ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	準絶滅危惧

選定理由 本来の生息環境の条件が悪化しているとともに、近年はタイワンシジミ種群の帰化・定着に伴い、種の置き換わりが起こっている。

形　態 殻長30㎜程度の亜三角形、殻はやや薄く、表面に比較的荒い成長脈がある。殻色は黄緑色から黒色で光沢は弱い。内面は白から青白色で殻縁部は紺色。

国内分布 北海道と島嶼を除く全国。

県内分布 平野部の水路や河川。

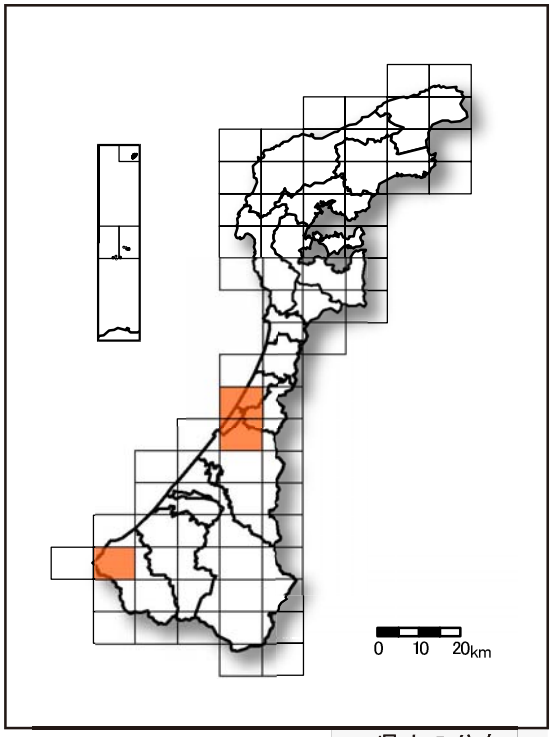
生　態 雌雄同体の卵胎生で、河川や農業用水路などの底質中に生息する。

生息地の条件 比較的水質の良好な淡水域。

生存の危機 河北潟地域ではタイワンシジミの増加による種の置き換わりがみられる。その他に生息環境の人工化。（A, C）

参考文献 野村卓之・高橋久 2006. 河北潟地域の陸・淡水産貝類相. 河北潟総合研究. 9：7-22.

写真提供者：高橋久



県内の分布

ヒラマキガイモドキ

Polypylis hemisphaerula (Benson)

モノアラガイ目ヒラマキガイ科

石川県カテゴリー	情報不足
国カテゴリー	準絶滅危惧

選定理由
改訂版国の貝類レッドリスト（2007）で新たに準絶滅危惧にランクされ、石川県でも生息環境の改変が大きいと考えられるため。

形　態
殻経4～5㎜の円盤形の殻を持つ。殻中央の窪み（臍孔）は狭く深い。殻内の白いひだ（ほぼ90度ごとに形成される）が透けて見える。

国内分布
日本全国。

県内分布
加賀市、金沢市、内灘町、津幡町、輪島市、珠洲市。

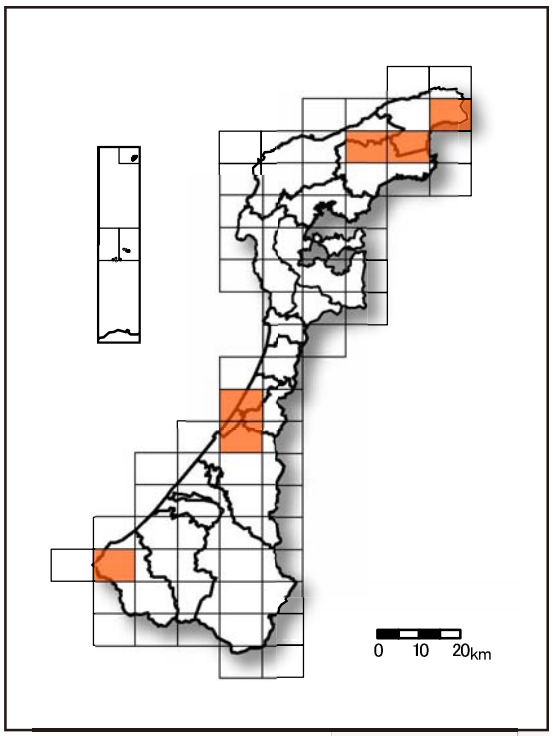
生　態
棚田の土水路や溜池に生息。

生存の危機
圃場整備と溜池改修。水田や溜池放棄。（A, B）

特記事項
石川県にはヒラマキガイ類として*Gyraulus*属の種も生息するが詳細不明。ヒラマキガイモドキは*Gyraulus*属からは殻の形状で区別が容易である。なお、ヒラマキミズマイマイ*G.chinensis spirillus*は改訂版国の貝類レッドリスト（2007）で情報不足にランクされている。

参考文献
長谷川巌 1998. 福井県の陸水生貝類の概要と目録. 福井県自然環境保全調査研究会陸水生物部会（編）. 福井県の陸水生物：91-123. 福井県
増田修・内山りゅう 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類. 240pp. ピーシーズ. 東京.

写真提供者：石原一彦



県内の分布

ホソウミニナ

Batillaria cumingii (Crosse)

ニナ目ウミニナ科

石川県カテゴリー	情報不足
国カテゴリー	なし

選定理由 石川県では生息環境が限定されていると考えられるが、生息環境の悪化が著しいため。

形　　態 殻高25～35㎜の細長い塔形の巻貝。ウミニナに似るが殻口上端にある滑層瘤の発達が弱い。

国内分布 日本各地の内湾や河口、干潟。

県内分布 九十九湾周辺。

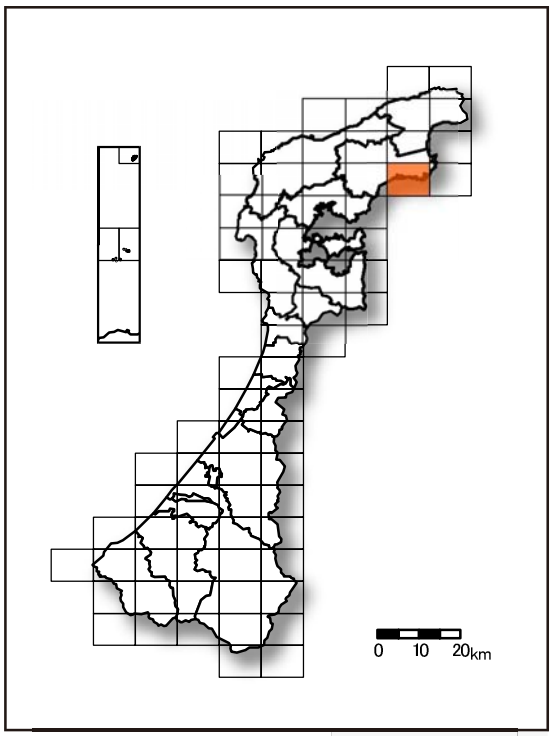
生　　態 広い干潟の形成されない石川県では、淡水のしみ出しのある、時には潮に浸かる（飛沫がかかる）岩礁帯で、うっすらと泥がたまる窪みに生息。

生息地の条件 淡水のしみ出しのある海岸部。

生存の危機 海岸の護岸工事や埋立工事。 (A)

参考文献 増田修・内山りゅう 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類. 240pp. ピーシーズ. 東京.

標本・写真提供者：のと海洋ふれあいセンター



県内の分布

オバエボシガイ

Inversidens brandti (Kobelt)

イシガイ目イシガイ科

石川県カテゴリー	情報不足
国カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類

選定理由

石川県内では現状不明であるが、国内分布を考えると生息数は少ないと考えられるため。

形　　態

殻は短卵形で後背縁はやや張り出し、後端がやや尖る。殻長は30㎜～40㎜程度と小型。

国内分布

愛知県以西に分布。北陸地方では富山県から記録あるが、富山県では絶滅したとみられる。

県内分布

七尾市から情報があるが現状不明。

生存の危機

詳細は不明であるが、他のイシガイ科の種と同様の要因と考えられる。（A, C）

特記事項

石川県の生息地は東限（北限）にあたる。早期に現状の把握が望まれる。

参考文献

川端義信 2004. 能登半島産の軟体動物目録. 七尾市少年科学館研究報告. (8) : 43-82.
近藤高貴 2005. オバエボシガイ. 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 6 陸・淡水産貝類 : 303.
近藤高貴 2008. 日本産イシガイ目貝類図譜. 日本貝類学会特別出版物第3号. 69pp. 日本貝類学会.
増田修・内山りゅう 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類. 240pp. ピーシーズ. 東京.
富山県 2002. 富山県の絶滅のおそれのある野生生物ーレッドデータブックとやまー.

写真（図）はありません。

分布図はありません。

県内の分布

ヤマトシジミ

Corbicula japonica Prime

マルスダレガイ目シジミ科

石川県カテゴリー	情報不足
国カテゴリー	準絶滅危惧

選定理由
改訂版国の貝類レッドリスト（2007）で新たに準絶滅危惧にランクされたが、石川県でも本種の生息地である汽水域の環境が悪化しているため。

形　態
殻長30～50㎜で亜三角形の二枚貝。殻表面は光沢のある黒褐色で内面は白色みを帯びる。

国内分布
北海道から九州にかけての汽水域に生息。福井県では、石川県に隣接する北潟湖に生息。

県内分布
柴山潟、河北潟、邑知潟、奥原潟、ただし現状は不明。

生　態
河口、潟湖や流れの影響する内湾などの汽水域に生息。雌雄異体で卵生。

生存の危機
工事による汽水域の消失や水質の悪化。（A）

参考文献
長谷川巌 1998. 福井県の陸水生貝類の概要と目録. 福井県自然環境保全調査研究会陸水生物部会（編）. 福井県の陸水生物：91-123. 福井県
川端義信 2004. 能登半島産の軟体動物目録. 七尾市少年科学館研究報告. （8）：43-82.
増田修・内山りゅう 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類. 240pp. ピーシーズ. 東京

写真（図）はありません。

分布図はありません。

県内の分布

９．その他の動物

本県レッドデータブックの前版までは「その他の動物」の項で陸産･淡水産貝類と真正クモ類を取り上げていたが、本改訂版では陸産・淡水産貝類を独立項目として本項から分離させた。そして本項では残ったクモ類（節足動物門クモ形綱）に加えて新たなレッド種を含むミミズ類（環形動物門ミミズ綱）を取り扱う。

１　石川県のクモ類相

石川県のクモ類相は 2008 年までに 352 種がその分布を公表されており（新海・安藤・谷川 2008）、そのほかに未公表の既知種が 50 種ほどあるから 400 種ほどが判明していることになる。本州でクモ類相がもっとも解明されている数都府県の種数はいずれも 500 種を少し越えているから、石川県でもそれくらいの種数が生息していると思われる。また白山のクモ分布は全国の高山帯を有する山地の中ではもっとも調査が進んでいる山地であって、標高別分布が詳しく分析されている（徳本 2006）。従って本県のクモ相解明のレベルは十分というにはまだ遠いものの、全国的にみれば進んでいるほうであり、クモ相構成の概観は把握可能なので、それをもとにして以下の記述を行う。

本県全域内のクモの種構成について徳本（1990）は日本固有種および中国東部・韓国分布種、世界広域分布種を併せたものが 85%を占め、それに旧北区・全北区系を併せた北方系が 12%、南方系といわれる東洋区系が 3%含まれており、典型的な日本中部温暖帯性クモ相であるとしたが、その状況は現在も変わっていない。加賀地域は高い山がない能登地域に比べると高山帯をもつ白山（2,702m）山系を域内にもつのでクモ相はより豊かになるが、基本的には能登地域と大きく変わることはない。ただ、能登地域は加賀地域に比べるとクモ相の調査はかなり遅れている。能登地域では近年、日本国内の他地域で消滅またはそれに近い状態になっている昆虫が現在も多数生息している箇所があることが明らかになってきている。クモにおいても同様なことが見られる可能性があるので、今後の調査が必要である。なお、当然のことであるが白山国立公園地域は標高が高いのでそこ以外の本県内地域よりクモ相にふくまれる北方系要素の率が高い。

石川県が本州日本海側での分布北限となっているクモは 2008 年現在ではマルゴミグモ以外には知られていない。しかし 2000 年ごろには本県が日本海側の分布北限であったキシノウエトタテグモやキノボリトタテグモの分布北限が 2008 年現在では新潟県に変わっているように、マルゴミグモも今後の調査の進展によって北限が北の県に移るかもしれない。これに対して本県が分布西限となっている種は 9 種あり（徳本 2006）、比較的多いが、これらの大部分の種は今後の調査の進展によっても分布限界県が本県より西に移る可能性が低い。これは白山がわが国で高山帯をもつ山の西限であり、本県より西には高山帯をもつ山地が存在しないからである。白山の高山帯にはヤスダサラグモ、クロヒザグモのようにヨーロッパやシベリアから北海道にかけて分布している種が生息していたり、エゾハリゲコモリグモのように北海道と青森県、秋田県だけにしか分布を知られていない種が白山ではブナ帯上部に分布していたりするというような型の分布を示し、わが国北部での分布地と白山との間の分布知見がまったくなかったり、わずかしかないといった種が多い。これらのことはわが国の高標高地のクモ分布調査が遅れていることを象徴するもので、このことを明らかにしたのは白山のクモ調査が挙げた功績ともいえよう。

なお、近年、本県において北方系と思われる海浜性種イソコモリグモの本県内における生息状態の歴史的推移ならびに生態解明が詳しく行われ、それにもとづいてこのクモの保護対策の検討が進められた。そしてその成果は現在、環境省のレッド種となっている本種に対する保全対策の指針となって、現在、全国的な本種保全活動が推進されている。

本県レッド種クモとしては環境省レッド種クモと同じくキシノウエトタテグモ、キノボリトタテグモ、ワスレナグモ、イソコモリグモの 4 種をあげることにした。

2　石川県のミミズ類相

ミミズ類は土壌動物の代表的一群で、土壌中で植物遺体などやそれらの分解物を土壌と共に食物として摂取、消化し、多量の糞便を排出するという生活をしており、これが非水溶性高分子物質を水溶性低分子物質に変えることになって、土壌の肥沃化に大きな貢献をしていることは有名である。しかし、この動物群の分類学的研究はわが国ではこれまであまり進んでいなかったが、近年はかなりの種数が同定可能になってきた。しかし、本県ではこの動物群の研究はこれまでほとんど行われていない。ところが、その例外的存在がハッタミミズという日本一長いミミズで、これが河北潟周辺、特に往時の河北郡八田村付近に高密度に生息することが1920年代に行われた石川県天然記念物調査の過程で明らかにされた。

他の土地では見られないこの変わったミミズの正体について研究を依頼された当時の東北帝国大学教授畑井新喜司博士は1931年にこれを新種として記載し、和名をハッタミミズと名づけた。そしてこのミミズの属する *Drawida* 属は東南アジア方面に多いこと、八田村という狭い区域にだけ高密度で生息すること、また、このミミズにまつわる土地の伝説から推定すると、突然この地に出現したとも思われることから、徳川時代の加賀藩の豪商であった銭屋五兵衛が南方との密貿易の際に持ち込んだ植物の根部土壌に付いて持ち込まれたのでないか、との説を述べたので、学界でも著名なミミズとなって現在に至っている。

本種はそれ以来、長らく日本国内のどこからも見つからなかったが、近年、琵琶湖周辺の数箇所にも生息することが判明し、本種の日本への分布由来についての研究も始められた。それによるとこのミミズの属するジュズイミミズ科（数珠状の胃をもつのが特徴）はミミズ類の中でも地球上での発生がもっとも古いグループで、現在の *Drawida* 属の地球上での分布も東南アジアの熱帯だけではなく、中国東北地方にまで及んでおり、日本国内にもハッタミミズとは別種のジュズイミミズが本州の東北地方などに生息することが分かってきた。このようなことからハッタミミズは南方からの人為的移入種ではなく、日本本土がまだ古いアジア大陸から分離する以前からそこに生息していたジュズイミミズが、分離した日本列島にも持ち込まれ、それが先祖となって現存のハッタミミズが生じてきた可能性が高いと見られている。石川・滋賀両県のハッタミミズのDNA分析も進んでおり、その結果が本種の地史的由来を明らかにしてくれるであろう。従って本種は億年単位の古い型の生物の生き残り的存在で、他の動物でいえばオオサンショウウオ、ムカシトンボ、シーラカンスのような生きた化石の一つともいえるかもしれない。

また、滋賀県と石川県のハッタミミズは同種ではあるが、遺伝子型が若干異なる可能性も高く、そうとなれば現在は地方型も種多様性維持を進めてゆく上で、重要な保護対象と考えられているから、この狭い範囲にしかいないハッタミミズの個体群維持をはかることは重要課題となる。

ところがレッドデータブックの本種評価記述書に記したように、本種は半湿田的環境を好み、このような水田は現在の大型耕運機を駆使する稲作には向いていない。そのためこのような水田はこれまで客土によって乾田化がはかられてきたが、この工事を実施すると本種が激減することが分かっている。本種現存地域の水田でこれまでにまったく客土をしなかった水田はほとんど存在しないから、現在は本種が辛うじて生き残っている水田が散在するというのが実情で、そのような水田でさえその存在範囲がきわめて狭い。

そしてこのような過去に客土された水田でも本種が残っている水田は、比較的湿りけの程度が高いという特徴がある。またこのような湿地帯の水田を客土した場合、年数が経過すると地盤が徐々に下がるので、さらに厚く客土する作業も行われ、このような追加工事がおこなわれると本種は完全に消滅する。

水田という耕作形態は人為による絶えざる維持作業によってのみ存続が可能となるが、これと本種の生存環境維持とをどのように並立させるかが今後の大きな課題である。

その他の動物選定種一覧

区　　分	クモ類	種類数	ミミズ類	種類数
絶滅	－	－	－	－
絶滅危惧Ⅰ類	－	－	ハッタジュズイミミズ	1
絶滅危惧Ⅱ類	イソコモリグモ	1	－	－
準絶滅危惧	キシノウエトタテグモ、キノボリトタテグモ、ワスレナグモ	3	－	－
情報不足	－	－	－	－
地域個体群	－	－	－	－
計		4	計	1

（徳本　洋）

新旧対応表

		前回						
		絶滅 0	絶滅危惧Ⅰ類 0	絶滅危惧Ⅱ類 1	準絶滅危惧 2	情報不足 0	地域個体群 0	カテゴリー外 2
今回	絶滅 0							
	絶滅危惧Ⅰ類 1							ハッタジュズイミミズ
	絶滅危惧Ⅱ類 1			イソコモリグモ				
	準絶滅危惧 3				キシノウエトタテグモ キノボリトタテグモ			ワスレナグモ
	情報不足 0							
	地域個体群 0							
5	カテゴリー外 0							

※ヘグラマイマイは、陸産貝類に分類

ハッタジュズイミミズ

Drawida hattamimizu Hatai

ナガミミズ目ジュズイミミズ科

石川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類
国カテゴリー	準絶滅危惧

選定理由

石川県と滋賀県でのみ分布が知られている。金沢市八田町が本種の基産地であり、石川県内では現在その町の周辺2kmほどの範囲内にしか分布が知られていない。しかも近年、その生息域の狭小化、生息密度の低下、大型個体の減少が著しくなっている。

形　態

体色は青黒色。日本一長いミミズで、生きているときは伸びた体長が60cmほどにもなり、以前は1mほどにもなる個体がいたという。固定標本では長さ25cmほど、太さ9mmほどである。
体節数は約300。ジュズイミミズ属は各体節に4対8本の剛毛を持ち、背面に背孔がなく、環帯が不鮮明で、雄性孔が10/11体節間溝にある。本種は体内にある砂のう（胃）が12～18体節に6個以上並び、乳状突起が6～9体節と11～13体節の各節に1対あることで、同属の近縁種と区別できる。

国内分布

石川県の河北潟近辺と滋賀県の琵琶湖近辺に分布している。

県内分布

金沢市八田、才田、忠縄、南森本あたりに分布。1930年ごろの分布域は前記各地を中心としてJR北陸線に沿ってJR津幡駅付近から金沢市鳴和付近までに及んでいた。

生　態

半水生のミミズで水田の水路わき、あぜのへり付近に特に多くいるが、そこの水のつかない所に糞塊を排出しているので、これが生息の目印として便利である。生息密度が高い田では稲刈り時期になり、水を落とすと水田中央部にも糞塊ができることがあったらしいが、今はそのような田はほとんど見られない。詳しい生態は分かっていないが、同時期にさまざまの大きさの個体が混じって認められることから寿命は長いのでないかと思われる。

生息地の条件

半湿田的環境が適しているように思われる。

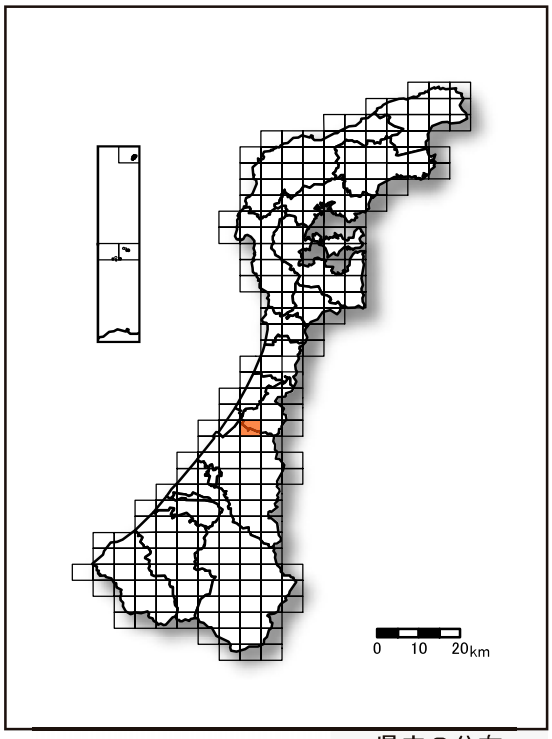
生存の危機

水田への客土、農薬散布、水路・あぜのコンクリート化、農地の宅地・工場用地化などで生息環境は著しく悪化しつつあり、辛うじて生き残っている状態である。（A）

参考文献

Hatai, S.　1930.　On *Drawida hattamimizu*, sp. nov. The Sci. Rep. of The Tohoku Imp. Univ. Series (Biology), V(3): 485-508.
市村唐・安田作次郎 1931.　石川県天然記念物調査報告.　第7輯.　102pp.　石川県.
渡辺弘之 2005.　琵琶湖周辺に分布するハッタミミズとその保護について.　関西自然保護機構会誌:27(2): 3-9.

写真提供者:高橋奈苗



県内の分布

イソコモリグモ

Lycosa ishikariana (S.Saito)

クモ目コモリグモ科

石川県カテゴリー　絶滅危惧Ⅱ類
国カテゴリー　絶滅危惧Ⅱ類

選定理由
砂浜海岸にのみ生息する大型のクモ。全国的に生息地点、個体数の減少が著しく、石川県では2008年の生息海岸総延長は1950年代にくらべて5分の1以下になっている。

形　態
体長が雌23㎜前後、雄19㎜前後。背面は明るい灰色で数対の淡黒斑があり、腹面は全体に真っ黒。

国内分布
北海道、本州。本州は日本海側では青森県から島根県まで、太平洋側では青森県から茨城県まで。

県内分布
珠洲市東部、輪島市大川・増穂浦・剣地、志賀町、羽咋市、かほく市、内灘町、白山市美川、加賀市それぞれの海浜。

生　態
砂浜海岸の海浜植物帯およびその海側の砂裸地の乾砂部を生息域とし、砂中に縦穴を作ってその中に潜む。穴の入り口から少し奥の範囲までは穴の内面を糸で裏打ちしてあるので、穴の縁に触れても砂がくずれない点で、砂浜に存在する他の小動物の穴と容易に区別できる。大きな穴で径15㎜、深さ15～20cmほど。昼間や特に夏期は穴の入り口を封鎖している場合も多いが、夜間に穴の周辺に出て周囲を通る昆虫などの小動物を捕食する。越冬期間中に卵から孵化し、卵のうから出た子グモが5月下旬ごろから穴外に現れ、分散して小さい巣穴を作る。これが成長してふたたび子グモを出すまでには2冬を経過する。

生息地の条件
海浜植物帯が成立する砂浜海岸。

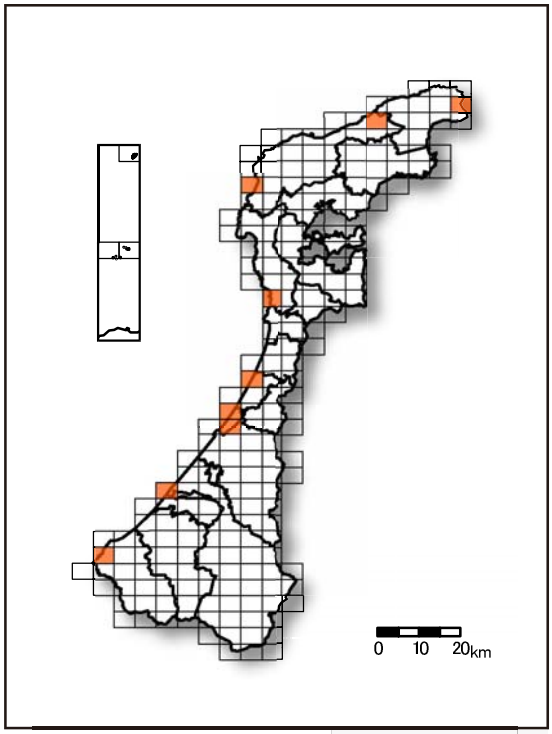
生存の危機
海岸線の侵食による後退と海岸線沿いに建設される道路、防波堤など諸種の人口造営物の増加、砂浜海岸への自動車乗り入れの増大などのため、本種の生息可能砂浜の消滅が激しく、生息個体数が激減している。（A）

特記事項
石川県指定希少野生動植物種（2007年）。

参考文献

千国安之輔 2008. 写真日本クモ類大図鑑改訂版. pp. 308. 偕成社. 東京.
藤田　衛 1939. Acta Arachnologica, 47(2):134–138.
徳本　洋 2004. 石川県におけるイソコモリグモ *Lycosa ishikariana* (S. Saito,1934)の激減. のと海洋ふれあいセンター研究報告. 10: 21–30.
徳本　洋 2006. イソコモリグモ残存率算定へのアプローチ. 遊糸（日本蜘蛛学会連絡誌）. 19:6–12.

写真提供者：徳本洋



県内の分布

キシノウエトタテグモ

Latouchia swinhoei (Kishida)

クモ目トタテグモ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	準絶滅危惧

選定理由

人の居住区域に近い所に棲んでおり、生息適地が失われやすく、全国的に減少してきている。

形　態

体長10～15㎜、雄9～12㎜ほど。頭胸部は光沢ある濃い黒褐色、腹部は長球状で淡いチョコレート色で、その背面に数対のさらに淡い色の矢状斑紋がある。

国内分布

本州、四国、九州。本州では太平洋側は宮城県、日本海側は岩手県がそれぞれの既知北限である。

県内分布

金沢市内で3箇所の記録があるのみ（泉野出町、兼六園、常磐町）。分布調査が不十分であり、もっと多くの分布地があると思われる。

生　態

社寺境内や公園の敷石のわき、家の土台石のわき、あるいは丘陵地の崖地など、比較的乾いた明るい所の地中に深さ15～20㎝（メス成体）の縦穴（崖では横や斜めの穴）をほって住居としている。穴の入口に円形片開きのフタつくり、そのすぐ内側にクモがいて、付近を虫が通ると飛び出してつかまえ、穴に引きずりこんで餌とする。フタは土などを着け、カムフラージュされているので見つけにくい。雌は10年以上生きる。雄は9～11月に雌を求めて徘徊する。このクモに寄生するクモタケという菌類があり、その棍棒状をした白っぽい子実体が梅雨期に地表に現れるが、これはクモの巣の所在をしるためのよい目印となる。

生息地の条件

上記のような所によくいるが、詳しい条件については不明。

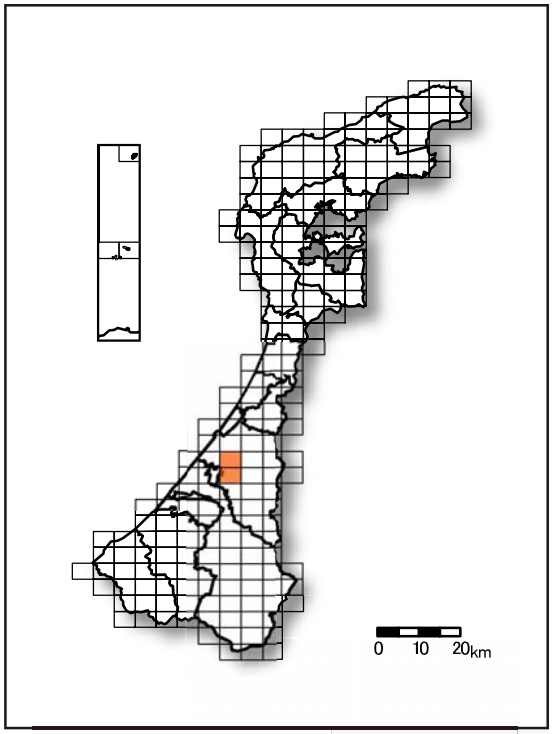
生存の危機

石川県では分布密度が低いようであるが、人居住地に近い所に棲むだけに生息地が消失しやすい。（A）

参考文献

畑守有紀・新海明・上田俊穂 1997. クモタケの全国分布調査結果. Kishidaia. (72) :34-47.
笹岡文雄 1992. キシノウエトタテグモの寿命について. Kishidaia. (63) : 31.
鈴木成生 1996. キシノウエトタテグモの生態(1), (2), (3), (4). Kishidaia. (70) : 35-56.

写真提供者：谷川明男



県内の分布

キノボリトタテグモ

Ummidia fragaria (Doenitz)

クモ目トタテグモ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	準絶滅危惧

選定理由

コケむした古木の幹上や岩上に巣をつくり生息するが、全国的に生息個体が減少しつつある。

形　態

体長が雌で9～11㎜、雄で6～8㎜、全身黒紫色。液浸にすると頭胸部は褐色に変わる。

国内分布

南西諸島、九州、四国、本州。本州では太平洋側は茨城県、日本海側は新潟県が各既知分布北限である。

県内分布

金沢市兼六園内での記録があるだけ（畑守ほか、1997）であるが、県内には未発見の生息箇所がまだいくつかあると思われる。

生　態

樹木や岩の表面にコケや樹皮くずを貼り付けた袋状の住居をつくり、入口に円形で片開きの蓋をつける。住居の入口は下向きが多い。住居の大きさは成熟した雌で径1㎝、長さ3㎝ほどであり、切り開くとピーナッツの皮を開いた感じである。中にいるクモは付近を昆虫などの小動物が通ると飛び出して捕らえる。越冬期に調査すると、親と同居している小さな幼体、独立した幼体、亜成体、成体というようにいろいろな成長段階のものが認められるので、キシノウエトタテグモと同じくかなり長い年数を生きるものと思われる。

生息地の条件

あまり日光の直射しない岩の壁面や古木の多い環境を好む。

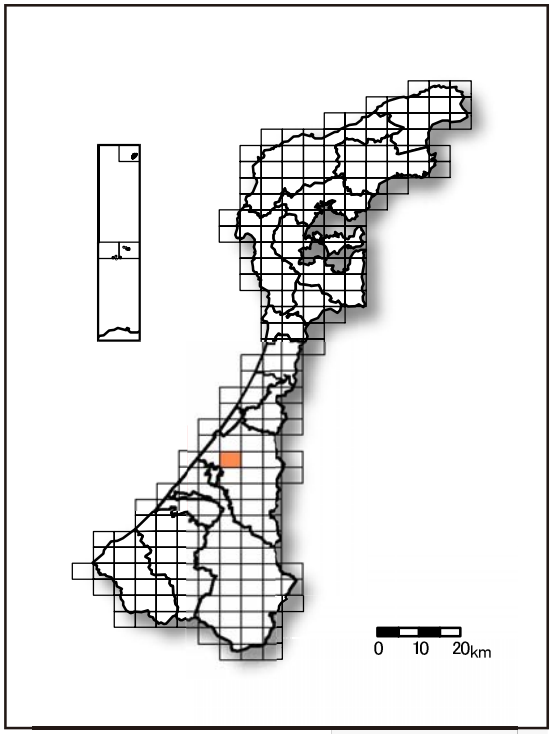
生存の危機

石川県は分布北限に近く、生息に適した環境も少ないので生息密度は低いと思われ、生息地の環境保護に注意しないと消失する恐れがある。（A）

参考文献

千国安之輔 2008. 写真日本クモ類大図鑑. pp306. 偕成社. 東京.
畑守有紀・新海明・上田俊穂　1997. クモタケの全国分布調査結果.　Kishidaia. 72: 34-47.

写真提供者：谷川明男



県内の分布

ワスレナグモ

Calommata signata (Karsch)

クモ目ジグモ科

石川県カテゴリー	準絶滅危惧
国カテゴリー	準絶滅危惧

選定理由

生息密度の低い種であるが草地、芝生、公園など比較的乾燥した地中に縦穴を掘り、その中に住む。このような環境は人為破壊を受けやすいので生息適地が失われやすく、全国的に減少してきている。

形　態

体長メス15～18㎜、オス6～8㎜ほど。メスは頭胸部や脚は黄褐色。腹部は褐色で頭胸部前に突き出した大きなキバが目立つ。第一脚は細いが第二～四脚、特に第三･四脚は太短い。オスは脚も含めてほぼ全身黒褐色であるが、脚の先端部付近だけが黄褐色。オスはすべての脚が細長い。

国内分布

本州、四国、九州だが、本種が未記録の県はまだかなりある。

県内分布

県内4箇所で記録があるのみであるが、分布調査が不十分であり、もっと多くの分布地があると思われる。

生　態

前記のような環境の地中に深さ15～20cm（メス成体）の縦の管状の穴を掘り、その中に住む。穴の裏側は糸の膜で裏打ちされており、穴の入口にはトタテグモのようなふたはないから、このような穴を見つけることがこのクモの存在を知る重要な手段となる。穴の入口から放射状に触糸を地表に引いてあり、近くを通った虫がこの糸に触れると電光石火の速さで飛び出して長い牙をつきさして穴に引きずり込む。

生息地の条件

上記のような所で見つかることが多い。比較的狭い区域から多数の住居穴が見つかる例がときどき報告されているから、穴を見つけたときは付近をよく調べてみる必要がある。

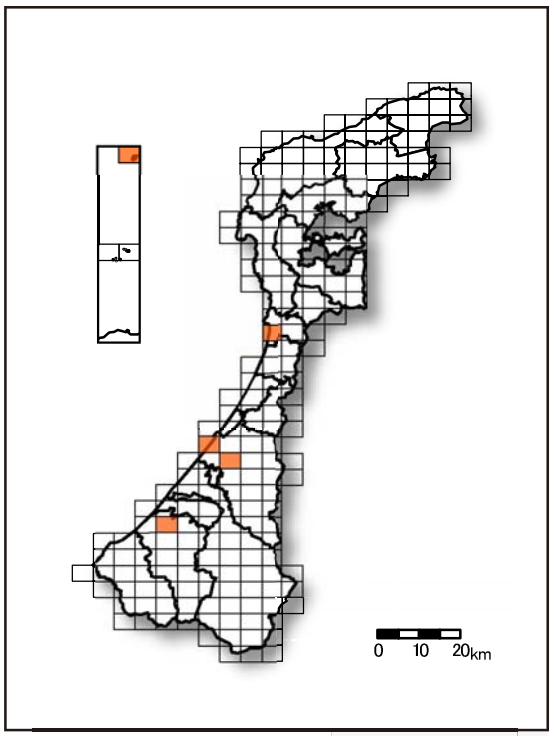
生存の危機

石川県では分布密度が低いようであるが、前記のような環境に棲むだけに生息地が消失しやすい。（A）

参考文献

千国安之輔 2008. 改訂写真日本クモ類大図鑑. 偕成社. 東京.
徳本　洋 1990. 石川県の真正クモ類. 石川の生物. 200-207. 石川県高校教育研究会. 金沢.

写真提供者：谷川明男



県内の分布

引 用 文 献 ・ 参 考 文 献

本レッドデータブックの作成に際し、各分野の冒頭概論中の引用文献及び各分野に関する参考文献を掲載する。

1　総括

石川県野生動物保護対策調査会 2000. 石川県の絶滅のおそれのある野生生物<動物編>―いしかわレッドデータブック―. 石川県環境安全部自然保護課.

2　哺乳類

阿部　永・石井信夫・伊藤徹魯・金子之史・前田喜四雄・三浦慎悟・米田政明 2005. 日本の哺乳類［改訂版］. 東海大学出版会.

石川県哺乳類研究会編 1990. 石川の自然環境シリーズ 石川県の哺乳類. 石川県環境安全部自然保護課.

3　鳥類

環境省自然環境局野生生物課編 2002. 改訂日本の絶滅のおそれのある野生生物―レッドデータブック―　2　鳥類. 自然環境研究センター.

日本野鳥の会石川支部 1998. 石川野鳥年鑑 1998.　以後、石川野鳥年鑑 2006 まで。

4　両生爬虫類

石川県両生爬虫類研究会編 1996. 石川の自然環境シリーズ 石川県の両生・爬虫類. 石川県環境部自然保護課.

野田英樹 2004. 河北潟総合研究. 7：17-19.

野田秀樹・鎌田直人 2003. 河北潟総合研究. 6：11-17.

野田秀樹・鎌田直人 2004. 爬虫両棲類学会報 2004(2)：102-113.

松村初男・宮崎光二 1996. 南紀生物. 38(2)：115-117.

松村初男・山下　郁 1996. のと海洋ふれあいセンター研究報告. 2：29-38.

宮崎光二 2008. いしかわ自然史. 43：1.

宮崎光二・竹田俊雄 2000. 両生類誌. 4:18-22.

5　淡水魚類

石川県環境部自然保護課 1999. 新版　石川の動植物.

石川県淡水魚類研究会編 1996. 石川の自然環境シリーズ 石川県の淡水魚類. 石川県環境部自然保護課.

金沢市保健環境部環境保全課 1993. 金沢の魚.

環境省自然環境局野生生物課編 2003. 改定・日本の絶滅のおそれのある野生生物―レッドデータブック―4　汽水・淡水魚類. 自然環境研究センター.

水産庁 1998年. 日本の希少な野生水生生物に関するデータブック.

6　昆虫類

石川県 1978. 石川県の自然環境　第4分冊　昆虫，クモ，両生，爬虫類：1-147.

石川むしの会・百万石蝶談会編 1998. 石川の自然環境シリーズ 石川県の昆虫. 石川県環境安全部自然保護課.

7　浅海域の生物

＜海藻類＞

石川県野生動物保護対策調査会 2000. 石川県の絶滅のおそれのある野生生物<動物編>―いしかわレッドデータブック―. 石川県環境安全部自然保護課.

岡村金太郎 1893. 能州の海藻. 植物学雑誌. 7：109-113.

能登自然史調査研究会編 1998. 石川の自然環境シリーズ 石川県の浅海域の生物. 石川県環境安全部自然保護課.

東出幸真・池森貴彦・新井章吾・佐野　修 2004. 石川県におけるヒジキの分布概況. のと海洋ふれあいセンター研究報告. 10：17-20.

藤田大介・佐野　修・筒井　功 1998. 石川県能登半島沿岸産海藻目録. のと海洋ふれあいセンター研究報告. 4：27-44.

吉田忠生 1998. 新日本海藻誌. 内田老鶴圃.

＜魚類・無脊椎動物＞

石川県 1965. 能登半島学術調査書. 前田印刷.

石川県環境部自然保護課 1999. 新版　石川の動植物.

石川県環境部自然保護課編 1981. 石川の動植物. 石川県.

石川県野生動物保護対策調査会 2000. 石川県の絶滅のおそれのある野生生物<動物編>―いしかわレッドデータブック―. 石川県環境安全部自然保護課.

内田紘臣・楚山　勇 2001. イソギンチャクガイドブック. TBS ブリタニカ.

奥谷喬司 2000. 日本近海産貝類図鑑. xlvii＋1173 pp. 東海大学出版会.

川原 英・美坂 正・坂井恵一 2007. 石川県の砂浜海岸に生息する 2 種のオフェリアゴカイ. 能登の海中林. 27：5–6.

環境庁自然保護局野生生物課 1991. 日本の絶滅のおそれのある野生生物―レッドデータブック―. 日本野生生物研究センター

坂井恵一 2008. 石川県に分布する 2 種のオフェリアゴカイ. うみうし通信. 58：2–3.

坂井恵一・福島広行・東出幸真・小木曽正造 2001. 日本海における初記録種, ワダツミギボシムシ *Balanoglossus carnosus* (Willey) (半索動物門、ギボシムシ綱)の能登半島沿岸での生態について. のと海洋ふれあいセンター研究報告. 7：1-10.

Sasayama Y., M. Matada, Y. Fukumori, M. Umebayashi, A. Matuno, T. Nakagawa and M. Imajima 2003. External Morphology of the Posterior End. the “Opisthoma” of the Beard Worm *Oligobrachia mashikoi* (Pogonophora). Zoological Sciense. 20：1411-1416.

中坊徹次 2000. 日本産魚類検索 全種の同定, 第2版. lvi＋1748 pp. 東海大学出版会.

西平守孝・J.E.N.Veron 1995. 日本の造礁サンゴ類. vi＋439 pp. 海游舎.

西村三郎 1992. 原色検索日本海岸動物図鑑. I. xxxxv＋425 pp. 72pls. 保育社.

西村三郎 1995. 原色検索日本海岸動物図鑑. II. xii＋663 pp. 144pls. 保育社.

能登自然史調査研究会編 1998. 石川の自然環境シリーズ 石川県の浅海域の生物. 石川県環境安全部自然保護課.

吉田忠生 1998. 新日本海藻誌. 内田老鶴圃.

8　陸産貝類

川端義信 2004. 能登半島産の軟体動物目録. 七尾市少年科学館研究報告. 8：43-82.

環境省 2002. 種の多様性調査（動物分布調査）陸産及び淡水産貝類　報告書.
野村卓之・高橋　久 2006. 河北潟地域の陸・淡水産貝類相. 河北潟総合研究. 9：7-22.
野村卓之・高橋　久 2008. 石川県の陸・淡水産貝類. しぶきつぼ. 29：45-52.
野村卓之・高橋　久 2009. 石川県の陸・淡水産貝類２. しぶきつぼ. 30：23-30.
湊　宏・上馬康生 1996. 白山とその周辺の陸産貝類. 石川県白山自然保護センター研究報告. 23：39-50.

９　淡水産貝類

石原一彦 2008. 石川県邑知潟周辺の水路で見られるイシガイ類（予報）. ちりぼたん. 39（1）：55-56.（淡水貝類研究会第 13 回研究集会講演要旨）.
石原一彦 2009. 石川県能登半島で見つかったカワシンジュガイ. ちりぼたん. 39（2）：131-132.（淡水貝類研究会第 14 回研究集会講演要旨）
川端義信 2004. 能登半島産の軟体動物目録. 七尾市少年科学館研究報告. 8：43-82.
環境省 2002. 種の多様性調査（動物分布調査）陸産及び淡水産貝類　報告書.
環境省自然環境局野生生物課編 2005. 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物―レッドデータブック　－６　陸・淡水産貝類. 自然環境研究センター.
近藤高貴 2008. 日本産イシガイ目貝類図譜. 日本貝類学会特別出版物第 3 号. 63pp. 日本貝類学会.
野村卓之・高橋　久 2006. 河北潟地域の陸・淡水産貝類相. 河北潟総合研究. 9：7-22.
増田　修・内山りゅう 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類. 240pp. ピーシーズ.

１０　その他の動物

＜クモ類＞

新海　明・安藤昭久・谷川明男 2008. 県別クモ類分布図 ver.2008. 自刊 CD.
徳本　洋 1990. 石川県の真正クモ類. 石川の生物. 石川県高校教育研究会：200-207.
徳本　洋 2006. 白山国立公園産真正クモ類の標高別分布. 蜘蛛. 39：7-39.

＜ミミズ類＞

市村　塘・安田作次郎 1931. 石川県天然記念物調査報告. 第 7 輯：43-65+pls22,32,42. 石川県.
上平幸好 2005. 日本および周辺域に生息するジュズイミミズ類とその分布―原始的な陸棲種の動物地理学的考察. 函館短期大学紀要. 31：1-9.
渡辺弘之 1982. 琵湖周辺にも分布するハッタミミズ. Edaphologia. 27：45-46.
渡辺弘之 2003. ミミズ―嫌われものの、はたらきもの. 東海大学出版会.
渡辺弘之 2005. 琵琶湖周辺に分布するハッタミミズとその保護について. 関西自然保護機構会誌. 27(2)：5-9.

索　　引

ア

アオサナエ 192
アオスジクモバチ 307
アオバズク 76
アオマダラタマムシ 260
アオモンギンセダカモクメ 190
アカウミガメ 120
アカザ 132
アカショウビン 78
アカハゼ 349
アカマダラハナムグリ 208
アカモズ 63
アサマシジミ 220
アジメドジョウ 134
アズミトガリネズミ 24
アベサンショウウオ 118
アマガイ 357
アルプスヤガ 320
アンズイソギンチャク 355
イカリモンハンミョウ 165
イカルチドリ 72
イシガイ 422
イシゲ 330
イシマキガイ 417
イソコモリグモ 433
イソシギ 97
イソジョウカイモドキ 301
イソメマトイ 185
イチモンジハゼ 365
イツマデガイ 378
イトヨ（降海型） 131
イヌワシ 55
イネネクイハムシ 304
イワナ（無斑タイプ） 137
イワヒバリ 61
ウエダオオズナガゴミムシ 200
ウサギコウモリ 29
ウスイロモク 351
ウスバカマキリ 234
ウスバノコギリモク 336
ウマノオバチ 270
ウミアイサ 90
ウミウ 112
ウミサボテン 340
ウミスズメ 99
ウミニナ 420
ウラギンスジヒョウモン 281
エサキアメンボ 161
エサキキンヘリタマムシ 261
エサキムカシハナバチ 273
エゾエンマコオロギ 197
エゾオフェリア 362
エゾコセアカアメンボ 295
エチゼンビロウドマイマイ 395
オオウエキビ 393
オオウスイロヘソカドガイ 371
オオウスバカゲロウ 243
オオカミ 18
オオクロツヤミズギワカメムシ 296
オオクワガタ 179
オオコウラナメクジ 385
オオゴキブリ 195
オオコノハズク 108
オオジシギ 106
オオシモフリスズメ 286
オオセンチコガネ 258
オオタカ 70
オオタキコギセル 380
オオチャイロハナムグリ 259
オオチャバネセセリ 279
オオチャバネヨトウ 289
オオヒョウタンゴミムシ 199
オオミケマイマイ 374
オオミスジ 282
オオミズナギドリ 111
オオムラサキ 283
オオルリハムシ 217
オクガタギセル 383
オグマサナエ 157
オコジョ 33
オシドリ 85
オジロワシ 68
オツネントンボ 227
オトヒメゴカイ 346
オナガサナエ 155
オニホソコバネカミキリ 215
オバエボシガイ 426

カ

カエルキンバエ 186
カオジロトンボ 231
ガガブタネクイハムシ 302
カギモンキリガ 225
カグヤコウモリ 26
カズマキベッコウ 389
カタハガイ 414
カタユウレイボヤ 347
カトリヤンマ 158
カニギンモンアミカ 274
ガマヨトウ 288
ガムシ 253
カヤネズミ 36
カラカネトンボ 230
カラスガイ 415
カラマツカミキリ 210
カリガネ 65
カワアイサ 91
カワウソ 19
カワザンショウガイ 419
カワシンジュガイ 413
カワネジガイ 411
カワネズミ 37
カワラゴミムシ 164
カワラバッタ 160
カワラハンミョウ 167
カンムリウミスズメ 60
カンムリカイツブリ 81
キアシクロハラボソコマユバチ 271
キイロサナエ 191
キイロミヤマイエバエ 310
キイロミヤマカミキリ 181
キクメイシモドキ 334
キシノウエトタテグモ 434
キトンボ 232
キヌツヤベッコウ 390
キノボリトタテグモ 435
キバシリ 110
キバネクロバエ 311
ギフチョウ 277
ギンイチモンジセセリ 312
クビキレガイモドキ 369
グビジンイソギンチャク 356
クビボソコガシラミズムシ 248
クビワコウモリ 23
クマコオロギ 293
クマタカ 54
クモマベニヒカゲ 284
クリイロベッコウ 388
クロアリヅカエンマムシ 298
クロゲンゴロウ 251
クロサギ 84
クロシジミ 189
クロズハマベゴミムシダマシ 265
クロツヤヒゲナガコバネカミキリ 214
クロツラヘラサギ 52
クロホオヒゲコウモリ 21
クロマダラタマムシ 209
クロモンアメバチ 272
ケハダビロウドマイマイ 396
ゲンゴロウ 172
コアジサシ 59
コオイムシ 198
コオナガミズスマシ 297
コガムシ 178
コクガン 53
ココロマイマイ 373
コシアカツバメ 103
コシダカウニ 345
コシタカコベソマイマイ 397
コジュリン 80
コテングコウモリ 31
コトラカミキリ 182
コノハズク 100
コバネアオイトトンボ 153
コブナシコブスジコガネ 257
ゴヘイニクバエ 188
コベソマイマイ 398
ゴマシジミ 221
コマユバチの一種 306
コミズスマシ 203
コムラサキ（黒色型） 319
コンボウギセル 382

サ

サクラオフェリア 361
ササゴイ 82
サシバ 69

サツマクリイロカワザンショウ類の一種 401
サンカノゴイ 49
サンコウチョウ 102
サンショウクイ 101
シオガマサンゴ 354
シダモク 331
シノリガモ 87
シマゲンゴロウ 176
シャープゲンゴロウモドキ 174
ジュズカケハゼ 136
シラウオ 129
シロズヒラタハバチ 184
シロチドリ 73
シロマダラ 123
シンジコハゼ 135
シントウトガリネズミ 38
スジキビ 392
ススカケベニ 338
セアカオサムシ 245
セスジカクマグソコガネ 300
セッカ 104
ゼニゴギンガクニクバエ 187

タ

タカチホヒラタタマバチ 218
タカチホヘビ 122
タカバクロヒラタゴミムシ 247
タガメ 149
タケウチケブカミバエ 309
タシマツルギアブ 276
タマカイメン 339
タマシギ 74
タマハハキモク 337
タワラガイ 400
チゴモズ 62
チビクワガタ 299
チャイロキヌタ 343
チャバネキボシアツバ 290
チュウサギ 83
チュウヒ 56
チュウブホソガムシ 177
ツクシアマノリ 352
ツクモジュズサンゴ 353
ツヤネクイハムシ 303
ツヤハマベエンマムシ 254
テラニシセスジゲンゴロウ 202
テングコウモリ 30
トガシオオナギナタハバチ 183
トキ 46
トノサマギセル 372
トホシカミキリ 216
トミヨ 128
トモエガモ 67
トラフカミキリ 267

ナ

ナガオカモノアラガイ 379
ナガケシゲンゴロウ 171
ナガナタネガイ 402
ナガヒラタムシ 244
ナガレタゴガエル 121
ナタネミズツボ 410
ナミコギセル 381
ナメクジウオ 348
ニクイロシブキツボ 418
ニセリンゴカミキリ 268
ニホンアミカモドキ 275
ヌタッカゾウムシ 269
ネアカヨシヤンマ 229
ネズミホソバ 314
ネブトクワガタ 206
ノジコ 105
ノスリ 95
ノトイトグサ 333
ノレンコウモリ 20

ハ

ハイイロクモバチ 219
ハイタカ 94
ハウチワウンカ 237
ハクサンクロナガオサムシ 246
ハクサンケマイマイ 405
ハクサンハバチ 305
ハクサンベッコウ 404
ハクサンホシシリアゲ 308
ハクサンマイマイ 375
ハゲギセル 384
ハチクマ 93
ハッタジュズイミミズ 432
ハネナガモクメキリガ 287

ハネナシアメンボ 238
ハネビロエゾトンボ 159
ババジョウカイ 263
ハボウキガイ 344
ハマゴウノメイガ 223
ハマスズ 235
ハマベツチカメムシ 294
ハマヤガ 224
ハヤブサ 71
ハラビロハンミョウ 168
ハリオアマツバメ 109
ヒクイナ 57
ヒゲナガホラヒラタゴミムシ 169
ヒゲブトハナカミキリ 211
ヒジキ 327
ヒシクイ 66
ヒダサンショウウオ 124
ヒダリマキモノアラガイ 412
ヒナカマキリ 196
ヒナコウモリ 28
ヒメオオクワガタ 207
ヒメカサキビ 394
ヒメクロウミツバメ 48
ヒメケシゲンゴロウ 201
ヒメコガシラミズムシ 249
ヒメサナエ 156
ヒメシジミ 222
ヒメシロシタバ 315
ヒメハマベエンマムシ 255
ヒメハリマキビ 391
ヒメヒミズ 39
ヒメホオヒゲコウモリ 25
ヒメボタル 262
ヒメマルミズムシ 163
ヒメミズカマキリ 239
ヒメミズスマシ 204
ヒラサナエ 228
ヒラベッコウガイ 387
ヒラマキガイモドキ 424
ビロードキンクロ 89
フジノハズタ 350
フタスジカタビロハナカミキリ 266
ブッポウソウ 79
フトウミエラ 342
ベーツヒラタカミキリ 180
ベーツヤサカミキリ 212
ヘグラカバイロコメツキ 318
ヘグラシモフリコメツキ 317
ヘグラマイマイ 377
ヘラシギ 58
ヘリグロチャバネセセリ 280
ホウロクシギ 75
ホオジロガモ 88
ホクリクサンショウウオ 119
ホシチャバネセセリ 278
ホソウミエラ 341
ホソウミニナ 425
ホソエガサ 329
ホソナガベニハノリ 332
ホソハンミョウ 166
ホソミイトトンボ 151
ホッケミズムシ 162
ホトケドジョウ 130
ホンサナエ 154
ホンドモモンガ 35

マ

マガン 64
マクラガイ 359
マシコヒゲムシ 360
マシジミ 423
マダラウミスズメ 107
マダラナニワトンボ 194
マダラヤンマ 193
マツカサガイ 421
マツムラクサカゲロウ 242
マルガタゲンゴロウ 175
マルケシゲンゴロウ 170
マルコガタノゲンゴロウ 173
マルバアサクサノリ 328
ミサキギボシムシ 363
ミサゴ 92
ミズスマシ 252
ミズラモグラ 32
ミゾゴイ 51
ミゾナシミズムシ 241
ミドリベッコウ 403
ミナミアカヒレタビラ 133
ミネトワダカワゲラ 233
ミヤケミズムシ 240

ミヤマシジミ 150
ミヤマツヤハダクワガタ 256
ミヤマヒダリマキマイマイ 376
ミユビシギ 113
ムスジイトトンボ 292
ムツサンゴ 335
メダカラ 358
モートンイトトンボ 226
モリアブラコウモリ 22
モンクロキイロナミシャク 285

ヤ

ヤクシマコブヒゲアツバ 291
ヤマコウモリ 27
ヤマコウラナメクジ 386
ヤマシギ 98
ヤマタカマイマイ 399
ヤマトオサムシ 316
ヤマトクビキレガイ 370
ヤマトシジミ 427
ヤマトヒメメダカカッコウムシ 264
ヤマトホソガムシ 205
ヤマトマダラバッタ 236
ヤマドリ 96
ヤマネ 34
ヨコハマシジラガイ 416
ヨシガモ 86
ヨシゴイ 50
ヨタカ 77
ヨツボシカミキリ 213

ラ

ライチョウ 47
ルイスツブゲンゴロウ 250
ルリイトトンボ 152
ルリイロスカシクロバ 313

ワ

ワスレナグモ 436
ワダツミギボシムシ 364

あ と が き

この度「いしかわレッドデータブック〈動物編〉 2009」が制作されました。前回の「いしかわレッドデータブック2000」は冊子として発行されましたが、今回はCD-ROMの形で公表されることになりました。パソコンに不慣れな方にはいくらか不便ではありますが、仕事のうえで利用される場合には大きな支障はないでしょう。

平成16年から始まった「いしかわレッドデータブックフォローアップ調査委員会動物部会」のメンバーを中心とする石川県内外の多くの動物研究者、自然愛好者の方々によって、最近10年間に集められた知見をもとにして、今回の改訂が行われました。この知見の大きな部分はそれを本来の業務とする専門家ではなく、他に職業を持っている自然愛好者の方々の、自費と余暇を割いての努力によって集められたものです。このアマチュア自然愛好者の層の厚さが、県内の野生生物をはじめ自然環境の実態を明らかにし、より良い自然環境保全の方向を考えるうえで大きな力になっています。この野生の動植物を含め自然を観察し、記録して整理しまとめる作業には、部分的には多様な新しい手段や機器を利用することもできますが、最終的には熟練した個人の力に頼らなくてはならないでしょう。

しかしこのような個人の力だけでは、広大で微妙な自然の姿をとらえるうえでは限界があります。その上に自然も人間社会もこの間に急速に変化しています。県民すべての生活を安定させ豊かな情操をはぐくむ、地域の自然の実態とその変動を把握するためには、地方自治体、国、国際機関がそれぞれの立場から、この自然を解明する個人の努力を支えなくてはなりません。今回の県のレッドデータブックも、こうした個人の努力と組織の支持によって出来上がったものです。

このレッドデータブックは、守らなくてはならない野生の自然を、動物の「種」のレベルで示したものです。しかしそれは個々の「種」だけではなく、その「種」が正常な生活を維持しているバランスのとれた「生息環境」を示すものであり、「種」を守ることはその生活する背景となっている良い自然環境を守ることです。「絶滅危惧種」を保存するというと、しばしばその特定の「種」の「個体」だけを取り出して、管理された人工の装置内で生存させることで「種」の保存の目的を達成したと考える人があります。現在のように急激に変わって行く地域環境のなかでは、やむを得ずそのような技術を使わなくてはならないこともあるかも知れません。しかし原則として「種」の保全は、その「種」が正常な生活をしている環境の中で行われるものです。

このレッドデータブックがその手がかりとして活用されることを期待しております。

石川県野生動物保護対策調査会　大串　龍一

「石川県野生動物保護対策調査会」名簿

（所属は平成21年3月現在）

分　　野	氏　　名	所　　属
代　　表	中村　浩二	金沢大学環日本海域環境研究センター
哺乳類分科会	○ 真野　哲三	石川県哺乳類研究会
	野﨑　英吉	石川県哺乳類研究会、石川県環境部自然保護課
	林　　哲	石川県哺乳類研究会、石川県白山自然保護センター
	八神　徳彦	石川県哺乳類研究会、石川県林業試験場
	山本　輝正	石川県哺乳類研究会、岐阜県立土岐紅陵高等学校
鳥類分科会	○ 竹田　伸一	日本野鳥の会石川支部、いしかわ動物園
	今森　達也	北陸鳥類調査研究所
	大河原　恭祐	金沢大学理学部
	笹原　裕二	日本野鳥の会石川支部
	田尻　浩伸	日本野鳥の会サンクチュアリ室
	時国　公政	日本鳥類保護連盟石川県支部
	平田　豊治	日本野鳥の会石川支部
	矢田　新平	日本野鳥の会石川支部
両生爬虫類分科会	○ 宮崎　光二	石川県両生爬虫類研究会
	石原　一彦	石川県両生爬虫類研究会
	徳本　洋	石川県両生爬虫類研究会、石川むしの会
	松村　初男	石川県両生爬虫類研究会、いしかわ動物園
淡水魚類分科会	○ 山本　邦彦	石川県淡水魚類研究会、いしかわ動物園
	佐野　修	石川県淡水魚類研究会、石川県立自然史資料館
昆虫分科会	○ 富沢　章	石川むしの会、石川県ふれあい昆虫館
	浅地　哲也	石川むしの会
	石川　卓弥	石川むしの会、石川県ふれあい昆虫館
	井村　正行	百万石蝶談会
	高羽　正治	石川むしの会
	富樫　一次	日本生物地理学会
	徳本　洋	石川むしの会、石川県両生爬虫類研究会
	西原　昇吾	石川むしの会
	松井　正人	百万石蝶談会
	武藤　明	石川むしの会
	吉道　俊一	石川むしの会
浅海域の生物分科会	○ 佐野　修	能登自然史調査研究会、石川県立自然史資料館
	坂井　恵一	能登自然史調査研究会、のと海洋ふれあいセンター
	又多　政博	能登自然史調査研究会、金沢大学臨界実験施設
	矢島　孝昭	能登自然史調査研究会
陸産貝類分科会	○ 高橋　久	ＮＰＯ法人河北潟湖沼研究所
	石原　一彦	石川県淡水貝類研究会、石川県両生爬虫類研究会
	野村　卓之	新潟市水族館マリンピア日本海
淡水産貝類分科会	○ 石原　一彦	石川県淡水貝類研究会、石川県両生爬虫類研究会
	高橋　久	ＮＰＯ法人河北潟湖沼研究所
その他の動物分科会	○ 徳本　洋	石川むしの会、石川県両生爬虫類研究会
監　　修	大串　龍一	金沢大学名誉教授

○印：各分科会代表委員、委員は五十音順で掲載

改訂・石川県の絶滅のおそれのある野生生物

いしかわレッドデータブック〈動物編〉2009

平成 21 年 3 月 31 日発行

調査・執筆　石川県野生動物保護対策調査会

発行　石川県環境部自然保護課

〒920-8580　金沢市鞍月 1 丁目 1 番地

TEL　076-225-1477

制作　株式会社　環境公害研究センター